

---

# 君の魂に抱かれて

皐月-Satsuki-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の魂に抱かれて

### 【コード】

N69150

### 【作者名】

皐月 - S a t s u k i -

### 【あらすじ】

高校2年生の中沢潤は、幼馴染の成沢美唯と平凡な”日常”を送っていた。

惨劇な過去を背負う潤だが、小さい頃の彼女の言葉を糧にし、明るく接してくれる”仲間”と、ありふれた学生生活を送っていた。だがある日、幼馴染の美唯に全身を焼き尽くすような激痛が襲う。その途端、街から人の気配が消え去り、まるで無人の廃墟を思わせる”異世界”へ墜ちる。

壮絶な戦いの果てに辿り着いた”異世界の真実”を前に、少年少女

は何を望むのか。突如巻き込まれた異世界で、少年少女達は戦うしかないのか。

『異世界』に侵食された街、桜凜市を舞台に、無作為に選ばれた少年少女達の運命を描く物語。そして仲間達が綴る物語。

絶望の中、少年少女が信じた愛の共鳴。

ここに開幕

少年少女たちの出会いが”あるはずのなかった未来”を視る

イラストコーナー (更新情報 12/24) (前書き)

夜城 咲宵によるイラストコーナーです。

ネタバレはないようにしますのでご安心を！

しかし、物語のヒントが散りばめられて……！

イラストコーナー (更新情報 12/24)

> i 3 5 4 1 3 — 2 3 2 1 <

成沢 美唯 - N a r i s a w a M i y u -

潤の幼馴染であり、同じく桜凜高校2年A組。潤に対し、甘える、寄り添うような性格ではなく、逆に潤を修正させる程の勢い。

どちらも上記のような事はしないため、ミスマッチに思えるがお互いを良い方向へ引っ張り合っている。

体力や運動神経が高く、潤曰く『暴力女』

パンチ、蹴りなどの威力は、潤曰く『世界チャンピオンですら、膝を屈するほどの威力』

また、防御力も劣っていないく、潤に毎朝ドアの猛攻撃を受けているため『鋼のような防御力』を得ている。

以外にも勉強や料理を得意とする。潤曰く『人は見かけによらない』

身長：165cm

体重：46?

血液型：O

B・W・H：84・54・80

髪色：枯葉色(茶系)、ロング

誕生日：8月3日

年齢：17

> i 3 6 9 2 4 — 2 3 2 1 <

>i37670—2321<

【Xmas2011 記念イラスト】

染 璃桜 - Shitogiri Rio -

桜凜武装高校3年現代剣術科のBランク。称号「両撃の右剣左銃」  
(りょうげきのクローヴァル)

侑たち率いるファーズストックンパニアンのリーダー。

常に最前線で戦い、仲間からの信頼も厚い。

使用している銃はMP7・OBK/SR。

沙耶の中学生の頃からの親友。

彼女と出会う前は普通の女の子だったが、日々鍛錬を強制されたため、沙耶のような口調が多少移ってしまった。沙耶曰く、中学時点からも「筋がいい」「らしい」。

昔から寂しがり屋の恥ずかしがり屋の性格で、親友が桜凜武装高校に行くを知って同じ高校を受験したほど。

『仲間』とそれを『守る』ということに憧れている。

ちなみに、現在もルームメイトは沙耶で、手前が沙耶の部屋、奥が璃桜の部屋。

潤曰く「見えない国境がある」らしい。

髪飾りには名前の通り、瑠璃色の桜が左右についている。

身長：161cm

体重：47?

B・W・H：86・52・87

血液型：O

髪色：金髪

誕生日：1月16日  
年齢：17

>i34502—2321<

嘉上 緋咲 - Kagami Hisaki -

桜凜武装高校総合科2年生のGランク 称号「違背のシャイヤ」  
（いはいのシャイヤ）

桜凜武装高校は総合科のレベルが何処の科よりも、ズバ抜けて高い  
ため最も入学が困難だが、緋咲は入学試験でBランクという結果を  
残した。

だが、一年で数回行われるランクが変動するテストを一回も受けて  
いない。

その結果、入学当時のBランクからGランクまで下がってしまった。  
1年生のとき（その当時はFランク）は留年の危機だったが、入学  
試験のランクがBだったため、留年は免れた。2年生になった彼女  
だが、今のままでは3年生へ上がれない。

身長：157

体重：47

B・W・H：83・47・85

血液型：B

誕生日：9月17日

年齢：16

>i34036—2321<

星見郷さら - Hoshimisato Sara -

桜凜武装高校1年総合科Aランク称号「加護のアグライア」

初登場は24話「この世界の鍵 - StarSeeHamlet -」

体格は小柄で子供っぽい性格。

なぜ子供っぽい性格か、それは物語りの重点にも繋がって……？

本人曰く「記憶は後付されたような感じ」

命を引き換えに人を守るという事が、本当の記憶と何か関係しているらしい。

命を賭けて美唯を守ろうとした潤を「お兄ちゃん」と慕い、信頼している。



1話・(1) 日常の変化、世界の変化(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

## 1話・(1) 日常の変化、世界の変化

『魂』

魂とは人間、あるいは生物が生きている間、生命の源となる存在。魂は、二つの分類で分かれる。

一つは、肉体を維持する魂、肉体魂。

そして、精神、人格を維持する魂、精神魂。

人間はその二つの魂が合わさり、一つの魂として体内に存在している。

『異世界』

異世界とは何らかの魔術や呪縛で、現実を切り取ったような位相結界のことをいう。

つまりは、現実ではない世界。

『魔術』

魔術とは、この世の法則に干渉する術。

それは自然な状態を歪めて、意のままに操る技術。

本当にそれらが存在するなら、俺達が今いる、この場所、この世界

も、そして俺も

リアル  
現実じゃない

俺達が知っている現実には、あんなことは存在していない。

だけど、人間が異世界を創造するなど、不可能に限りなく近い。

でも 不可能じゃない

魔術などにおいて終極の域に達した者は、時間や空間に干渉することが出来る。

だが、干渉が可能なのは、平行世界のみ。

『平行世界』

現実には未来に対し、無限の可能性を含んでいる。

その可能性が枝分かれした別の世界、隣り合った世界のことを、平行世界という。

まったく新しい世界を作り出すのは、もはや”人間” ”魔術”と  
はいえない。

それは、神の領域。

何が可能で、何が不可能なのか。  
今の俺には、理解が及ばなかった。

この異世界に墮ちた瞬間から、この世界は現実と何もかもが隔絶しているのだから。

2010年9月1日午後5時10分

少年少女の”日常”は、この一瞬で崩れ堕ちる。

壮絶な戦いの果てに辿り着く”異世界の真実”を前に、少年少女は何を望むのか。

突如巻き込まれた”異世界”で少年少女達は戦うしかないのか。

『異世界』に侵食された街を舞台に、無作為に選ばれた少年少女達の運命を描く物語。

そして仲間達が綴る物語。

絶望の最果てで、少年少女が信じた愛の共鳴。

ここに開幕

絶対に終焉おしまらせる……。

絶望に満ちた、“異世界”を。

君の魂に抱かれて

「忘れないで、この想いを」

「2010年9月1日午前7時」

『ピンポーン』

インターホンが不意に部屋中に鳴り響くのが、布団の中から聞き耳を立てずとも聞こえてきた。

『ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、ピンポンピンポンピンポン  
ン』

しかしうるさいチャイムだ……。しかも連続……。

誰だ……。こんな朝早く……。

いや、この忌々しいチャイムの鳴らし方はアイツだろう。

その前に、こんな朝早くから俺の家に来るヤツは、アイツしかいない。

アイツだと確信しなかったら、かなり迷惑な客だ。

これが俺の毎日の目覚め。

そして、これが変わりのない俺の日常。

「はいはい。今出ますよ」

俺はまだ一緒に居たいベットと別れを告げ、着替え済ます。

もう9月か……。

この前までは、まだ夏だったのにな……。

四季が周るのは速い。

俺の住んでいる家は一軒家。まあ、家って言っている時点で一軒家だろうけど。

ちなみに2階建てだ。

で、俺の部屋は2階にある。

だから、玄関に行くためには階段を下りないといけない。

寝惚けてるから階段には注意しないと……。

そう思いつつ、俺は無事に玄関に着いた。  
そして、ドアを開けるためドアノブに手をかけた。

が、ドアノブを捻て押すがドアはビクともしない。

あれ？おかしいな……。

金庫の扉みたいにビクともしない……。

「あッ！鍵が掛かってるからか！なら開かなくて当然だよなッ！ア  
ハハハハハ」

自分につまらないツッコミを入れてから鍵を開け、  
これでもかかっていうぐらい勢い良くドアを開け放つ　！

「うおおおおりゃあああああああッ！！！！」

『ドスッ！！』

サンドバックを地面に叩き付けたような鈍い音が響いた。

その音と同時に、開け放ったドアに何か当たった感覚がする。

どうせアイツだろう。

逆にアイツじゃないと困る。

宅配便とかだったら最悪だ。

知らない人だったら合わせる顔がない。

すぐにドアを閉めて部屋で引きこもるしかない。

新手の当て逃げってやつかな？

ちよっと違うか……。

俺のドアを開け放った威力は、アイツ以外の人間に直撃すれば、地面に血溜まりが出来るくらいだ。

「きゃふっ!!」

案の定、美唯が短い悲鳴を上げながら、軽く吹き飛ばされている。そして、頭を両手で抱え、しゃがみ込んでしまった。

ドアが頭に直撃したようだ。

痛そうに……。よりによって頭かよ……。

今日の美唯の運勢は最悪だな。

「おお、おはよう美唯ッ!!本日はお日柄も良く……」

俺は無意識に空を見上げた。今日は蒼穹の空だった。

だけど、俺はすぐに青空から眼を背けた。

そして、俺は何事もなかったように爽やかに挨拶をする。

美唯の運勢が最悪だった今、せめて明るく接しなければ……。

あまりにも不幸過ぎる。

妙な使命感が俺の中で渦を巻く。

「つう……あたまがあ……アンタねッ!」

アンタじゃないぞ。俺は親から貰った「中沢 潤」という大切な名前があるんだぞ。

美唯はしゃがみながら頭を抱え、俺をギロつと睨んでくる。

口語は少し荒んでいた。

痛さでか、怒りでかは分からない。



「ん？どうした？」

そんなに今日の運勢のことを気にしているのだろうか？  
俺が勝手に占っているだけなのに。  
俺が占っているということは、美唯は知らない。

「どうした？じゃないよ！」

『どうした？』を俺の声に真似て発音する。  
俺はそんな声じゃないぞ。もっと美しいぞ。

まだ美唯はドアが直撃した頭を押さえている。

美唯の目は、少し滲んでいた。

ちよつと全力過ぎたかな？

まあ、占いだからしょうがないか……。

「おお！どうしたんだ！美唯！何があった！？怪我はないか！？」

俺はわざとらしい演技と共に、美唯のところまで駆け寄る。

まったく心配は無用だが、一応心配そうな態度をとる。

まあ、演技だけだな。

頭を強打すれば、”普通”は病院行き。

だが……コイツは違う……。

普通なら、脳震盪は免れないだろう。

「潤のせいでしょうっ！？」

俺と張り合えるぐらいに既に回復した。  
コイツの生命力?には俺も驚愕の色を隠せない。

「美唯。『My skin is sensitive to  
the sun』って言葉の意味。知ってるか?」

俺は外人でも顔負けするぐらいの発音でそう言った。

「え?どういう意味?」

美唯は不思議そうに首を傾げる。

どうやら、言葉の意味を知りたいようだ。

「私の肌は太陽に敏感なの」

「知らないよッ!そんなことッ!」

怒りのあまり、美唯の口語が荒む。

美唯は痛み出したのか、再び頭を抑える。

「おお!美唯!此处でなにがあつた!?!」

俺はわざとらしい演技と声で美唯を心配する。

「潤のせいでしょッ!?!」

俺は無言で頭をゆっくりと左右に振る。

「じゃあ、何で、『うおおおおりゃあああああああッ!  
!?!』とか叫んだの!?!」

美唯が名演技と絶叫をしながら、俺に問い責める。  
あの雄叫びを聞かれていたのか……。

「いや、あんまりプライベートなことって言いたくないじゃん？」

俺は小さく愛想笑いを浮かべながら、返事を返す。

本当はいうまでもなく、力を入れるためだった。

人間、力入るときは、声もセットで出るんだよな。  
でも実際に、声を出した方が力も入るからな。

「プレイベート？」

美唯はキョトンとした表情を作る。

「マジかよ……やっぱり言わないと駄目なのか……？」

いかにもワザとらしい口語と態度でそっぴい、照れ隠しに俺はカリカリと頭を掻く。

「え！？なにになに？」

美唯は興味津々の様子で、少し身を乗り出してきた。

「俺の家って家庭内暴力が酷くてな……」

「潤って独り暮らしじゃんッ！」

美唯のいう通りだ。俺は独り暮らし。

両親とは、既に決別している。

朝だというのに、俺の家には活気がある声は一切聞こえない。いや、逆に活気があった方が不自然で恐ろしい。俺にとって家族というのは、夢の幻なのだから。活気が溢れていた昔が懐かしいな……。

別に独り暮らしが嫌っていう訳じゃない。独り暮らしを始めたのは中学からだからもう慣れた。人間の適応能力ってというのは恐ろしいものだ。

「はあ~~~~」

美唯が大きく溜息をしながら立ち上がり、制服に付いた土埃をポンポンと手で払った。そして、俺の表情を一瞬伺う。

「まあ、いつもの事だろう？少しは学習しろよ」

確かにこれはいつもの事。

俺が猛スピードでドアを開き、美唯が直撃

まあ、方式にするなら。

朝+猛スピードでドアを開ける=美唯に直撃

の方程式が出来上がってるからな。

その方程式を利用したのが、この占いだ。

「あんな猛スピードで開けられたら避けようがないでしょう!?!」

いや、そんなことないだろう?

無数に方法はあるだろう?

それとも、俺のスピードが速すぎてどれも無意味なのか？

「いくらでもあるだろう？」

「え？そうなの？」

インターホンを押した瞬間に違う所に隠れるとかさ……。まあ、ドアを開けて誰もいなかったら腹立つけどな。俗に言うピンポンダツシュって奴だ。

あとは……。

何かを盾にするとか……。

ん……。？何かってなんだ？

俺のスピードに耐えられる物なんてこの世に存在するのだろうか？  
そう思うほど俺のドアスピードには自信がある。

「ああ、それにしてもあの猛スピードのドアをもろ直撃したのに元  
気だな。毎日くらってるから、もう慣れたのか？」

初めての人なら下手すれば死亡。

俺も美唯以外の人に試してみたいと思うんだけど、流石に出来ない。  
やってしまったら警察にお世話になるかもしれない。

「毎日くらってれば慣れないものも慣れるよ！」

怒りのあまり口調も鋭くなる。

美唯の方を見ると、どこも外傷もない。

美唯の防御力が高いのか、俺がテクニシャンか……。

まあ、どっちでもいいや。

いや、やはり俺がテクニシャンか……ウフフフフ……。俺は怪しい笑みを心中で浮かべる。

「お前のその鋼のような防御力を得たのは、俺のおかげでもあるんだから少しは感謝しろよ？」

美唯の防御力は俺が認める。

「中沢 潤」という保障付だ。

しかもそれは、世界にたった一つしかない保障。

「鋼のような防御力なんていらなによッ！」

だが、美唯は即答する。

駄目だコイツ……なにも分かっちゃいない……。心中で美唯を哀れ視た。

「そうなのか？俺は欲しいけどな……」

鋼の防御力。

男の俺には引き付けられる何かがある。

それは、男にしか分らないもの。

それが、

〈男のロマン〉

「女には要らないのッ！」

だが、美唯は即答した。

あ、そういえばコイツは女だったな……。忘れてた。

「いや！絶対に必要なときが来るぞッ！」

俺は右手の拳を強く握り、力説する。

例え女でも必要な時が来るッ！

これは絶対だッ！

「そんなときあるか

ッ！！！！！！！」

『ズバシ

ッン！！！！！！』

電光石火の如く、俺の腹部に美唯のパンチがクリンヒット。

お年寄りだったら五臓の機能が停止していただろう。

あと、心臓も止まってただろうな……。

なんて暴力女だ……。

まあ、いつものことか……。

痛みで忘れてた。美唯は鋼の防御力は必要ないって言ってたな……。

絶対必要なときが来るだろうに……。

これだから女は……。

まあ、これも〱男のロマン〱ってやつかな。

……。。……。。

待てよ……。

俺もいつつも美唯のパンチやら蹴りやらくらってるよな……。  
だけでももう痛くない……。

俺も鋼の防御力を手に入れていたのか……。

いつのまに……。

老師……！

俺はこの修行を耐え抜きましたよ！

居もしない老師に心から感謝し、俺は心中で老師を拝む。

そして、賛美歌を謡い始める。

賛美歌することは老師はキリストのお方なのかな？

まあ、いいや。

どうせ架空の人物なんだし。

「お前……それでも女か？」

疑いたくなるぐらいの暴力かつ威力。

女という仮面をかぶっているバリバリの男なんじゃないのか！？

毎日ひげを剃ってたりな……。

だから毎晩はひげ剃り機を充電してるんだらう？

その光景を想像した瞬間、背筋が凍った。

「女の子だよ！」

いや、嘘だな。

毎朝のひげのケアは大変なんだらう？

俺は心中で呟いた。

でも、体付きは女らしいな。

”身体”だけはな！

心には鬼が住み着いてるからな。それとひげ。

心に鬼が住んでいるなら分かるけど、ひげまで住み着いてるからな……。



ああ、怖い怖い。お清めしないと……。

「悪霊退散！悪霊退散！悪霊退散！アキラ退散！」

俺は高らかにお清めを始める。

本当は塩があれば完璧なんだけどな。

そういえば、お清めとかで使う塩は自然の塩じゃないと駄目なんだよな。

普通の塩だと効果がない。

それと、本当に悪霊がいればお清めの塩が溶けるらしい。

ということは、美唯の頭の上に天然の塩を積み上げれば塩は溶けるのかな？

溶けそうで怖いな……。

「アキラ退散？」

……。

アキラ退散……？

なんじゃそりゃ？

いきなり何を言い出すんだ美唯は？

ついに気が動転したのか？

「なんだよ？アキラ退散って？」

聞いた事のない言葉だな。

アキラ退散……。アキラ？

それが、美唯の本当の姿なのだろうか？

「潤が言い出したんでしょッ!？」

ああ、なんか言ったような……。言わなかったような……。

きつと、悪霊退散を連発しているうちに、いつの間にかアキラ退散になったのか……。

アキラ退散……。

アキラってなんだろう？

生物なのかな……？

何本足生えてるんだろう？

23本とか？

想像した瞬間、背筋に寒気が走った。

「……お前ってアキラ……？」

つい本音を漏らしてしまった……。

なんとという失態だッ!

お、お清めしないと!

アキラ退散!アキラ退散!アキラ退散!

「え?何だつて?」

美唯はわざとらしく俺に聞き返す。

こいつは幸運だ……。

「何でも御座いません」

聞こえてないのなら好都合だ。

いや……聞こえていたのか?

だとするならば、アクラは美唯の地雷。  
踏んだら駄目だな。

今度からは気をつけよ……。

アクラで反応したってことは、美唯はアクラについて何か知っているのかな……？

まあ、いいや。後でググろう。

「そうだったのか……鋼のような防御力だけかと思ってたが、アクラのような破壊力があるとはな……」

「誰がアクラだああああ

ッ！！！！！！！」

『ズバシ

ッン！！！！！！！』

俺のセリフを最後まで言えず、俺の腹部に蹴りがクリンヒット。

靴の底が俺の腹に直撃する。

聞こえないが俺の五臓が悲鳴を上げる。

そして、美唯の声が町内に響き渡る。

俺達は町内で見せ物なんじゃないのか？

俺達って意外と有名なんじゃないのか？

それにしても制服着てるんだから蹴りはないだろ……。

パンツ見えるぞ。ってか見えたぞ。

「さつき、靴底と一緒に薄い赤色のが迫ってきたな……あれってパンツ……」

「キャッ！……」

そう言い掛けたとき美唯は短い悲鳴を上げ、両手でスカートを押さえ  
えている。

美唯の頬が少し赤くなっていた。

俺がなにを言いたかったか理解したようだ。

そして、何故だが右手の拳がブルブルと震える。

「じゅ、潤の変態ッ                      ツ!!!!!!!!!!」

『ズバシ                                      ツン!!!!!!!!!!』

強烈な右ストレートが腹に直撃。

美唯の右ストレートが肉を絶ち、骨を砕き、美唯の右手に絡みつく  
俺の臍腑を力で捻じ切ってくる。

ちよっと大袈裟過ぎたけどそれほどの威力だ。

俺の意識は一瞬、天に召された。

一瞬、神が視えた気がする。

周りは閃光が満ちたような白色だった。

その中心に神がいて両手を大きく広げている。

だけど、その神の顔にはモザイクが掛かっている。

あと何故か、その神は純白のゴスロリを身に着けていた。

年齢は大体23〜99歳までのどれかだ。

性別は男性だろうが趣味までは分からない。

いや、純白のゴスロリを身に着けている時点で良い趣味とは言い難  
い。

第一印象が『キモッ!』  
第二印象が『アクラッ!』

ああ、アクラってこんな感じなのか……。  
俺はアクラは見たことはないが、きっとこんな感じなのだろう。

俺は神アクラに右手を差し伸べる。

「神よ。俺は何をしたのだろうか？」

俺は神に問いかける。

この世界の神は理不尽過ぎる。  
俺は別に見たくてみたんじゃない。

「美唯が自ら見せてきた」

というのが結果上の事実。

何故、俺が変態呼ばわりされないといけない？

だが、老師の長年の修行に耐えてきた俺には無力。  
ウフフフ……。。

「まあ、こんな所で話してたら遅れるぞ？」

これもいつも通り。

この言葉がなかったら、俺達は太陽が沈むまで話しているだろう。

「あーヤバツ!!!」

美唯は慌てて腕時計を見る。

急いで行かないと遅刻の可能性すら出てくる時間帯だ。

だが、俺はあることをしていない。

「さてと、ゆっくりご飯でも食べようかな」

俺は焦っている美唯を横目に、居間に戻るため振り返ろうとする。

朝飯は学生の元気の源だからな。

しっかり食べないと保健室の先生に怒られるしな。

「そんな暇あるかああああ  
!!!!!!」

『ズバシ                    ンツ!!!!!!』

俺の腹にパンチがヒット。

さっきから同じところを狙ってくる。

俺の腹にはダメージが蓄積されていく。

朝から腹に刺激はよくないだろ……。

勢い余って洩れたらどうするんだよッ!

それは、俺の社会的抹殺を意味する。

「……………次からは……………ちゃんとしてます……………」

まあ嘘だけどね!

この借りは明日返す！

「よしっ！学校行くよ！」

美唯は地面に置いてあるカバンを持つ。

なんでカバンが地面に置いてあつたんだ？

重かったのかな……？

（ドアに激突した反動で吹き飛ばされたから）

その前になんだ？

『よしっ！』って……。

俺の飯は……？

元気の源は？

「俺の飯は？」

「ない！」

美唯が酷なまでに希望の欠片もなく即答する。

普通、幼馴染ときたら、

『ちゃんと作ってきたよ』

って言うのが通理のはず。

その幼馴染が暴力的で、俺の朝飯まで奪っていく。

世の中には色々な幼馴染がいるんだな……。

「鬼っすね」

俺には鬼にしか見えなかった。

あと、鬼畜とか阿修羅……。あと赤鬼青鬼とか太郎次郎……。

最後の太郎次郎は違うか。

「誰が鬼だああああ ……！！！！！！！！」

『ズバシ …… ツン！！！！！！！！！！』

「ちょおわああああおおおッ …… ツ！！！！！！！！！！」

さっきと同じところにヒット。  
しかも蹴り。

こら、またパンツ見えるぞ。  
つてか、見えたぞ。

少しは女としてのデリカシーを持ってっと言いたい。  
それと、少しは学習して欲しい。  
学習して欲しいのは以下の通りだ。

く朝の腹への刺激は厳禁だく

一方俺は日本語翻訳不可能の言葉を発してしまった。  
でも、日本語に翻訳するとどんな感じだろう？  
ちよっと翻訳もつけてみよう。

『ちょおわああああおおおッ ……！！！！！！！！！！』

(A定食お待ちしましたっ …… ツ！！！！！！！！！！)



てな感じかな……。

何でA定食なんだろう？

ちよつと違うかな……。

「せめて、カバンぐらいは持ってきてもよろしいですか？」

学校に最低限必要な物。

それは自分自身とカバンだ。

カバンを持たないで学校に行ったら『何しに学校来たの？』って話になる。

まあ、そういう場合は『俺の存在そのものがカバンだ』

って流行語大賞を狙えるぐらいに、爽やかかつクールに言えばその場を切り抜けられる。

その代わりに俺の頭の心配をされる。

これは仕方ない。

等価交換ってヤツだ。

「そつやつて逃げるつもりでしょっ！？」

いや、カバン取りに行くだけだし。

俺ってそんなに信用ないかな……？

『潤』と書いて『潤』とすら読める程なんだぞ！？  
つまり、潤＝信賴しんらい的てき。

「俺ってそんなに信賴ないかな？」

俺が出来る最高レベルの真剣顔で美唯に問いかける。  
この真剣顔、結構疲れるな……。

「そんなことはないけどさ……」

美唯の態度に変化が訪れる。

俺の気迫に敗れたみたいだ。

そろそろ表情崩そう……。

真剣顔は疲れる……。

「だろっ？『潤』って書いて『信頼的』って読むんだぜ？」

デタラメの知識を美唯に教えつける。

『潤』っていう漢字で読めるのは、『じゅん』と『うるおい』ぐらいだ。

「……余計に信頼感なくした……」

余計ってなんだよ。

って！本当にそろそろ時間的にヤバイな……。

『信頼的』たる者が遅刻なんて、もってのほかだ。

「ああ！わかった！これで俺が逃げたら全校集会の時に、全校の前で、やすき節を全裸で踊ってやろう！」

信頼を得るため大胆な行動に移る。

そもそも、やすき節なんて踊れない。

踊れるのは腹踊りぐらいだ。

「ッ！？」

美唯は何を想像したのか、頬が紅潮してきている。  
そして、美唯が視線で俺の身体のラインをなぞる。  
俺の身体のラインなぞり終わった美唯の視線は、俺の下半身で止まった。

そして、更に頬を紅潮させる。

……。

本当にする訳ないだろ……。

全裸だぞ？法すら触れる行為だぞっ！？

「そこまで言うなら信じるよっ！」

流石は信賴的、中沢潤。

見事に信賴を取り戻した。のか……？

「よーしっ！」

俺は二階に在る自分の部屋に戻る。

そのため、階段を上らないといけない。

エレベーターでも付けようかな……。

いや、エスカレーターも捨てる難い……。

そう思っている間に、俺の部屋へ誘われた。

どっちにしろ、宝くじとかで当てないと無理だな。

ってか、俺はそんなに金は欲しくないし。

俺が欲しいものは……。

そういえば、宝くじのCMで2億円当たったとかで雪降りし機とか買ってたよな……。  
あれ、いらんよな……。

「よーしっ！カバン、カバンっど……」

おお！あつたあつた。

俺はカバンを持ち部屋を出ようとする。

そして、俺の部屋を一望する。

いやあ、いつ見ても綺麗だねえ俺の部屋は。  
ウフフフフ……。

「そういえば、信頼ってどついう意味だろう？」

部屋を出かけた俺に疑問が降り注ぐ。

意味の大体は把握できるが、『説明しろ』と言われたら案外難しい。  
そんな俺の視野にパソコンが入って来た。

コイツは便利な道具だ……。

俺は椅子に座り、迷わずパソコンのスイッチを押す。

そして音を立てながらパソコンが起動する。

俺のパソコンはデスクトップだ。

しかも生死を彷徨ってる。  
ネットをしてたら、いきなりブルー画面になるは起動中いきなり再起動するわ……。

そして、自分で招いた再起動でエラーを起こして修復の時間はかか

るわ……。

本当に困ったパソコンだ。

極め付けは起動中にブルー画面になる。

こればかりは俺もお手上げだ。

あと、お気に入り入りの登録も出来なかったような気がする。

新しいパソコンでも買おう。

ノートパソコンがいいな……。

そう思いながら、俺はパソコンが起動するまで、待ち続けた。

## 1話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

## 1話・(2)

パソコンが無事に起動したところで、  
インターネットを開き、『信頼』を検索する。  
動作おもっ……。

「え〜と……信頼は……と……」

お、出てきた。

俺はその出てきたサイト候補をクリックする。

『カチツ』とな。

「信頼は、日本人の人名の一つ……??？」

……。。……。

頭が真っ白になる。

思考がついていかなかった。

あまりにも俺が思っていた『信頼』と違っていた。

信頼って日本人の人名の一つなのか!? 知らなかった!

じゃあ、信頼って俺達は当然に使ってるけど、あれは全部人名だったのか!?

俺は驚愕の色を隠せなかった。

俺は再び画面を凝視する。

ん……………？

これ、信頼しんらいじゃなくて、信頼のぶよりじゃんっ！

そりゃあ人の名前だろうな！

ふざけんじゃないぞ！このパソコン！

俺を欺いたな！

この代償は大きいぞ……………。

パソコンに向かって指の骨をポキポキと鳴らす。

だが、鳴ったのは小指と親指の二本。ある意味器用だ。

俺も運勢最悪だな……………。

『戻る』をクリックして、再びサイト候補へ。

そして違うサイトをクリック。

「えっと……………信頼とは、相手を信用し、頼りにすること」

……………。

まさしく俺じゃん！

俺の情報がなぜネットに流れているんだ！

そう思った瞬間……………。

『ガチャッ！』

ドアが強めに開く音がした。



嫌な予感が胸を突き刺す。

そして、反射的にドアの方を振り返る。

「なにしとんじゃああああああああ

ッ！……！！！」

そこに現れたのは美唯だった。

そして、もの凄いスピードで接近してくる　！

『ズバシ　　ンッ！……！！！』

助走を入れ猛烈な右ストレートが俺の腹を直撃。

朝飯食べていれば逆流していた。

それ程の決死に一撃……。  
頂きました……。

世界チャンピオンですら、膝を屈するほどの決死の一撃だろう……。

「ちよおおっわおおおおああああ　　ッ！……！！！」

俺は座っていた椅子から吹き飛ばされ、  
床に倒れ伏せた。

そんな俺を横目に、美唯はパソコンの前へ移動する。

俺はまた日本語翻訳不可能な言葉を上げてしまった。  
今回は翻訳したらどんな感じだろう？

『ちよおおっわおおおおああああ　　ッ！……！！！』

(日本の政治なにやってんの　　ッ！……！！！)

「マヨネーズを右手で握り潰し、空を仰ぎ視ながら」

今回は状況説明文も付けてみたけど……。

……。

マヨネーズを片手に日本の政治を憤怒し、空を仰ぎみながら激烈する人なんてどこにいるんだろう？

しかも、そのマヨネーズを怒りのあまり握り潰すんだぞ!?

もし、本当にしてる人がいれば撮影して日本の政治家に見せたいくらいだな。

そうすれば、日本の政治家も気付くなだろう。

『何てことだ！政治に対する怒りで、マヨネーズすら握り潰しただとツ!?!?』

つて政治家は感じざるを得ない。

マヨネーズを握り潰す程に政治に対する怒りが溢れているんだ。

確かにマヨネーズを握り潰すって衝撃的だよな……。

そつえば国会議事堂に行くには、確か東京メトロ国会議事堂前で……。

ん……?なんか話が脱線したな……。

『ブチッ!』

不意に鈍い音が部屋中に響き渡る。

この音と同時にパソコンの画面が真っ黒になる。

「貴様！電源切ったな!!」

くそ……。

せめてシャツトダウンぐらいしてくれよ……。  
ただでさえ、生死を彷徨ってるパソコンなんだからよ……。  
御愁傷様したらどうするんだよ……。

「早く行くよっ!!」

そして、階段を引きずられ強引に学校の通学路へ。

この暴力的な奴は、「成沢 美唯」  
俺の小さい頃からの幼馴染。

そして、二人並んで見慣れた道を歩く。  
いつものことだ。

「もう9月だね……」

不意に美唯が話しかけてくる。

何を話しかけられると思えば……。  
よかった……。やすき節の件じゃなくて……。  
俺は踊れないからな！踊れるのは腹踊りぐらいだからな！

「そうだな、今日で9月1日だっけ？」

俺も話に合わせてる。

たしかに今日でもう9月。

夏は去り、秋が訪れる時期だ。

俺は周りの木々を見渡す。

まだ、紅葉はしていないがそれも時間の問題か……。

「そう」

もう9月なのか……。  
高校生活なんてあつと言う間だな。  
まだ俺は2年だけだな。

「ハア~~~~」

俺は無意識にため息をつく。

「ん？どうしたの？」

その姿を見た美唯は俺に問いかけてくる。

「いや、俺って何も高校生の思い出ないなって思って……」

『美唯に暴行を受けた』とかつて思い出なのかな……。  
いや、大人になれば良い思い出かもしれない。

『若い頃の美唯のパンツは薄い赤色だったな……』  
とかつて、思い出すのかな？

それじゃ、ただの変態おやじだな。  
変態おやじにはなりたくないな……。

「なにもないの？」

ないって訳じゃないけどさあ……。  
思い出って言うていいのかわからない。

「お前等と遊んだことぐらいしか思いつかない……」

俺は部活動とかは入ってなく、何か頑張ったと言う思い出がない。  
このままでいいのだろうか？  
そう思ってしまう。

今は学生で気楽だが、俺達も近い間にそれぞれの夢に向かって行く  
だろう。

俺の夢は？目標は？

俺にはそんなものはなかった。

今を生きることと精一杯だった。  
過去に背負う重い呪縛から解かれていないままだった。

そんな俺が『夢』を語っていいのだろうか？

「それが潤の思い出、それが潤の青春よ」

青春……。

俺も、もうそういえる歳になったのか……。

「そんなもんなのか？」

俺には『青春した』という感覚は一切ない。  
ただ、仲間達とバカをやってきた。

「青春なんてそんなもんよ」

青春なんてそんなもの……か……。

俺は確かに美唯、仲間と共に送る日常が好きだ。

俺はこのくだらなくて、ありふれた日常を愛しているのかもしれない。

こつやって普通に過ごせるのが『俺の夢』だったのかな？

それが”あの頃”からずっと想い続けていた想いだったのかな？

これが、俺の青春か……。

悪くはない。

そう言えるほど、今の生活が好きだ。

俺に良く合っている。

『永遠に続け』と悲願したい。

だが、その願いは叶わない。

俺達には夢があるからだ。

夢を叶えるため、この桜凜市から出る者もいる。

夢と引き換えに、今まで送ってきた日常は消える。

そして、新しい場で新たな日常を送る。

それが、俺達。

もうすぐ『俺達の日常』が終わると思うと、心に大きな穴が開いたように寂しくなる。

来年は3年だし忙しいだろうな……。

遊べるのも今だけか。

「よし！今日は皆で遊ぶか！」

俺は元気良く美唯に笑いかける。

最近、テスト三昧で遊んでなかったのもある。

何故だか今は異常に仲間と遊びたい。  
俺もまだまだ子供だな……。

「なによ、いきなり？」

美唯が不思議そうな笑みを俺に返す。

美唯は小さい頃からあまり変わらない。

いや、全然変わってない。

昔と変わらずに接してくれる。

美唯がいる。その存在はかけがえがないもの。

俺に力を与えてくれた。いや、今も十分に与えられている。

人は誰だって与えられている。

人は誰だって与えられていることに気付かない。

どんな人でも……。

この俺でさえ、与えられているんだから。

「まあ、いいだろ？アハハハハ」

俺は無邪気に美唯に笑い返す。

「あはははっ、変なの」

俺につられて美唯も笑う。

ずっと変わらない、笑顔。

俺はその笑顔を守りたい。

たげど、俺は美唯に何ができるのだろう？

美唯のストレス発散のためのサンドバック？

いや、そしたら俺が生きるのが辛くなる。

美唯が俺を助けてくれたように、俺にしか出来ないことが必ずあるはずだ。

それを俺は見つけよう。

きつと、その答えが俺の青春を飾る、大事な1ページ目だ。

話をしている間に桜凜高校に着いた。

おうりん  
桜凜高校。

俺達の住むおうりん桜凜市で2番目に大きい学校だ。

3学年それぞれがF組まであり、生徒数は桜凜市の学校NO.1を誇る。

俺と美唯はその2年A組だ。

桜凜高校はやたら広く、一般棟、特別棟、事務棟の三つに別れている。

これだけ広くて、桜凜市で大きい学校2番目だから驚きだ。

一般棟は桜凜高校の生徒が授業を受ける教室でほとんど。

桜凜高校は4階建て、2階は1年、3階は2年、4階は3年と割り振られている。

桜凜高校は右校舎と左校舎に分かれていて、一般棟から特別棟へ移動する渡り廊下が一つ存在する。

一般棟は左校舎で、特別棟は右校舎だ。

特別棟は、社会科室、理科室、視聴覚室、家庭科室、といった各科目



の特別教室が集まっている。  
図書室や、保健室、学食といった場所も特別棟にあり、部活の部室などもある。

事務棟は一般棟の1階にあり、事務棟は、職員室、用務員室、校長室、極め付けは職員が使う部屋まである。

そして俺達は一般棟の正面玄関へ入る。  
どうやら、遅刻は余裕で回避できたようだ。

「余裕でセーフだったな」

俺は下駄箱の扉を開け、自分の靴を入れる。

美唯も俺と同じ動作をしている。

そして上履を履き、階段を上る。

俺は3階へ辿り着き、自分の教室2 - Aに入る。

「しかし、何で同じクラスなんだろうな……」

美唯とはずっと一緒のクラスのような気がする。

何かが裏で意図を引いているのだろうか……？

「さあ？腐り縁ってやつ？」

「腐り縁ね……」

美唯とは中学も同じクラス。

そして、高校でも……。

腐り縁って本当にあるんだな……。

俺は自分の席にカバンを置く。  
俺の机の位置は最悪で、先生の教卓の目の前だ。  
つまりは、真ん中の列の廊下側。

そして、俺の隣の机に美唯もカバンを置く。

「しかし、何で席が隣なんだろうね……」

これも腐り縁なのだろうか？

ここまでくると、恐ろしさで鳥肌が立つ。

「さあ？腐り縁ってやつ？」

美唯は腐り縁を連発する。

腐り縁って良い意味なのかな……？

いや、『腐る』が入ってるから、良い意味ではないのかな？

「それさつきも聞いたぞ」

「そうだったけ？まあ、いいや」

俺の隣の席に美唯は座る。

これは個人的には少し困る。

授業中寝れないからだ。

もしも寝てしまったら、教科書の角で頭を叩き潰してくる。

たまにシークレットで辞書。

この激痛には耐えられない。

だから、美唯が隣の席のときは寝ないことにしている。

そういえば、美唯はああ見えて結構勉強はできる。

テストが近くなると、俺に勉強を教えに俺の家に押し寄せてくる。

そして、入るなり冷蔵庫を開け、

『何も無いな〜』

と文句を垂らす。

こっちとしては、かなりの迷惑だ。

一人暮らしの俺の家宝を食べられるからだ。

そんなことを思っていたら、

ドアが開き、俺の良く知る人物が入ってきた。

「潤、おはよう」

右手を軽く上げ、挨拶を爽やかにする男が一人。

「おお、侑か、おはよう」

コイツは「天神 侑」

俺の親友って言うていい存在。

俺とは中学からの親友。

出会ったのは中学1年からで、  
学力は……触れないでおこう。

「潤、おはよう」

侑と同じように、右手を軽く上げ、  
微笑みながら挨拶を交わす菜月。

「ああ、おはよう」

侑と共に登校してきたのは、

「蝶野 菜月」

侑の幼馴染。

そのため、俺は中学生からの付き合い。

彼女も暴力的だ。（侑に対して）

何で俺の周りの女子は暴力的な奴が多いのだろう？

俺の波長に暴力女の波長が合うのかな……。

俺の出した波長を暴力女がキャッチッ！

みたいな感じなのかな？

悪循環だな……。

二人は俺の後ろの席に着く。

俺は後ろを向き、二人に話しかける。

「なあ、今日遊ぼうぜ」

二人が席に着くなり、俺は今日の放課後に予定している、

『中沢プロジェクト』についての話をした。

最初のターゲットは侑だ。

「おおっ！今日はノリノリだな！潤」

そう……。

今日の俺はノリノリッ！

誰にも止められないさッ！

「なにして遊ぶんだ潤？サバゲーか？」

サバゲー。

それはサバイバルゲームの略。

簡単に言えば、銃で撃ち合う遊びだ。

もちろん本物じゃない。エアガンでだ。

本物で撃ち合いなんてありえない。

結構、美唯を撃つと面白い。

リアクションとかが。

その代わり、後で何倍にもなって返ってくる。

その姿は魔女のようだ。

高笑いも聞こえてくる。

「まだ、決めてない。菜月は？」

俺は侑の隣に座っている菜月に話しかける。

侑と菜月も席が隣なのか……。

腐り縁ここにも発見。

なんか嬉しい。

「あ、うん。いいよ」

菜月はあっさりと頷いてくれる。

「よーしっ！決まりだな。今日の帰り道で何するか考えるか！」

無事、勧誘は成功。

そっと胸を撫で下ろす。

「そつだな。聖夜も誘っていいか？」

聖夜。

それは「衛藤 聖夜」のこと。

侑のサバゲー仲間の一人だ。

聖夜も2年だけど、俺達とは違うD組だ。

確か1年の頃は、皆同じクラスだったような気がする。

「いいぜ！今日は朝までパーティーだ！」

まあ、嘘だけど。

こっちも朝までとなるとネタと体力が持たない。

「やつほー！ー！ー！」

侑もノリノリだ！

今日は楽しくなりそつだ。

心からそつ思った。

「いや……さすがに朝まではちょっと……」

菜月は困惑の表情を浮かべている。

「ん？駄目なのか？へたれだな」

侑が油を注ぐ。

そして、点火。

「誰がへたれよ

！！！！！！！」



「いいわよ」

よし！メンバーは揃ったな。

あとは聖夜か……。

聖夜ならくるだろう。

ちなみに聖夜はD組。

俺らはA組だ。

「よーしっ！じゃあ、今日一緒に帰るぞ」

「ああっ！」

俺と侑はガツチリっど握手を交わす。

そして、その手に最大限の力を込める。

お互いの表情が痛さで歪む。

その瞬間、学校のキャンバスにチャイムが響き渡った。

そのチャイムを待ち焦がれたかのように、担任の先生が入ってくる。

「おおおお　　いつ！！！！！！席に着けっ！！！」

先生の声と同時に、皆は自分の席に着く。

そのスピードはオリンピック選手並みに速い。

その速さを違うところで生かして欲しい物だな……。

これも俺がいつも視る、いつもの世界<sup>げんじつ</sup>。

そして、俺の一日が始まるうとしている。

「じゃあ、HR始めるぞ」



先生がHRを始める。

俺達の担任の先生は、HRが速いということでも有名だ。

そのことから付いたあだ名は、

『我らの大動脈Blood』

そして、先生は音速でHRを始める。

俺は軽く流して聞いていた。

これもいつものこと。

重要な内容だったら、後で美唯に聞けばいいし……。  
つてか速すぎて聞き取れる人いるのかな？

「以上！号令！」

いつの間にかHRは終わりを告げた。

やはり、HRの速さNO.1を誇る男だ……。

嬉しく思おうよ……。

「きりーっ！」

号令の声に合わせて俺は席を立つ。

そして、俺は迷わず教室から出る。

「ちょっと潤ッ！……どこ行くのッ！？……一時間目は……」

ん？何か聞こえたが……。  
まあ、いいや。

俺は窓から中庭を眺めつつ、一般棟の階段へと向かう。  
桜凜高校は、右校舎と左校舎との間に中庭まである。  
渡り廊下は空を飛んでいる感じで、中庭の上を通っている。  
この渡り廊下は、一般棟から特別棟に移動するため。

俺は目的の場所まで足を運ぶ。  
目的の場所、最上階に着くと目の前にあるドアを開ける。

『ガコンツッ！』

独特の金属音がした。

それと同時に、心地よい風が肌に伝っていく。  
俺が行ったのは屋上。  
授業中だけあって、誰もいなかった。

「ああ！良い天気だな！こんなノリノリの日は授業をサボろう！」  
自分で言ってる意味がわからなかった。  
まあ、今の俺は勉強なんてしたくないってのが心情。

俺は屋上のフェンスに手を置き、自然と空を仰ぎ見た。  
ここから見える景色は絶佳だ。  
ここなら、桜凜市を一望できる。

桜凜市は地方都市だ。

最近の発展が著しいらしい。  
その証拠に、高層ビルが数多くある。  
俺は生まれも育ちも桜凜市だ。

「空か……」

今日の空は青く澄んでいた。  
どこまでも続く蒼穹な青。  
この空はどこまで続いているのだろう。

白昼の空に昇る月。

屋上で独り呆然と空を眺めていた俺は、そんな青白い三日月を見つけた。

別に興味があつたわけではなかった。

無意識に眺めた秋空を渡る雲は一つもない。  
まさしく、蒼穹という言葉が相応しい。

青に覆われた空で、その仄かに蒼い三日月に眼がいっただけ。

そして、俺は蒼穹の空をじっと見つめる。

不意に

脳裏に蘇ろうとする”あの記憶”。

心に棘が刺さったような痛みが走った……。  
浮かんでこようとすると記憶を押し流そうと、俺は無理でも別のことを考えようとした。

” 青空には思い出したくない過去がある ”

青空を見て、その記憶を蘇らせてしまった。

この世界は

「……………」

俺は空から目を逸らそうとするが、視線が青空から離れない。  
あの青空に吸い込まれているように。

再び

あの過去の ” 過去の呪縛 ”、あの ” 記憶 ” が脳内を過ぎる。

結局、俺の思考は同じところに行き着いてしまう……………。

「…………… 母さん…………… 父さん…………… 沙希……………」

自然と口に出た。

また思い出してしまった。 ” あの記憶 ” を……………。

あの日もこの空のように青く澄んでいた。

だから青空を見ると記憶が蘇って来る。

俺の脳から離れない、忘れられないあの出来事。

そういつた思考回路が出来てしまっている。  
思い出したくない。  
だが、消せるはずがない。  
いや、忘れてはいけない。  
あの記憶を……。

その時は俺が小3のときだ。  
妹の沙希は小3。  
今生きてれば高1か……。  
時が経つのは残酷なまでに速い。

その時

## 1話・(3) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

1話・(3)

『ガコンッ!』

屋上のドアが開く音がした。

今の俺には、ドアを振り返ろうとすら思えない。

「ああっ! やっぱりいた! 何してるの!？」

俺しかない屋上に俺以外の声が響く。

それは美唯だった。

俺は、ゆっくりと振り返る。

「キャッ……風強い……」

美唯は翻るスカートを両手で押さえる。

秋風で美唯の髪が揺れている。

授業はどうしたのだろう？

サボりか? 珍しいな……。

それとも俺を連れ戻しに来たか?

「美唯……」

自分でも不思議なぐらい、弱々しい声が出てしまった。  
俺はその記憶を吹き飛ばすように、頭を左右に振った。

「どづしたの？また思い出しちゃった？」

そう言いながら、美唯は俺の傍らに近づく。

「ああ……」

また、思い出してしまった。

思い出さないうって、誓ったのに……。

美唯に心配をかけたくないのに……。

忘却の檻に閉じ込めたはずなのに……。

「忘れられる訳ないよね……テレビでも流れるくらいなもの」

美唯も俺と同じくフェンスに手を置き、自然と空を仰ぎ見た。

その”記憶”を忘れようと思っていた俺を呪った。

忘れられるはずがない。心からまったく離れない。

まるで、”魂”の一部みたい……。

「あのとき、何で俺だけ助かったんだろう？」

俺の口が本能に従わされたように無意識に動いた。

だが、これは事実だ。

あのとき、家族は死んで俺だけ生き残った。



忘れられない過去。

それは交通事故。

車と車同士の事故だった。

俺を含めた4人。

母さん、父さん、俺、そして妹の沙希。

どこに行こうとしていたなんて、今の俺は覚えていなかった。

車内には、家族の会話が鳴り響く。

その会話も、今になってはもう聞こえない。

何処にでもあるような道を自動車で走っていた。

俺はその時、補助席の後ろに乗っていた。

その時の俺は背も小さく、身体を乗り出さないと前は見えない。

だから俺には、何が起きたか分からなかった。

大響音と共にすごい勢いで車同士がぶつかり、その衝撃は激震で天地が揺らぐほどだった。

そのとき俺が眼にしたのは、運転していた父さん、その隣に乗っていた母さんの身体が、ぐにやりと上下に折りたたまれるような光景だった。

その光景は、今でも生々しいぐらいに覚えている。

それほど大きな事故で、相手の車は逃走車だった。多分、父さんと母さんは即死だろう。

その光景を鮮烈に思い出した俺の胸は裂けそうに痛む。

なら、何で後ろに座っていた”俺だけ生きている”のだろうか？

俺の隣の席には沙希が乗っていた。

だが、その沙希はもういない。

俺の目の前で、無上なほど酷に赤い血が吹き乱れていた。

誰の血なのかもわからない。

だが、昔の俺には「それ」が何を意味していたのか分からなかった。

そんな事故でも俺は「無傷」だった。

だが、テレビでは軽症と流れた。

この事故はの事は、全国ニュースにもなった。

この事故の死亡者は4人。

相手の運転手、母さん、父さん、そして沙希。なのに俺は無傷。

俺の”日常”は、一瞬で消えていった。

もう、手の届かない処まで……。

十数年経っている今でも、あの絶望は忘れていない。

「大丈夫よ潤。みんな見守ってくれてるよ」

美唯の声にも耳を傾けられなかった。

だが、その美唯の優しい口調は、俺の”魂”からは離れなかった。

「……………」

俺は閉じ込めた記憶を辿り続ける。

あの事故の俺には矛盾がある。

それはまず”俺が無傷”と言うこと。

それと”俺の服に血が付いていない”と言うこと。

あのとき俺の目の前で、赤い血が吹き乱れていた。

なのになぜ血が付かない？

しかも、なぜ俺は無傷なんだ？

まるで俺が何かに”守られてる”みたいじゃないか……。

「潤　？」

美唯は俺の顔を覗き込む。

その仕草に、一瞬ドキっとした。

「ああ、ごめん。すっかりしないとな」

そう口ではいったものの、俺の記憶は鮮烈に蘇る。

家族を失った俺は、成沢家が引き取ってくれた。

俺は事故のあと、酷い精神状態だった。  
人間の形をしたただの人形のように。

なんの意力も湧かず、なんの価値もなかった。  
だから、青空には涙が滲んでいるように見えた。  
何もかもが、くだらなく思えた。

そんな精神状態でも、美唯はいつもと変わらず接してくれた。

だけど、そのときの俺にはそれが苦痛だった。  
笑顔を見るのが苦痛だった。

幸せに触れることすら、苦痛でしかたがなかった。

そんなときでも美唯は俺と接してくれた。

毎日、毎日、毎日……。  
そんな精神状態と生活が数年続いた。

俺の性格は暗いままだった。

学校すら行かない俺に友達もいないし、いらなかった。  
こんな世界に生きてくなかった。

家族いない、こんな世界に……。

なんども自ら死をを考え、何度も実行しようとした。  
だけど結局、自殺なんて出来なかった。

覚悟と現実の違いというものだろうか？

だが、そんな俺を美唯は優しく抱きしめてくれた。  
俺の痛みに触れて、美唯も一緒に泣いてくれた。

『一緒に背負っていいっつ』

俺は美唯のその短い一言で、美唯の『魂』にようやく気付いた。美唯を傷つけてしまっている。

それから俺は変わった。少しずつ。

母さんや父さん、そして沙希の分まで精一杯生きていいっつ。こんな俺の姿なんて見たくないだろう。

そう思えるようになった。

俺はあの日から、当たり前の幸せさに気付いた。

神が救った命なら、俺にはやる必要があるはず。

あのとき、一番傷ついていたのは俺ではなく、美唯だったんだろう。

「ごめんな、美唯。大丈夫だ」

俺はあの時の美唯の言葉を思い出した。

『一緒に背負っていいっつ』

俺は一人じゃない。仲間がいるんだ……。もう、俺以外の人を傷つけない。

「そう？よかった」

もう美唯を傷つけたりはしない。  
俺は青く澄んだ空に再び誓った。

「よし！じゃあ、寝るか！お休み」

俺は近くにあったベンチに横たわる。  
風が気持ちいい。  
そして、瞳を閉じた。

「ええッ！ちよつと！授業……」

寝れば、脳が整理される。

だから、寝よう。

もう、美唯の声は聞こえなかった。  
俺は安息に包まれるように眠りに落ちた。  
あの記憶を閉じ込めるように……。  
あの過去を背負うために……。

あれから何時間が経っただろう？

そろそろ起きたほうがいいかな。  
俺はゆっくりと眼を開けた。

「こんにちは」

眼を開けたら視野全体に覗き込むように、美唯の顔があった。  
ち、近い……。  
顔を前に動かせば、当たってしまうぐらいに。

「起きたばかりなのにこんにちはって何か変だな……」

やっぱり起きたら『おはよう』に限る。

ああ、そういえば、此処は屋上だったな……。  
忘れてた……。

「だって、おはよう！っていう時間じゃないよ」

『おはよう』って時間じゃない……？  
って、ことはッ！

「えっ！マジッ!?!」

「今昼休みです」

なんとということだ……。

午前中の授業全部サボってしまった……。  
午後はちゃんと受けよう。  
これは、成績に響いたぞ……。

ん……？

ところで美唯はどうしたんだ？  
授業を受けたのか？

まあ、そこは聞かないでおこう。

その瞬間、俺の腹が空腹に襲われる。

「おおっ！！俺、今日飯食べてないんだっ！腹減った……」

腹が空いたことを美唯に猛烈にアピールする。

手振り身振りを加え、大袈裟気味にアピールした。

「はい。お弁当」

美唯は微笑みながら、弁当が入った包みを俺に渡す。

「おおっ！ありがとうございます！いただきます！」

俺は紐を解き、弁当を開ける。

今日も和風の料理。

いつも美唯が弁当を作ってくれる。

少しは幼馴染らしいじゃないか。

いや、何と言おうと美唯は俺の幼馴染だ。

これは、変わらない。

暴力的というのも美唯らしさだ。

……。。。。。。



そう思った俺を少しだけ後悔した。

「召し上がれ」

俺は弁当を食べ始める。

相変わらずおいしい。

美唯は料理上手いな。

暴力的だけど……。

人は見かけによらないな……。

「そういえば、あの事故のあと一緒に暮らしてたよな」

俺は咄嗟に思ったことを口にした。

だが、過去を思い出したさつきみたいに気は重くない。

「そうだけど、どうかした？」

美唯はあたりまえのように返答する。

そういいながら美唯も自分の弁当箱を紐解き、食べ始めている。

「今思うと変な感じだよな」

俺と、美唯が一緒に建物の中で住んでた……。

昔は何も思わなかったが、今思うとすごいことをしていたな……。  
なんか恥ずかしくなる。

「そう？別に变じゃないけど……」

俺は事故のあと、つまり小3から中学に入学するまで成沢家に住ま

せてもらっていた。

俺は相当世話になってるな……。

よっし！ 近いうちに『潤の恩返し』をしよう！

この恩返しが後の日本の神話になるかもな。

俺はありもしないことに期待を懸ける。

「ごちそうさま！いつも悪いな、美唯」

俺は弁当箱を閉じ、包みに入れる。

ちよつと、汚くなってしまった。

俺は再び紐解き、リベンジする。

「いいって……私にできることはこのぐらいだから……」

美唯の儂い声が胸を突き刺した。

今にも消えてしまふかのような声。

だから、あえて俺は明るく振舞った。

「よし！教室に戻るか」

「あ、うん」

俺達は屋上を出る。

そして、美唯と肩を並べ教室へ歩みを進める。

「おおっ！帰ってきた！」

歴史的生還を眼にしたように、侑は歓声を上げる。  
侑達は、既に昼食を終えていた。

「サボってたの？」

だが、菜月は直球ど真ん中。

「そんな悪い言い方するなよ」

まあ、確かにサボリかな？

そして、不意に学校のキャンバスにチャイムが響く。

このチャイムは5時間目の始まりのチャイム。

そのチャイムと同時に、授業が始まる。

俺は教科書を広げ授業を受ける。

.....。

くそっ！よりによって筆箱忘れたっ！

めっちゃ出鼻くじかれた……。

俺は隣で授業を受ける美唯にSOS信号を出す。

「……筆箱忘れたから、ペン貸して……」

先生に気付かれないように小声でSOSを出す。

だが、この席は先生と目と鼻の先だ。

ハラハラもんだな……これは……。

「なに？忘れたの？」

美唯は小さく微笑みながら、自分の筆箱をあさり始める。

「はいっこれ」

美唯から渡されたのは普通のシャープペンだった。

唯一の色のピンクがぐるっと一周されているシンプルなモデルだ。

「恩に着る……」

そして、俺は黒板に目をやる。

その黒板には理解不可能な暗号で埋め尽くされていた。

これは、なんの授業だ？

こうして授業を受けているってことは俺にとっては奇跡なのかもしれない。

あのとき、美唯がいつも通り接してくれなかったら。

今の俺はどうなっていたのだろうか？

美唯が取り戻してくれた、”俺”か……。  
だからこそ、この瞬間を愛しく思えた。

そして待望の放課後

俺達は集い、帰りながら遊ぶことを考える。

「さあ、今日はどうする?」

俺は誰ともなくはなしかけた。

「サバゲーだろう?」

まず、提案を出したのは聖夜だった。

そうだった……聖夜もサバゲー好きだもんな……。

「おお、賛成」

俺もサバゲーという提案に賛成する。

この二人はサバゲーが趣味であり、特技でもある。  
この二人の仲を支えているのはサバゲーかもしれないな……。  
それはないか……。

だが、仲良くなったきっかけはサバゲーだろう。

「ええっ！サバゲー？」

菜月は反発声を上げる。

確かに、女子はサバゲーってというのはな……。

「どうした？菜月、怖いのか？」

侑が菜月を上から目線で挑発する。

「な！怖くなんてないわよ！やってよろうじゃないの！」

おお！侑が上手く乗せた！！

さすが幼馴染だな。

つて！本当にサバゲーをするのか！？

「いや、俺サバゲー強くないし……」

俺は侑に色々な意味を込めていう。

女子もいるんだぞ……？

「心配するな潤。俺が守ってやる」

侑が俺の肩に手を置き、頷きながらそういった。

俺まで乗せられてしまった。

こうなったら！

「美唯は？」

最後の希望である、美唯に問いかける。  
アイコンタクトを美唯に送る。

「別にいいけど……」

この裏切り者ッ！

本当にサバゲーでいいのか！？

「よし！じゃあ、学校で集合な！」

侑が話を進める。

これは阻止しなければ……。

「学校でするのか」

「ああ」

迷いもなく侑は頷く。

ここからは俺と侑の戦いだ。

「先生に怒られるぞ？」

学校でサバゲーは良い舞台かもしれない。  
だがその場合、強敵が現れる。

「なら撃てばいい」

迷わずに侑がそう言ってみせた。

「停学だぞ」

俺の頭中どおりに事が進む。

「……………」

侑が黙り込んだ。

この流れだと、

『じゃあ、違うことするか!』

と言っるのが基本のはず……………。

「じゃあ、学校集合な!」

侑と菜月、聖夜はそれぞれの下校路に行く。

バカな……………!

侑は一般常識が通用しないのか!?

これはもう、サバゲーをするしかないな……………。

「ねえ、潤。家寄ってく?」

美唯は俺の裾をグイグイと引っ張ってくる。

女の子がこの仕草をしたら、普通は可愛いものなんだろうがコイツは違う。

コイツの場合、俺の身体が180度回転するぐらいの勢いで引っ張ってくる。

可愛いという表現より、邪魔という表現の方が正しいかもしれない。



そんな俺に美唯は話しかけてくる。  
サバゲーの件はそれでいいのだろうか？

「美唯はサバゲーでいいのか？」

美唯は嫌そうな素振りも一切しない。

「別にいいよ」

即答された。

遊べればいいという感じなのだろうか？

「……………」

つい黙り込んでしまった。

男だけならいいのだが、女子がいる。

なのにサバゲーはどうかと思う。

何もサバゲーをやらなくても……………。

もっと魅力的な遊びなら他にもあるだろ……………？

将棋とか囲碁とか麻雀とかリアルお飯事とか……………。

最後のは違うか。

「それより潤！」

美唯にも流された……………！しかも美唯は何故か楽しそうだ……………。

くそ！こうなればサバゲーをこれでもかって言っぐらい楽しんでやる！！



その悲鳴は、断末魔染みた狂ったような……。

「美唯ッ！？どうしたッ！？」

あまりにも唐突過ぎて、俺は恐慌する。

俺は美唯の近くで膝を屈する。

一体……。何が起きた……？

俺には何一つわからなかった。

俺にはこの瞬間。何が起きたのか何一つ理解できなかった。

分かることは、美唯が立てないほどの”何かが起こった”という”  
”とだけ。

何かに足を取られて転んだのだろうか？

いや、特に足が取られそうなものもないし……。

転んだだけであの悲鳴はありえない。

俺は美唯の肩を掴み、優しく揺らす。

「ううううあああああ……！！！！い、痛い……あああ  
！！！」

美唯がその場で疼くんでいる。

そして美唯の呼吸が一気に速くなる。

痛い……？なんでだ……？

俺にはまったく理解できなかった。

ただ、『美唯を助ける』という気持ちで溢れていた。

「痛い！？何処が痛いんだ！？」

俺は倒れている美唯の頭を右腕で持ち上げる。

「わからない……い……身体全体があああ……！！！！あああ  
「！！！」

言葉すら普通通りに話せないのか……。

身体全体……？？？

そんなことがありえるのか？

だが、美唯はこんなときに嘘を言う人じゃない。  
俺が一番良く知っている。

俺は美唯の身体を凝視する。

外傷ではない。

なら、内部からか！？

俺には医療知識なんてない。

くそッ！なんて俺は役立たずなんだ！

「美唯ッ！」

俺はあの日の美唯がしてくれたようにやさしく抱きしめた。  
俺にはこのぐらいしかできない  
なんて……なんて俺は無力なんだ……。

だが、今は自分の無力さに嘆いてい場合じゃない。

俺は想いを込めて痛いくらいに抱きしめる。

そのとき                    空間が大きく歪む。

ドクン……と空間そのものが鼓動をしたような感じがした。  
身体と空間の境目が失われ、歪曲されていくような感覚がした。

歪んで見えた世界が何重にもブレる。

「……………!!」

俺は声にならない悲鳴を上げ、眼を強く閉じてからもう一度周りを  
見る。

だが、その歪みは何事も無かったかのように今はなかった。

な……………なんだっただ……………?

「ん……………うあああああ……………」

美唯が苦しそうに声を漏らす。

歪みどころじゃなかった!

美唯を助けないと!

俺は慌てて携帯を取り出す。

「大丈夫か！？今救急車呼ぶ！！」

「……………うん……………」

美唯の力無き声が胸に響いた。

こんな美唯の声を聞いたのは初めてだ。  
いつでも美唯は元気だった。

杞憂しながらも、俺は携帯を開く。

「ッ！？」

しかし、何も映らない。

電源が入っていないのか、と思い電源を入れるが、  
画面にはなにも映らない。

「くそ！こんなときに充電切れか！？ 昨日充電したばかりなの  
に！ みゆっ！携帯借りるぞ！」

今の俺には”その状況”を疑う余裕はなかった。

「んああ……………うん……………」

再び力無い声を出して頷く。

俺は美唯のポケットに手を突っ込む。

少し抵抗はあるが、迷ってはいられない。

そして、美唯の携帯を開く。

「!!!!!!!!!!!!!!」

しかし、                なにも映らない。

電源を入れてみるが、ピクリつともしない。

「なんでだ!?なんで映んない!?!」

俺は昨日充電して、今日なんてあまり使っていないのに……。

なのになぜ映らない?

充電切れなんてありえないはずだ……。

俺は激しい恐慌を感じた。

「つう……あああああ」

美唯は声を漏らしながらぎこちなく立ち上がる。

俺はその美唯を優しく支える。

「大丈夫かッ!?!」

俺は美唯を抱き支える。

俺にはこれぐらいしかできない。

「う……うん……もう……大丈夫……」

さっきに比べれば良くなっただが、

やはり様子がおかしい。

「無理はするな! 早く家に戻った方がいいぞ! ほら、背中に乗

って」

俺は美唯に背中を向け、膝を屈する。  
携帯が使えないなら、家の電話で掛けるしかない。

「え？ あ、うん……」

美唯が俺の背中に乗る。

背中に柔らかいものがあたった。

だが、今はそれを感じている場合じゃない。

誰かに見られるかもしれないがそんな事はどうでもいい。

「しつかり掴まれよ！」

俺は猛ダッシュで美唯の家に行く。

幸い近かったのですぐ着いた。

おんぶなんて何年ぶりだろう？

昔は良くやっていた記憶がある。

俺は過去の記憶に触れてみる。

だが、今はこれほどまで身体の大きさが違う。

いつも会っているから、成長に気付かないんだろう。

成沢家の前に着いた俺は、インターホンを押した。

『……………』

しかし、無音のまま。



「あれ？鳴らない……」

もう一回押してみる。

『……………』

が、やはり無音。

その瞬間俺は、あることに気付く。

「なんでだッ！？ さっきから何かおかしいぞ!？」

俺はドアを開けてみる。

しかし、鍵が掛かっているため開かない。

「美唯！鍵は？」

背中に乗っている美唯に、横目で問いかける。

「も、持ってない……」

だが、美唯はゆっくりと首を横に振る。

「え？何で？」

意味を聞いたってしかたないことぐらいわかってる。ただ、何故か聞いてしまった。

「だって、いつもお母さんがいるから……」

お母さんがいつもいる？

確かにおばさんはいつもいた。

なのにない？

いや、その前にインターホンが鳴らない……。

これは、偶然なのか？

「よっしー！俺の家に行こう！しっかり掴まれよ！うっおおりゃあ  
ああああ　　！！！」

再びおんぶをして、自分の家まで猛ダツシユをする。

家がかかり近くて助かった……。

そして鍵を開け、ドアを開けた。

「もう、降ろしても大丈夫……もう何処も痛くない」

美唯の吐息が俺の後ろ髪に当たる。

だが、その吐息はまだ少し速かった。

「ああッ！ごめん」

俺は美唯を背中から降ろす。

本当にもう痛くないのだろうか？

俺を心配させないためなんじゃないのか？

しかし、本当に一体　　何があつたのだろうか？

「もう本当に大丈夫だから！気にしないで！」

いつもの美唯に戻った。  
口調も態度も元の美唯だ。

「本当か？」

「本当よ」

美唯は優しく俺に笑い返した。  
これは本当だな……。

なら、さっきのは何だったんだ……？

「そうか……なら良かった」

完璧に大丈夫とは信じ難いが、俺はその美唯のまっすぐな瞳を信じた。

俺は何か起きたのかと思いテレビの電源を入れた。

「!!!!!!!!!!」

俺は何度もスイッチを押す。

「どうしたの？」

その俺の行動に美唯も動揺している。  
交互にリモコンとテレビを何度も視る。

「テレビが映らない!?!」

テレビはまったく映らない。  
停電なのだろうか？  
それとも、違うなにかなのだろうか？

「ええッ！？」

このとき、俺は確信した。  
何かがおかしい……。

「やっぱり何かおかしい！！外に行ってみよう！」

俺は飛ぶようにダッシュして玄関へ。

「うんっ」

俺達はドアを開け、外に出る。

その瞬間、太陽の光が俺達を照らした。

そして、空を仰ぐ

変わらない蒼穹な青色

だが、何か変だ。

「やけに静かじゃないか？」

俺は閑静に包まれている光景を不思議に思う。

「え……？？」

美唯も耳を澄ます。

だが、物音一つも聞こえない。

「車の音もしない、人間もない」

そもそも、そんなに此処は活気溢れている所ではないが、  
そう思い込むほどに不安が増す。

「……………」

俺達は周りを見渡す。

人の気配もなく、鳥の声もなく、自動車の音もない。

俺達の声が響くだけだった。

「とにかくおかしい！！学校に行こう！俺達がいる筈だ！！」

何かがおかしい。

その何かが分からない。

だが、学校には俺達がいる！

「わかったっ！！」

「急ぎっつ！！」

2010年9月1日午後5時10分

この瞬間から少女の”日常”、”世界”すら大きく変わり始め

た。

壮絶な戦いの果てに辿り着いた”真実”を前に、少年少女は仲間と明日<sup>みらい</sup>の為に、何を失い、何を守れるのか？

絶望の最果てで、ヒトは何を望むのか？

忘れないで、この想いを

## 1話 - (3) (後書き)

### ―登場人物―

中沢 潤（なかがわ じゅん）：（男）

本作の主人公。桜凜高校2 - A組。

小学3年生のとき、両親、そして、妹の沙希（さき）を事故で亡くした。その事故の場にいたのにも関わらず、潤は無傷だった。

家族を亡くしてからは成沢家に引き取られ、中学から現在に至っては国と成沢家の援助によって一人暮らし。

家族を亡くしてからは怠惰な生活を送っていたが、幼馴染の美唯の言葉を糧に、明るく接してくれる仲間と学生生活を送っていた。だがその日常は、異世界へ堕ちたことで劇的な変化が訪れる。

異世界では、自分も桜夜先輩たちに守られている身でありながら、仲間を守ろうとする。

体力や運動神経は一般よりは上だが、部活等はやっていない。発想力が豊かな潤は、それ故に話が脱線することがよくある。

身長：178cm

体重：60kg

血液型：A

髪色：暗黒色（黒系）

誕生日：7月26日

年齢：17

成沢 美唯（なりさわ みゆ）：（女）

潤の幼馴染であり、同じく桜凜高校2年A組。

潤に対し、甘える、寄り添うような性格ではなく、逆に潤を修正させる程の性格。

潤も美唯に対しては甘えたりしないため、ミスマツチに思えるがお互いを良い方向へ引っ張り合っている。

体力や運動神経が高く、潤曰く『暴力女』

パンチ、蹴りなどの威力は、潤曰く『世界チャンピオンですら、膝を屈するほどの威力』

潤に毎朝、ドアの猛攻撃を受けているため『鋼のような防御力』を得ている。

以外にも勉強や料理を得意とする。潤曰く『人は見かけによらない』

身長：165cm

体重：46?

血液型：O

B・W・H：84・54・80

髪色：枯葉色（茶系）、ロング

誕生日：8月3日

年齢：17

天神 侑（あまがみ ゆう）：（男）



桜凜高校2 - A組。潤の親友。

学校の登校は菜月、下校も菜月と帰るり、休み時間には潤達と過ごす。

成績はあまり良くはない。

趣味はサバゲー。

聖夜とは色々とライバル。

悩みの種は、菜月の日々の暴力行為。

身長：174cm

体重：60?

血液型：O

髪色：黒紅色（黒系）

誕生日：2月23日

年齢：16

蝶野 菜月（ちょうの なつき）：（女）

桜凜高校2 - A組。

侑の幼馴染。侑に対しては暴力的。

侑の発言も問題だが……。

以外にサバゲーも強いいため、侑は首を傾げてる。

何でも侑に挑戦的だが、侑を信頼している。

身長：158cm

体重：45?

B・W・H：80・48・83

血液型：O

髪色：鴉色（ピンク系）

誕生日：6月6日

年齢：17

衛藤 聖夜（えとう せいや）：（男）

桜凜高校2-D組。侑といつも絡んでいる友達。

侑とは高校で出会い、今でも良い友であり、良きライバルでもある。  
サバゲーが趣味。

身長：183cm

体重：67?

血液型：B

髪色：枯茶色

誕生日：7月7日

年齢：17

↓場所設定↓

桜凜市（おうりんし）

潤達が住む場所。

最近の発展が著しい。人口も年々上昇。

（-1th Product-）の場所とリンクがある。

## 桜凜高校（おうりんこうこう）

潤達が通う学校で、桜凜市で2番目に大きい学校。

3学年それぞれがF組まであり、生徒数は桜凜市の学校NO.1を誇る。

桜凜高校はかなり広く、一般棟、特別棟、事務棟の三つに別れている。

一般棟は桜凜高校の生徒が授業を受ける教室でほとんど。

桜凜高校は4階建てで、2階は1年、3階は2年、4階は3年と割り振られている。

桜凜高校は右校舎と左校舎に分かれていて、一般棟から特別棟へ移動する渡り廊下が一つ存在する。

一般棟は左校舎で、特別棟は右校舎。

特別棟は、社会科室、理科室、視聴覚室、家庭科室、といった各科目の特別教室が集まっている。

図書室や、保健室、学食といった場所も特別棟にあり、部活の部室などもある。

事務棟は一般棟の1階にあり、事務棟は、職員室、用務員室、校長室、極め付けは職員が使う部屋まである。

## 2話・(1) この世界の中で(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

## 2話・(1) この世界の中で

俺は何をしたのだろうか？

そう自分に問いかけてみる。

だが、答えは返ってこない。

俺は……。

何かが変わってしまった世界の中で……。

「確かに変よっ！！ 1この世界！！」

美唯は驚愕の声をあげる。

そっ……なにかが変なんだ……この世界は……。

俺達は桜凜高校に向かって走っている。

走る意味は見つからないのだが、本能が『走る』と命令してくる。  
あるいは直感。

ここは何処なんだろう？

見た目は”まったく変わらない”

だが、此処は”静寂に包まれている”

考えてみると、こんなに走っているのに”人と一人も会わない”

此処まで異変が重なると、完全に今までの世界とは違うと考えてし

まう。

だけど、そんなことはありえない。

「美唯！アレを見る！！」

俺は道路に人差し指をさす。

眼を疑うような、おかしいな光景だ。

「車が止まってるっ！？」

車が道路に停車していた。

あまりにも不自然に、駐車場でもない道路に、車が停止している。

まるで、さっきまで走っていたように。

誰もいない光景に、人類の消滅を思わせられる。

運転手もいない。

その運転手は何処に消えてしまったのだろうか？

「電力が使えないのかッ！？」

俺は咄嗟に思った。

ここまで来ると嫌でもそう思う。

確かにこれなら辻褄が合う。

インタホンが”鳴らない”ことも、  
テレビが”映らない”ことも、

携帯の”電源が入らない”ことも、

全て辻褃が合ってしまう。

だが、俺は信じたくはなかった。

いや、信じられなかった。

あまりにも常識離れしている出来事。

それを信じるといふのは誰だって抵抗がある。

「電力が使えないッ!？」

美唯は驚愕の色を隠しきれないようだ。

俺達があたりまえのように使っている電気。

それが、この世界では絶たれているのか……？

誰だって信じ難いし驚愕する。こんな状況なら誰だって。

「ああ、インターホンが鳴らない、テレビも映らない、携帯の電源が入らない、その理由は電力が使えないからだ!!」

地域の停電とも考えられるが、これは明らかな間違い。

携帯の電源がつかないからだ。

「そんな事がありえるの!？」

俺の常識から導き出すには”ありえない”

俺達の”知っている世界”ではありえないだろう。

なら、これは夢なのか……？

いや、紛れもなく現実だ。

いや、現実だという証拠はどこにある？

自分の発想一つ一つで、頭が混沌する。

「わからない！俺にもさっぱり！」

一般人である俺には、考え難い出来事。

じゃあ、これは幻想なのか？

いや、幻想ってなんだ？

「じゃあ！何で人がいないの!？」

人がいない……。

俺はしばらく黙り込んでしまった。

この世界に俺と美唯しかいなくなってしまったのか？

じゃあ、他の皆は？

侑は？菜月は？聖夜は？

本当に人類は消滅したのか……？

俺達は唯一の人類の生き残り……なのか？

「とりあえず、学校に行こう!!この時間帯は絶対人はいる筈はずだ！」

先生方はこんな早い時間には帰らない。

あと、部活動の生徒もいるだろう。

「もしも、いなかたら!？」



いなかったら……。

それは、俺と美唯しかいないということになる。

「この状況を信じるしかないってことになる！」

「　　ッ!？」

こんな状況を信じているっていいのか……？

”俺達以外の人間”はいない。

”電力も使えない”

こんな世界に俺と美唯は二人っきりなのか……？

ここは何処なんだろう？

その言葉を連発する。

音も無い世界。

不確かだらけな世界。

なにかがおかしい世界。

俺達は、そんな”世界に堕ちてしまった”のだろうか？

それとも、いつも通りの世界なんだろうか？

まだ、核心には至ってない。

だが、希望も立ち昇った。

「美唯！人がいるぞ!!」

学校が近くなると、桜凜高校の生徒が確かにこの世界に存在してい

た。

「人！？じゃあ、この世界は私達だけじゃないってこと？」

暗い表情から一変し、美唯の顔がパツと明るくなる。

「そついうことになるっ！」

俺達だけじゃない……！！

やはり人と会わなかったのはただの偶然だったのだろうか？  
いや、なら車が道路に停車しているはずが無い。

いや、きつとそれも偶然だ。

俺は自分に言い聞かせた。

俺はこの世界を認められないでいた。

「ハア……ハア……ハア……」

俺達は息を整える。

そして、周りを見渡す。

「桜凜高校の生徒は存在している……！」

俺は高らかにそう叫んだ。

普通なら相当恥ずかしい事なんだろうが、  
嬉しいとい気持ちだが、恥ずかしさを勝っていた。

「よかった……」

美唯は安息の息を漏らす。

生徒は普通通りに過ごしている。  
だが、周りを見回している生徒もいる。

だけど、何かがおかしいっていうことは解決しない。  
電力が使えないからだ。

「侑達のところに行こう!!」

桜凜高校の生徒はいる。  
ということも侑達もいるという。

「うんっ!!」

俺達はいつもの待ち合わせの裏庭に行く。  
そこはいつも静かだった。

俺の視野に侑達が見えた。

「侑ッ!!」

「菜月ッ!!」

「聖夜ッ!!」

俺達は声を大にして叫んだ。  
やはり桜凜高校の生徒は存在している!!  
俺は疾走して侑の所へ走る。

「おお!潤か?元氣いいな」

「よおッ!」

「どうしたの美唯?そんなに慌てて……」

三人ともいる。これで一安心は出来る。

だが、侑達は世界の異変に気付いていないようだ。あまりにも、いつも通り過ぎる。

「侑!携帯を開いてみる!」

俺は侑に命令口調で言う。

俺と美唯だけが電気が使えないっていうことは、ありえないはずだ。まず、それを確かめないと……。

「なんだよ、潤?」

侑が聞き返す。

少し、失笑も浮かべていた。

「開いてみるッ!」

軽蔑していた侑に俺は強く言葉を伝えた。

「ああ……そこまで言うなら……」

侑は携帯を開いた。

これで事実を知ることになる。

侑は携帯を何度も電源を入れようと試みている。

「くそ！この暴力女！俺の携帯壊しやがったな！！」

「誰が暴力女よ！！」

『ズバシ　　ン！！！！！！』

菜月のチョップが侑の頭に直撃。

侑は痛さのあまり、頭を抱きかかえる

「……………反応している時点で……………お前だろ……………」

侑は痛そうに頭を押さえている。

やはり、電源が見つからないようだった。

「菜月！聖夜！携帯を開いて！！」

二人とも困惑していたが、  
携帯を開く。

「……………え……………？」

「フウ……………アハハハハツ！！」

菜月は困惑した様子だが、聖夜は笑っている。

「また壊れたのか？これで何台目だ！？俺の携帯は！！」

侑達は、電力が使えないと言う発想まで辿り着かなかったようだ。  
というか、聖夜は何台変えてるんだよ……………。

「壊れたんじゃないッ！！電力が使えないんだッ！！」

俺は声を張り上げる。

俺は今までのことを侑達に話した。

そして長い間、静寂が訪れる。

最初に侑が口を開く。

「……………なるほど……………だからコンビニに入れなかったのか……………」

納得した口調で、一人で頷いている。

何か心当たりがあるのか？

「何か心当たりはあるのか？」

やはり、侑達も何かあったようだ。

「ああ、サバゲーに備えてコンビニで買出しに行った。だが、自動ドアが開かず、俺はそのまま歩みを進めてしまった」

……………。

痛かったろうに……………。

だが、それは当然だ。  
電気が使えなければ、自動ドアも開かない。  
笑うべきところだろうが、笑っている場合じゃない。

「……………痛かったらどう……………？」

「可哀相に……………」

俺と美唯とも侑に同情する。

確かに、開くべきものが開かなかっただら……………。  
激突は避けられないよな……………。

「ああ、ありがとう。だが、菜月や聖夜はその俺の姿を見て、獣のように笑っていた……………ケツケケケケ……………ケー————！！！！！！……っ！！」

菜月の笑い方を真似しているのか……………？  
人というよりも、妖怪に近い感じだ。

「だれが獣よ！！その前に私はそんな笑いかたじゃないでしょうっ！！」

『ズバシ　　ン！！！！』

今日何度めのチョップだろう？

しかもいつも通りの頭。

侑の頭は丈夫だな……………。

侑を褒めてあげたい。

「……………そういうところが……………獣なんだよ……………」

侑の場合は、コンビニに入る為に自動ドアに行く。  
だが、その自動ドアは開かず、ドアに直撃。

と言う流れらしい。

「とにかく、電気は使えないんだ」

改まって原点に戻る。

少し話がずれていつてしまっていた。

「だから、車も不自然に道路に止まっていたのか……」

侑もそれには気付いていたようだ。

なら、不思議に思えよ……。

運転手もいないんだぞ……？

誰だって不思議に思うだろう？

「あと、人もいない」

俺は桜凜高校の生徒以外、誰も会っていない。

単なる偶然だと思っていたが、考えれば間違いだ。

美唯の母さんだっていなかった。

これは、偶然なんかじゃない……。

「いや、いるだろうツッ!？」

侑は自分に指をさす。

確かに人はいる。

だが、なぜ車に人が乗っていないのか？



なぜ、美唯の母さんはいなかったのか？  
答えは簡単だ。

「俺達、桜凜高校の生徒しかいないんだ!!」

再び俺は声を主張した。

また、沈黙が訪れる。

「……………嘘でしょう……………」

菜月は失笑を浮かべ、疑い深い表情を浮かべている。  
やはり、信じてくれない。

俺も同じだ。

だが、受け入れるしかない。

「なら考えてみるよ!菜月!」

聖夜が菜月の前にでる。

こついつときの聖夜はなんだかすごく頼れる。

「え……………」

その聖夜の言葉に、菜月は視線を聖夜に向ける。

「なぜ、お前の母さんはいなかった!」

「ッ!?!」

菜月は声にならない悲鳴を上げている

菜月の親もいないなら……………。

もう、俺もこの不確かに満ちている世界を信じるしかないようだ。

「桜凜高校の生徒しかいないからだ」

聖夜は既に理解していた。

いや、現実を受け止めていた。

一方の俺は、まだ受け止められないでいた。  
どうしても嘘だと心の片隅で思ってしまう。

「……………」

菜月は黙り込んでいる。

その身体は、小刻みに震えていた。

「俺達がここに来るまでに、桜凜高校の生徒以外の人と会ったか？」

侑達も誰も会っていないのか…………。

此処まで偶然は重なるものではない。

「……………う……………嘘よ……………」

菜月は信じられないという表情と声を漏らす。

「これは、サバゲーどころじゃないな……………」

侑の顔には苦笑いを浮かべながらも、  
侑はこの世界を受け入れた…………。

やっぱりお前すごいよ……。

「これからどうする……?」

俺は全員の眼を視て、深刻にそういう。

これが、一番の問題だろう。

此処が何処なのかわからない以上、下手には動けない。

「まず、この世界のことを知らないといけないだろう?」

侑が冷静な意見を上げる。

俺もそれが最善の行動だと思う。

だが、どうやって調べるのか……?

俺には考えもつかない。

「俺も賛成だ」

何を言おうと、これが最善だな。

だから俺は賛成することにした。

「私も」

美唯も侑の意見に賛成。

まず、俺達はこの世界のことを知らないといけない。

なぜ、電気は使えないのか……。

なぜ、桜凛高校の生徒以外いないのか……。

「とんでもないことになったな……」

聖夜の瞳はマジだった。  
こんな聖夜は初めて見るかもしれない。  
それぐらいの真剣さだ。

「……………」

だが、菜月はまだ受け入れられないでいた。  
いつかは受け入れざるを得ないときがくるだろう。  
俺はそう思う。

「とりあえず、校舎に入ってみよう」

此処にいても何もならない。  
桜凜高校の生徒しかいないなら、桜凜高校のキャンパスに何かある  
かもしれない。

「そうだな」

侑の顔には笑顔が消え、真剣顔になっていた。  
そして、俺達は歩き始めた。

俺達は裏入り口から校舎に入った。  
校舎の電気はついてなく、薄暗かった。  
太陽の光だけが照らしている。

「……………学校なのに電気がついてない……………」

菜月の声が弱々しい。

その身体は、小刻みにブルブルと震えている。

俺達は学校の中を歩いてみる。

特に変わった様子はない。

放課後の学校つてのはこんな感じだ。

俺達は職員室の前に着いた。

「職員室か……」

侑は勢い良く職員室のドアを開ける。

ガコンツと大きな音を立てながらドアが開く。

「ちよつとツ!!」

菜月は侑の大胆な行為に驚いている。

驚くと言つことは、まだ受け入れてないということ。  
なぜなら……。

「大丈夫だ、怒られる筈がない」

職員室には誰もいないからだ。

侑はやはり理解している。

「この時間帯に先生がいないなんてなあ……」

聖夜も首を傾げている。

失笑にも良く似た笑いをする。

「……………本当に桜凜高校の生徒しかいないの……………?」

菜月も疑い始めた。

ここまで来れば信じるしかない。

そう思うが、心では理解してくれない。

「まだ、詳細はわからないが……………」

俺がそう言いかけたとき……………。

『ズド

ンツ!!!!!!!!!!』

不意に、大響音が響く。

俺は反射的に音のした方向へ身体を向ける。

う、嘘だろツ!?!?

外から銃声!?!?

さっきの音は間違いなく銃声だった。

「キアツ!?!」

美唯がその強烈な音に反応し、バランスを崩す。

俺は反射的に美唯に駆け寄った。

「美唯!!!大丈夫か!?!」

俺はバランスを崩した美唯を、半ば抱き支えた。

一体この世界はなんなんだ……。

電気や人がいないだけじゃなくて……。  
なんで銃声まで……。

「あ、ありがとう……。」

美唯は立ち上がって、制服をポンポンと手で叩く。

「銃声ッ!？」

侑はエアガンを取り出す。

そうか……。

俺達はサバゲーをするつもりだったんだ。

「おいおい、マジかよ……随分と本格的なサバゲーじゃないか……。」

聖夜もエアガンを取り出す。

「ちよつとッ!？侑!？聖夜!？」

菜月は二人の行動に驚愕している。

銃声……。

今、確かに銃声が聞こえた……。  
これはどういふことなんだ……？  
ただのお遊びなのか……？  
いや、遊びには性質が悪い。

「侑！そのエアガン使えるのか！？」

この世界は電力が使えない。  
なら、エアガンも使えないんじゃないのか？

「電気を使うものが全てじゃないさ」

侑のエアガンは電力を使わない物だった。  
なら、この世界でも使える。

「……その前になんで銃声が聞こえるんだッ！？」

まさか、俺達以外の別の人間がいるのか……？

それとも桜凜高校の生徒が発砲したのか……！？  
疑問は膨らむばかりだ。

「わからない。今から見に行く。潤達は此処で待ってるッ！！」

侑はエアガンを構えながらそう言う。

俺にはその侑の姿は、遅しく見えた。

「ああ、頼む。無事だな」

俺は侑のその瞳に懸けた。

真っ直ぐで、曇りも無く、仲間を守る。その瞳に……。

「ああ、菜月は大人しくするんだぞ」

やっぱり、侑は菜月のことが心配のようだ。

それもそうだ。侑のたった一人の幼馴染だからな。



「私も行くッ！！エアガン渡しなさいよ！！」

菜月は何を思ったか、侑に向かって手の平を出す。きつと、侑と聖夜だけじゃ心配なんだろう。

「……まったくしょうがないな……行くぞ！菜月！」

迷う状況ではないと判断した侑は、菜月にエアガンを渡す。

そして侑、聖夜、菜月、は銃声があった外へ向かう。

俺はその姿を眼に焼き付けた。

俺の役目は 美唯を守ること。

この命に代えてでも……。

「美唯？大丈夫か？」

桜凛高校のキャンパスに残った俺と美唯は身を隠せそうな所に移動し、

そこから皆の無事を祈る。

「あ、うん……」

「侑、聖夜、菜月、無事でな……」

俺には祈るしかなかった。

無事に帰れよ……みんな……。

## 2話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

## 2話・(2)

俺eyes

(視点が俺に変更します。)

俺達は銃声があつた外に出る。

そこには、桜凜高校ではない生徒がいた。

「……………桜凜武装高校……………」

俺はそう呟いた。

あの銃声は桜凜武装高校の生徒が発砲したのか？

数は大雑把に数えて、20人程度か……………。

奴等の目的は何なんだ！？

桜凜高校に何の用だ！？

「アレは何処の高校の生徒だ！？」

聖夜は知らないようだ。

まあ、制服だけじゃわからないだろう。

「桜凜武装高校の生徒だ！！」

「桜凜武装高校！？」

桜凜武装高校。

桜凜市に住んでいれば誰でも知っているだろうと言う学校。

その大きさは桜凜市ではトップ。

俺も入学に迷った学校。

だが、潤達が桜凜高校を受けると聞いて俺も受けた。

よく受かったもんだ……。

って、思い出に浸ってる場合じゃないよな……。

「どうやら、桜凜武装高校の生徒もいるようだ」

余計に混乱してきた。

なぜ、発砲する？

俺はあるものが視野に入った。

「ひ、人が倒れてると……」

俺の視野内で、確かに桜凜高校の女子生徒が血を流して倒れている。

確認できる被弾場所は、左腕、右胸、左脇腹、の3箇所だった。

その傷口からは、赤い液が流れだしている、

この血の量ならもう死んでいるだろう。

つまりは、”死体”

さっきの銃声はこれだったかもしれない。

あいつらが”殺した”のか……？

あの娘を……。

何の為に……。

何で人を殺す必要があるんだよ……。

怒りにも良く似た感情が心の底から、湧き上がってくる。

エアガンを握っている右手に力が入り、カタカタと音を立てる。

「マジ………?」

聖夜は信じ難いような表情で、その死体を視る。

「………え………?」

菜月は言葉を失っている。

そのとき、桜凜武装高校の生徒複数は銃を構えながら全体散布し、移動を開始する。

「まずい………戦闘態勢だッ!!」

この桜凜武装高校は俺達、桜凜高校の生徒を殺しにきたのか? じゃないと、発砲なんてしない。つまり、俺達もターゲットに入る。

「なんなんだよ!この世界はッ!!」

聖夜の叫び声が聞こえた。

だが、その声は銃声で掻き消される。

『ズド

ン!!……!!ズド

ン!!……!!ズド

ン!!……!!

』!

何発もの銃声がする………。

やはり、本物の銃………なのか?

それもそうだ。

相手は武装を許可されている特別な学校。  
そして何よりの証拠に、桜凜高校の生徒が殺された。  
狙いはやはり、うちの生徒か……。

「きゃああああああつ！！！！！！」

桜凜高校の生徒達は悲鳴をあげてる。

そして、俺の視野は赤い血が吹き乱れている

赤い血。

これは人間の血。

つまり、銃弾が人に直撃した。

俺の眼から、色が見えなくなる。

世界がスローで流れ始める。

目で受け取った刺激を上手く脳で処理できない。

ここが戦場になっちゃった。

奴等は本気で俺達を殺<sup>や</sup>るつもりだ……。

俺達はこんな所にいるのか……？

俺たちも撃たれるのも時間の問題かもしれない。

桜凜武装高校の生徒の数人が、桜凜高校の校舎に入っていく。

マズイ……！！校舎には、潤と美唯がいるんだぞ……！！

「何でそんなことするの　　ッ！！！！！！」

そのとき、菜月の叫び声が聞こえた。

な、菜月………？

その高い声は、こんな世界でも響き渡った。

だが、菜月の声で反応した一人の生徒は俺達をターゲットにし、銃を構えながら走り出す。

「まずい！気付かれたー！」

絶対絶命だった。

あつちの本物の銃。

こっちはエアガン。

勝てるはずが無い。

俺もここまでなのか……？

あまりにも唐突に訪れた終焉。

相手は発砲体制に入っている。

俺は本能に突き動かされるように、自然と菜月の盾になろうとしていた。

「なに、ボ　　ッとしてるんだッ！……！」

聖夜は銃を前に向けて構え、そして素早くトリガーを引く。

『バ　　ンッ！……！……！』

これは煙幕弾か！？

周りは煙幕に包まれる。





また銃声が聞こえる。  
当たれば、もちろん命の保障は無い。

「逃げるって！潤達は！？」

「今は逃げるしかない！！」

潤のいる所はこの生徒の前方を突破しないと行けない。  
今は後退し、逃げるしかない。

「見捨てるのッ！？」

「じゃないと俺達が死ぬ！！」

死ぬ……。

俺達を送っていた日常で、そんなことを思った瞬間は何処にもなかった。

じゃあ……俺達は……。

いつ死んでもおかしくない世界にいるんだ……。

煙が薄くなっていく。

マズイ……。

早くしないと……！

「だからって！！」

「菜月！！潤達を信じろ！！今はそれしかない！！」

俺は菜月の手を握り、  
走り出した。

「うう……」

俺達は後退する。

己の体力の限界まで走り抜けた。

菜月の手をしっかりと握ったまま。

最後に俺は潤達に届くように、大声で叫んだ。

「潤！！美唯！！逃げろー！！！！」

潤eyes

(視点が潤に変わります)

『ズド

ン！！ズド

ン！！ズド

ン！！』

何発も銃声が聞こえた。

生徒の悲鳴声が聞こえる。  
なぜ、こんなことが起きたのだろうか？

銃声に悲鳴声……。  
まさしく、戦場を思わせた。

「……………」

美唯は黙り込んでいる。  
外の景色を俺達は知らない。  
想像することしか出来ない。

状況を想像するが、とても良い状況には想像できない。

「ッ！！」

微かに聞こえた……。  
侑の声。

『潤！！美唯！！逃げろ！！！！』

「美唯！！学校から出るぞ！！！」

俺は、微かに聞こえた侑の声に従う。  
これは確かに侑の声だ。

「え……？」

美唯が俺に聞き返す。  
美唯には侑の声は聞こえなかったようだ。

「今聞こえたんだ！『潤！！美唯！！逃げるー！！！！』って！！！」

「それってどういう……」

意味は分からない。

だが、逃げないと危ないという状況だというのは確かだろう。

「とにかく此処は危険なんだ！！裏口からでるぞ！！」

此処は危険……。

俺達の日常の舞台ともいつていい場所。

それがこの桜凜高校。

この場所すらこの世界では危険になるのか……？

俺の日常がまたあの日のように、手から零れ落ちる。  
あっけなく、そしてあまりにも儂く。

俺の日常が再び、劇的な変化を告げようとしている。

「危険って！菜月達は！？」

「早く行くぞッ！！！」

俺は美唯の手を握り、全力で走り抜けた。

俺達は無事なのか？

逃げると言ったというのはいやほほ危険だったんだろう……。  
何故、俺は俺達に行かせたんだ……。  
俺は心中で自分を責めた。

侑……菜月……聖夜……。  
どうか……。無事で……。

「潤ッ!!」

美唯が後ろに体重を入れ、俺を引き止める。  
やはり、菜月達が心配なんだろう。  
だが、侑の言葉が本当なら、  
ここは危険と言うことになる。

「今は信じる!!美唯!!」

「でもっ!!」

美唯の瞳は滲んでいた。  
俺だった仲間を見捨てるなんてできない。  
けどこれは違う。見捨てるんじゃない。

見捨てるんじゃないくて、仲間を信じるんだ!  
俺達は絶対に繋がっていられる。  
たとえ決別しても、絶対に繋がってる。  
それが、『仲間』だ。

「信じるッ!!美唯!!侑達は無事だ!!」

俺の眼をまっすぐ美唯に向け、俺の思いの全てをぶつけた。  
信じるしかない……。そうするしかない……。

「潤……」

美唯は俺の眼を見つめる。

美唯は右腕で、雫を拭った。

「わかった……信じる」

そうだ。これが仲間である俺達のことだ。

俺達が無事な証拠は一つもない。

だが、信じる！！仲間を！！

俺は自分に言い聞かせる。

『信じる』と、

何度も。何度も。

呪文のように言い聞かせた。

俺達は裏口に着いた。

そして勢いよく扉を開ける。

「とにかく、学校から離れるぞ！！ここは危険だ！！」

俺は最後に振り返り、桜凛高校を直視する。

この瞬間、俺が送っていた日常の記憶が蘇る。

絶対に帰ってくる……。

いままでと、なにも変わらず……。

また、俺達の日常を送る。

俺はそう強く、魂に刻んだ。

そして、俺は高く拳を桜凜高校へ向ける。

俺達は今、桜凜高校と”決別”しようとしている。

こんなことを、誰が予測していたのだろうか……。

また……また俺の日常は……こんなにも……簡単に……。

だけど、今は心痛している場合じゃない。

俺は滲む涙を堪えた。

「わかった……行くよ潤ッ！」

美唯も桜凜高校を視る。

過去を思い出しているよに懐かしむ表情を浮かべていた。

美唯は唇を噛みしめながら、熱い視線を桜凜高校へ向けた。

だけど、今は一刻の猶予もない。思い出に浸っている場合じゃない。

なんて……なんて残酷な世界なのだろう……。

思い出に浸ることすら、赦されないのか……。

「行くぞ美唯ッ!!」

俺達は走る。

ひたすらに走る。

この世界の中で。  
不確かだらけな、この世界の中で。



## 2話・(2) (後書き)

―場所設定―

桜凜武装高校（おうりんぶそうこうこう）

場所は海を埋め立てし、島のようなところに作られている。

そこは、凶悪な犯罪、テロ、紛争、などに対抗するためにつくられた学校。

そのため、武装を許可し、武力を行使する学校。

桜凜武装高校は、剣術科、現代剣術科、魔法科、現代魔法科、射撃科、戦術科、異能科、総合科、の計8科がある。

それぞれの科にいる人間はG～Sまでランク付けされる

そのランクは一年の何回かのテストによって変わる。

孤児などを集め、育成なども行っている。

### 3話・(1) 仲間と共に(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

3話・(1) 仲間と共に

俺達は走る。

行く先も知らず、何処に着くかも知らず、  
ただ、走っていた。  
浮かんでくる思考を掻き消しながら。

「美唯、大丈夫か……」

俺は走りながら美唯に話しかける。

男の俺でさえもう限界が近い。

息が苦しい……。

酸素が足りない……。

部活をやっておけばと少し後悔した。

部活か……。

部活をしていたら、今の俺はどんな風なんだろう？  
今の俺とは違うってことは分かる。

「このぐらい大丈夫よ！」

美唯はまだピンピンだった。

なんかシヨックだった。

美唯は足も速く、体力もある。

俺も足は速い方。

体力は……まあ、一般よりはある方だろう。  
運動神経もそれなりの自信はある。

だが、美唯の体力は超人的だ。  
俺達は林が広がっている広場のような場所に着いた。  
木々が風で揺れる音が心地よい。  
こんな場所があったのか……。  
知らなかった。

「美唯……ちょっと……休憩しないか……此処まで来れば……敵は  
いないだろう……」

俺は呼吸が上がりながらも美唯に伝えた。

もう、限界に近い。

水分が欲しい。

できれば、ミネラル水……。

ああ、スポーツドリンクも捨てがたいかもな……。

「なに？疲れたの？」

当たり前だろう……。

普通は疲れるだろう？

「ああ……休ませてくれ……」

俺は大地に倒れこんだ。

地面は草に覆われている。

眼を閉じてしまえば、眠ってしまいそうだが  
だけど、寝てはいけない。

美唯は俺の隣に、腰を下ろした。

「風が気持ちいい……」

……。

俺にはそんな風を感じる暇なんてなかった。  
それより、酸素が欲しい。  
スーッと俺は酸素を吸う。

「潤？」

美唯が心配そうに、覗き込んでくる。  
俺の顔を覗き込む美唯は、異常に俺との距離が近い。  
なにか意味でもあるのだろうか？

「頼むから少し黙ってくれ……」

俺の呼吸はまだ荒い。  
心臓も跳ね上がっている。

「そんなに疲れたの？」

お願いだから話しかけないでくれ……。  
少し休ませてくれ……。  
心の底からそう思う。  
その瞬間

『ガサ！！』

後ろから、草を掻き分ける足音がした。  
くそ……！！もう人手がまわったのか！？  
俺は立ち上がるうとするが、足に力が入らなく倒れ込む。

まったく情けない姿だ……。

「美唯！！逃げる！」

俺は美唯に向かって叫ぶ。

もう、俺は歩けないし、走れないし、立てない。

こんな俺を構っていれば、美唯まで殺される。

それだけはどうしても避けたい。

俺の命に代えてでも、美唯を守らないといけない。

「潤ッ！！」

美唯が俺を抱き起こそうとしている。

「何やってんだ！早く逃げろ！！俺を構うな！！」

「なにかっこつけてるのよっ！？」

バカッ！なにしてるんだッ！

そんなことしてたら、お前まで殺されるぞ！

俺のせいで美唯が死ぬ。

そんなのは絶対嫌だ……。

美唯のために死ぬなら、死すら怖くない。

どんな方法でも美唯を守りたい。

だけど、俺は立てない。

俺を抱きかかえながら逃げるだなんて出来ない。

絶対に殺される。

「君達！無事か！？」

後ろから、見知らぬ女の子の音がする。  
もう、此処まで来たのか！？

ん……？

『君達！無事か！？』

と言うことは、

殺意はないのか？

そうだとすれば、願っても無いことだ。

俺は後ろを振り向いた。

そこには、桜凛高校とは違う制服を着た  
少女が立っていた。

「そんなに驚かないでくれるかな？」

少女に話かけられた。

その声は優しい声だった。

俺は少女の顔を見た。

髪は赤で長い。

美しい容姿をしていた。

「この通り、私には攻撃の意思はない。安心してくれ構わない」

少女は両手を上げ、戦闘の意思はないことをアピールする。

だが、油断は出来ない。

「それより、君達は無事か？」

少女は心配そうに、問いかけてくる。  
話は出来そうな人だ。

「それより、あなたは……」

俺は少女に問いかける。

桜凜高校の生徒ではないことは確かだ。

「私かね？桜凜武装高校3年で剣術科の桜夜 沙耶だ。宜しく頼む」

『桜凜武装高校』……。

『剣術科』……。

俺はその言葉を脳内で繰り返す。

そして、あの少女の名前は桜夜沙耶。

「君達の名前を聞かせて貰えないだろうか？」

少女は逆に俺達に問いかけてくる。

本当にこれでいいのだろうか？

今のうちに逃げる方が良策なんじゃないか？

だが、俺は立つのもやっと。

美唯だけでも逃がしたいが、美唯は俺を見捨ててくれない。  
幼馴染の俺達はそれを理解している。

なら、どうすればいい？



俺は少女を見つめる。

少女は俺の返事を待っている。  
表情で、そう窺<sup>うかが</sup>える。

もうこれしかないか……。

俺は少女に賭けることにした。

「俺は中沢 潤。こいつは、成沢 美唯」

簡単に自己紹介を済ます。

自己紹介には、最低事項の名前だけ。

まだ完全に信頼した訳じゃないからだ。

『桜凜武装高校』

頭にいきなり浮かんだ。

桜凜武装高校ということは、この少女も武装をしている。  
剣術科といったら、やはり刀か……。

その証拠に、少女の腰には3本刀が収納されていた。

「中沢くん、成沢くんか……」

自分に言い聞かすように、言い直す。

どうやら、少女以外は人はいないようだ。

「よろしくお願いします！桜夜先輩」

美唯は笑みを浮かべ、手を差し伸べる。

美唯？

この少女が味方とは限らないだぞ！

だが、その手を迷わず少女は握った。

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

二人は握手を交わす。

俺はその光景を見つめた。

どうやら、本当に戦闘する気はないようだ。

もし殺意があったら俺達は今頃、死んでいるだろう。

良い人と出会った。

本当によかった……。

俺は空を見上げた。

夕焼けの空。

青空がいつの間にか茜色に染まっていた。

「立ちながら話すのも疲れる。座って話さないか？」

その瞬間、一気に疲労が身体中を巡る。

俺は崩れるように倒れ込む。

安心して緊張が解けた。

「潤ッ！？大丈夫ッ！？」

美唯が俺の身体を揺らす。

しかも激動。

美唯が揺らす通りに俺の身体も激しく揺れる。  
休ませてくれ……。

「まあ、彼も疲れているのだろう。休ませてあげたまえ」

「あ、はい」

桜夜先輩……。

貴方は何て心優しい人なのだ！

俺はこんな人を疑っていたのか！？

今思うと、自分がバカに思えてきた。

そして、桜夜先輩も腰を下ろす。

「その制服は、桜凜高校かね？」

俺達は桜凜高校。

桜夜先輩は桜凜武装高校。

つまりは、違う学校。

「はい、そうです」

「やはり、そうだったのか……君達も大変だったな……」

桜夜先輩は少し声のトーンを落とす。

頭に不安がよぎってくる。

その不安は桜凜高校での出来事。

あの銃声だ。

頭の中であの銃声の音が蘇<sup>よみがえ</sup>る

「なにがですか？」

俺は桜夜先輩に聞く。

この人なら、この世界のことを何か知っているかもしれない。

そして、あまりにも唐突に”事実”を知ることになる。

「桜凛武装高校の一部の生徒が、桜凛高校の全生徒を”殺害目的”で桜凛高校に派遣された」

「!!!!!!!!!!」

俺と美唯は声が出なかった。

上がるはずの悲鳴は、喉で咳き込む様にして止まった。

その言葉の意味を理解した瞬間、頭がジーンと鈍く痛みだした。身体の疲労など、どこかに吹き飛んだ。

あの桜凛高校での出来事は……。

あの、桜凛高校での銃声は……。

”俺達、桜凛高校の生徒を殺害するため”

全身の血が頭に昇った。

体中に寒気がする。

胸が激しく心悸<sup>しんき</sup>する。

悲しいことを知ってしまったとき、胸に感じるあの痛みだ。  
さっきまで立ち上がれなかった俺の身体が、本能に従われるように  
立ち上がった。

「何でそんなことするんですか

ッ!?!」

俺らしくもないと分かっていながらも、俺の心が熱情する。  
あまりにも、理不尽過ぎる……。  
俺は『桜夜 沙耶』を激昂する。

「潤ッ!! 落ち着いてッ!!」

ならあのとき校舎に行った俺は？ 菜月は？ 聖夜は？  
あの三人は、戦場と言っていたいい場所に行ったのか!?

「何でそんな理不尽なことをするんですか

ッ!?!」

再び、桜夜 沙耶を憤怒する。

俺の精神状態は狂乱状態に陥った。

このままだと、精神が焼き切れる。

そうと分かりながらも、俺の激情は収まらない。

今までの俺の人格は忘却してしまった。

「潤ッ!!」

美唯が立ち上がり、俺を押し倒すようにして優しく抱きしめた。

美唯……。

俺の気持ちが一瞬に落ち着いてくる。  
忘却しかけた『俺』を再び掴み取る。

美唯の胸の中はどうしてこんなに温かくて、優しくて、落ち着くのだろうか？

落ち着け……。深呼吸だ……。

狂乱しては駄目だ……。とにかく落ち着け……。

「すみません……。先輩……。」

先輩に謝罪する。こんな俺を赦してくれるのだろうか？  
だが、先輩はやさしく微笑んでくれた。

「いいさ。これは事実だ。君が怒鳴ってしまうのも無理はない」

俺は落ち着いて深呼吸をする。

そして、先輩に問いかける。

ここで狂乱になってはいけない。

「何で桜凛高校の生徒を、殺さないといけないのですか？」

冷静になり、先輩に問いかける。

俺は”真実”を視る事が出来るのか？

「桜凛武装高校には、科が八科存在する」

桜夜先輩が話し始める。  
俺達は、先輩の話を静聴する。

「剣術科、現代剣術科、魔法科、現代魔法科、射撃科、戦術科、異能科、総合科、がある。それぞれ科により、もちろんやることも変わってくる」

桜凜武装高校のことは俺はよく知らなかった。  
科が八つもあるなんて初耳だ。

「君達も知っていると思うが、ここは通常の世界ではないらしい」  
それなら俺達は知っている。  
だが、逆に言えば、

”これしか知らない”  
とも言える。

「はい、電気も使えないし、人間もいない……」  
俺の知っていることを先輩に伝える。

「その通りだ。私はその辺りは詳しくはないが、どうやら、此処は  
”異世界”らしい」  
”異世界”

此処は異世界なのか？  
俺達は今、異世界にいるのか？

異世界なんてものが本当にあるのか……？  
異世界ってなんだ？

「異世界……？」

美唯は冷静にその言葉を繰り返す。

「ああ、結界のような物だと思えばいい。そこへ私達は堕ちたんだ」  
堕ちた……のか？

俺たちは異世界に……。

「この異世界から脱すべく、戦術科の出した命令。それが、桜凜高校の生徒の全滅だと私は思う」

「なッ……!!」

異世界から脱する方法が本当に俺達の全滅なのか！？  
だから、狙ってくる！？

なら、俺達はッ！？

元の世界に戻れないまま、ここで死ぬ運命なのか！？

いや！本当に”それだけの理由”なのか！？

「桜凜高校の生徒は戦術科の出した命令、指令は遂行しなければならぬ。学校の決まりの一つで桜凜武装高校の司令塔のようなものだからな。それに従わないと、生徒がバラバラになってしまう」

それが、桜凜武装高校の規則。

桜凜高校全生徒の殺害は命令。



つまりは絶対に従わなければならない。

「だけど……そんな事がありえるのか？  
なんで、その命令に従うんだ？」

「なぜそのような指令を出したんですか？」

美唯は心が折れていない。  
冷静と平然を保っている。

「この異世界には、桜凜高校の生徒と桜凜武装高校の生徒しかいない。そんな状況だったら、誰でも相手を全滅させれば元の世界に戻れると思ってしまうだろう？細かいことまでは知らないが、そのようなものだと思う。あくまで、私の考えだがね」

確かに俺でも思ってしまう。

桜凜高校と桜凜武装高校の2校しかないのだから、  
どちらかが全滅すれば、元の世界に戻る。

そう言う考えだろう。  
「だけど、

” どうしてそこまでして戻りたい？ ”

それが俺には理解できなかった。

「なぜ、桜凜高校の生徒と桜凜武装高校の生徒しかいないのですか？」

俺達以外の人間は何処に消えてしまったのだろうか？  
いや、此処は異世界。

つまりは、俺達以外の人間は現実世界で普通通り暮らしているのか？

「これは、魔術などが関係しているだろう。残念ながら私は、魔術などとは無縁の関係だ。役に立てなくてすまない」

『魔術』

魔術なんてものがあるのだろうか？

いや、ありえないことではない。

俺達のこの異世界自体が、常識外れなんだ。

「そんなッ！！先輩がいなかったら、この世界すら知ることが出来ませんでした！」

これは本心だ。

このまま何も知らなかったら、俺達に訪れるのは残酷な未来だろう。

『知らない方が幸せ』という考え方もあるかもしれない。

だが、そんな言葉はこの異世界では力なく消える。

真実を知らない者から消えていく。抗えず、惨劇なまでに。

それが、この世界の現実<sup>リアル</sup>。

「そう言ってもらえると助かる」

どうやらこの異世界には、桜凜高校の生徒と、桜凜武装高校の生徒しかない。

これは、確かなようだ。

『異世界とは、結界のようなもの』

この異世界から脱出する方法は不明。  
だが、桜凜武装高校の戦術科の考えは、

『桜凜高校の生徒の全滅』

これを達すれば、元の世界に戻る。  
そう考えたのだ。

受け止めよう。その事実を。

「なんで先輩は私達を倒さないんですか？」

美唯が恐ろしい質問を先輩に問う。  
こんな質問が出来るまで、俺達は先輩のことを信頼している。

『戦術科の出した命令、指令は遂行しなければならない』

そう先輩も言っていた。

なら、桜凜武装高校の生徒である先輩は絶対に従わないといけない。

「私はそんな狂気な命令は従わない」

自分の志ともいうべきなのだろうか？  
霧も曇りも無くそういった。

「……………え？」

狂気な命令。

それは、桜凜高校の生徒の全滅。  
確かに狂気だ。  
あまりにも理不尽すぎる。

「例え至上命令でも、命には代えられんよ」

先輩は微笑みながらそう言う。

この人を信じよう。

俺は心の底から思った。

### 3話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

3話・(2)

『ぐう』

不意に音が響いた。

その音が美唯から聞こえてきた

「…………ツ！！！」

美唯が頬を赤らめて、お腹を抑える。

お腹が鳴った音が…………。

ビックリした…………。

「ん…………？」

桜夜先輩は周囲をキョロキョロと見渡す。

先輩はお腹が鳴った音だとは気付いていない様子だ。

だが、音には気付いたようだ。

俺は空を見た。

もうすっかり夜だ。

「桜夜先輩、もう夜ですね」

いつもなら家でゆつくと過ごしてるな…………。

テレビなどを見ながら、何かをしている時間帯だろう。

「そうだな……」

先輩も暗くなつた空を見上げる。

今は何時なんだろう？

時計も止まっているから、それも分からない。

「……ッ！！！」

美唯はまだ、恥ずかしそうに俺達を見ている。

確かに動いてばかりだから、お腹がすいた。

「お腹すきましたね」

普段なら、もう食べ終わった時間かな？

俺は一人暮らしだから、飯は破滅的だ。

考えない方がいい。

「そうか？なら在り合わせの物を食べるといい」

……何か食べる……。

！！！！！！！！

どうやって食べるんだ？

電力がないのに！

それとも何か買って……。

って！買えないのか！？

人がいないから!?

「どうしたのかね?」

焦りを隠し切れななに俺に、先輩が声をかける。

「食べ物がないんです……」

走り回っていたせいか、かなりお腹がすいた。  
水も飲んでいない。

そういつた瞬間、先輩は何かを取り出した。  
そして、取った物を月明かりに当て、内容を確認している。

「なら、このカップラーメンと言うものを食べるといい」

桜夜先輩から、カップラーメンを渡された。  
なんてありがたい……。

真実を教えてもらって、食料まで恵んでくれて……。

「あ!ありがとうございます!」

しかし、カップ麺しか来なかった。  
必要なものが来なかった。

「……………」

俺は黙して先輩をみつめる。



「ん？どうかしたかね？あまり好みではないのか？」

いや、カップ麺だけ貰ってもな……。

このまま食べるのか？

スナック感覚で、パリパリっと……。

お年寄りには勧められない食べ物だな。

先輩には申し訳ないけど言ってみるか……。

「先輩……大変申し訳ないのですが……水の方は……」

なぜか、言語がおかしくなる。

「おっと、これは失敬。」

先輩がペットボトルを渡す。

俺はそれを受け取った。

「……………」

「ん？どうかしたかね？あまり好みではないのか？私はその水が好きなのだが……」

先輩はこの水が好きなのか……。

俺は月明かりにペットボトルを照らす。

「月明かりの天然水」

それが商品名だった。

まさしくこの状況に相応しい天然水！  
って！そんなのはいいんだよ！

「桜夜先輩……カップ麺に必要なものってわかりますか？」

失礼だとわかってるが、質問する。

なんか、先輩を馬鹿にしているみたいだな……。

「勇気と根性だ」

自信満々な態度で言う。

俺は言葉が見つからない。

「……………」

本当にわからないのか……………？

先輩は何歳なんだ……………？

「100 以上のお湯はありませんでしょうか……………？」

俺はこの言葉で気付く。

そうだ……………。

どうやって水を沸騰させるんだ……………。

火を付ける手段がないことに気付いた。

俺達の生活は豊か過ぎた……………。

ライフラインが断たれた今、俺達が豊かな生活を送っていたことに

気が付いた。

「お湯？お湯など持っていないが……まさか飲むのか!？」

先輩は眼を大きくし、驚愕している。

その桜夜先輩の表情に俺も同じ表情で返す。

「飲みませんよ!そんな100 以上のお湯!！」

この人……。

本当にわからないのか……。

カップ麺に必要なものを……。

「カップ麺に必要なんですよ!！」

何か、常識すぎて言うのも抵抗があった。

だが、もうこのカップ麺は食べられない。

水はあるが、沸騰させる術がない。

「そうだったのか?なら最初からいいたまえ」

先輩は笑いながら立ち、林の方に歩いていく。

なにをする気だろうか?

「桜夜先輩!？」

「心配は無用だ。すぐ戻る」

先輩は林に姿を消した。

本当に帰ってくるのだろうか?

いろんな意味で心配する。

俺は美唯の方を視てみる。

「……………ッ！！！」

まだ、恥ずかしがってんのかよッ！？

体内時計で10分後……………。

「今帰ったぞ」

桜夜先輩が腕いっぱい物を持っている。

もう、暗いから何が何だかわからない。

そこまで暗くなっている。

「なに持ってきたんですか？」

もう眼は闇で意味をなくしている。

「ああ、石と木板と木の枝だ」

よく先輩はこの暗い中見つけてきたな……………。

先輩は持ってきたものを地面に置く。

そして、石を綺麗に円状に並べ、

その円の中心に枝を大量に置く。

その光景で思わせるのが、たき火だった。

「たき火ですか？」

「そつだ。もう暗いからな」

たき火。良い案だ。

これなら明かりにもなる

「お　　い！美唯！お前も手伝え

！！」

俺は美唯に呼びかける。

美唯がどこにいるか、暗くて分からない。

だけど、美唯の居そうな所に向かって声を出す。

すると俺の声に反応して、美唯がそこから駆け寄ってくる。

「ええッ！たき火ッ！？」

なぜか美唯は嬉しそつだった。

たき火に思い出があるのだろうか？

過去に何があつたのだろうか？

いや、前世の問題だろうか？

どつちにしろ、あまり想像したくはないが……。

「よし！下準備は完了だ。あとは……」

桜夜先輩は板を前にだす。

先輩の手には、棒上の枝がある。

先輩は手を開いて、左右の手の平に棒を挟む。  
その棒の先を、板の小さな穴に入れる。

まさか……。

先輩は左右の手の平をこすり合わせる。  
そうすると、勢い良く棒が回転する。

「……火おこしですか……？」

その行動で思わせるのは、火おこしだった。

「ああ、そうだ。他に何に見える？」

先輩は左右の手の平をこすり合わせる。

だが、なかなか火が出ない。

その前に、煙が出ない。

案外、火おこしって難しいってテレビで見た事ある。

「先輩！そうじゃなくて、もっとこうですよ！」

美唯は妙な動きで先輩にジェスチャーし、先輩に指摘する。  
美唯だってそんなこと知らんだろ？

「こうか？」

先輩は言われた通りにする。

言われた通りにする先輩もどうかと思った。

待望の黒い煙がでた。

おお！すごい！結構難易度の高い火おこしを成し遂げたのか！？

だが、次の瞬間、

黒い煙が自らの意思があるように、先輩の顔に次々と直撃。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

桜夜先輩は咳をし、棒を離してしまった。

惜しいところまでいったのにな……。

でも、火おこして煙が出てからが本当の勝負なんだよな。

「ああ……」

美唯は残念そうな声と表情を浮かべる。

美唯はお腹が減っていたようだが、大丈夫なのだろうか？

「ケホッ！ケホッ！……すまない……こういうのは慣れてないんだ  
……」

慣れてる人っているのか……？

どれだけ質素に育てているのだろうか？

「すまない……。もう一回チャンスをくれ……」

断る理由もないので、俺達は頷き、

桜夜先輩が再び火おこしを続行する

ようやく、煙が出始めた。火の粉も出始めている。

その煙が再び自らの意思があるように先輩の顔に四方八方に直撃……

俺は今、すごい神秘的な光景を眼にしている。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

だが、先輩は棒を離さずに持っている。

煙にうたれながらも、もくもくと棒を回転させる。

『不屈な心』その言葉がよく似合う姿だった。

自分が不慣れな煙に、真っ向に対峙している。

その姿は、俺達に勇気をくれた。

「ッ！？」

桜夜先輩は短い悲鳴をあげ、手から棒が抜け落ちた。



そして、無残にも煙は消えていった。

「せ、先輩!？」

美唯は先輩に心配そうに声は上げる。  
桜夜先輩の腕は小刻みに震えていた。

「ああああ……腕に力が入らない……」

先輩は自分の手を広げ、見つめている。  
それほどまで頑張ったてことだ。

「先輩!代わってください!！」

美唯は棒を拾い、火おこしを始める。

「ああ……すまない……」

先輩の手はブルブルと震えている。  
手にも力が入らない様子だ。

美唯の方を見る。

一心不乱に炎を起こすために対峙する美唯。

遅しいぞっ!美唯!

「うりゃああああああ　　ッ!!!」

かなり一生懸命だ。

だが、その一生懸命さが惨劇を呼ぶこともある。

それが、この世界なのだから。  
このことは、例え異世界であることが覆らない。

「うぎやあああああ」

「ッ!？」

美唯は手の平から棒を離す。

そして、痛そうに腕を押さえてる。

「痛い……。つつた……」

腕がつつたようだ。

だから力任せだと……。

若さ故の過ちというものが……。

「中沢くんッ！君が最後の希望だ！」

そう言うと桜夜先輩は俺に棒を渡す。

致し方ない。

俺だけ何もしないというのは嫌だ。

俺の力を存分に魅せてあげよう……。

どこからでもなく、自信が湧き出てくる。

「わかりました……」

俺は先輩から棒を受け取る。

これからは、難局が続くだろう。

俺は二人の凄惨を視て既に理解していた。

俺は棒の先を板の穴に入れる。  
だが、暗くて穴もわからず一苦労。

そしてセットアップ完了。

「潤！私達の敵は取<sup>かたき</sup>つてよ！」

「別にアンタ等、死んでないでしょうッ！？」

俺は火おこしを始める。

俺なら出来ると信じて……。

何なんだろう？この展開は……。

やってみないとわからないだろう。

予想を遥かに超えて、難易度が高い。

しかも、今日は風が強い。

火がつき難い環境が出来上がってる。

天運は俺の味方ではないか……。

だが、老師の長年の修行を耐えてきた、俺はなめるな  
!!!!!!!!!!

ッ

「中沢くん！私も手伝おう！」

俺の手の上に先輩が手置く。  
なんか、ドキツとすることを平気でする先輩。  
その手は温かい手だった。

「桜夜先輩！？腕の方は大丈夫ですか！？」

先輩は腕に力が入らない状況だった。

「この場に及んでそんな事は言ってられんよ」

二人の力が合わさって、棒の回転は増していく。  
いつ火がでもおかしくなくらいの勢い。

「先輩！加勢します！」

美唯は先輩の手の上に、手を置く。

「よし！このまま一気に行くぞ！」

俺達の棒は加速する。

これが、三人分の力なのか……。

そして、待望の黒い煙が出始める。  
此処からが本番だ。

だが、その煙は神の悪戯か風に流され桜夜先輩へ……。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

桜夜先輩は咳をして、手を離してしまった。

安心してください……。桜夜先輩……。  
貴方の意思是……。俺が継ぎます　！！  
だから、安心して……。安らかに逝って下さい。

「桜夜先輩ッ！！」

まるで、世界大戦時に今まで行動を共にしていた、仲間の兵士しかも一番の戦友が倒れたときを思わせるように、美唯は心の底から先輩の名を叫んだ。

「私はこれまでだ……。ケホッ！ケホッ！ケホッ！……。後は任せたぞ  
……」

桜夜先輩が名誉の戦死。

先輩は安らかに旅立った。

なんだか本当に世界大戦の状況を思わせる……。

しかし、なぜ煙は見事に先輩に向かって行くんだろう？

そういう体質なのかな……。  
不幸体質？ちよつと違うか……。

「先輩！任せてください！絶対に火を……」

ここで美唯の言葉は終わった。

次の犠牲者は美唯だった。

「ぎゃあああああ  
！」

ッ！つつたああああ

！

美唯は手を棒から離す。再びつつてしまったようだ……。

よっし！この状況をテレビ風にナレーターを付けてみよう！

『成沢 美唯』

彼女のあまりにも短すぎた畢生。

そして、叶わなかった想いと約束。

だが、その想いも今となつては夢のまた夢。

その彼女が断末魔にいった最期の言葉。

それは……。

『ぎゃあああああ

ッ！つつたああああ

！

！』

俺は素晴らしいナレーターを入れた。

そのナレーターのセンスに自分で鳥肌が立つ。

本当に戦争のドラマみたいだ！

く後、残されたのは、俺、ただ一人く

なんだか、本当に燃えて来る。

映画化だって夢じゃないんじゃないのか？

「中沢くん！もう一息だ！！」

戦死したはずの先輩の声が聞こえる。  
先輩って死んだんだよな……。

まあ、いいや。ゾンビってことで。

俺は火おこしに意識を集中させる。

座輿もこれまで……。

そろそろ本気を出そうか！

「うおおおおりゃゃゃゃああああー！ー！ー！ー！ー！」

俺は最後の力を振り絞り、全力で、左右をこすり合わせる。

これにナレーターを付けてみよう！

最後の希望の一人。『中沢 潤』

彼は日本の最終兵器、『わさび』を手に此処まで戦ってきた。

わさび……。それは食用としては一般的だろう。あの緑色のを想像するといいだろう。

だが、使い方を変えれば、恐ろしい兵器へと存在意味を変える。

わさび……。それは外人には不慣れな物。

そのわさびの本当の使い方を知っているのは日本人だけ。

彼らはわさびを手に戦う俺を軽蔑するだろう。

そして、嘲笑うように、こう言うだろう。

『ヘエ！ジャパニーズ！ソナモノデワレワレヲ、タオスツモリデスカ！？』

わさびの本当の意味を知らない外人はわさびの脅威を知らない。

わさびの真の価値を知ってしまえば、わさびへの価値観は一変する。

『ナンテコツタ！コレガジャパールのサイシュウヘイキ！ソコクガ  
アブナイ！』

そう……。外人は祖国すら危険に晒される恐怖に押し潰される。  
わさびは一国家を屠るほどの脅威なのだ……。！！  
そのわさびの使い道は……！

ん……？

なんだか話が脱線しているな……。

なんで俺が、わさびを手に戦わないといけないんだ？

俺は火おこしをしていたということを出し、更に勢いを増すッ！

「なに……？まだこんなに力が残っていたとは！」

桜夜先輩が感嘆している。

そして、火花が散はしめた。

この瞬間を俺達は心待ちにしていた。

そして、その火花は火へと姿を変えた  
！

「美唯！枝もつてこい！」

この好機を逃すわけにはいかない。

死んだはずの美唯をチートで復活させ、パシらせる。

「わかった！」

美唯は石を円状に並べた中心に置いてある、枝を持ってくる。



「持ってきたよ」

美唯が枝を数本持つてくる。

その枝を上下にフリフリと揺らす。

必死にしている俺はその動作に少しイラッと来た。

「よし！火に近づけるッ！」

「どう？この枝曲がって見えるでしょ？」

「どうでもいい！それに見えん！」

美唯は、俺の育てた火の近くに枝を近づける。

そして、枝に引火

これで、火おこしは無事に遂行した。

「よし！石の所に戻せ！」

「そんなこと知ってるよッ！」

美唯は先輩が大分前に作っておいた  
たき火セットの中心に投げる。

そして、次から次へ別の枝に引火。

「やった……」

俺は大地に倒れこむ。

もう身体は限界だ……。

「おお！やったのか！？」

「はい、やりましたよ！桜夜先輩！」

二人はお互いの手を叩き合い、奇妙なぐらい喜んでい

なんだろう？

このやりきった感覚は……。

達成感に満ちている。

日本国に……栄光あれ……！

いよいよ、たき火は本格的なものになった。  
そういえば、ご飯はまだだったな……。

「桜夜先輩、お腹すきませんか？」

俺は、先輩に話しかける。

そういえば、カップ麺を貰ったんだっけ？

おお！ありがたい！忘れてた。

「そうか？ならそのカップラーメンと言う物を食べるといい」

そうか？って……。

先輩はお腹減ってないのか？

「先輩はお腹、減らないんですか？」

「無論、減っている」

先輩は目を閉じそう言う。

しかも、妙な笑みを浮かべていて、額には冷汗を掻いていた。相当お腹が減ってるのだらう。

「先輩、これ返します」

俺は先輩にカップ麺を返す。

「……私を哀れむつもりか……？」

「いえ……そんなつもりは……」

俺はこの状況を考える。

カップ麺はどっちにしろ食えないんじゃないだろうか？

水はあるが、沸騰に耐えられる入れ物がない。

ペットボトルでは無理だらう。

「どっちにしろ、食べれないんです」

「ん？ そうなのか？」

まあ、食えないことはないけど……。生でなら……。

『ブンッ！』



「食べ物がないのなら、空腹を紛わすためにも寝るしかない」

「え……？」

美唯の方を見る。

確かに眠っている。

と言うより、気絶の方が正しいのだろうか？

「私も寝ることにしよう……」

桜夜先輩も倒れこむ。

そして、眼を閉じる。

思わず見つめてしまうほどの寝顔だった。

俺は空を見上げた。

そうだった……。

此処は異世界だったんだ。

そのことを今まで忘れてしまっていた。

自分でも不思議に思う。

19月1日

今日は本当に色々なことがあった。

俺は今日を振り返る。

未だに、自分の身に起こった出来事のような感じはしない。

夢を見ているようだ。

だが、今は現実。

この異世界と向き合い、早く元の世界に戻ろう。

この異世界の脱出方法を探そう。

仲間と共に

### 3話・(2) (後書き)

#### ―登場人物―

桜夜 沙耶(さくらよ さや)：(女)

桜凜武装高校剣術科Sランクの3年。称号は『至高の桜月導』(しこうのおうつきどう)

沙耶は武家三大名門の一家、桜夜家に生まれ、小さい頃から剣術の修行を受けていた。

桜夜家の妖刀の一つ『神刀・神切』に導かれた先で、休憩中の潤と美唯と偶然出会った。

沙耶は潤達と協力し、この異世界の原因、脱出方法を探す。  
潤達のメンバー内でリーダー格であり、皆をまとめる役柄を担っている。

常に仲間の前に立って戦う姿勢は、桜夜家の剣士としても、誇り高く生きることを志にしているため。

剣術一筋の為、近年の若者の傾向に疎いという短所を持つ。その為、カップ麺の作り方も分からない。

あと何故か、黒煙が高確率で沙耶に向かうという不幸体質？がある。剣を握って、戦いに敗れたことは一度もない。

『くしたまえ』が口癖。

身長：168cm

体重：50?

血液型：AB

B・W・H：86・55・85

髪色：紅色(赤系)、ロング

誕生日：8月26日

年齢：18



4話・(1) 確信(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

4話 - (1) 確信

19月2日

俺達は異世界でその日を迎えた。  
原因不明の異世界。

いつ死んでもおかしくない。

人間が殺し合っている異世界に今、俺達はいる。

昨日のことが夢であると信じたい。

此処が現実世界であると信じたい。

が、此処は異世界。

俺達は一晩をこの林が広がっている広場で過ごした。

「う……ん……」

俺は眼を開けた。

いつの間にか寝てしまっていた。

俺は周りを見渡した。

そこには美唯が死んだように寝ている。

寝てるというか、気絶の方が近いかもしれない。

起こした方がいいかもな……。

「美唯！朝だぞ！」

美唯の肩を揺らす。

「……………」

だが美唯は無反応。

本当に死んでいるんじゃないか!?

焦りのあまり、俺は強く肩を揺らしてみる。

「美唯ッ!! 起きろッ!!」

俺は大音響で叫ぶ。

「……………うにゅ……………」

ようやく反応があつた。

良かった。生きてた。

「起きろッ!!」

美唯は二度寝をよくする。

だから、身体が起き上がるまで、起こさなければならい。

「うう……………」

美唯が声を漏らしながら起きる。

なんだか、その表情からするに心痛しているようだった。

「おはよおおおおおおお……………」

かなり眠そうだ。

『お』がかすれていて、かなり長くのばしている。  
しかも未だに伸ばしている。

まあ、仕方ないな。こんな世界なんだから。

「おはよう!!」

俺は爽やかに挨拶をする。

美唯はまだ覚醒していない。

後は桜夜先輩か……。

あの人は起きているのだろうか？

案外、朝に弱い性質かもしれない。

ぞくにいう、低血圧だ。

俺は朝は滅法強い。

前世は何だったんだらうか？

俺は周りを見渡す。

あ、いた。

どうやら、起きているようだ

何をしているのだろうか？

気になった俺は、先輩の方へ駆け寄る。

そして先輩は振り返って……。

「ハアツ!!!」

先輩の気迫に満ちた声が俺の耳へ届く。

しかも、その声と共に俺の目の前に光り輝く物が接近してくる

!

いや、これは刀だ　　！

「うわあああああああッ!?!」

いきなり刀を首目掛けて切りつけてきた。  
この瞬間、俺の人生の最期を悟った……。

やっぱり、昨日の先輩は全て演技だったのか……。  
俺達はまんまと騙されていたのか……。

全ては……俺達を……。愉しんで殺すため……。

まさか最期は首を切断されるとはな……。  
想像もしていなかった、クライマックスだ……。

美唯……逃げろ……。

俺は首を切断されるから声が出ないはず。つまり叫ぶことは出来ない。  
い。

こんな俺を赦してくれ……美唯……。

が、刀は皮膚に触れず止まった。

「何だ君か？驚かさないでくれ」

先輩が刀を首もとから離す。

一歩間違ええれば、首は切断されていた所だった。  
先輩の判断力は恐ろしいものだ。

「いや……俺の方が驚きましたけど……」

お陰で目が覚めた。

覚めたつてもんじゃない。

朝の目覚めとしては強烈過ぎる……。

「そうなのか？君はこういうのには慣れていないのかな？」

こういうの……。

つまりは、他人に刃先を向けられること。

俺は今ので初体験だ。

「あたりまえですよ！」

俺は普通の高校生。

刃物を向けられるような日常は送ってない。

それが普通の学生。

の、はず……。

「桜夜先輩は慣れているんですか？」

恐ろしい質問だが、聞いてみる。

「ああ、毎日向けられているからな」

……。

うわああ~~~~！

何て危ない高校なんだよ……。

そんな高校に俺達は狙われているのか!？

これは話を変えよう。

「ところで先輩は何をしていたんですか？」

駆け寄るなら、刀を向けられたから、  
何をしていたのか分からない。

「ああ、鍛錬だ」

……。

「ん？どうかしたかね？」

つい黙ってしまった。

鍛錬……？

「何で鍛錬なんか……」

考えてみれば、先輩は桜凛武装高校だったな……。  
忘れてた……。

「日課だからだ」

日課……。

先輩は毎日鍛錬をしているのか……。  
偉いな……。

「桜夜先輩……！おはようございます！」

美唯が小走りで駆け寄ってくる。

どうやら覚醒したようだ。

俺の方が遥かに覚醒してるけど。

「ああ、あはよう」

全員起きた。

全員って言っても3人が……。

で、これからが問題だ。

俺達はこれからどうすればいいんだ？

「これからどうするんですか？桜夜先輩」

俺には検討が付かない。

なにからすればいいのかわからない。

「そうだな……。まあ、座りたまえ」

先輩が腰を下ろした。

それに続き、俺たちも座った。

これからは重大な話し合いだ。

「これからどうするかだが……」

先輩が話し始めた。

先輩は既に、これからの行動を決めていたのだろうか？

「共にこの異世界から脱出しないか？」



共に脱出……！？

ってことは一緒に行動してくれるのか！？

俺の胸中で光が渦巻く。

「え！良いんですか！？」

夢のような言葉。

俺も早くこんな異世界からは出たい。

早くいつもの日常に戻りたい。

「ああ、もちろんだ」

先輩は笑顔を俺達に返した。

嘘なんかじゃない……。

俺達を騙してなんてもない……。

先輩に対する信頼は、昨日の出来事で既に得ていた。

さっきので、ちょっと減ったけど……。

「でも、どうやって脱出するんですか？」

美唯が疑問を投げ出す。

それが一番の疑問。

俺は一般人だから、検討がつかない。

例えば、何かの条件を満たすとか……。

それぐらいしか思いつかない。

「それを共に探す」

共に探す……。

この人がいれば脱出できるんじゃないか……？

そう思えてしまう。

それほど、先輩の存在は大きい。

「では、まずは可能性のある所からだな」

先輩が立ち上がる。

俺も足手まといにはなりたくない。

頑張らないとな。

「はい！行きましょう」

美唯は威勢のいい声を上げる。

「よーしッ！！」

美唯も立ち上がった。

俺達は先輩の後に続く。

こうして、この異世界の脱出方法の探索が始まった。

「どこに行くんですか？」

俺達は歩いている。

何処に行くかは知らない。

今いるところは、林の中。

「まず、この異世界のことを知らなくてはならない」

確かにそうだ。

何も知らなければ、何も出来ない。

……。

俺達は市街地に出た。

周りを見渡すが、誰もいない。

どうやら、桜凜武装生徒の生徒もいないようだ。

「とはいえ、まずはこの空腹をどうにかしなければな」

先輩は表情ではわからないが、相当お腹が減っているのだろう。

「そうですね！お腹が減ってはなにも出来ませんからね！？」

美唯はとても嬉しそうだ。

お腹が減っているのだろう。

俺も減ってはいるが、耐えられないほどではない。

と、先輩の足が止まった。

「デパート……？」

着いたのはデパートだった。

駅前にある巨大なデパートだ。

ということは、此処は駅前……。

「……………」

桜夜先輩は正面入り口を見つめる。

「先客か……………」

「え……………」

俺も正面入り口を見つめる。

入り口のガラスは割れていた。

誰かが侵入のために割ったのだろうか？

「行くぞ」

先輩がその割れたガラスから入っていく。

「先輩！？大丈夫なんですか！？」

中には先客がいるかもしれない。

鉢合わせたら、戦闘は避けられない可能性もある。

「何、弱気であるの！？行くよ潤ッ！！」

美唯も入っていく。

空腹が恐怖を勝ったのだろう。

なら、俺も行くしかない。

「俺も行くか……………」

俺達も先輩に続き、キャンパスへ入っていった。

## 4話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

#### 4話・(2)

中には誰もいない。

だが、此処は広い。

どこかに潜んでいるかもしれない。

「本当に誰もいなね…潤…」

「そうだな」

デパートの中に誰もいない。

こんなのは初めてみる光景だ。

「さあ、申し訳ないが食料を頂くとしよう」

申し訳ない。

現代社会なら万引きの罪に当たる。

が、此処は異世界で警察なんていない。

そして食料品売り場へ直行し、俺達は弁当コーナーの前へ。

「随分と減っているな……」

弁当コーナーの弁当の数は半分以下になっていた。

誰かが食べていったのだろう。

先客がいたようだからその人かな？

「申し訳ない。頂きます」

桜夜先輩は弁当を3個取り、俺達に一個づつ渡す。

「大切に食べたまえ」

「ありがとうございますッ！」

美唯は豪く嬉しそうだ。

表情もパアッと明るくなった。

「ありがとうございます」

受け取った俺は、自然と感謝の言葉が出た。

「感謝はその弁当を作った人に言ってくれ」

作った人に感謝。

俺達はそれ位しか出来ない。

直接言いたいのが不可能な話だ。

「では場所を変えるか……」

俺達は弁当を手に持ち休憩場へ。



「では、食べるとしよう」

休憩場へ着いた。

そこには木で出来た巨大な机も置いてあった。弁当を食べるにはもってこいの場所だ。

「私達と考えが同じ人間がいたようだな……」

机には綺麗に並べてある空の弁当。

誰かが食べたのだろう。

ちゃんと綺麗に並べてあるのが可愛い。

俺達もそのベンチに座った。

「食べていった人がいたんですね」

俺達と同じことを考えていた人がいたのか……。

その人達は今は何処にいるんだろう？

「そうだな。誰でも空腹には勝てんよ」

その人たちが、正面入り口のガラスを割ったのだろうか？

つまりは、そのガラスを割れるほどの武器がある。ということにも繋がる。

「ではッ！頂きますッ！！」

美唯は誰よりも早く食べ始める。

やっぱり、相当お腹が空いていたんだろう。

「頂きます」

それに続けて桜夜先輩も食べる。  
俺も食べよっかな……。

「頂きます」

食べ物をお口にするのは、昨日の昼ぶりかな……。あの時の俺はまさかこんな風になるだなんて、思いもしなかっただろっな……。

俺は飯を食べながら、俺達の行動について振り返る。

俺達は何処に進んでいるのだろうか？

前に進めているのだろうか？

悪い方には進んでいないのだろうか？

無限に広がる選択肢の中で、俺はこの選択肢に賭けた。

それが正解か間違いかはわからない。

だが、迷ってはいけない。

今は信じよう。

共にこの異世界から脱出するために。

俺達は必要な物をいただき、デパートに別れを告げた。

「先輩、これからどうするんですか？」

今俺達は、商店街を歩いている。  
デパートから持ってきた荷物は皆で協力して持つ。

「そつだな……まずは……」

桜夜先輩がそう言いかけた時……。  
再びこの音が無情に世界に響き渡った。

『ズド　　ンッ!!--!』

「　　ッ!?!」

遠くから銃声が聞こえた。

また聞こえてしまった。

やはり、本当に戦闘が起こっているんだ……。  
身を持って実感する。

「キヤッ!!--!」

美唯は短い悲鳴を上げ、耳を押さえる。

俺も最悪だと思つが、そんなに動揺しない。

徐々にこの異世界のことを受け入れているかもしれない。

「……また銃声か」

俺は銃声のした方向に向かって咳く。

この銃声も人を殺す音なのだろうか？

桜凛高校の生徒が危ない……。

「私は銃声がした方へ向かうが、君達はどつする？」

銃声のした方へ行く……桜夜先輩は自ら戦場へ行くのか！？

桜夜先輩について行ったら、戦場に行くと言っことになる。

だが、どっちにしる危険だ。

此処にいれば安全と言っ保障はない。

なら……！

「桜夜先輩！俺もいきます！」

渴望するかのように、はつきりとそういった。

「潤ッ！？」

その反面、美唯は驚きの声を上げる。

確かに、これは究極の選択かもしれない。

俺達を残して、先輩が行ってしまったら俺達は抵抗する力がない。

敵に会えば殺される。

だけど、先輩と共に行動すれば可能性は減る。

俺はそれに賭ける。

「安心したまえ！君達は私が守る！！」

先輩のその一言がとても心強かった。



銃声はそこからする。

「中沢くん！」

不意に振り返り、俺の名を呼ぶ先輩、

「あ、はい！」

いつになく、先輩の顔は真剣なものだった。  
剣士という言葉が相応しい。

これが、戦うときの先輩の顔か……。

先輩は鞘から刀を抜く。

「武器を持たずにこの場に来たなんて、死にに来たようなものだ」

先輩は刀を俺に差し出す。

その刀の刃に、俺の顔が薄っすらと浮かぶ。

「これは……？」

それは刀。人を殺す道具。

そうにしか俺には見えない。

だから、受け取れなかった。

受け取るのを拒んだ。

俺は人殺しにはなりたくない。

「これで成沢くんを守れ」

「!?」

守るための剣。美唯を守る。

それが俺の役目。俺が成すべきこと。

俺の使命。

「……わかりました」

俺はその刀を受け取った。

ずっしりと重たい。

真剣つてのはこんなにも重いのか……。

「幸運あれ！」

桜夜先輩は戦場へ向かって走っていった。

桜夜先輩……。どうか無事で……。

「潤……」

美唯が俺にしがみつく。

俺は美唯を守る。

そう決心したんだ。

俺の目の前で戦闘が行われている。

幸いなことに誰も死んでいない。

この場にいるのは、桜凜高校の生徒と桜凜武装高校の生徒。

やはり、殺害が目的なのか……？

駅前なことだけあり、建物が多い。  
俺と美唯は建物の角に隠れながら、戦場を見守る。

桜夜先輩がはつきりと見えた。

先輩はその戦場の真ん中に行く。

「君達ッ！！そんな狂気なことは止めるッ！！！！」

先輩は桜凜武装高校の生徒に向かって叫ぶ。

此处からでも、声は聞こえてくる。

それぐらいに、戦場とは目と鼻の先。

「なッ！貴方は剣術科の……」

桜凜武装高校の女子生徒が先輩を見た。

桜凜武装高校は科によって制服も違う。

だから、何科を見分けるのは容易で、この生徒は先輩とは違う制服だ。

つまりは違う科。

「Sランクの桜夜沙耶！！」

え、Sランク！？

それって一番上なんじゃないのか！？

桜凜武装高校のことは全然知らないが、Sと聞くと一般的に高いと言っ印象がある。



「貴方は校則の綱紀肅正を破るのですかッ!？」

校則……。

それは恐らく、戦術科の出した命令には従う。ということだろう。

「そんな狂気な命令には従わんよ!!！」

先輩は鞘から刀を出す。

その姿は、気迫に満ちていた。

「立花道雪!千鳥!!！」

あれが先輩の刀……。

相手の数は5人。

この5人はメンバーだろう。

俺たちで言々と仲間。

「桜夜沙耶!覚悟!!！」

女子生徒の武器は長刀。

それを片手で握りながら、接近してくる。

「いいだろう。お相手いたす!!！」

『カキ      ンッ!!!!』

刀同士がぶつかり合う金属音が響き渡る  
激しい火花も散っている。

これが、戦場。  
人同士の殺し合い。

まさか俺が戦闘を肉眼で視ることになるうとは……。

「ハアアアア                    ツ！！！」

淀みなく回転した少女は、流れるように後ろから回し右袈裟に斬り付ける！

その動きは、美しく滑らかで、あれに直撃すれば一刀両断だろう。  
無駄な動きなどは感じない。

「カキ                    ンッ！！！！」

だが、先輩は千鳥で防御。

そして、地面を蹴ると後ろに後退し、間合いを取った。

長い沈黙が訪れる。

少しでも油断をすれば負けるだろう。  
それがこの睨み合い。

「ハアアアア                    ツ！！！」

先に仕掛けたのは女子生徒。

初動で間合いを一気に詰め込む！

「カキ                    ンッ！！！！！！」

だが桜夜先輩も一分の隙もない防御で、上袈裟斬りにする長刀をす



「うわぁっ

!!!!」

女子生徒が派手に吹き飛ばされていく。

その身体は何度もバウンドし、ようやく停止した、

「淋那ッ!!」

違う女子生徒が吹き飛ばされた生徒の所まで走る。

「淋那ッ!今は退こう!!」

「うづうづ……」

あれほど強い蹴りを受けたのにすぐに立ち上がる。

やっぱり俺達とは違う。

「淋那ッ!!!」

何度も彼女の名前を呼ぶ。

視ていて、恍惚とも思った。

「わかった。今は退こう……」

淋那と呼ばれる人。

このグループのリーダーだろう。

「皆ッ!!今は退くぞッ!!」

そして、5人は退いていく。

最後に淋那が桜夜先輩を鋭い眼光で強く睨みつけた。  
その眼には復讐の色が滲み出ていた。

「……………」

桜夜先輩は刀をしまう。

この場には桜凛高校の生徒もいたようだが、先輩が戦っている間に  
上手く逃げたようだ。

「君達、無事かね…………？」

先輩は俺達にゆっくりと駆け寄る。

「はい、お陰で無事です」

俺も美唯も無事。

幸いに俺はターゲットにされなかった。  
ターゲットにされれば、ひとたまりもないだろう。

「先輩……………これ返します」

俺は刀を先輩に返す。

今度は刀の刃に先輩の顔が薄っすらと浮かんだ。

「ああ、こんなのを持たせて済まなかった」

先輩が刀を受け取り、鞘に戻す。

「先輩って強いですね……………」

美唯がボソリとつぶやく。

確かに強い。見ていてとても美しくとても綺麗だった。

「桜夜先輩ってSランク何ですか？」

さっきの会話からするにSランク。

最大が何ランクかわからないが、凄いと思う。

「確かに、私はSランクだ」

やはりそうか……。

あれだけ強かったからな……。

素人の俺でも凄いとわかる強さだった。

「最高のランクは何ですか？」

「Sだ」

一番上！？

いや、だが当然だろう。

さっきの戦闘を見れば、そう思ってしまう。

「一番上じゃないですか!？」

「まあ、一番上だが……」

桜夜先輩は何か言い足そうとしていたが、そのタイミングで美唯の  
声が響いた。

「凄いですよッ!!」

何を付け足したのか美唯の声で聞えなかった。

まあ、そんな運命を左右するような事でもないだろう。

「まあ、そんなに凄いほどでもないさ……」

この人と一緒なら、本当に脱出できる……。

今、予感が確信へ変わった。

4話 - (2) (後書き)

―登場人物―

水月 淋那(すいげつ すずな) : (女)

桜凜武装高校現代剣術科2年生のCランク。

彼女が率いるチームのリーダー。

とても頭が良く、状況判断が高い。

だが、冷静さを失えば状況判断力が失われる。  
彼女の武器は長刀。

身長 : 155cm

体重 : 43?

B・W・H : 75・53・74

血液型 : O

髪色 : 天色(青系)、ロング

誕生日 : 12月25日

年齢 : 16



## 5話・(1) 目覚め(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

5話・(1) 目覚め

誰も犠牲者もなく、無事に済んだ。  
奇跡かもしれない。

争いが耐えない世界。

この世界の中で何人の人が死んだのだろうか？  
考えたくはない。

だが、死者はゼロなんて有り得ないだろう。

さつきみたいな争いがあらゆる所で起きているかもしれないし、それより酷く残酷かもしれない。

侑達は無事なのだろうか？

俺には、それを知る術はなかった。

「潤？大丈夫？顔色悪いよ？」

美唯が優しく話しかけてくれた。

また、美唯に心配をかけてしまった。

「大丈夫だ」

正直言つて気がめいりそうだ。

この張り詰めた緊張感と恐怖。

すでに俺達は狙われているかもしれないと、どんどんとマイナス思考に変わっていく。

「まあ、そうなるのも無理はない」

桜夜先輩は羨ましいぐらいに強い。心も。学校が違うから？俺達と送っている日常が違うから？そんな理由とは思えない。性格なのだろう。

「先輩の刀って何なんですか？」

場の空気を変えようと美唯がいきなり先輩に問いかける。俺も気持ちを切り替えないと……。

「ああ、由緒正しい日本刀だ」

日本刀……。

日本人の俺達には馴染み深い言葉だった。だが、そんなに詳しくなんて知らない。

「3本ですよね」

「そうだ。3振だ」

先輩の腰に差してある日本刀は計3本。左右で2：1で分けている。

「まずは、この一振の説明からしよつ」

先輩が鞘から一本抜く。

説明……？

嫌な予感がする。

「いや……説明までは……」

美唯は苦笑いを浮かべ、小首を傾げる。  
こういう話になると、先輩は長そうだ。  
それを美唯は悟ったのだろう。  
俺も同じく悟った。

「まずは私の愛刀の千鳥だ」

そんな美唯をお構いなくに話を進める桜夜先輩。  
未知の世界に入っていく……。

「この千鳥は立花道雪の刀だ。戸次鑑連でも間違えではない。ある日、木の陰で雨宿りしていた立花道雪を雷が襲った」

「ちばなどうせつ？べつきあきつら？  
初耳な単語が俺の耳へと流れてくる。」

「雷ですか……痛そうですね」

「そうだ。とても耐え難い痛みだ」

雷に打たれた。

相当な激痛だろう。

俺は死んでいるな……。

いや、俺だって老師の修行に耐えてきた。  
以外にいけるかも……。

「だが、道雪は雷に打たれ半身不随になりながらも生きていたんだ」

ふう……なかなかやるじゃないか……。

「すごい生命力ですね……」

生命力の問題なのかこれ？

当たり所とかじゃないのか？

「道雪は雷に襲われたときに所持していた刀、千鳥でその雷を切ったとされる」

「雷を切った！」

すごいな……。

これも、男のロマンだな……。  
後でメモっとこ。

「雷って切れるんですか？」

男のロマンを汚しやがって！

切れないものなんてないんだぞ！  
なぜそれが分からないんだ！

俺は心の中で男のロマンを語る。

「さあな？ 実際に切ったかどうかははっきりしていないが、道雪は雷に打たれ半身不随になりながらも生きていたため、人々は雷を切った、雷神を斬ったなどと噂されている」

「雷神……」

はっきりしていないのか……。

ちよつと残念だな……。

「それから、道雪は千鳥の名を改め雷切とした」

開いていた口がふさがらなかった美唯も口を開いた。

「じゃあ、千鳥と雷切は同じ刀なんですか？」

「ああ、そういうことになる」

やっぱり刀の説明は長かった。

これでも一振だけ。

後、二振もある。

気が遠くなる……。

「じゃあ、何で先輩は雷切じゃなくて千鳥なんですか？」

確かにそうだ。

道雪さんは名を千鳥から雷切に変えたのに……。

「雷切には雷魂らいこんが宿っている」

「雷魂!？」

雷魂……。

聞いたことがない。

「私は普段、千鳥の雷魂を開放していない。だから雷魂を開放していない状態は千鳥、雷魂が開放された状態は雷切としている」

「……………」

美唯が黙り込んでしまった。  
俺がフォローしないと……………！  
あまりにも、美唯と先輩が可哀想だ！

「じゃあ！先輩！次の刀は何ですか！？」

このフォローを言った途端に後悔した。  
自ら地雷を踏んでしまった。

「よくぞ聞いてくれた！」

何故か先輩は嬉しそうに微笑む。  
嫌な予感が漂う。

「三条宗近！三日月宗近！！」

先輩は誇り高くそういった。  
その言葉だけが無情に響いていく。

「……………」

俺と美唯はリアクションゼロ。  
というか、すでにゼロを通り越してマイナスだ。

「ん？どうした？反応が薄いぞ？あの三日月宗近だぞ！？天下五剣  
の一つだぞ！？」

先輩は声を張り上げる。

有名な刀なのだろうか？

「申し訳ありませんが、知りません」

これは正直に言ったほうがいい。  
だから俺は正直にいうことにした。

俺の言葉を聞いた桜夜先輩は驚き、眼を大きくした。  
だが、すぐに平然を取り戻した。

「そ、そうか……。成沢くんなら知っているんじゃないか？」

桜夜先輩が美唯に問いかける。  
美唯は少し焦っている。

「知りません……」

先輩が失望したような顔をする。  
そんな顔で見ないでくれ……。

「天下五剣の中でも最も美しいとも評され、名物中の名物とも呼ばれたあの三日月宗近だぞ！？」

先輩は確かめるように訴える。  
そもそも、天下五剣も知らない。

「申し訳ありませんが、天下五剣も知りません」

素直に自分の知力を露わにする。



「な！なんだと！？」

先輩は完璧に俺を哀れ見ている。  
間違いない……。  
先輩は無上なまでに驚愕している。

「君達は何処出身なんだ！？異人か！？」

「純粹の桜凜っ子です」

俺の生まれは桜凜市。

育ちも桜凜市。

日本から出たことすらない。

「なら、今まで何をしていた！？人でありながら恥ずかしいぞ！？」

そこまでの事なのだろうか？

そもそも、知っている人なんて俺の周りにいるのだろうか？

「君はそれでも心を持った人間か！？」

猛烈に攻撃してくる。

天下五剣を知らないことがそれ程の罪なのだろうか？  
誰か助けてくれ……。

「先輩！一般の人はそんなこと知らないですよ！普通っ！」

ありがとう美唯……。

それが普通だよな……。

「！！！！！！！！」

先輩が唾然とする。

失望か絶望か呆れか驚きか……。  
とにかく複雑な表情をしていた。

「あああ！先輩！最後の一つは何ですか！？」

声を張り上げて言った。

このままだと、この空気に押し潰されそうだ。

「良く聞いてくれた！桜夜家最強の一振！」

先輩は自信と誇りを兼備えた態度をとる。

よっぼど誇りに満々としている刀なんだろう。

「桜夜 飛龍！神刀！神切！」  
しんとう かみぎり

……。……。……。。

まずい……。

リアクションをしなければ……！！

「うおおおおおおおおおつ！！！！！！！！」

何故か恥ずかしいぐらいに叫んでしまった。

何だこのリアクションは！？

「そんなに驚かないでくれ」

先輩は嬉しそうだ。

こんなリアクションで良かったのだろうか？

俺のリアクションの事は一切気にせず、先輩は話を進める。

「この刀は代々、桜夜家に伝われし神刀で、私の先祖に当たる、桜夜 飛龍の愛刀だ」

「いやっほ ……！！！」

何故か変なリアクションしか取れない……。  
なんで『いやっほ ……！！！！』なんだ！  
とんでもないリアクションをしたと後悔した。

「この刀は名前通り、神を切ったと言われている刀だ」

こんなリアクションでも、もろともしない先輩。  
大きいお方だ。次はいいリアクションをしよう。

「フウウ ……！！！」

……………。

俺のリアクションのセンスの無さに  
自分で失望した。

「そのため、この刀には神の力が宿されている」

「神の力！？」

ようやく自然なリアクションができた。

いや、自然と出来た。

なんだ……？神の力って……？

「神の力って……」

「私にもわからんよ」

思いもよらない答えだった。

「え……？」

先輩でもわからない？

これはどういう意味なんだ？

「この神切は雷切同様に力を開放していない」

力を解放。

ということは神の力を封印しているということ。

「解放できないんですか？」

「いや、呪を唱えれば開放できる」

呪を唱える。

また未知の世界だ。

「この神切の神の力を解放したら、拒絶反応が起こり所有者が死ぬ。それと、桜夜の血が流れていない者が柄を握ると拒絶反応で死ぬ」

「え……？」

拒絶反応？

死？

桜夜の血？

なんだそれは？

「私とて解放をすれば、命はない」

だから開放しないのか……。

だから能力を知らない未知の刀。

しかも桜夜家の人間しか扱えない。

「そんな刀を使いこなせる人なんているんですか？」

この刀は桜夜家に伝わってきた刀。

その中でもいないのだろうか？

「いた。桜夜家最強の剣士、桜夜 飛龍」

桜夜 飛龍……。

この男が最も桜夜家最強……。

ん……？

と言うことは桜夜家って剣術関係の家なのか？

まあ、今は触れないでおこう。

きつとそうなのだよ。

「桜夜 飛龍は神を切った本人だ」

神を切る……。

俺には迷信でしか思えない。

いや、切れない者なんてない。

「桜夜 飛龍が唯一、神切の力を使った」

神切の力……。

それは神の力。

想像もつかないほどの力が、宿されている剣。  
それだけはわかった。

『ズド                   ン！！！』

不意に再び銃声が聞こえた。

距離はそう遠くはない。

「また！？」

美唯はその銃声の音で表情を曇らせる。

今日2回目。

また、命が危険になる音がした。  
出来れば聞きたくない。

「私は現場に行くが君達は！？」

選択。

再び未来を大きく変えてしまう選択。

そんな選択を容赦なくしてくるような世界に俺達はある。  
だが、俺は答えは最初から決まっていた。

「俺も行きます！！」

「私も!!」

俺達は強い意志を先輩に見せる。

「そうか……安心したまえ。君達は私が守る」

先輩は刀を鞘から抜いた。

そしてそれを俺の前へ突き出す。

「使いたまえ」

守るための剣。

これが無ければ俺は無力。

俺は迷わず受け取った。

ずっしりと重い。

この前の戦いと同じ刀だ。

この刀は三日月宗近だったんだな……。

さっきはその美しさに気付けなかったが、その刀は見とれてしまう程美しかった。

「よし!行くぞ!!」

桜夜先輩が疾走する。

俺たちはそれをひたすらに追いかけた。

5話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



5話・(2)

しかし先輩は速い。

全力疾走がずっと続いているような感じだ。

「事態が悪い！私は先に行く！！」

桜夜先輩はスピードを増して現場へ向かった。  
此処は林というか森。

相手にとって戦場にはもってこいだろう。

そして先輩が見えなくなった。

此処には敵の姿はなく、周りは木々。  
どこに隠れているかわからない。

『ズド                    ンッ！！！！！！』

「きゃっ！！？」

「うおおー！？」

ものすごい近くで銃声が出た。  
恐らくはこの木々のすぐ右だろう。

『きゃあああっ！！？』

女子生徒の声が聞こえる。

桜凜高校の生徒なのだろうか？

まさか戦闘に巻き込まれているのか！？  
もしそうだったら、その先にあるのは死。

俺は無意識にその場へ走った。

「え！？潤！危ないって！！！」

美唯の叫び声がする。

だが、俺は走ることを止めなかった。

『助けたい』

その一心で突き動かされるように現場に向かった。

何処までできるかわからない。

相手は桜凜武装高校。

誰が見てもかなうはずがない。

だが、何もしていないのはもっと嫌だ……！

俺が成せることをする……。

俺は広場に出た。

そこは戦場。銃声が聞こえた場所。

俺の目の前に立ち竦んでいる一人の少女がいた。

この場にはその少女と、桜凜武装高校の生徒一人しかいなかった。

「止めるッ！！！！そんなことして何になるッ！！！！」

喉が裂けるほど、本能のままに叫んだ。  
だが、その願いは届くはずもなかった。  
その願いは、浮遊する空を振動させただけだった。

『ズド                    ンッ！！！！！！！』

「！！！！！！！！」

撃たれたのか……？俺は……？

こんな所で……武器を持ちながら……なにもできず……。  
美唯を守ることができず……。

ただ俺は死に行っただけなのか……？

が、予想していた感覚は来なかった。

「んっああ……あああああっ！」

俺の近くにいた少女が横腹を押さえている。

少女の横腹には赤い血が溢れていた。

あの銃弾で当たったのは俺ではなく、少女だった。

その被弾した少女の姿を視た俺は

”死”

俺の頭にその言葉が浮遊してきた。

少女はどうにか立っている。

だが、被弾した横腹は血で溢れている。

前方にいる桜凜武装高校の生徒が銃を構えている。  
発砲まで時間の問題。

少女はこの世界の中、その命は絶命しようとしていた。

俺の目の前で、人が”死ぬ”……。

”死”というワードに、記憶が反応する。

それは、家族の死……。

追憶された過去の記憶が鮮烈に蘇る。

ここまで鮮烈な追憶は初めてだった。

その瞬間、俺の”左眼が熱く滾る”<sup>たぎ</sup>

この感覚には覚えがある。俺はこの感覚を追憶する。  
だが、その答えは安易に見つけ出すことができた。

鮮烈なほどに蘇った記憶。その中でこの感覚が遇った。

思い出した……。

”あの時”と同じ感覚だ……。

俺のこの、奥底から湧き上がってくるこの感覚

”左目が熱く滾る”この感覚

あの”事故”の時と同じ感覚だ……。



容赦なく少女に向かって発砲。  
だが……。女は殺させない！

「させるか　　っ！！！！！！」

俺は左眼を見開いた。

今までにないぐらいに、俺の左眼は熱く滾る

その瞬間、俺は少女の周りに円状の”結界”を創る。

「な、なに……？」

銃弾は”俺が生じさせた結界”によって弾かれた。

「なッ！結界だと！？」

少女を発砲した桜凜武装高校の生徒は驚きの声を上げる。

それもそのはずだ。

何も無いところで、突然結界ができたのだから。

その結界を生じさせたのは、紛れもなく俺。

わかった　　わかったしまった。

”俺は普通の人間じゃない”

俺が作ったこの結界は”外部からの進入が不可能”

つまり、外部から接近してきた銃弾は結界内には進入不可能。だか

ら当たらない。

そういう結界を作り出すことができる。

それが俺の”能力”

あの”過去記憶”と共に、忘却の檻に閉じ込めていた能力。

わかってしまった。

これなら辻褃が合う。

あの時の事故で俺だけ無傷だったのか、あれだけ血が吹き乱れていたあの場で俺に血が付かなかったのか。

答えはこの”結界”だった

外部からの進入が不可能だからだ。

小3のときの俺は”死”に反応し、無意識に発動させたのだろう。

それから一回も目覚めていない能力。

いや、記憶とともに忘却していた能力。

俺は、再びこの能力に目覚めた。

「はぁッ!」

俺は結界を解除した。

再び、左眼が熱く滾る。

少女は俺の近くにいます。

なら、俺と少女を守るための結界を作るのも容易。

桜凜武装高校の生徒は離れている。

俺は左眼を左手で添え、左眼を見開いて  
左眼が再び熱く滾る。

その瞬間、再び外部からの進入が不可能な結界が創られた。

「な！馬鹿な……！」

桜凜武装高校の生徒は銃を連射してくる。

『ズド                    ンッ！！！ズド                    ンッ！ズド                    ンッ！！！』

が、俺の創った結界により弾かれる。  
如何なる方法を持ってでも進入不可能。  
それがこの結界だ。

「くそッ！」

生徒が無理だと判断し撤退する。  
もう敵はいない……。  
俺は守れたんだ……。

「んあああ……あああ……」

糸が切れた人形のように、少女は倒れ伏せた。

「おいッ！大丈夫か！？」

どうみても大丈夫なはずがない。  
少女は横腹を被弾し、貫通している



俺は少女に駆け寄り、手持ちの治療道具で最低限の俺の出来る治療をする、

これはデパートから持って来たものでやはり役に立った。

「ああ………がはッ！」

少女は一回吐血する。

視るに耐えない状況だったが瞬きもしないで治療をする。

「ちよつと痛いが我慢しろよッ！！！」

痛いどころの騒ぎじゃないだろう。

だが、出血を防がなければ少女は助からない。

俺はどうしていいか分からず、強引に傷口をしめる。

俺の手は真っ赤に染まった。

「んあああ………！！！」

止まってくれ！

出血が止まらなければ、大量出血死。

だが、それほどの出血ではない。

これは不幸中の幸い。

「よしッ！止まったか？」

俺に出来る最低限度の治療を終えた。

このまま病院といきたいが、病院に行っても医師がいない。

俺は、痛み止めの薬を探す。

「はあはあはあ………」

少女は呼吸を整える。

出血は収まってくれた。のか？

「大丈夫か！？」

痛み止めを見つけた俺は、蓋を開けその中から適当に取り出す。

「あり…が…とう……ごぞいます……」

話せるぐらいに回復した。

しかし、こんな薬で本当に痛みが治まるのだろうか？

だが、別に害がある訳でもない。

俺は少女に痛み止めを飲ませることにした。

まだ周りには結界をはっている。

まだ、危険かもしれない。

と、結界の外に人が見える。

桜夜先輩と美唯だ。

何か喋っているが此処には聞こえない。

それもそのはず…。

外部からの進入が出来ないからだ。

音は空気を振動して伝わる。

だが、進入が不可能なため此処では聞こえない。

そういう面では不便かもしれない。

だが、人を守ることが出来るこの結界は、俺が求めていたものかもしれない。

俺は危険を伴うが、結界を解除した。

「中沢くん！大丈夫かね！？それと、さきほどの結界はなんだね！？」

「潤！！大丈夫！？」

同時に話しかけられた。  
だが、それ所ではない。

「細かいことは後で！まずはこの女の子を！」

俺は最低限過ぎる治療しかしていない。  
いや、出来なかった。

「はあ！これはいけない！」

「わあ！大丈夫！？」

二人は少女に駆け寄る。

この二人ならあの少女を助けられるだろう。

俺は、自分自身を見つめなおす。

自分の能力に気付いてしまった。

俺は普通の人間ではなかった。

俺の能力は外部からの進入が不可能の結界を作ることができる。

これで俺も仲間を助けられる。  
俺にはピッタリな能力かも知れない。

俺の眼は再び目覚めた

## 5話・(2) (後書き)

―能力、武器の詳細―

### 潤の眼の異能

潤は結界を作ることができる

結界は左眼を見開くことで使用可能。

潤の生み出す結界は外部からの進入が不可能。

そのため、防御に特化している。

結界の発動範囲は自分の視野に入れば、どんなに広くても可能。

また、範囲なども調整が可能。

だが、これが本当の”真価”ではない。

6話・(1) 再来(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

6話 - (1) 再来

俺は人を救えた。  
助けられた。

この左眼に宿る力で。

俺は普通の人間だと思っていた。  
いや、思い込んでいたんだ。

「……………」

俺は一人でこの眼の事を考え込んだ。

何処で手に入れたのだろうか？  
それとも生まれつきの能力？  
この眼の名前は？  
どうして俺に？

全てが分からない。  
分かるのは、結界が創れるということ。

だが、それ以上に嬉しさが立ち昇っている。

この力さえあれば、仲間を守れる。

外部からの進入が不可能で防御に最適な結界。

赤い血が。ベツトリ付いた両手を広げる。  
俺はその手の平を再び強く握った。

「美唯！女の子は！？」

横腹を被弾している女の子。

話せるぐらいには回復したようだが……。

「大丈夫！傷は深くない！」

「そうか……。よかった……」

傷はやはりそんなには、深くはないみたいだ。  
でも、深くないのにあれだけの血が出るのか……。  
銃の威力は恐ろしいものだ。

「よし！もう大丈夫だろ」

流石は桜夜先輩だ……。俺なんかとは比べ物にならない程上手い。  
少女の治療を終えた先輩は俺の所まで来る。

「中沢くん。ちょっといいかな？」

先輩から俺に問いかけるなんて珍しい。  
それもそうか。

「なんですか？」

結界の話だろう。



先輩なら何か知っているかもしれない。

「あの結界を作ったのは中沢くんの間違いはないか？」

やはりそうだった。

先輩と美唯は俺の結界を視た。

もう避けては通れない。

いや、仲間には知ってもらわないといけない。

「はい、俺です」

確かにあの結界を作ったのは俺。

自然現象でもなく、紛れもなく俺だった。

「君は何者だ？」

俺は 俺は何者なのだろうか？

今までは一般人、普通の人間のつもりで生きてきた。

だが、もう違う。

俺は異能者だ。

この世界は異世界。

異世界なんて、俺にとっては迷信でしかなかった。

実際にあるはずがない。ありえないと。

だが、俺のこの”能力”だってありえないのだ。

なら、俺は誰だろう？ 魔術師？ 超能力者？ 異能者？ 能力者？ 錬金術師？

何も特殊能力なんて持たないのが普通の人間だとするなら、俺は人間じゃない。

「一般人のつもりです」

俺には、そうしかいえなかった。

自分が人間であるという確証が何処にもなかった。

「つもり？」

もう自分が普通の人間と言う自信がなくなってきた。ならば、俺は何者だろう？

「自分でもわかりません」

俺は人間。

今まで一回も疑ったことのないことでそれは覆らないこと。そう思っていた。

だけど俺は普通の人間という境界から出てしまった。その先には、何があるのだろうか？

「詳しく能力の事を教えてくれないか？」

能力……。

やはりこの結界は能力。

自分が能力を持っている何で、今までは自覚がなかった。

だが、俺はあの事故の時にも結界を発した。

だから無傷だった。

「俺は結界をつくれるんです」

魔術とかは俺とは無縁の関係。そもそも存在するはずがない。そう思っていた昔の俺がいた。

だが、この異世界。

そして俺の眼。

その存在を信じざるを得なくなった。

「どつという結界かね？」

先輩は冷静に問いかける。

「外部からの進入が不可能な結界を作ることが出来ます」

「外部からの進入が不可能……」

先輩が考え込む。

そう言えば、先輩は会ったばかりの時に、

『術などとは無縁の関係』

つて言っただけ？

「残念だが、さっぱりわからない」

先輩もわからない。

ということは、これは魔法なのだろうか？

だが、俺はあたりまえだが魔法なんて習っていない。

なら、魔法とは関係無いんじゃないのか？

「そうですね……」

結局、分らず仕舞いだった。

俺は発動時の感触を思い出してみる。

左眼が熱く滾る。

その前に、心の奥底から何かが入み上げ、左眼を熱く滾らせる。これはどういう意味だろう？何処が根源なんだろう？

「今は保留だ。そのうち分かる日が来るだろう」

分かる日がくる……。

俺は確かにこの能力のことを知りたい。

だがその半分、知りたくない気持ちもあった。

「そうですね……」

考えてもしょうがない。

今はこの能力より少女の心配をしよう。

俺は女の子の近くに行く。

「美唯！女の子は大丈夫か！？」

「今、眠ってる」

女の子の顔を見る。

制服は桜凜高校。

きつと1年生だろう。

可愛い寝顔だ。

「潤？何か目が怪しいよ」

少女をみつめていた俺にそう警告した。

「なんと！」

思わず見入ってしまった。

俺は顔をシャキツ！とする。

「余計に怪しくなった」

シャキツとなった俺の顔に、更なる追い討ちをかける。

「じゃあ、どうすればいいんだよ！」

これ以上、シャキツ！とした顔は出来ない。

なら、どうすればいいんだ……？

「自分で考えるのっ！」

美唯は結界のことは触れなかった。

優しさなのだろうか？それとも知っていたのだろうか？

「君達は本当に仲が良いな」

桜夜先輩が微笑みながら割り込んできた。

「美唯とは幼馴染ですから……」

いつの間にか美唯は昔から俺の隣にいた。  
初対面の事なんて覚えていない。

「ほお、幼馴染か……」

そして、桜夜先輩が俺の耳元でささやく。

「大切に……」

優しい声でつぶやいた。

その言葉が、俺の心を激動させる。

『大切に』

本当に大切なものは気付かない。

でも、大切なものはすぐそばにある。

失いたくないもの。

それが大切なもの。

俺は『大切に』守ることができるのだろうか？

「何話てるんですか？」

こそこそと俺に話していた桜夜先輩に、美唯が問いかける。

「いや、何でもないさ」

先輩がデパートから持ってきた、  
荷物に手を突っ込む。

「腹が減ったな……何か食べないか？」

周りを見る。

もう夜。雲は見えなくなり、黄色に燃えるような満月が空に貼りついているように浮かんでいた。

そして、今日も終わりを告げようとしていた。

6話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



6話・(2)

「よし、このカップラーメンというものでも食べるか」

桜夜先輩は3個カップ麺を出す。

なんで先輩はまたカップ麺を持ってくるんだよ……。

「先輩……カップ麺は食べれませんよ」

熱湯が無いから。

これを言うのはこの世界で2回目……。

「おっと！そうだった」

先輩がカップ麺3個を林へ投げる。

かなり飛んだ。カップ麺の行方を追跡するが、夜の闇に吸い込まれるように消えていった。

「あああああああ

！！！！！」

美唯が絶叫する。

この光景には見覚えが……。

「ん？どうかしたかね？」

投げ終わった先輩が絶叫する美唯を見る。

「何で投げるんですかッ！？」

「食べれないのならお荷物だろう?」

この光景にも見覚えが……。

再び先輩が荷物に手を入れる。

何かを掴んだようだ。

「なら、このヤクルトと言うのはどうかね?」

先輩はヤクルトを3本を取り出す。

「先輩に食料を任せるんじゃないかった……」

思わず本音を漏らしてしまう。

カップラーメンとか持ってくるし……。

もっと恐ろしい食料を持ってきてあるんじゃないか?

ゾンビとか……ミイラとか……。

それを想像した途端に、俺の脊髄に電撃のように不安が走った。

「な!何を失礼な!?!乳酸菌だぞ!?!腸にいいぞ!?!」

先輩は耳が良い……。

今度から気をつけよう。

「確かに乳酸菌ですけど……」

即、先輩が反論をする。

「朝スツキリだぞ!?!」

……。……。

反論の方向を間違っているような……。

逆に異世界なら、朝スツキリの方が困るんじゃないかな……？

「それはそれで困りますよ！電気使えませんから、当然トイレ……」

「それは困る！」

そこまで言い掛けた時、

ヤクルト3本を林へ投げた。

かなり飛んだ。

ヤクルトの行方を追跡するが、夜の闇に吸い込まれるように消えていった。

「あああああああ

！！！！！」

美唯が絶叫する。

「ん？どうかしたかね？」

投げ終わった先輩が美唯を見る。

「何で投げるんですか！？」

「明日が悲惨になるからだ」

再び先輩が荷物に手を入れる。

何かを掴んだようだ。

「なら、このヨーグルトと言つのはどつかな？」

先輩はヨーグルトを3個（小容器）を取り出す。

「乳酸菌ですよ……」

「それは困るっ！」

先輩は林に向かって、

ヨーグルトを3個投げる。

「ああああああ

！……！」

美唯が絶叫する。

何だろう？この流れ……。

「ん？どうかしたかね？」

投げ終わった先輩が美唯を見る。

「何で投げるんですか！？」

「乳酸菌だからだ」

再び先輩が荷物に手を入れる。

何かを掴んだようだ。

「なら、この棒アイスと言つのはどつかな？」

先輩は棒アイスを3本取り出す。  
見事に溶けていた。

「原型を留めてないですよ」

「なら、いらんツ！」

先輩は林に向かって、原型を留めていない棒アイスを3本投げる。  
棒アイスの行方を追跡するが、夜の闇に吸い込まれるように消えて  
いった。

「あああああああ

!!!!!!」

美唯が絶叫する。

「ん？どうかしたかね？」

投げ終わった先輩が美唯を見る。

「何で投げるんですか!？」

「原型を留めてないからだ」

再び先輩が荷物に手を入れる。  
何かを掴んだようだ。

「なら、この豚肉と言うのはどうかな？」

先輩は生豚肉パックを取り出す。

「当たると痛いですよ」

「なら焼けばいい」

先輩が即答する。

まさかの即答だった。

先輩は鞘から千鳥を抜く。

そして、千鳥の刃を豚肉に刺す。

「先輩……?」

何をやるき何だ? 桜夜先輩は?

薄くスライスでもする気なのだろうか?

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び、生ずことを請う」

先輩が呪を唱え始める。

一体何が起きるのだろうか?

呪を唱え終わった直後、千鳥の刃に電撃が走った。

「え……?」

「今、此处に雷魂を開放する」

大きく千鳥の刃に帯電する。

これが雷魂の姿なのか!?

「す、すい……!」

刃から流れた電気は豚肉へ。

本当に雷魂つてあるんだ！

それはすごい神秘的な光景だ。

「まあ、しばらく待ちたまえ」

先輩は肉に電気を通してている。

こんなことで使っても良いのだろうか？

刃に申し訳がないような……。

そして、パツクが溶け始める。

溶けた液が肉へ……。

そして、液が肉に付着。

「先輩、もうその豚肉食べない方がいいです」

「そうなのか？なら用はない！」

先輩は刃で肉を刺し、林へと投げた。

何処へ向かって投げたすら、俺には分からなかった。

「……………」

遂に美唯まで黙ってしまった。

ここまで先輩が持ってきた食物が、  
ことごとく食べれないとは……！？

いや、食べれる物もあつたか……。  
ヨーグルトとか……。  
ヤクルトは飲み物か……。

再び先輩が荷物に手を入れる。  
何かを掴んだようだ。

「なら、この米を食べるといい」

先輩は「？」の米の袋を取り出す。

あの荷物俺が今まで運んでたんだぞ！？  
どうやら、重い訳だ……。

「先輩、どうやって炊くんですか？」

水はある。

だが、火に耐えられる器がない。  
だから、沸騰させることは出来ない。

「君はご飯の炊き方も知らないのかッ！？」

その言葉を俺はまるつきしカップ麺のときに返してやりたい。

「知ってますよッ！？」

「なら、動揺することはない」

先輩がこの場から去る。

また始まるのか……。



「少し待ちたまえ」

先輩が林の方へ消えていく。

「今、戻ったぞ」

やはり先輩は石と枝と板を持ってくる。

そして、石を円状に並べ、  
その中央に枝を置く。

やはり、始まるのか……。

第二次火おこしが……。

「これを受け取りたまえ」

先輩は俺に板と棒を渡す。

「やるんですね……」

それは、火おこしだった。

一日目もやった記憶がある。

「心配は無用だ。火に耐えられる器は用意してある。何も考えずに

やってくれて構わない」

先輩は石が置いてある場所に行ったしまった。  
火に耐えられる器があるなら、カップ麺も食べれたんじゃないか？

まあ、こうなればやるしかない。

「わかりました……」

板の穴に棒の先を入れ、

火おこしを始める。

何で俺がこんなことを……。

そして、もくもくと火おこしを始める。

「頑張ってますね！潤くんツッ!!」

美唯が近くに来て、妙な応援を始める。

今は美唯の声が雑音に聞こえた。

黒い煙が立ち始めた。

さすがに2回目だと手慣れて来る。

そして、黒い煙は風に流され、

追跡用の兵器のように先輩がいる所へ……。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

先輩に黒い煙が直撃。

何でいつも先輩に直撃するんだろっ？

引き込まれるように黒い煙は再び先輩へ……。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

世の中には分からないこともあると言っことかな……。

俺は再び、神秘的な光景を眼にした。

「中沢くん……！何か恨みでもあるのかね！？あるのなら口で言うてくれ！煙を当てるとは卑怯だぞ！」

恨みなんて一切ない。

ただ、黒煙が恨みを晴らすように先輩へと誘われるだけだ。

「わざとじゃありませんよ……」

ここが頑張りどころだ。

俺は一気にけりをつけるために、一気に加速する！

「おおおお　　！！！」

美唯にも力が入る。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

先輩は咳を出す。

また黒煙は先輩のところへ行つたのか……。面白動画かなんかで投稿しようかな……。

おっと、火おこしの最中だった。

「うおおりゃあああああ  
……！」

猛スピードで棒を回し、ラストスパートへ。

そして、点火を確認。

俺は点火した板を石の中央に置く。

「おおっ！ やってくれたか中沢くん！」

枝に次々と引火。

こうして、たき火は完成した。

「流石、火おこしの潤！」

「そんな称号いらん！」

俺は眠っている少女の近くに座る。  
まだ、眠っている。

「よし成沢くん！ 米を炊くぞ！」

「わかりました！」

二人は米を炊き始める。

大丈夫かな……。

カリツカリな米が出来たりしてな……。  
老人には勧め難い米だな。

俺は少女が心配で米が炊けるまでの間、少女の傍らに座り込む。

「ん…… ああああ……」

少女が声を漏らした。

眼を覚ましたのだろうか？

それとも、悪夢を視ているのだろうか？

「……………」

起こしたらマズイかな……。

俺は息を殺した。

「はぁッ！」

跳ね上がるように少女は起きた。

そして、被弾した横腹を押さえる

「痛いッ！？くはない……？？？」

痛いのか痛くないかハッキリして欲しい。

痛くないのなら、痛み止めが効いている証拠だ。

「大丈夫？」

驚嘆している少女に話しかけてみた。

「大丈夫ではないけど……痛くない……??？」

横腹を押さえながら答える。

痛み止めて凄いな……。

本当に痛くないんだ……。

「助けてくれた……んですか？」

付け加えるように『ですか』を付ける。

少女は痛そうな顔は一切していない。

本当に痛くないみたいだ。

「いや、俺じゃなくてあの二人だよ」

俺は桜夜先輩と美唯を指差す。

治療したのはあの二人。

俺は応急手当とすら呼べない手当て。

しかも、それすら出来たかもわからない。

「ありがとうございます……」

少女がおれに頭を下げる。

「いや！俺は何もしてないよ！」

「二発目の発砲……」

二発目の発砲。

彼女が死を覚悟した瞬間。

そうだった……。

俺はそこで目覚めたんだ……。

「あの発砲を防いでくれたのは、え〜と……貴方……ですよ……」

言葉を選びながら、慎重に話をしている。

敬語慣れをしていないのだろう。

普段は明るい子なんだろうな……。

こんな世界だったら、性格も暗くなるのも当然だ。

そんな中でも人格を保てるのは凄いことだろう。

俺が人格を維持できるのは、仲間がいるからだ。

一人なら、もうとつくに人格崩壊している。

「……………」

俺は黙ってしまった。

「だから……その……ありがとうございます」

少女は口重そうに言葉を発する。

そんな重たい空気を吹き飛ばすように、桜夜先輩の声が響いた。

「中沢くん！米が炊けたぞ！」

どうやら米が炊けたようだ。  
本当かな……。

「さあッ！君も食べよ！米しかないけどさ……」

人様が食べれる米が出来ているように……。

「ええ！助けてもらったのに……ご飯までは……」

少女は両手をパタパタと振り、遠慮のポーズを示す。

だが、俺は少女の手を握りたき火の方へ歩いた。

「いいからっ！行こう！」

俺は抵抗する少女を半ば引きずりながらも、たき火の前に来た。  
すると、少女を視た先輩が驚喜する。

「おおッ！先ほどの少女ではないかッ！！」

桜夜先輩が少女に近寄る。

そして、先輩が手を前に出す。

「私は、桜凜武装高校剣術科3年の桜夜 沙耶だ。よろしく頼む」

少女が迷ったが、先輩の手を握った。

「あ、あたしは桜凜高校1年生の……月守りんかです。よろしくお  
願います。沙耶先輩」



月守りんか。  
それが少女の名前。  
やはり一年だったか。

「さ、沙耶先輩!？」

何故か先輩が狂態する。  
その反応に、逆に少女が狂態する。

「え……?」

「あ、いや……、何でもない……」

何故か先輩の頬が赤い。  
先輩が気取り乱すなんて珍しいな……。

黒煙でも浴びすぎて、どこがおかしくしちゃったかな……。

「で、私が桜凧高校2年生の成沢 美唯。よろしくね」  
にっこりと美唯は笑いかける。

「よ、よろしくお願ひします……。美唯先輩」

二人は握手をする。  
次は俺の番かな……。

「俺は、桜凧高校2年生の中沢 潤だ。よろしくな」

俺も手を前に出す。  
迷わず握ってくれた。

「あ、はい……。よろしくお願いします…潤先輩！」

潤先輩……。

何だが不思議な気分だ……。

桜夜先輩の気持ちは良くわかった。

名前で呼ばれると、何だが一味違うな。

しかも、可愛い後輩だからな……。

「さあ、出来立ての米でも食べるぞッ！」

こうして2日目も終わろうとしていた。

俺達はどうにか2日間生き延びられた。

これから先のことは誰にも分からない。

だが、この異世界から出る術はまだ見つからない。

明日からは、その術を探さないといけない。

果てしなき未来へ

仲間と共に

6話 - (2) (後書き)

―登場人物―

月守 りんか(つきもり りんか) : (女)

桜凜 高校1年。

戦闘に巻き込まれている所を潤が発見し、潤が結界を発動させ助ける。

このとき潤は能力を再び目覚めた。

彼女もまた、主人公と協力しこの異世界の脱出方法を探す。

友達も多く、明るいくスポーツが好きな少女。  
運動神経はよいが、精神力は強い方ではない。

身長 : 153cm

体重 : 44?

血液型 : O

B・W・H : 77・52・76

髪色 : 蜜柑色(オレンジ系)、ショートカット

誕生日 : 5月14日

年齢 : 16

7話・(1) 不思議(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

7話・(1) 不思議

19月3日

この日の朝も異世界で目覚めた。

「ん……？」

眼を開けた。日が昇り、もう朝だった。その夥しい日光が俺の眼へ直進する。

「ぐはああつ！？」

反射的に眼を閉じた。

太陽の光を直視するのはよくない……。

俺は太陽の光を避けるように寝返りをうつ。

眠い……。

こんなところじゃ、あまり寝れない。

早くベットで寝たい……。

ふかふかなところで……。

ふかふかか……。

俺のベットってそんなにふかふかじゃないよな……。  
今度買い換えよう……。

「起きるか……」

鉛のように想い身体を持ち上げるように立ち上がった。  
相当疲労がたまっている。

肉体面ももちろんだが、精神面もだ。

周りを見渡すと、先輩が剣を振り回していた。

「先輩……おはようございます……」

近くに行ったら命が危険になるから、遠くから話しかけた。

先輩は民族のお祭りのように、勢いよく刀をブンブンと振る。  
こっちまで、音が聞こえてきそうだ。

「ああ、おはよう。朝から眠そうだな」

止めずに先輩は、剣を振り回す。

これは先輩で言うと鍛錬らしい。

俺には昆虫の求愛行動でしか見えないけどな……。

それか、民族のお祭り……。

「朝だから眠いんですよ……」

朝は誰だって辛い。

俺の朝には強かったが、それすらも意味を成さない。  
それほどに、眠れなかった。

「これだから若い者は……」

「先輩だって若いでしょう!？」

それにしても先輩は元気だな……。こんなブンブン振り廻して……。

「今日はどうするんですか？」

「この異世界から脱するための術を見つけるッ！」

先輩が即答する。

俺もこれには賛成だ。

だが、探している途中に戦闘に巻き込まれるんじゃないか？ そんな事を考えてしまう。

「心当たりはあるんですか？」

「ないッ！！」

ブンつと大きく刀を振り、即答する。

だが、その術を仲間と共に探す。

危険で満々としているが、楽しみという気持ちもあった。

「さあッ！行くぞ！」

先輩は鍛錬で使用していた、千鳥を前に出す。随分といきなりだな……。

つてか、なんで千鳥を前に出すんだ……？

「行ってくつてまだ二人は起きてないですよ……」

美唯と月守さんは寝ている。  
月守さんも一緒に行ってくれるかな？

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び、生ずことを請う」

先輩は何故か呪を唱え始める。  
そして、千鳥の刃に電気が走った。

「今、此処に雷魂を開放する」

呪を唱え終わると、  
千鳥の刃に電気が帯電する。

「立花道雪、雷切」

先輩が右手を高く上げ、雷切の刃が空を向いた。  
嫌な予感しかしなかった。

「桜夜先輩!？」

俺の言葉をもろともせず、先輩は呪を唱え続ける。

「我が剣よ請え。全ての雷魂を飲み込み、正法を生じよ」

先輩が呪を唱えると、光で前が見えないくらいに帯電する。

「雷神正法、龍来」

『□□□□□□□□□□』

『ツ!!!!!!!!!!!!!!』



先輩から、雷独特の音が聞こえる。  
かなり大響音。

耳を両手で塞ぐが、相当うるさい。

「ぎぎぎややややややああああああ

!!!!!!」

激しい雷音が響いている中で、二人の叫び声が響き渡った。

「二人共起きたか？おはよう」

先輩は刀を鞘に戻す。

そして、二人に近づく。

「「な！何ですか！？今の音!!!!!!」」

二人は同時に同じ事を喋る。

意気投合している。

タイミングバツチリだ。

「良い目覚めだな」

先輩は爽やかな笑顔を二人に送る。

お年寄りだったら、完全に心臓止まってただろうな。

「強烈すぎますよ……」

美唯はそういうと、二人共身体を起こす。

かなり眠そうだ。朝の宿敵というべきか……。

それが睡魔だ。

「まったく最近の若い者は……せつかくの朝なのに眠そつな顔を  
して……」

「桜夜先輩も若いでしょッ!？」

確かに目覚まし雷の音は強烈すぎる。  
一生に一度か出来ないかの体験だ。

「では、行くぞ」

先輩はなんの躊躇もなく歩き始める。

「先輩~~~~! 待ってください~~~~!」

美唯が走って先輩に追いつく。

だが、月守さんはその場を動かない。

「行かないの？」

その場で先輩を見つめていた月守さんに話しかけた。

「へ……?」

俺は月守の手を掴んで、強引に歩き始めた。

「ちょ……ええ!? じゅ、潤先輩!？」

俺は月守の手を握り、俺達も先輩に追いつく。  
何故だか先輩は、怪しげな笑みを浮かべていた。

「潤先輩……………」

「ん？どうしたの？」

今、林の中を歩いている。

先輩は何処へ行くつもりなのだろう？

「えっと……………その……………そろそろ手を……………」

俺は手を見してみる。

しっかりと握られた手がそこにあった。

「ああ！ごめん！」

慌てて手を離れた。

ずっと握ってた何て……………。

男として最悪だ……………。

「……………」

月守さんも沈黙……………。

しばらく続いた沈黙を破ったのは先輩の一言だった。

「月守くんは仲間に入ってくれるかな？」

仲間……。

今の仲間は、俺、美唯、先輩、だ。

そっか……。

まだ、入っていないのか……。

だから、月守さんは躊躇していたのか……。

「な、仲間ッ！？……ですか……？」

思い出したように『ですか』を付け足す月守さん。

しばしの間、考え込む。

俺達は黙してその答えを待つ。

「あ、あたしなんていたら、えと……足手まといですよ……？」

足手まとい……。

その言葉が鋭く俺の胸を抉る。

俺だって先輩の足手まといだ……。

先輩の背中に隠れ、先輩に助けられている。

俺ももう足手まといは嫌だ。

だが、その間に先輩が即答する。

「弱き者を助けるのが桜夜家だ」

それが、桜夜家の教えなのか……。

桜夜家ってどんなところ何だろう？

少し興味を持った。

「でも……」

月守さんの口語は口重で、自分の思っていることを上手く伝えられないようだ。

「安心したまえ。君達は私が守る」

心強い一言。

俺もその言葉を聞くと、安心する

だが、その一方で、自分が無力であることを改まって知る。

「ほ、本当にいいんですか……?」

月守さんは遂に決起する。

だが、表情は明るくはなかった。

「ああ、もちろんだ」

先輩は手を出す。

その手を迷わず月守が握った。

「よ、よろしく……お願いします……沙耶先輩」

きちんと月守さんの瞳は桜夜先輩を見つめていた。

ってことは……。仲間が増えたツ!?

これからも頑張らないとな……。

絶対に仲間と共にこの異世界から脱する。  
更に俺の意思は固まった。

「ああ、こちらこそ」

二人はがっちり握手をする。

そして俺達は再び、この異世界の探索を始める。

「あ、あの……いきなりで……すみませんけど……この世界はなんなんですか……？」

月守が先輩に無粋な質問を問いかける。

そうか……。まだ、知らないのか……。

「知らないのか……。なら、説明しよう」

この事実は惨烈すぎる。

だが、知らなくてはならない。

この世界について。

この世界で起きている狂気について。

そして、桜夜先輩は話始めた。

7話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

7話・(2)

「お、桜凛高校全生徒の殺害ッ!?」

月守さんはそれを聞いて、驚愕の色を隠せなかった。

俺だってそうだった。

驚愕しない人はいないだろう。

「ああ、そうだ」

再び先輩が説明を進める。

「……………」

全ての説明が終わった頃の月守さんは、  
眼は焦点を失い、虚ろな眼を浮かべていた。

「つ、月守さん?」

呼んでみるが返事は返って来ない。

「今はしかたあるまい」



俺は怒りを先輩にぶつけてしまった。

それほど、の理不尽。

これがこの異世界。

だが、美唯は何一つ変わった素振りを見せなかった。

美唯の強さを再び知った。

「……………」

月守さんは言葉を失っているまま。

一時的の事なら良いが、立ち上がれない場合もある。

精神の病にかかるかもしれない。

どうにかしないと……。

俺は月守さんに寄ろうとするが、ぽんつと先輩が俺の肩を叩く。

「今はそつとした方がいい」

呟くように、小さな声で俺に警告した。

俺は無言で頷いた。

「ちょっと休憩しないか？」

桜夜先輩はその場に腰を下ろす。

「そうですね」

続いて美唯も腰を下ろす。

確かに、今は仕方がないか……。

俺も腰を下ろすことにした。

侑……。菜月……。聖夜……。  
いきなり3人の顔が浮かんだ。  
胸の奥が痛くなる。

どうか……。皆無事でいてくれ……。  
祈るしかなかった。信じるしかなかった。仲間の無事を。

「大丈夫だよ潤。絶対に無事だよ」

美唯が俺の心を読むように答えた。  
俺は隣にいた美唯の顔を見つめた。

「何で分かるんだ？」

「幼馴染だから？」

クスクスと笑いながら答える美唯。

「幼馴染か……」

美唯の言うことが本当に聞こえる。  
侑達が無事に思えてきた。

侑の事だから、上手くやっているだろう。  
そう思えてきた。

俺はコンプレックスのある青空の眺めた。

雲がゆっくり流れしていく。見ていると面白い。  
雲って本当に動いているんだな……。

ゆっくりだが、確実に前へ進んでいる。

俺達の姿と雲を重ね合わせてみる。

ゆっくりだが、確実に前に進んでいる。

いや、雲からするに、何処が前なのかわからないのか？

どこへ行けば前に進めるのか、雲には分からない。

その雲の動きに、人間らしさを感じた。

こうしていれば、異世界とは誰も気付かないだろう。

景色は俺達が知っている世界。

だが、俺達は異世界にいる。

なら現実世界にいる人は、今は何をしているのだろうか？  
想像がつかない。

俺は大きく深呼吸をする。

まずは脱方法を考えよう。

この異世界に入ってこれたのだから、絶対に出る方法はある筈だ。  
だが、今は月守さんの精神が不安定。

今はゆっくりと休んで、精神と体力を回復しよう。

「ねえ、潤」

「ん？どうした？」

空を見上げていた俺に、不意に美唯が話しかけてくる。

その声は何かを懐かしむような声だった。

「地球上の生物ってさ……」

地球上の生物？  
いきなりなんの話だ？

「うん」

先が気になった俺は、とりあえず頷いてみる。

「どうして、外側に飛ばされないの？」

「はあ？」

俺には意味がさっぱりわからなかった。  
外側に飛ばされない？何が？

「地球って一日一回転してるよね」

美唯が地球の自転について、語り始める。

「自転のことか？」

確かに地球は一日で1回転。  
それがどうしたのだろう？

「それって考えてみると、すごいスピードだよね？」

「まあ、確かに……」

確かに一日一回転って速いかもな……。  
あんなに地球ってでかいんだからな……。

「そしたら、遠心力が働くよね」

遠心力。

それは、回転運動をする時に、

観測される慣性力的一种。

回転の中心からみて外側へと向かう方向の力である。

「まあ、周ってるからな……」

俺達はそれに気付かない。

普段から地球が周ってるなんて感じられる人なんていない。

身近すぎて分からないのだろうか？

「そしたら、地球にいる人間はどうして外側に飛ばされないの？」

「さあ？何でだろう？」

確かに遠心力は働いているだろう。

なら、どうして地球にいる人間は外側に飛ばされないのだろう。

と言っのが美唯の疑問。

素朴な疑問だ。

でも、確かに何でだろう……。

「どういう風の吹き回しだ？」

何故そんなことを思ったのか、美唯に聞いた。

美唯ってたまに、こつという良く分からないことあるよな。

「この前、海を見て思ったの」

海……？

海を見て、何でそんなことが不思議に思うのだろうか？

「海って波があるでしょ？」

「まあ、あるな」

波はある。

一般的に考えて。

あの、ザブーンって奴だ。

それを使ってサーフィンなんかもしたりする人もいる。

俺はしたことはないけど。

「何で波が起こるのかな……って」

「うん」

ところで美唯はいつ海に行ったのだろうか？

俺に内緒で……。誰と行ったんだろう？

「地球が自転しているから、波が起こるのかな……って思って」

なるほど……。

そこから、発展してっただのか……。

だが、俺もさっぱりわからない。

「過程はわかったけど、理由はわからない」

人間『あたりまえ』と思うことは不思議に思わない。

だが、俺から言わせれば『あたりまえ』が一番不思議でわからない。  
何故、人間は言葉を持ったのか。

だんだん自分の世界が広がっていく……。

「そつか……潤もわからないか……」

美唯が残念そうに肩を落とす。

そして、空を見上げる。

「何かモヤモヤする……」

美唯は不快そうな表情を顔に浮かべる。

「確かにな。わからない事とかあったら気になるよな……」

俺は周りを見渡す。

すると、先輩が視野に入った。

「桜夜先輩なら知ってるかもよ」

先輩は座りながら、黙して眼を閉じている。

なんだか、近寄り難い雰囲気だ。

「え？そうかな？」

何か地味なことが詳しそうな予感がする。

根拠はないけど……。

「聞きに行くか？」

モヤモヤするのも身体に悪そうだから、すっきりさせてあげたい。と言いつか、俺もかなり気になる。

「うん。そうだね。先輩なら知ってるかも」

希望を持って俺達は、先輩に近づく。

先輩は修行をしているかのように、黙して眼を閉じている。

俺は、その先輩の行動がかなり気になった。

それと同時に、かなり近寄り難い雰囲気だ。

だけど、俺は先輩に問いかけることにした。

「先輩。どうして波が起こるんですか？」

先輩は眼をゆっくりと開け、先輩は俺達を視る。

「どうした？藪から棒に」

先輩があまりの唐突な質問に拍子抜けしたのか、微笑する。

「波は風によって起こる」

そう言いながらも、桜夜先輩は説明を始める。

俺達は黙って聞く。

「遠くで吹いている風が波を起こしその波が伝わってくるうねりと、その場で強い風が吹いて起こっている風浪がある。これらによって波は起きている」



やはり先輩は知っていた。  
風によつて波が起きているのか……。  
知らなかった……。

「じゃあ、満ち潮と引き潮はどうして起こるんですか？」

美唯は疑問を投げかける。

それは何故、満ち潮と引き潮が何故起きるのか。  
確かに何故だろう？

風かな？

「これは月に関係している」

「月ッ！？」

美唯が驚愕の声を上げる。

予想もしていなかった単語が出てきた。  
俺も同様に隠せなかった。

「地球にも重力があると同時に、月にも重力、引力がある」

桜夜先輩が説明を始める。

俺達はそれ熱聴する。

「地球は自転している。地球の自転のため、月が近い海と遠い海ができる」

まあ、確かにそうだな……。

周ってれば月と近い海と、遠い海が出来るのは当然だ。

「月に近い海では、月に引きよせられて海水が盛り上がり、満ち潮になる。ちょうど反対側にある海は、引きよせられる力が弱くなるため、海水がとり残され、こちらも満ち潮になる。その中間にある海は、海水がへるので引き潮になるんだ」

ほお……。

大体はわかった気がする。

とにかく、月が関係しているんだな！

俺にはそれしか分からなかった。

「なるほどッ！」

美唯の顔がぱあっと明るくなる。

果たして美唯は本当に分かったのだろうか？

「ああ、役に立てたか？」

「もう一つ質問してもいいですか？」

取りとめもなく美唯が質問する。

これが最大の疑問だ。

どうして、地球にいる人間が外側に飛ばされないのか？

その質問をするのだろう。

俺も気になる。

「何で地球が自転しているのに、地球にいる人間は外側に飛ばされないんですか？」

直球ど真ん中で質問する。

これで先輩に通じるといいな……。

「成沢くんが言いたいのは、なぜ遠心力が働いている地球の中にいる人間が外側に飛ばされないのか。と言うことかな？」

「はい！そうです！」

通じたのか！？

先輩ってすごいな……。

「これは重力に関係している」

「やっぱり、重力なんですか……」

美唯も勘付いていたようだ。

俺もだが、なんとなくそんな感じがした。

だが、外れたら格好悪いから言わなかった。

「地球上には地球の中心に引き込む働きをしている重力がある。だから、遠心力があっても外側には飛ばされない。例で言うと大気圏がそうだ。大気圏も地球の重力があるため地球の周りに保っている」

重力。

でも、何で重力があるのだろうか？

そう言う話に発展してしまう。

「でも、北極点の人はあまり周っている感覚がないと思うんですけど、赤道付近の人は、相当周されていますよ！？」

……。。

もう俺の手が届く範囲じゃない……。  
赤道付近の人は相当周されてるのか……？

「確かにそうだ。例えば、赤道付近の人間の体重が60？だとする。その場合は、200g程度外側に飛ばされている。だが、200gの変化を感じられる人はいない。そういうことだ」

……。。

「先輩って凄いですね……」

美唯のいう通りだ……。確かに凄い。  
何でそんなことを知っているのだろうか？

「そんなことはないさ」

すると、すぐ美唯が口を開く。

「なら、どうして重力があるんですか？」

やっぱり、美唯もそつという話になった。

地球の話は奥が深い。

「物体がその質量に比例して受ける力。遠心力などの慣性力も重力の一種で、それらの合力が重力となるんだ」

「えッ！そんなんですかッ!？」

……。

頭が真っ白になった。

わからない……。

そう簡単に、地球の構造は理解出来ないってことか……。  
地球の広さを知った。

(そういえば、どうして地球は自転しているんだろう?)

8話・(1) あの頃へ続く想い(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

8話・(1) あの頃へ続く想い

あれから、何分が経っただろう？

俺達3人でくだらない雑談をしていた。

何も異世界とは関係の無い話。

いつものような話。くだらない話。意味の無い話。

まるであの頃へ戻ったみたいだ。

こうしていれば、異世界とは気付かない。

果たして本当に異世界なのだろうか？

そう思えてしまう程だ。

「月守くん？」

桜夜先輩は月守さんに話しかける。

そろそろ落ち着いてくれただろうか？

「……………」

まだ、月守さんは虚ろな目をしていた。

何処を見つめているのでもなく、

ただ、彷徨うその瞳。

何を想い、何を感じているのだろうか？

「大丈夫だ。共にこの異世界から脱出しよう」

桜夜先輩が手を差し伸べるが無反応。

今の月守さんは心が此処には無い。  
そんな感じがする。

「りんか？」

美唯の呼びかけにも答えず、まだ、その眼は虚ろに彷徨っている。  
人間は悲しい事、絶望を知ってしまった時それぞれ過程が違う。  
余命告知がこの状況には似ているかもしれない。

事実に絶望する者。

事実を受け入れられない者。

怒りに身を任せる者。

何かに縋る者。

生きる方法を探す者。

今までの生活に後悔する者。

憎悪する者。

受け入れる者。

そして、残りの人生を楽しもうとする者。

まだまだ、あるだろう。

俺は怒りに身を任せてしまった。

だが、美唯はなんだろう？

その事実を知った時、激怒する俺を優しく抱きしめてくれた。  
なら、美唯は受け入れていることになる。

先輩は脱出方法を探している。

つまり、生きる方法を探す者。

月守さんは、事実に絶望する者。



だが、それには意味がない。  
絶望しても助からない。

嘆いても助からない。

行動を起こさなければ、

『脱出』という可能性すら見つけれない。

俺は月守さんに想いを伝えた。

そんな無駄な事は止めて欲しい。

「今、何が見える？」

「……………」

俺の問いに月守さんは答えない。

考えてみると、月守さんの反応が一番自然なのかもしれない。

俺達は最初、心の片隅では嘘だと信じていたんだ。

だけど、俺は戦闘を視た。

人と人同士の殺し合いだ。

だから俺は信じられた。

此処が異世界だと。

「世界はどう見える？」

月守さんの気持ちは痛い程に分かる。

俺も絶望の後は何もかもが汚く見えた。

そう、”あの事故”の後。

家族が死んだ”あの事故”

俺の世界は穢れてしまった。  
何もかも色褪せて見えた。

そんな状況が数年続いて、ただ虚ろに彷徨い意味のない日々、苦痛の日々を送っていた。

だが、苦痛なのは俺だけではない。

俺は自分の『大切』にも怯えていた。

俺は『大切』すら遠ざけてしまっていた。

「異世界から出る術は十分にある」

だから俺はこの異世界のことを知っても絶望はしなかった。  
ただ、理不尽が許せなかった。人を殺すと言う行為が。  
どんなことがあっても、その行為だけは赦せない。

だけど、俺はそれ以上の絶望を経験している。

父さん、母さん、沙希、が助かる可能性はもう今はない。

だが、この異世界には可能性がある。

脱出は可能。俺はそう思う。

「出る術……？」

やっと声が出た。

だけど、恐怖に怯え、震えている声だった。

「ああ、必ずある。だから一緒に探そう。思い詰めても何も変わら

ないし世界も何一つ変わらない」

月守さんはただ、自分を追い込んでいるだけ。  
このままだと、自分も闇の中に消えていってしまう。  
俺みたいにはならないで欲しい。

月守さんはまだ自分を見失ってない。  
だから、まだ闇に合う。

俺は……事故の後、闇へ消えた。  
立ち直れず。前を向けず。俺は俺であり、俺ではなかった。

だが、その闇の中に光が照らした。  
その光が、美唯だった。

「……………」

月守さんは涙を流している。

何の涙かわからない。

決心の涙か絶望の果ての涙か。  
違うものなのか。

「だから一緒に行こう！」

俺は手を差し伸べた。

月守さんは腕で涙を拭い、  
俺の手をしっかりと握った。

「はい……ありがとうございます……」

その声は涙のせいで、ぎこちなかった。  
だが、その意思は強かった。確実に想いは俺に届いた。  
それだけで十分だ。

「よし！ではそろそろ行くか！」

桜夜先輩が囃ったように声を出した。

「はい！行きましょう！先輩」

威勢よく先輩に言葉を返す美唯。

「さあ、行こう！月守さん」

「はいッ！」

俺達は脱出の術を探すため、再び歩み始めた。

脱出する術。

それを探しに仲間と共に歩く。

「しかし……」

「どうしたんですか、桜夜先輩？」

此処は林。

脱出する術と言うが、具体的にどんな事をしていいのか分からない。

「中沢くんだけ異性だな」

「ブブウウウ                    !!!」

思わず吹き出してしまった。  
何を言い出すんだ先輩は!?

「確かに潤だけ男の子だねえ……」

確かに周りは女の子。

今まで気が付かなかった……。

いや、そんな事を思う余裕が無かったんだ。

「じゃあ、潤先輩はハーレム状態ですね」

「ハーレム状態って…おい……」

まあ、現実世界ならハーレム状態だろう。  
だけど、此処はこんな世界だ。

ハーレムは不成立と言わざるを得ない。

「まあ、いいさ。破廉恥な行動だけ止せよ」

何故か俺に注意をする桜夜先輩。

俺は何をしたのだろうか？

善からぬ行動なんてした覚えもない。

「特に夜中とかですか？」

月守さんも話しに乗る。

出来れば乗らないで流して欲しかった……。

あ、自然な流れで月守さんが会話に入った……。

それほどまで俺達を信用してくれたか……。

「いや、最近の若者の男子は大胆だと聞く」

ため口の月守さんに対し、何も文句も桜夜先輩は言わなかった。

「へえ〜そうなんですかあ……。」

話の趣旨が変わっているような……。

二人共、嫌な目付きで俺を見つめる。

そんな目で見ないでくれ……。

俺の人格を勝手に作らないでくれ……。

「潤はそんなことしませんッ！！ 一生ッ！！」

美唯が二人い向かって声を上げる。

力強い声で。

ありえない事を。

「えッ！？ 一生ッ！？」

動揺を隠せなかった。

一生だと、俺の中沢家は滅ぶ。

「ほお、一生か……」

先輩の顔が怪しい。  
でも、流石に一生はない。  
俺もそれは困る。

そんな事を話している間に、  
俺達が良く知っている所に着いた。

「桜凜高校……」

そこは初日に行ったときり来てなかった、桜凜高校。  
別れを告げた桜凜高校だった。

8話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



8話・(2)

「此処なら何か手掛かりがあるかもしれない」

確かに桜夜先輩の言う通りだ。

この異世界では、桜凛高校と桜凛武装高校の生徒しかいない。という事は、最も身近で関係が深い所はお互いに校舎。此処なら何か分かるかもしれない。

「……………」

だが、俺は気が進まなかった。

それは此処で銃撃があったから。

どんな状況か、わからない。

だが、恐れてはいけない。

俺は前に進む。

正面玄関が近くなると、鼻を刺す激臭がした。

今までに経験したこともない臭い。

まさか、この臭いは……………。

「此処でもか……………」

先輩が下を見る。

「これは……」

物言わぬ肉魂と化して転がっている人間。俺ははそう思わずにはいられなかった。

折り重なる肉が形づくる地面……。つまりは死体。数はかなり多かった。

「うう……」

美唯が左手で口を押さえる。

「そ、そんなぁ……」

月守さんはその光景をただ見つめていた。

ああ！？侑達は　！？

「侑ッ！？菜月ッ！？聖夜ッ！？」

俺は夢中でその地獄の中へ駆け出した。

夢中で探し走る途中、血で滑る地面に足を取られて何度もよろける。

それでも転ばずに、立ち直り、走ることを止めなかった。

確かにあの時、侑達は此処に行った。

こんなに危険な場所だったのか……。

こんな所に侑は行ったのかッ！？

この死体の中に侑達の死体があってもおかしくない。

そんな事考えたくない……。

だが、これだけ酷い状況の中で侑達は逃げれたのだろうか。

美唯が俺に向けて、夢く声を漏らした。  
だが、俺には美唯の声は聞こえなかった。

「潤……」

俺は夢中で探す。

侑達の無事を確かめるために。

「此処から離れるぞッ!!」

桜夜先輩は俺に警告する。

俺の直感も此処から離れろと命令する。

本能的に此処は危ない。

「……分かりました……」

俺は死体が転がる景色を視る。

みんな……。

痛かっただろう……？

苦しかっただろう……？

そして、こんな所で死んでなによりも悲し過ぎるだろう……。

死ぬ間に何を求めた……？

必死に助けを求めたんじゃないのか……？

俺は溢れそうになる涙を必死に堪え、その地獄から走り去った。

侑達はその場地獄にいない事を信じて。

そして、俺達は裏庭へ行つた。

「こんなことが……」

こんなことが在ってもいいのだろうか？

いや、人の殺し合いが良いはずがない……。

「……………」

全員が黙ってしまった。

こんな事が起こっている世界にいま俺達がいる。

殺し合いが日常。それがこの異世界。

俺達は異世界の是非を再び認識する。

逃げる術すらないのだろうか……。

いや、逃げててもこの地獄は続くだろう。

何処へ逃げても。

だから、俺はこの惨劇に挑む。

逃げる術もなく、ただ立ち向かうだけだ。

「君達……大丈夫か？」

桜夜先輩は精神的なダメージは受けていないようだ。いや、表情には出さないだけかもしれない。

「潤？大丈夫？」

「美唯こそ……」

俺達はどうにか平然を取り戻した。

だが、あの光景が俺の頭に、取り憑かれるようにして離れない。

「月守さん？」

「あつ！うん……大丈夫……」

その声は怯えていた。

だが、虚ろな目はしていない。

昔の月守さんなら、心が折れていただろう。

「では、校舎に入るぞ……！！」

俺達は決心し、先輩を先頭にて俺達の見慣れている校舎に入る。

あの頃の記憶が蘇る。

いつも此処で授業を受け、仲間と共に、“俺の日常”を送っていた。だが、その日常はもうない。

音も無く手の平からすり抜けていった。

あっけなく、無惨に……。惨烈に……。獰悪に……。悲哀に……。

そして、容易く……。俺の日常を奪っていった。

「特に変わった様子はないな……」

だが、周りのガラスは割れ荒らされている。まるで廃校を思わせた。

校舎をしばらく歩く。

『ガコン！』

先輩が扉を開けた。

この音は、俺は聞きなれている。

そこは屋上へと出る扉。

「屋上か……」

屋上……。

俺もあの時授業をサボり、屋上にいた。

俺はこの屋上から見る景色が気に入っている。

「良い眺めだな」

風が桜夜先輩の赤い髪を揺らす。なんだか、とても絵になる。

「本当だ……良い景色……」

月守さんは屋上に入りはしたことがないのだろうか？  
月守さんも景色を初めて見るように感嘆する。

「……………」

俺も眺めた。

この景色は色褪せてない。

お気に入り景色のままだ。

「では、食事にするか」

桜夜先輩は昨日の夕飯で食べ残った、  
ご飯をおにぎりになっていた。

「さあ、食べたまえ」

先輩は美唯と月守さんにおにぎりを渡す。

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます！ 沙耶先輩」

二人はおにぎりを受け取った。

「中沢くんも受け取りたまえ」

おにぎりは異常に俺のだけにかかった。

「随分と強大サイズですね……………」

顔ぐらいあるんじゃないかな……。  
よく握れたな……。こんなおにぎり……。

「男はきちんと食べたほうが良いぞ？」

俺はおにぎりを受け取る。

おにぎりと言うかボール。

『よし！サッカーでもするか！』  
と言いたくなる大きさ。

こんなの食べきれない……。

俺はボール型のおにぎりを受け取った。

「重っ！？」

腕から毀れ落ちそうなくらいな重量だった。  
筋トレ道具にはもってこいな重さだった。

「ほら、落とすなよ」

「分かってますよ……」

予想より重かった。

これは流石に食べれないな……。  
夕飯まで残しとこ……。。

「こっつして皆で食べるとお昼休みだよね」

美唯は近くのベンチに座る。

そのベンチは、1日の日に俺が昼寝をしたベンチだ。



「そうだな」

先輩とはつい最近会ったのに、  
なんか何年も前みたいなきもちがする。

昔のように皆でご飯を食べれる世界に戻りたい。

ちよつと先輩作った弁当見てみたいかも……？

そう想いつつ、俺はサッカーボールを食べ始めた。

「中沢くん、食べるのが遅いぞ？」

皆、食べ終わっていた。

皆のは普通のおにぎりサイズ。

俺だけサッカーボールサイズ。

しかも、中身なし。

「あんなボール短時間じゃ食べれませんよ!？」

心の中だけで思っていたおにぎりの通称を、  
口にだしていつてしまった。

「な、ボールだと!？」

先輩がボールに反応する。

ちよつと失礼だったな……。

せつかく作ってくれたのにな……。

自重しないとな……。

「あれは、ボールではないぞッ!？」

「そんなこと知ってますよッ!!!！」

俺は、やっとの思いで、

『よし!ソフトボールでもするか!』  
と言いたくなるぐらいまで食べた。

俺はソフトボールをポケットにしまった。

もう、食べられない……。  
というか飽きた……。

「よし!皆食べたな?では……」

俺は食べ終わってないけど……。

だが、桜夜先輩がそう言い掛けた時……。

『ドカ            ンッ!!!』

「うわああ!？」

月守さんが短い声を上げる。

空間ごと揺れるような大音響がした。

「爆発音!？」

桜夜先輩は屋上のフェンスぎりぎりまで行き、外を見る。

「あそこか……」

俺もフェンスに手をかけ、外を見る。  
黒い煙が立ち昇っていた。  
爆弾か何かだろうか？

距離は近くもないし遠くもない。

「行くぞッ!!」

先輩が猛ダツシュで屋上から出て行く。

「桜夜先輩!？」

俺は桜夜先輩を呼び止めたが、先輩は行ってしまった。

「潤ッ!りんか!」

「ああ、俺達も行くぞ!」

「えっ!？」

月守さんは少し困惑していた。

俺達が戦場へ行くなんて思ってもいなかった顔だ。

「先輩に続けッ!!」

俺はそう高らかに拳を空に突き出し、俺達も先輩を追った。

これ以上の犠牲を出さないために。

異世界から脱するために。

9 話・(1) この世界の真意(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

9話・(1) この世界の真意

俺達は爆発音がした方向へ向かう。

黒い煙が立ち昇っている。

多分、現場はそこだろう。

「桜夜先輩　　！！！！待ってください！！！！」

先に入る先輩に向かって叫んだ。

すると先輩がスピードを遅めてくれた。

「月守さん、痛くない？」

月守さんは怪我人。

痛み止めを飲んでいいるから、痛まない筈だが、  
ただ痛まないだけ。

「このくらいなら心配は要らないっ！！」

月守さんは足が速い。

部活をやっているんだろか。

体力も十分にある。

「せっかく桜夜先輩が足を遅くしてくれたんだから速く行こう！！」

体力が有り余っている美唯は、逸早く先輩の所へ走って行く。

「ああ！美唯ッ！待って！」

「了解！」

全員スピードアップする。

そして、ようやく先輩に追いついた。

「何だったんですか！？さっきの爆発音は！？」

爆発音。

それはさっき屋上で聞いたあの爆発音。

「わからない。だが、確実に戦闘は起こっている」

戦闘。

人の殺し合い。

また、そんな事が起こっているのか？

黒煙がだんだんと近くなる。

「止まれ！！」

先輩の声と共に俺達は停止する。

周りには家などがある普通の道路だ。

「此処を右に曲がればもう戦場だ。そんな危ない所まで君達が着いて来る必要はない！」

右に曲がれば戦場。

此処からでも、様々な音が聞こえてくる。

「私は戦場へ行く。君達は此処で待っていてくれ！」

俺達を戦場には連れて行きたくない。

それが先輩の想い。

なら、俺達はその想いに従おう。

「分かりました。桜夜先輩も無事で」

俺達は此処で待機。

此処が安全と言う保障はないが、

戦場よりは比べ物にならない位に安全だろう。

「中沢くん。これを」

先輩は抜刀状態で三日月宗近を俺に渡す。

俺は迷わずに受け取った。

「幸運あれ！」

先輩はこの道路を右に曲がり、

戦場へ駆け抜けて行った。

俺はその姿を眼に焼き付けた。

「桜夜先輩……どうか無事で……」

俺達は右へ続く道路から、死角である場所に隠れた。



「沙耶先輩……」

だが、嫌な予感は一切しない。  
俺は桜夜先輩の強さを知っている。

「潤、この辺りなら誰もいないみたいだね」

「そうだな」

この辺りは誰もいない。

だが、警戒は怠らない。

先輩……。どうか無事で……。

……。……。……。

俺達は待機を続ける。

様々な音が混じり合って聞こえてくる。

『ドカ                    ンッ！……！……！』

「うおお！？」

不意に爆発音が聞こえた。

俺の鼓膜を刺激する。

「うわああ！？」

月守さんは慌てて耳を塞ぐ。

美唯は眼を閉じ、黙している。

あの凄まじい爆発音。

その爆発音も人を殺す音。

なのに俺はこうして黙ることしか、  
自分の身を守ることしか出来ないのか？

いや……。

俺は能力に目覚めた。

この能力があれば、仲間を守れる。

俺は左眼を見開く！

左眼が熱く滾る。

そして、俺達を囲む結界を創る！

## 9話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

9話・(2)

「この結界……」

月守さんには印象深かったようだった。  
どうやら俺の結界は自由に発動が可能のようだ。

「潤、無理しないでね……」

美唯は結界のことに話を触れない。  
これも美唯なりの優しさだ。

「じゅ、潤先輩……左眼の色が……」

月守さんは俺の左眼を見ながらそんなことを言う。  
左眼の色がどうしたのだろう？

「俺の左眼の色がどうした？」

「いや……その……もう普通なんだけど……」

もう普通……？

つまりはさっきまでは違ってたっていう意味か？

「結界を作った瞬間に左眼が黒く光って……」

左眼が黒く光る……？

発動時と言うことは、左眼が熱く滾るつた時に、左眼も黒色に光ると言う事が……？

「でも今は普通？」

「あ、うん……」

つまり、熱く滾る間のみ、左眼が黒く光るらしい。俺の眼にはそんなことが起こっていたのか……。

結界を発生したのは良いが、やはりメリットとデメリットがある。

『メリットは仲間を守れること』

『デメリットは周りの音が聞こえないことだ』

だが、これは仕方がない。

外部からの進入が不可能だからだ。

だからこそ、仲間を守ることが可能だからだ。

俺は『仲間を守る』を選ぶ。

それが、俺にできること。

それが、俺がしなくてはならないこと。

すぐ近くで戦闘が行われている。

結界で身の安全が保障されたから、こんな事を思ったのかも知れな

い。

「……………ん？」

俺はあることに気づいた。

今まで、俺にはそんなことを思う余裕がなかった。

恐怖でそんなことを思えなかった。

眼前で起こることで精一杯だった。

「俺達は……………何で……………戦っているんだ……………？」

戦い。それは、人同士の殺し合い。

この異世界では、それが日常と言ってもあながち間違いではない。

「潤先輩？何かいった？」

「……………」

俺は黙り込み、考える。

まず、戦闘の理由。

それは、桜凜武装高校戦術科の命令。

それに従うのが校則。

だが、これは人間の心理を考えるとおかしい。

武器と命令を出したって、そうは行動は起こさないだろう。

例えば、桜凜高校で考えると、校長先生が全員に武器を渡し、

『桜凜武装高校の全生徒を殺害しろ』

と、桜凜高校の生徒に命令をしても、誰一人従わないだろう。例え、その人間の命令が絶対的なものだとしても。

何故、従わないか。

そこには、”理由がない”からだ。

『自分の命がかかっている』

『自分の大切なものがかかっている』

もしも、命令に”それら”の理由があればどうだろう？

その『命令』に従わなければ、”それら”は失われるとしたら？

それが、例え、狂気な命令でも……。

”自分” ”大切”を守るためなら、誰だって戦うんじゃないのか？

それが”人間”なんじゃないのか？

だが、今、俺達はこの異世界の中で戦っている。

その行為に”理由”はあるのか？

何故だ？

なんのために？

どうして、俺達を殺す？

疑問は膨らむばかりだ。

俺は桜夜先輩の一言を思い出してみる。

『この異世界には、桜凜高校の生徒と桜凜武装高校の生徒しかない。』

そんな状況だったら、誰でも相手を全滅させれば元の世界戻れる

と思ってしまうだろう？

細かいことまでは知らないが、そのようなものだと思う』

.....。

俺は気が付いた。

これは、”間違い” なんじゃないか？

心臓が、ドクンッと大きく脈打つ。

本当にただ”異世界”から脱出するための命令なのか？

本当に”それだけ”の命令なのか？

本当に”脱出”のために、俺達を殺すのか？

ただ、それだけの命令ならそれはただの”狂気”

誰も従わないだろう。例え、戦術科の命令だとしても。

だが、桜凜武装高校の生徒はその命令を実行している。

何故だ？

その理由は簡単だ。

「桜凜武装高校の生徒が俺達を殺すのは、もっと違う理由があるんじゃないか.....？」

「え！？それってどういう.....」

月守さんは少し身を乗り出す。

根拠はない。



俺は逆の立場で考えてみる。

もし、俺が桜凜武装高校の生徒だったら、俺はそんな狂気な命令には従わない。

つまりは、桜夜先輩と同じ道を通るだろう。

だが、その命令に”俺の大切”がかかっているとしたら……。その命令を達せなければ、100%の確立で”俺の大切”が失われるとしたら……。

だとするなら、俺の思考は”逆転”する。

「この異世界は……」

額を汗が濡らす。

背筋が凍るような感覚も同時に襲われる。

「ただ、人がいなくて、電気が使えない世界ではなくて……」

桜凜武装高校戦術科の命令が正しければ、

この異世界をどうしても脱しなければならぬ。

そうでなくてはいけない”理由”が必ずある。

異世界から脱するためには、

俺達を皆殺しにしなくてはいけない。

皆殺しにしてまで、命令を実行しないとけない『理由』がある。だとするならこの異世界は……。

「桜凜高校の生徒を皆殺しにしても構わないくらい、脱さないとい

けない世界なんじゃないのか……？」

それが、俺の答え。

俺はこの考えは間違いだとは思えなかった。

だが、疑問は複数ある。

『何故、先輩はその命令に従わないのか？』

先輩は『そんな狂気な命令には従わない』と言っていた。それに、先輩は『詳しいことは知らない』と言っていた。

そこから、導き出せる答え。

先輩はこの異世界を脱さないといけない理由を知らないから。だから、先輩は俺達と『協力ができる』

この異世界の真意を知らないから。

頭がズキンツと痛み出す。

「俺達は……この世界の事を……」 知らな過ぎる”……………」

10話・(1) 仲間の真意(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

10話・(1) 仲間の真意

俺達は……。

この”世界”のことを知らな過ぎる。

ずっと、桜凜武装高校の命令をずっと『狂気』だと思っていた。いや、思い込んでいた。

その命令の真意を俺達は知らない。知らないから『狂気』だと思っていた。

もしも、俺の考えが正しければ、俺達の方が”狂気”になる。

人を殺す。

しかも、それは数人ではなく、何百か何千の単位。

そんな命令を実行する桜凜武装高校。

人を殺さないといけない理由。

それを狂気だと言いざるを得ない。だが、必ずある”理由”がある。

俺達は”それ”を知らない。

「……………」

肝心な”理由”がわからない。

考えもつかない。

だが、”大切”が関係していることは確かだと思う。でなければ、人を殺すことなんて出来ない筈……。再び、黙して考えた。

……。……。

俺は自分が、桜凜武装高校の生徒という設定にする。

人には必ず大切なものがある。

もしも、人を殺さなければ『大切』が失われるとしたら……。

俺は人を殺せない。

だが、人を殺さないと『大切』が失われる。

俺は即答は出来ず、しばらく考え込むだろう

これは、あくまで『俺の場合』

当たり前だが、人それぞれ考えも全く違ってくる。

殺す者もいれば、殺さない者、あるいはそれ以外の者もいるだろう。

この異世界は……。

”それと同じような状況なんじゃないのか？”

だから、桜夜先輩のように協力する者や、俺達を攻撃する者がいるんじゃないか？

血液が逆流するように、身体ゾクツとする。

そして、命の鼓動が速まった。  
手には、桜夜先輩から受け取った刀がある。  
その刀が、ガクガクつと音を立てて揺れはじめた。

「潤先輩？」

そんな俺の姿を見て、月守さんが声をかける。

落ち着け……。

まだ、本当かなんてわからないんだ……。  
あくまで、俺の一つの考えに過ぎないんだ……。

落ち着け……。

心に言い聞かせるが、鼓動は速まるばかりだ。  
頭が妙に痛い。

どうして、人間は悲しいことがあったとき、頭が痛むんだろう？  
この痛みは何処から生まれたものだろう？

このジーンつとする痛み。

頭に響き渡るこの痛み。

誰かを傷つけたときの痛みにも似ているかもしれない。

俺は落ち着かせようと、眼をおもつきり閉じる。  
だが、痛みは引いてくれない。

俺が悪い方へ考えると、それに反応するかのように頭が痛みだす。

「ど、どこか痛いとか……？」

月守さんは横腹に傷を負っている。  
それなのに、俺の身体の心配までしてくれる。

駄目だ……。

考えたってしようがない！

落ち着け！中沢 潤！

「だ、大丈夫だよ！何処も痛まないし平気だよ」

「うそ……絶対にそれはうそッ！」

俺はまた……。

人に心配をかけている。

本当に駄目な奴だ……。

俺は……。

10話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
specta  
s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



「……………」

だが、言葉が出なかった。

心配を解こうとする言葉が出ない。

ただ黙っているだけだった。

「なにか分かったなら教えてよッ！潤先輩ッ！」

いずれは言わないといけないってことは分かっている。

だが、言ってしまったっていいのだろうか？

心の中では迷いが生じていた。

「潤先輩ッ！」

これを言ってしまったら、俺達の関係はどうなってしまう？  
今のままでいられなくなる……………。

俺は仲間の決別を何よりも恐れていた。

仲間が決別すれば、それは”死”にも繋がる。

いや、それを恐れてはいけない。

俺達は、この世界のことをもっと知らないといけない。

なら……………。

俺は『仲間』を信じた。

俺が全てを話し終わったあと、月守さんは黙り込んだ。  
その俺の話を、美唯も傍らで聞いていた。

「ふう……あははっ！」

月守さんがいきなり笑い出した。  
思ってもいない反応だった。

「え……？月守さん……？」

「なんでそんなこと言えなかったの？あははっ！」

まだ、その声は笑っていた。

俺は……仲間という関係が崩れるのを恐れていた。  
だから、話すのを躊躇った

だけど……。

なんでだろう？

こつもあつさり否定されると、  
身体も精神も、落ち着いた気がする。

「そんな事で、あたし達がバラバラになる訳ないじゃん！あははは  
はっ！」

「ッ！？」

俺はこの異世界に墮<sup>お</sup>ちて、考え方が変わってしまったんだ……。いや、俺は変わってしまったっていたんだ。

殺し合いが日常の世界。

そんな恐怖と理不尽な世界の中、俺達は手を組み共に行動していた。その時俺は、身を守ってくれる人。共に行動してくれる人を仲間だと思っていた。

だが、本当の仲間ってのはそんなもんじゃない。

俺の中で、『仲間』という言葉の意味が薄れてしまっていた。

『仲間』ってというのは……。

どこまでも信じ合って、どこまでも助け合って、いつまでも共にいる。

それが、『仲間』ってもんじゃないのか？

心で通じ合っていることを『仲間』っていうんじゃないのか？  
決して裏切らないことを『仲間』っていうんじゃないのか？

俺の奥底の想いが、激情する。

その激情が、眼を刺激する。

「そつだよ！潤！それが仲間っていう存在でしょ？」

美唯も口を挟む。

俺はこんな世界でも、”かけがえのない”ものを見つけた。  
どんな世界でも”かけがえのないもの”は俺の近くにあった。

それが、仲間。

「ありがとう……美唯……月守さん……」

俺の一番大切なもの……。

自信を持っていえる。

俺が一番大切なものは”仲間と過ごす日常”

それを、『守るため』なら俺は戦う。

この異世界で戦闘が起こる理由が少し分かった気がする。  
だが、本当の理由は分からない。

俺はこの異世界の”ほんの一部”しか知らない。

「一緒に、その理由を探そう！潤ッ！」

「ああっ！」

俺と美唯は強く手を握り合い、誓った。

今の俺に、陰りなんて一つもなかった。

今、俺はその扉を開け放った

11話・(1) 真実へ近づく為に(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

11話・(1) 真実へ近づくと

俺は信じる。

仲間の無事を。

「沙耶先輩……大丈夫なのかな……」

だが、桜夜先輩は一向に帰ってこない。  
こんなに遅いのは今までにない。

俺達は結界の中にいる。

その為、安全は保障されている。

「ああっ！桜夜先輩！」

美唯が一点を見つめている。

俺達もその方を見る。

「ああッ！本当だ！桜夜先輩！」

俺は結界を消した。

そして、俺達の方へ先輩がゆっくりと歩き近づく。

「君達、無事かね？」

「はい！無事です！」

先輩を見ている。

特に傷などはなく出血もしていない。  
だが、先輩が身に着けている制服は少し汚れていた。

「そんなに見ないでくれ」

「あつ！すいません！」

慌てて眼を逸らした。

つい、見入ってしまった。

いけないいけない。

俺は自分で気合を入れる。

喝っ　　！！！！

「潤先輩、何考えてたの？」

「何も考えてない！」

月守さんはこういう話題ばかり乗ってくる。  
俺的には流して欲しい。

「じゃあ、無意識に！？」

「断じて違う！！」

俺は全力で否定する。

くそ……。

まさか、このような悲劇を招くとは……。

「潤はそんなことしないよ！一生！」

また、このパターンか……。

でも、一生はない。

言い切れる。

間違いなく。

そうでないと俺も困る。

俺は意識を集中させ、左眼を見開く。

再び俺達を囲む結界を創る。

「これからの行動について話し合いませんか？」

話し合いに集中できるように、結界をはった。

「これからの行動か……」

先輩は俺の言葉を繰り返す。

俺はこのままではいけないと思う。

俺達のこれからの行動。

それは、仲間全員で決めないといけない。

「そうです。俺はこのままだと駄目だと思っんです」

いままでの様に、放浪するだけじゃ駄目だ。

この世界、『狂気の命令』の意味を知らなければいけない。

「なにか気付いたのか中沢くん？」



「俺は今まで、桜凜高校の全生徒を殺害する桜凜武装高校の行為を”狂気”だと思っていました」

「思っていた？」

「はい。だけど俺達はその真の”理由”を知らない。だからまだ”狂気”だと決め付けるのは早いです」

人を殺す行為。

それが、赦される行為とは思わない。

だが、真の理由がありその行為をしざるをえない場合。

それは狂気ではない。

しっかりとした意思が働いている。

「真の理由……」

桜夜先輩が呟く。

「その真の理由を探すのがなによりも重要だと思っんです」

「……………」

桜夜先輩が目を閉じ考え込む。

「つまり、桜凜武装高校の生徒が桜凜高校の生徒を殺害するという行為には真の理由があるということかね？」

「はい。そうです」

再び先輩が考え込む。

しばらく静寂が訪れる。

「確かに一理あるな……」

そして、それに続いて桜夜先輩は再び口を開く。

「戦術科の命令は絶対だが、令を受けるのはロボットではなく感情のある人間。桜凜武装高校の生徒命が、”異世界脱出”のためだけにあんな命令を実行する筈がない。だとするなら……私達が知らない、真の理由がある……」

「俺も武器を持たされて、そんな命令を受けても従いません。だけど、真の理由があるのなら……」

それが人間。

理由が小さいほど、その行動力も少ない。  
理由が大きいほど、その行動力が多い。

「でも、その真の理由ってどうやって探すの？」

美唯の意見は的を得ていた。

それが、一番の難所。

「知ってる人に聞けばいいんじゃない？」

何気なく言った月守さんの一言。

そんな簡単に……。

ん……？

「確かに、いけるかもしれない！俺達は桜凜高校の生徒だけど、先輩は桜凜武装高校の生徒だ！桜夜先輩なら真の理由を知っている生徒に聞けるかもしれない！」

俺達は桜凜高校。

知っている人は、恐らく桜凜武装高校の生徒。

俺達が聞くということは、自殺行為だ。

だが、先輩ならどうだ？

先輩は桜凜武装高校の生徒。

他の生徒に聞くことも容易いんじゃないのか？

「いや……無理だ……」

だが、先輩が言った言葉は俺の予想とは違った。

「え？どうしてです!?!」

どうしてだ？

そんなに無理な話ではない筈。

なのに先輩は無理と言いつつ切った。

「桜凜武装高校の戦術科から」桜夜 沙耶の殺害命令”が出されている」

「え……?」

全身が凍る付くようなことをサラっという。

桜夜沙耶の殺害命令……？  
頭の思考が途切れた。

「それってどういう……」

「わからないのか？中沢くんは結構、頭の回転が速いと思っていたのにな……」

桜夜沙耶の殺害命令。

それは文字通りの意味。

でも……どうして先輩が……。

「どうして、先輩が……」

「さあ？どうしてかな？」

だが、先輩は答えなかった。  
明らかにとぼけている。  
俺にはそう見えた

11話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

先輩はもう桜凜武装高校には帰れないのか？

いや、それほど桜凜武装高校も追い込まれているっていうことなのか？

その、殺害命令を出すほどに状況が悪い。

「桜凜武装高校って……酷い所なんだ……」

月守さんの身体は少し震えていた。

「そんなことはないさ」

桜夜先輩は言い切った。

だが、いくらなんでも殺害命令は酷過ぎる。それにも理由があるってことだ。

「これからどうします……?」

重い空気の中、美唯の声が聞こえる。

随分と状況が悪くなった。

俺達はこれからどうすればいい？

「もう、危険は避けられないか……」

俺は覚悟を決めた。

危険を侵してまでも、『真の理由』を知らないといけない。

「中沢君のいう通りだな……」

日が沈みかかっている。

もう、夜になってしまふ。

かなり危険を伴うが、逃げてはいられない。

「桜凛武装高校に行きませんか？」

静まっている中で、自分の意思をはっきり言った。

それはあまりに危険な一言だ。

だけど……。それ以上に……

「言ってくれるじゃないか……」

桜夜先輩はふふんと鼻で笑い失笑する。

確かに無謀な事だとは分かっている。

「敵の本陣に突っ込む行為だぞ？そんな簡単に言うものじゃない」

「分かっています。だけど……」

「どうしても”真の理由”を知る必要がある」

俺が言おうとしていた言葉が美唯の口から発せられた。

迷いもなく、透る声で。

「……………」

桜夜先輩が眼を閉じ、黙して考える。

俺達の命にも関わってくる。

だからこそ、慎重に決めなければならない。

「確かに、真の理由は知る必要がある。だが」

先輩は閉じていた瞳を開けた。

その眼はいつになく真剣な瞳だった

「今はその時ではない」

それが先輩の答え。

今はその時ではない。

「今のままでは、死に行くようなものだ。仲間を増やすことを最優先しないか？」

死に行くようなもの……。

先輩はともかく、俺達は桜凛高校の生徒。

結界を発動させて美唯と月守さんを守れても、桜夜先輩は守れない。

戦うのは桜夜先輩だけ。

俺達は殻に閉じこもって視るだけ。

いくら、先輩が強くても数が違い過ぎる。

俺はそれを見落としていた。

「そうですね……。今は仲間を増やすことを優先しましょう」



焦ってしまえば駄目だ。  
早まった行動をすれば俺達が死ぬ。

「はぁあぁ〜〜」

月守さんが安息したのか、息を漏らす。

「君達はこの方針でいいかね？」

「はい。良いと思います」

美唯も、この方針に賛成する。

「了解。沙耶先輩」

全員の意見がまとまった。  
これが俺達の今後の方針。

「よし。そろそろ行くか」

桜夜先輩が立ち上がった。  
それに続いて、俺達も立ち上がる。

「そうですね。行きましょう」

俺は左眼に意識を集中させ、結界を消す。  
結界を消しても、周りは静かだ。

「行くぞッ！」

俺達は再び歩き始めた。

真実へ近づく為に。

12話・(1) 対応を失った瞳(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s

で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

12話 - (1) 対応を失った瞳

19月4日

この日もまた、この世界で迎えた。  
初めてこの世界に堕ちたのは9月1日だった。  
だが、未だにこの異世界から脱する方法が掴めない。

今日から行動が本格的になるだろう。

俺達は、あれから近くにあった公園で一晩を過ごした。  
もちろん結界を発動させた。  
そのため、夜中に襲撃にあっても無事。  
その安全感もあって、昨日は結構寝れた。  
が、何故か左眼が痛い……。  
何でだろう？

早速、俺達は仲間を探しに行動を始めた。

「人もいませんね……」

此処は市街地。

桜凜市で最も栄えている所。

此処なら誰かいるかもしれない。  
希望を持って行っただが、この有様だ。

「随分と発展している所だな……」

桜夜先輩は周りの高い建物を見上げている。

「先輩はお買い物とかしないんですか？」

建物を見上げている桜夜先輩に美唯がそんな質問をする。

先輩の行動からするに、此処には初めて来たという感じだった。

「そうだな……あまりしないな……」

懐かしむようにそういう先輩。

太陽が照らしていて眩しい。

今日も良い天気だ。

「じゃあ！普通の世界に戻れたら買い物しませんか!？」

ハイテンションな美唯。

『普通の世界に戻れたら』つか……。

「おお！それはいいな！」

先輩が笑みを漏らす。

「ああ！あたしもいい!？」

月守さんも話しに加わる。

俺は加わらないでその話を聞く。

「ああ、もちろんとも」

なんだか楽しそうに話している。

その内容は現代世界に戻れたら……という話。皆、目を輝かせて話している。

笑い声も聞こえる。

話を聞いている俺も楽しい気持ちになれた。

「潤は普通の世界に戻れたらなにがしたい？」

いきなり、美唯に話を振られた。

「そつだな……」

普通の世界に戻れたら……。

俺は何をやりたいのだろう？

俺は考え込む。

「また学校に行きたいかな……」

再び、あの日常に戻りたい。

それが俺の望み。

「そつだね潤……また戻れるといいね？」

「ああ、もちろん全員でな」

全員。

俺だけ戻ったて、俺の日常は取り戻せない。  
誰一人欠けたら駄目なんだ……。

「りんかは？」

話を月守さんに振る。

「あたしは、妹に会いたい」

妹……。

月守さんに妹なんていたんだ……。  
知らなかった……。

「え？妹いるの？」

美唯も初耳のようだ。

「うん。今、中3」

中学3年生ってことは、  
月守さんとは一つ違いか……。

「そう……ちょうど受験生か……」

でも、どんな妹なんだろう……。  
月守さんが可愛いから、妹も可愛いと思っただけだな……。  
俺は想像を膨らませた。

「桜夜先輩は何をやりたいですか？」

次は先輩に話しを振る。  
何も考えていなかった先輩は考え込む。

「そうだな……君達と買い物が見たいな」

先輩は微笑みながらそういつてみせる。

「そうですね！楽しみですね！」

お互いに笑い合う。

買い物か……。

確かに楽しみだな。

なんか、とってもいい光景だな……。

「じゃあ、美唯先輩は？」

残りの一人、美唯に問いかける月守さん。

「秘密です」

美唯が即答した。

はて、何をやる気なんだろうか……？美唯は……。

「え……！秘密!？」

「秘密ですっ！」

美唯は『秘密』言い切る。



聞いてきた本人が秘密か……。

「ほお。一人だけ秘密か……」

そして、再び全員が笑い合う。

なんだか、あの日常に戻ったみたいだ。

だが、それは”たった一つの音”で崩れ堕ちる。

『ズド　　ン！！！』

「　　ツ！？」

いつも唐突に訪れるこの音。

俺達は銃声のした方へ振り向く。

「あそこか……」

桜夜先輩はその場を凝視していた。

俺達の意味はもう決まっている。

「行くぞ！！」

その先輩の言葉と同時に、

俺達はその場へ駆け始めた。

戦場が見えてきた。

これで何回目の戦場だろう？  
が、今日の戦闘は今までとは違った。

「伏せる！！」

左右にいた美唯と月守さんの頭を手で握り、地面に叩きつけるような勢いで伏せらせる　！

『ズド

ン！！！！！！』

この高音に左眼が反応　して左眼が熱く滾る　！

「はあっ！！」

俺は一気に気力を集中させる。

その瞬間、俺達の周りを囲むような結界ができた。

結界の中にいるのは3人。

俺と、美唯、月守さん。

先輩は意図的に入れなかった。

先輩は既に銃を発砲した人と戦闘を繰り広げている。

先輩も結界内に入れてしまったら、銃を発砲した者も入ってしまう。

だから、俺達だけを守るこの大きさにした。

結界の外では、先輩が戦闘している。

戦場が近い。だから俺は結界をそのまま維持する。



治まらない激痛。

「じゅ、潤先輩!？」

二人の声が聞こえる。

だが、激痛で他のことが考えられない。  
なんなんだ……。この激痛は……。

12話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

12話・(2)

俺の意識が闇へ沈みかける……。  
激痛は収まらないまま……。

深い深い闇の中へ……。

「潤！結界を消して！」

美唯の叫び声が俺に響く。

結界を消す……。

結界を消せば、美唯、月守さんを守る術はなくなる。  
それだけはしたくなかった。

俺の命に代えても守ると誓った仲間。

声に出したいが、声にならない……。

「潤……お願い……」

美唯の雫が俺の顔に落ちる。

俺は

また、美唯を泣かせている

俺は残されていた力を振り絞り、左眼を見開く

！

「うおおおお

!!!!!!」

左眼が熱く滾る　！

この激痛の中でも、はつきりとわかる感覚。

その瞬間、俺の身体を蝕んでいた激痛が痛みが退いた。  
その代償として、俺の前から結界が消える。

「はあはあはあ……………」

全身は汗で湿っていた。

あの激痛が嘘のように今は痛まない。

なんだったんだ…………。

左眼の激痛…………。

全身を蝕む激痛は…………。

「潤！」

美唯が俺の胸に飛び込んできた。

俺はその美唯を両手でしっかりと受け止めた。

「美唯…………ごめん…………もう大丈夫だ」

胸が跳ね上がって鼓動を打つ。

額にも汗が滲む。

「よかった……潤……」

俺は美唯を抱きしめた。

もう今は何処も痛くない。

本当になんだったのだろう……。さっきの激痛が幻のように思えた。

『ズド　　ン！！！』

「　　ッ！？」

俺は銃声の方を見る。

そっだ……。

此処は戦場だったんだ……。安息なんて許されない場所なんだった。

「沙耶先輩は！？」

桜夜先輩……。

俺は周りを見渡すが、先輩の姿はなかった。

「桜夜先輩……」

俺達をいつも守ってくれる先輩がいない。

だけど……俺が絶対を守る……。



俺は両手を広げる。  
俺の手には、何も握られていない。  
守るための武器も……。  
今回ばかりはなかった。

「とにかく、この場からは離れるぞ！」

俺は二人の手を握り、  
走り出す。

少しでも安全な所に行かないと……。

俺達は疾走する！

『ズド　　ンッ！……！……！』

「はぁッ！？」

前方から銃声が鳴り響いた。  
前方でも戦闘が……。

「こつちだ！」

俺は美唯と月守さんの手を握り、  
右に右折する！

「潤……」

前方、後方は敵がいる。





だが、俺達には銃弾は来なかった。

俺は顔をゆっくりと上げ、女生徒の顔を凝視する。

「ッ!？」

女生徒は驚愕の表情を顔に貼り付けたまま頭から大量に血を流していた。

あまりの惨劇に、俺の胃が噎せ返えってくる。

俺は慌てて手を口元に当てた。

俺達の前に女生徒がぱたつと音を出して倒れ、その後ろに人影が現れた。

その人影は銃を構えていた。

構えていた銃口は、倒れるまえに女生徒の頭があった場所だった。

つまりは、この女生徒を撃った本人……。

俺の脳裏に、あの惨劇な光景が蘇る。

俺の顔から血の気が引く……。

死体を見るのは初めてじゃない……。

だけど……あまりにも生々し過ぎて、残酷すぎる……。

「人を殺めし者には、法より重い伐<sup>ばっ</sup>を」

女生徒の死体の後ろで、少女の声がした。

俺は顔を上げて少女の顔を見る。

その少女は、白いショートヘヤーで赤い瞳をしていた。

『カチャッ!』

その少女が、俺達に銃口を向ける。

「止める……」

俺は美唯と月守さんを守るために両手を広げ、少女を睨みつける。

「……………」

少女は真っ直ぐな瞳で俺達を凝視する。

銃口はこつちを向けている。

その銃は俺の見たことがない銃だった。

フレーム付近には、大型のナイフが付いていた。

暫く睨み合いが続いた。

「翠華、止めておけ」

その少女の後ろから少年の声がする。

少年の声は陽気なものではなく、クールなものだった。

「……………」

少女は構えていた銃を下ろした。

それと同時に少年が俺達の前に歩み寄る。

「桜凜高校の生徒か……」

桜凜高校の生徒……。  
そう少年は呟いた。

この少年少女は俺達とは制服が違う。  
つまりは、桜凜武装高校。

「安心しろ。お前らを殺すつもりはない」

殺すつもりはない……。

確かに殺意は感じられない。

少年は大きな銃。スナイパーライフルを背負っていた。

だが、明らかに雰囲気桜夜先輩とは違う。  
重たい感じの雰囲気だ。

「貴方達は……？」

その重たい雰囲気の中、美唯は口を開いた。

「俺は、桜凜武装高校射撃科2年Bランクの河坂 ガイ。あの女は  
清王 翠華」

あの少年は「河坂 ガイ」

あの少女は「清王 翠華」

そして、二人とも桜凜武装高校の射撃科だろう。  
少女の武器は銃だったからだ。

「俺は、桜凜高校2年の中沢潤。コイツは成沢美唯。この娘は1年  
の月守りんか」

俺も自己紹介を済ます。

「覚えておこう」

その後は沈黙が続く。

何を話せば分からない。

『ゴロロロロロロツ!!!!!!!!!!』

雷!?

俺の後方から雷の音が聞こえた。

振り返ると、青く光っているのが見える。

「雷……」

少女も俺と同じ所を視る。

「ああっ!! 桜夜先輩だよ! きつと!」

この世界は電気は使えない。

だが、先輩の刀『雷切』は雷魂が宿っている。

「至高しじこうの桜月導おうつきでんどうか……」

少年はなにかを呟いた。

「行くぞ、翠華」

少年は雷のした方向に向かって歩き始めた。

「……………」

少女も歩き始めた。

「潤先輩……………」

月守さんが俺の裾を引っ張ってくる。

「俺達も行くぞ」

俺達も桜夜先輩のいる方向へ歩いて行った。



13話・(1) 真実へと続く道の途中(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

13話・(1) 真実へと続く道の途中

俺達は通常の雷の逆袈裟に光る奇妙な雷を眼にした。

明らかに普通では、ないとわかる雷。

だから、俺達は先輩の仕業だと分かった。

先輩が俺達と合流するために、起こした雷だろう。

たしか、ここら辺から光ったよな……。

前方には大きなビルがある。だが、そのビルも廃墟だ。

此処は開いている広場のような所だった。

銃声はしない。

どうやら戦闘は行われていないようだ。

そのビルの前に見える人影がひとつ。

「桜夜先輩ッ!!!」

俺達は同時に先輩の名を呼んだ。

先輩の姿が視えた。

戦闘中でもなさそうだった。

俺達は再び合流する。

「おおっ！中沢くん！よく無事でいてくれた！」

先輩の一言でようやく実感した。  
俺達は無事だったんだ……。  
絶体絶命な状況もあったが、どうにか無事だ。

「ッ!？」

先輩は後ろから来た、少女の方を見る。  
桜夜先輩は険しい表情を崩さなかった。

「まだん アンビネスト  
魔弾の誅伐人……」

まだん アンビネスト  
魔弾の誅伐人……？

確かに先輩はそう呟いた。

なんだ？それは……？

「しこう おつぎせう  
至高の桜月導」

少女は先輩に向かってそう言った。

しこう おつぎせう  
至高の桜月導……？

俺の知らない世界が展開されていく。

「桜夜先輩ッ!どうしたんですかッ!？その傷!？」

不意に美唯の声が響く。

傷……？

桜夜先輩に傷……？

あの先輩に傷……？

あんなに強い……桜夜先輩に……？

俺には信じ難いことだった。

「なに、気にすることはない。ただ腕の表面を切っただけだ」

先輩の右腕には、確かに少し血が滲んでいた。

本当に……あの桜夜先輩が怪我をしたのか……。

「少し待っててください！今治療を……」

治療道具を出そうとした美唯を、先輩は右腕を出し止める。

「この程度の傷で治療はいらんよ」

治療を拒む先輩。

そして、俺の所まで歩み寄る。

「よく……無事でいてくれた……」

先輩は優しく微笑んだ。

先輩は、仲間の無事を心から感嘆している。

だが、無事でいられたのは、俺のお陰じゃない。

「俺達が無事でいられたのは、あの人のお陰です」

俺は後ろで立っている少女を視る。

俺は何もしていない。まったく。

月守さんが銃で撃たれたときも、俺は何も出来なく、立ち竦むだけだった。

あの銃弾が当たらなかったのは、月守さんの持ち前の運動神経と反射神経のお陰だった。

その後だってそうだ。

結局、また俺は何も出来なかった。

「清王翠華……」

先輩はその少女を見て、そう呟いた。

なんで……先輩はあの少女の名前を知っているんだ……？

確かに、あの少女の名前は、『清王 翠華』だ。

その少女は、ただ、桜夜先輩だけを凝視していた。

「桜夜沙耶」

なんなんだろう……？この空気は……。

いつになく張り詰めた雰囲気だった。

しかし、何故、二人とも名前を知っているんだ……？

「そうか……君が中沢くん達を助けてくれたのか……」

先輩が少女に歩き寄る。

だが、それを拒むように声を上げる。

「別に助けてない。ただ誅伐をしただけ」

少女はハッキリとした口語でそういった。  
俺は少女と初めて会ったときを思い出す。

彼女はあ のとき、迷いも無く女生徒の頭を後ろから打ち抜いた。

あの惨劇な状況が、脳に突き刺さるように蘇ってくる。

暫く閑静が続く。

だが、その閑静を破ったのは、誰でもなく天候だった。

「雨……？」

俺の頭上に水滴が落ちる。

その水滴に反応するように、俺は空を見上げる。

空模様は濃い鼠色だった。

「酷い雨になりそうだな」

少年も雨に気付き、空を仰ぐ。

天気雨だろうか？

「一先ずビルに入るぞ」

桜夜先輩は廃墟と化したビルに向かって歩く。

「あ、はい」

美唯は俺を視てからビルの中へ入っていった。  
その表情は『潤も来るんだよ』と喋っている気がした。

「ああッ！あたしも行くッ！」

二人は先輩の後に着いて、ビルの内部へ入る。

俺は

「貴方がたも行きましょう！此処にいれば雨に打たれますよ！」

この雰囲気だと、少年少女とは此処で別れてしまふ。

俺達の成すべきことは、『仲間』を増やすこと。

「……………」

少年は空を軽く見上げながら、考えている。

その瞬間、雨は本降りになった。

『ザザザザザザアアア』

』

雨は激しく降り注ぐ。

この世界での雨は初めてだ。

「翠華、行くぞ」

少女にそういい、少年はゆっくりと廃墟と化したビルへ向かう……………。

「……………」

少女は何も喋らず、少年の後に続く。

複雑な気分だが、決別は避けられたようだ。

あの人達とは話が弾まない……。

タイミリミットは雨が止むまでか……。

雨が止んでしまえば、共にいる意味はなくなる。

それまでには、対話をしなければいけない。

「俺も行くか……」

このまま、雨に打たれても、風邪を引くだけだ。

まあ、雨も滴る良い男ともいうけどな。

今はそれどころじゃないな。

俺もビルの内部へと歩いていった。



13話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

13話・(2)

俺達はビルの中、一階のロビーにいる。

俺達の話し声は一切聞こえない。  
ただ、響くのは雨の音だけ。

『ゴロロロロロロロッ!!!!!!』

遂に雷も鳴り出した。

雷が響いた方向には、光も視える。

この雷で突き動かされたように先輩が動き始める。

先輩はゆっくりと少年の所へ歩み寄った。

「君の名前は？」

桜夜先輩の一言で俺の気持ちも相当軽くなった。

相手だって心を持つ人間なんだ……。

何を躊躇していたんだろう？

こういうのは、積極性が大事なのにな……。

「俺は、桜凜武装高校射撃科2年Bランクの河坂 ガイ」

彼の背中には、スナイパーライフルが背負われている。

一目で射撃科だと理解できる。

「ガイくんか……私は……」

「知っている。至高しじゅうの桜月導おうつきやうどう、桜夜 沙耶」

先輩の自己紹介を語ったのは、先輩ではなく、少年だった。

それに少年は、『知っている』と、

そして再び、『至高しじゅうの桜月導おうつきやうどう』と。

気になった俺は、先輩に問いかける。

「至高の桜月導ってなんですか？」

先輩となんらかの関係はあることは分かる。ただ、それが分からない。

「至高の桜月導。それが私の称号だ」

称号 ！？

桜凜武装高校には称号なんてあるのか？

「称号ツ！？」

俺はオウム返しに繰り返す。

「桜凜武装高校の生徒は一人一人に称号が与えられる。そして、その称号はその人物を顕す」

先輩が称号について説明をする。

称号というのは、その人の人柄に沿って付くらしい。

「突然で悪いが、貴方に問いたいことがある」

少年から先輩へ問いかけてきた。  
思ってもいなかったことだ。  
しかし、かえって好都合だ。

「ん？なにかね？」

先輩も予想外だったようだ。  
表情でそれが伺える。

「この世界は何処だ？」

単刀直入に用件のみを言い切る。

この二人は、この世界のことを知らないのか……？

「異世界だ」

その少年の問いかけに、先輩も単刀直入に答える。  
だが、異世界と聞いても、少年の表情は変わらない。

「そうか……あと一つ、問いたいことがある」

「なにかね？」

一つつてことはこれで最後なのか？  
俺は先輩に何度問いかけたか……。

「何故、殺し合いが起きている？」

殺し合い……。

その言葉を聞いたとき、俺の背筋に電撃が走るように凍る。

「戦術科の命令だ。『桜凛高校の生徒を殺せ』と」

先輩は怖いくらい冷静にそういった。

だが、このことを聞いても少年の表情は驚愕どころか、変化すらなかった。

その話の内容は近くにいる少女にも聞こえているだろう。なのに、少女すら態度を変えない。

なんでなんだ……？

どうして、そこまで冷静でいられるんだ？

俺からすれば、それが一番の驚愕だった。

「それは、確かな事実か？」

少年が追求する。

これは、確かな真実。

俺だって命を狙われた。

美唯だって……。

月守さんは被弾までしたんだぞ……。

「事実だ」

先輩は短くそういった。

少年少女は、疑う素振りすら見せなかった。

「……………」

その事を聞くと、少女はビルから出ようと、正面入り口へ向かって歩く。

「翠華、何処へ行く？」

だが、少女の歩みは止まることはなかった。

「桜凜武装高校をただ誅伐しに行くだけ」

その瞬間、図つたように雨が止んだ。

どうしてこうもタイミング悪いかな…………。

つて、桜凜武装高校を誅伐ツ!?

誅伐とは、罪のある者や悪者を殺すという意味。  
ということとは…………桜凜武装高校を殺しに行く…………?

「私も行くつ」

ツ!?

桜夜先輩からとんでもない言葉を耳にした。

「桜夜先輩ツ!？」

どういっつもりか全然分からなかった。

何故、先輩がそんなことを……。

「私達の次の目標を思い返してみる」

俺達の、次の目標……。

一番の目標は、仲間を増やすこと、

そして、次の目標は……。

「桜凜武装高校へ行くこと……」

提案者は俺であるのに関わらず、その存在を忘れていた。

危険を伴うが、それ以上に真実を知らないといけない。

その真実へ近づくため、桜凜武装高校へ行くこと俺が提案した。

「そうだ。”真の理由”を希求するのだろうか？」

今が絶好の好機ってことか……。

俺は美唯と月守さんの顔を見る。

「行くっ、潤」

「理由がわかるなら行った方がいいと思う。こ、怖いけど……。」

そうだな……。

逃げては何もならない。

逃げてばかりでは何も得られない。

俺達は真の理由を確かめないとならない。

「よーしッ!」

俺は気合を入れる。

この言葉をいうだけで、相当気合が入る。

「待て!翠華!」

少年が始めて声を高めた。

その強い声に少女は反応し、足が止まる。  
振り返りはせず、前を向いたまま。

そして、少年は桜夜先輩の方をみる。

「さっき言ったことは本当か?」

さっき言っていたこと。

それは、俺達も行くということだろう。

目的は違うが、味方は多い方がいい。

これをきっかけに、心を開いてくれるといいけど……。

「嘘は言わんよ」

先輩は真剣な顔を崩さない。

その顔は、誰が見ても疑わないだろう。

「ありがと。よろしく頼む」



ありがとう……。

その言葉を聞いて、俺の緊張感は解かれた。

「翠華くん！私達も同行させてもらおう！」

その言葉と共に、少女は前へ歩き始めた。

「中沢くん、成沢くん、月守くん、真の理由を確かめに行くぞッ！」

そう言い残し、先輩はビルの外へ出る。

俺の眼は真実を視ることはできるのだろうか？  
いや、絶対にその答えに辿り着いてみせる！

「先輩に続けッ！」

俺達はビルに別れを告げ、ビルを後にする。

そして、俺は空を見上げる。

既に夜、周りは閑静に包まれている。

明かりは、月明かりのみ。

そして俺達、6人は桜凜武装高校を目指した。

真の理由、真実を視るために

13話 - (2) (後書き)

―登場人物―

清王 翠華 (せいおう すいか) : (女)

桜凜武装高校射撃科2年でAランク。

称号『魔弾の誅伐人』(まだんのアンピネスト)

彼女の事を「魔弾」と呼ぶ人が多い。

それは戦闘時に見せる戦い方に語源がある。

彼女の銃には迷いがなく、一発で急所を撃つ。

使用銃はフルオートのハンドガンを左右に持っている。装弾数は17発

フルオートのため、連射が可能。

副装備にグレネード・ランチャー、を1丁所持している。

彼女がいつも左右に持っているハンドガンには、銃のフレーム付近にナイフが装備されている。

そのため、接近戦も可能で得意とする。

身長：164cm

体重：47?

B・W・H：88・56・90

血液型：A

髪色：白色、ショートカット

誕生日：4月29

河坂 ガイ（こうさか がい）：（男）

桜凜武装高校射撃科2年でBランク。

称号は「精鋭の狙撃手」（せいえいのスナイパー）

彼の武器はスナイパーライフル。

マガジンは30発が4個。

副装備にはアサルトライフルを所持している。

マガジンは45弾が2個。

身長：176cm

体重：59?

血液型：A

髪色：黒壇色（黒茶系）

誕生日：10月10日

年齢：16

性格はクールで冷静。

その性格上、とても頼れる存在。

状況判断力が高い。

14話・(1) 浮遊する世界(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

14話・(1) 浮遊する世界

19月5日

桜凜武装高校へ向かう途中に、その日は来てしまった。今は、空に太陽が昇りはじめ、徐々に明るくなっていく。黄昏の風景だ。

俺達は、真の理由を調べるために、桜凜武装高校へ向かう。だが、その道のりは困難を決した。

桜凜武装高校は、郊外にあり、更には海の向こうにある。場所は海を埋め立てし、その上に作った高校。

つまりは、島の上にある高校。それが桜凜武装高校

その島へと続く、巨大橋が一本あるそうだ。

そこからでしか、桜凜武装高校には入れない。

つまり、俺達はその橋に向かっている。

移動の中では、決して静かではなく、話し声で溢れていた。最初はどうなるかと思ったけど、意外にも話し合える人だったが、その中でも少女は自分からは話さなかった。

無視をする訳ではない。話しかけたら、短いが返答はしてくれる。

「随分と遠いですね……」

数時間はさらに歩いている。  
夜から朝になるくらいだ。

「あと少しだ」

ガイが俺を励ましてくれた。

あと少しか……。あと少しってどのくらいだろう……。……。

まあ、そう簡単には真実へは辿り着けないってことが……。……。

「ああッ！海だッ！！」

突如、美唯が大声を出す。

海……。？海だとッ！？

俺も美唯の見つめていた方を視る。

「本当だ……。……」

ああ……。俺達は海までできたのか……。……。

なんだか、嬉しいというよりは、感動に近い感覚だ。  
長い年月をかけて、成し遂げたときの状態に近い。

「海……」

月守さんも嬉しいというより、感動に近い感じだった。そうなるほどに、俺達は歩いてきた。

「もう、一息だな」

桜夜先輩も海を眺める。

確かに此処まで来ればもう一息だ……。

俺は改まって考える。

俺達は、相手の本拠地、本陣ともいえる場所に向かっている。

つまり、敵の数は今までとは比べ物にならないことが予測される。明らかに少人数な俺達。

できれば戦闘は避けたいが、そうは上手くいかないだろう。

覚悟を決めなくてはならない。

俺達の生死すら懸かっているんだ。

俺は左眼に手を添える。

あの時の激痛はなんだったんだろう……。

全身を駆け巡る痛み、その中でも左眼の激痛は一秒も耐えられないほどだ。

やはり、使い過ぎというものなのだろうか……。

俺は一昨日、寝る時に結界を数時間も発動させていた。

それがかなり響いたかもしれない。

使い過ぎというのは、一般的に考えてもよくない。  
時と場合で、使い分けるしかないか……。

「あれが橋なんじゃないのか？」

海に近づくとつれ、島へと続く大きな橋が視えてきた。

あと、5、6 kmといったところか……。

正確ではないが、憶測でそんな感じた。

あれが俺達の目的の橋なら、あの島のようなところが、**桜凜武装高**  
**校**。

「そつだ。アレが桜凜武装高校へ続く、**虹陵橋だ**」

ガイが俺の問いに答えた。

虹陵橋っていうんだ……。

随分と大きく、長い橋だ。

俺はその虹陵橋の先の島を見つめる。

「あれが桜凜武装高校か……」

島全体が桜凜武装高校の領土なんだ……。



その島はかなりの大きさだった。

今から、あそこへ進入すると思うと、思わず腰が引けてしまう。  
それぐらいの大きさだ。

「随分と大きいね……潤……」

「そつだな……」

緊張感が漂ってくる。

あれだけ大きな所だ。

防犯設備等も完璧なのだろう。

「あの島全部が桜凜武装高校……」

月守さんは気が引けたようだ。

初めて見る俺達は、まずその大きさと圧倒される。  
本当に進入できるのかな……？

そう思いつつも、俺達は前へ進んでいった。

「遂にきた……」

もう、俺達は橋の目の前にいる。

着いたなら嬉しいはずなのに、なんだか喜びが沸かない。

ガイはその先の桜凜武装高校を見つめる。

「警備人がいない……?」

ガイがつかぬり声を張り上げる。

警備人がいない?

俺も虹陵橋の先を凝視する。

が、人影はまったく視えない。

「随分と怪しいな」

桜夜先輩も小首を傾げている。

怪しいということは、普段は警備人がいるってことか?

「普段はいるんですか?」

俺は桜夜先輩に問いかける。

「ああ、週番制になっていて絶対にいる。サボれば手痛い処分が待っている」

警備人絶対にいる。

なのに、今に限っていない。

確かに怪しい。

「これマズイってッ!絶対に怪しいってッ!」

月守さんは恐慌し始めた。

確かに、いつもいるものが、いなかたら誰だって怪しむ。

これは、どづいづことなんだ……。

「いないなら、好都合」

少女の左右の手には常時、銃が握られている。  
移動中ですら、ずっと握っている。

確かに好都合だけど……。  
それ以上に、なにかがあると思うんだよな……。

「好都合って言ったて……」

既に太陽は昇っていた。

眩しい太陽の光が、俺達を照らしている。

「元より危険は承知しているッ！！行くぞッ！！」

どの道、危険は避けれない。

危険ともわからないのに、ビクビクしてどづするんだ。

「よっしッ！行くぞッ！」

俺は自らの意思で、それを言葉にした。

「うんッ！行くぞッ！」

美唯も誰からも縛られず、自分の意思でそれを言葉にする。

「潤、無理しないでよっ」

優しい口調で、語りかけるようにそういった。

「ああ、美唯こそ無理するなよ？」

「うん」

素直に頷いた美唯。

無理はしないと口では言ったが、実際はその気はない。仲間を助けるためなら、俺は自分の限界を超えるつもりだ。

「ええッ！？みんな行っちゃうのッ！？」

月守さんは更に恐慌する。

「お前は残るのか？」

ガイは恐慌する月守さんに問いかける。

俺達に着いていけば、危険は避けられない。

だが、ここに残れば安全っていう訳でもない。

「い、行くよッ！」

恐怖を拭って、行くことを選択した。

蛮勇にもよくにているかもしれない。

「行くぞッ！」

桜夜先輩の声と共に、俺達は虹陵橋を渡り始めた。その先にある、真実の為に。



14話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

桜夜先輩が先頭で、俺達は横に並ぶように歩んでいる。何処から、奇襲されてもおかしくない。

既に、ここは相手の領域なのだから。

だが、身体は一切震えない。

なぜだろう？その理由は、自分でも分からなかった。

この虹陵橋は、ざっと1kmぐらいかな？

その1kmが、短いのか、長いのか。

徐々に桜凛武装高校の姿が露あらわになってくる。

俺達は、言わずに歩く。

「これが、校門か……」

ついに校門まで来てしまった。

大きく聳え立つ門。この門が、今の俺にはかなり大きく視えた。

異世界に堕ちた初日の俺だったら、考えられないところにいると思う。

自ら、一番の危険のところへ足を運ぶのだから。

「帰ってきてしまったな」

桜夜先輩は『しまった』と後につけていった。

此処は高校。そのためか、入りにくい雰囲気ではなかった。

俺は空を見上げる。

今日も青々とした空が広がっている。

俺は、あの空の向こうにいる家族に誓った。

「行くぞッ！」

先輩が先頭で門を潜る。

此処は先輩の通う学校。

桜夜先輩は、堂々として桜凛武装高校の内部へ入っていく。

「翠華、行くぞ」

次にガイが門を潜る。

「……………」

少女もその後に行く。

俺達も行くか……。

「先輩に続けッ！」

俺はなんの迷いもなく、門を潜る。

「此処が、桜凛武装高校……………」

美唯は周りを見上げながら、入っていく。



「りおん……お姉ちゃんを見守って……」

月守さんは何かに委ねるように、門を潜っていく。

此処が桜凜武装高校……。

今、俺はその大地を踏んでいる。

まず、入って眼に入ったのは、桜並木だった。

「桜ッ!？」

満開に咲き誇っている桜。

その花びらが、舞い散っている。

確かに桜が咲いている。

なんで、桜なんて咲いてるんだ……？

今は、9月だぞ!？

「桜……」

桜夜先輩も、始めてそれを見るかのような境地だった。

桜夜先輩は立ち止まり、桜を仰ぎ見していた。

「なぜ、桜が……」

ガイもその桜に驚愕している。

桜凜武装高校の生徒ですら知らない。

それが、この桜。

「……………」

その桜に興味を示したのか、少女も桜を見上げる。  
舞い散る花びらが、少女の周り、少女の上にも落ちていく。

「きれい……………」

美唯は手の平を広げ、桜の花びらが手の平へ落ちていく。

「こんな時期に……………なんで桜が……………」

月守さんはただ呆然と眺めている。

確かに此处には、桜が咲き誇っている。

俺達は、決死の覚悟でこの場に来た。  
なのに、この桜並木は予想外だった。

桜に見惚れてしまい、本来の目的を忘れてしまっていた。

「では、行くか」

先輩の頭の上には、桜色の花弁がついていた。  
この異世界でも、こんなに素晴らしいところがあったのか……………。

「桜夜先輩、この桜は……………」

この時期に桜が満開なんて、ありえない。  
だが、先輩も始めてみるような心境だった。

だとするなら、何なんだ？この桜は？

「こんな所には桜はなかった」

ないところにいきなり桜が……？

俺の頭は、疑問に包まれる。

「いや、ないのではなく、咲いていなかった。詳しいことはまた後だ」

咲いていなかった……？

どういう意味だ……？

「校舎へ入るぞ」

校舎……。

その瞬間、一気に現実感に襲われた。

いよいよ、遂行する。

その時が来た。

俺は桜並木の向こうにある、校舎を見つめる。

「あれ？そういうば、人がいないんじゃない？」

月守さんが何かに気付いたように声を上げる。

人がいないだと……？俺は周りを見渡す。

だが、人影すら一つもない。

「確かにいないな」

ガイも周りを見渡す。

「いないなら、好都合」

少女はさっきからこの一点張りだ。

でも。確かに好都合だ。

もしかしたら、戦闘も避けられるかもしれない。

だが、ここまでくると不気味なものを感じる。

やはり、なにかの策なのか……？

「行くぞッ！」

だとしても、俺達は前へ進まないといけない。

俺達は先輩の声と共に、校舎に向けて歩き始めた。

「此処が正面玄関か……」

目の前には正面玄関が聳え立つ。

此処まで来ても、人の気配一つもない。

「そうだ。此処が正面玄関だ」

俺も、こつも簡単に正面玄関まで辿り付けるとは思わなかった。

「行くぞッ！」

恐怖は計り知れない。

だが、それ以上に真に理由を知らなくてはならない。  
その意思が俺を後押しする。

「先輩に続けッ！」

どんな危険が在ろうとも、俺は仲間を守る。

この命に代えても。

絶対に……。必ず……。

俺達は、桜凜武装高校のキャンバスへと入っていった。

桜凜武装高校のキャンバスは、静寂に包まれていた。

「妙に静かだな」

ガイは入るなりそんなことをいう。

確かに静まり返った放課後を思わせる。

校内ですら、人の気配は一つもない。



「放送室はこの私、朝倉が占拠した！」

放送室を占拠したッ!?

そして、この男の正体は朝倉……。

つて!スピーカーから!?

「なんでスピーカーから……? 電気は使えないんじゃないのかッ!」

この世界では、電気は使えないはず……。  
なのに、電気を使うスピーカーが、使えるはずがないッ!

「ッ!?!」

全員、そのスピーカーを凝視する。

「視ての通り、この校内には桜凜武装高校の生徒はいない」

やはりそうだったか……。

怪しいまでに、生徒の一人もいなかった。

朝倉つてのが、裏で意図を引いていたのか……。

「この俺を止めなければ、この校内に這い巡らしている屍しかほねを越えてみせる!」

屍!?

それは、俺達に対する挑戦かッ!?

面白い……。

この感覚……いつに懐かしい感覚よ……。  
俺の中で、奮い上がるものがあった。

「受けて立とうッ!!朝倉ッ!!!!!!」

俺はスピーカーに向けて高く拳を揚げた。



15話・(1) 答えを導く為に(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

15話・(1) 答えを導く為に

「受けて立とうツ！！朝倉ツ！！！！」

俺はスピーカーに向かって声を張り上げる。

相手は得体の知れない朝倉っていう奴だ。

しかも、使えないはずの電気までも使っている。

相手の力は計り知れないだろう。

だが、俺達もなめられたものだ。

此処には生徒がない。

ということは、桜凜武装高校の生徒も自動的にいないということ。

それだけでも、危険性はぐっと減る。

朝倉の言っていた屍っていうのが気になる点だ。

だが、逆に言えば、生徒がないということは、その屍は人間ではない。

その屍という存在が絞られてくる。

そう。屍はトラップ。即ち罠って意味だ。

それが、どれほどの罠かどうか分からない。

電気が使えないのなら、大したことはないだろうが、相手は何故か電気が使える。

俺は、敵意を丸出しにスピーカーを見上げている。  
いや、睨み付ける。

「じゅ、潤ッ!?!」

傍らにいた美唯が、異常な行動を取る俺に対して、肩に強く手を置く。

「本気でいつてるのッ!?!これは畏だよ!?!」

美唯が俺の肩を強く引き寄せ、強制的に俺と向き合う形にする。  
俺も視線を下げ、美唯を見る。

「そ、そつだよ、潤先輩ッ!その朝倉っていう人に踊らされてるんだよッ!?!」

そつか……。

俺は、朝倉の頭中に嵌ってるってことか……。  
だが、あえて、相手の畏に嵌るのも策略の一つだ。

「じゃあ、俺達はこのまま逃げるのか?」

俺は抵抗した二人に問いかける。

「そ、それは……」

月守さんが視線を逸らす。  
元より危険は覚悟の上だ。

だが、こんな好機も滅多にあるもんじゃない。

桜凜武装高校の生徒は朝倉のみ。

俺には、その朝倉っていう人が、この学校すら動かす程の力があると思う。

でなければ、こんなことはしないし出来ない。

「手荒い祝福だな」

ガイは冷笑を浮かべ、一瞬だけ小さく笑う。

「朝倉には誅伐あるのみ」

少女……いや、清王さんか……。

清王さんは、今は仲間だ。

これからは、清王さんと呼ぼう。

「相手に踊らされるのは好きではないが、致し方あるまい」

桜夜先輩も朝倉の話に乗った。

既に4人が朝倉の挑戦に乗った様子だ。

いいねえ……。

このゾクゾクとした感じ……。

これが武者震いっていうやつかよ……。

「ふっ！逆にその舞台から引き摺り出してやるわッ！」

俺は嘲笑い、再びスピーカーを見上げる。

朝倉は自信に満々とした声だった。

だが、俺も自信に対しては負けていない。  
これが、俺の集大成だ。

「……………」

俺の方に強く置かれていた美唯の手は、滑るように落ちていった。

「み、皆はそれでいいのツ!？」

月守さんは気が進まないのか、俺達を否定する。

「何もしないよりはマシだな」

「朝倉には誅伐あるのみ」

その問いに逸早く答えたのは、ガイと清王さんの二人だった。  
ガイの言い分は納得できるが、清王さんの言い分は結構残酷だ。

「始まる前から、怖がってどうする?」

更に桜夜先輩がダメ押しをする。

「……………」

皆からの反発で、月守さんは黙ってしまった。

俺は桜凛武装高校のキャンパスを見渡す。

朝倉のいう通り、人は一人もない。

朝倉のいつていることは、多分事実と考えて良いだろう。

「……わかった。行こう」

月守さんはうんつと大きく頷いた。

俺は残りの美唯を見つめる。

視線はずっと下を向いていた。

「美唯。行こう」

俺は美唯の目の前まで近づき、手を前に差し出した。

「なんか……嫌な予感がする……」

美唯の視線は低いまま、そう呟いた。

『嫌な予感がする』と。

「なに、心配はないさ。君達は私が守る」

先輩は美唯を横目にしながら、そう力強い言葉を送る。

その瞬間、美唯の顔は、縦にコクリつと頷いた。

「まず、朝倉がいると予測される放送室」

清王さんの視線は、放送室があるであろう場所を向いていた。

視線の先にあったのは、廊下だった。

俺は放送室がどこにあるかは知らないから、そう断言はできない。

「可能性は大だな」

ガイも清王さんと同じ所を見つめる。

俺達は今、+字路にいる。

+字路の下に位置するのが、俺達の居場所だ。

つまり、俺達が進めるのは、右、左、そして前。

後ろに行けば、玄関だ。

清王さんの視線は、前を向いていた。

「前か……」

その廊下は、太陽の光のみが照らしている。  
照明はついていない。

そして、先輩が先頭に乗り出した。

「行くぞッ!!」

俺達は先輩が先頭で、その後ろに横へズラツと並ぶ形態だ。  
その歩速はゆっくり。

罨が仕掛けられている可能性が高いため、慎重に歩いて行く

「屍とは一体……」

桜夜先輩は疑問を吐いた。

あまり歩いてはいないが、今の所は屍のような物はない。

「罨」

清王さんが短く完結に述べた。

清王さんは表情をまったく変えずに、歩いていく。

その表情は、無表情のまま。

「でも、罨ってどういっ……」

月守さんのいう通り、それが味噌だ。

罨とはいうが、まったく予想がつかない。

俺が思いつくのは、落とし穴とか、そういう原始的なものばかりだった。

「さあな。実際に遭ってみないと分からん」

ガイは恐ろしいことを口にする。

どの程度の威力なのか。

人間を簡単に殺してしまうような威力なのだろうか？

元々、桜凜武装高校の生徒は桜凜高校の生徒を狙っている。

俺達に関わり、校則に違反した桜夜先輩は、殺害命令を出されている。

つまり、一刻の猶予もないということ。

これらの事から導き出せる答えは、屍という名の罨の威力は相当なものということ。



「じ、実際にあつてみないとなんて、そ、そんな恐ろしいこと言わないでよッ!」

月守さんは、恐慌から口調が速くなる。

『試す』という行為なんてできないし、してはいけない。それは、死に繋がる

「焦っては駄目だぞ。その隙に狙われる」

先輩の忠告に俺たちは従う。

安堵の時間はないってことか……。

俺も必死に床を凝視する。

畏の仕掛けといえば、大抵が床のイメージがあつたからだ。

「今の所は、畏らしい畏は見つかりませんね」

どのぐらい歩いてきたかはわからないが、今の所は畏とは遭遇していない。

そこで、俺は気になっていたことをいう。

「朝倉って何者ですか?」

俺はこのことがずっと気懸かりだった。

朝倉という人物は、さっき始めて知ったから、どういう人物が分からない。

だが、さっきの放送からするに、おおよその想像はつく。

「朝倉 佳紀」

俺の問いに桜夜先輩が答えてくれた。

朝倉 佳紀と……。

「朝倉 佳紀？」

俺はオウム返しに繰り返した。  
すると、先輩は小さく頷いた。

「戦術科の代表だ」

「え……？」

一瞬、意味が分からなかった。  
代表……？

朝倉が……？

つて！戦術科！？

「戦術科って……桜凛武装高校の司令塔ですよね……？」

先輩から前にこんな話を聞いた。

『戦術科は桜凛武装高校の司令塔のようなところ』

その代表だと！？

俺は驚愕を隠せなかった。

その代表と俺たちは対峙しているのだから

15話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

15話 - (2)

俺の脳内に電撃が走るように、先輩の言葉が蘇る。

『戦術科の出した命令は絶対』

命令……。

命令と聞いて、一番に思い浮かぶのが、この狂気な命令。

『桜凛高校の全生徒の殺害』

この命令を出したのは戦術科……。

その戦術科の代表は……朝倉……？

そんな人が今、俺達の敵なのか……？

これは、とんでもない敵だ……。

「そ、そうだったんですか……」

朝倉は俺達を殺す気だ……。

自分の手を汚さずに、罨で……。

「えッ！つてことは、”あの命令”を出したのも朝倉ッ！？」

あの命令。

それだけで、月守さんのいいたいことが伝わる。

「そういうことになる」

背筋に寒気が走る。

これは、美唯の悪い予感が的中したかもな……。

ああ！そっか！

だから、この狂気な命令を聞いた清王さんは、真っ先に桜凜武装高校へ向かったんだ！

命令は戦術科の命令。

こんな狂気な命令をする戦術科を誅伐するために……。

「あ、あれは……」

ガイが何かを発見したように、前方を見つめる。

それに釣られて、俺達も前方を見つめる。

「な、なんだ？あれは……？」

『壁』

それが、俺の第一印象だった。

その壁は天井まで延びていて、廊下の横幅を覆い尽くしていた。

「あれが屍というやつか……」

桜夜先輩は腕を組みながら屍を見つめる。

ただの壁ではない。

それは、視れば分かる。

沢山の物を積み重ねて、連なっている壁。

「壁……なのか？」

行き止まりということなのだろうか？

それとも、違う意図なのだろうか……？

俺達はゆっくりと、その壁に向かって歩いていった。

遂にその壁の目の前へ来た。

俺達は、目と鼻の先にある壁を見る。

「つくえ……？」

その壁の正体は夥おびただしい数の机だった。

机のバリゲート。

この言葉が適切かもしれない。

その夥しい数の机が、天井まで延びていた。

まさしく、壁を思わせるように。

しかも、積み重なっている机は、バランスよく積み重なっているのではなく、

複雑に入り組んでいる。

「なぜつくえ？」

清王さんは珍しく小首を傾げた。

疑問は膨らむばかりだ。  
壁を作りたいのなら、シャターのようなものを降ろせばいい。  
だが、この壁は崩すことができる。  
進入を妨げるために作られた壁としては、あまりに耐久性がなさすぎる。

「う、うわ〜」

月守さんは手を額にあて、天井まで連なっている机の壁を見上げる。

「この先が放送室だ」

ガイがいうにはこの先……。

机同士が重なりあっている隙間から前方を見つめる。

よくみると、この壁は隙間だらけだ。

それはそうだ。

机なんてあまりにも壁にはむいていない。

「突破するしかあるまい」

桜夜先輩の意見。それは突破……。

崩すのは容易いだろう。

だがそれは、この夥しい数の机がおびただ一気に崩れるという意味だ。

俺が予想するに、この机が雪崩なだれのように崩れる。

それに巻き込まれれば、大惨事だ。

「でもどうやって突破を……」

これは時間稼ぎなのか？

いや、この夥しい数の机を作るのに、相当な時間を費やしているだろう。

だとするならば……これは……。

「うーん……」

先輩は両腕を組み、頭を悩ませている。

空いている隙間は、人間が通れるような隙間ではない。

やはり、崩すしかないのか……？

いや、崩せば雪崩の如く俺達に襲い掛かる。

打つ手なしか……。

「崩さないで通るのが、一番いいと思うんだけど……」

確かに月守さんのいう通りだな……。

うーん……。

俺は腕を組んで必死に考える。

崩さないで通る方法……。

机は、触れてしまえば崩れそうぐらいのアンバランス。

その机を崩さずに通る方法なんてあるのだろうか……。

この机の壁を作るなんて、とんでもない匠の技だ。

逆に感心してしまう。

「遠距離から崩せばいい」

清王さんが意見をだす。



具体例を上げず、遠距離から崩せばいいと。

「え？でも、どうやって……」

『カチヤ……』

月守さんがそういうと、

少女の両手に常時握られている、銃の銃口を壁に向ける。

「なるほど！これなら遠距離からでも崩せる！」

これで、崩れた机が俺達に直撃するということはなくなった。

「そうときまれば、下がるぞ」

桜夜先輩は机の壁に背を向け、その場を離れる。

「上手くやれよ」

ガイは横目で見ながら、少女の横を過ぎていく。

「美唯、行こう」

ここにいると、雪崩の餌食になる。

清王さんは俺達が下がるまでの時間、待っているとは思えない。容赦なく崩すだろう。

「う、うん……」

「ほ、本当にこれで大丈夫かな……」

月守さんは、不安でか何度も顔だけ後ろを振り向く。俺は、美唯と一緒に、机の壁から離れて行った。

十分な距離を置いた。

これだけ離れば、被害は受けないだろう。

『ズド

ンツ!!!!!!!!!!』

なんの断りも入れず、清王さんは不意に一発、机の壁に向かって発砲する。

『ガシシャアアアアアアアッ!!!!!!!!!!』

大きな轟音を立て、机は崩れ始める。まさしく、その光景は雪崩だった。それか、土砂崩れ。

「やったか翠華？」

見事に遠距離からの崩しに成功。だが、さらに問題も増える。

「足場が……」

廊下中に机が散乱している。

廊下の床が見えないぐらいに、机で覆われている。

これだけの机を、壁として積み上げていたのか……。

「少々、足場が悪いが、臆することはない」

先輩は一番に机で覆われた大地へ入っていく。  
かなり、足場が悪そうだ。

それに続いて、ガイと清王さんも入っていく。

『ガクッ！』

清王さんがバランスを崩し、机が多少動き大きな音を立てた。  
だが、転ばないで、すぐに態勢を立て直した。  
そして、何事もなかったように歩みを進める。

今の清王さんは、ちょっと可愛かった。

「うわ……。ゴミ屋敷みたい……」

その月守さんの表現が正しいかもしれない。  
ゴミではないが、そのゴミが机になった感じがした。

「美唯、行くぞ」

俺はゆっくりと机大地へ行く。

「あ、足場悪いから、気をつけてね……？」

「美唯もな」

こうして俺達は、無事に突破に成功した。  
何度も足が纏れたけど、どうにかその場を突破した。

「此処が放送室……」

前方にはドアがあった。

これは、ドアノブで開けるタイプだ。  
引きか押しかまでは分からない。

「そつだな」

ちゃんと上には、放送室と書かれていた。  
此処に、朝倉が……。

緊張感は一気に高まった。

「万が一のことがあれば、君達だけでも逃げたまえ」

その言葉は誰でもなく、俺達に向けられていた。

「ま、万が一って……」

そんなことは、想像したくはない。  
だから俺は頭をブンブンと横に振り、思考を消す。

そして、桜夜先輩がドアノブに手をかけた。

「行くぞっ！！」

16話・(1) ラビリンス(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect  
s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

16話・(1) ラビリンス

「行くぞっ!!」

先輩はドアノブにかけていた右手を捻らせる。  
俺はコクリと息を飲んだ。

『ガチャッ!』

勢い良く開け放たれてドアは、音を立てて開く。  
俺は放送の中を凝視する。

「だ、誰もいない……」

放送室は既に蛻の殻だった。  
ガイは少し前に出た。

「ハズレか……」

この放送室には人の気配一つしない。  
そんなには容易くいくはずがない。  
仮にも、相手は戦術科の代表。

俺達は、更に放送室の内部へ進入する。

「さっきの放送も、此処からだっただのかな？」

月守さんはお化け屋敷でも入るかのような表情で、放送室へ入る。

「ああ、恐らくはそうだろう」

ガイは振り返りつつそういった。

確かに放送はあった。

あの朝倉が俺達に対する挑戦状だ。

だが、放送には電気が必要。

この異世界では、電気が使えない。

なのに使えるのは、おかしな話だ。

なにか、仕掛けがあるのか？

『ガチャ…………』

後ろでドアが動く音が聞こえた。

「な、なんだ…………」

俺達はドアの方を振り返る。

さっきまで開いていたドアが、閉まっていた。

「ど、ドアが閉まってる…………？」

月守さんは驚愕の表情を作る。

「閉まってるじゃなくて、閉められた」

確かに清王さんの表現が正しい。

何かによって閉められた。



これも朝倉の罠なのだろうか……。  
見事に嵌められた。

「此処にはなにもない。行くぞ」

先輩の声と共に、俺達はドアの前へ歩く。

此処にはなにもなかったか……。

そう簡単には尻尾を見せてくれないか……。

先輩はドアノブを掴む。

だが、捻れない。

「やはり、外から鍵が掛けられたか……」

閉じ込められたか……。

これも計算通りという訳か……。

「なら、壊せばいい」

『カチャッ!』

清王さんは右手に構えられていた銃を、ドアノブに向ける。

すると、桜夜先輩は銃身に左手を、清王さんの銃を下ろした。

「弾がもつたいないだろ？」

そついうと先輩は、鞘から千鳥を抜く。

「危ないから下がっている」

先輩は背中で語りかけた。  
下がった方がよさそうだな。  
本当に危なさそうだ。

「翠華、下がるぞ」

「……………」

ガイに続いて、清王さんも下がっていく。

「美唯、月守さん、下がるぞ」

「はあッ!!--」

先輩は上段構えから、ドアノブへ目掛けて下袈裟に斬る！

『ガキンッ!』

千鳥の刃身とドアノブがぶつかり合い、高音が鳴り響く。

『ガコンガコン……………』

床へ落下したドアノブは、音を鳴らしながら、ゴロゴロと滑る。

「やったか桜月導?」

ガイは先輩の事を桜月導と呼ぶ。

どうやら、ドアノブは壊れたようだ。

先輩はドアに蹴りをお見舞いする。

『バーンッ!』

その蹴りは、ドアの真ん中上に激烈。

美しく、高さもある蹴りだ。

今、一瞬だけドアになりたいと思った。

その蹴りの衝撃で、ドアが猛スピードで開いた。

「よしッ!」

先輩は、千鳥を鞘へ戻した。

そして、両手をほろろのようにパンパンと叩く。

「お見事です」

この一言しかいえなかった。

台本があるかのような完璧な動きだった。

「行くぞッ!」

先輩の声と共に、俺達は放送室から脱出した。

再び廊下へ出た。そこは丁字路。  
つまりは、進めるのは右か左か……。  
俺達は進まずに立ち止まり、考える。

さあ、分かれ道だな……。

「右か左か……。」

先輩は左右を交互に振り返る。

「でも、左側はさっき通ったよね……。」

月守さんの言う通りだ。

左側には、机が散乱している。

さっき、俺達を通った道だ。

「なら、右か……。」

先輩は右側を振り向く。

「畏ね  
」

清王さんは無表情のまま、そういった。

「畏？  
」

先輩は清王さんに聞き直す。

「そう、  
」

清王さんがいうに、右に行くのが罨とっている。  
どういう事だろう？

「私達が放送室に行くことを朝倉は予想していた。だから鍵を掛けられた。だからあの机の壁を作った」

確かに外から鍵を掛けられた。

そういえば、桜凜武装高校の生徒はいないって言ってたよな……。  
なら、手動で鍵を閉めたということになる。

つまり、鍵を閉めたのは、唯一キャンバスにいる朝倉。

次は机の壁のことだが、あの机の壁は、確かに放送室の前にあった。  
だけど、あの机の意味がイマイチ分からない。

「朝倉は方法は何にしろ、あの机の壁を崩すと踏んでいた」

俺は、机が散乱している左側を見つめる。

改めて見ると、本当にすごい数だ。

「それも全て、右側へ誘導する為の罨。私達は今まで、朝倉の思い通りに動いていたということ」

今まで朝倉の思い通りに事が進んでいたと……。

全ては朝倉の計算通りなのか……？

それは違つと否定したいが、その理由がまったく思いつかない。

「それは減点だな、翠華」

「減点？」

清王さんにしては珍しく、少し驚くような表情を作る。表情が変わったの、初めてかもな……。

「なら、朝倉も左側には行けないはずだ」

左側は机に埋もれている。

カギを掛けたのが朝倉だったら、カギを掛けた後は右側の方へ行っただはず。

「確かにそうだな。なら、朝倉は右方面に向かって行った」

桜夜先輩は両腕を組み、考える。

此処から行ける道は二つ。

右か左か。

一方の左は、机で通行止め。

だが、行けないという訳でもない。

現に俺達はその道を通して此処へ来た。

右側は机もないし、正常。

問題は、朝倉だったらどっちを進むかだ。

「あと一つある」

ガイは放送室のドアを振り返る。

「何故、カギを掛けたのか」

うん……。

確かに何故朝倉は、自分の居場所が特定されるような事をしたんだ？

時間稼ぎにしかならないような……。

ん……？時間稼ぎッ！？

「そうか！時間稼ぎかッ！？」

現に俺達は今、止まっている。

この段階で、既に時間稼ぎなんだ！

「そうだ。時間稼ぎだ」

ガイはそういうと、小さく頷いた。

だとするなら……俺達はどうすればいい？

既に朝倉に時間を与えすぎている。

「じゃ、じゃあどうすれば……」

月守さんは左右を何度も見比べる。

右か左か。

選択肢は二つか……。

「朝倉は恐らく右から通った。なら私達も右に行くのみ」

これも、朝倉の戦略なのか……？

いや、でも朝倉も人間だ。

ここまで読めるはずがない。

「そうと決まれば行くぞ。翠華」

今の所、遭遇した罫は一つ。

そういえば、朝倉は『校内に這い巡らされている屍』と言っていた。  
つまり、こんな程度ではないってことだ。

結局俺達は、右側を歩いていった。



16話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

16話・(2)

全員の動きが同時に止まった。

「階段……」

目の前にあるのは、2階へ続く階段だった。果たして、2階に行っても良いのだろうか。

この階段へと続く廊下には、罨は仕掛けてなかった。

今回も選択肢は2つ。

上がるか上がらないか。

「上がるしかないだろう？」

桜夜先輩は階段へ一步踏み出した。

俺達も上がるか……。

……。

こんなにも慎重に階段を上がるのは初めてだ……。なんだか気疲れする。

そして、ガイが周りを見渡す。

「階段にもなにもなしか……」

2階に到達した。  
結局、階段にも何も仕掛けはなかった。

「気を抜くなよ。我々は相手の本陣にいることを忘れるんじゃない」

そういい、桜夜先輩が先頭へ立つ。

そうだった。

此処は相手の拠点だったんだ。

俺の予想は、既に戦闘を繰り広げていた。

なのに、戦闘は一つも起きてない。

戦闘が避けれたというのは、喜ぶことだ。

あ、そうだった。

先輩には聞きたいことが、いっぱいあったんだ。

「先輩、あの桜並木はなんだったんですか？」

桜凜武装高校には、美しい桜並木があった。

元々あったのなら、不思議には思わないが、先輩も知らないと言っていた。

しかも、9月にもなつて桜が満開なんて、信じ難い。

「あの桜は、異世界と同時にできたものだと考えられる」

桜ができた？

異世界と同時に？

「私は1日のおとき、その桜並木のある所を通つたが、桜は咲いてい

なかった」

9月1日。

それは、一生忘れないであろう日。  
異世界に堕ちた初日だ。

「そのとき私は、周りの木々を視ている暇なんてなかったんだ」  
でも、咲いているなら視なくてもわかる。

先輩がいうに、1日の段階では咲いていなかった。

なら、1日以降に咲いたのか？

「じゃあ、1日以降に咲いたんですね……」

また、不思議が増えたな……。  
異世界に咲く桜か……。

それ以上に疑問なことがある。

「先輩、なんで朝倉は電気が使えたんですか？」

電気が使えないってことは、身をもって知っている。

この異世界はの特徴は、大雑把に言って2つある。

まずは、電気が使えないこと。

そして、桜凜高校、武装高校の生徒以外はいないということ。

その2つは絶対に覆らない確証だった。

だけど、それが覆された。

「……………」

先輩は眼を閉じ、手を口元に当てながら、考えている。

俺って本当に先輩に頼ってるよな……………」

先輩はいなかったら、今頃俺はどうなっていただろう。  
俺もしっかりしないと……………」

「ここの中だけ使えるとか……………」?

そついいながら、月守さんは自分のポケットに手を入れる。  
ポケットの中から、携帯を取り出し、開いてみる。

「どうだった?」

月守さんの発想が正しければ、このキャンバスの内部では電気が使えるということになる。

「駄目だ……………まったく映らない……………」

期待をしていたのか、ガツクリと肩を落とす。

これで、その可能性は消えたか……………」

「使えないはずの電気が、朝倉には使えた……………」

ガイが話しを整理する。

もしも、その理由が分かれれば、俺達も電気を使えるかもしれない。

すると、口を閉じていた清王さんが口を開いた。

「なら、それは絶対的なものではないということ」

絶対的なものではない……。

あれ？　そういえば先輩は雷切で雷を出してたよね……。  
雷ってことは……。

「先輩って雷使えましたよね？」

「ああ、使えるが？」

先輩は当然のように俺の問いに答える。

「なんで、使えるんですか？」

前に話してくれたことがある。

雷切には、雷魂が宿っていると。  
だから使える。

だけど、この世界は電気が使えない。

うーん……　なんだか頭が混乱するな……。

「この異世界は、人間で作られた一切の電気が使えない」

人間によって作られた一切の電力は使えない……。

「雷魂って人間によって作られていないんですね？」

「そうだ。雷魂は精霊の力で分類すれば、自然魂だからな」  
自然ということは、人の手は一切ないということだ。  
だから、この異世界でも使える。

「じゃあ、その朝倉っていう人も雷魂があるってこと？」

よく月守さんは桜夜先輩にため口を使えるな……。  
だが、言っていることは正しい。

今、考えられるのはこの辺りだ。  
もし朝倉にも雷魂が何らかに宿っているのなら、電気が使えても不思議じゃない。

「それは、ありえないな」

だが、先輩は言い切った。

その言葉に続けて、先輩が説明を始める。

「自然魂には様々な種類の精霊があつて、炎や氷なども存在する。  
それらの自然魂はそれぞれ一つしか存在しない」

なら、雷魂も一つしか存在しないということか……。  
また、一つの可能性が消えたが……。

じゃあ、何で朝倉には電気が使えるんだ？

「そっか……」

月守さんがガツクリと肩を落とす。

「だったら、翠華の言っていたことが正しいかもな」

清王さんは、絶対的なものではないと言っていた。

電気が使えないってことが、絶対的なものじゃないだと……。これこそ、俺には信じられなかった。

今まで絶対的だと思っていたことが、盲信していた何て信じられな  
い。

「何とも言えないな」

桜夜先輩は首を少しだけ傾げる。

『絶対的なものではない』

その言葉が脳裏を走る。

どれが本当で、どれが間違いなんだ……。

俺は何を信じればいいんだ……。

「世界の法則に干渉し、自然な状態を歪めて意のままに操る技術」

清王さんが呪文のようにハッキリとそういった。

世界の法則に干渉？自然な状態を歪める？意のままに操る技術？

確かに清王さんはそういった。

だけど、俺には理解が及ばなかった。

「それを”魔術”という」



魔術……。

俺にとつては不馴染みな言葉だ。

昔の俺は、魔術なんて信じようとしなかった。

だけど、今は存在していると聞いてもおかしいとは思わない。

すると、桜夜先輩ハツとしたような表情を作る。

「私達の知らない、この異世界の法則がある……」

異世界の法則っ!？

清王さんが言うに、法則に干渉して意のままに操ることを魔術というらしいが……。

い、意のままに操るっ!？

「朝倉には電力が使える。これは何らかの魔術であると考えられる」

これが清王さんの考え。

俺にはこれが間違いとは思わなかった。

「豪く魔術に詳しいな、翠華。」

「……………」

ガイの問いに清王さんは答えなかった。

確かに清王さんは射撃科のはず。

一方。剣術科の桜夜先輩は魔術はまったく知らない。

桜夜先輩を視てみると、先輩は腕を組んで何かを考えているようだ。

「それが正しいとは思えないな」

桜夜先輩のその一言で、先輩に視線が集まる。

「朝倉は戦術科だ。その朝倉が高度な魔術を使うとは思えない」

ああ……そうか……。

戦術科の人が魔術も出来るとは考え難い。  
しかも、高度ならなおさらだ。

疑問ばかりが増えていく……。

俺は眼を瞑り、頭をブンブンと振った。

すると、美唯がいきなり前方に人差し指を指す。

「ああっ！ハムスター！」

美唯の人差し指の向こうには、確かに白と茶色の物体が蠢うごめいていた。  
大きさは猫ぐらいだらうか……。  
とてもハムスターの大きさとは思えない。

「は、ハムスタ……」

清王さんが『ハムスター』と可愛らしく声を漏らすと、清王さんの表情が微量に一瞬明るくなった。

その途端、清王さんの歩くスピードが増す。

「翠華？どうした？」

ガイからの言葉も無視し、清王さんは先頭にいた桜夜先輩を抜く。

「翠華くん？」

最後の桜夜先輩からの忠告を無視し、ハムスターへ早歩きで近づく。

その清王さんの行動に、思わず俺と美唯は顔を合わせる。

あのハムスターに何かあるのか？

ん……？ハムスター！？

「ちよつと待ってくれ……！何で動物がいるんだっ！？」

既に清王さんはハムスターの前にしゃがみ込んでいた。

この異世界では、電気が使えない。動物がない。

それが鉄則。絶対に覆らないこと。

そう思っていた……。

だけど、それすらも覆った……。

これも朝倉の仕業なのだろうか？

「翠華くん！待ちたまえ！」

桜夜先輩もハムスターへ駆け出す。

「翠華！早まった行動は止せ！」

ガイも清王さんへ駆け出す。

残された俺、美唯、月守さんは、ただ顔を合わせるしかなかった。

「本当にハムスターだ……」

俺達も結局、ハムスターへ近づいた。  
やはりサイズは猫ぐらい。  
だが、完璧にハムスターだ。

そのハムスターは床に横たわっていて、顔を出し凜々しい目付きで  
清王さんを見つめる。  
その眼は潤っていた。

「桜夜先輩……なんでハムスターが……」

俺の問いに先輩は両手を上げ、お手上げのポーズを取る。

俺はハムスターを再び見つめる。  
なんだか、助けを求めているようにも見える。  
その姿はとても可愛い。

俺はハムスターの前でしゃがみ込んで清王さんを視てみる。

何故だが頬を桜色に染め、輝かしい眼でハムスターを見ている。  
このハムスターに何かあるのだろうか？

こんな清王さんを視るのは初めてだ。  
こんな表情も出来るんだな……。

「で、デカ……っ」

一方、月守さんは一歩後ずさる。  
そして、ハムスターと距離を置いた。

さて、このハムスターはどうしたものが……。

「かわいい……」

清王さんが吐息混じりの声で小さく何かを言った。

清王さんは右手をゆっくりとハムスターの頭へ近づける。  
すると、ハムスターはそれを受け入れるかのように頭を下げる。

「翠華くんっ！止めるっ！！」

桜夜先輩の声がキャンバスに響き渡る。

止める……？

なんでだ？

相手は動物なのに……。

ああっ！！動物だからか！！

この世界には動物がない。

いるはずのない動物がいるということは、このハムスターは朝倉の……。

だが、桜夜先輩の言葉を言い終わったすぐに、清王さんの手がハムスターの頭に触れた。  
その瞬間……。

『ドカ                    ンッ！！！！！！！』

爆発大音響がハムスターから響き渡る                    ！  
比喩ではなく天地が揺れる程の大爆音。

それと同時に、視野全体を被さるように黒煙が迫ってくる                    ！

あまりにも、一瞬の出来事で、脳は処理仕切れなかった。

そうか……これが爆弾か……。

あのハムスターは言い方を変えれば、爆弾だったってことか……。  
この爆音から推測するに、相当規模が大きいだろう……。

ハムスターから1mも離れてない俺達は、間違いなく死ぬ。  
これが、死か……。

本当に刹那に訪れるんだな……。  
こんなところで、俺は死ぬのか……。

自分の終焉に俺は一つ後悔をした。

誰も助けられなかった……。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

あれ？桜夜先輩の咳が聞こえる……。俺は不思議に思い、覚悟を決めて眼を開く。

そこは黒煙に満ちていたが、その黒煙の8割が桜夜先輩に向かって  
いた。

そのため、俺の視野には僅かな黒煙だけだった。

「い、生きてるのか？」

声に出して言ってみる。

何度も手を動かしてみる。

動作も問題ない……。何処も痛くもない。

「じゅ、潤……。大丈夫……。？」

俺の傍らにいた美唯が俺の肩に重く手を置く。  
その光景を視て、俺は生きていると確信した。

「美唯こそ……。大丈夫か？」

「うん……。どうにか……。？」

俺は周りを見渡すが、全員がちゃんと立っている。

ということ、あれは爆弾じゃなかったのか……。？  
あれはただの黒煙弾だったのか？

「翠華……無事か……？」

「は、ハムスターが……」

どうにか清王さんも無事のようだ。

あれ？月守さんは？

ああ、そういえば月守さんだけがあのハムスターと距離を置いてたな……。

月守さんの勘だったのかな……。

「潤先輩っ！」

月守さんが駆け寄ってくる。

駆け寄れる程に、月守さんはハムスターと距離を置いていたってことか。

あれ？桜夜先輩は？

ああ、あの黒煙の中に閉じ込められているんだろっな……。一部分だけ、異常なまでに黒煙が集まっている所があった。例えるなら、小型の台風つと言った所か……。

「ケホッ！ケホッ！ケホッ……」

その黒煙の中から、桜夜先輩の声が聞こえる。いつになく、苦しそうな咳だった。



何でもこうも黒煙は桜夜先輩に向かって行くんだろっ？  
ここまでくると、恐ろしくなる。

俺達は結局、全員負傷者なしだった。

朝倉は何がやりたかったのだろうか？

疑問は膨らむばかりだった。

17話・(1) 破格知力(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

17話・(1) 破格知力

俺達はまんまと朝倉の屍に掛かってしまった。

あのハムスター！。

あれが煙幕弾のようなものだった。

ハムスターに触れたら爆発するという古典的な罠。

その古典的な罠すら、俺達は掛かってしまった。

「ああ……死ぬかと思った……」

桜夜先輩らしくない言葉を漏らす。

確かに桜夜先輩が一番ダメージを受けていたかもな……。  
黒煙の8割が先輩へ向かっていったからな。

「大丈夫ですか？桜夜先輩」

「ああ、大丈夫だ中沢くん」

でも、あれが爆弾だったら俺達は死んでいただろう。

しかし、爆弾ではなかった。

朝倉が本当に”桜凛高校の全生徒の殺害”を命令したのなら、何故俺達を殺さなかったのか？

でも、清王さんの行動には驚いた。

口数も少なく、俺の中ではクールなイメージだった。

でも、以外に可愛いものが好きなのかもな……。

やっぱり人の子ってことか……。

俺はその清王さんを見てみる。

「……………」

普段は無表情な清王が、バツの悪そうな顔をしている。何か言いたいが、放って置くことにした。

清王さんの性格上、フォローは逆効果だと思う。

「翠華、大丈夫か？」

ガイが間もなく清王さんに話掛ける。

「大丈夫……………」

再びスイッチを入れ替えたように視えた。

「立ち止まっている暇はない。行くぞっ！」

桜夜先輩の一言で、俺達は再び歩みを進めた。

## 二階

『ジャンジャン！！ジャジャジャジャン、ジャジャジャジャン

！……………！』

怪しいピアノの旋律が校内に響く。  
重低音で恐怖を覚えるような旋律だ。

「何だ……この如何にも怪しい旋律は……!!」

桜夜先輩が旋律のした方向に身体を向ける。  
それにつられ、俺達も身体を向ける。

「ピアノってことは音楽室か……」

これも罠という名の屍なのか……。  
一体、今度は何をやる気だ……。

「どうするんですか……？桜夜先輩……」

「安心したまえ成沢くん。これは罠だ。罠と分かっている罠には掛  
からないよ」

確かにこれは罠だろう。

此処には朝倉しかいない。

なら、弾いている本人も朝倉ということになる。

「今度はどういう罠……？」

月守さん深奥な趣きで声を漏らす。

「怪しそうな物に触れないと良いんじゃないか？」

あくまでこれは俺の意見。

今までがそういう傾向だった。

まずは夥しい数の机、そしてハムスター。

どれも俺達が触れなければ直接害のないものばかりだった。

「まずは中沢くんの言う通りにしないか？」

桜夜先輩も俺の意見に賛同してくれた。

「わかりました」

美唯もコクリつと頷いた。

「行くぞっ！！」

桜夜先輩の一言で、俺達は音楽室へと歩いていった。

「気を付けるんだぞみんな。どんな罠が仕掛けてあるか分からない」

桜夜先輩は注意深く辺りを見渡す。

「うわぁ……音に段々近づいてきた……」

月守さんの身体が戦慄しだす。

それが普通の反応かもな……。

「恐怖心は人の弱点だ。衝き込まれると相手の思う壺だぞ」

「わ、わかりました……」

恐怖心は人の弱点か……。俺も気を引き締めないと……。

『ジャンジャン！！ジャジャジャジャン、ジャジャジャジャン

！！！！！！！！』

より音がリアルに聴こえて来た。

その音は俺達の前にある、ドアの向こうから聴こえる。此処が音楽室か……。流石に此処まで来ると心拍数が騰がる。

と、桜夜先輩が振り返った。

「恐らく音楽室にも罠が仕掛けられている。どんな事があっても真摯を忘れるでないぞ！」

俺はコクリつと喉を鳴らす。

「桜夜先輩、どういう順番で入るんですか？」

美唯が音楽室に入る前に、桜夜先輩に確認する。確かに6人同時に入れる広さではない。精々同時に入れて2人が限界だろう。

「二人同時に入る。最初は翠華くんガイくんの二人だ。その次に中沢くんと成沢くん。そして最後は月守くんと私だ」

確かに、二人同時に入る方が安全性は高いだろう。  
俺と美唯は二番目に入るのか。  
どんなことがあっても、俺は絶対に仲間を守る。  
いつまでも守られる身は嫌なんだ……。

「わかりました」

俺は真っ直ぐドアを重視する。  
未だに、あの旋律が鳴り響いている。

「皆、先の形態になれ！」

先輩の言葉で、俺達は言われた通りの形態になる。  
そして、先頭の清王さんが迷わずドアノブに手を掛けた。

この人は恐れというものを知らないのだろうか？  
手もまったく震えてない。

そして、ドアノブを捻った

『ガチャッ！』

清王さんが勢い良くドアを開ける。  
が、音楽室は真っ暗だった。

『ピピイ』

開けて間もなく、電子音が聞こえてきた。



まるで何かを認識したような……。  
つて！何かを認識っ！？

『ゴゴゴゴオオオッ！！！！！！！！』

前方から神速の如く、豪音と共に何か接近してくる　　！！  
速過ぎてその物体が何なのかも分からない。  
分かったのは巨大で漆黒色の物体であるということだけ。

「　　ッ！？」

清王さんは機敏に反応し、状態を下げる。  
ガイも同じような動きをしていた。

清王さん達はあの物体の下を潜り抜けたようだ。  
そのことを認識した途端、俺の視野全体を覆うようにあの漆黒の物体が接近していた！

「ピアノかつ！！！」

直撃間近で俺はその物体がピアノであると認識する。  
だから、態勢を下げた清王さん達は直撃を回避出来たんだ。  
だが、俺は清王さんみたいには反応できなかった。

「馬鹿者っ！！！」

桜夜先輩が右手で俺の頭を鷲掴む！  
その右手で美唯の頭への腕を置き、月守さんの頭には左手が置かれ

ていた。

この態勢を瞬間的に取ったのか……桜夜先輩は……。

「ぐはあっ!？」

そのまま桜夜先輩は姿勢を下げ、両腕を地面に叩き付けるような勢いで俺達の態勢を下がらせる！

俺は桜夜先輩の腕力に一瞬で転倒する。

く、首が折れた……。

そう思うほどの衝撃を受けた。

「きゃふっ!!！」

美唯も激しく転倒する！

だが、その転倒で美唯の態勢は下がった。

俺も同じだ。

「わああ!？」

だが、月守さんは綺麗に桜夜先輩の腕力を活かし綺麗に受身を取る！

仰向けに倒れている俺がみた光景

それは、俺の目の前を猛スピードで駆け抜けるピアノだった。

ピアノが俺達全員を通り過ぎ、廊下の壁にピアノが直撃する……!

『ドカアアアアアンツ!!!!!!!!!!』

天地が揺れるほどの豪音が響く。

俺は倒れながらもピアノが直撃した壁を重視する。

「嘘だろう……」

既に壁は存在していなかった。

存在しているのは、大きな穴が開いている光景。

もはやそれを壁とは呼べない。

被害はそれだけでは留まらず、その周囲の壁にもヒビ割れが走っていた。

ピアノは壁を貫通し外に堕ちたのだろう。

もし、ピアノが身体に直撃していれば……。

それを想像した瞬間、背筋に寒気が走る。

「君達！無事か！！」

逸早く桜夜先輩が立ち上がった。

首を動かそうとするが、受身も取っていない俺の首には激痛が走る。

「美唯……大丈夫か……？」

「うん……大丈夫……頭とかは潤のお陰で丈夫だから……」

そうだった……。

美唯は”鋼の防御力”を得ていたんだっただな……。

毎朝、俺の猛スピードで開け放つドアに直撃していたもんな、美唯は。

「潤先輩っ！？大丈夫ですかっ！？」

月守さんは既に立ち上がった。  
月守さんはあの時受身をとっていた。  
反射神経が良いのか運動神経が良いのか……。  
いや、両方か……。

「翠華くん達は無事かね？」

一番ピアノとの距離が近かったのはこの二人だ。  
あの二人は刹那とも言える速さに反応したんだな……。

「問題ない」

「ああ、俺も大丈夫だ」

どうやら、全員が無事のようにだ。  
今はそれを喜ぶしかない。

また……俺は守られたのか……。  
いつも俺は……俺は……。  
足手纏にしか為らないのか……。

17話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

17話・(2)

ピアノの直撃に奇跡的に避けた俺達。

俺は首に負傷を負ったが、少し休めば回復した。

俺の首が回復した後、俺達は音楽室へ入った。

しかしそこは無人。

音の原因はラジカセだった。

完璧に朝倉にして遣られた。

畏だと思っても避けられない朝倉の畏。

見事としか言いようがない。

「あまり長くは留まれない。音楽室から出るぞ！」

桜夜先輩がそう言い残し、音楽室から退場する。

しかし……朝倉は何処にいるんだ……。

そう考えながら、俺達は音楽室から退場した。

「……………」

音楽室の向かいの壁。

いや、大きな穴の方が正しいかもしれない。

俺達はその穴を重視する。

その大きな穴から、外の景色が視える。  
もう夕方か……。

俺達は朝に桜凜武装高校へ進入した。  
そしてもう夕方になっていた。

「闇雲に歩くのは危険だ。まずは憶測を並べて究明に近づけよう」  
桜夜先輩の言う通りだろう。  
ただ闇雲に歩くのは、罠に掛かりに行くようなものだ。

「私の憶測だと、朝倉は淡々に居場所を変えているように思える」  
「場所を変えてる………？」

「あくまで憶測だがね」

桜夜先輩が少し失笑を浮かべる。

「私は同じ場所から監視していると思う」

清王さんが話しに加わる。

監視か……。  
十分に考えられることだな……。

俺は無意識に天井を見上げる。

「ッ!？」

偶然見上げた天井に、天井から何かが掛かっていた。

「か、カメラ!?」

そこにあっただのはカメラだった。  
隠しカメラという訳か……。  
ん? 隠しカメラ?

あのカメラって隠しているのか?

随分と旧型で型も大きい。

というか、デカ過ぎる。

20インチのテレビぐらいあるんじゃないかな……。

「カメラだっ!?」

桜夜先輩も天井を見上げる。

あんなに大きいのに良く今まで気付かなかったな……。  
逆に気付かない方が不自然だと思う。

「あんな所にカメラはなかった。私達は音楽室に入る前に周りを周到をしていたし、気付かない方がおかしい」

清王さんがハッキリとした口調でさういう。

確かに最初からあれば、音楽室に入る時に気付いていた。  
それ程の大きさだ。

「確かに……」

桜夜先輩は口元に手を当て、眼を瞑り考えている。

「このカメラ動いてないぞ!」



ガイの一言で俺達の視線はカメラへ向く。  
え？動いてない？

「そ、そんな馬鹿なっ！」

桜夜先輩もカメラの付近まで近づく。

「何故だ……動いてないだと……」

先輩は眼を大きくさせる。

「じゃあ、何でカメラなんて……」

俺の問いに答える者はいなかった。

駄目だ……頭がゴチャゴチャだ。

話を纏めよう。

あのカメラはかなりデカイ。

そして何故か動いてない。

つまり、あのカメラには意味がない。

が、この暗礁な場面が美唯の一言で豹変する。

「ああ！クマさんっ！」

美唯は人差し指を右側の廊下隅に差す。

へ？クマ？

あまりの唐突な発言に拍子抜けする。

が、俺は美唯の指差した先を見つめる。

.....

本当にクマだ.....

廊下の角からちょこんと顔を出している。

「く、クマさん.....」

今度は清王さんの態度が急変する。

だが、無理にその思考を追い払おうと左右に頭を振っている。

「翠華。分かってるな？」

「心配は要らない。同じ過ちは二度としない」

ガイなりの忠告なのだろう。

その忠告を素直に受け入れた清王さん。

だが、その表情は無表情ではなく、少し強張っていた。

「ちょっと.....!!あれクマさんのレベルを遥かに超えてるよっ!!」

月守さんはクマを一見し、恐慌の色をみせる。

熊のレベルを超えている？

まだ頭しか露にしていけない熊。

だから全長は分からない。

その時、月守さんの言葉に突き動かされるようにクマが歩き始める。  
そしてようやくクマの全身が露になった。

「うおおおおおおおおおおっ！！！！」

男の俺ですら雄叫びを上げてしまった。

そこに居た熊。

そう……。『クマ』ではなく『熊』という方が相応しい。

いや、熊という言葉すら生温い。

『巨大熊』

その言葉が頭に逸早く浮かんだ。

それに相応しい容姿。

思わず腰が抜けそうになる。

「な、何て大きさだっ！」

あの桜夜先輩ですら驚愕している。

そんな俺達に関わらず、熊は俺達との距離をゆっくり縮めて行く。

「種類はヒグマ。大きさは推定3メートルの500キロ」

桜夜先輩が呪文のように早口で唱える。

視線は熊に向けて、威嚇にも良く似た眼付きで熊を睨む。

「ネコ目クマ科に属する哺乳類。ホッキョクグマと並びクマ科では最大の体長を誇る。また日本に生息する陸棲哺乳類でも最大の種。

分布はヨーロッパからアジアにかけてのユーラシア大陸と北アメリカ大陸に幅広く生息し、その生息地は温帯からツンドラ気候の地域にまで及ぶ。現存するクマ属の中では最も広く分布を誇る。また形態は……」

「そんなことはどうでもいいですっ!!」

俺らしくもない大きな声を上げてしまう。

あまりにも桜夜先輩の口語が速過ぎて、結局何も分からなかった。

でも唯一聞き取れたのが『ツンデレ』という単語。

クマってツンデレなのかっ!?

ならデレてくれっ!!!

ツンツンしないでくれっ!!!

俺は恐れながらも熊の顔を見してみる。

こ、こええええええええっ!!!!!!

声に為らない心情が心中でもがき叫ぶ。

熊ってこんなに怖いのかっ!?

眼の前にいる熊は、漆黒の毛に覆われ、腰を抜かす程の怖い表情を

浮かべている。

というか、比喻ではなく腰を抜かした。

熊との距離。残り10メートル

「舞い落ちる桜の花に夢幻の優美を奉ずる」

桜夜先輩は超高速で呪を唱え始める。

桜夜先輩は既に千鳥を構えていた。

そして空いている左手の人差し指で、前方に呪印を組む始める。人差し指で描いた呪印が、指で組んだ通りに桜色に光る。

「巡り来る花信へと集い百花繚乱の如く成せ！」

呪を唱え終わると、指で組んだ呪印が燦爛の如く輝きを増した始めた

「貴様っ！クマさんに何をすっ！！」

清王さんは後ろから桜夜先輩を抱くようにして動きを止める  
まさかの清王さんの行動に俺達は呆然とする。 !

「ええいつ！離さんか！」

桜夜先輩も負けじと力を入れ、清王せんを振り払おうとする。が、清王さんも負けじと歯を食い縛る。

「あのクマさんが何をした！答えろっ！」

清王さんとは思えないテンションだった。

確かに清王さんの意見も一理あるかもしれない。だけど……。

「あれも朝倉の差し金だ！同じ罠に掛かってどうする!？」

熊との距離。残り5メートル

此処まで間近で視るとド迫力だ。  
熊が動くたびに、何故だか鈴の音がする。

その鈴の音は熊から聴こえてくるような……。

「こ、コイツ熊なのに鈴を付けてるぞっ!」

熊の首に鈴が付けられていた。

マジかよ……。

熊って鈴の音とかが弱点じゃなかったのか……?

「潤、熊って以外に怖いね?」

傍らにいた美唯は笑顔で問い掛けて来る。

「いや……熊を諸共しないお前の方が恐ろしいぞ……」

「潤先輩……!どうするんですか!」

月守さんは正常な反応を示す。  
かなり身体がガクガク震えていた。

「どうも!どうも!」

俺は桜夜先輩と清王さんを見る。  
その二人を必死で止めているガイの姿も視える。

熊との距離。残り3メートル

「翠華！もういい加減にしろっ！！」

ガイが清王さんに警告をする。  
が、清王さんは聴く耳を持たない。  
熊を目の前にし、俺達の心は一つにならない。

そんなことが有り得るのだろうか？  
大抵の人間が心を一つにし、熊から逃げるんじゃないか？

「もう一度言うがこれは朝倉の差し金だ！いい加減に手を引いてくれ！」

まだ清王さんは桜夜先輩から離れない。  
と、うっで……。

「き、貴様！長官の前で無礼だぞ！」

俺達の誰でない声が響いた。

この声は初耳ではない……。

この声は……。この声は……。

ん？その前に何だ？長官？

「はあ？ちょ、長官？」

初めて全員の声があった。

この熊がか？

「この熊がか？朝倉？」

桜夜先輩は声の主に問いかける。

いや、”朝倉”に問いかける。

やはり声の主は朝倉だった。

「な、なんとということを！ 長官、申し訳ありません。私の呼んだ  
客人がご無礼な真似を……」

朝倉は真面目な顔で、俺達と熊の間に割って入り熊に話掛ける。

「しかし、朝倉の差し金だ。何をするか分からない」

桜夜先輩は警戒を緩めず、熊を睨み付ける。

柄を握る力も増して見える。



「長野長官はいつも学園の綱紀粛正の為にご尽力されている高貴なお方なんだぞ？ 貴様等、控える、控えんか」

熊は朝倉の後ろで『グオオオオオオオオツ！！！！！！』と鳴いている。なんだ……朝倉って奴は……狂ってやがる……。

『ブルルルルルルルルルル………』

と、ここでまさかの携带着信音がキャンバスに響く。

「け、携帯！」

聴こえる筈のない携帯の着信音が聴こえてくる。

電気が使えない筈なのに……何で着信音が……！

『 Oh , Y e a a ~ ! ! ~ 』

声の高い男の人が、色気良くそう発音する。

この声を聴き、全員のバランスが崩れた。

美唯と月守さんは必死に笑いを堪えている。

俺とてその例外ではない。

『ピッ』

朝倉はポケットから携帯を出し、耳を携帯に当てる。

「うん。少将か。うむ、長官は今こちらに来られている。恐らくいつも視察だと思っ」

朝倉は奇妙な口調のまま、携帯でやり取りをしている。

「長官だが何だか知らないが、私達に危害を加えるのなら容赦はないぞ」

桜夜先輩が再び柄を握り直し、刃先を熊に向ける。すると、朝倉は蒼然な態度を取り始める。

「貴様っ。重ね重ね長官に無礼な真似を……」

その時、朝倉と熊の顔色が変わった。

「むっ、これは……!?!」

朝倉は何かに気付いたのだろうか？  
朝倉は何かの変化に明敏に反応する。

「どうしたのかな？狡猾な君が動揺するとは、よほどの希代が起ったのかな？」

桜夜先輩は朝倉に対し、嘲笑いながら問責をする。  
と、その時……。

『ハクシヨンッ ……!!!』

熊が豪快に飛沫を飛ばす。

その瞬間、周りがホワイトアウトし視野全体がホワイトで覆われる。

「長官、彼らが追って来ます。一先ずこの場を引き上げましょう」

その間、熊と朝倉とのやり取りが聴こえてくる。熊が『グオオオオオオツ！！！！』と鳴いた。だが、そのやり取りは視えない。

「さらばだ諸君っ！縁があつたらまた会おう」

くそ……！周りがホワイトアウトしてて視えない！しかし、眼を凝らすと熊の影が薄っすらと視える。その熊がこつちに接近してくる　っ！？

「ケホッ！ケホッ！ケホッ！」

相変わらず、桜夜先輩の咳きが聞こえて来る。

その桜夜先輩に向かって熊が猛スピードで接近してくる

！！

「さ、桜夜先輩っ！！」

俺は桜夜先輩の名を叫ぶ。

だが、返事は咳きしか返ってこない。

「はあっ！？」

桜夜先輩の声がよく聴こえた。

だが、その声は何か気付いたような声だった。

くそ……前が視えれば……。

そう思った直後、徐々に視野が回復していく。

「み、みんな……無事か……」

俺は仲間達に呼びかける。

「うん……大丈夫……」

傍らから美唯の声がする。

これで煙は何回目だろう？

いや、さっきのは煙なのか？

「どうにか……」

月守さんの生存を確認。

「問題ない……」

「俺は大丈夫だ……」

清王さんとガイの生存も確認。

これで全員の生存が確認されたか……。

後は霧が晴れるのを待つだけだ。

……。

「ああ、ようやく晴れた……」

俺の視野から忌々しいホワイトは姿を消した。

朝倉が自ら尻尾を出したというのに……結局俺達は何も出来なかった……。

が、霧が晴れても俺達の間には会話が生まれない。

あれ？俺達ってこんなに空気重かったけ？  
俺は違和感を覚える。

「あれ？桜夜先輩は？」

俺は360度、周りを見渡す。

が、桜夜先輩らしい人物は見当たらなかった。

「え？桜夜先輩ならここに……………って、あれ？」

美唯も360度、周りを見渡す。

「ど、何処にもいない！」

月守さんが声を上げる。

え？何でいないんだ？

「桜夜先輩っ！！出て来てくださいつ！もう大丈夫ですよー！！」  
「！」

……………。

俺の呼びかけに反応する声はなかった。

何で出てこないんだろう？

先輩がこんな悪ふざけするなんて珍しいな……………。

「桜夜先輩 ……！！！」

俺達は桜夜先輩の名を呼び続ける。

しかし、以前として桜夜先輩は現れない。

と、その時……。

あの光景が脳裏を過ぎる。

そうだ……あの熊は桜夜先輩に向かって走って走ってったよな……。

その桜夜先輩が……いない……。

ということはまさか……まさかっ!!

「桜夜先輩が……誘拐された　!?!」

18話・(1) 桜月導の失跡(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

18話・(1) 桜月導の失跡

「桜夜先輩が……誘拐された　！？」

自分で言っただけで信じられなかった。

あの桜夜先輩がだぞ！？そんな事がある筈がない！  
じゃあ、桜夜先輩は何処に……。

「うそ……でしょ……」

美唯の顔から血の気が引ける。

その表情だけでも、どんなに酷い状況かが分かる。

俺達のリーダー格……いや、リーダーだった桜夜先輩が今……。

この場……にいない

「至高の桜月導……」

清王さんは桜夜先輩の称号『至高の桜月導』と小さく呟き、朝倉が去って行った廊下を重視する。

「恐らく中沢の言う通りだろう」

ガイは低い口調でそう皆に言い、俺の顔を一瞥する。



俺の言う通り……。

つまりは、桜夜先輩が誘拐されたということ。

「沙耶先輩が……誘拐……？」

月守さんは手を自分の胸に当てる。  
額からは汗が滲み出していた。

気が付けば、俺の心悸は速まっていた。  
悪い思考ばかり浮かんでくる。

俺は峻烈に慄然する思考を押し殺した。  
落ち着け……。落ち着くんだ……。

桜夜先輩が誘拐されたなんて、俺には信じられない。  
俺は桜夜先輩の強さを知っている。  
知っているからこそ信じられない。

「朝倉に誘拐された……のか……？」

俺は無粋な問いをする。

逆に言えば、朝倉しか考えられない。

「それしか考えられない」

清王さんに即答され、ようやく実感が湧いて来た。  
桜夜先輩がいないということの……。

俺達は……どうすれば良いんだ……？  
桜夜先輩なら、次はどうしたんだ……？

桜夜先輩の存在がどれ程大きかったのか、身を持って痛感する。俺達にとって、不可欠な存在だったということか……。

……。

会話が生まれない。

今まで俺達はどうやって接していたのかさえも分からなくなった。俺達の仲を綴っていたのも桜夜先輩だったんだな……。桜夜先輩が失跡して初めてそれが分かった。

俺が……俺がどうにかしないと……。

だが、何を言っても良いか分からない。何をして良いのか分からない。

俺が皆を纏められるのか？

いつも守られている身の俺に、そんな力はあるのか？ いや、そんな事はどうでもいい！

このままだと、皆がバラバラになってしまう！

「まずは皆で話そう。今後の行動を」

この張り詰めた空気の中、俺の声だけが響く。するとガイが一つ息を吐き、俺を視る。

「そうだな。それが最善だろう」

ガイが周りを見渡す。

その視線の先には、俺、美唯、月守さん、清王さんしかない。気が付けば、俺達は円状に並んでいた。話し合うにはベストな形態だな。

「二手に分かれるか？」

二手に分かれる！？

ガイの一言に俺は耳を疑った。

「俺と翠華で朝倉と”異世界”の情報を模索する。お前達は至高の桜月導を助ける」

そうか……。俺達は真実を調べに来たんだ。

確かに全員が桜夜先輩の搜索に当たったら、朝倉は愚か真実すら分からない。

「そうだな。まずは二手に分かれよう。美唯、月守さん、それでいいな？」

俺は二人に同意を求める。

「うん、潤がいいなら」

美唯はコクリと頷く。

それに続けて、俺も頷く。

「えっ！？何ていうか……私達のグループって火力不足じゃない？」

月守さんの言う通りだな……。

「ガイのグループは問題はないと思うが、俺達のグループは”火力不足”だ。」

「大丈夫、朝倉は私達を殺すつもりはない」

月守さんの問いに清王さんが答える。

「どの罠も死ぬような罠ではなかった。でもピアノの罠は死んでいたかもしれないけど」

確かに清王さんの言う通りだな。

清王さんが掛かったハムスターの罠だって爆弾だったら俺達は死んでいた。

「ただど煙幕弾だった。という事は朝倉は殺す気はないのか？」

いや、さっきのピアノの罠は例外だ。壁すら貫く程の威力だ。人の身体に直撃すれば死の恐れもあるだろう。

だが、俺達にも時間がない。迅速に桜夜先輩を救出しなければ！

「俺達には時間がない！とにかく動きだそう！」

俺は拳を握り、強く唱える。

「そうだな。万が一の集合場所は校門だ。いいな？」

今度はガイが皆に確認をする。

ガイの視線の先には、同じ志を同じ表情をする俺達がいた。

「ああ、ガイも無事だな！」

「俺からすれば、お前達の方が心配だが……」

ガイが苦笑を浮かべる。

確かに武器も持っていない俺達は無力だろう。  
だが……。

「大丈夫だ！俺にはこの”左眼”が有る！」

俺は左眼に左手を添える。

”左眼”

俺は異能者。

この左眼には、皆を守る力が宿ってる。

俺は名前も知らないこの左眼に、俺達の運命を賭ける。

「左眼？」

ガイは不思議そうな表情をする。

ああ、そっか……。

ガイ達は知らないんだよな……。

「だから大丈夫だ！行くぞっ！」

桜夜先輩の言葉を真似てみる。

先輩は必ず動き出す時、『行くぞ』と口にする。

俺はその言葉で、随分とやる気を貰っている。

俺だけではないだろう。きっと全員だろう。

「分かった。死ぬなよ」

「ああ」

俺とガイは強く握手を交わす。

そこには、希望に満ちた感覚があった。

「翠華ちゃんも気を付けてね？」

美唯は微笑みながら、清王さんに手を差し伸べる。

「す、翠華ちゃん……」

清王さんが笑った？

恥ずかしいのか頬を少し紅潮させている。

そして、杞憂しながらもゆっくりと美唯の手を握った。

「ああ〜！照れてる翠華先輩、か・わ・いい〜！」

すぐ近くに居た月守さんが、清王さんに嫌さずちよっかいを出す。

「ッ！？」

その言葉を聞いた清王さんがビクッと肩を震わせる。

その光景を見て、俺とガイはクスリッと笑った。

「翠華。楽しい所悪いがそろそろ行くぞ？」

ガイが清王さんに悪戯そうに言う。

清王さんはその言葉に機敏に反応し、ガイの方を向く。

「た、楽しい……???」

「ああ、今の翠華は楽しそうだぞ？」

「楽しい……」

清王さんがそう呟いた。

俺達と出会った時から、一つの笑顔も見せなかった『清王 翠華』  
だけど確かに今、俺にも楽しんでいるように見える。

「そうだよ！楽しいのは良い事だよ？翠華ちゃん」

美唯は眩しすぎる笑顔を清王さんへ向ける。

「す、翠華ちゃんと呼ぶな……はずかしい……」

清王さんとは思えない口重な感じだ。

だけど、俺は今の清王さんの方が好きだ。  
だから皆も笑っていられるんだろう。

何時までもこうしていたい。

だけど、急いで桜夜先輩は救出しないといけない。  
そうじゃないと、桜夜先輩の身も危険になる。

名残惜しいが、俺は動きだした。

「何時までもこうしては居られない。桜夜先輩を探さないと」

この空気を壊してしまう俺の一言。

この一言で俺は此処が普通の世界ではないと痛感する。

「そうだな……行くか……」

ガイも名残惜しそうな表情を浮かべ、背負ってあるスナイパーライフルを背負い直す。

「翠華！行くぞっ！」

その言葉と同時にガイは俺達に背を向ける。

清王さんが軽く頷き、ガイの後ろに着いて行く。

「中沢！集合場所は校門だ！忘れるなよ！」

ガイの背中から声が聞こえる。

その背中には確実に小さくなって行く。

「ああ！ガイも忘れるなよっ！」

俺達は離散際も、全員笑顔だった。

約束の場所へ”仲間”を導く為に。

（幸運あれっ！！！！）

俺は最後にそう”魂”で叫んだ。

魂が通じ合っている”仲間”しか聴こえない声で。



18話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

「行っちゃたね……」

美唯が深奥な趣で、ガイと清王さんが行った廊下を視る。

「ああ、そうだな……。よっし！俺達も行くぞっ！」

俺はガイ達が行った反対側を向く。

「潤先輩じゃ、なんだか不安だなあ」

月守さんは俺に薄ら笑いをする。  
不安とは失礼な真似を……。

「心配するな。此処には世界チャンピオンですら膝を屈する程の威力を持つ女がいる」

そう言い、俺は美唯の顔を視る。

「な、何で私の方を視るのよっ！」

「はははっ」

笑って誤魔化すと、俺の足は歩みだす。

「ああっ！じゅくんっ！待ってよ！」

美唯が空いた距離を小走りで埋める。  
それに釣られて、月守さんも走りだした。

「さてと、先ずは的を絞らないとな」

この学校は広すぎる。

しかも、右か左かも分からない状態。

当然、俺達がどこに向かつてるかも解からない。

と、美唯は、

「桜夜先輩……。どこに連れて行かれちゃったんだろ……」

「それを見つけないとな……俺達で」

でも、本当に検討が付かない。

こうなったら、手当たり次第に教室を物色するしかないのか？

「こうなったら、もう適当に教室を探るしか……！」

月守さんが俺の思考を読むように唱えた。

「俺も同じこと考えてた」

この方法は効率が悪すぎる。

しかし、これ以外方法が思い付かない。

「でも、沙耶先輩……。どんなことされてるんだろ……」

月守さんは下を向き、淡々と喋りだす。

「大丈夫だ！桜夜先輩なら」

無事という根拠もないが、俺は桜夜先輩を信じる。  
そして、ハアッと勢い良く月守さんが顔を上げる。

「ま、まさか……！！！」

「こ、ここは……」

私が眼を覚ましたのは、薄暗く気味の悪い所。  
しかし、すぐにそこが礼拝堂だと解かった。

赤、青、緑、黄色……。様々な色の光が、貼り付けられているガラスから漏れている。

「そうか……。私は朝倉に浚われて……」

その時私は、両手首に違和感を覚える。  
そして、視線を下ろす。

「なあ………！」

十字架。

私は今、十字架に架けられてる。  
両手は翼のように大きく広げられ、両足も地から離れて束縛されている。

「くう………！」

いくらもがいて抵抗しても、私が自由になることはなかった。

「十字架に架けられている気分はどうだい？桜夜沙耶」

その声は私の前方から聞こえてきた。  
罪人を痛みつけるような、その声。

「あさくらあ………」

足音と共に、朝倉がゆっくりと近づいてくる。

「ふう………」

小さく口元を歪ませた朝倉は、手に持っている細長い竹の棒のようなモノを地面に叩き付けた。

『バシンッー』

閑静な礼拝堂に響き渡る高音。  
この音はムチだ……。

「それで何をする気だ……？」

距離が１メートル程に縮まり、そこで朝倉は歩みを止めた。

「まだそんな口を利けるとは……」

朝倉は歪ませた口元を変えず、私の眼を直視する。

「貴様は違反者だ。それ相当の贖罪をしなければな」

「ふう……」

私は小さく嘲笑い、視線を落とす。

「今からでも心を入れ替えるのなら、免除してもいいが？」

「断固拒否する。私は貴様等のような事は絶対にしない」

今度は、ふんつと朝倉が鼻で笑った。

「悪い子だな……」

私は視線を落としたまま、眼を閉じる。

「悪い子には何が必要だ？」

『バシンッ!』

「ぐはああああっ!?!」

右の脇腹に激痛が走る。

ムチの高音の残響が礼拝堂に響く。

そのムチ威力は、制服を破くぐらいの威力。

私は堪らずに声を発してしまった。

『バシンッ!バシンッ!バシンッ!』

「はああ……っ!?!?! はあ……ぐっう!……ぐああああ……  
!?!?!」

ムチが何度も眼にも止まらぬ速さで往復し、私の身体全体を痛みで覆うように激痛が走る。

「はあ……はあ……はあ……」

眼を開けると、私の制服が所々、ムチの軌跡通りに破れているのが見える。

「もう服の役割が果たされてないな?」

「……………」

が、私は何も語らなかった。

すると、朝倉がムチを地面に投げ捨てる。

「ふう……………。この程度に仕置きでは生温い」

そう言い、朝倉は私に近づいてくる。  
まるで、何か愉しい玩具を見つけたような表情。

「な、何をやる気だ！」

「なに、ちよつとした快樂だよ」

気が付けば、手を伸ばせば触れられる程に朝倉接近していた。

「なあ……！何を破廉恥な真似を！私がそんなこと……！」

力一杯両腕を動かすが、拘束は解けない。

その私の姿を視て、朝倉は楽しんでいるようにも視える。

「あまり暴れると……」

「ふはあっ！？ど、どこを触っているっ！？」

私の鎖骨の下の膨らみに……その朝倉の手は置かれていた。

そして、朝倉は私の反応を見ると、更にその手を脈を打つかのよう  
に何度も動かしてくる。

「や、やめえ……！！！」



「そ、そんな展開ありえるかぁー……！！！！！！！！！！」

俺は月守さんの想像という名の妄想を掻き消した。

何だ、この展開は！

何とつらやまし……じゃなくて、ありえないだろ！？  
しかも何だ！あの最後の展開は！

「え？違うのかな……？」

月守さんが眉を曲げ、顔を小さく傾げる。

「私も、流石にそれはないと思う……」

美唯も呆れたような表情で、月守さんの想像の可能性を潰す。

「でも、沙耶先輩ってすごく綺麗な人でしょ！？」

確かに綺麗な人だけど……。

「SMプレイも嗜虐性趣味も朝倉にはないと俺は思う」

「そ、そんなの解かないでしょ！」

何故か月守さんが猛烈に反発する。

月守さんはそういうプレイが好きなのだろうか？

「でもこんな世界だから、そういう人が居てもおかしくはないはずだよ?」

美唯……。

お前はどっちの味方なんだ。

でも、美唯の言うことは間違いではない。……と思う。

「そりゃ、おかしくはないだろうけど……」

何だか、桜夜先輩が大変な事になっている気がして来た。

「じゃ、じゃあ……桜夜先輩は朝倉に……!!!!」

美唯は頬を紅くし、口全体を両手で覆るように隠している。

「言うなっ!! 言ったら負けだ!」

自分で言ってる、意味が解からなかった。

何が負けなんだろうか?

と、月守さんは、

「まさか……。今頃、沙耶先輩の初めては……!!!!」

「うおおおおおおおっ!!! 速く桜夜先輩を探しに行くぞっ!!!」

様々な感情が錯綜する中、どの感情か解からないが、迅速に桜夜先輩を見付けないといけない気がした。

気が付けば、俺は駆け出していた。

「えっ！？じゅ、じゅーんっ！！！！待ってよ！！！」

「潤先輩っ！？いきなりどうしたの！？」

桜夜先輩！

待っていてください！

すぐに……すぐに助けに行きます！！

俺は一心不乱に唯、全力で走って行った。

19話・(1) 独りの少女との出会い(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s

で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

19話・(1) 独りの少女との出会い

「はあ……はあ……はあ……」

変な月守さんの妄想により、胸が妙に熱くなった俺は何故だが走りだしていた。

「じゅんっ！いきなりどうしたのよ！」

走りが止まり、肩で呼吸していた俺に美唯が話しかけてきた。

「いや……俺も分からない」

「じゃあ、何で走り出したのよ！」

その問いに言葉を失った俺は、ただひたすらに呼吸を整える。呼吸が整ってきた時に月守さんが俺の元まで辿り着いた。どうやら、悠々と歩いて着たようだ。

「よっし……」

俺は小さく頷き、下げていた頭を上げる。と、そこには三階へ続く階段があった。

「三階に行くか」

俺の言葉を聞き、美唯はコクリと頷いた。

「そうだね。ここにも朝倉はいなかったから」

「一体、どこにいるんだか……」

「本当ね……」

「やっぱり沙耶先輩は朝倉に……！」

「月守さんは少し黙っててくれ！」

不満を呟きながら、俺達は階段を上がった。

### 桜凜武装高校三階

「さあ、朝倉はどこだ……」

俺達は足元や左右の壁、更には前後にも注意を払う。

「呼んで出てくるとは思えないけど……」

「美唯、そんなのは分かってる」

警戒しながら歩くというのはやはり体力、更に気力まで消費する。だが、油断した時に隙が生じる。

「ああ、そつだ！」

月守さんは何か良い名案が思いついたのか、手をポンと叩く。

「朝倉を呼んでみようよ！」

月守さん……。

俺達が「呼んで出てくるとは思えない」といったばかりだぞ？

「そつだよね！やってみないと分からないよね！？」

なぜか美唯が賛同した……！

何が「そつだね」だ。

さっきと言っていることが違つぞ。

「美唯、さっき呼んで出てくるとは思えないって……」

「そんなのやってみないと分からないでしょう！」

なぜか一喝されてしまった。

もう、こうなったらヤケクソだ。

「じゃあ、呼んでみるか……？」

なんて幼稚的な発想だろう。

出てこないとは思っけど……。

「せ〜の〜！」

美唯が音頭を取り始める。  
俺はおもつきり酸素を取り入れる。

「」「あさくらあ！さくんんっ！！」「」

……………。

惨劇なまでに、俺達の発した言葉は一人一人ことごとく違った。

俺が発した言葉は「あさくらあ！」

美唯が「あさくらさん！」

月守さんが「あさくらくん！」

そして、意味の分からない言葉が虚しく桜凜高校に響き渡る。

「……………」

俺達は黙ることしか出来なかった。

「もう一回やろう……………このまま止めるのはあんまりだよ……………」

美唯の沈んだ言葉が俺の耳に入ってくる。

「今度は統一しような……………」

俺は哀しくため息を漏らし、苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、もう呼び捨てでいいよね？」





その途端

『ガコンッ!』

真下から何かが開く音がした。

その音を聞いた瞬間には、既に立っている感覚は失われていた。これは……。

真下が開いたということは……。

落とし穴だ!!

いや、穴じゃないから落とし床だ!!

「「「うわああああああああああああああああ!!!!!!  
!!!!!!」」」

俺達は重力に従い、真下へ急降下していく……。

もう、逃げる術はどこにもなかった。

その途端、俺の目の前に何かが重なる　!

「うおっ!前が見えない!」

俺が顔を動かした瞬間、むにゅっと柔らかい感触が顔に伝わる。

ま、まさか……これは……。これは……。

「きゃあ!じゅ、じゅんのへんた　　いつ!!!!」

やっぱり美唯の胸だった　!

俺の顔は、美唯の胸の間にすっぽりと収まっていた。

「ってか、月守さん!呼び出し逆効果じゃん!!」

「あ、あははは……」

「笑って誤魔化すな！」

「きゃあ！じゅん！喋らないでよ！」

「結局、一階に逆戻りだね？潤先輩！」

「あんたのせいでしょうがあああああああああ……！」

俺と美唯は重なり合うようにして、地面へ向かって落ちていく。俺が下でよかった。これなら美唯を落ちた時の衝撃から守れる。

『ドスツッ！！』

サンドバックを床に叩き付けたような鈍い音がした。

この音で俺達は地面まで落下したと理解できた。

そして、重なり合う俺と美唯はランポリンのように激しくバウンドした。

「きゃふっ！」

美唯の悲鳴と同時に、俺の顔の左右にあるやわらかいものが暴れだす。

ああ、そうか……。地面に当たってバウンドしたんだ……。だから美唯の胸が衝撃で暴れて……。

俺と美唯はその体勢のまま、軽く3mはバウンドした。

「うわぁぁぁぁ！？美唯先輩！危ない！！」

下から月守さんが向かってくる……？  
なぜ下から……？

しかも、なんでこんなにバウンドしてるんだ……？

不確かだらけのことばかり起こる。  
だが、ようやく合点がいった。

「ああ、なるほど！俺達が落ちたのはトランポリンなんだ！だから  
凄いバウンドして、バウンドした月守さんが下から向かってくるん  
だ！」

だが、俺の声は籠る。

「ああぁぁ……！だから喋らないでよ！」

あ、そうだった……。

これ以上、美唯に色々とする訳にはいかない。

だが、あまりにも密着した胸部からは美唯の匂いがする。

香水の匂いではない。多分、ボディークリームやシャンプーで付いた  
自然な匂いだろう。

『ドスツ！』

下から何かが、もの凄いスピードで直撃した  
しかも空中でだ。 !

「うわぁぁぁぁ！？」

その主は月守さんだった。  
ああ、そういうばさつき危ないとか言ってたよな……。  
月守さんを助けようと俺は手を伸ばす。

「あ………！」

ザラツとした布地のようなものに俺の手は触れる。  
ん………？なんだこれは？  
気になった俺は、更に指をなぞるように動かした。

「んああ！？じゅ、じゅんせんぱい！どこさわって………！？あたし  
まだそんな………！！！」

なんだ？この禁断のものに触れたような月守さんの反応は……。  
つてことはまさか………！！  
触ったものの正体が分かった瞬間、俺の頭を中心に血が集まるよう  
にして熱くなる。

「……………」

もう、俺は何も喋れなかった。  
そして、ただ早く床に着きたいと心から祈った。

19話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

「…………ん？」

意識を失っていたのだろうか…………？

ここは…………？俺は状況を把握しようとして立ち上がる。

「あれ？立ち上がれない…………」

俺は思い瞼をゆっくりと開いた。

「……………！！！」

み、密着しすぎだ……………！！

もう、何がなんだか分からない。

俺の上には美唯がいて、俺のすぐ左には月守さんがいて…………。だから立ち上がれないのか…………。

「だ、大丈夫ですか？」

動揺を隠し切れない俺に、優しくして綺麗な少女の声が届く。

「ああ、大丈夫…………」

その優しい声に俺は反射的に言葉を返してしまった。

この声は美唯でもないし、月守さんでもない…………。

「手伝いましょうか？」

前も美唯しか見えないので、もちろん少女の顔も見えない。二人の女の子と密着してる状態での初対面ってめったにないぞ……。

「いや、俺がどうにかするよ」

「そうですか。もし駄目そうでしたらいつでも助けを呼んでくださいね。私はここで見守ってます」

顔は見えないが、少女が微笑んでいるのが口調で分かった。つてか、見守ってるて……。それはそれで変なプレッシャーがかかるな……。

「あははっ、ありがとう」

ふう、と俺は深呼吸をする。

上には美唯、そして左には月守さんが密着している。

やはり誰もいない右側にスライドするのが上策か……。

いや、そうしたら俺の上に乗ってる美唯が「きゃふっ！」とか言うて顔面強打するだろう。

だから俺は右側にスライドすることは出来ない。

万策朽ち果てたか……。

いや、落ち着け……まだ策はあるはずだ。

こんな格好をいつまでも少女に見せる訳にはいかない

……。。。。。。



美唯を起こすか……。  
今は気絶しているのか、意識がない。  
美唯さえ起きれば、俺達は解放される。

よっし！起こすか！

俺が美唯を起こすなんて珍しい……。  
ってか、どうやって起こせばいいんだ？

「みゆ！起きろ！」

……。

やっぱり目覚めないか……。

俺は右手を不恰好に美唯の鼻まで伸ばし、鼻を摘む。  
右手が不恰好なのは密着して上手く伸ばせないからだ。

……。

予想通りだ……。やはり目覚めない。

俺は次の策に出る為、左右の手の平を美唯の頬に置いた。

「美唯、許せ」

パンパンパンパン……。

俺は軽く往復ビンタを左右で始める。

「きゃふ……」

おお、少し反応があった。

このまま一気に決めるぜ！

パンパンパンパン！！

「うおおおおりゃあああああああッ！！！！」

俺は必要以上に力が入り、軽くのつもりが強く叩いていた。

「いたい……いたい……いたい……いたい！！」

その瞬間、美唯の目が見開いた。

「おお、おはよう！！」

俺は爽やかな笑顔を美唯に送る。

しかし、こんなに密着していると上手く笑えない。  
パンパンパンパン！！

「だから痛いって！！」

ああ、止めるの忘れてた。

「さあ、美唯。早く立ち上がるんだ」

「え………？」

美唯は状況を理解出来ないのか、周りをキョロキョロと見る。そして視線を、美唯の下敷きになっている俺へ向ける。

その瞬間、カアツと美唯の顔が紅潮した。

「じゅ、じゅんのへんた　　い！！！」

美唯の右ストレートがこの近距離から飛んでくる　　！  
ズバシ　　ン！！！！

「理不尽だろう！この流れ！」

俺は激痛に耐えながらも、美唯の肩を両手で掴み、勢い良く立ち上がった。

「きゃあー！」

美唯の短い悲鳴は聞こえたが、無事に立つことに成功！  
と思った矢先、勢いが良すぎて今度は前方に倒れてしまった。

「ああ………」

前方に倒れて、美唯との立場が逆転した俺は  
美唯を押し倒すような格好になってしまった

「ああ……私はお邪魔のようですね。それでは………」

ああ、そうだった！

ここには初対面の少女もいるんだっただ!

「ま、待ってくれ!これは偶然が生んだ産物だ!」

俺は慌てて右側に飛び込むように転がり、初めて見る少女に目を向ける。

しかし、既に背中を向けていた。

ああ、なんて綺麗な人だろう。

俺は本気でそう思った。

背中しか見えないが、黒髪で背中ぐらいの長さ。

その髪は漆黒色で輝いている。

そして、俺の声を聞いた彼女は

ゆっくりと振り返った

彼女の輝く黒髪が、優美な曲線を描いてその動きを追う。

黒髪碧眼。

それが彼女の容姿だった。

文句なしに綺麗な少女だ。

その証拠に俺は言葉を失っていた。

俺の顔を見た少女は、にこつと微笑んだ。

「申し遅れました。私は架瀬<sup>はせ</sup>セナと申します」

「あ、俺は中沢 潤。よろしくな」

この架瀬セナという少女は、俺達とは違う制服を身に付けていた。つまりは、桜凜武装高校の生徒。

『武装』という言葉が無縁に思えるが、やはりそうなんだろう。

そんな事を考えていたら、架瀬さんはゆっくりと俺に近づく。

「中沢 潤くんですね。宜しくお願いします」

にっこりと笑うと、架瀬さんは俺に右手を差し出してきた。

「え……？いきなり慰謝料請求……？俺、君にはまだ何もしてないと思うけど……」

「なんでそうなるんですか！？握手ですよ！」

ああ、びっくりした……。

知らない内に架瀬さんにも何かやったのかと思った……。

「ああ、こっちこそよろしく」

俺はそつと架瀬さんの手を握った。

そして架瀬さんはまた優しく微笑んだ。

なんて笑顔の耐えない優しい人だろう。

この世界にも、こんな人がいたなんて……。

「ちょっと潤っ！いつまで私を放ったらかしてるのよ！」

美唯の声が、胸にザクツと突き刺さった。

そうだった……忘れてた……。

しかし、月守さんはまだ目覚めていないようだ。

すると美唯はタツタツと早歩きで俺のところへ。

目は完全につりあがってる。怒ってる証拠だ……。

「はじめまして！成沢 美唯です。よろしくお願いします！」

そのつり目だった表情が架瀬さんと視線が合った瞬間、まるで別人のように一瞬で表情が変わった。

「あ、はい！よろしくお願いします」

あまりの急変さに架瀬さんも少しばかりか動揺しているように見える。

そしてギロツと俺に視線を向けてきた。

これは慰謝料請求より段違いで恐ろしい。

「美唯、別にもういいじゃないか。過去の事は水に流すということ  
で」

「なによ！その妙にいい顔！」

いつも通りの美唯に戻ったことで、俺は今まで気にしなかった回りに目を遣った。

俺達が落ちたこの場所は

20話・(1) 知って壊れる世界を俺たちは既に知っていた(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

20話・(1) 知って壊れる世界を俺たちは既に知っていた

「い、いいは……？」

今まで気にもしなかった。

ここはどこなんだ？

確か落とし床にはまって、急降下して、それから……。  
そう！バウンドして……。

なんだか、ものすごい状況が随分と起こった気がする。

「実は、私も良く分からないんです」

「え……？良く分からない？」

架瀬さんの言葉に反射するように、俺は部屋を360度見回した。

この部屋にあったのは、高級感漂うシングルベット、食器棚、キッチン……。  
そして何と立派な大理石のテーブル、そしてこれもまた立派なソフ

アー。

どう見ても一流ホテルの部屋だった。

「随分セレブな部屋だな……」

思わず本音が出てしまった。



ここは架瀬さんの部屋なのだろうか？  
いや、本人は「良く分からない」と言っていた。  
ならここは……？

「う、うわ~~~~！立派な部屋~~~~！！」

美唯は興奮したのか、両手を大きく広げ、グルグルとゆっくり回っている。

確かにそうしたくなる広さだ。

あれ？そういえば月守さんは？

「美唯、月守さんは？」

「あ、りんかなら私がベットまで運んどいたよ！」

グウ！つと親指を大儀そうに突き立てる美唯。

俺もシングルベットに眼を遣ると、確かに月守さんが眠っていた。

「ば、バカ！ここは架瀬さんの部屋……でもないのか？とにかく特別な部屋なんだからそんな勝手なことを……」

「いいんですよ。私の部屋でもありませんので、好きなように使ってください」

好きなように使ってくださいって……。

逆にどんな風に使えばいいのだろう。

すると、架瀬さんはソファの方には手を差し出した。

「立っただけでは疲れるので、どうぞ座ってください」

つと架瀬さんは言い、自分で示したソファの向かい側に座った。

「ありがとうございます！」

そついい美唯はゆつくりと腰を下ろした。

と、俺だけが立っている状況になってしまった。

「あ、ありがとうございます……」

俺は座る位置を何度も確認する。

これは普通のソファじゃない。明らかに桁違いの代物だ。それだけでも緊張するのに、更には架瀬さんが見ている。

「ソファには爆弾も何も仕掛けてませんよ……？」

架瀬さんは優しく俺に微笑んだ。

いや、笑われたの間違いだろうか？

「そつだよ潤！もし仕掛けられてたら私は今頃グチャグチャだよ！」

「そつだつたら俺もグチャグチャだわ！」

美唯の下で爆発すれば、もちろん隣にいる俺も巻き添えになる。

想像したくはないが、美唯がいうグチャグチャだ。

俺はゆつくりと腰を下ろす。

まるで、それはスローペースカメラのように。

まるで、ウォッシュレットではない便座に座るように。

俺の懸命な姿を見て、架瀬さんがなぜかクスクスツと笑い出した。

「なんでそんなに懸命なんですか？可笑しな人ですね」

クスクスツ。

まだ架瀬さんは笑っていた。

「すみません。うちの潤が変な子で……」

そう美唯がいい、強引に俺の頭を名の通り鷲掴みする。架瀬さんに笑顔で軽く何度もお辞儀をしながら美唯は

「ぐはああ!？」

力一杯に俺を座らせた。

頭が取れるかと思った。

だから俺は座っても、ただ頭を抑える。

「ああ、大丈夫ですか？中沢さん？」

「これが大丈夫に見えるかい？」

俺は頭を抱えながらも、笑顔で言い切った。

「す、すみません……」

「別に謝るところではないと思うけど……」

さあ、これから何を話せばいいのだろう。

その前にまず、この激痛を鎮痛しよう。

「あ、お茶淹れてきますね。ちょっと待っててください」

「あ、お構いなく」

架瀬さんと美唯の会話が聞こえる。

音からするに、架瀬さんはお茶を淹れに行ってくれたようだ。

すると、美唯が俺の耳にこそこそ話の格好をする。

( ねえ。こんな世界なのに随分と普通じゃない？ )

こんな世界……。

確かにそうだ。

ここは異世界で、人と人の殺し合いという狂気も日常化している。

架瀬さんはどこから見たって普通の女学生。

武装高校の生徒であるということが少し気にはなるが、いたって普通の女の子だろう。

( 何も知らないんじゃないか？ 架瀬さんは…… )

( 私もそれは思った。でも絶対に気付くでしょ？ 普通じゃないって )

『普通じゃない』

俺達だって気付いた。

異世界なんて何も知らないとき、あれは俺の家だったのだろうか？

テレビも映らなくて、携帯も使えなくて……。

その上、周りは閑静で気味が悪かった。

それだけでも気付いた。

何かがおかしいって。

(そうだな……。俺たちだって気付いたんだからな。普通じゃないって)

しかし、架瀬さんの言語や行動から憶測するに知っている素振りがない。

それにこの部屋、私も良く知らない。

(それに、この部屋が良く知らないっておかしいでしょ？最初から架瀬さんはこの部屋にいたんだから)

俺と同じことを美唯は考えていたらしい。

まさか、俺たちを騙しているのか？

架瀬さんも朝倉の罠なのか？

いや、朝倉の罠とはとも思えない。

なんでだろう？直感というものだろうか？

恐らく、同じことを美唯も感じているだろう。

(それとなく聞いてみるしかないな……)

(うん……。私もそれが良いと思う)

話し合いが終わったところで、美唯は俺の耳から顔を離す。

そしてタイミングを計っていたかのように

「お茶入りましたよ」

お盆にお茶を四つ乗せ、手馴れた趣で運ぶ。

トントと心地よい音を立て、架瀬さんは四つのお茶を大理石のテーブルに並べていく。

「あ、ありがとうございます！」

美唯は明るく、そして笑顔でお礼をする。

「これぐらいしかありませんが、召し上がってください」

そして、なぜか「おはぎ」をテーブルに置く。

あ、合わない……。

この高級感漂う部屋におはぎ……。

そして、清楚な架瀬さんにおはぎ……。

ここは笑いたいが、俺は必死に笑いを堪える。

「おはぎ！おいしいですよね！？」

美唯は素で興奮しているぞ。

「ええ！おいしいですよね！私も大好きですよ！」

へ、へえ〜。

おはぎが好きなんだ……。

「お茶とおはぎってすごく合うんですよ？食べてみてください」

そういい、数多く積み上げているおはぎの皿を俺たちのところに置く。

「あ、ありがとうございます」

俺と美唯の声は見事にシンクロし、お皿からおはぎを取る。

そして手に取ったおはぎを口へ運ぶ。

「ん……！？これは……！？」

俺と美唯は大きく眼を見開く。

あまりの同じ動きと同じ言語に、架瀬さんはビクツと肩を震わせた。

「な、なにか危険物でも入っていましたか……？それとも、こしあんがお気に召しませんでしたか……？」

「うま　　いつ……！」

なんだ！？この美味しいおはぎは！？

滑らかかつ甘すぎでもなく、食感も素晴らしい！

この感想を述べてる間でも涙が止まらないぞ！

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！」

架瀬さんはバネでも付いているかのように立ち上がり、両手をパツと合わせる。

「え……！？これ架瀬さんが作ったんですか！？」

俺と美唯はおはぎを食べてからのシンクロ率が尋常じゃない。

それほどこのおはぎは美味しいのだ！

これを架瀬さんが作ったのなら俺は号泣するぞ！

「え、ええ……。そうですけど……」

「す、すこい……！」「」

この素晴らしいおはぎは架瀬さんが作ったのか！？  
す、すこい……！すこすぎる！

「あ、ありがとうございます！」

深く90度ぐらいふかあゝいお辞儀をする。

そして、架瀬さんも自分で作ったおはぎに手を伸ばす。  
ふわぁっと明るい顔をし、そのおはぎを口に運ぶ。

「うーん！おいしい〜！」

頬に手を当てながら本当に美味しそうに食べる架瀬さん。  
なんて幸せそうな表情だろう。

なんだかこっちまで幸せに感じてしまう。

『幸せ』を感じたのはなんだか久しぶりな気がした。

もし、この世界のことを何も知らないなら、俺は彼女の幸せを壊し  
たくない。

俺は架瀬セナに真実を知ってほしくなかった。



20話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

20話 - (2)

真実を知れば、架瀬セナの世界が壊れる。

俺たちは、それを既に知っていた。

いや、知っているふりをしていただけのだろうか？  
知って壊れる世界は

架瀬セナの世界ではなく俺たちの世界

俺たちは何も知らなかった

この世界の真実を。

俺は黙って架瀬さんを見つめる。

その表情は、俺たちが異世界に堕ちてから決して見ることの出来な  
かった「至福」  
まさにそれだ。

そんな彼女のひと時を奪いたくない。

横目で美唯に微笑をし、美唯も同じように微笑を漏らす。

「架瀬さんは幸せそうですね」

思わず口から出てしまった。

こんなことを言うのは失礼だと思って後悔したが、架瀬さんは笑ってくれた。

「幸せに見えますか？」

「はい。あ、こんなこと言ってすみません」

「いえ！いえ！」

架瀬さんは自分の前で大袈裟に両手をパタパタさせる。

「なにも失礼ではありませんよ？私にとっては褒め言葉です。……  
ですけど」

そう言つて、架瀬さんは自分のまだ温かいお茶を手取る。  
それを自分の太もも辺りに持ってきて両手でしっかりと包むように持  
つ。

架瀬さんは、視線を落としお茶を見つめる。

「……幸せなんて、一瞬で壊れるぐらい儂いモノですから」

「ッ！ー！」

ザクツと胸に棘が刺さったような痛みが走った……。

「幸せなんて、一瞬で壊れるぐらい儂いモノ」

まるで、俺の過去を知っているかのように悟った架瀬さんの言葉に

俺の魂の中で様々な感情が蘇る。  
もう二度と触れたくない、この悲しい熱情。

「そ、そんなことは……！」

美唯も声を上げたが、そこで途切れ眼を逸らしてしまった。

この異世界に堕ちて俺たちの幸せは一瞬で壊れた。  
幸せって、こんなに儂いものなのだろうか。

俺は肯定も否定も出来なかった。

架瀬さんは唇を強く噛み締めた。

その表情は頭上で見えないが、悲哀な表情をしているのだけは解った。

「……どんなに一緒にいたって……別れはいつも唐突で一瞬で」

その架瀬さんの声は震えていて、ポタツポタと輝く雫が落ち始めた。  
俺はその涙を拭うことも、何も出来なかった。  
どこまで俺は無力なんだろう。

架瀬セナの過去は俺は知らない。

ただ、華やかな過去ではない。それだけは解った。

バンツ！

その瞬間、美唯がテーブルを叩き、その勢いで立ち上がった。

「確かに別れは一瞬です……どんなに愛しても、どんな想いでも……でも……！！！」

美唯は強く架瀬さんを見つめた。

「一生一緒にいたって別れは絶対に来るんですよ！ならその瞬間まで笑って、一緒にいれればいいじゃないですか！」

「ッ！」

美唯の言葉で、俯いたままだった架瀬さんが美唯の瞳を見た。その瞳は滲んでいて、目は少し赤かった。

「だから……そんな悲しい顔しないでくださいよ……」

その美唯の言葉が  
激しく俺の心を動かした。

美唯 eyes

昔の私なら、絶対に言わなかった言葉。

それは『別れ』

『別れ』なんて私は信じていなかった。  
いいえ、信じられなかった。  
考えも思いもしなかった。

ずっと同じ景色を見て、ずっと一緒にいた人と

何も変わらずに、毎日を過ごしていききたい。

笑って、怒って、悲しんで、バカにしたり、バカにされたり、たまに喧嘩して、

状況が変わっても、何が起きても、決して終わることのなかった。

だって、それは『あたりまえ』で、世界にたった一つの

私の日常なんだから

消えるはずがない。失うはずがない。

私の日常が、もしも壊れた瞬間<sup>ひと</sup>

それは全ての終わり、私の世界の終わり。

なら、今の私はどうなるの？

一瞬で日常を奪われて、いつ死んじやってもおかしくない世界に連れて行かれて

この世界は私の日常じゃない。

なら、もう私の世界は終わったの？

いえ、まだ私の世界は続いている。

どうして？

私の日常が壊れたのに、どうして私の世界は終わってないの？

だけど、私がこの世界に来て、分かったことがあった。

別れは絶対に来るとのこと。

この世界では人殺しが日常化していて、いつ誰が死んじゃっても不思議じゃない。

死んじゃえば、私の日常は終わる。

大切な人が死んじゃえば、私の日常は壊れる。

それほどに私の日常は儂いものだったんだ。

今思えば、それは幻や奇跡に思える。

それと、もう一つ解ったことがある。

私……この世界で死ぬのだと。

私の世界の終焉を眼の前に行っている私に出来ること。

それは、その瞬間まで笑って一緒にいること。

それしかなかった。それしか……それしか……。

潤eyes

美唯……変わったな……お前も。

俺はどんな美唯でもずっと傍にいたい。

俺たちは小さい時から、お互いの悪いところは直しあってきた関係だ。

今の美唯を俺は応援したい。

それは良い方向の変色だ。

「成沢さん……」

架瀬さんは涙を人差し指で拭う。  
そして、美唯を滲んだ瞳で見つめる。

「こんなこと言ってくれたのは、貴方が初めてです……ありがとうございます  
ございます」

「わ、私はそんな大層なことは言ってませんよ！ただ自分の想いを  
言っただけで……」

美唯は少し頬を高潮させ、パタパタと両手を振る。

「とても素敵な想いを持っているのですね。尊敬します」

架瀬さん温かい笑顔で言う。

それが、更に美唯の頬を高潮させた。

「うう……」

そう恥ずかしそうに声を漏らし、失速した勢いでへなへなと座っ  
た。

よほど恥ずかしかったのだろう。

そんな美唯を見て、俺はふっつと笑みを零してしまった。

「ちょ……笑わないでよ……」

すっかりと、美唯は縮まってしまった。

いつもなら殴る蹴るの暴行を受けるのにな。

「本当に……ありがとうございます。成沢さん」



そんな美唯を見て、架瀬さんは綺麗に一礼をした。

架瀬さんを滲ませていた悲しみの象徴の涙は、もうない。

この優しい笑顔に包まれた時間が、絶望さえも包んでいく。

それほどの美しさで、そして、何より儂い瞬間だった。

21話・(1) 彷徨う月夜に映る真実(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

21話・(1) 彷徨う月夜に映る真実

普段の日常の事や、他愛もない話。

架瀬さんとは出会ったばかりだが、今までに、遠い昔に会っていたようなこの感覚。

きっと、この世界で出会わなければ、いい友達でいれたらうな……。

そう思うと口惜しさが胸に沁みる。

「そういえば、なぜお二人は武装高に来られたのですか？」

「……………え？」

架瀬さんの質問に思わず黙り込んでしまった。

『異世界の真実を探しに来た』なんて言えない……。

架瀬さんに真実を知って欲しくない。

頭で会議をしていたところ、早々と美唯が口を開いた。

「武装高に友達がいるんですよ。その友達が一回ぐらいは来いって言うので」

「なるほど、そういうことでしたか」

架瀬さんは納得してくれて、優しく微笑む。

「よろしければ、その友達を教えてくださいませんか？」

自分も知っているかもつというニュアンスで聞いてくる架瀬さん。

「桜夜先輩です」

「桜夜さんですか？ 意外な方とお友達ですね」

指を口元に当て、クスクスと架瀬さんは笑う。

やっぱり、あの人は有名なのだろうか。

「桜夜先輩ってやっぱりその……有名なんですか？」

美唯も心中で思った同じ質問をする。

やっぱり、考えてること同じだったんだな。

「ええ、もちろんですよ。桜夜さんは武装高の中でも屈指の最強剣士ですからね」

武装高の中でも屈指の最強剣士……。

それもそのはずだ、あんなに強いんだからな……。

「桜夜先輩っていつもはどんな感じなんですか？」

「そうですね……」

美唯の質問に少し考える架瀬さん。

桜夜先輩の学生生活か……。

俺は壮絶な生活をしている桜夜先輩しか知らない。

一体、どんな学生生活を送っているのだろうか。

「既に卒業できる単位を揃えているのもあって、あまり授業や実習

には参加しないですね」

「まったくあの人は……」

はあっと美唯は肩を落とす。

俺の中ではなんというか……まめで真剣に授業とかに参加してるイメージだった。

授業中にうるさい人がいれば、

『静かにしたまえっ!』

と、ビシイ!と注意する人柄かと思つてたのに……。

まさかその舞台にすら立つていないとは……。

まあ、確かに桜夜先輩といえれば桜夜先輩らしいか。

ちよつと抜けてる所があるからな。

「知つているかとは思いますが、桜夜家は武家三台名門の一家ですからね……」

「「ええっ!?!? そうなんですか!?!?」」

やっぱりそうだったんだ!

桜夜先輩は武家の家系に生まれて、小さい頃から修行に明け暮れていたのだろう。

一方、架瀬さんは俺たちのまったくズレのない声に、少し身を震わせていた。

「え、ええ……、だから桜夜さんはいつも桜夜流の鍛錬をしています」

授業、実習をサボっても桜夜先輩は剣術の鍛錬をしているのか……。俺なら遊んでるな……。それか居眠り……。

「だからってサボるのは良くないですよね」

まるで保護者のような口調で言う美唯。

「それは良くはありませんが……」

架瀬さんは少し視線を落とす、自分にも責任があるようにバツの悪そうな顔をする。

表情を曇らせた理由は解らないが、架瀬さんは勉強熱心だと思う。

人柄も良くて家事炊事もすごく出来そう……。。

あと美唯とは違って暴力的でもないし……。

武装高生徒の一人だが、俺の眼から架瀬さんは肉体的に強そうには見えない。

武装高生徒に対して失言だとは思いが、美唯の方が運動神経は良さそうだ。

「桜夜さんはすごく優秀なんですよ。テストもほぼ満点に近い点数で……」

だから先生達も放って置いていると架瀬さんは語尾に繋がた。

そういえば、桜夜先輩のうんちくは凄かったな……。

確かに会ったときから才女な感じはしたが、ここまでとは……。

ん……？ ちょっと待てよ……。

「桜夜先輩っていつつも鍛錬に明け暮れてるんじゃないかなかったですか？」

「しつかり時間を確保しているのでしょう。桜夜さんにはまったく頭も上がりません……」

……この世の中は不公平だ。

俺は部活もしてないから、時間も美唯にあげるぐらいあるのに、どうして勉強が出来ないんだ？

……勉強してないからか。

その前に、美唯にあげるほど時間があるってどういう意味だ？  
後で何でも知ってる桜夜先輩に聞いてみよう。

……。。。。。。

さくらよせんぱい？

あああッ　　！！！！

「そうだ！　桜夜先輩を探さないと！」

思い出した勢いで俺は立ち上がってしまった。  
すると傍らに座っていた美唯も勢い良く立ち上がった。

「そ、そうだよ！　潤なにやってんのよ！」

「お前だつて今気付いたんだろっ！？」

俺はベットのの方を見る。

そこには、すやすや眠っている月守さんがいる。

俺はバツ！とベットまで一足で跳ぶ。

「う、うそっ！？」

俺の華麗な跳びに心奪われたのか、美唯は驚愕の声を上げる。

「な、中沢さんって何者ですかっ!?!」

架瀬さんまで驚愕の声を上げている。

はて、俺はそんな凄いことをしたのだろうか。

俺はさっきまで座っていた場所と、今立っている場所の距離を  
みる。

「おおおッ!?!」

今度は俺が驚愕の声を上げてしまった。

普通の人間なら絶対に一足では跳べないだろうという距離  
桜夜先輩なら跳ばないでも移動してきそうだが……。

「って、そんなのは良い! 月守さん ツ!?! 起きろっ!」

俺は月守さんの肩を掴み、豪快に揺らす。

反応は……。

「あ、あとごぶん……」

寝返りをしてそっぽを向かれた。

後五分って。

朝、子供を遅刻しないように起こす母親のようじゃないか。  
なんで俺が母親役なんだ。

「起こされる+あと五分=絶対に遅刻! いいから起きろっ!」

「うるさいなあ〜りおん。お姉ちゃんはまで眠たいんだよお……」



ああ、月守さんの妹は毎朝大変だな……。  
恐らく、毎朝起こして貰ってるんだろつ。

「起きないというならこつちも考えがあるぞ？」

「ふにゃふにゃ……………」

俺の最後の警告を享受しないとは……。  
その度胸だけは駆ってやろつ。  
行動を起ここそつとしたその時

「中沢さん！ 桜夜さんを探しに行かれるのですよね……………」

「あ、はい、そつですけど」

何だろつ？

架瀬さんは何かを言い難そつにしている。

「実はこの部屋から出られないんです……………」

「ええつ！？」

架瀬さんの絞り出すよつに言った言葉に、俺は耳を疑つた。

この部屋から出られない……………？

「どつやつても出れないんですよ……………私も早く出たいのですが……………」

俺は部屋を見渡す。

ドアはある。

だが、それはまるで金庫のようなドア。

窓もなく、出られその箇所は……一つもない。  
かなり豪華な独房というべきか。

「な、なら俺たちはどうすれば……」

美唯は真相を確かめに鋼のようなドアに向かう。

「駄目だ……ビクともしない」

と、閉じ込められたのか!?

俺たちは!?

「架瀬さんはどうしてこの部屋に?」

美唯が冷静に架瀬さんに質問をする。

確かに、どうして架瀬さんはこの部屋に閉じ込められているのだろ  
う?

「私……この数日間の記憶がないんです……」

「眼が覚めたらこの部屋で……記憶が抜けたみたいに何も覚えてな  
くて……」

架瀬さんの身体は少し震えていた。

恐怖と不安で一杯なのだろう。

架瀬さんが嘘を言っているとは一切思えない。

架瀬さんは……本当に何も知らないんだ。

この世界の事も、そして数日間の記憶も。

数日間……？

俺はこの言葉が引つ掛かった。

数日間前つてもしかして……。

「こんな事聞いてすいませんが……覚えてるのはどのぐらい前ですか？」

「そうですね……一週間程前です」

「一週間前……」

約一週間。

やはり憶測通り、異世界の始まりと同じだった。

理由は解らないが、何か関係があると見ていいだろう。

異世界に堕ちた影響で記憶を失ってしまったかもしれない。

「潤、どうやってここから出る？」

「そつだな……まずは月守さんを起こそう。美唯も手伝ってくれ」

「うん、分かった」

美唯が席を立ち、月守さんが粘り強く眠っているベットに近づく。

架瀬さんは席に座ったまま、こちらの光景を見守っている。

俺が再び起こそうとしたその時

「おはようっ！……！」

「うおおおおっ！……？」

勢い良く月守さんが上体を起こした。  
ああ、びっくりした……。  
お年寄りだったら心臓止まったな。  
美唯もからだをビクツと震わせていた。

「あ、ああ、おはよう………」

俺は一応返事を返す。

まだ鼓動が速い……。

すると、月守さんは地面に足をつき、立ち上がった。

まるで、この時を待っていたかのように、それは図ったタイミングだった。

俺たちの体重を支えている床が落ちたのだ  
！

「うおおおおツ！？」

突然、失われた立っているという感触。

このままだと、俺たちは重力に従って下へ落ちて行く……。

「きゃツ！？」

「うわぁ！？」

美唯と月守さんも金切り声を上げる。

だが、落とし床に嵌るのはこれが初めてではない。

俺も対策を練っていたのだ。

「うおおおおッ！！！！」

俺は左眼を見開く　！

まだ、堕ちてはいない！

まだ部屋が見える！

だが、下へ堕ちるのも時間の問題だ。

もう、俺たちには床がないのだから……。

「お、落とし床っ！？　み、みなさん

ッ！！！！！！！！」

架瀬さんの声が聞こえる。

架瀬さんはソファーに座っていたから落とし床には嵌らなかった。

そうか……これも朝倉が仕組んだ……。

架瀬さんは堕とさず、俺たちのみ堕とす。

だが、朝倉の好きにはさせない。

俺が円状に結界を創れば、結界という名の床が出来る。

それを創れるだけの時間はあった。

「　ッ！？」

だが……結界が創れない。

ど、どうして結界が創れないんだ！

俺の結界は自由に創れるはずだ！

しかし、結界どころか左眼が熱く滾る感覚もない……。

成す術もなく、俺たちは暗い闇へと堕ちて行く……。

「！！！！！！！！」

架瀬さんの息を呑む短い悲鳴が聞こえた。

だが、俺の視界にはもう架瀬さんはいなかった。  
そして、俺は凄まじい浮遊感に襲われる……。

「「「うわあああああああああああああ

ツツツ……!

!……!」「」

21話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect  
s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

21話・(2)

「ん……」

俺は瞳を開いた。

ここは……どこだ？

背中にはジャリジャリとした冷たい感触が伝わってくる。

どうやら、気絶してたらしいな……。

俺はブンブンと鈍い頭を振り、倒れていた上体を起こした。

「美唯……？ 月守さん……？」

視線を落としてみると、俺のすぐ近くに二人も倒れていた。どうやら俺と同じ気絶のようだ。

俺は安堵の息を漏らす。安心して居る場合ではない。

周りを見渡すと、地面は砂で覆われている。

その光景から、すぐここは「グラウンド」だと理解できた。

「もう夕方か……」

朝一番で乗り込んだ桜凜武装高校。

だが、いつの間に夜が訪れようとしていた。

結局、真実には辿り着けていない。

得たのは疑問と謎ばかりだ。

「ん……ああ……」



次は美唯が上体を起こした、  
頭が痛いのか、左手でおでこを支える。

「ああ、美唯起きたか？」

「あ、うん……、ここは……グラウンド？」

「どうやらそのようだな……」

しかもグラウンドの真ん中だ。

まるで孤島にでも流された気分だ。

「うう……」

「大丈夫か？　頭が痛いんだろ？」

「だ、大丈夫……、少しクラッと来ただけ……」

「無理はするなよ美唯」

「うん……ありがとう」

俺も頭が痛くないといえば嘘になる。

鈍痛でジワジワと痛む。

俺は鈍痛を和らげる為に、遠い景色をしてみる。  
が、何気なく見た視線の先には

「じ、黒煙っ!？」

あれは校門の方向だろうか？

もくもくつと黒煙が上がっていた。  
美唯も俺の視線の先を追う。

「本当だ……」

校門ということは、もしかするとガイ達かも知れない。  
別行動を取るとき、集合場所は校門と約束した。  
俺たちを呼ぶ信号煙かもしれない。

「もしかしたらガイ達かも知れない。行ってみよう」

「うん、そうだね」

俺は鈍い身体を起立させる。

ああ、なんか身体が重く感じる……。  
立ち眩みにも襲われ、身体がダメージを受けていると認識できた。

「りんかつ！ 起きてー！」

美唯が月守さんの肩を揺らす。

「う……ん……」

そう呟き、月守さんは瞳をゆっくりと開いた。

「美唯先輩……」

「りんか、気絶起きで辛いとは思っけど動ける？」

「気絶起きって……」。

初めて聞く言葉だな。

「た、多分、大丈夫……」

「ほら、手掴んで」

「あ、ありがとう」

月守さんは美唯の手を掴み、ゆっくりと立ち上がった。  
さあ、俺も気合入れないとな。

「よっし！行くぞ！」

俺たちはグラウンドから校門へ向かった。

俺たちは黒煙がはつきりと見える所まで辿り着いた。  
校門まで残り150メートルといった所か……。

「ああ……」

俺は間抜けな声を上げてしまった。

その黒煙の下に居たのは、ガイでも清王さんでもなく

「く、熊だっ！……」

あの時、出会った巨大熊が黒煙の下に座っていた。  
約150メートル先でも、この度迫力だ……。  
思わず背筋が凍りついてしまう。

「ひいつ！」

月守さんは短い悲鳴を上げる。

さあ、これからどうする……。

あの熊は俺たちに気付いていない様子だ。

なら、ここは退くのが上策か……。

「ねえ、潤」

身を引こうとした瞬間、美唯が俺の袖をぐいっと引っ張る。

俺は美唯が引っ張る勢いで振り返る……。

勢いで振り返ってしまっぐらい、美唯の引っ張りは強い……。

「あれ……」

美唯が熊を指差す。

あれって熊だが……。

「朝倉じゃない？」

「ええっ？」

俺は半信半疑で熊の方を視る。

眼を凝らしてみると、熊の傍らに学ランを着た人影が見えた。

「ああっ！！ あさくら ツ！！！！！！」

俺は無意識に力一杯に叫んだ。

150メートルでも容易に聞こえるだろう音量だ。

朝倉は俺の大声に反応し、振り返る。

そして朝倉は軽く右手を上げて見せた。

「待ってるよ ツ！！！！！！」

俺は疾走とは言い難いが、全力で走る !

「じゅ、じゅんっ!?!」

「せ、先輩っ!」

150メートルなら全力で走りきれぬ。

そつえば、なぜ俺は走っているのだろう。

自分でも解らない。

強い衝動と本能に駆られたんだ。

俺は、朝倉しか直視していない。

朝倉しか見えない。

ただ一心不乱に駆け抜ける !

黒々と上がる煙。

その煙が、徐々に俺の視野を塞いでいく。

風さえなければ、黒煙は空へ昇るが、風はこちら向きに吹いている。

だが、構いはしない。

俺はただ駆け抜けるだけだ !

徐々に鼻へ届く甘い香り……。

一心不乱の俺の心に戸惑いが生まれた。

なぜ甘い香りが……。

それにどこかで嗅いだ事のある匂いだ……。

俺はその匂いを嗅ぎ、秋を思わせた。

「お前も食べるか？」

「ええ………？」

完全に隙を突かれた。

まさか話し掛けられるとは……。

くそお！ 俺は何に戸惑っているんだ！

俺は朝倉を眼の前にし、俺は豪快にスライディングを決める

！

「うおおおおおおお

ッ！！！！！！！！」

「おっと！」

か、軽々しく避けられた……。

俺はスライディングの勢いを殺さず、その勢いで立ち上がる。

「長野長官。焼き芋が焼けました」

朝倉が妙な口調で熊に、アルミホイルで巻かれたさつま芋を渡す。  
その光景に俺は呆けた面をしてしまう。

熊も心なしが喜んでいるようにも見える。

「あさくら　　ッ！！！　　ようやく見つけたぞ！」

「き、貴様！　長官の食事の前でそのような放言を！」

長野長官とよばれる熊は、『グオオオオオッ！！！！！！！』と吼えている。

「長官はこの焼き芋の為に日々視察をしているのだぞ！　控えろ、控えんか」

意外と現金な熊だな。

言っていることはおかしいが、どうやら朝倉は本気だ。

「長官。お熱いので注意してください」

熊はグオオオオオオ！と吼えて返事をする。

「じゅん　　っ！！！！！」

「じゅんせんば　　ッ！！！！！」

高い声が近くで聞こえる。

美唯と月守さんは……俺を追ってきたのか？

「バカッ！　なんでいつつもそんななのよ！」

「じゅごめん……、今度からは気をつけます……」

美唯に起こられてしまった。

あれは衝動に駆られただけだ……俺の意思じゃない。  
いや、俺の意思なのか。

一方、月守さんは間近の熊に怯え、発言を控えている。

「さあ、ここで会ったのも何かの縁だ。皆に焼き芋をご馳走しよう」

朝倉が4人分の焼き芋を取り出す。

俺たちにご馳走するって？

また何を企んでいるんだ。

「いや、謹んでお断し……」

『ぐう』

ますつと言おうとした直前で、美唯の方からお腹が鳴る音が聞こえた……。

何というタイミングだ……。

これで断ったら説得力が微塵にないじゃないか……。

「!!!!!!」

美唯は息を呑むような声にならない悲鳴を上げ、お腹を押さえる。

そして、頬がみるみる火照る。

その美唯の姿を視て、朝倉は優しげに微笑んだ。

朝倉は有無も言わず、美唯に焼き芋の入ったアルミホイルを渡した。

そして、口元をゆっくり耳へ近づけた。

「熱いから気を付けるんだぞ」



朝倉はそう呟いた。  
その仕草に美唯は

「ッ!！」

キュンと来ていた……。  
それはそうだ。

長身で尚且つ顔立ちでルックスも申し分無い。  
だが、目つきは悪い。  
常に何か企んでそうな目つきだ。

続いて朝倉は、無言で月守さんにも焼き芋を手渡した。  
そして、朝倉は背中を向ける。

「あ、ああありがとうございます!！」

月守さんもキュンと来ていた……。  
その言葉に朝倉は首だけ振り向き、横目で微笑んだ。  
その動作に、月守さんは更にキュンと来ていた……。

気が付いたら、俺の眼の前にも朝倉の手に乗った焼き芋があった。

「あ、ありがとうございます」

俺はその焼き芋を何の戸惑いもなく受け取る。  
受け取ってから気がついた。  
俺は何をしているんだ……。  
相手はあの朝倉だぞ!

一桜凜高校（俺たち）の殺害命令を出したんだぞ!？

そんな奴の振舞う焼き芋を食べていいのか!?  
激情する思いで、俺は美唯の方を視てみる。

「はむん」

満面の笑みで焼き芋を食べていた　！

「朝倉さん！　このお芋おいしいですね！」

「はっはは、なら良かった」

「あ、本当だ！　美味しい！」

月守さんも焼き芋を口にする。

皆が食べて、俺だけ食べないというのみな……。俺は腹を括ってアルミホイルを剥いでいく。

と、そこに現れたのは香ばしい匂いをこれでもかっといつづぐらいに放っているさつまいも。

これは確かに美味しそうだ……。  
俺はそのまま口元へ運ぶ。

「こ、これは美味しい！」

思わず笑みが毀れてしまった。

なんでだろう？　何故だがすごく美味しく感じる。  
絶妙の甘さでホクホクしてて……。

美味しく感じたのは、お腹が空いていたというのもあるかもしれない。  
い。

だけど、これは何時食べても美味いだろう。

その後も、俺たちは夢中で焼き芋を頬張っていた。

22話・(1) 探し続けた答え(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

22話・(1) 探し続けた答え

まったく俺は何をしているんだ……。

探し続けた朝倉が今、眼の前にいるんだぞ？

朝倉がくれた焼き芋を食べてる場合じゃないんだよ！  
ただどこれがまた美味い。

不味かったら朝倉の弱みを握れたのに……。

「むっ、これは……ッ!？」

朝倉は何かに気付いたように、周りをそわそわと見る。

「ん……どうしたんだ？」

気になった俺は、つい朝倉にフランクに接してしまった！  
これじゃ友達みたいじゃないか！  
その瞬間

『ドカン                    ツ!!!!!!!』

俺たちの眼の前にある焚き火の黒煙が、まるで噴火したかのように  
噴き上がり、天地を揺らす程の大爆音が空間ごと揺らす                    !  
その黒煙で、俺の視界は一瞬で覆われる……。

「く、くそお……!!」

結界を削って逃げられる前に朝倉を閉じ込めようとしたが、黒煙で

眼が開けない……。

叫ぼうとする度に黒煙が喉に入り、咽るような咳が出る。

俺は瞼を強く閉じ、腕で口を塞ぐ。

視界が晴れるまで俺にはこれしか出来ない……。

唯一役割を果たしている耳からは、咳き込む声が聞こえてくる。

くそお……また俺は何も出来ないのか……。

少し眼を開けると、黒煙が消えているのが確認出来た。

そして、ゆっくりと眼を開く。

「美唯！ 月守さん！ 大丈夫か！？」

「うん……私は大丈夫だけど……」

返って来たのは美唯の声だけ。

ま、まさか……。

「月守さんっ！？」

俺は慌てて周りを見渡す。

だが、その返事は返ってこなかった。

「り、りんかつ！？」

美唯も周りを見渡す。

だが、視線の先に……月守さんはいない。

「う、うそだろ……」

月守さんが……誘拐された

またしても朝倉に……しかも桜夜先輩と同じ手口で……。俺の中に悔しさじゃ形容できない感情が立ち昇る。また俺は朝倉の手の平で踊っていたのか……。

「桜夜先輩……月守さん……すぐ、すぐ助けに行きます」

俺は唇を噛み締め、武装高の校舎を見る。

「美唯っ！ 行こう！」

俺は美唯の手を握る。

絶対に美唯は……美唯だけは渡さない。渡せないから……絶対に渡せないから俺は美唯の手を握る。

「うん！」

俺は美唯の手を握ったまま、校舎へ走っていった。

桜凛武装高校一階

「絶対に桜夜先輩と月守さんを助けるぞ」

「うん……絶対に助けよ」

握られた手は離さず、俺たちは一階の廊下を歩く。  
また一階に逆戻りか……。

「美唯、俺の考えが正しければ朝倉は最上階　屋上にいる」

「え……？　どうして？」

「落とし穴……いや、落とし床か。それがあるといふ事は上へ行か  
れたらマズイということだ」

「そうか！　朝倉は屋上にいるから上へ行かれたら不都合なんだ！」

「そういうことだ」

朝倉が一階、もしくは下の階に陣取っているなら、上へ行く俺たち  
を下へ落とすはずがない。

あと、相当この学校は朝倉によって要塞化されている。

これで電気が使えたら……俺たちは歯が立たないだろう。

ん……？　そういえば電気を使っていた事もしたような……。

あのピアノの電子音……それに朝倉の携帯……。

駄目だ。今考えてもしょうがない。

と、俺の眼に輝くものが見えた。

「ストップ！」

俺は空いている左手を横薙ぎに払い、美唯にストップをかける。

「え……？　どうしたの？」



「あれを見る」

俺は顎で前方を指す。

俺たちの前にあるのは何の変哲のない廊下。  
だが

「うわぁ……すごい光ってる……」

恐らくワックスの類だろう。

廊下は一面大理石のように輝いている。

慎重に歩いていても、滑って転倒は免れないだろう。

「美唯、ここはあれしかない」

「ええ？ あれって？」

俺は美唯の手を握ったまま、助走のとれる距離まで後退した。  
普通に歩いても滑るんなら

「滑る前にこつちから滑り込めばいい！」

俺は一気に駆け出す！

「ええっ！？ きゃふ　　ッ！！！！」

手を握っている美唯は、俺が駆け出したことで突き動かされた。

「滑り込むぞ美唯！」

「ええっ！？ ちょ……！！」

「1……2……3！」

123の合図で俺と美唯は美しいぐらいに同時に滑り込む！

これは……ウオーターライダーの如く思ったよりすごいスピードだ！

滑り込み方が上手かったのか、猛スピードだということにも関わらず、俺たちは真っ直ぐに滑って行く！

「美唯！ スライディングの勢いを利用して一気に駆け抜けるぞ

！」

「あ、う、うんっ！」

徐々に終わりが見えてきた。

あのラインから普通の廊下だ。

「1……2……3！」

俺は握られている右手を軽く上げて美唯を起こし、折っている左脚を地面に着かせる。

そして、左脚を伸ばし上体を前のめりにして、右脚で踏み切る！俺が上手く立ち上がった事を利用して、俺は握られた手で美唯を立ち上がらせた。

「行くぞ美唯！」

「うんっ！」

自分でも驚くぐらいに綺麗に立ち上がった。  
だが、今は歓喜している場合じゃない。  
俺たちはスライディングの勢いを殺さず、トップスピードで廊下を  
駆けて行った。

俺たちの目の前には、階段がある。

この階段は恐らく屋上へ続いているだろう。

俺はこのまま一気に階段で屋上へ行くべきだと思う。

だが、独断で決める訳にはいかない。

「美唯、俺は一気にこの階段を上って屋上へ行った方がいいと思う」

「私は潤を信じてるよ」

美唯は笑顔で俺と少し視線を合わせた。

やるしかない。

この異世界を脱する為に、俺は朝倉と対峙するしかない

！

「行くぞっ！ 美唯！」

「うんっ！」

手に引かれるままに、美唯は俺の横を並走する。階段を段飛ばしで駆け抜け、俺たちは朝倉のいるだろっ屋上へ向かう。

ようやく……ようやく探し続けた答えに辿り着けるかもしれない。この真実へと続く道が、すごく長くて、すごく重く感じる。

「この扉が……」

一心不乱に上った階段はこれ以上先がない。俺たちの目の前にあるのは 金属製の扉のみ。

「これが……屋上の扉？」

「ああ、恐らくそうだ」

俺は扉の前で立ち尽くし、呼吸を整える。

自然と異世界に堕ちた時を思い出した。

何が起きたかなんて解らなくて、電気も使えなくて人もいなくて……。

そして、桜凜高校の生徒が銃で撃たれて……。

俺は美唯の手を握ってひたすら逃げて……。

そんな俺が、桜凜武装高校の最高指揮官ともいえる朝倉と対峙しようとしている。

考えてみるとおかしな話だ。

「美唯！ 絶対に俺たちの日常へ戻ろう！」

「うん！ 絶対に……一人も欠けないで戻ろう！」

俺はドアノブに手を掛けた。

異世界に堕ちたのが 俺たちの運命なら、その運命は俺たちの手で断ち切らなければならない。  
俺たちの日常を取り戻す為に、俺は扉を開け放った

22話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

22話・(2)

「あさくらあ ツ!!!!!!!!!!」

扉を開け放った瞬間、心地よい秋風が俺の肌を撫でる。  
俺と美唯は屋上に出た

桜凜市の山々を一望出来る絶景。

一瞬、景色に眼をとられたが、すぐに正面を凝視した。

「ふう、良くここまで辿り着いたな」

俺たちの遙か前 屋上のフェンスの前に朝倉はいた。  
長方形に広がる屋上の端から端の距離。  
その距離が 長く果てしなく一つの線に見える。

「朝倉、この世界はなんなんだ！」

俺の言葉とは裏腹に、朝倉は黒々と輝くものを俺たちに向ける。  
それは

「10秒後に発砲する」

この距離からでも解る、紛れもない銃だった。  
今までの罾は直接死に関わるような罾ではなかった。  
ここに来て銃を取り出すとは……。

「9、8、7、6……」

不適な笑みを浮かべながら、朝倉はカウントして行く。  
数字が減るにつれて、俺の手を握る美唯の力が強くなる。  
俺は 絶対に美唯を守らないといけない。

あの時の俺を美唯が助けてくれたように、今度は俺が美唯を !

「はあ !」

俺は左眼を見開く !

その動作に反応し、左眼が熱く滾る !

刹那、俺と美唯を囲む最小限の半円形の結界を創りだす

その結界を見て、朝倉が初めて驚愕の表情を作った。

だが、何かに気が付いたように、再び不適な笑みを浮かべる。

その表情はまるで核心に至ったような

「これでお前は攻撃出来ない！」

朝倉には聞こえないが、俺は声を上げた。

この結界は、外部からの侵入が不可能。

防御としては至高の域に達している。

だが、欠点もある。

進入不可能ゆえに、結界外の人物と会話が出来ない。

つまり、朝倉と会話が出来ない。

あの朝倉の表情からすると、朝倉はこの能力の事は知らなかったらしい。

だが、どうする……。

防御をし続ければ会話は出来ない。

結界を解除すれば、朝倉に発砲される。

背に腹は変えられないか……。



暫く睨み合いが続く中、朝倉は懐から何かを取り出し、それ頭上に構える。

まずい……何かする気だ！

朝倉が親指で取り出したものを押した

「スイッチかつ！？」

朝倉の取り出したものは何らかを発動させるスイッチ  
それは恐らく落とし床を発動させる為のスイッチ。

だが、回避方法はある。

結界で地面を創ればいい。

だが、それをした所で、朝倉と話すことは出来ない。

ただ屋上に立ち尽くすだけになってしまう。

なら、もう一度作戦を立ててから再び朝倉と対峙するべきか……。

「美唯！　ここは素直に堕ちるぞ！」

「えええッ！？　素直に堕ちるってどういっ……！」

その瞬間、屋上の半分以上の面積を占める床が開く  
朝倉の立っている床はもちろん開いていない。  
！

「美唯っ！」

「じゅ、じゅん……！！」

握っている手を引き寄せ、俺は美唯を抱きしめる。

無事に……着地出来ますように……。

俺は祈ることしか出来なかった。

俺は最後に朝倉の顔を見る。

自ら落とし床を発動させたにも関わらず

その表情はまるで、獲物を獲り逃がしたような  
悔しげな表情だ  
った。

朝倉eyes

俺は二人の堕ちた先を見下ろす。

その先は闇のように真つ暗で堕ちた二人どころか先すら見えない。

「まさか……あの男も偽神の……」

あの能力……あれは紛れもなく偽神の

まさかこの世界に偽神が二人もいるとは……。

これは流石に予想も出来なかった。

偽神の魂が引かれ合ったのか……。

「ということ、アイツがこの世界の」

潤eyes

「うおおおおおッ!？」

俺は美唯を胸に抱きながら堕ちて行くと、柔らかいものに直撃し落下の勢いは止まる。

「ぐはああっ!？」

美唯ではない　女の子の悲鳴が聞こえる。

ああ、この声は

「ば、馬鹿者！　何をする！」

その声は俺たちの探していた　桜夜先輩の声だった。

なんで桜夜先輩の声がするんだろう……。

まさか　ここは噂に聞くお花畑が一杯な所なのだろうか。

俺は眼を開けてみる。

「うおおおおお！　何も見えない！」

眼も見えないが俺の声も籠ってる。

なんか夢のように柔らかいものが顔にあるような……。

ああ、これが噂に聞くお花畑か。

お花畑って柔らかいんだな……。

「じゅ、じゅんっ！　桜夜先輩のどこに頭突っ込んでるのよー！」

これは美唯の声だ。

美唯の声もするって事は俺はまだ生きてるのか……？

ん……？　桜夜先輩？

つてことはこの水まんじゅうのような柔らかいものは……。

お花畑じゃなくて……!!!

「う、この馬鹿者

ッ！！！！！！」

バシューッ！と流星のようなスピードで何かが俺の頬に炸裂する。

「うおおおおおおッ！？」

俺はその勢いで度派手に飛ばされ何度もバウンドし、うつ伏せでようやく静止する。

ああ、この床は硬くて冷たい。

まるで天国から地獄へ突き墮とされたみたいだ。

「中沢くん……君も遂に本性を現したか……」

桜夜先輩がそつとするような口調で俺に近づいてくるのが、足音で解る。

ああ、なんてことだ。

俺はようやく自分の置かれた立場を理解する。

朝倉の落とし床に堕ちて、堕ちた先が偶然桜夜先輩の頭上で……。

桜夜先輩が俺たちのクッションになってくれて……。

俺は偶然ながらこんな痴態を露にしてしまった……。

そして俺は……桜夜先輩に天誅を受けようとしているのか……。

「ち、違います……全部偶然なんです……信じてください……」

「ほお……私の胸部を的確に射抜くような偶然が本当にあるのか？」

桜夜先輩のぞつとするような声で俺の身体はガクガクと振るえ始める。

ああ、これが戦慄っていうんだな……。

「違うんです……違うんです……違うんです……」

俺は震える声を振り絞り、呪文のように何度も繰り返す……。  
もう頭の中は真っ白……何も考えられない。

「ふう……はっはは！」

いきなり桜夜先輩が笑い出した。

予想外の反応に俺の脳は目覚め、上体を起こす。

「良くここまで助けに来てくれた。ありがとう」

桜夜先輩は優しい口調で俺に手を差し伸べた。

その動作に俺の頭は蒼白になり、差し出された桜夜先輩の手を見つめる。

「い、慰謝料請求……?」

「違うっ！ 手を取りたまえという意味だ！」

「ああ、そつちでしたか……」

俺は桜夜先輩の手を握り立ち上がる。

すると、タッタと足音を立てて誰かが近づいてくる。

「潤先輩っ！ はいっ！」

俺に近づいて来た人は、いきなり右手を差し出す。



「さあ、ここからどのように脱するか……」

桜夜先輩が腕組みをし、険しい表情で考えている。

俺と美唯が堕ちた先は、桜夜先輩と月守さんが入れられている部屋だった。

この部屋を見たのは、これが初めてではなかった。

この部屋の作りは、まったく架瀬さんと出会った部屋と同じなのだ。つまり桜夜先輩と月守さんは、手厚い保護を受けていたのだ。

……朝倉は本当に何をやりたいんだろう？

「桜夜先輩、刀はないんですか？」

「押収されてしまった」

桜夜先輩の刀が押収された……！？

刀がないってことは……今後の活動からしてもかなりの致命傷じゃないか！？

「だが臆することはない。私の刀には呪を刻んである。呪を唱えれば還ってくるんだが……」

「どうやらこの空間は術の類が使えないらしい。いや、異能の類と比べるか」

その桜夜先輩の言葉を耳にして、俺は無意識に左眼に手を置く。

術の類が使えない……異能の類が使えない……？

あの時……架瀬さんと出会った部屋で落とし床に嵌ったとき

俺は結界を発動させ地面を創ろうとした。  
だが、不発に終わった。  
まさか……それが原因だったのか？

「……どうすれば」

俺は周りを見渡しそう呟いた。

桜夜先輩もいるのにこの部屋から脱することが出来ないのか……？  
そうか……今まで桜夜先輩が脱さなかったという事は桜夜先輩でも  
駄目だったんだ……。

桜夜先輩が黙って助けを待っているとは思えない。

「まさか……私たち閉じ込められたのっ!？」

と声を上げた美唯に

「どうやらそのようだな」

桜夜先輩は流暢に答えた。

俺は脱する為の術を見つける為に、頭上を見る。

「あ、灯りがついてるっ!？」

天井には豪華なシャンデリアつり下げであり、そのシャンデリアか  
らは灯りが溢れている。

その灯りは本当に久しぶりに見る灯りで……。

「そうだ。どうやらこの部屋では電気も使えるらしい」

桜夜先輩が補足を入れる。



「電気が何故使えるが気掛かりだが、今は脱出方法を模索しよう」

「そうですね……」

窓もない。

出れるような所は一切見当たらない。

「恐らくここは地下だろう。壁を壊した所で無意味だ」

「そ、そうなんですか……」

俺は反射的に壁を見る。

シミ一つなく高級感溢れる純白色。

本当に一流ホテルみたいなところだな……。

「武器になりそうな物はこれぐらいだな……」

桜夜先輩は大理石のテーブルの上に包丁、ナイフ、主に料理で使う道具を並べていく。

「桜夜先輩！ これはどうですか!？」

美唯が持ってきたのは、これまた高級な匂いを漂わせている皿。これ、一枚万はするな……。

「おおっ！ 使えそうだな」

桜夜先輩は美唯から皿を受け取り、テーブルに並べていく。

「楽しそう！ あたしも探そう！」

月守さんは宝探しのような感じで探し始める。  
俺も探すか……。

「武器になりそうな物はこれぐらいか……」

テーブルには所狭しに物騒な物ばかり並んである。

「これであの金属製の扉を壊せるとは考え難いが……やるしかない」

桜夜先輩がまずは何も持たずに扉の前に立つ。

「……………」

桜夜先輩は扉の隙間を凝視する。

ドアはやはり、どんな物でも隙間が存在する。

だけどこの隙間……包丁とか入らなさそうだな……。

「私も何度か試したが傷一つつかなかった」

桜夜先輩も俺たちが来る前に、何度も脱出しようとしていたようだ。

だが、その功績もこの扉からは見当たらない。

どれだけ頑丈な扉なんだよ……。



「突き

ッ！！！！！！」

扉に体当たりするような桜夜先輩の一撃　！

ものすごい衝撃波が起こっている　そんな気がした。

桜夜先輩の決死の突きは　扉を貫いていた　！

だが、その包丁は終に刃元から折れ、刃身のみが扉へ減り込んでいく。

刃身が失われ、桜夜先輩の握る包丁は柄のみになってしまった。

「駄目か……」

桜夜先輩は深く扉へ突き刺さっている刃身を見下ろす。

そして柄だけになった包丁を手からゆっくりと落とした。

「すごい……！　あの扉を貫きましたよ！」

俺は桜夜先輩に近づく。

見事に、そして綺麗に刃身が減り込んでいる。

こんな硬い金属でも……桜夜先輩は斬る事が出来るんだな……。

「貫いたが駄目だ。扉は開かない」

桜夜先輩が口惜しそうに扉を見る。

「もう……包丁はあれで最後だったんだ……」

「そ、そうでしたか……」

もう包丁という武器は消えてしまった。

恐らく、最初は複数あつたのだろう。

俺たちが来る前に、桜夜先輩が脱出の為に使つて折れたのだろう。だから最後の切り札にとって置いていたのか……。

「桜剣おうげんが成せれば……」

桜夜先輩は珍しく歯を食いしばる。

桜剣……。

見たことはないが、恐らく術の類なのだろうか？

俺もこの左眼が使えれば……ここから脱出出来るのに……。

「万策朽ち果てたか……」

桜夜先輩はテーブルの武器を見つめながらそう呟いた。

確かに包丁の上に行くような武器はない。

なら 最後の手だ。

「美唯っ！ お前ならいける……！」

俺は世界チャンピオンですら、膝を屈するほどの攻撃力を持つ猛者、美唯に全てを託す。

「え、えええッ!？」

美唯は『何で私っ!？』と言いたげな顔をする。

「世界チャンピオンですら、膝を屈するほどの攻撃力があるだろうっ

!？ お前には ……!」

「なにそんなに熱く語ってるんじゃないやああああああああ



ガコンツ！という音を出して、天井が開いた　！  
その天井から、猛スピードで二人の人影が落下してくる　！

「はあ　！」

「誅伐あるのみ　！」

落下して来た二人は　ガイと清王さんだった　！  
俺らとは違って、膝を上手く使って衝撃を和らげて着地している。  
良く落とし床に嵌って着地出来るな……。  
俺なんて三回も落ちたのに……。  
三度目の正直どころか、何度やっても無理だろう。

「「翠華ちゃん！」」

「だから翠華ちゃんと……」

美唯と月守さんの呼び名に少し赤くなる清王さん。  
赤面する翠華ちゃ……。清王さんは女の子らしくて可愛かった。

「河坂くん！　清王くん！」

桜夜先輩は突如、天井から現れた救世主を歓迎する。

「桜月導……こんな所にいたのか？」

ガイは桜夜先輩を見て少し苦笑いをする。

まさか……。この部屋に全員が閉じ込められるとは  
朝倉恐るべし……。

「誰でもいい！早くこの扉を破壊してくれ　　ッ！！！」

桜夜先輩は自分の目の前にある扉を指差し、全ての望みをこの二人に賭ける。

その言葉を聞いた刹那、清王さんが太もものホルスターからグレネード・ランチャーを取り出した　　！  
取り出したグレネード・ランチャーの銃口をそのまま扉へ向けて

「ま、待て清王くん！　まだ私が　　！」

唯一、扉の眼の前にいる桜夜先輩が恐慌しだす。  
だが、清王さんは

『ズドオ　　ンッ！！！！！！』

躊躇なく発砲した　　！

「　　ッ！？」

桜夜先輩は発砲するよりも早く初動し、飛び込み前転の要領で回避する　　！

『ドカアアアアアアアアアンッ！！！！！！』

比喩ではなく、天地を揺らす大爆音

俺たち　　桜夜先輩以外は大理石のテーブルを立ててそれをカードにする。

「ぐはああっ！？」



桜夜先輩の悲鳴がこの大爆音の中しつかりと聞こえる  
そうだ……！ あの扉の前に桜夜先輩がいたんだ！  
だけど、桜夜先輩なら大丈夫だ。

「誅伐」

そう決め台詞を吐き、清王さんはグレネード・ランチャーをホルスターへ戻す。

「き、貴様っ！ 私ごと破壊する気がっ!?!」

「至高の桜月導。あなたはこのぐらいでは死なない」

「だからといって野蛮過ぎやしないか!?!」

「ふう……」

清王さんは珍しく微笑で桜夜先輩を流した。  
俺は大理石のテーブルからちょこつと眼を出した。

「う、うわぁ」

思わず声が漏れる程の大惨事。

扉どころかソファや食器棚、リビングまで後形もない。

嵐と竜巻と地震とモンスター……あらゆる天災が同時に来たようだ。

……モンスターて天災なのか？

一方、まだ部屋にはモクモクと白い白煙も立ち昇っている。

「よっし、早く脱出しよう」

逸早くガイが立ち上がり、ドアへ向かう。  
俺も立ち上がり、両サイドのお二人に手を差し伸べる。

「あ、ありがとう」

同じ言葉を返して、美唯と月守さんは俺の手を握って立ち上がった。

「清王くん。授業で習わなかったのか？ 味方がいる所にグレネード・ランチャーを撃つなど」

「授業に参加してないあなたに言われたくない」

「な、なぜその事を……！」

「ふう………」

まだ桜夜先輩と清王さんは言い争っていた。

架瀬さんから教えて貰ったけど、桜夜先輩は授業に参加してないって言ってたな……。  
本当だったんだ……。

「だが、扉を破壊してくれた事には感謝している」

そう感謝の言葉を告げられた清王さんは、どこか嬉しげな表情をしていた。

清王さんも……出会った頃に比べれば随分と緩くなったな……。  
良い事だ。

「行くぞ ツ！……！」

久しぶりに聞く桜夜先輩のその言葉で  
出した。

俺たちはこの部屋から脱

23話・(1) まだ視ぬ力に下す運命(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

23話・(1) まだ視ぬ力に下す運命

「還りきたれ！ 千鳥！ 三日月宗近！ 神切！」

部屋から出て桜夜先輩が呪を唱えると、空間を超えるような  
本  
当に一瞬でそれぞれの刀が桜夜先輩の手のひらに還る。

これは本当に空間を越えているかもしれない。  
三振りの刀をを廻しながら腰へ差した。

「一回寮に戻る。弾倉が少ない」

清王さんが桜夜先輩に確認を取る。

独断専行の清王さんが確認を取るなんて……昔は無言無言に寮  
へ戻っていただろう。

「そうだな。補給出来る時にした方がいい」

「それは助かる」

ガイも弾倉が少ないのか、そう言って背中 of 狙撃銃を自然と肩にか  
け直した。

「では、寮へ向かうぞ！」

桜夜先輩が先頭で駆け出す。

それに続いて俺たちも駆け出すのだった。

「ここが寮……なのか？」

まるで学校のような規模と外見。

「桜夜先輩……ここが寮なんですか？」

「ああ、そうだ」

俺の質問に平然と返した桜夜先輩。

桜凛高校に寮はないから寮は初めて見るかもしれない。  
寮ってこんなに立派なものなのか？

「これは立派な……」

美唯も俺と同じ反応をし、寮を見上げる。

「璃桜……もしかしたら……」

桜夜先輩が何かを呟いた。

「行くぞ」

桜夜先輩の言葉で寮の中へ入って行った。

桜夜先輩によると、この寮は4階建てで1、2階が男子。3、4階が女子つという風になっているらしい。だから男子は3、4階が侵入禁止だとか。だが、その逆は可能らしいが。

という訳で、俺たちはそれぞれ自分の部屋に向かう前に、一階の広間に体感時間30分後に集合という事で別れた。時計が使えないと不便だな……。

一階広間の時計を見ると、5時10分で止まっている。この時間に俺たちはこの異世界に堕ちたのだろう。

「私の部屋に案内しよう。ついてきたまえ」

そう言うより先に桜夜先輩が階段を上り始める。俺たちは黙って桜夜先輩の後をついていく。視線は初めて見る寮に奪われっぱなしだ。

「桜夜先輩の部屋って何階ですか？」

「4階だ。玄関からは遠いが眺めはいいぞ」

「えっ？ 4階だったら俺は行けないじゃないですかっ!？」

「……君は私の話を聞いていたのかね？ 女は3、4階と言ったはずだ」

「いえいえ！ てつきり1、2階のどちらかと」

「中沢くん。地獄への引導を受け取るかね？」

話の噛み合っていない会話を桜夜先輩としていたら、俺は男だとい  
うのに禁断の領域（女子寮）に足を踏み入れてしまう。

「……俺、捕まったりしませんよね？」

「中沢くんが武装高の生徒だったら寮長に火炙りにされていたかも  
な」

「あははは、まさか女子寮に入ったぐらいで火炙りなんか……」

「実例はあるぞ」

……俺は言葉を失った。

「部屋って何人部屋なんですか？」

「基本的には2人部屋だ。科を超えて一番親しい人と組む事も可能  
だ」

「で、桜夜先輩は一人部屋で？」



「……いつ私が一人部屋と言った？」

「「「ええっ!? 一人部屋じゃないんですかっ!?」」」

桜凛高校3人の声が見事に揃った。

「……それはどういう意味だ？」

「桜夜先輩は一人部屋って雰囲気か漂ってますよ？」

「わ、私にだって心許せる友はいるっ！」

桜夜先輩は歯を食いしばって、歩くスピードを速めた。

「桜夜先輩のルームメイトってどんな人ですか？」

「中沢くん。君はなぜ質問ばかりする？」

「ちょっと気になりました……」

「ちょっと所じゃない。

かなり気になる。」

「……どんな人と言われてもなあ」

「もちろん女の子……ですよね？」

「なぜ確認を入れる？」

桜夜先輩は少し頭を悩ませる。

あの桜夜先輩のルームメイトだ。

刀の話をしだすと止まらない剣術一筋な人なんだろう。

「刀の話を良くする感じの人ですか？」

「いや、なんだか理解し難い話ばかりしてくる」

桜夜先輩が理解出来ない話……。

「どんな話なんですか？」

「服がどうの……テレビがどうの……かわいいものがどうの……料理がどうの……サブマシンガンがどうの……」

最後のサブマシンガンを除いては、普通の女の子っぽい。

桜夜先輩と本当に性格が合うのだろうか？

現代を生きるルームメイトと剣術一筋の桜夜先輩だぞ？

そんな事を思っていたら

「ここだ」

桜夜先輩の足が止まった。

どうやら桜夜先輩の眼の前にあるドアが桜夜先輩の部屋らしい。

ガチャツとドアノブを捻るがドアは開いてくれなかった。

「璃桜の奴……鍵を閉めるとは何とも無用心な……」

「……普通逆だと思います」

桜夜先輩は千鳥の鞘を腰から抜く。

そして、鞘の下緒にキーホルダーのように付けてある鍵をそのままドアノブに近づけ鍵を開けた。

そんな所に鍵を付けてるのか……桜夜先輩は。

「まあ、入るといい」

桜夜先輩は中に入ると、扉を開けたままにして俺たちを招待する。

「……おじゃまします!」「」

桜夜先輩の言葉に甘えて、俺たちは桜夜先輩の部屋に入った。

「桜夜先輩」

「ん？ どうしたかね中沢くん？」

「手前半分が桜夜先輩の部屋ですよね？」

「ああ、そうだが……良く解かったな」

手前半分は……女の子の部屋にしては物が少な過ぎる。

奥半分は……華やかな可愛い女の子の部屋。

ラインなどはないが、見えない国境がそこにはあった。

「やはり璃桜はいないか……」

桜夜先輩は人数分の座布団を自分の領域に敷き、自分専用であろう座布団に腰を下ろした。

「ん……どうしたのかね？ 座らないのか？」

「あ、はい。では……失礼します」

俺はとりあえず一番近かった座布団に腰を下ろした。それに続いて美唯、月守さんも腰を下ろす。思わず桜夜先輩の部屋を一望してしまう。

「もてなしも出来なく面目ない」

桜夜先輩がペコリと頭を下げた。

「いえいえっ！ 電気も使えないんですから仕方ないですよ」

俺はそう言いながら両手を左右にパタパタさせる。

「そう言っつて貰えると助かる」

軽く一礼すると、自分の目の前に刀三振りを並べる。先輩は銃ではないから弾倉は一切関係ない。ならば刀の手入れだろうか。

「桜夜先輩の体感時間だと何分経過しましたか？」

「また君は質問か……」

「ちなみに俺の体感時間は2、3分です」

「私の体感時間だと10分はゆうに経過しているな」

そう言うと桜夜先輩は視線を刀に落とした。

ああ、これはもう話しかけない方がいいな。手入れが始まるのだろう。

「美唯の体感時間だとのぐらい？」

「うーん……7、8分かな」

俺の体内時計を相当狂ってるのか？

この異世界に堕ちた影響もあってかなりネジが外れたらしい。

「月守さんは？」

「うーん……8年ぐらいかな？」

「ごめん。月守さんの冗談って届きにくいよ」

「えええ〜！」

俺たちが雑談をしていたその瞬間

『ズドオ                    ンツ！！！！！！！』

まるで花火が上がったような……そんな爆音が響いた。



もう一度、信号弾が発射される。

今度は見なくても解かる　　信号弾が爆発したのはこの寮の真上だ

！

恐らく発射しているのは朝倉で、俺たちの居場所を教える為に真上に発射したんだ　　！

「清王くん！　　ガイくん！」

俺たちより早く、待ち合わせの場所に2人は居た。

「事態が悪化した」

清王さんは怪訝な表情でそう呟き、常に両手に握ってある銃を持ち直した。

清王さんが左右に持っているハンドガンには、フレーム付近に大型のナイフが装備されている。

剣戟戦も可能という訳か。

「止まっている暇はない。桜凜武装高校から出るぞ　　！」

全員が同時に頷き、全速力で桜凜武装高校の出入り口　　虹陵橋へ向かう。

俺たちが先に出るか、先に来られるか　　それが勝負の分かれ道だ。それにしても……なぜ朝倉はこつも唐突に？

俺たちを不殺の罠に何度も嵌めたということは、俺たちを殺せたんだ。

なのに殺さなくて、なぜ今になって増援を呼ぶんだ？

矛盾もいい所だ。

「間に合うかつ！？」

武装高の校門に差し掛かった所で桜夜先輩は声を上げた。校門を潜れば、後は1kmにも及ぶ虹陵橋を渡るだけだ。桜夜先輩は校門の先の 虹陵橋を凝視する。

「くそっ！ やはり手が回ったか！」

視力の良い桜夜先輩は多数の人影を捉えていた。

「もう来てるんですか!？」

「だがまだ数は少ない！ 一気に駆け抜けるぞ ！」

あの信号弾から数分だぞ!？  
たった数分でも手が回るのか……！  
とにかく一心不乱に走るしかない ！



23話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

23話・(2)

桜舞い散る校門を駆け抜け、ついに虹陵橋に差し掛かった。  
幅もかなり広い虹陵橋。

戦闘を行うには十分な広さだ。  
これが吉と出るか凶と出るか……。

「千鳥に宿われし雷魂よ。再び生ずことを請う」

先頭を疾走しながら桜夜先輩は呪を唱えはじめる　！  
呪を唱え終わった刹那、千鳥の刃には電流が奔り始めた

「今、此处に雷魂を開放する！」

その瞬間、激しい雷音を轟かせながら千鳥の刃身は雷神の如く帯電し始める　！

「立花道雪！　雷切　　ッ！！！」

虹陵橋の半分まで駆け抜けた。

残り約500メートル。

ここまで来ると敵の数や動きも解かる。

その相手は　横に一列に並んで一人一人が銃口をこちらへ向けている。

あれは恐らくライトマシンガン軽機関銃。

侑から無理やり教えられた銃知識によると、ベルトが繋がっている限り装弾数の制限が無く、無限に撃ち続ける事ができる銃。

それが一つではなく一列に並んでいる……。

10人は少なくとも構えているだろう。

恐らく相手は射程内。

なら、俺の結界で防御すれば　！

俺が左眼を見開こうとした瞬間

「中沢くん！　ここは私に任せたまえ　！」

桜夜先輩が俺を止めて、疾走する中、雷切の刃先を相手に向けた。

「我が剣よ請え。全ての雷魂を飲み込み、正法を生じよ」

高速に唱えた桜夜先輩の呪に雷切は反応し、雷切から放たれる閃光で前方が見えなくなるぐらいに　雷切は雷光を増す！

「雷神正法！　解放てつ！！！先導せんとつ　ツ！！！！！！」

先輩の呪とほぼ同時に、軽機関銃が無数に連射する　！

だが、その銃声は桜夜先輩の雷切の雷音で掻き消された　！

俺は反射で眼を閉じる。

雷から漏れる閃光で眼が焼けそうだ……。

俺たちは反射的に全員が立ち止まった。

俺たちは　どうなったんだ？

あれだけ相手の軽機関銃が俺たちに発砲したんだ。

無傷の筈がない……。

だが、いつになっても予想していた痛みは訪れなかった。

俺は腕で覆っている眼をゆっくりと開ける。

「ッ!」

思わず声が出てしまった。

倒れているのは俺たちではなく 相手全員だった。

「桜夜先輩っ!? 何をしたんですか!?!」

「雷で銃弾を誘導させた」

「じゅ、銃弾を誘導ッ!?!」

「私たちに発砲した全ての銃弾を雷で誘導させ、逆に相手の防弾制服に返したただけだ」

「そ、そんなことが……!」

俺は桜夜先輩の言葉に耳を疑った。

だが、現に相手の武装高生徒は悶絶し苦しんでいる。

防弾制服は、銃弾を弾く事が出来る。

だが、当たると死ぬほど痛い。

そうガイから耳にした。

つまり桜夜先輩は、誰も犠牲者を出さずにこの場を乗り切ったんだ!

「誅伐」

清王さんが悶絶する生徒に銃を構える。

だが、すぐにその銃口を桜夜先輩は手で塞いだ。

「誰も犠牲者を出してはならない。君なら解かるはずだ」

「なぜ？ あいつ等はまた私たちを殺しにくる。誅伐できる時に誅伐する」

「誰も殺さずにそれぞれの日常へ還るんだ！ 一人でも殺してしまえば私たちの日常へは戻れないっ！」

誰かを殺してしまえば、元の日常にはもう還れない。

例え異世界から脱せても誰かを殺してしまえば、元の日常へ戻れない。

桜夜先輩の志でもあり、俺たちの志でもある。

だが清王さんはその言葉を聞き、少なからず表情を変えた。

「……私に戻りたい日常なんてない」

小さく震える声で、清王さんはそういった。

過去の記憶が身体をも震わせて、銃身が少し音を立てて震えていた。その光景は過去に苦しみ悲哀する……普通の女の子の姿だった。

清王さんの今までにない姿を見て、今度は桜夜先輩が少しだけ表情を変えた。

「大丈夫だ。翠華くんには私たちがいる。全員で新しい日常へ還ろう」

清王翠華「魔弾の誅伐人」の過去が少し解かった気がする。

清王さんは元の世界でも誅伐をする事が日常だったのだろう。

その日常には、もう清王さんは戻りたくない。

清王さんも……人を殺したくなんてないんだ。

あと、それ以外にも解かったことがある。

清王さんは……あの時見せたように、可愛いものが好きな普通の子なんだ。

今までたった一つの揺ぎもなかった清王さんは今、過去を、そして日常を思い出して震えているんだ。

「あたらしい……にちじょう……」

清王さんはゆっくりと銃口を下ろした。

相変わらず無表情だが、その無表情の中には微かな希望が宿っていた。

「じゅん」

力強く、そして優しい声で美唯は俺の名を呼んだ。

「ああ、絶対に還ろう」

俺は力強く美唯の手を握った。

この温もりは……絶対に離さない。

今度こそ　絶対に。

「桜月導！　この時を逃すな！」

「ああ、解かっている。行くぞっ！！！」

ガイに返答しながら桜夜先輩は先頭を弾丸のように駆け抜ける。

その桜夜先輩の背中を守るように、ガイが走る。

当然、俺たちは桜夜先輩の弾丸のようなスピードには追いつかない。だが、そんな俺たちを守る人影が一人いた。

「「翠華ちゃんっ!」「」

美唯と月守さんは見事合っている声で清王さんを歓迎した。だが清王さんは険悪そうな表情は見せず、小さく微笑んだ。

「私が、貴方たちを守る」

24話・(1) この世界の鍵 - StarSeeHamlet - (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s

で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



「ここまで来れば追っ手も追いつけないだろう」

汗一滴も流さない涼しげな表情で、桜夜先輩は俺たちの軌跡を見つめた。

一方の俺は脚が震えている。

こんな距離を一息もつかないで走ったのは初めて……いや、異世界に堕ちたあの初日以来か。

呼吸を最優先する中、ろくに場所も把握出来なかったが、ようやく此処は林の中だと解かった。拓けている場所だから、休憩は出来るだろう。

「大丈夫？ 眼が怖いけど……」

流石の美唯もさっきまでは息を荒げていたのに、もう回復している。

「だ、大丈夫だ」

軽く手を上げ、美唯に笑みを返す。

その俺の表情に美唯も苦笑いを返した。

しばらく苦笑いし合う妙な空間が生まれた。

「中沢くん。成沢くん。色々と無理をさせてすまなかつたな」

桜夜先輩が俺と美唯に歩み寄り、悲哀とも反省ともいえる表情でそう言った。

恐らく、武装高で起こった事を自分の責任にしているのだろう。

「桜夜先輩は何も悪くありませんよ。それより少しは真実に近づきました」

武装高進入で得た情報、そして紐解けない様々な奇態。それを手繰りよせば、真実へと導ける。

俺はそう確信している。

「真実か……」

桜夜先輩は左手を口元にあて、視線を右に流す。未だ不明な点と点を繋ぎ合わせているようだ。

「全員で話し合って真実を解明しよう」

そう言っただけで桜夜先輩はその場にゆっくりと腰を下ろした。

俺は……言っただけでもなく疲労で立てないので最初から座っていた。桜夜先輩に続き、美唯、月守さん、ガイ、清王さんが腰を下ろす。こんな形で話し合いつて初めてかもな。

「順に解明して行こう。まずは虹陵橋に警備人がいなかった事だ」

桜夜先輩を地軸に話は始まった。

最初の出来事は虹陵橋に警備人がいなかった事だ。

桜夜先輩曰く、警備人は週番制になっていてサボれば手痛い処分が待っているらしい。

その時の事を思い出したのか月守さんは、

「本当にあれは怪しかったって！ ああ、思い出しただけで頭がぁ……」

月守さんは声を荒げた。

その態度と口語は再び現場にいるような感じた。

「後追いだが、朝倉は『視ての通り、この校内には桜凛武装高校の生徒はいない』と言っていた。警備人がいないと言う事も、校内に誰もいないという事も憶測だが朝倉の意図だろう」

月守さんを落ち着かすように桜夜先輩は流暢に話した。

「でも、何でそんな事をする必要があるんですか？」

俺の問いに、桜夜先輩は間を入れずに答えた。

「虚構を仕立て上げただけだろう。武装高全生徒は既に桜凛高校全生徒の殺害命令を受けて門出させた。朝倉はその言い回しを変えただけだろう」

桜夜先輩は最後に『朝倉というのはそういう奴だ』と付け加えた。確かに朝倉という人物の性格もあると思う。

俺だって朝倉と会ったんだ。

「次は武装高の正面入り口に咲き誇っていた桜だ」

この言葉の語気は今までとは違い、戸惑いがあった。

「これは私には解からない。通常の世界でもあんな所に桜はなかった」

異世界に突如現れた桜ということか。  
俺は武装高に行ったのが今回が初めてだ。  
これは俺が解明できる謎ではないな。

「そつえば美唯は花で一番、桜が好きだったよな？」

「えっ？ 確かにそうだけど……いきなりどうしたの？」

「いや、特にこれと言った意味は……」

俺はこれぐらいしか桜の事は知らない。

その流れで俺は視線を桜夜先輩へ向けた。

桜夜先輩の表情は晴れてはいなかった。

「これは憶測も出来ないな」

桜夜先輩は溜息雜じりでそう言った。

と、その言葉を聞いてガイは、

「そこまで重要視する所ではないだろう」

「……そうかもな」

桜夜先輩は苦笑いを浮かべ、思考を転回させた。

「その後は朝倉の挑発だ。だが、最も追求すべき点は朝倉ではなく  
スピーカーだ」

桜夜先輩の言葉で俺はその時を追憶する。

スピーカーを使えるという事は電気が使えるということ。  
異世界の常識が覆された衝撃的な瞬間だった。

「この世界では人によって創られた電力は一切使えないはずだ」

この異世界に散りばめられている謎という点と点。

その点は中々一つの線上にはならない。

すると今まで口を閉ざしていた清王さんが口を開いた。

「なら人によって創られていない電力だった。これしか考えられない」

「……極言だが、私もそれしか思い当たらないな」

俺は桜夜先輩の雷切を思い浮かべる。

雷切に宿っているのは自然魂の一種である雷魂は人が創り出したものではない。

つまり朝倉が使っていた電力も人が創り出した電力ではないということだ。

桜夜先輩もその極言に納得し、話を次に移行した。

「次は朝倉の是非だ。私たちは不覚ながら悉く朝倉の罠に嵌ってしまった。だが、そのいづれの罠も殺傷が無いものだった」

「それは性格上の事かも知れないが朝倉は最後、信号弾を放った。あの信号弾の意図は武装高生徒を戻す為だろう。つまり私たちを殺そうとしていた」

確かに桜夜先輩の言う通り、最初と最後の朝倉は手の平を返したように違った。

「もとより殺す気なら、何度でもその好機はあったはずだ。……  
私が囚われたとき拷問は愚か手厚い保護を受けていた」

桜夜先輩は自分が囚われた事を情けなさそうに言った。

視ても解かるぐらい相当桜夜先輩のプライドが傷ついているようだ。

「朝倉は途中で殺意に芽生えたとしか思えない」

途中で殺意に芽生えた……。

俺はあの屋上での出来事を思い出す。

朝倉と対峙した時、俺は異能である結界を発動させた。

その時の朝倉の表情は、不適な笑みを浮かべ、まるで核心に至ったようなそれだった。

考えてみれば、朝倉はそれから信号弾を放ち俺たちに殺意を向けた。

「もしかしたら……俺の左眼が原因かもしれません」

「中沢くんの左眼が原因だと……!?」

「まだ俺も解かりませんが、桜夜先輩のいた部屋に墮ちる前に俺は朝倉と屋上で対峙していたんですよ」

「なっ！　なんだとっ!？」

桜夜先輩は眼を丸くして驚愕する。

ああ、そうか。

まだ桜夜先輩には伝えていなかったのか。

それ以前に伝えるタイミングもなかったしな。

「そこで朝倉に銃口を向けられて結界を発動させたら、朝倉は不適な笑みを浮かべて……そして落し床に嵌って……」

俺の言葉を聞いて桜夜先輩も何かに気付いたような表情を見せた。

「……そうだとしたら中沢くんの左眼が殺意の原因かもしれないな」

「なんで俺の左眼に殺意を……？」

「もしかしたら、中沢くんの左眼はこの異世界に關係しているかもしれない」

俺の左眼がこの異世界と關係している……。

どんな關係かは解からないが、悪寒が全身を駆け巡る。

「でも俺の能力は防衛用の結界を創りだすみたいなものですよ？」

そんな結界がこの異世界と何か關係があるんですか？」

「そう言われるとそうかもな……。異能というのは希代だが実在しない訳ではない。中沢くんがそうであるように武装高には異能科というものもあるぐらいだ」

「だが、中沢くんの左眼の異能はまだ未知数で謎が多い。異世界との關係がまったくないとは今は言い切れない」

そうか……。

俺はこの眼の事を何も知らないんだ。

名前愚か本当の真価も。

「逆に、中沢くんの異能がこの異世界から脱する為の鍵になるかも

しれない。だから今はあまり思い詰めないでくれ」

俺の左眼がこの異世界から脱する為の鍵……。それが本当なら俺は皆を救えるかもしれない。

「……解かりました」

微かな不安と確かな希望を抱いて、再び話は移行した。

「あと巨大熊、私を拉致した意味、術が使えない部屋、と色々あるがまずは……」

突如、桜夜先輩の言葉が途切れた。

何が起こったのか俺には理解出来ないまま、桜夜先輩は立ち上がりざまに千鳥を鞘から抜き、刃先を俺に向けた。

桜夜先輩の眼は、戦闘時に見せる圧倒される眼光。

一瞬、俺に向けられたのかと思っただが千鳥の刃先は俺の後ろ先を視ていた。

「隠れても無駄だ。出てきたまえ」

場の空気が凍っているかのような冷たい声で桜夜先輩は林に隠れている相手を直視する。

桜夜先輩の視線により敵の居場所が解かった俺たちは相手と距離を置く。

清王さんは常に握られている両銃の右の銃口を桜夜先輩の視線に合わせた。

一方のガイは既にこの場から消えていた。

「あゝあゝ、強襲失敗かあゝ」



ゲームでも楽しんでいるかのように明るいアニメ声のような口調が、桜夜先輩の視線の先から聞こえる。そして、ゆっくりと少女が林から姿を現した。

小柄な体型でオレンジのショートヘアーにツインテール。顔は体型と同じく童顔で、湖のような深いサファイヤのような澄んだ碧眼。

だが、その体型や顔に似合わないマシンガンを握っていた。そして、桜夜先輩を視て子供のように明るく笑った。

「えええ〜！？ お姉ちゃん今時刀使ってるの！？ 非合理的過ぎだよお！」

無邪気な子供のように笑いながら桜夜先輩を貶す。そんな口調と言語に桜夜先輩はふっ、と鼻で笑った。

「非合理的だと？ そんな重い黒光りする鉄の塊を使うのが合理的だとも言うつのかね？」

「なに言ってるのお姉ちゃん！ 最近のマシンガンは軽量化されてただの鉄じゃ……」

「そんな事は知らん！」

2人の会話は学校で友達同士で会話しているかのような口調だった。まるで知り合いのようだ。

「お姉ちゃんこそそんな重い真剣使って合理的なの？」

「この剣の重さは人の命の重さだ。君の黒光りの重さとは意味が違  
う」

「ははは……全然良く解からないけど」

「君が理解する日など一生来ないさ」

「ああ〜！ ひどい〜！」

普通の会話にはないこの張り詰めた空気。

それはお互いの銃口、刃先が相手に向けられているからだ。

「ねえ知ってる？ 刀はマシンガンに敵わないんだよ？」

「そんな虚実には知らないな。如何なる銃でも剣には勝てない」

その言葉に少女はにやっと不適な笑みを浮かべた。

「試してみる？」

「君が試したければ試すがいい。だが君も刀の切れ味を試す事にな  
るぞ？」

「へえ〜！ すごい自信！」

「言っておくが、私は剣を握って戦いに敗れた事は一度もない」

「へえ〜じゃあ、これが記念すべき最初の負けになるんだね。お姉  
ちゃんの」

「ほお、私が誰に敗れるというのかね？ まさか君にか？」

「それはすぐに解かるよ」

「そうだな。結果はもう視えているな」

瞬間、少女の眼が獲物を狙うような眼に変わった。

「最高に面白いよお姉ちゃん。さあらに見せて。お姉ちゃんの力を」

24話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

「最高に面白いよお姉ちゃん。さあらに見せて。お姉ちゃんの力を」

少女はトリガーを引いた　！

それと同時に硝煙と連続してくる発砲音が聞こえた。

反動は少ないと言えど、あの少女の体型には無理があると思っていたが、少女は軽々しくマシンガンを往なしている。

その幾多の銃弾は桜夜先輩の残像に向かっていった。

「へえ〜！　やっぱ口だけじゃないんだ」

少女は桜夜先輩の姿を見失ったかと思うと、突如銃口を真上に向ける。

その真上には人間離れた飛躍で刀を振りかざしている

「はあ　　ッ！！！！」

桜夜先輩の千鳥が少女の頭上に眼にも留まらぬ速さで振り下ろされる　！

だが、少女は悲鳴も上げる事無く口元を歪ませた。

空間を揺らすほど　　いや、比喻ではなく実際に地を揺らがせた桜

夜先輩の一撃。

爆音と粉塵が周囲に飛び散って、風圧がまともに俺立つに襲い掛かってくる。

桜夜先輩の剣戟でその場には穴が穿たれた。

「いただきますいッ！！！」

桜夜先輩が地に着いた真上、そこに桜夜先輩と同等の飛躍を見せる少女の姿があった。

マシンガンを持っているのにこの飛躍

尋常の人間の力ではない この少女も。

『ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！』

桜夜先輩に降り注ぐ銃弾と薬莢の雨。

畏怖するぐらいの銃弾が桜夜先輩の頭上に連射される！

一発でも命中すれば致命傷は避けられないだろう いや、それ以前に回避ポイントがない！

だが、桜夜先輩からは恐慌すら感じられなかった。

桜夜先輩は降り注ぐ銃弾に千鳥の刃身を素早く受け流すように当て、銃弾を地面に流す！

まともに銃弾を受ければ、千鳥とて刃身が折れるだろう。

だが桜夜先輩は受け流す事によって刃が毀れる事もなく、銃弾を流したのだ。

これぞ神業と言っても過言ではないだろう。

「どうかね？ これで君の虚実を証明出来たぞ」

少女の言った言葉、刀はマシンガンには敵わないという虚実を証明する為に桜夜先輩は回避しなかったんだ！

あの時冷静な顔をしていたが、本当は熱情していたんだ。

「なるほどね、そういうやり方もあるのか」

上空に飛躍している少女は、硝煙を上がらせながら狙いを修正する。

「だけどさあくお姉ちゃん、そんな薬莢まみれの地面で大丈夫なの？ 転んじゃうよ」「

その少女の言葉に俺の視線は勝手に桜夜先輩の足元へ行く。銃弾の雨の影響か……桜夜先輩の足元には薬莢が無数に転がっていた。

「相手の心配より自分の心配をしたらどうなんだ？」

桜夜先輩は刃先を地面に向け、その場から動かずに頭上にいる少女を見る。

「ええ………？」

その桜夜先輩の動作と言語に、少女は微かながら動揺を見せる。刹那、何かが頭上に迫ってくる不快な気を感じた少女は己の頭上を仰ぐ。

少女の視線の先には既に目前まで迫って月光に照らされる宝刀頭上を貫こうと重力で墮ちてくる三日月宗近があった！

「うわあっ！？ い、いつのまにっ！？」

「私が飛躍した時、三日月宗近を天を突くかのように投げ放った」

「ッ！？」

誰もが桜夜先輩の姿をロストしているほんの刹那、桜夜先輩はそん





「もおお〜ッ！！！」

真下に迫る千鳥に向けて吹っ切れたような声を上げる。

そして、両脚を開脚させ、太ももで千鳥を真剣白刃取りした！

その光景に誰もが啞然とした。

偶然ではない 明らかに狙ってやっている。

全員が啞然とする中、桜夜先輩は戦闘中だと言う事を忘れていなかった。

「まさか太ももで真剣白刃取りとはッ！」

桜夜先輩は驚きを力に変え、再び地面を蹴って上空の少女へ向かう！

落ちてくる三日月宗近の柄を右手に掴み、桜夜先輩は月夜を背景に大きく振りかざす！

眼にも止まらぬ太刀筋の速さに、少女は対応仕切れなかった。

「舞い落ちる桜の花に夢幻の優美を奉ずる。巡り来る花信へと集い百花繚乱の如く成せ！」

呪を唱えた瞬間、三日月宗近の刃身全域に月光の如く金色の光を帯び始める

三日月宗近は光を帯びた瞬間、月の月光も一段と強さを増して見えた。

「桜剣っ！ 斬月ッ！！！」

三日月を形取るような三日月宗近の剣戟。

その太刀筋には、本当に三日月のような金色の光が制止していた。

「　　ッ!?　　う、うそ………」

息を呑むような少女の悲鳴

桜夜先輩の剣戟をまともに受けたマシンガンは冗談のように美しく  
一刀両断された。

だが、少女は半分だけになったマシンガンをすぐに桜夜先輩の視野  
を覆うように投げた。

それを桜夜先輩は簡単に三日月宗近で流す。

「これで!」

一瞬、桜夜先輩の視界を奪われた刹那　　その影から少女の太もも  
真剣白刃取りした千鳥の突きが現れる　　!

「なあ　　ッ!?」

桜夜先輩でも予測していなかった上空での突き。

その突きをどうにか鰐で受け止め、上に太刀筋を変える。

少女の太刀筋を変えた事によって、桜夜先輩の胴体には隙が生じた。

「隙ありい　　!!!」

突きの太刀筋を上に変えられた反動を利用して、桜夜先輩の胴体に  
少女がドロップキックをお見舞いする　　!

「ぐああッ!?!」

少女のドロップキックが桜夜先輩の心窩に炸裂する。  
そして重力に従って、少女は桜夜先輩を下敷きにして墮ちていく。

「さ、桜夜先輩ッ!？」

俺は思わずその光景に声を上げてしまった。  
だが、そんな声を虚しく、桜夜先輩は背中から地面に墮ち鈍い音が響いた。

桜夜先輩を下敷きにしていた少女は無傷。  
背中から打った桜夜先輩は動作が完全に静止した。

「チャックメイトって奴だね」

少女は自分が手にしていた千鳥を真後ろに投げ、左手で桜夜先輩の右腕を掴み、右脚で踏みつけるようにして左腕も静止させた。  
桜夜先輩も抵抗しようと思ったが、微動だにも出来ない。  
そして少女はにやつと笑いながら懐から拳銃ピストルを取り出し、その拳銃を突きつけるように桜夜先輩の口の中に突っ込んだ。

「んぐっ……んぐうんっ!」

藻掻き声を上げる桜夜先輩は、もう少女に手も足も出ない……。  
口腔内に突っ込まれてある拳銃のせいで呪すら唱えられない。  
まさしく 剣が峰だ。

「……桜夜先輩ッ!？」

俺と美唯、月守さんの声が重なった。

どうすれば桜夜先輩を助けられる……? どうすれば……。

一番守るべき場面で、俺の結界も意味を成さない……。  
発動させても桜夜先輩を守る事は不可能だ。

「あゝあゝお姉ちゃんもうお終いかあ。あんなでかい口叩いてた癖に結構早かったね」

そう冷笑して少女は拳銃をスライドさせた。

この動作で初弾がチャンバーに送り込まれ、あとはトリガーを引けば 発砲出来る。

「最期ぐらい私の名前を教えてあげる。私は星見郷さあ。覚えてとは言わないよ。もう覚えられないしね」

拳銃をスライドした時、桜夜先輩は初めて死に直面して畏怖を見せた。

言葉にもならない声で藻掻く桜夜先輩……。

だから、俺にはその光景が幻想に見えた。

いつだって負けた事のない桜夜先輩が、こんな小さな女の子に負ける訳がない。

負けるはずがない。きっと桜夜先輩には考えがあるはずだ。

なのに……どうして桜夜先輩の表情は恐怖で畏怖しているのだろうか。

それは……死が怖いからだ。

自分が死ぬと解かっているからだ。

けれども、まだその瞳は絶望していない。

剣士としての最期の志、誇り高く生きるために。

そんな瞳が……そんな瞳が世界を失って俺たちまで映さなくなるなんて……。

そんなこと……そんなことさせるかぁッ！……！

25話・(1) 約束(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

25話・(1) 約束

そんなこと……そんなことさせるかぁッ！……！

俺は本能のままに駆け出した。

このままでは確実に桜夜先輩は殺される。

それが俺の魂を激動させた。

だが 遠い。

全身の筋肉が千切れるほど全力で走るが、まだ遠い。

桜夜先輩の口腔内に突き込まれている銃で、確実に撃たれる。

その未来を変える術はないとでもいうのか？

いや、絶対にある！

そう信じて、一心不乱に前へ走る ！

脚が使い物にならなくなっても構わない ！

桜夜先輩を守る為なら！

俺の背中から美唯と月守さんの声が聞こえる。

だが、もう俺の耳には聞こえていなかった。

俺には遠距離武器は愚か武器すらない。  
だから、少女に攻撃は出来ない。  
だが、騙す事は出来る。

俺には 左眼の異能がある。

「ううおおおおおおおおおッ！！！！」

走り絶叫しながら俺は左眼に手を置き、能力を発動させる。

この能力の事を少女は知らない。  
だからこそ成せる業。

「ッ！？」

全力で走る俺に気付き、自分の身に危険を感じた少女は素早く拳銃を口腔内から引き抜き、銃口を俺に向ける。

それだけの時間で十分だ。

少女の拳銃から銃弾が発砲される。

それを俺の能力 結界で弾き飛ばす。

「け、結界ッ！？ まさか異能者なのッ！？」

俺の能力に気を取られている少女は、桜夜先輩の事まで手が回らなかった。

「還りきたれ！ 千鳥！」

桜夜先輩が呪を唱えた刹那、瞬間移動のように千鳥の柄が左手に握



られていた。

だが桜夜先輩は口が開放されただけでまだ動けない。少女の押さえ込みが的確な証拠だ。

その事に気付いた少女は、再び銃口を口腔内に突っ込もうとするが

「はっツ!?」

突如、少女の握っていた銃が手から弾き飛んだ。

これは、この好機をずつと林に潜んで待っていたガイのスナイパーライフルによる銃弾でだ。

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び生ずことを請う」

桜夜先輩が呪を唱え始める

その呪に反応して、一波、二波と電撃が流れる。

「今、此処に雷魂を開放する！」

大轟音を轟かせ、視界全体を覆う程の閃光が漏れる。

「もぉ〜！ なんなのよっ！」

少女は桜夜先輩から一飛びで後退する。

だが、少女が後退した真後ろには

「誅伐！」

そこには今までとは違い、確かな感情が入っている清王さんがいた。少女は声に慌てて振り返り、銃口を清王さんに向ける。

その時には既に清王さんの銃からは硝煙が上がっていた。

「ぎゃあああッ!?!」

頭ではなく防弾制服で守られている胴体を清王さんは発砲した。

激痛に表情を歪ませる少女だが、直ぐに銃口を清王さんに向けた。

「こ、こんのおッ!?!」

少女は俊敏にトリガーを引く

その銃声に重なるように、清王さんも発砲した。

「ぎゃあああッ!?!」

これは少女の悲鳴だ。

一発しか撃っていない清王さんの銃弾が、少女には二発被弾している。

ど、どついう事だ……?」

清王さんは一発しか発砲していないのに……。

防弾制服のお陰で出血はしていないが、死ぬほど痛い激痛に悶絶する少女。

一方の清王さんはどこも被弾がなく、悠然と銃を構えている。

「……そうかあ」

少女は痛さで歪む口元を無理やり笑わせ、清王さんを見る。

「お姉ちゃんはさあらの銃弾を銃弾で誘導させて……その二つの銃弾をさあらに当てたんだあ……」

不意に　　少女は素早く銃口を向ける。

「だけど、さあらを殺さなかったのがお姉ちゃんたちの敗因だよ！」

少女は弾が尽きるまでフルオートのM1911を連射させる。

狙いは全て清王さんの頭部だ　　！

だが、清王さんはスウと閉じていた眼を開き、避けたと解からないぐらいの最小限の動きで頭を傾げる。

「じ、このお姉ちゃんもやるう〜！」

少女のM1911は弾切れを告げるホルドオープン状態になり、すぐに弾倉をリロードさせる。

そのリロード間に清王さんは動いた　　！

清王さんは舞うように螺旋しながら左右の銃で交互に二発、着地時に身を引きながら一発、発砲した　　！

既にリロードを終えていた少女は、清王さんの銃弾をバネが付いているかのように空中で縦に一回転して避ける。

そして着地前に銃口を清王さんに向け、今度は三点バーストで発砲する　　！

その攻撃も清王さんは当然かのように最小限の動きで避ける。

「銃じゃこのお姉ちゃんには勝てないか」

そう言い切って少女は残りの弾を全てフルオートで発砲し、銃を投げた。

そして背中に両手を突っ込み、ジャキジャキ！と流星みたいな速さで隠していた刀を二刀流で抜いた。

「お姉ちゃんは銃のフレーム付近に大型ナイフが装備されてるみたいだけど、それじゃあー刀には敵わないでしょ？」

そう言い放って少女は人間離れしている瞬発力で飛び掛る！  
この少女……銃も刀も使えるのかっ！？

「……ッ！」

清王さんは流星のように飛び掛る少女に発砲するが、全て回避されてしまう。

流星の清王さんも少し唇を噛み締めているのが解かった。  
明らかに少女のペースに嵌ってしまっている。

少女は清王さんの肩目掛けて両刀で突き出してくる！  
その刃先を清王さんはフレーム付近の大型ナイフの腹でカキンッ！と打った！

後ろにザザッ！と下がる少女に、清王さんは左右一発ずつ同時に水平面撃ちをする！

「さっきのお返しだよお！」

少女は清王さんの放った二発を両刀で打った！  
打った銃弾の一つは、清王さんの頬を掠め林へ消えていった。  
その軌跡を後追いするように、清王さんの頬からはゆっくりと真紅の血が流れ始めた。

そして、少女と清王さんの間に長い間合いが生まれる。  
近づぐだけで圧迫されそうな、そんな2人だけの空間。

清王さんの流した頬の血が地面に墮ちる途次、2人は同時に駆け出した！

夜空に木霊する音。

何度も何度も 互いの刃を交錯し合う両者。

眼にも及ばぬ速さで必殺を重ね合う両者。

それでも勝負に決着は訪れない。

「もぉ〜！ このお姉ちゃん剣術も上手い！」

少女が近い間合いを一足で跳ぶように後退する。

少女、清王さんは両刀だが、互いに桜夜先輩の桜剣のような類はないようだ。

だからこそ、己の力が物を言う。

清王さんは床を蹴ると、獅子のような速さで二丁拳銃を同時に発砲する！

それを少女は背転しながら避け、距離を取る。だが、少女の真後ろから

「ひいつ ツ!?!」

威嚇するかのように雷切の雷音が響く。

その大音響に少女は首を縮ませる。遠くからの俺たちでも度迫力だ。

「あちゃ〜、前後で囲まれちゃったよ……」

だが少女は笑っていた。

それは暗礁の場面を楽しむかのような余裕の表情。

「まあ、あのお姉ちゃんなら勝てるかな」

少女の視線の先には、美唯が映っていた。

そう俺が認識したよりも早く、少女は小さな獅子のような速さで、両刃を構えて疾走する。

その先には、俺と美唯、月守さんがいる。

少女の狙いは　俺と美唯。

桜夜先輩も清王さんも、もう追いつけないほどの速さ。

瞬きをする間に、少女は既に間合いに入っていた。

あまりの速さに結界は愚か、何も間に合わなかった。

両刃の刃先が、突きの太刀筋で現れる。

その刃先は、俺と美唯の胴体。

俺は反射的な本能のように、ありったけの力で美唯を吹き飛ばした。

「じゅ、じゅん　　ッ！！！！！」

美唯は俺に吹き飛ばされながらも、俺に手を差し伸べてくれていた。

その手と美唯の滲む瞳に、俺は最期の笑みを浮かべた。

そして、その手の距離は次第に遠のいて行く。

これで美唯は少女の間合いから外れ、俺だけが残る。

後悔はしてない。

美唯を守れるなら

あの時の美唯が俺を守ってくれたみたいに、今度は俺が美唯を守れるなら

俺は眼を閉じる。そして不意に思い出がよみがえった。

俺の思い出にはどんな思い出にも美唯がいた。

悲しい顔をしている美唯もいる。怒っている美唯もいる。

でも、必ず最後には笑顔の美唯がいた。

そのかけがえのない想いを俺は魂で抱きしめた。

美唯の笑顔を離さないように、もう二度と離さないように、思い出を空にばら撒いた。

美唯 俺がいなくても強く生きて行くんだぞ。いや、お前なら強く生きれる。

それは、ずっとお前の傍にいた俺が一番よく知っている。

美唯となら、どんなに離れ離れになっても何度でも巡り合える気がする。

それは美唯も感じているよな？

「じゅん ツ！……！ いやだよ……！……！……！ 独りにしないですよ……！……！……！ じゅん ツ！……！……！」

25話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



しかし、いつになってもその時は訪れない。

其れは、この世界が止まっているかのような永遠の静寂で俺は二度と開くはずのなかった眼をゆっくりと開ける。

「なんでえ……なんでそんな事できるの……なんでえ……」

少女は視線を落しながら、怒りにも良く似た震える声を振り絞る。更に視線を落とすと、刀の刃先は俺の胸のほんの僅か手前で制止しているのが解かった。

そして、少女の両手から力なく刀が落ち、糸の切れた人形のように少女はその場にへたり込んだ。

「なんでえ……なんでよお……」

震える声で同じ言葉を繰り返す少女。

自分の過去に対して悲哀し、その悲哀に慄然して、更に激昂まで感じられる少女の声。

「そんなことされたらあ……殺せるわけないよあ……さあらはアイツ等とは違う……！ 絶対に違うっ！！！！」

記憶に苦しみながらも少女は強く唱えた。

その瞳からは幾多もの雫が零れ落ちていく  
アイツ等とは違つと。

この言葉は少女の記憶の深奥から出た言葉だろう。  
動揺を隠せない俺だが、小動物のよう震える少女に屈んで視線を合  
わせた。

「……………」

俺の視線に気付いた少女は、落としていた視線を合わせた。  
湖のように澄んだサファイヤのような瞳は、涙いっぱい濡れてい  
た。

何度もしゃくり上げる仕草に、ひたすらに泣く子供を連想させた。

「大切な人を守りたいから命を賭けられるんだよ」

自分でも恥ずかしくなる口調と言葉を少女に囁く。

俺の言葉に少女の動きが止まる。

「大切な人……………？ ならさあらは…………… ツ！？」

突如、頭を押さえつける少女。

「お、おい！？ どうした！？」

「ご、ごめんお兄ちゃん……………無理に昔のことを思い出そうとすると  
頭が痛くなって……………」

思い出そうとすると頭が痛くなる……………？  
まさかこの子は過去を覚えていないのか？

「まさか……過去の記憶がないのか？」

「そんな事もないよ。大切だった思いでは薄っすらだけでも覚えてる。だけど……」

少女は口重そうに言葉を詰まらせた。

そして、俺の眼を直視した。

その眼の深奥は、自分じゃ解からない記憶に酷く恐慌し助けを求め  
る。

そんな心眼だ。

「記憶がごちゃまぜなの……無理やり付け加えたような記憶で……  
とにかくすつごく気持ち悪い」

少女は記憶に対し、不愉快そうな表情を創る。

本当に……過去の記憶がないんだな。

もどかしそうな表情を続ける少女に俺は頭を少し強めに撫でた。

「あつ……いたっ！」

少女の顔に少し笑顔が戻った。

その笑顔にもう何も不愉快なものを感じず、戦意も感じなかった。

この少女に何があつたのかは解からない。

だが、人を命がけで守るといふ事に何か特別な何かがあるのだけは  
解かった。

それが、少なからず『記憶』に関係していると。

「えへへ……」

俺の撫でに気持ち良さそうに笑顔を溢す少女。

本当に子供みたいだなつと俺も微笑を漏らした。

「…………お姉ちゃんみたい」

「お姉ちゃん？」

「うん。覚えてないけどさあらにはお姉ちゃんがいたと思うの」

俺の胸に棘が刺さったような鈍い痛みが走る。

それも覚えていないなんて…………。

俺はあまりにも悲哀過ぎる少女に、掛ける言葉が見つからなかった。

俺に家族はいない。

それが解かるのは記憶があるからだ。

だがこの少女には記憶がない。

自分の事も、家族の事すら記憶から消えてしまっている。

それがどんなに残酷で悲哀なことか…………。

「大丈夫だ。俺も手伝ってやる」

「え…………？」

「取り戻してやるとは言えないけど、手伝っよ。お前の記憶探し」

俺の言葉に息を呑む少女。

そして、そのまま視線を地面に落した。

「なんでお兄ちゃんはそんなに優しいのお…………さあらはお兄ちゃんを殺そうとしたんだよ…………？」

「人を殺すというのは許せない。けどお前は殺さなかった。それに……」

その言葉に少女は視線を瞳に合わせる。

俺は少し恥ずかしくなり、視線を斜めに落とした。

「なんだが……お前は昔いた妹に似てるんだよ」

「……そうなんだ」

少女は少し唇を噛み締めた。

それは自分の過去に対してか、俺の過去に対してかは解からない。だから俺は、ふうと鼻で笑ってやった。

「だから、何だか放ってけないんだよ」

「えへへへ……ありがとう、お兄ちゃん」

そう言って再び少女は笑顔になった。

その笑顔は俺の妹　沙希にどこか似ていた。

不意に　少女に近づく荒々しい足音が聞こえる。

その足音の主は　美唯だった。

「……もう絶対に　あんな事はしちや駄目だからねっ！……！」

「ふええええッ！？」

バシーンッ！と少女の頬に紅葉が出来る。

美唯の一撃に少女の小柄な身体は軽く飛ばされた……。

……なんて威力だ。

「う、ごめんなさあ〜い……。もう二度々あんな事はしませえ〜ん……」

マンガのような滝の涙を流しながら、少女は倒れたまま美唯に謝罪する。

その言葉を聞いた美唯は、ギロツと戦慄しそうな眼を俺に向ける。戦慄はしなかったが、心臓が飛び出るかと思った。

今にも狩られそうな勢いだったが、美唯は全身の緊張を抜くように深く溜息をついた。

「潤も死のうなんてしないでよお……。お願い……」

これまでに見た事もない美唯の表情。

こんな悲しそうな表情でお願い事をする美唯なんて……。

俺は何て自分勝手なことをしてしまったんだろう。

「ごめん……。ちょっと自分勝手過ぎたな……」

「全然ちよつとじゃないよっ!?!?!」

全ての感情を吐き出した美唯の一言。

その言葉が鋭く俺の胸に突き刺さる。

「潤なら解かるでしょ……。!? 私がどんな気持ちなのか……」

「今まで潤がいたから私は生きれたのに……。どんな事でも乗り越えられたのに……」

その瞬間、美唯の瞳から一滴の涙が零れた。  
落ちる雫は、震える拳を過ぎて地面に落ちて行った。

「潤がいるから私がいるのに　潤がいなかったら……潤がいなかつたら私はいれないよおッ！！！」

「……………」

魂の中で様々な想いが錯綜して、俺は何も言葉に出来なかった。  
何故だか解からないが、視線を合わせられなくなった。

俺は命に換えて美唯を守ろうとしていた。

美唯を死なせたくない気持ちで一杯になっていて、俺は美唯に気付けなかったのか

俺だってそうだろう？

美唯がいなかったら俺はここにいない。

美唯がいなかったら、家族を亡くしたと同時に俺の心も無くしていた。

俺は美唯がいたから生きれたんだ。

「俺だってそうだ……美唯がいなかったら俺はここにいない」

そうか　そういう事なのか。

なんでこんな事に気付けなかったんだろう。

だから美唯は命と引き換えにしようとした俺をこんなに叱っているんだ。

「ごめん美唯。ようやく気がついたよ。今までの俺はどうかしてた」

俺の言葉を聞いて、美唯は表情を明るくした。  
そして、俺に手を差し伸べた。

「潤、今を必死に生きよう。そして誰も欠けないで私たちの日常へ  
戻ろう」

希望に満ちた瞳をいつまでも近くで見たい。  
その為に俺は美唯の手を握った。

「約束だぞ。美唯」

「うん。約束」

俺と美唯で始まった手の抱擁が

「私も約束しよう。その時は私も君たちの日常に混ぜてくれないか  
？」

桜夜先輩が俺たちの手を握った。  
その手は温かくて確かな力を感じる。

「もちろんですよ！」

俺と美唯は無邪気に笑った。  
そして、もう一つ小さな手が現れた。

「さあらも約束するよ！ さっきまで敵同士だったさあらが言っの  
は駄目……かな？」



「何を言っている星見郷くん。昨日の敵は今日の味方と言っじやないか」

控えめに言った少女に桜夜先輩はすかさず返答する。

「桜夜先輩、この子と会ったのは今日ですよ」

「中沢君。君はそこまで神経質だったのかね？」

そんな談話をしていたら、新しい手が現れた。

「あたしも改めて約束する。……あたしは何も出来ないけど、精一杯努力するよ！」

月守さんに続いて、再び新しい手が現れた。

「まだ信頼されていないかもしれないが、俺も約束する。スナイパーとしてお前等を護衛するよ」

「何を言っている『精鋭の狙撃手』河坂ガイくん。私が全てを覚えたとこの事は信頼の証だ」

桜夜先輩の意味の解からない信頼の証を聞いていると、最後である手が現れた。

「約束……する」

「翠華くん。こんな時ぐらい銃をしまつたらどうなんだ？ 君の銃は刃も付属していてゆゆしいんだ」

「ふ、付属……」

付属という言葉に憤りを感じた清王さんは、己の銃を見る。  
その光景に和むような笑いが俺たちを包んだ。

26話・(1) 暗闇が導き出す天命(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

26話・(1) 暗闇が導き出す天命

俺たちの志は一つだ。

それが、改めて魂に沁みて解かった。

「もうすっかり夜だな」

もう姿では誰だが認識出来ない暗闇。

暗闇の中で唯一不自由なく聞こえる声で認識できる。

この声は桜夜先輩だ。

「桜夜先輩、今日もまさか……あれをするんですか？」

俺がいうあれ。

そう、瞳が意味をなさないこの夜の異世界に必需となる灯火。

そして、調理にも利用できる灯火。

そう 人類の生み出した画期的な文明とも言える火だ。

「中沢くん。今日も期待しているぞ。存分に力を奮ってくれたまえ」

桜夜先輩は全ての希望を託すような大袈裟な口調で言う。

確かに、俺は数々の木に灯火をつけてきた。

その勇士を桜夜先輩は評価してくれたのか。

嬉しいような虚しいような……。

「夜が来る度いつも思うんですが、ライターとか点火棒とかは持ってないんですか？」

「ふう、そんなモノはいらぬ」

鼻で笑われてしまった。

私的な意見だが、俺は必要だと思っている。いや、これからも思い続けるだろう。

「えええッ！？ お姉ちゃんたちそんな物も持ってないの！？ 非合理的すぎだよぉ〜！」

相変わらずのアニメ声と子供ののような口調が聞こえる。

「なら君は持っているとしても言うのかね？」

「うっん、持ってないよ」

「なら少し黙っていてくれないか？」

「はぁ〜い」

桜夜先輩の鋭い言語も少女は軽く流した。

この少女のスルーテクニクは中々すごいぞ……。

「どうやら中沢君。そんなモノは誰も持ち合わせていないそうだ」

「……これまでずっと俺が自力で焚いてきたのに、今さらそんな重

宝な道具を出されたら往復ビンタですよ」

「その対象に私は入っているのかね？」

「むしろ桜夜先輩が主軸……」

「座興はこれまで。始めようか」

俺の魂の叫びは座興と題され打ち切りになってしまった。

「何を始めるのっ！？ お姉ちゃん！」

何が始まるのか解からない少女は、威勢よく桜夜先輩に問いかける。だが、これから始まる事は俺にとって苦痛でしかない。だけど……これがないと始まらない。

やるしかない……か。

「ああ、中沢くんの名誉ある晴れ舞台だ」

「そんなお膳立てしないでくださいよ！ やる事は火起こしなんですから！」

その瞬間、シュツ！と刀を抜く音が聞こえた。

まずい……なぜだか解からないが俺は桜夜先輩の逆鱗に触れてしまったようだ……。

俺はどうすれば……。

「暗いと何も視えない。雷切の電流を灯りに使おう」

そういうことか……。

俺は全身の力を抜くように溜息をつく。

「ん……？ どうしたのかね中沢くん。 今から最後の晚餐に挑む  
虜囚のような溜息について」

「……そんな溜息はついていません」

灯り一つないこの場に、一波、二波と閃光のような雷が流れ始めた。

「今、此処に雷魂を開放する」

桜夜先輩が呪を唱えた瞬間、激しい雷音を轟かせながら千鳥は雷切  
と変わり、刃身には雷神の如く帯電し始めた !

「立花道雪、雷切っ！」

桜夜先輩の雷切が十分な程の灯火となり、この場全体を照らす。

雷切があれば……俺の火起こしはいらんじやないか？  
だが、これも桜夜先輩に門前払いのように否とされた。

「潤、頑張つてね！」

灯りがついた事で位置が把握できた美唯は、俺の背中をポンツ優し  
く叩く。

「ああ、頑張るしかないんだな」

「お兄ちゃん？ 何を頑張るの？」

何も知らない少女が頭を覗かせる。

「火起こしだよ。それが俺の役回りさ」

自分で言ってるて更に虚しくなる。

でも、少しでもみんなの役に立つんなら……。

「えええッ！？ まさか手動でえ！？ それこそ非合理的だよお！」

いつもの通り大袈裟な口調で言う少女。

「俺だってこんな非合理的な方法はやりたくないさ。だがあらゆる電力が使えない以上、これしかないんだよ」

「電気が使えないの？ だとしてももつと合理的な方法はあるですよ！」

この子……電気が使えない事を知らないのか？  
ならこの世界の事も……。  
いや、その事はまた後だ。

「例えば何があるんだ？」

もし方法があるのなら願ってもない事だ。

「こつちには銃とか刀があるんだよ！ それを使えば簡単に火は点くよー！」

少女の意見に桜夜先輩が俊敏に口を開いた。

「簡単に言ってくれるじゃないか。私たちが試してないとも思っ



ているのかね？」

雷切を手に行っている桜夜先輩が事を言うと、少し畏怖してしまう。それぐらいの迫力だ。

だが、桜夜先輩の言う通りだ。

俺たちは今まであらゆる方法を試して来たが玉砕している。

「お姉ちゃん、何か燃えそうな物はないの？」

少女の言葉を聞き、桜夜先輩はスカートのポケットに手を入れた。そして、そこから白いふわふわとした物を取り出した。

「これなら問題なく燃えるだろう」

桜夜先輩の取り出したのは綿だった。

今までの火起こしで、何故出してくれなかったのだろう。

最初から持っていたのなら、もっと早くから出して欲しかったものだ。

「オツケー！ それなら行けるよ！」

そう言っつて少女は桜夜先輩に近づく。

何か策でもあるのだろうか？

「何か考えがあるのかね？」

明らかに期待感の少ない眼差しで少女を視る桜夜先輩。

まあ、俺も期待はしていないが……。

「もちろん！」

両手を腰に当て、寄りも上がらない胸を張る少女。

まさに勝ち誇ったような満足気表情だ。

さっきまで一欠けらの期待もしていなかった桜夜先輩だが、その堂々とした態度に少しは意を示す。

「さあらの刀にこの綿を巻く。お姉ちゃんはさあらの刀に刀をぶつけて！ そうすれば火花が散って……」

その瞬間、桜夜先輩は眼を大きくした。

「そうか！ そうすれば火花が綿に引火し、やがては……！」

「そういうこと！ お姉ちゃん！ 早速やるよ！」

「面白い星見郷くん！ 受けて立つ！」

……本当にそんなので火を起こせるのか？

出来るという確信で満々としているのは解からないが、二人は颯爽と準備を始める。

「中沢くん。君に雷切を託す」

桜夜先輩が眩しいぐらいに帯電している雷切を手渡される。

あまりにも唐突過ぎて、俺は動揺を隠せなかった。

「え……？」

「私はこれから星見郷くんと火起こしを目的とした鍛錬を行う。中沢君、その鍛錬が終わるまで雷切を持っていてくれないか？」

思わずその閃光の如く光る雷切を見つめてしまった。

そして、どうしていいか解からず桜夜先輩を一瞥してしまう。

俺がこの雷切を……？ この俺が桜夜先輩の愛刀を握っていいのか？  
その前に、本当にする気なのか？

「俺が持つてもいいんですか……？」

「君だからこそだ。これは戦いの為の剣ではない。皆の灯火を護る  
為の剣だ」

桜夜先輩に説き伏せられ、俺は雷切を手取る事にした。

桜夜先輩が柄から手を離れた瞬間、雷切全ての重みが俺の腕全体に  
押し掛かる。

「おおお……！」

落さないように両手でしっかりと持ち直し、手旗信号のように雷切  
を構える。

こんな重い真剣を桜夜先輩はあんな軽々しく往なしているのか……。  
その凄さが身に沁みてわかった。  
というより眩しい……！

「準備オツケー！ お姉ちゃん、いつでもかかって来なよ」

少女は一振の刀を中段で構えている。

その刃身の中心部に、白い綿が巻きつけてあった。  
綿の影響で、この場の雰囲気は随分と変わるものだな。

「星見郷くん。覚悟は出来ているのかな？」

一方の桜夜先輩はまだ刀は構えていない。

雷切は俺が持っているから、恐らく三日月宗近を駆使するのだろう。

「お姉ちゃんこそどうなの？ 腕の一本ぐらいは覚悟してる？」

「ふう、何を言って……」

「ちょっと待て！ これは火起こしだ！ 死闘でも何でもない！」

相殺しそうな空気の中、俺は原点に戻らせるため大声を上げる。

「おっと、そうだったな」

「あ、そっか。これは火起こしだったね。ありがとうお兄ちゃん！」

俺が言わなかったら、この場はどうなっていたのだろうか？

「君には特別に、桜夜家の神刀しんとうで相手してやるう」

桜夜先輩が珍しく誇らしそうな表情をつくる。

そして柄を右手で握り、その宝刀の姿を魅せつけるようにゆっくりと刀を抜いた。

「桜夜飛龍はな、神刀かみきりッ！ 神切かみきりッ！！！！」

なッ……！　なんで火起こしで真打が登場するんだ！？

俺が驚愕している間に、その刃先を睨みつけるように少女へ向ける。

「そこなくっちゃ！」

少女はグウ！と柄に力を込める。

凍てつくように張り詰めた空気。

この押し潰されそうな空気の中、両者は火起こしを遂行しようとしているのだ。

とても火起こしの場とは考え難い……。

「行くぞっ！！！」

桜夜先輩の発奮した声で、前代未聞の火起こしは始まった

26話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

26話・(2)

「行くぞっ!!!」

桜夜先輩は獅子が突進する以上の速さで少女に駆ける。  
一気に間合いを詰めた桜夜先輩は

「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」  
「!!!!!!!」

乾坤一擲の気迫の気迫と共に、桜夜先輩は少女の刀目指して刀を振る！  
心なしか、戦闘時以上の気迫に思える。

「うおおおりゃああ　　ッ!!!」

少女の頭上で、二つの刃身は交差する。  
その交差した少女の刃身を見てみると　そこには綿があった！  
少女はあの桜夜先輩の太刀筋を見切って、刃身に巻きつけてある綿に当てたんだ！  
そして、ギリギリッと鏢迫り合いが続く。

「えいッ!!!」

少女は刀を前に押し出し、桜夜先輩を飛ばす。  
飛ばされた桜夜先輩は、ズズッと後ずさる。

「ぐッ！！！」

桜夜先輩は声を漏らしたかと思うと、俊敏に駆け間合いを詰める。

「ッ！？」

間合いを詰められるのは予想外だったのか、少女は表情を強張らせた。

高い金属音を響かせ、桜夜先輩の左薙ぎの一撃を受け流す少女。

「はあッ！！！」

その左薙ぎの一撃を眼に視えない速度で太刀筋を右にする！  
俺にとって決死の一撃に見えたが、その右薙ぎの剣戟は当然かのように受け流される。

「まだまだッ！！！」

再び太刀筋を反転させる桜夜先輩。

その速度は衰えを知らず眼に視えない。

なるほど……この繰り返しで火花を起こして火を点けようという事か……。

読みどおり、それが幾多にも繰り返された。

絶え間なく響く金属音。

その音が二人の息遣いのように錯覚する。

火花は散っている。だが、火は点かない。

……それもそのはずだ。



なぜなら

「ストップ！ 二人とももう止めてください！」

傍観者である俺の声に、二人は険悪な眼差しで振り返る。蛇に睨まれた蛙の気分だ……。

「なぜだ中沢くん！ あと少しなのだぞ！？」

「そうだよお兄ちゃん！ 邪魔しないでよ！」

二人に反発の声を浴びたが、俺は発言に出た。

「もう綿がない！ これ以上遣り合っても無意味だ！」

俺の言葉に二人共に少女の刃身を慌てて視る。

「なあ ツ！」

驚愕する桜夜先輩。

「そ、そんな ツ！」

その光景に眼を大きくする少女。

二人の視線の先には 綿が消えてなくなり、刃身だけの刀があった。

「な、なぜだ……！」

桜夜先輩は驚愕の色を隠せない様子で、誰に向けてでもなく声を上

げる。

「さあらの考えは完璧だったはずなのに……！」

二人共、恐慌状態に陥る。

その前に、この二人は本当にこの作戦で火を起こせると、一瞬でも思ったのだろうか？

いや、二人の様子だと今も思い続けているのだろうか……。

「当たり前だ！ 最初に刀が交差した段階で綿が斬れて落ちたッ！  
！！！」

俺の言葉に、二人共に言葉を失う。

と、傍らの美唯は、

「まあ、当然だよね……」

美唯の言葉に、更に胸を抉られた様子の二人。  
それに続いて月守さんは、

「今は二人の無事を祝おうよ！ ねえ？」

確かにそうだな。

素人眼の俺から視れば二人が無傷だという事が奇跡だ。  
あんな火起こしの中で……。

「滑稽……」

「期待はしてなかったが……」

更に清王さん、ガイがダメ押しをする。  
全員に否定された二人は、更に心痛した様子だ。

「ま、まだまだよ！お姉ちゃん！」

力強い声で少女は桜夜先輩を呼び覚ました。

だが、なぜか桜夜先輩は弱々しい。

よほど火が点かなかつたのがショックだったのだろうか？

「……もう駄目だ。私は何も出来ない……」

「そんな深く考えないでくださいよ！ その前にあの方法で火を起  
こせる人はいません！」

俺は酷く傷付いている桜夜先輩に告げた。

「まだ方法はあるよ！ 聞いてよお姉ちゃん！」

少女は立ち尽くしている桜夜先輩の身体全体を揺らす。  
身体が揺れてようやく少しは眼が覚めたようだ。

「刀が駄目なら銃だよ！ 銃なら絶対に出来るよ！」

桜夜先輩は慰めようとした少女だが、

「……銃だと？ ならば私は用済みではないか……」

逆に墓穴を掘ってしまった。

その事に気付いた少女は慌てて自分の口を塞ぎ、次に繋がる言葉を  
探す。

そして、慌てふためく少女を、桜夜先輩はジトーとした眼で見つめる。

……こんな桜夜先輩を視るのは初めてだ。

何が原因だったのだろう？

今になってはその事も解からない。

そして、遂に少女は吹っ切れたような笑顔を作った。

更に右手はさよならのポーズを作り……。

「そうだね！　じゃあね、お姉ちゃん！」

最高の笑顔で桜夜先輩を戦力外通告した。

音は聞こえないが、桜夜先輩の心が折れる音が聞こえた気がする。

その証拠に、冷たい沈黙が訪れた。

この沈黙を破ったのは以外にも桜夜先輩だった。

「ふう、そうだな。銃なら私の出番ではない。清王くん、任せたぞ」

軽く微笑してから、見失っていた己を取り戻した様子の桜夜先輩。

そして、しっかりとした足取りで俺たちのいる所まで帰還してきた。

「お疲れ様です。桜夜先輩」

「ああ、ありがとう。中沢くん」

受け答えも出来ているので正常のようだ。

だが、その深奥は計り知れない。

「桜夜先輩、少し休んでいてください。雷切は俺が持ってますから」

「本当か？ 面目ない」

俺は桜夜先輩を休ませる事にした。

疲れも己を乱す原因かもしれない。

だけど、桜夜先輩が乱したのは火起こしが原因ではない気がする。

「さあ、翠華ちゃんの出番だね！」

美唯が送り出すように清王さんの背中を押す。

いや、押すと言うより叩くの方が正しいかも知れない。

バシン！という鈍い音が聞こえてきた。

「……………」

清王さんも痛かったのか、表情を強張らせる。

さすがの清王さんにも堪える一撃なのか…………。

それを俺は…………毎日喰らっていたんだよな。

急に自分の身体が心配になってきた。

「頑張れ翠華ちゃん！」

月守さんも清王さんを後押しする。

「期待してるぞ」

ガイも期待の眼差しを向ける。

なんだが、桜夜先輩の時とは違ってみんな期待している気がする。

一方、その当人は、

「頑張ってくれ清王くん！ 私の無念を晴らしてくれ！」

全員に強く想いを託された清王さんは、心ならずも少女の所へ向かって行った。

「良く来たねえお姉ちゃん。さあらは嬉しいよ」

満面の笑みを浮かべて清王さんを迎え入れる少女。だがその反面、清王さんは不快そうな表情をする。

「座興はいい……何をすればいいの？」

「お姉ちゃん、ノリ悪いい〜！」

「……………」

少女の子供のような態度を見ると、清王さんは更に露骨に不快そうな顔を作った。

その表情を見た少女も露骨に不思議そうな表情をする。

「あれ？ もしかしてお姉ちゃん……さあらのこと嫌い？」

「愚問………空気で解からない？」

呆れた清王さんの顔を見て、少女は大袈裟に笑った。

「きゃははははは！　じゃあ〜親交を深める為に火起こしやっちゃおうか！」

「…………別に前と親交を深める気はない。それより早く…………」

清王さんの額には多少、汗が滲んでいた。  
なんでだろう？

気温も暑くないし、逆に寒いぐらいだ。

清王さんが動揺するような事でもあったのだろうか？

「そんな事言うからお姉ちゃんも友達少ないんだよ？」

一瞬、肩を強張らせた清王さん。

「べ、別にお前に関係なんかない…………それより…………」

随分と声がか細くなってしまった。

その証拠に最後の言葉は俺の耳には届かなかった。

「きゃははははは！　だいじょ〜ぶだよお姉ちゃん！　お姉ちゃんはずっごく可愛いから、さあらの言う通りにすればホイホイ…………」

その時、少女の声を掻き消すような清王さんの声が聞こえた。

「早く火起こを！　このままだと餓死するッ！！！」

誰もがその声に耳を疑った。

清王さんの言語に感嘆符が付いた…………！

つてかその前に……が、餓死する……？

全員、何も物も言えない沈黙が訪れた。

その沈黙が続くにつれて、清王さんの頬は次第に高潮して行く……。

まずい……あまりにも可哀想だ。

清王さんは自分の危機を赤裸々に叫んだだけなのに……。

その瞬間、妙な指令感が頭の中をグルグル廻った。

俺がどうにかしないと……！

何も考えもなく、俺は行動に出る　！

「うおおおおおおおッ！！！！！！　お腹空いて来たぞおッ！

！！　早く火起こししてご飯にしようッ！！！！」

終始、最高に恥ずかしかった。

次は俺に対する沈黙が続く……。

なるほど……これは心身に堪える沈黙だ。

清王さんの気持ちが良い理解出来た。

「じゅ、じゅん……？　いきなりどうしたの……？」

美唯が不可解なモノを視るように、俺に正当なツツコミを入れる。

お前なら解かるはずだ……！　俺がこんな羞恥を犯してまで何故し

たのか！

そう……！　清王さんを救う為だ。

次は美唯、お前がやるんだ。

そうしなくては清王さんを救えない！

全員が二の舞になるんだ！



……という熱情を込めたアイコンタクトを美唯へ送る。  
俺のコンタクトを理解して受け取ってくれた美唯は、コクリと頷いた。

「すみませんッ！ 何方か食べられる食べ物を持っている方はいませんか！ 潤がおかしくなっただんです！ 助けてくだ……」

「ちげえ よお！！！！！！」

「えええ……？」

呆けた顔で俺を見る美唯。

くそお……美唯じゃ駄目だったのか……。

桜夜先輩ならこの場を的確に把握しているはずだ！

俺は腰を下ろして休憩している桜夜先輩にアイコンタクトを送る。

「そんな卑しい眼で視ないでくれ。即席な物は何も……」

「だから違いますよおッ！！！！」

俺は思わず頭を抱えた。

いや、的は清王さんから外れた。

これはある意味……助けられたのか？

そう悟った俺は、地面にゆっくりと正面から倒れた。

現実逃避の為に……恥隠しの為に……そして、無意識に、本能的に

「じゃ、潤が倒れたあ ツ！！！！！！ しっかりしてよ潤

ッ！！！！ 私の大切にしてたお菓子あげるからあッ！！！！」

だ・か・ら・ちげえ

よおッ!!!

27話・(1) 想いの果てにあるものは (前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

27話・(1) 想いの果てにあるものは

それから俺たちは何度にも渡り無謀な火起こしを続けた。

その一つは俺が綿を持ち、俺を中心とした両者が同時に綿に向け発砲する。

二つの銃弾が綿の中で交差して、火花が散って引火。

……という少女の考えだった。

結果、綿を持っていた俺が死ぬ思いをしただけだった。

それから少女の案で火起こしは続いた。

だが、結局は全て玉砕した。

その結果、また俺による板と棒を使った原始的な火起こしが始まったのだ。

だが、俺も手馴れたものだ。

過去最高タイムで火が点き、身体の負担を最小限に抑える事が出来た。

最初からこれをすれば良かったと酷く悔恨した。

そして、かなり時間は経過したが、ようやく清王さん念願の食事が始まった。

「桜夜先輩……」

俺は手に持っている皿を見つめる。

「ん？どうしたのかね？ 遠慮せず食べたまえ」

「何でおめでたい訳でもないのに赤飯なんですか？」

皿の上に盛り付けてあるのは、薄いピンク色をしている赤飯。もちろん小豆入りだ。

「君は赤飯が嫌いなのか？」

「いや……嫌いじゃないですけど」

「ならいいじゃないか」

俺が言いたいのは好きか嫌いじゃない。

赤飯というのは、おめでたい時に食べるものじゃないのか？  
そんな事を思っていると、「いただきます」という声が聞こえ始める。

その中でも餓死宣言をした清王さんは無心で食べている。

いつもクールな清王さんが、無心で食べているのを視て俺は気付いた。

この世界でこうやって食べ物を食べれる事態がおめでたい事かもな……。

俺は小さく微笑してから、赤飯を頂いた。

「星見郷くん。君はこれからどうするつもりだ？」

俺たちは焚き火を囲むように座り、桜夜先輩の一声で話し合いが始まった。

それは少女の是非。

そして、その少女は自ら率先して俺の隣に座っていた。

「どうするって決まってるよお！ お兄ちゃんと一緒にいる！」

そう言っただけ少女は俺の腕に巻き付くように抱きつく。

どう対処していいか迷ったが、とりあえず全力で脳天にチョップをお見舞いした。

「いたあ~~~~いッ!!!」

頭を抱え込む少女。

まあ、全力だからしょうがないか。

「今ので本格的に記憶が全部飛んだあ！」

そういえばこの少女、記憶喪失ではないが記憶がごちゃ混ぜだったんだよな……。

まあ、何でも叩けば直る世の中なんだから少女の記憶も叩けば直るんじゃないか？

……それは昔の話か。

今はIC制御の精密機械だもんな。

そういえば、昔のテレビはブラウン管だったから叩く所があったが、今は液晶の時代だ。

一体、どこを叩けば直るのだろうか？

……その前にメーカー保障があるのか。

「安心しろ。叩けば直る！」

「それは昔の話だよお！ それに、さあらは機械じゃなくいつ！」「  
「そうなのか？ 俺は良くみゆ……どっかの誰か様に殴られた痛み  
を痛みて緩和されてたぞ？」

その瞬間、傍らから背筋が凍る程の鋭い視線を感じた。  
美唯の事を語っているのが摩られたようだ。  
まあ、明らかに美唯って口走ったからしょうがないか。

「別に美唯、お前の事じゃないから安心していいぞ」

「へえ〜じゃ、どっかの誰か様って誰のこと？」

まさに一触即発の笑顔だ。  
これは全力で回避しないと。

「ああ、俺だよ。俺は自分自身を痛みつけるのが止められないのさ」  
「絶対に違うでしょッ！ その前にそれ病んでるよッ！」

「大丈夫だよお兄ちゃん！ さあらが付きっきりで看護してあげる  
よ！」

「いや、お前が付きっきりで看護したら理性が劣等化しそうだから  
遠慮するよ」

「えええ〜！ お兄ちゃんのさあらのイメージってどんななのッ  
!？」

「その前に自分自身を痛みつけるのが止められない時点で理性は劣等化してるでしょ？」

「……………」

美唯の正当な言葉に、言葉を失った。

俺たちの意味のない談笑を見ていた桜夜先輩はクスツと微笑した。そして、口を開いた。

「では改めて自己紹介をして貰おうか。星見郷くん」

「えええ？」

突然の事で聞き返す少女。

「君の記憶がどこまで有るか、その確かめにもなるからな」

桜夜先輩は笑顔を返す。

ああ、この笑顔は頼まれたら断れない類の笑顔だ。邪気など何もなく、真摯がこもっている。

「うーん」

少女は首を傾げ、考え込む。

想っている事を言葉に出来なさそうなもどかしい表情だ。

「記憶は薄っすらと覚えてるんだけど、この記憶が本物じゃない気がするの。もちろん本物だと思う記憶もあるけど」



少女の口語から陽気さが消え、深奥な境地になる。  
その言葉に桜夜先輩も考え込む。

「記憶喪失ではなく、記憶を書き換えられた……いや、後付された記憶かもしれない」

「どっちかというと後付けが正しいかな。小学校低学年ぐらいの記憶は本物だと思うんだけど……うう、何て言えばいいんだろう。それからは本物じゃないというか……」

少女は額を押さえつける。  
すると、直ぐに表情を歪ませた。

「いたあツ!？」

「星見郷くんツ!？ 大丈夫か？」

「じ、ごめんお姉ちゃん……えへへ、無理に思い出すとすると」  
うやうやと頭が痛むんだよねえ……」

無理に笑顔を作る少女。

余程の激痛だったのか、額からは冷や汗が流れていた。

「無理な事を言っすまなかつた」

「お姉ちゃんが謝る必要なんてないよお、ありがとう」

少女は、小学校低学年の記憶は薄っすらだが覚えている。

だが、ある時点から記憶が後付けされている。

という事だろう。

それがどうしてなのか？ なぜなのか？  
解かる術はないというのか……。

だが、一つだけ解かる事がある。

この少女は普通じゃない。

俺はあの時を回想する。

少女は美唯を護ろうとした俺を殺さなかった。

それは少女の記憶に何か関係している。

『さあらはアイツ等とは違う……！ 絶対に違うっ！！！！』  
この少女の言葉は本能から出た言葉だろう。

「ああ、そうだった忘れてた」

少女は照れ笑いをして立ち上がり、俺たちの正面に立った。

ああ、ちよつと考え過ぎてたな……。

俺は一区切りをつける為に、ブルブルと首を振った。

「桜凜武装高校1年総合科Aランク『星見郷さあら』称号『加護の  
アグライア』お兄ちゃん！ よろしくね」

「星見郷くん、中沢くんだけに自己紹介をするんじゃない」

「えええッ!？」

「……なぜそこで絶叫するのかね？」

「一年生のくせに小生意気な!」

「月守くん。君も一年じゃなかったのか？」

俺はその光景を眺めていたら、傍らの美唯が優しく囁いた。

「また賑やかになったね」

「そうだな。この明るさは絶対に見失っちゃ駄目だ。これがこの世界を壊す為の何より大切なものかもしれない」

俺はそのまま、流れるように清王さんを見る。

「……何か用？」

「いや、なんでもない」

少し膨れっ面になる清王さん。

清王さんはクールだから清王さんなのか。

明るい清王さんなんて想像も出来ない。

いや、案外面白いかもしれない。

あとで矯正してみよう。

その後も俺たちは寝るまでの時間、賑やかに騒ぎ合っていた。

27話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

27話・(2)

9月6日

「お兄ちゃん！ 朝だよお！」

永久とこしえの旅路に出ている俺の意識を、無理やり呼び戻そうとする声が聞こえる。

だが、その声も過ぎ去る旅路の景色のように上塗りされ消えていった。

「ちょっと！ 潤を起こすのは幼馴染である私の仕事なんだから邪魔しないですよ！」

「そんなの関係ないよお！ 今日からさあらがお兄ちゃんのお目覚め係い！」

身体が左右に揺れている。

もちろん俺が自ら動いている訳ではない。外部からだ。

「ああ〜！ なるほどお！ お兄ちゃんはさあらのお目覚めのチュウが欲しいんだねえ！」

「ええ？ ちょッ！ そんなの私でもしたことないのに！」

俺の上半身に自然のものとは思えない重力を感じる。

いや、物体か？

温もりがあつて柔らかい……まるで人間のようだ。  
ん……？ 人間？

「チューが欲しいなら直接言えばいいのに！ お兄ちゃんったら  
恥ずかしがり屋だなあ〜！」

「や、やめっ！……！」

何かが頬に接近してくる、妙な圧迫感に襲われる。

だから俺は本能的に左眼が見開き、結界でそれを弾き飛ばした。

「うぎゃあああッ！？」

眼を覚まして一番に眼に入った光景は  
星見郷さあらが俺の結界によって弾き飛ばされ、宙を舞っている光  
景だった。

「潤、おはよう！」

爽やかな美唯の挨拶が聞こえる。

いつになつても一日の始まりは美唯の声からだな。

「ああ、おはよう」

挨拶を返した瞬間、約10メートル先からドスツと何かが落ちてき  
たような鈍い音が聞こえた。

そんな音に振り向きもせず、俺は大きな欠伸をする。

盛大な欠伸をしている中、何かが落ちてきた方から声が聞こえてき  
た。

「……誅伐！」

「ええッ!? 違うんだって翠華お姉ちゃん! お姉ちゃんの真上に空から好意的に堕ちれる訳ないよ! 確かにお姉ちゃんがクツシヨンになったお陰でさあらは無傷だったけど、あれはお兄ちゃんがあ……」

「そんな詭弁どうでもいい。 誅伐ッ！」

「うぎゃああッ!? 朝から発砲しないでよう! 当たっちゃうよあ!?!」

「愚問。 当てないと誅伐にならない」

「痛い痛い痛い! うぎゃああああ ツ!?!」

なんか清王さんと星見郷は朝から元気いいな。  
いや、なんかすごい事になってないか?  
銃声も聞こえるんだが……まあ、俺には関係ないか。

「あはははは、潤すごい寝癖だよ?」

美唯が俺の頭を指差し、優しく微笑む。

「お前だつて全部の髪が逆立ってるぞ?」

「そ、そんな訳ないでしょッ!」

言葉で否定をするが、美唯は頭を直接触って己の形状を確かめる。

何だかんだ言って美唯は俺の言う事を確かめるよな。  
逆立ってるなんてすごい感覚が生じるはずだから解るだろ？

ふと視線を奪われたその先では、桜夜先輩が今日も元気に鍛錬をしていた。

……あの人は寝ているのだろうか？

しかし、鍛錬と言うものはいつ見ても昆虫の求愛行動にしか見えな  
い。

それか、民族の儀式……。

桜夜先輩の周りを見渡すと、狙撃銃のメンテナンスをしているガイ。  
星見郷を誅伐している清王さん。

そして、……寝ている月守さん。

俺と美唯から始まった仲間の輪も、いつの間にか大きくなったもの  
だ。

寝ている月守さんを起こそうと思った瞬時、桜夜先輩がゆっくりと  
千鳥の刃先を天に向けた。

「刻限だ」

柄に力を込めた刹那、一閃の電光が生じる。

これはまさか恒例と化しているあの起こし方だろうか？

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び、生ずことを請う」

そして、一波二波と電流が流れ始めた。

それと同時に、俺を含む全員が両耳を塞ぐ。

「今、此处に雷魂を開放する」



呪を唱え終わると、天地を揺るがすような雷音が響く。耳を塞いでいても圧迫されそうだ……。

「立花道雪、雷切」

既に桜夜先輩の声は雷音で掻き消されている。そんな中、確かに聞こえる声があった。

「ぎゃあああああああッ！！！！！！」

月守さんはオリンピック選手並みの速さで上体を起こし、反射的に両耳を押さえる。

お年寄りなら比喩なしで心臓止まっていただろう。いや、月守さんも一瞬止まっていたかも知れない。

「おはよう月守くん。今日も良い目覚めで何よりだ」

「沙耶先輩……！！いつも目覚ましが強烈過ぎますよ！もうちょっと優しく起こして下さい！」

「これでも今日は雷音を下げた方なのだが……」

「そついつ問題じゃないですッ！！！！」

いつも通り多事の朝がこうして過ぎようとしていた。

「今日こそこの異世界から脱するぞ」

朝ご飯を食べ終わったと同時にそう強く唱える桜夜先輩。

そういえば、異世界に堕ちて今日は何日目だろう？

異世界に堕ちた日は9月1日。確か今日は9月の……6日だった  
だろうか。

火起こしの数を数えれば、自ずと何日か解る。

随分と長い間いたような体感はあるが、一週間も経ってないんだな  
……。

つまり、桜夜先輩たちと出会ってから一週間も経ってないという事  
か。

まったくそんな感じはしないな……。

「そうですね。一刻も早くこの異世界を終わらせましょう」

俺がそう言うと、いつも肌に触れるぐらい近くにいる星見郷は、

「ちよつと待ってよお！ さあらはこの世界の事なんも知らないん  
だよお!？」

いつも通りのアニメ声は変わらず、常にハイテンションの星見郷。

……星見郷もこの世界の事を知らないのか。

すると、桜夜先輩が警告にも似た声で、

「知る覚悟は在るか？」

桜夜先輩の気迫に喉を鳴らす星見郷。

それから少し俯き、自分自身と対話をする。

この世界を知るべきなのか知らないべきか。

「……教えて」

星見郷は真剣な眼差しを桜夜先輩へ送る。

その青く澄んだ瞳に命じて、桜夜先輩は語りだした。

そういえば、サファイアのように青く澄んだ星見郷の眼……。どこかで見覚えがあった。

「解った。仲間として私たちの知っている全てを話そう」

この世界は異世界であること、そしてこの世界で起こっている狂気を、俺たちの知っている全てを桜夜先輩は話した。

「ここは……そんな酷い世界だったんだあ……」

星見郷から陽気さは消え、真摯さだけが残る。

まだ見ぬ一面に、俺は少しばかり驚いた。

「だから……この世界が故郷みたいに居心地良く感じるさあらは最低かも知れないねえ」

星見郷の言葉を誰もが理解出来なかった。

それが言葉通りの意味だとするなら、星見郷さあらは一体何者なんだ？

こんな世界を故郷みたいに居心地良く感じるはずがない。

だが、桜夜先輩は寒い眼も冷たい眼もしてなかった。

「星見郷くんの記憶は曖昧だ。この世界と記憶がどこか関係しているかも知れない」

世界と記憶。

この言葉で俺はある少女を思い出した。

それは、桜凜武装高校で出会った「架瀬セナ」

彼女の場合、数日間……約一週間の記憶が消えていた。

異世界に堕ちたのも約一週間前。

理由は一片も解らないが、架瀬セナの記憶が消えた原因はこの異世界と関係しているだろう。

なら星見郷もこの世界と何か関係が……？

思い返せば、架瀬さんの瞳と星見郷の瞳……二人ともサファイアのように青く澄んだ、似た眼をしている。

「さ、さあらの記憶とこの世界が関係してる……？」

「確証はない。だが、その可能性もあるという事だ。その場合は……」

……

桜夜先輩の深奥な眼で、希望を託すように星見郷を視る。

「君がこの世界の鍵になるかもしれない」

「さあらがこの世界の鍵……！？」

眼を見開き、桜夜先輩の言葉に驚愕する星見郷。

「もしそうなら、この異世界を脱する事も壊す事も星見郷くんなら……」

「そうはさせないぞっ！！！！」

桜夜先輩の言葉を掻き消すように、天空から声が聞こえた　　！？  
反射的に俺たちは天空を見上げる。

その先には　　少女の人影。

宝石みたく輝く長い青黒髪は、全ての風が彼女を包み込むように華麗に舞い上がらせていた。

空から来た少女が地面に着いた時、殺気とも取れる強い風が吹き乱れた。

スウッと視線を上げ、俺たちを睨みつける。  
反射的に結界を造ろうと左眼を見開こうとするが、何かに縛られているように俺たちは微動だに出来なかった。

圧倒的な存在感。

自分自身、生きているという事も解らなくなる。

その証拠を掴む為に、俺はただその少女を見つめる。  
いや、誰もが見る事しか出来なかった。

彼女が一步踏み出す。

聞こえる筈の足音は、操られたような風の渦に霧散して行った。

また一步踏み出す。　　そしてまた一步。

「だ、誰だ貴様はッ！！！」

これは何かの術か！？

俺の身体はまったく動かず、出そうとする言葉は沈んで消えていく。その中でも、桜夜先輩だけが言葉を発せられた。

「ほお、<sup>それがし</sup>某の術を破るとは」

桜夜先輩の言葉に立ち止まった少女。

だが、感心は示唆していても、その表情は無表情のまま。

この少女……今まで戦って来た人たちとは何もかも違う……！  
桜夜先輩が圧されているなんて……！

「だが無駄じゃ、お主等に某は倒せない。破ったのは所詮言霊だけじゃ」

その言葉で魂に火が点いた桜夜先輩は、

「な、なめるなあ　　ッ！！！」

微動だにしない身体を桜夜先輩は無理やり動かす。

表情は痛さで歪み、剣を握る為に動かした右腕は細かく痙攣している。

それでも、動かされた程度だ。

「この世に滅せぬものなどない。この世界が永遠ではないように、滅せぬものなど存在しないッ！！！」

そう強く唱えた桜夜先輩から何かが解き放たれた　　！

その瞬間、俺たちの動きを封じていた呪縛も解け、動きを取り戻す。

桜夜先輩は機敏に千鳥を鞘から抜き、両手でしっかりと構える。武器は腰に差してある刀だろうが、少女は一方に構えようとしない。

俺も出来る限りの事はする……！！  
身体の動きを確かめる為に、何度も指を開いては閉じるを繰り返した。

大丈夫だ……いつも通り動く。これなら結界も……！！

「某の術を全て破ったか。少しは骨があるようじゃな」

「私は剣を握って戦いに敗れたことは一度もない」

桜夜先輩は刃先を少女へ向ける。

その桜夜先輩の眼光は寒心するほどのもの。

なのに少女は己を保っている。いや、それどころか睨み返している。一触即発とはこの事だろう。

「退け、私たちに戦う理由はない」

その桜夜先輩の言葉に、少しだけ少女に感情が入った。

「戦う理由ならある。某はこの世界を護衛する者。某を邪魔するものは斬る」

「この世界を護衛だと……？ 痴れ事もいい加減にしたまえッ！！」

今にも飛び掛りそうな桜夜先輩。

この少女は……この世界を護衛する者だと？

一体、何の為に？俺には狂気としか思えない。

「この世界は某が死守する。絶対にじゃ」

その瞬間、不意に美唯が夢遊病患者のように少女に向かってゆっくりと歩き出す　！？

「み、美唯ッ！？」

俺の叫びにも一切反応しない……。

何考えてんだよ美唯ッ！

あの少女に向かってく何て狂気過ぎるだろ　　ッ！？

美唯を止める為に俺は駆け出した　　！

「美唯、止まれえ！！！」

俺は美唯の肩を掴み、強引に止める。

幸い少女と美唯の距離が離れていた為、ゆっくりと歩く美唯に間に合った。

まさかあの少女に……操られているのか？

美唯がこんな失態をするはずがない。

「美唯、大丈夫か？」

俺の言葉にも一切反応せず、美唯はずっと視線を落としたまま立ち尽くし、身体は小刻みに震えている。

そして、美唯は一気に視線を上げ、あの少女を視て叫んだ。

「あすかあああああッ！！！！！！！」





9月1日 / 沙耶eyes

変わり行く世界(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls aspects  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、  
君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

此処は桜凜武装高校。

そこは、凶悪な犯罪、テロ、紛争、などに対抗するためにつくられた高校。

そして、私が通う高校でもある。

今日も訓練をする。

訓練は模擬刀で行う。

いつものように。

そして、今日の訓練も終わり、私は自分の寮へ戻った。

私達の学校は海を埋め立てし、島のようなところに作られている。

そのため、全寮制。

だから帰宅する所は寮。

私は部屋に帰るなり、自分の刀の手入れをする。

まず、愛刀の千鳥。

刀の刃に鏡のように、自分の顔が浮かんだ。

寮は二人部屋。

私以外にも一人いる。

『ガチャ！』

ドアが開く音がした。  
帰ってきたのだろうか。

「やっぱり……」

璃桜が入ってきた。

彼女の名前は『つひね 璃桜』

私とは中学からの盟友。

なぜか、高校も同じ。

そして、いきなり璃桜はため息をする。

「ん？ なにかあったのかね？」

刀の手入れをしながら、事情を聞く。

「今、全校集会やってる」

「ん……？」

何が言いたいのかが掴めなかった。  
全校集会？

「刀の手入れなんてしてる場合じゃないッ！ 全校集会でないの!？」

なんと！

どうやら今、全校集会が行われているらしい。  
聞いてないぞ！

「聞いてないぞ？」

「いいから、行くぞ！」

しかし、刀の手入れの途中。

こんな中途半端で止めてしまえば、千鳥に申し訳ない。

「まあ、待ちたまえ。手入れが終われば行く」

「沙耶の手入れは1時間以上かかるだろ！？」

確かに、一時間が必要。

そのぐらいやらなければ、愛刀達に申し訳ない。

私はそう思う。

「そうだが？」

「桜凜武装高校の校則第2条っ！校則には絶対に従う！」

璃桜はいきなり、第2条を唱え始める。

だが、私は校則を守るような優等生でもない。

「私が違反したのは今に始まった訳でもあるまい」

私は刀の手入れを優先する。

明らかに刀の方が重要性が高い。

「ハア~~~~」

璃桜は大袈裟にため息をつく。  
私は手入れに夢中。  
もう誰にも止められないさ。

「じゃあ、行かないのねっ!？」

「ああ、もちろんとも」

当たり前のようにそういった。  
学校の行事なんて興味はない。

「すまないが、集会の内容を後で聞かせてくれ」

「……………」

璃桜があきれたような表情をする。  
いや、しているのだろう。

「ん？何か気に触れたか？触れたなら謝るが……………」

私は何をした？

なにか気に触れてしまったのだろうか？

「何も気にも触れてない、呆れただけ」

「そうか、なら早く行った方がいいぞ？」

璃桜は参加する模様。

私は参加する気はないのだが、璃桜の場合は早く行かないと遅刻は免れない。

「わかった、了解」

璃桜が部屋から出て行く。  
集会場所に行ったようだ。

これで、落ち着いて手入れができる。

千鳥の手入れは終わりだ。  
次……。

私は、三日月宗近を前にだす。

これは、天下五剣の一つ。

私が持っていて良いのだろうか？

そう思うほど、その刀は美しい。

この刀は太平洋戦争後に徳川家から桜夜家に渡った。

しかし、本当に美しい刀だ。

私が入れしても良いのだろうか？

そう思いながらも手入れをする。

『ガチャ！』

ドアが開く音がした。  
だが、今の私は無心。

「ハアハアハア……」

璃桜が息を切らしている。

そこまで、急ぐ必要はないというのに……。  
それにしても随分と短い集会だったようだな。

「どうしたのかね息を荒くして？それと随分と早かったな」

時間が経過するのが速く感じたのか、本当に璃桜が早かったのどちらだろう。

いや、両方かもしれない。

「まだ、手入れをやっていたのね……」

「当然だ」

私は手入れを続ける。

しかし、三日月宗近は本当に美しい。  
思わず見とれてしまう。

「悪いが内容を聞かせて貰えないだろうか？」

璃桜に話しかける。

だが、眼は刀の方。



話の内容なんて、はつきりどうでもいいことだ。だが、一応は理解しておかなければな……。こう見えても武装高校の生徒だ。

「集会に遅れた」

璃桜は短く吐息を漏らす。だから早かったのか……。

「だから早く行けと……」

「沙耶のせいでしょうが！」

な！何故私のせいなのだ！？行かなかったのは璃桜の方だぞ！

「何を失礼な真似を！私が何をした？」

「……まあ、いいや……」

璃桜が近くの椅子に座る。

集会とは言っても、そんなに大した話でもないだろう。少なくとも、私には関係のない話だ。

「戦術科から命令を受けた」

戦術科。

それは、司令塔のようなもの。

その戦術科がだした命令、作戦、指令、などには従わなければならない。

それも、校則の決まりの一つなのだ。

「ほお、何かな？」

最近は凶悪な犯罪などは起こってはいないはず。  
だとしたら、何だろう。

いや、私が知らない間に事件が起こってるかもしれない。

「全校生徒への指令」

「随分と大規模な指令だな」

普通は科などによって、命令が違う。

何か事件などがあつたときは、その事件に相応しい科が出動する。

しかし、今回は全校生徒。  
こんなのは初めてだ。

「命令内容はなになにかな？」

刀を手入れしながら聞く。

もちろん眼は刀。

「桜凛高校の全生徒の殺害」

.....。

私は手入れを中断し、璃桜の方をゆっくりと向く。

「璃桜？ついに頭がおかしくなってしまったのか？前々から思っ  
ていたが.....」

なんだ……？その狂気な命令は？  
璃桜の冗談か？璃桜も悪趣味に目覚めたものだな……。  
それとも、私の聞き間違いか？  
この耳の良い私が……。

「嘘じゃない。本当」

私はその場を立った。

これは璃桜の頭の問題だ。

こんな命令、在るはずがない。

「沙耶？」

立ち上がった私に璃桜が呼びかけた。

早く璃桜を救わなければ……。

「まあ、待っている。すぐに助けてやろう」

私はタウンページを持ってきた。

もとの場所に座り、そして『せ』の行を見る。

「なにしているの？」

璃桜が私に近づき、黄色の分厚い本の中身を見る。

「こういう時にタウンページが便利なんだぞ。……精神外科は……  
と……」

その言葉を発した瞬間、璃桜が唐突にタウンページを荒く力任せに

奪って行った。

「な、何をする璃桜っ！？私はお前を……」

私はタウンページを持っている璃桜の方を見た。

私は盟友を救いたいのだが、この想いは璃桜に届かなかったようだ。

「精神外科なんて行かないっ！行く必要もないっ！私は正常っ！」

本当なのだろうか？

色々と問題がある気がするが……。

「では、本当の命令を教えて貰おうか」

真剣な眼差しで璃桜を見つめる。

この状況下なら、嘘は言えないだろう。

ふざけた事をまた言うようなら、本気で教育をしてやるっ。

「桜凜高校の全生徒の殺害」

だが、璃桜は即答する。

『桜凜高校の全生徒の殺害』と。

「それはさっきほど聞いたぞ？」

私の口語も鋭くなる。

こんな状況下でも璃桜は先ほどと同じ事を言った。

「それが命令っ！」

璃桜の口調も鋭くなる。

頭が真っ白になる。訳がわからない。

璃桜とは長い付き合いだ。

今の璃桜の顔は本気だ……。

それに、璃桜自体嘘を言うような人じゃない。

「私も”誰かさん”のせいで遅れたから、話の最後しか聞けなかったけど」

璃桜は”誰かさ”を異常に強調する。

嫌味たらしく。

「そのふざけた奴は誰だ！お上に代わって成敗致す！」

私は鞘から千鳥を出し、柄を握る。

「切腹でもしてくれるの？」

やはり璃桜の頭がおかしいのか……？

何故私が自決しなければいけない？

「ん？なぜ私が自決するのだ？」

「そのふざけた奴って沙耶でしょうー！」

もう璃桜は駄目かもしれない。

最期ぐらいは見届けてあげよう。

友として。

そう軽く受け止めるが、どうも冗談として受け止められない。  
先に璃桜が見せた本気の表情が頭から離れないのだ。  
話の内容を変えれば、璃桜が「嘘だ」と言ってくれと思った。  
だが、空気は張り詰めたままだった。

「……………」

私は黙って、千鳥を鞘に戻した。

……………。

私は黙して璃桜の目を視続ける。

だが、璃桜は決して目を逸らそうとはしなかった。  
その璃桜の表情に、私が逆に汗を流しそうだ。

果たしてその命令は本当なのだろうか？

考えもしなかったことを考える。

その命令は疑ってしまふような内容だった。  
今の私は、99.9パーセント信じていない。

「本当なら詳しく教えて貰おうか」

私は真剣に璃桜と向き合う。

果たして、どちらが狂っているのか。  
はっきりさそようじゃないか。

「この世界は異世界らしい」

異世界…………？此処が？

何を根拠に……？

『らしい』ということは、誰かから聞いた事なんだろう。つまりはあの集会で聞いた話ということか……。

「いつも通りの世界だが？」

周りはいつも通り。

何が異世界なのだろうか？

今までと、『まったく変わらない』

「電気が使えないの」

「電気が使えない？」

ということはまさかっ！？

私は鞘から千鳥を右手で出し、千鳥を前に突き出した。

そして、呪を唱える。

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び生ずことを請う」

呪を唱えると、

千鳥の刃には、電流が走る。

「今、此処に雷魂を開放する！！」

そして、千鳥が大きく帯電し始めた。

「立花道雪！雷切！！」

雷切を振り降ろした。

そして、璃桜の方を見る。

「使えるじゃないか」

雷切の刃には、電気が帯電している。

璃桜が言う、電気が使えないというのは黒だ。

「そうじゃなくて、人間の手で作られた電力は使えないの」

人間の手？

確かに雷切には『雷魂』が宿っている。  
だから使えるのか？

「携帯を開いてみて」

ケイタイ？

ああ、あの小さい四角形か……。  
まったく使わないから、馴染みもない言葉だ。

「形体か……」

「形体じゃなくて携帯。けいたい違い」

私は使い慣れていない携帯を探し始めた。  
はて、どこにしまったのだろうか？



……。……。

おお！こんな所に！

そのケイタイは埃が被っていた。  
使っていない証だ。

私は携帯を開ける。  
が、何も映らない。

「何も映らないぞ？」

黒い画面が永遠に続く。

ケイタイというのは、こんなにもつまらない物なのか……。

「そう、電力が使えないから何も映らないの。沙耶のはバッテリー切れかもしれないけど……。」

私は右手に握られている雷切を見る。  
その雷切の刃は大きく帯電している。

「いや、使えるぞ？」

雷切を璃桜に見せる。

「だから！それは別なの！」

???????

雷切が別？

なんだか雷切を侮辱しているように聞こえる。

「もっと、わかりやすく説明してくれ」

意味が全然わからなかった。

核心を掴めない。

思考が空回りしてばかりだ。

璃桜は電力を使えないという。

だが、電力は使える。

「つまり、人が作った電力は使えなくて、桜凜武装高校と桜凜高校の生徒しかいないってこと。私も信じられないけど、事実みたい」

桜凜武装高校と桜凜高校の生徒しかいない？

それは初耳だった。

それを信じるといえるのか？

璃桜が部屋の明かりのスイッチを押す。

だが、明かりはつかない。

「なるほどな……」

本当に電力使えないようだな……。

「停電ではないのか？」

私の言葉を聞き、璃桜は自分のポケットに手を入れる。

そして璃桜は携帯らしき物体を取り出し、開いてみせた。

「ほら、停電で携帯が映らないなんてありえないでしょ？」

璃桜の携帯も永遠に黒が続く。

気が付けば、私の額からは薄っすらと冷汗が滲んでいた。

電気が使えないと言っつのは白だ。

後は人がいるかどうかだ。

「後、もう射撃科の一部が桜凜高校へ命令を遂行するため、派遣されたらしい」

「……………」

私はその場を立ち上がった。

そして、部屋から出る。

「沙耶！？何処行くの！？」

璃桜が呼び止める。

だが、私は振り返らなかった。

「真実を視てくる」

そう言い残して、私は桜凜武装高校から出た。

こうして私は桜凜高校の方へ走って行った。

「あまりにも狂気過ぎる……………。もし璃桜の言う事が本当なら、もし

本当に”桜凜高校の全生徒の殺害”という狂気な命令が出されたの  
なら……私は……！！！！」

―能力、武器等の詳細―

桜夜 沙耶(さくらよ さや) : (女)

彼女は日本刀を三振所持している。

―振は彼女の愛刀の「立花道雪・千鳥」

この千鳥は呪を唱えれば、

雷が刀に走り「雷切」となる。

千鳥には、自然魂の雷魂が宿っている。

次の一振は「三条宗近：三日月宗近」

非常に美しい刀。

この刀には、とても神秘的な力が宿されている。

奥義は「斬月」

最後の―振は「桜夜 飛龍：神刀 神切」

代々、桜夜家に伝われし神刀。

神を切つたと言われている。

この刀には、神の力が宿っている。

そのため、使いこなせるのは、桜夜 飛龍ただ一人。

彼女もこの刀を使いこなせない。

桜夜家の血が流れていない者が神切の柄を握ると、拒絶反応が起り、

使い手が死ぬ。

誰でも、神力を解放すれば拒絶反応が起り、死に至る。

だが、桜夜 飛龍は神切の力を使いこなしていた。



9月1日/璃桜eyes      Instruction(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls' aspects  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、  
君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「わかった、了解」

沙耶は刀の手入れに夢中だから、  
私は一人で集会に行くことにした。

寮の中には誰もいなかった。  
皆、集会に行ったのだろう。

でも、放送ぐらいかけても良いと思う。

そう思いながら集会の場所、体育館へ……。

体育館の入り口の扉は閉まっていた。  
完璧に遅刻だ。

まったく……全部沙耶のせいだ……。

あまり注目を浴びないように、ゆっくりとドアを開ける。

『ガチャ……』

音を立てないように入った。  
全校はそれぞれの科に整列している。  
私は現代剣術科。

ゆっくりと後ろにつく。



「全校生徒に指令だ！桜凛高校の全生徒の殺害せよっ！！」

「ッ！？」

来たばかりなのに、いきなりステージの上に立っている男は命令をする。

命令をすると言うことは戦術科か……。

つて！朝倉か！？

その前に！何だ！その命令は！

私は耳を疑った。

途中から来た私は理解が出来なかった。

「今、我々は異世界にいる！しかも電気も使えない！それに人間もいない！」

今までは何を話していたのだろうか？

異世界？電気が使えない？人間がいない？

そういえば、体育館が暗い。

普通は電気をつけるのに……。

果たして、本当にこの朝倉の言うことは正しいのだろうか？  
そんな筈がない。ただバカなだけだ。いつものお遊びだ。

「早くこんな異世界から、脱出しようではないか！！」

……。。。。。。

話が掴めない。

命令、指令が、”桜凛高校の全生徒の殺害”

朝倉は何を言っているのだろうか？

冗談にしては性質たちが悪い。

「では早速、射撃科の諸君」

ステージに立っている、朝倉は狙撃科の方を見る。

「Gランクの諸君に桜凛高校、全生徒の殺害を命令するっ！」

いきなりの実行命令。

本当にそれでいいのか！？

だが、途中で来た私は過程をしらない。

ちゃんとした理由があるのかもしれない。

だけど……、こんな命令……。

「それでは！解散！諸君の健闘を祈る」

私は携帯を開く。

何も映らない。

やっぱり電気は使えない……。。

まず、このことを沙耶に伝えないと……。

これはとんでもないことになった……。。

私は沙耶の所へ走って行った。



9月1日 / 璃桜eyes      I n s t r u c t i o n (後書き)

― 登場人物 ―

朝倉 佳紀 (あさくら よしき) : (男)

正体不明。

9月1日/侑eyes

変化(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls' aspects  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、  
君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「よし！じゃあ、学校で集合な！」

抵抗する潤を無視し、下校路につく。  
俺と菜月は幼馴染だから家が近い。  
だから、菜月とは幼馴染なのか……。  
生まれた場所を呪った。

一方で聖夜の家は学校の近く。

「何で聖夜がいるんだ？」

聖夜の家はもうとっくに通り過ぎた。  
なのに、聖夜は俺達についてくる。

「俺の家はどうせ近いから、学校に行くついででも寄れるだろう？」  
「  
とのことだ。」

学校が集合場だから、学校に行くついでに寄る。  
そっぴい意味のようだ。

「じゃあ、最初は菜月の家から寄るか」

此処から一番近いのは、菜月の家。  
まあ、俺の家も相当近いけど。

と、そのとき……。

「!!!!!!!!!!」

世界が一瞬歪んで見えた。

だが、瞬きをした間にそれは消え去った。  
すぐに元に戻った。

「え………?」

「WOW~~~~」

菜月は眼を擦りながら声を上げる。

そして、聖夜は思わず横文字が飛び出すぐらいに驚きを見せる。

「なんかさっき歪んで見えなかったか?」

俺は二人に問う。

世界が歪んで見えるなんて……。

俺の眼が悪いのかな?

いや、二人がみたなら俺の眼は正常で、おかしいのは世界になる。

「な、なんか、歪んだ……よね……?」

「あ、そうなのか? 持病のめまいかと思った」

「アンタは別に持病なんてないでしょ?」

それはともかく、二人共歪みを見たようだ。

だが、俺はこれ以上は追及しなかった。

気のせいと思い込んだ。

『世界の異常なんて、誰も疑わなかった』

そうしている間に菜月の家に着いた。

「じゃあ、玄関で待ってて！」

菜月はドアを開け、家に入る。

鍵は掛かっていない。

昔からだ。

毎日親がいるから、鍵は開けているようだ。

あばさんも鍵ぐらい閉めろよな。

無用心だな……。

そして、しばらくすると菜月が帰ってくる。

「じゃあ、行きましよう！」

菜月は鍵を持っている。

あれ？なんで鍵なんて持ってんだ？

「ん？なんで鍵持ってるんだ？」

「なんか今日は、お母さんがいないみたいだから」



おばさんがいないか……。

珍しいな……。

なら、いないなら鍵ぐらいかけるよな……。

「そうなんだ」

菜月の親がいないのか。

久しぶりに挨拶しようと思ったのに……。

まあ、今度でいいや。

「じゃあ、次は侑の家だな」

聖夜は俺の肩にポンっと手で叩く。

「そうだな」

即、家の前に着いた。

俺は鍵を開ける。

そして、ドアを開ける

「じゃあ、玄関で待っててくれ」

「オツケー！」

俺は家の中に入る。

家の中には誰もいない。

あたりまえだ。

親は仕事の都合で此処にいない。

兄さんはもう就職している。  
兄さんは俺とは3歳違い。  
今は立派な都会で働いている。  
そのため、此処にはいない。

親に着いて行くのも選択できたが、  
俺は仲間がいる此処に残った。

俺の部屋は2階。  
階段を上がり俺の部屋に行く。

「え〜〜と、今日はサバゲーだからな……」

俺はサバゲーが趣味のため、それ関係の物はいっぱいある。  
出費はバカにならないけど……。  
どうしても好きだから買っちゃうんだよな……。

「今日はコイツかな……」

俺のお気に入りエアガンを取り出す。  
これと俺の腕さえあれば、容易く勝てるだろう。  
だが、それでは少々楽しくないか。

菜月達を待たせる訳には行かない。  
俺は玄関に行った。

「準備オツケー！行こうぜ！」

「じゃあ、次は俺の家だな」

「え？聖夜の家行くの？」

「行くよ！今日サバゲーだろう！？」

聖夜もサバゲーが趣味。

俺とは色々なライバルだ。

と、コンビニが目の前にある。

「ちょっと、コンビニ行こうぜ！」

色々と準備しないとな。

サバゲーに備えて。

俺はコンビニに入ろうとする。

しかし……。

『ガコン！！』

「ぐはぁっ！？」

開くはずの自動ドアが開かず、

そのまま歩みを進めてしまった。

「アハハハッ！侷なにやってんの！？」

菜月が獣のように笑っていた。

聖夜も俺を視て笑っていた。

今の俺はすごい痛い子だろうな……。

「なんだよ！このコンビニ！営業放棄かよ！？」

このコンビニは24時間営業。

開かないことはありえない。

自動ドアの故障か！？

「自動ドアも人を見るんじゃないの？」

菜月は俺を指差しながらケラケラと笑っている。

「俺の行いが悪いつてか！？」

自動ドアも人を見るのか！？

なんらかの条件に反してた俺は、  
入店を拒否されたのか！？

「いや、ここ潰れてるんじゃない？」

聖夜はガラスを覗き込む。

確かに中は暗いし、人もいない。

「そうかもな……」

俺も納得する。

此処が潰れるなんて……。

残念だ……。

便利だったのに……。

「でも、商品はあるけど？」

菜月もガラス越しで店内を見つめる。  
俺もガラス越しで見る。

確かに、商品は並んでいる。

今日は営業してないだけなのかな？

ならせめて、ドアに注意書きぐらい書いてくれよな……。

「まあ、行こうぜ？開いてないならしかたない」

「そうだな」

俺達は歩みを進める。

ドアに直撃した所がまだ痛い……。

そして、聖夜の家に着いた。

「まあ、此処で待つてくれたまえ」

いきなりキャラを変える。

聖夜の家は結構でかい。

親がいい所にも働いてんのかな？

「早くしてくれよ」

「おおよ」

聖夜は自分の部屋に行く。

「さっきの大丈夫？」

菜月が俺のぶつかった所を見つめる。

多分この額をドアに激突したことだろう。

当たったときは、痛いし、恥ずかしいし……。

こんな屈辱は初めてだった……。

「ああ、大丈夫だ」

「そう？頑丈な身体ね」

確かに俺は身体は丈夫だ。

自信をもっていえる。

なぜなら……。

「お陰様で……」

「なんだって？」

菜月の顔が怖い。

『お陰さまで』の言い方を変えると、

『菜月がいつも暴力を振るうから、俺の身体が頑丈になったんだ！しかも、いつもチョップを受けている頭が特にな！この程度、菜月のチョップに比べれば、痛くもかゆくもないわ！この暴力女！！』

と言う意味になる。

発言したら、俺の顔が原型を留めなくなるだろう。

俺のその姿を想像するだけで寒気がする。

それを一言で表現した言葉。

それが、『お陰様で』

「いえ、なんでもありません」

俺は慌てて誤魔化す。

これで、

『へえ！この暴力女！君は暴力しかとりえがないのかい！？』  
なんて言えない。

いった瞬間、ジ・エンドだ。

そして、タイミングが良く、聖夜が帰ってくる。

「よし！行こうぜ！」

俺達は聖夜の家を出て、

桜凜高校へ向かった……。

何も知らず、これから何が起こるのかも知らず

9月1日 / 沙耶eyes 出会い(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls aspects  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、  
君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



9月1日 / 沙耶eyes 出会い

桜凜高校の全生徒の殺害。

その命令が本当かどうかわからない。

そもそも、此処が異世界なんて信じられない。

外見もなに一つ変わらない。

私は真実を視るため、桜凜高校へ向かった。

しかし、こんなにも走っているのに誰一人とも会わない。

店などは暗い。家も暗い。

明かりなんて一つも照らしてなかった。

照らしているのは、もう沈みかけている太陽の光だけ。

璃桜の情報が正しければ、

もう射撃科の一部は桜凜高校にいることになる。

そこで、指令を遂行。

つまり、桜凜高校の全生徒の殺害。

そんな狂気な指令は止めなくてはならない。

私は走り続けた。

はつきり言つて、私は桜凜高校の場所がわからない。  
私は外出なんて滅多にしない。

少しぐらいは桜凜市の勉強をした方がよかつたと後悔した。

しかし、私の刀の一振、

『神切』が私を導いている気がした。

『神切』

神を切つた刀。

『神の力』が宿されている刀。

そう桜夜家には伝わってきた。

桜夜家の神刀。

それが、この神切。

私は神切の導くままに走つた。

「此処は……？」

神切に導きだされた。

それがこの場所。

そこは、木々が青々と茂っている広場のような所。  
桜凜市にはこんな美しい所が残っていたのか……。

その場で深呼吸をした。  
やさしい風が髪を揺らした。

私はその場を少し歩いてみた。  
『ガサガサ』と音を立てながら歩く。

「美唯！！逃げろ！」

いきなり少年の声がした。  
私はその声で思い出した。

桜凛高校の生徒が危ない！  
私は声のした方へ向かった。

「潤！！」

少女の声がした。

どうやら最低でも二人はいるらしい

「何やってんだ！早く逃げろ！！俺を構うな！！」

「なにかっこつけてるのツ！？」

誰かに襲われているのだろうか！？

これは急がなければ！

「君達！無事か！？」

私は少年と少女に話しかけた。

少年、少女は見慣れない制服を着ていた。

やはり、桜凜高校の制服なのだろうか？  
そこには、二人しかいないようだ。

少年が驚愕の表情をしてこちらを振り向く。

「そんなに驚かないでくれるかな？」

どうやらこの少年、少女は警戒しているようだ。  
警戒するということは、

もう狙撃科の一部が指令を遂行しているのか！？

「この通り、私には攻撃の意思はない。安心してくれ構わない」

私は両手を上げ、戦闘の意志がないことを主張する。  
これで、安心してくれると助かるが……。

「それより、君達は無事か？」

私はそれが一番心配だった。  
もし、桜凜高校の生徒だとしたら……。

「それより、あなたは……」

少年がようやく口を開いた。

まだ、警戒は解いていないようだ。

「私かね？桜凜武装高校3年で剣術科の桜夜 沙耶だ。宜しく頼む」

少年はしばしの間黙り込んでいる。

頭の中で整理しているようにも見える。

いや、何かを選択しているようにも見える。

「俺は中沢 潤。こいつは、成沢 美唯」

お互いに沢がついているな……。  
間違えないようにしなければ……。

「中沢くん、成沢くんか……」

頭を整理するため、声に出してみる。  
するといきなり少女が前に出た。

「よろしくお願いします！桜夜先輩」

成沢くんが手を差し伸べてくる。  
先輩と呼ぶということは1年か2年か……。  
友好的で明るい子だ……。  
私は迷わずその手を握った。

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

私たちは握手を交わす。

これが『私』と『中沢 潤』『成沢 美唯』との最初の出会いだった

9月1日/侑eyes

異世界(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls aspect  
spects  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、  
君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

潤達は無事なのか!?

俺と菜月、聖夜と全力で走っている。

そんな中でも、俺の胸には様々な感情が生まれている。

仲間を置いて自分達だけ逃げた『後悔』

銃に撃たれて桜凜高校の生徒が死んで、次は自分達が殺されるんじゃないかという『恐怖』

そして、この世界の『理不尽』

色々な感情で、脳がフラッシュしそうだ……。

『何で……俺達は……こんな世界に来てしまったんだろう?』

この感情は、『怒り』『憎しみ』

それすら超えたものかもしれない。

本当に脳がおかしくなりそうだ。

「くそ!俺達がなにやっただって言うんだ!..!」

本能のまま叫んだ。

桜凜高校の生徒の数人は俺達の目の前で、射殺された。

罪を犯した訳でもなく、ただ、理不尽に……。理由も知らず……。

何も抵抗する武器など持っていない俺達はただ、撃たれて死ぬしかないのか？

そんな中でも逃げれた俺達は幸運だろう。

あの時の判断が少しでも間違えれば、此処にいないかもしれない。俺だけではなく、全員。

あの時、聖夜が煙幕弾を発砲しなければ、恐らく全員、死んでいただろう。

「侑……」

菜月はひ弱な声で俺に話しかける。

「どうした？」

俺達は走っている。

周りには誰もいない。

いるのは、俺と菜月と聖夜だけ。

「ごめんなさい……」

菜月は俺に謝る。

恐らく、大声で叫んで桜凜武装高校の生徒にバレたことだろう。

「なにが？」



「あの時、大声を出しちゃって……侑と聖夜を危険……」

「ストップ」

そこまで菜月が言いかけて、俺は菜月の口語を止める。

「確かにあの時は絶体絶命だった。だが、結局は助かっている。あの時、菜月が叫ばなかったら、また違う未来になっている」

そう。

あのとき菜月が叫ばなかったら、今とは違う未来。

その菜月が叫ばなかった未来は誰にも想像出来ない。

良い未来かも知れないし、最悪の未来かも知れない。

「あの時、菜月が叫ばなかったら、俺達の未来も大きく変わっている」

結局は助かった。

いや、『俺達は』助かった。

潤と美唯の生存はわからない。

電話も使えない。

存在を確かめるための手段がないのだ。

「そんなに気を落とすな！菜月！結局は助かっているそれだけでいいだろう？」

聖夜もバックアップを入れる。

「だけど……潤と美唯は……？」

「大丈夫だ！絶対に生きている」

自信満々に聖夜は言う。

聖夜も根拠なんてないだろう。

菜月を励まそうとしている。

「菜月！仲間を信じろ！」

俺はそれしか言えない。

俺だって、胸が裂けるぐらいに心配しているし、辛いし、苦しい。

だが、俺は信じている。

潤のことを……。

そして、美唯のことを……。

俺達は、中心街に着いた。

相当走った。

「しかし……本当に誰もいないんだな……」

聖夜は辺りを見回す。

そこは、明かりもなく静寂に包まれている。

「そうだな……」

俺達以外の人間は何処にいるんだろう？  
それは、全然検討がつかない。

「とりあえず、何か食べるか……」

聖夜はいきなりそんなことをいいだした。

「そうだな……何か食べるか……」

俺も腹が空いた。

今日の昼は何食ったけ……？

ああ、学食でカツ丼か……。

「え……？どうやって？」

確かに人はいない。

だが、食べ物はある。

だとするなら……。

俺達は、デパートの入り口の前に立つ

そして……。

『発砲！！』

俺と聖夜は同時にエアガンを取り出し、入り口のガラス目掛けて発砲する。

『バ　　ンッ！……！』

俺達のエアガンは色々改造しており、ガラスなどを割るほどの威力はある。

人間でも当たり所が悪かったら死に至る場合もあるほどの威力。もちろん潤たちとのサバゲーでは使ったことはない。このエアガンは護身用だ。

だとしたら、あの時『桜凜武装高校の生徒を撃てよ』という話になるが、相手は『防弾制服』を着ており、エアガン何てきかないとわかっていた。

「まだまだ聖夜！発砲！！！」

『バ　　ンッ！！！！』

流石はデパートの正面入り口……。そう簡単には割れないか……。

「ちょっと！あんた等なにやってんの！？」

食べ物を食べるためには、コレしかない。本当の世界なら即、警察のお世話になるが、この世界には警察なんていない。

「聞いているのっ！？」

菜月の声を流し、俺達は発砲を続ける。だが、ガラスは割れない。

「くそ！頑丈だな！」

あの聖夜ですら手こずっている  
確かに頑丈だ。

この武器じゃ駄目なのか？

「そんな程度であきらめるな！相手が菜月だと思って発砲しろッ！  
」

「よっしゃ　　！！！」

『バ　　ンッ！！！！』

俺達は発砲する。

と、此処で悪魔登場。

「誰があたしだと思って発砲しろだ　　！！！！」

『ズバシ　　ンッ！！』

「ぐはあ　　ッ！？」

俺の頭にチヨップが炸裂。

一瞬、頭がクラクラした。

が、ここで俺達ではない音が響き渡る……………。

『ズズズズズズズズズズッ！！！！！！！！！！』

「　　ッ!?」

銃声が聞こえた。

これはサブマシンガンか!?  
しかもかなり近い。

『パリ　　ンッ!!!』

正面入り口のガラスが砕け散った。  
銃弾はガラスに直撃したようだ。

ということは、相手は本物!?  
さっきのは威嚇か!?

「何をしている?お前達?」

銃声のした方向から声がする。  
しかも、話かけられた。

俺は反射的にエアガンを構える。

「エアガンで勝てると思っているのか?」

振り返るとそこには金髪碧眼の一人少女がいた。  
あの制服は桜凜高校……現代剣術科か?

その少女は失笑しながら、サブマシンガンを構える。  
腰には刀も下げている。

菜月が俺の後ろに隠れる。

そして俺達はエアガンを構えた。

少女の武器はサブマシンガン。

勝てる訳がない。

だが、俺はあきらめない！

「……………」

少女を睨みつける。

すると少女の軽いツリ眼で少女も睨み返してくる。

俺の脳内で学校での出来事を思い出す。

それは、血まみれの生徒。

俺達もあんな風になってしまふのか？

「ぷう……あははははっ！」

少女は笑い始めた。

その笑いは不潔なものではなく、可愛い笑みだった。

一瞬、何が起こったのか解らなくなった。

「あはははっ　こんな事をしていても仕方ない」

少女はサブマシンガンをしまった。その声はまだ笑っている。

そして少女はこちらを見てくる。

「お前達の方は戦闘の意思があるようだな……………」

「いえ、そのつもりは一切御座いません」

俺達は同時にエアガンをしまう。  
気持ち悪いほど、声が合ってしまった。  
一体この少女はなんのつもりだ？

「ふう……あははははっ！」

少女は再び笑い出す。

その笑顔はとても可愛らしかった。  
なんか、いきなり緊張が解けた。

「お腹が減っては何も出来ない。行くぞ」

少女はガラスが割れた正面入り口から入る。  
いきなりの展開にびっくりしたが、  
俺達はそれを見送る。

「お前達も来い！」

先にデパートに入った  
少女の声だけが聞こえる。

「どうする？」

俺は二人に話しかける。

「いいんじゃない？可愛いし」

良悪の判断の基準がずれているような……。  
流石は聖夜だな。



「まあ、確かに可愛いけど……」

相手はあの桜凜武装高校の生徒。  
油断は出来ない。

だが、あの少女は信じてみようと云う気分になれる。

「そんなことで決めてもいいの？命もかかっているのに……」

そう命もかかっている。

だが……。

「だかれこそだ！」

「え………？」

菜月は驚きの声を上げる。

俺の考えを菜月に教えつける。

「俺達は、桜凜武装高校に勝てる術はない」

相手は銃は刀。

もしかしたら、もっとすごい武器があるかもしれない。

この場を逃げて、

またいつか俺達は桜凜武装高校の生徒に遭遇するだろう

そのときはどうなる？

俺達には、互角に戦う武器などない。

だとしたら、俺達は『死ぬ』

だが、この少女は攻撃はしてこない。  
だとしたら、共に行動してくれるかもれない。  
一緒に行動してくれれば、危険性は一気に減る。

「もしかしたら、一緒に行動してくれるかもしれない！」

可能性としては低い。

だが、相手は人間。

話も出来るし、分かり合える。

「来ないのかあ〜!?!」

入り口から、少女の声がする。

俺の考えは一つだった。

「行くぞ! 菜月! 聖夜!」

俺は入り口目掛けてダッシュする。

「本当に行くの!?!」

「やつほ　　ッ!?!」

菜月と聖夜もついてくる。

聖夜のノリはおかしいが……。

まあ、いいや。

俺達はデパートの中へ……。

「おお、来たか」

「はい！ お供させて貰います。」

俺は今になってためらってしまつ。

言つてもいいのだろうか？

こんなにも単刀直入に……。

「ん？ どうした？」

言わないと俺達は助からないだらつと俺は決心する。

「俺達を仲間にしてください！」

俺は同時に頭を下げる。

これは俺の単独行動。

誰にも教えていない。

「「ハア？」」

菜月と聖夜が唾然とする。

それもそうだ。

二人はこのことを知らない。

「な、仲間っ！？」

少女が驚いたのか、すこし裏声を出す。

もう一回アタックだ！

「仲間にしてください！」

俺は深く頭を下げ、もう一回頼む。

これは俺達の生死にもかかっている。

この選択が合っているかは誰にもわからないが、俺は正しいと思う。

「な、仲間……」

なぜか、少女は頬を赤らめている。

どうしたのだろうか？

「……………」

しばらく妙な空気が流れる。

何か気に触れたのだろうか？

ま、まさか殺されるっ！？

「あ、あの……」

俺は『My world』に入り込んでいる少女に話しかけた。

「ひゃうっ！？」

少女が完璧な裏声を出す。

なにか様子が変だ。

っと、そこで菜月が小声で話しかけてくる。

「……………ちょっと、俺……………あんなんのもりよ……………」

「……………これが最善の選択なんだ……………」

俺達の小言の話合いに聖夜も乗る。

「……そうだ……これが最善の選択なんだ……ウフフフ……」

聖夜が怪しげに笑い出す。

だから、そっちの気はないって……」。

「……お前は意味が違っただろ……」

どうせ聖夜は可愛い子の仲間になれるって意味だろう。  
何をする気なんだ……。

「仲間……か……」

少女は何か憧れを掴んだような笑みを浮かべる。

そして、ひとつ咳払いをする。

「よし！いいだろう！」

少女は俺達の前に立ち、堂々とした態度をしている。

ほ、本当か！？

でも、なんだっただんだ！？さっきまでのあの間は！？

「ほ、本当ですかっ！？」

案外あっさりだった。

俺達は本当に運がいいのかもしれない。

会った人間がこの少女で良かったと心の奥底から思った。

「もちろんだ。私がリーダーだ！いいな！」

少女は確かめるようにそう言う。  
むしろ、他に誰がリーダーをするんだろう？

「はい！何処までも着いていきますー！」

「はい！俺も…ウフフフッ！」

最後まで言い切れず、途中で怪しい笑いを入れる。  
その怪しい笑いはやめろって……。  
勘違いされるだろ……。

「あ、はい……」

菜月はあまり乗らないようだが、正反対に聖夜はノリノリだ。（違  
う意味で）

「私は桜凜武装高校3年現代剣術科でしんぎ 凜りお桜だ！」

『凜 璃桜』

それがこの少女の名前。

3年と言うことは、先輩か……。

「俺は、天神 侑」

「俺は、衛藤 聖夜。よろしくお願いします！璃桜先輩！」

「あたしは蝶野 菜月です……。よ、よろしくお願いします……凜先  
輩」

菜月はやはり乗らないようだ。

その代わりに聖夜はノリノリ。  
だが、これが最善の判断だと俺は信じている。

「仲間……仲間か……仲間！……仲間？……仲間っ！？」

凵先輩が壊れ始める。

機械のように『仲間』という言葉を連発する。

しかも全てバリエーションが違う。

だが、凵先輩は何か興奮しているようだ。

俺にはよく分からなかった。

「では早速、食料を確保しよう」

「おおおお！！」

聖夜はノリノリだ。

お腹がすいているのか？

いや、違うな……。

俺達は食料品売り場へ……。

「さあ！好きな物を取ってこい！！！！！！」

凵先輩は食料品売り場に向けて勢い良く人差し指を差して、俺達に命令口調で高らかにそういった。

ここは別に先輩の支配下じゃないでしょう！？

「いやっほー！！」

聖夜はノリノリだし……。

そして、聖夜は弁当コーナーへ……。

「ねえ……本当にいいの？」

菜月がそんなことを聞いてくる。

「俺を信じてみる。菜月」

俺達は休憩所で待つことにした。

聖夜はパシリってことで。

つと、聖夜が弁当を大量に持ってくる。

「全員分持つて来たぜ！」

聖夜が弁当を並べ始める。

なんか、申し訳ないが、弁当を食べる。

周りは、暗くなっていた。

だが、デパートの電気はつかない。

「それでは、いただきます」

梁先輩は手を合わせ、弁当を食べ始める。



俺達は聞かなければならない。

この世界のことを……。

「凜先輩！」

「ん？」

俺は凜先輩に聞かなくてはならない。

「この世界はなんなんですか？」

俺はストレートに質問する。

この世界では桜凜武装高校の生徒が、桜凜高校の生徒を攻撃してくる。

電気も使えないし、人もいない。

この世界はわからないことだらけだ。

だからこそ、知らないといけない。

桜凜武装高校の生徒なら何か知っているかもしれない。

「……………」

凜先輩は迷っていた。

言うべきか、言わないべきか。

「いいだろう。お前達は私の仲間だ。私を知っていることは話そう」

こうして俺達は知ることになる。

この世界の理不尽を

この世界の狂気を

攻撃する理由を

此処が”異世界”であると言つことも

9月1日/侑eyes

異世界(後書き)

―登場人物―

染 璃桜(しとぎ りお) : (女)

桜凜武装高校3年現代剣術科のBランク。  
いつも最前線で戦う。

彼女の戦闘スタイルは右手に剣、左手に銃。

現代剣術科に入り独自に生み出したスタイル。

そのため、近距離でも遠距離でも対応が可能。

仲間からの信頼は厚い。

彼女が使用している銃はMP7・OBK/SR。

マガジンは20発を4個所持している。

身長 : 161cm

体重 : 47?

B・W・H : 86・52・87

血液型 : O

髪色 : 黄支子色(金髪系)、ロング

誕生日 : 1月16日

年齢 : 17

沙耶の中学生の頃からの親友。

沙耶が桜凜武装高校を入学すると知って、

璃桜も沙耶と同じ剣術科を受けたが、レベルが高く。

入学試験で落ち、素人でも入れる現代剣術科へ入学した。

彼女ははまったくの素人から、Bランクまで上がった。

彼女のセンスは開花し続ける。  
仲間に憧れている。

9月2日/侑eyes

傳き命(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

19月2日

ついに次の日が来た。

此処はデパートの中。

デパートで一晩を過ごした。

「起きろっ

！！！」

染先輩の声がする。

ということは、俺は生きている。

眼を覚ませば、俺達の元の世界に戻る。

そう希望抱いて、夢から覚めようとしていた。

だが、起きたのは異世界。

昨日の出来事は『幻』じゃない。

『現実』だった。

「おはようございます……」

デパートは薄暗い。朝だということにな……。

「おはようございます……」

菜月も身体を起こす。

「何て素晴らしい朝だ！おはようございます！璃桜先輩！」

異常に聖夜は元気だ。

確かに朝、美少女に起こされる朝は素晴らしい。

夢の状況だ。男なら誰でも最高だろう。

だが、此処が異世界のため、その『素晴らしい』は成立しない。  
つてかそんな余裕ない。

「皆起きたか！？では、行くぞ！！」

えっ！？ もう出発！？

まだ、覚醒してないのに……。

「もう出発ですか！？」

「あたりまえだ！ほら！行くぞ！！」

梁先輩がデパートの正面玄関に向かって歩く。  
俺達はそれについていく。

「何かドキドキするな！」

テンションMAXの聖夜は話しかけてきた。  
既に聖夜は覚醒済み。

「お前は前向きでいいな……」

「そうよ！少しは緊張感とか持てば！？」

菜月も眠気は覚めたようだ。

俺は自分の頬を両手でパンパンと叩き、  
眠気を覚ます。

「持つてるだろ！？俺だつてドキドキしてんだよー！」

「そついうドキドキじゃねえよっ！」

聖夜のドキドキと言うのは、染先輩と行動するからドキドキなんだから！？

「まあ、いいや」

聖夜が話を終わらせた。

すると、聖夜が小さな声で俺に話しかける。

「……………お前はドキドキしないのかよ……………？」

「……………」

俺はあえて黙った。

たしかに染先輩は可愛い。

だが、心にそんな余裕がない。

だから俺は答えなかった。

そして、俺達はデパートに別れを告げた。



「梁先輩、何処に行くんですか？」

「まずは武器の確保からだ」

武器の確保。それは本物の銃のことだろう。

「本物の銃ですか……？」

「当然だ。お前達は武器がない。ただ的になって死ぬだけになるぞ？」

それが『この世界のルール』だともいうのだろうか……。

武器を持たないと的になり容易く殺される。

俺はそれをこの眼で見た。

抵抗した俺達は生き延びた。

いや、抵抗したのは聖夜だけかもしれない。

次に殺されるのは、甘い考えの俺だろうな。

「……………」

黙ってしまった。

武器を持って戦わないと、自分すら助からない。

だが、人は殺せない……。

俺は、どうすればいい？

潤……。美唯……。



その場は赤に染まっていた。

そこにあつたのは何十人の”死体”

火薬と血の臭いでむせ返りそうな激臭。  
嗅ぐだけで頭かフラツとする。

此処でも人が死んでいる……。

人の命ってこんなにも簡単に儂いものなのか？  
すると、染先輩が歩き始めた。

「染先輩!？」

先輩がその悲惨な場へ行く。  
そして、その場にしゃがむ。

「おいおいおい……」

聖夜は右手で頭を掻き回している。

「え?どうしたの?」

唯一後ろにいた菜月が駆け寄ってくる。

「来るなっ!!!」

菜月に警告をする。

その言葉を言い終えたのと同時に菜月の足が止まる。

こんなの菜月が見たら駄目だ……。  
惨すぎる。酷すぎる。

だが、俺達は死体を見るのはこれが初めてではない。  
桜凜高校でも生徒が撃たれているのを見た。  
それ異常に残酷な状況。

「ああ、菜月は見ない方がいい」

聖夜も警告をする。

この強烈な死臭。

これだけでも、どんな状況か想像はできる。

菜月もわかるだろう。

見なくてもこの状況であると言っことは……。

凜先輩が何かを持って帰ってくる。

「ハンドガンがあった」

凜先輩は手の平に乗せてあったハンドガンを俺に差し出す。

「え……？」

「侑、受け取れ」

本物の銃を受け取れたと！？

そのハンドガンのグリップは赤く染まっていた。

これは人間の血。

銃は見慣れている。

なのに、身体が震える。

「持っている」

凩先輩は躊躇していた俺に無理やり銃を渡す。  
今、俺の手の中には銃がある。

「……………」

ズツシリと冷たく重たい。

俺は手の中にある銃を見つめる。  
頭が真つ白くなる。

「聖夜も持っている」

次は聖夜にハンドガンを渡す。

「わかりました」

聖夜は迷わず受け取る。  
眼にも迷いはなかった。

「銃は2丁しかなかった」

誰に言ったのではなく、そうハッキリと言った。

「右折するぞ」

先輩が右に向かって歩いた。  
あの残酷な場を避けて。



9月2日/侑eyes

秘められた想い(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

あの光景が頭から離れない。  
鮮明に思い出してしまふ。

まさか…潤達も……”あんな風に”……。  
だが、俺はその思考を掻き消した。

じゃないと、俺の心が持たない……。  
俺も弱い人間だ……。  
それは俺が一番理解している。

「侑？どうした？」

凩先輩が横目で俺に話しかける。

何処を歩いているかわからない。  
周りは林。そして俺の手の中には、銃がある。

「いえ……なんでもありません……」

これは嘘。

心配されたくないから嘘をつく。

「いや、大丈夫じゃないだろう？顔色悪いぞ？」

やっぱり長く付き合っている聖夜は騙せないか……。



「いや！本当に大丈夫だって！」

俺は無理に明るく振舞う。

だが、本当の笑いが出来ない。

心から笑えない。

笑っているのは顔だけ。

いや、顔ですら笑っていないかもしれない。

俺は笑い方を忘れ始めた。

絶望的なことを知ってしまった後、

人間は何もかもくだらなく思えてしまう。

今までどういふ風に菜月達と接していたかすらわからない。

全て剥がれ堕ちる。

「侑……」

菜月は俺と幼馴染だから、俺のことは一番知っているだろう。

このままだと、皆に心配をかけてしまう。

わかってる……。

こんなことで立ち止まっては駄目だ……。

わかっているんだけど、心がいうことをきかない。

「本当に大丈夫だから！気にするな！」

無理な作り笑顔をする。

「これだけは言うけど無理はするなよ？自分の気持ちに正直になれ」

自分の気持ちに正直……。  
そう聖夜は言った。

俺は今、何を望んでいる？

絶望に沈むことか？

違う……。俺は……。

俺が望んでいるのは……。

「……わかった、ありがとう聖夜……」

聖夜のお陰で少し前向きになれた。  
胸に秘めた想いを再び思い出した。

自分でいくら言い聞かせていたのに、  
聖夜の一言だけで、前向きになれた。  
何でだろう？大分気が楽になった。

「よっしー！ー！！」

頬をポンポンと叩き、気合を入れる。

「侑に戻ったな」

聖夜は俺に向けて無邪気に笑う。

「ああ」

俺達は笑い合う。

ああ……。これだ……。

これが俺の”日常”だ……。俺は少しでも取り戻せたんだ……。壊れてしまった日常を……。失った日常を……。

「確かに笑ってた方が侑らしいよ」

菜月の表情も明るくなっていた。

「確かにそうだな。笑っていた方がいい」

先輩は笑みを漏らす

そうか……。

俺達の想いは同じなんだ。

『崩れ去った日常を取り戻す』

それが、俺達の想い

9月2日/侑eyes

心を癒して(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

俺達は今、林の中を歩いている。

俺達は何をするべきなのか？

何を探すべきか？

いや、それを俺達は探している。

「よっし！ようやく街に出た！」

梁先輩は山奥に住んでいる人のようにいう。

確かにようやく町に出た。

久々でもないが、なんだか懐かしい。

「長かったな~~~~！」

聖夜は街を眺める

俺達は待望の町に出る。

「そうだな」

確かに長かったのか？

でも会話が弾んでいたから短く感じた。

「~~~~ん~~~~」

菜月は背伸びをする。

「みんな、少しは羽を伸ばそう」

「そうですね、凧先輩」

こんな緊張感がずっと続くのはさすがに心に良くない。  
羽を伸ばすのも悪くはない。

「まあ、とりあえず公園に行きませんか？」

聖夜は笑顔で凧先輩をエスコートする。

「そうだな」

先輩は聖夜の提案に従い、近くの公園に向かう。

「菜月？大丈夫か？」

「うん！大丈夫よ！」

菜月の元気な声が聞けた。  
なんか久しぶりな気がする。

「随分と広い公園だな……」

公園に着いくなり、凧先輩は感想を漏らす。  
確かに大きな公園。

大草原という言葉が合っているかもしれない。

俺達は、休憩場のようなところへ向かう。

「こんなところがあつたのね……」

菜月も公園を見渡す。

「確かにな」

俺も知らなかった。

この公園も静寂に包まれていた。

俺達は椅子に腰を下ろした。

ちゃんとテーブルもある。

「ふう〜〜」

梁先輩が息を漏らす。

ようやく落ち着ける時間が訪れたようだ。

「皆で遊ぼうぜー!!」

聖夜は高らかにそういう。

遊ぶか……。

「そつだな！遊ぶか！」

梁先輩もその話に乗る。

俺もなんだかワクワクしてきた。

「でも、何して遊ぶの？」

……。

確かに菜月のいう通りだな……何して遊ぶんだ？  
俺は聖夜の方を見る。

「安心しろ！既に準備は整っている！」

聖夜がケースをテーブルに置く。

すると聖夜がゆっくりとケースを開け始めた。

「麻雀っ！？」

そのケースの中に納まっていたのは麻雀の牌。  
それと、得点棒など……。

「いつ持ってきたんだ？」

「ふう……デパートでばくってきたのさ！」

すると梁先輩が身を乗り出し、牌を見つめる。

「ほお〜〜」

確かに此処には4人いる。

ちょうど人数的にジャスト。

「今、此処で俺達の結束を固めたい。さあ！やるぞー！」

なんだか無茶苦茶だ……。



すると、聖夜はセットを始める。  
俺は染先輩を視る。

「染先輩はいいんですか？」

「いつておくが、腕には自信がある」

なんと！

麻雀のやり方を知っているのか？  
なら、話は早い。

菜月もやり方は知っている。  
昔、俺達の間で流行った。  
それが麻雀。

久しぶりにするな……。  
まあ、丁度良いハンデか……。  
ウフフフ……。

「では、始めようか……」

聖夜が捨て牌を出す。  
それと、同時に……。

『ドカ                    ンッ！……！』

「ちよつわあつ                    ……！！！」

不意に響いた大音響で、聖夜は腰を抜かす。

「爆発音!？」

俺はその場を立ち上がった。  
近くで爆発音がした。  
また、戦闘なのか……？

「くそ……離れるぞ!!」

梁先輩はそういつと爆発音がした逆の方向へ走り出す。  
確かに此処は爆音がした所から近い。  
なら、逃げた方が良い。

「聖夜!菜月!逃げるぞ!」

「わ、わかってるっわよ!」

「おい!麻雀は!？」

聖夜は麻雀の心配をする。  
心配する方向が間違っているような……。

「置いてけ!!」

「マジかよっ!？」

「当たり前だろ!？」

俺達は先輩と共に、爆発音がした所から離れていく。

「梁先輩!何処まで行くんですか!？」

「できるだけ離れろっ!!」

俺達は走り続ける。

安全と言える場所まで。

9月2日/侑eyes

防弾制服(前書き)

「君の魂に抱かれてー(きみのところにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月2日 / 脩eyes

防弾制服

いつの間にか、再び林に入っていた。

「よし！もう大丈夫だろ！」

先輩の足が止まる。

それに続けて俺達も足を止める。

「はあはあはあ……………」

一方俺は呼吸が乱れている。

最近の運動量は本当に凄いなと思う。

「……………なんだよ……………もう疲れたのかよ……………」

「……………聖夜だつて息切らしてるだろう……………？」

また林の中へと逆戻り……………。

でも、林の中と町の中、どっちが安全なのだろう？

「みんな疲れているようだから少し休もう」

「助かります……………」

俺は菜月の方を見る。

もう回復済みっていう感じだ。

「菜月……回復早いな……」

「え？そう？」

菜月は俺の方へ振り返った。

「お前はダチヨウかよ……」

聖夜も話に加わる。

ダチヨウ？なんでだ？

ダチヨウっていったら、足が長くて、首が長くて……。

「な！なんでダチヨウなのよ！？」

「だって、ダチヨウは走りながらも体力を回復できるんだぜ？」

へえ〜〜。

そうなんだ……。

知らなかった……。

「だからって、私はダチヨウじゃない！」

「そんなこと知ってるて……」

『ガサツ！！！』

この俺達の領域に侵入したであろう足音がする。すると、人であろうものが視野に入った。

「ひいゝゝゝなんで狙ってくるのゝゝゝ!?!?」

俺達の領域内に少女が侵入。

あの制服は……。桜凛高校じゃないな……。

つてことは桜凛武装高校の生徒!?

なんだか、焦っている感じがする。

ん?狙ってくる……??

つてことはまさか!?

『ズド                    ンッ!?!?!?!?!』

「やっぱりかつ!?!」

俺は反射的にハンドガンを取り出す。

これは本物の銃。

この銃声の狙いは少女のようだ。

「うぎゃあああああゝゝゝ!?!」

少女は右側に滑り込むように高速移動し、銃弾を避ける。

しかもその動きはかなり速い。

まさに高速移動という言葉が相応しい。

「あわわわあああゝゝゝ!?!た、助けてくださいゝゝゝ!?!」

少女が俺達の所まで駆け寄り、助けを求めてくる。

まさか……俺達も戦闘に巻き込まれる!?!?

「了解！援護する！」

「あ、ありがとうございます〜〜〜！」

梁先輩はサブマシンガンを左手で持ち、  
右手で鞘に納まっていた刀を抜き、右手で構えた。  
そして先輩は少女の近くまで行く。

「先輩！助太刀します！」

聖夜はハンドガンを手に握り、  
先輩の近くに行く。

「ば、バカ！お前が来るところじゃない！」

「そんな事を言っている場合ですか？璃桜先輩？」

聖夜は冷静にそう言ってみせた。

『ズド                    ンッ！！！！！！』

確かに言い合っている場合じゃない。

少女を追っていた人物までも俺達の領域に入ってきた。  
もう、やるしかないのか……。

「いた！撃て！！」

『ズド                    ンッ！ズド                    ンッ！ズド                    ンッ！』



少女を追ってきた生徒が此処まで来た。  
この生徒も桜凜高校の生徒ではない。

「菜月！俺の後ろに隠れろ！！」

もう此処は戦場。

なら、俺も覚悟を決めて戦わなければいけない。  
俺達の日常を守るために……。

「うん……」

菜月が俺の背中に隠れる。

「どうやらサバゲーで鍛え上げこの実力。見せる時が来たようだな  
！！」

聖夜は銃を構える。

確かに聖夜はサバゲーが上手い。  
だが、相手は訓練をしている生徒だ。

「敵が増えたか……。なら、皆殺しにしろ！！」

男子生徒が自分のメンバーに命令をする。

ということとは、このチームのリーダーはこの男。  
チームの数はざっと数えて5人。

「どどうして私を狙うんですかあ~~~~！！」

少女が声を上げ、リーダーであろう男子生徒に話しかける。

「貴様は校則に反した！死罰されるのが当然だ！」

「ええ〜〜！そんなことしてないよお〜〜！」

少女の方をしてみる。

背中には、クロスするように刀がしまわれている。刀2本あるが、どちらも小さい。小刀つてやつだ。やはり、この少女も桜凜武装高校の生徒。

「無罪な女子を攻撃するなんて、人間としては最低だ！！」

聖夜が敵生徒に銃を構える。

『ズド                    ンツ！！！！！！』

聖夜が敵生徒目掛けて発砲する。

迷いなく、ためらうことなく発砲した。

「ぐわああつ！？」

聖夜が撃った弾は生徒一人の胸に直撃。

そして、その生徒は背中から倒れた。

俺はその光景を信じたくはなかった。

……聖夜ガ人ヲ殺シタ……？

「大丈夫だ侑！ 染先輩から教えて貰った。奴らは防弾制服を着ていてこの程度では死なないんだ！死ぬほど痛いらしいが」

「なッ！防弾制服ってそんなにすごいのか!？」

敵は背中から倒れたが、被弾して倒れたのではなく、被弾の衝撃で倒れたんだ！

つまり聖夜は人を殺していない！

「覚悟っ!！」

『ズドドドドドドッ!!!』

梁先輩は流れるようにサブマシンガンを構え、近くにいた生徒目掛けて発砲　！  
先輩は躊躇わずに発砲する。

「ぐはっ!！」

パキューン!と銃弾を弾く音が聞こえる。

これは防弾制服が銃弾を弾いてる音だ。

「なにそこで隠れてるんだ!!丸見えだぜっ!！」

『ズド　　ンッ!!!!』

今度は聖夜が林に向かって撃つ。

再びパキューン!という高音が響く。

聖夜は相手が防弾制服と解っているから、殺さないで済むから戦っているんだ。

「皆、戦ってくれてるんだあ〜!苦手だけど私も戦わないとお〜  
〜!！」

少女は両手を背中に回し、小刀を鞘から抜く。  
その小刀を両手で持ち構える。

通常刃先は上を向くが、忍者刀は刃先を下にして構える。

その姿は、忍者もしくはくのいちのような感じだった。

「ごめんなさい……こんなことに巻き込んで……」

少女は俺の方へ近寄り、深く頭を下げた。

「俺は何もやってない。礼ならあの二人に言ってくれ」

「でも……本当にごめんなさい……」

！？

少女の後ろに人影が見える。

マズイっ！撃たれるっ！？

「後ろっ！！」

俺は叫んだ。このままだと少女は撃たれる。

狙いは防弾制服だけとは限らない。

頭は丸腰なんだ！

「ほえっ！？」

少女が後ろを振り向く。

一人の生徒が、銃を構えている。

既に発砲準備は整っている。

俺は少女目掛けてハンドガンを構えた。

「伏せる　　っ！！！！！！！」

その叫んだ瞬間、俺はトリガーを引いた。  
相手が防弾制服なら……！殺さないで済むなら……！  
俺だって撃てる！

『ズド　　ンッ！！！！！！』

俺は銃弾を少女に向けて発砲した　　！

「うわあ~~~~！！」

少女が素早く伏せる。  
そして……銃弾は少女の頭上を越し……。

「ぐわあっ！？」

俺が撃った銃弾は生徒の腹部、防弾制服に命中した。  
当たると死ぬほど痛いらしく、生徒は膝を屈する。

「あ、ありあとう~~~~！！」

少女が俺に駆け寄る。

「な、銃弾が効かない！？」

後ろに隠れていた菜月が驚愕の声を上げる。

「そうだ。だから血も出ないし死なない。だから俺も撃てたんだよ」  
これなら俺も戦える。  
だけど、俺には防弾制服はない。  
一回被弾すれば終わりだ。

もう相手の生徒は、リーダーの一人。  
そのリーダーは梁先輩と戦闘を繰り広げている。  
そこが戦闘の最前線だ。

「ちょっと痛いかもよ！」

『ズドドドドドドドッ！』

梁先輩が男子生徒を蜂の巣状態のように発砲する。  
もちろん防弾制服で守られているところだけだ。

「ぐがああっ!？」

そして、梁先輩は男子生徒の背中を後ろから蹴り飛ばした。

「ぐはっ……!!」

リーダーは激痛に耐えるように倒れて悶絶する。  
こうして、全員を無力化とはいかないが、戦闘不可能まで追い込んだ。

「みんな！ここは退くぞ！」

梁先輩が俺たちに命令を下す。

敵全員生きている。  
だからこそこの判断なんだから。

「解りました！」

俺たちは全力で梁先輩についていく。

「わたしも着いて行っていいですかあ〜？」

「まずは安全の確保だ！」

梁先輩は走りながらも少女と会話をする。

「ありがとうございます！」

少女も忍者走りですぐ早く走る。

あっという間に俺を追い越した。

「は、はやっ!?!」

あの暢気な口調から想像もつかない程動きが速い。

「一気に走り抜けるぞ！」

梁先輩の声が俺たちに響く。

でも、本当に良かった。

仲間は被害もなく、人を殺してもない。

最高の結果でこの戦いを終えた。

9月2日/侑eyes

防弾制服(後書き)

ー能力、武器等の詳細ー

染 璃桜(しときりお) : (女)

彼女が使用している銃はMP7・OBK/SR。

MP7・OBK/SRは彼女のスタイルを最大限に生かすため、既存のMP7をベースに特別に製作されたもの。

彼女独自のスタイルを生かす上で不必要とされたストックを取り払い、

マニュアルセイフティを省略し、トリガーセイフティとグリップセイフティ

を代わりに採用している。

フルオートマチック射撃は制限され、3点バースト射撃が搭載された。

射撃速度は 1000発/分 に上昇。

この銃は200m以内ならケプラー繊維のクラス3Aの防弾チョッキを貫通が可能。

反動も9?ルガー弾(9?x19、9?パラベラム弾)のおよそ半分。

MP7・OBK/SRのOBKは桜凜武装高校

(Ourin Busou Koukou)の頭文字を取ったもの。

SRは、染 璃桜(Shitogiri Rio)の頭文字を取ったもの。

マガジンは20発を4個所持している。

彼女が使用している刀の長さは65cm前後。



彼女の戦闘スタイル上、片手になってしまつので、取り回しが良いこのサイズにした。攻撃力に特化している。

日本刀のため、普段は鞘に入れ腰に刺している。

この鞘は非常に防御力が高い。

そのため、戦闘時には鞘が身体の防御を担っている。

彼女は右利きのため、右に刀、左に銃という戦闘スタイル。

9月2日/侑eyes

新しい風(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「お前は どうして 狙われて いたんだ？」

俺達は 林を 歩く。

何処を 目指す ことも なく 放浪 する。

その 最中、 突如 染先輩 が 少女 に 問い かける。

「あ、 え〜と です ねえ〜」

少女 も 俺達 と 行動 を 共に する。

『 助け て くれ た お礼 を させ て くだ さ い 』

と、 いう 理由 で。

俺 に とつ て は、 共 に 行動 し て くれ る 仲間 が 増 え て 嬉 し い 限 り だ。

「道に迷ってた女の子がいてですねえ〜」

しかし、 のんびり した 性格 だ。

いや、 マイペース な の か？

いや、 両方 が ……。

「それで？」

「道を教えたんですけどお〜」

「ふむ」

偉いな。

道に困っていた人に道を教えたのか。

一般常識は兼ね備われているみたいだ。

「道を教え終わった途端にですねえ」

「……………」

「あのグループがいきなり、『校則違反です』って言ってきてです  
すねえ〜！」

この娘こい言う可愛く聞こえる。

だが、実際は生死がかかっている状況。  
お遊びではなく、本気。

「いきなり発砲されてですねえ」

酷い状況だ…………。

困っていた人に道を教えただけなのに…………。  
発砲までされるなんて…………。

「お前も武装高校だろう？」

「そうですねえ」

やはり、桜凧武装高校の生徒だったか…………。  
それはそうだ…………。

あの、速さは一般人じゃなかったから…………。

「何故、戦わなかった？」

梁先輩が痛い所を突く。

「うう〜。それは……」

少女が言うか言わないかを迷っているようだが、少女は口を開いた。

「だって〜！相手は鉄砲ですよ〜！私、鉄砲相手は苦手です〜」

「……………」

「それで、逃げ回ってたとう訳ですよ〜」

……………。

とにかく、この娘は相手が鉄砲だと、勝てない。だから、逃げ回っていたってことか……………。

「それで、逃げてきた先が……………」

重い空気の中、聖夜が口を開く。

「俺達の所だった、ってことか……………」

聖夜の続きは俺がいった。

「そうなっちゃいますねえ〜」

……。……。

しばらく、場が凍りついた。

マズイ……。どうにかしないと……。

だが、何を喋ればいいのか輪かわからない。

「ところで、君の名前は？」

まだ、名前を聞いてないことに気が付く。

だから俺は少女に名前を聞いた。

「私は新稲 奏笑、桜凜武装高校2年現代剣術科のCランクだよお

」

新稲 奏笑……。

Cランク……？

結構高いんじゃないか？

「し、し、し、ジーランクだと!？」

何故か先輩が一番驚いていた。

まあ、確かに凄いよな。

「Cランクです」

俺は先輩の発言に訂正を入れる。

「ああ、間違えた……。Cランクだと!？」

訂正を入れる先輩。

「へえ〜〜。奏笑ちゃんって凄いね」

菜月も奏笑に感嘆する。

「え〜そんなことないよ〜」

少し照れている。

なんか、可愛らしい……。

「馬鹿な……」

何故か、先輩は失望していた。

何かあったのだろうか？

「どうしたんですか？」 Bランク”の璃桜先輩？」

聖夜は” Bランク”を異常に強調する。

「う、うっさいわっ！！ボケっ！！」

???????

俺には何故、先輩が動揺しているのかが分からない。

ああ、そうだ……。

俺達の自己紹介がまだ済んでない。

「まあ、いきなりでなんだけど、俺は天神 侑。桜凜高校2年だ」

「よろしくねえ」

最低限の必要事項を述べ、自己紹介を済ます。

「俺は、桜凜高校2年で衛藤 聖夜だ。ひとつよろしく」

「あ、うん。よろしくね」

俺に続いて、聖夜も自己紹介を済ます。

「あ、私は桜凜高校2年の蝶野 菜月。よろしくね」

菜月は手を前に差し出した。

「あ！うん！よろしく！菜月ちゃん！」

奏笑は菜月の手を握り、上下にブンブンと振る。

菜月も少々対応に困っていた。

「私は……」

凜先輩が口籠る。

そして、ゴホンと咳払いをし、

自己紹介を始める。

「私は、桜凜武装高校3年で…ランクの凜 璃桜だ。よろしくな」

何ランクか、聞き取れなかった。

さっきから先輩の様子がおかしい。



「え〜？なにランクですかあ〜？」

奏笑も聞き取れなかったらしく、聞き返す。

「Aランクだ」

何嘘を付いてんだ先輩は……。

俺は訂正を入れることにした。

「Bランクです」

「うっさいっ！黙れ！」

何故か、自分のランクを偽る。

何でだろう？Bランクって不名誉なランクなのかな？

「へえ〜Bランクですか〜羨ましいですねえ〜凄いなあ〜」

「くう……」

先輩が苦声を漏らす。

なんだか、プライドが傷ついたような感じもした。

「あれ〜？私なにかいいましたかあ〜？」

「断じて言っていない！気にするな！」

先輩が再び歩みを再開する。

俺は先輩に小声で話かけた。

「……先輩…… Bランクって不名誉なランクなんですか？……」

「そんなことはない」

先輩が即答する。

だが、先輩はランクを偽った。

「何でランクを偽ったんですか？」

「……」

先輩が黙り込む。

が、先輩は早口で話し始める。

「……私は3年生でBランクで、あいつは2年でCランクだぞ……」

「先輩の方が上じゃないですか？」

「ああっ！もういいっ！」

先輩がそっぽを向いてしまった。

うっ……ん……。

先輩の方が上なのに、どうしてこんなに動揺しているんだ？

「先輩、なんか気に触れましたか？」

「うっさいわっ！！ボケっ！！」

プライドというものなのだろうか？  
これ以上追求しない方がいいな……。

俺達は新たな仲間と共に、再び行動を開始した。

9月2日/侑eyes

新しい風(後書き)

―登場人物―

新稲 奏笑(にいな かなえ) : (女)

桜凜武装高校2年現代剣術科でCランク。

武器は忍者刀(左右)で、戦闘スタイルも忍者。

侑達を危険から守ってくれる。

銃などは所持していないが、手榴弾、閃光弾、煙幕弾、焼夷弾、などを所持している。

煙幕弾には、催涙ガスが入っており、通常の煙幕弾も所持している。

のんびりとした性格。そして、何処までもマイペース。

忍者に憧れて桜凜武装高校に入学した。

身長 : 156cm

体重 : 44?

B・W・H : 81・48・83

血液型 : AB

髪色 : 若紫色(紫系) ロング、リボンをつけている

誕生日 : 9月27日

年齢 : 16

9月2日/侑eyes

自転車狩り(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月2日 / 侑eyes

自転車狩り

俺達は染先輩、菜月、聖夜、奏笑、俺、の5人で今、行動している。

「染先輩、どこに行くんですか？」

俺達はただ放浪し、歩いているようにしか思えない。  
だが、ちゃんと目的地がある筈だ。

「行く先なんてない！」

……………。

「……………本当ですか……………？」

嘘だろ！？

俺達の今までかなりの距離を歩いてきたのに、  
目的地がないだと！？

今までの努力は何だったんだ！？

「……………俺達は今まで何の為に歩いていたんですか……………？」

「……………」

「そこで無言にならないでくださいよっ！」

かなりの脱力感が身体を襲う。  
足が最も疲労が溜まっている。

当たり前だ……。  
あんなに歩いたんだからな……。

「梁先輩、何処か目的地を決めませんか……？」

せつかく此処まで歩いてきた。

その努力は意味がないというのはあんまりだ。

あまりにも、酷過ぎる……。

「ってか、どこどこ？」

……。

聖夜の一言で、周りが沈黙する。

周りは見渡す限り自然に囲まれている。

「さ、さあ？奏笑ちゃん知ってる？」

菜月も知らないようすだった。

「さあ〜？どこだろうねえ〜どこお〜」

……。

まさに絶望的な状況……。

また、俺達は放浪するしかないのか……？

「お前達、知らないのか！？」

梁先輩が俺達の方を振り返り、強めの口調でそういう。

「じゃあ！ 梁先輩は知ってるんですかっ!？」

「……………」

「そこで無言にならないでくださいよ！」

くそー！ 俺達はどうすればいいんだ!？」

「とにかく、安全な所に行こう」

安全な所……………？

おお！ その手があつたか！

「そうですね！ そうしましょう！」

俺達も体験した通り、

この世界では戦闘が勃発している。

だからこそ、安全な所に行く。

だけど、安全な所って何処だろう？

「ふう……………私だってちゃんと最初から考えていたんだよ」

誇らしく腕を組みながらさういう。

梁先輩はさういうが、さっき思いついたんだろう。

「でも、安全な所って何処ですか？」

こんな世界に安全な所なんてあるのか？

林の中は既に一回戦闘に合ったから、安全とは言えない。



町の中は既に一回爆発音が聞こえたから、こちらでも安全とは言えない。

なら、他に何処がある？

「簡単なことだ」

「え……？」

先輩は黙ることはなく、そう逞しくいった。  
結構期待が持てそうだ。

「桜凜市の外だ」

桜凜市の外……？

一瞬意味が分からなかった。  
だが、すぐ理解できた。

「なるほど！確かに桜凜市から出れば安全かもしれない！」

100%安全とは言えない。

が、此処にいるよりは遥かに安全だ。

「おいおいマジかよ……桜凜市を出るって結構距離あるぞ？」

……。。……。。

確かに……聖夜のいう通りだ……。

この町から出るっていつても、そんなに簡単じゃない……。  
歩きだしたら途中で餓死か、疲労死しそうだ……。

「多少危険を伴うが、歩き以外の方法で行くしかない」

「多少危険……?」

菜月は小首を傾げる。

「歩き以外のほうほう?」

う~~~~ん……。

どうやって行くんだろう?

多少危険?滑ってくのか?

おお!確かに速そうだな。

多少危険だけ。

「答えは……自転車だ!」

あ!なるほど!

確かにこれなら歩きよりは間違いなく速い。  
でも……。

「その自転車をどうするんですか……?」

「街に出て自転車を狩るしかない」

妥当、これしかないだろう。

作れるものでもないし、生み出せるものでもない。

「皆はこれでいいな!?」

梁先輩は皆の同意を求める。

「問題ないですよ。璃桜先輩」

「うん。良いと思うよ」

菜月はうんと頷く。

「菜月ちゃんがいいっていうならいいよ」

皆は先輩の意見で賛成。

「ええ、いいですよ」

俺も賛成にした。

こうして全員の意見が一致した。

「よし！では街に出るぞ！！」

凩先輩が再び歩き始める。

この道は町へ続いているのだろうか。

俺達は先輩に続く。

こうして、俺達の自転車狩りが始まった……。

9月2日/侑eyes

光のピース集めて(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

俺達は桜凜市を出ることを目的とし、  
自転車狩りを実行へと移した。

だが、こんな森に自転車なんてある筈がない。  
あつた方がむしろ怖い。

何事も思い通りには行かないということだ。

だから俺達は、自転車を狩りに再び町を目指すのであつた……。

「こつちで合ってるのかな……」

俺は不安に満ちた声を漏らす。

此処が何処だが誰も分からない。

だから、染先輩の勘を頼りに俺達は歩いている。

それが一番の不安要素だ。

はつきり言つて、合ってる予感がまったくしない。

どんだん町から遠ざかつてる気がする。

「ッ!?!」

いきなり染先輩は足を止めた。

それに、続いて俺達も歩みを止める。

「どうしたんですかあ〜」

いつも通りマイペースな奏笑。  
こんな、状況でも自分の性格が変わらないってすごいことかもしれない。

「…………前から誰か来た…………隠れるぞ…………！」

梁先輩が振り返って俺達の方を見て、小声でそういう。

『前から誰か来た』

小声で言ったのは、前からきた人に気付かれないためだ。

俺達は無言で右側に隠れた。

ガサツと音が立つ。

此处では無音で行動するのは無理だ。

俺達が隠れた所は草々が生い茂っている。

身を隠すためなら十分だ。

そこで、俺達は身を潜めた。

「…………先輩…………どうするんですか…………？」

最低限の大きさで声を出した。

「…………まずは様子を見る…………もしかしたら話せる人かも知れない…………」

そうか…………。

全員が敵っていう訳でもないんだった。

桜凜高校の生徒かもしれないし、  
桜凜武装高校の生徒でも協力してくれる人もいるかもしれない。  
仲間は多い方がいい。

すると、二人の人影が見えた。

この影は前方から歩いてきた人の影。

もう俺達の近くまで来た。

「なんで、お前がついてくるんだ……」

声が聞こえた。

この声は男の人。

どうやら話をしているようだ。

「それはこっちのセリフツ！なんでアンタついてくるのよ！」

……。

どうやら、男一人と女一人で行動しているみたいだ。  
しかも、いきなり言い争い。

「じゃあ、俺はこっちから行こうかな」

男生徒が後ろに振り返り、歩き始める。  
すると、速攻に女生徒が口を開いた。

「な！ 何よそれ！ 意味わからない！」

更に言い争いが激しくなる。

俺達は気付かれないように身を潜める。

「はあ……。なんなんだよお前は……。やっぱりお前がついてきてるんだろ？」

男生徒が振り返った。

かなり、大きな吐息を漏らす。

「ち、違うつ！ 行きたければいいじゃない！」

「ああ、行かせてもらうよ。此処には隠れている人間も居るようだしな」

「ッ！？」

思わず声を出してしまった。  
あまりにも、予想外だった。  
気付いているような態度も一切していなかった。

『隠れて居る人間』

それは、恐らく俺達のこと。

いつの間に、ばれていたのか……。  
いつの間に……。

「か、隠れて居る人間？」

女生徒は周りを見渡す。

チエックメイトか……。

体が恐怖で戦慄する。



「……………」

男生徒は黙して俺達の方を睨み付ける。  
居場所まで正確に把握済みって訳か……。俺はこの危局をどう乗り越えるか考えた。だが、良い術が見当たらない。

すると先輩がゆっくりと立ち上がった。

「梁先輩……………？」

なにをする気なんだ……………？

恐慌している俺には何も分からなかった。

そして、先輩は男生徒の方へ歩いて行った。

「隠れていてすまなかった。謝る」

梁先輩は男生徒に話を持ちかけた。

こんな状況下でよくそんな事ができるもんだ……………。

すると、男生徒は微笑んだ。

「いや、とんでもない。お話が出来る方で何よりです」

良かった……………。

どうやら、この人は話が出来そうだ。  
少し安心した。

「私も話ができる人で助かった」

問題は女生徒。

無愛想な感じの人だったからだ。

もしかしたら、話せない人かもしれない。

女生徒の方を視てみる。

女生徒は近くの大木に背中をつけ、

腕を組んで、先輩と男生徒のやり取りを見ている。

俺は再び視線を戻した。

「俺は、桜凜武装高校3年戦術科Aランクの柊 蒼生です」

桜凜武装高校3年戦術科Aランクの柊 蒼生……。

…… Aランク？

って！先輩より上!？

「え、えええええ、イーランクだと!？」

「Aランクです」

俺はこの場から訂正を入れる。

また先輩が驚愕している。

先輩がランクで驚いたのは今日で2回目か……。

「ああ…間違えた… Aランクだと!？」

先輩が言い直す。

凩先輩はBランク。

そして、この男生徒はAランク。  
学年は同じだが、残念ながら先輩の方が1ランク低い。

「はい。称号は『きょうせい矯正の影法師ダークネス』です」

称号　！？

称号なんてあるのか？  
知らなかった……。

「矯正の影法師か……」

先輩は彼の称号を繰り返した。

「私は、桜凩武装高校3年現代剣術科Bランクの凩　璃桜。称号は『りょうげき両撃の右剣左銃クロウヴァル』だ」

りょうげき両撃の右剣左銃クロウヴァル……。

それが、凩先輩の称号。  
俺も今まで知らなかった。

「やはり3年だったか。よろしく頼む」

自己紹介を終えると親しみやすい言語に変わった。  
本当に話合えそうな人だ。  
俺達は運が良かったかもしれない。

「ああ、そうだな。よろしく頼む」

二人は握手を交わす。

俺達もそろそろ出ても大丈夫だろ。

俺はその場をゆっくりと立ち上がった。

「どうやら、大丈夫みたいだな」

聖夜も俺に続いて立ち上がった。

「よいしょ〜と。ほら、菜月ちゃんも〜」

奏笑は立ち上がり、菜月に手を差し伸べる。

「あ、ありがとう。奏笑ちゃん」

菜月は奏笑の手を握り、立ち上がった。

菜月と奏笑はいつの間にか仲良くなったみたいだ。

俺達は凩先輩の所へ行く。

「ん？君達は？」

蒼生先輩はこっちを見ながらそういった。

その問いに答えたのは、凩先輩だった。

「ああ、この人達は私の仲間だ」

先輩は誇らしくそういった。

そうだな。俺達は『仲間』だ。

先輩がそういった後、奏笑はあの女生徒の所まで駆けていた。

本当に、マイペースだな……奏笑は…。

「ほら、あ、あ・な・た・も」

奏笑が強引に女生徒の腕を掴んだ。  
予想外の行動に誰もが驚く。

「え？ちよつと……」

奏笑に引つ張られながら、  
女生徒がこつちまで来た。

「そつえば、お前の名前を聞いてなかったな」

女生徒は少し嫌そうな顔をしていた。  
だが、俺達のムードは明るい。  
このムードに彼女を引きずり込んでしまおう。

彼女は、一つ吐息を漏らしてから口を開けた。

「桜凜武装高校2年総合科Gランクの嘉上 緋咲。称号は『いはい違背の  
シャイヤ』」

じ、Gランク……？

それは予想外の言葉だった。

まあ、高い人もいれば低い人もいるってことかな……。  
でも、最低で何ランクなんだろう？

「総合科だっ！？」

先輩はGランクではなく、  
総合科という言葉に反応した。  
何か特別な科なのだろうか？

「まったくお前にピッタリだよな。その称号は」

称号……？

彼女の称号は違背いはいのシャイヤだったよな……。  
確かに合っているような気がする。

「う、うるさい！こんな不名誉な称号。ピッタリの訳あるか！」

不名誉……？

この称号は不名誉なのか？

「不名誉もなにも、お前そのものじゃないか」

再び言い争いが始まる。

俺も何処が不名誉なのかを探してみる。

「うるさいうるさいうるさ　　い！！どっか行け！！」

状況が悪くなったのか、誤魔化すように叫んだ。  
なんだか、こっちまで笑えてくる。

「ええ〜どこが不名誉なの〜可愛いよお〜」

何処までもマイペースな奏笑は話に加わる。

「ああ、それはだな……」

「死ねっ                    !喋るな!!」

蒼生先輩が喋ろうとした瞬間、  
もの凄い抵抗をする緋咲。

だが、その抵抗をもろともせず蒼生先輩は話を続ける。

「違背いはいのシャイヤの違背いはいって意味はな……」

「それ以上言ったら殺す……」

だんだんと、抵抗が脅しに変わってきている。  
だが、気にもしないで話を進める。

「違背いはいってのは規則などを守らないことをいう」

「死ね                    っ!!!!!!」

暴露した蒼生の顔面に向かって、緋咲は右ストレートを打ち込む!

『バシッ!』

その拳を左手で受け止めて、再び話を進める。

「コイツはランクが変更する重要なテストを受けたことがない。だから違背いはいって訳だ。校則に従わない」

「死ね                    っ!!!!!!」

さらに暴露した蒼生の顔面に向かって、緋咲は左ストレートを打ち

込む！

『バシッ！』

その拳を右手で受け止めて、  
再び話を進める。

「テストを受けていないってことは当然ランクも下がる。だからG  
ランクまで下がった。入学ランクはBランクだったのにな」

「死ぬ　　っ！！！！！！」

両手が塞がれているため、  
緋咲はヘディングをする！

『ドスッ！』

だが、明らかな背が違つ。  
緋咲のヘディングは蒼生の胸元で止められた。  
が、諦めずに何度もヘディングを試みる緋咲。

「び、びびびび、Pランクだと！？」

「Bランクです。何ですか…Pランクって……」

また、凩先輩は驚愕のあまりランクを間違える。  
入学ランクがBか……。  
結構すごいな……。

「ああ…間違えた……Bランクだと！？」



染先輩は意味のない訂正を入れる。

「今はGランクだそうです」

「うっさいわっ！細か過ぎだわっ！」

なんだか、本当に雰囲気明るくなった気がする。

やっぱり俺はこういう雰囲気の方がだんとつで好きだ。  
皆だってそうだろう？

これが、俺達の日常だったんだから。

9月2日/侑eyes

光のピース集めて(後書き)

―登場人物―

柊 蒼生(ひいらぎ あおい) : (男)

桜凜武装高校3年戦術科のAランク。

称号『矯正の影法師』(きょうせいのだークネス)

戦闘力はあまりないが、頭がかなり良く、  
状況判断力もかなり高く、いつでも冷静さを保っている  
装備はサブマシンガンを一丁所持している。  
本当の危機しか使用しない。だが当たらない。

身長:177cm

体重:58?

血液型:A

髪色:漆黒色 (黒系)

誕生日:11月19日

年齢:17

嘉上 緋咲(かがみ ひさき) : (女)

桜凜武装高校総合科2年生のGランク。

称号『違背のシャイヤ』(いはいのシャイヤ)

桜凜武装高校は総合科が最も入学が困難だが、

(レベルが何処の科よりも、ズバ抜けて高いため)

彼女は入学試験でBランクという結果を残した。  
だが、一年で数回行われるテストランクが変動するテスト  
をサボリ続けた。

その結果、入学当時のBランクからGランクまで下がってしまった。  
1年生のとき（その当時はFランク）は留年の危機だったが、  
入学試験のランクがBだったため、留年は免れた。

2年生になった彼女だが、  
今のままでは3年生へ上がれない。

だが、彼女は今もテストをサボり続けている。

身長：157

体重：44

B・W・H：83・47・85

血液型：B

髪色：ピンク色、ロングで髪を止めている。

誕生日：9月17日

年齢：16

### ―登場人物更新―

染 璃桜（しとぎ りお）：（女）

桜凜武装高校3年現代剣術科のBランク。

称号『両撃の右剣左銃』（りょうげきのクローヴァール）  
いつも最前線で戦う。

彼女の戦闘スタイルは右手に剣、左手に銃。

現代剣術科に入り独自に生み出したスタイル。

そのため、近距離でも遠距離でも対応が可能。  
仲間からの信頼は厚い。

彼女が使用している銃はMP7・OBK/SR。  
マガジンは20発を4個所持している。

身長：161cm

体重：47?

B・W・H：86・52・87

血液型：O

髪色：黄支子色（金髪系）、ロング

誕生日：1月16日

年齢：17

沙耶の中学生の頃からの親友。

沙耶が桜凜武装高校を入学すると知って、

璃桜も沙耶と同じ剣術科を受けたがレベルが高く、入学試験で落ち、

素人でも入れる現代剣術科へ入学した。

彼女はまったくの素人から、Bランクまで上がった。

彼女のセンスは開花し続ける。

仲間に憧れている。

9月2日 / 沙耶eyes

志(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

5話(2) 目覚め

「そうか……安心したまえ。君達は私が守る」

真っ直ぐな中沢くんの眼に賭けた。

前だけを見つめる瞳。

その眼には一つも陰りなんてなかった。

私は鞘から刀を抜く。

この刀は天下五剣の一つ、三日月宗近。

三日月宗近には神秘的な力が宿されている。

だからこそ、この刀にした。

この刀なら守ってくれる。

「使いたまえ」

三日月宗近を中沢くんに渡した。

真剣を一般人に渡すには抵抗がある。

しかも、今日だけで2回目

中沢くんは鍛錬や訓練、

基本すらろくに出来ていないだろう。

それが、私とは違う一般人。

それが普通なのだろうか？

私は自分の手の中に納まっている三日月宗近を見つめる。  
人を殺すための道具。

そのために作られた刀。

それが一般の考えなのだろうか？

だが、私はそうは思わない。

これは何故だろう？

桜夜家に生まれたから？

小さい頃からずっと修行をしていたから？

慣れたから？

いや、違う。

刀を使う本人が違ければ、刀の全てが変わってくる。

人を殺すための剣になるのか、

大切な何かを守るための剣になるのか。

刀には心がない。意思がない。

故に刀を使っている者の通りにしか動かない。

私はどちらなのだろう？

どっちで在りたいのだろうか？

私は迷わず、守る剣を選ぶ。

弱き者、大切な何かをこの剣で守りたい。

これが私の想い。

一生貫き通すと決めた魂<sup>こころ</sup>

中沢くんが刀を受け取った。

重たいのが表情で見受けられる。

中沢くんの剣も守るための剣。  
中沢くんの眼を見ればわかる。  
決心に満ち溢れている眼。  
その眼には陰りはない。

「よし！行くぞー！！」

私は銃声が聞こえた所へ走る。  
無抵抗な者に被害を及ぼすとは……！  
また、命が消えていくのか？  
いや、私はその命を守らなくてはいけない！  
何にでも縛られないで、自分の意思で！

「事態が悪い！私は先に行くー！！」

今まで中沢くん達のスピードに合わせていたが、  
全力疾走で現場へ向かう。  
間に合ってくれ！

草を掻き分けながら進んでいく。

すると眼の前に広場が見えた。  
そこで戦闘を行われているのだろう。

『ガサー！！』

私は広場へ着いた。  
周りを見渡す。

「な……！！」



火薬と血でむせ返るような臭い。

「間に合わなかったのか……」

そこには中沢くん達と同じ制服を身に着けた少年少女が血を流して倒れていた。

「貴様……!!」

声が震える。桜凜武装高校の生徒を睨みつけた。

「おっと……貴方は桜夜沙耶」

そのチームのリーダーであろう少女が反応した。  
このチームなのか……。桜凜高校の生徒を殺したのは……!!

「貴方の殺害命令が戦術科から出されています」

殺害命令っ!?

私が命令に従わなかったからか……。

その程度の事で殺害命令を出すとは……。

相当戦術科の連中は相当狂っているとみえる。

いや、桜凜武装高校すら相当狂っている。

「ほお、何故かな？」

元々こんな狂気な命令に従うつもりはさらさら無い。

私は桜凜武装高校の生徒を敵に回すことになった。

それでも、信念を曲げたりはしない!

「何を馬鹿なことを……」

生徒はふふんと鼻で失笑をする。

この生徒は剣術科。制服を見れば分かる。

このチームは、見る限り、

様々な科により構成されているとみえる

チームと言うのは、

桜凜武装高校の生徒同士でグループを組み、共に行動する仲間の事。誰とでも組める。

科を超えて幅広チームを作るのも可能。人数の制限もない。

私は一人と組んでいた。

つまり、私のチームは私を入れて2人。

「そんな事を知って何になる？」

「そうだな」

次は私が失笑する。

もう私の居場所は桜凜武装高校ではない。

「では、桜夜沙耶。覚悟……」

生徒が手を腹部付近で交差させ、

左右に差してある刀を、

ゆっくりと上にあげながら抜いた。

彼女の武器は両手刀だ。

「言っておくが、私は剣を握って、戦いに敗れたことは一度もない」  
我ながら良く言う。

だが、あえて自らを鼓舞するように、傲慢な物言いを選んだ。

その言葉を聞き、少女の顔が微笑む。

「面白いつー！」

刹那、滑るような動きで、少女が間合いを詰める。

「立花道雪っ！千鳥っ！」

私は腰に差してある千鳥を抜いた。

『カキーン！！！』

刀同士がぶつかり合う音。

生徒は右の刀で千鳥を押さえる。

「はあっ！！」

だが、予め予測をしていたように少女は空いている左手で、私の横腹に切りつける！

「遅いつー！！」

私は低い体勢からバネのように大きく飛翔した。

「流石はSランク……」

重力に従い私の身体は地面に向かって落下する。

それを利用して、千鳥の刃先を地面の方に向けながら頭から落下する！

「はぁ　　っ……!!」

千鳥は風を切り、一直線上に生徒の方へ。  
だが、少女は薄笑いを浮かべていた。

「ふ……甘い……撃てっ……!!」

「な……!!」

『ズド　　ンッ……!!』

林の方から銃声がした。

狙われていたのか!?

此処は空中。避けるのは困難。

私は千鳥を右手だけで持ち、神切を鞘から抜く。

『カキ　　ンッ……!!』

銃弾を神切の刃に当てた。

だが、こうしている間に次の一発もくるだろう。

なら

「はあっ！！！！」

銃声のした場所目掛けて神切を矢のように投げつけるっ！

『ビシユ　　っ！！！！』

あっと言つ間に神切は目標へ到達。

「ぐはあ！？」

狙撃をしていた生徒に神切の刃先が挟り込む。

そこから赤い血が吹きだしているのが分かる。だが、急所は狙っていない。

「はあ　　！！！！」

そして、最速の速度で地面に落下。

千鳥の刃先はリーダーである生徒。

今度の少女の表情には、薄笑いは消え、焦りが見え始める。

「くう……………」

生徒は後方へ半回転し華麗に避ける。

なかなか強い…………。

この攻撃を避けるとは…………。

私は地面に到達する。

その落下の勢いで千鳥を地面に突き刺し、両手で千鳥を握りながら、倒立をするような態勢になった。

そして千鳥を放し、地面に着地。

地面に刺さった千鳥を抜き、千鳥を再び構え直した。

「還り来たれ！神切！」

呪を唱えた刹那、神切が鞘に戻ってくる。

「よくも仲間を……」

仲間。

それはさきほど神切を投げ、直撃した狙撃手のことだろう。

「貴様、何ランクだ」

此処まで張り合う、相当の実力者。  
それだけは分かる。

「私は桜凜武装高校剣術科Aランクの赤瀬川 麗那だ！」

そう言いながら、接近し乱舞攻撃。

両手刀だからあらゆる所から斬撃がとんでくる。

「覚えておこう！赤瀬川 麗那！」

こちらも攻める。

防御ばかりでは勝てない。

麗那くんは乱舞攻撃なのだが、隙が見当たらない。  
強い剣士だ。

「麗那っ!!」

林の中から一人の女子生徒が私の方へ接近して来る  
刀は抜刀状態。

「止める!お前がかなう相手じゃない!!」

乱舞を繰り広げながらも、周りを把握している。  
お見事。私は防御しか出来ない。

「でも!!」

「言うことを聞いてくれ!絶対に倒す!」

「麗那……」

何だが私が悪役のような感じた。

麗那くんは仲間想いの良い人間だ。  
そんな人間を敵に回すとは惜しい。

「頼む!退いてくれ!!」

麗那くんが悲願するようにそうに言う。

「……わかった……どうか無事で……麗那……」

生徒が走って後退して行く。  
仲間同士も信頼し合っている良いチームだ。

「なによそ見している!!」

乱舞攻撃が強さを増す。

右、左、交互に連続攻撃を繰り返して来る。

息もつかずに、攻めて攻めて攻めてくる麗那くん。

『カキーン！カキーン！カキーン！カキーン！』

刀同士が交差する音が永遠に繰り返される。

「くう……このままでは……」

麗那くんの攻撃は正確で精密。

千鳥の同じ刃身しか攻撃してこない。

千鳥の刃がダメージを蓄積している。

このままでは折れてしまう。

「刀ごと負ってあげるっ!!」

この状況を脱出したいが、反撃、間合いを取る隙が何処にも無い。  
だが……!!

「千鳥に宿われし雷魂よ！再び生ずことを請う！」

私は呪を唱える。

呪を唱え終わると、千鳥の刃に電気が流れ始める。



「な……！自然魂！？」

自然魂。

それは、自然をつかさどる魂。

雷魂も自然魂の一つ。

「今、此処に雷魂を開放する！！」

音を立てて、大きく千鳥が帯電し始めた。

「立花道雪！雷切！！」

再び音を立てて、大きく帯電する。

千鳥から雷切へ変化した。

「くう……」

苦声を漏らしながら、

麗那くんは後転しながら地面を大きく蹴り、距離を稼ぐ。

私は雷切を片手で持ちながら、後退して行った麗那くんにゆっくり接近する。

「た、たかが自然魂で調子に乗って！！」

麗那くんは後転の回転の勢いを利用して、すぐさま体制を整えた。

これで、決めなくてならない。

私は体制を低くして雷切を両手で構えた。

「幻剣……」

少女は両手の刀を右側に出し、眼にも止まらぬ速さで地面を滑るように接近してくる。

「我が剣よ請え！全ての雷魂を飲み込み、正法を生じよ！」

先ほどと比べ物にならないぐらい帯電する。  
これが雷切の力。

「雷神正法……龍来……」

雷切の刃が雷で倍増する。  
雷が刃と化している。

「斬体剣……」

眼には見えない程の速さで、抜突。  
狙いは胴体。当たれば切断されるだろう。

だが……！

『ガキ　　ン……！！！！』

雷と化した刃と麗那くんの刀が激しく交差する！

『バキンッ……！！』

「そんな……！？馬鹿な……！！」

麗那くんのその両刃とも折れて刃が宙に舞う。  
そして、宙に舞った刃が地面を突き刺す。

私は武器を失った麗名くんの顔の前に刃先を向けた。

「もはやこれまでか……皆逃げろ！！」

麗那くんは自分のチームの仲間告げた。

「君も逃げたらどうなんだ？」

私は覚悟を決めた麗那くんにそう告げた。  
麗那くんは逃げる気はないようだ。  
このまま、私に殺されるつもりか……。

「な！哀れむつもりですか！？」

「此処で死にたいのか？」

麗那くんは此処で命を落とす器ではない。

これは甘さと言うのだろうか？  
いや、人を殺さないのがどうして甘さや情けになるのだろうか？  
自分が危険になるから？不利になるから？

どんな理由があっても、  
人を殺すこと何てあつてはいけない。

「死などすでに覚悟をしている!!」

私は雷切を前にだした。

「雷魂よ、再び眠れ」

呪いを唱え終わると、

雷切の刃から、電気が消える。

そして、千鳥を鞘に戻した。

「桜夜沙耶!?何を……」

私はその場を離れ、潤くん達の場所へ走っていった。

9月2日 / 沙耶eyes

志(後書き)

―登場人物―

赤瀬川 麗那(あかせがわ れいな) : (女)

桜凜武装高校剣術科Aランクの3年。

彼女が率いるチームのリーダー。

彼女はチームと共に異世界からであることを誓い、

『目的』を達するため戦術科の命令に従う。

彼女の武器は両手刀。

身長 : 166cm

体重 : 48?

B.W.H : 85.53.88

血液型 : B

髪色 : 猩々緋色(赤系)、ロング

誕生日 : 11月26日

年齢 : 17

―用語集―

雷神正法(らいじんせいほう)

桜夜家に伝わる雷魂を使う桜夜流の剣技。

雷切のみ使用可能。

全て習得するには困難な技で、技数も豊富。

雷神正法の一つ一つの剣技が、かなりの難易度。

### 幻剣（げんけん）

桜凜武装高校で教えられる剣技。

威力や難易度も様々で、技数は無数にある。

9月2日 / 美唯 eyes 信力 (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月2日 / 美唯eyes 信力

5話(2) 目覚め

「えっ！？潤っ！！危ないって！！！」

銃声のした方へ走りだす、潤に向かって叫んだ。

やだ……。潤……。

行かないでっ！！

その想いは届かず、潤は林の中へ消えた。

「潤……」

私はどうすればいいの？

潤を助けに行けばいいの？

それとも動かなければいいの？

私には武器がない。

戦えない。

私は一人で震えていた。

『ズドーン！！！！』

再び銃声がした。

右側の方から。



つまりは潤が向かった場所から。

「もういや……どうしてこんな世界に……」

何で私達なの？

どうして殺し合うの？

協力は出来ないの？

自然と涙が流れた。

慌てて流れた涙を拭った。

泣いたら駄目だ！

自分のできることを考えなきゃ！

私にできること……。

それは信じること。

「潤……先輩……どうか無事で……」

祈るように願い、信じた。

眼を閉じて。

手を握り、祈った。

……。

様々な音がする。

何の音？

ピカッと前方が光った。

「あれは雷？」

確かにそれは雷だった。  
どうして一部だけ……。

まさか先輩の雷魂！？

位置的にも先輩の向かった方向。  
本当に雷魂が宿っているなんて……。

先輩は強くて綺麗な人。  
そして、憧れるような人。

「おお！成沢くん！無事だったか！？」

先輩が戻ってきた。  
よかった……。

先輩は無事だ……。

「先輩……潤が戦場に……」

「何！？何処だ！？」

『ズド      ンッ！！！ズド      ンッ！！！ズド      ンッ！』

潤の向かった方向で、  
銃声がした。

潤……。

「行くぞ！！！！」

先輩がその場へ向かって走る。

草を掻き分け、広場に出た。

だが、この場はおかしい。

見たことが無いものがそこには存在していた。

「結界ッ！？」

結界……。

その桜夜先輩言葉がピツタリ。

その中に潤がいた。

「潤            ツ！！！！！」

私は潤に向かって走った。

「待ちたまえ！」

だけど、桜夜先輩に声で止められた。

「どうしてですか！？」

すぐ近くには潤がいる。

なのにどうして行っては駄目なの？

「あれは結界だ。触ればどうなるかは予想出来ない」

結界の中に潤がいる。  
どうして結界の中にいるの？  
閉じ込められたの？

「中沢くんツ！！！」

先輩が結界に近づき、大声を出す。

「潤 ツ！！！」

私も叫ぶ。

だけど、なかなか潤は気付いてくれない。

「中沢くんツ！！！」

「潤 ツ！！！」

大声を出す。

潤に届くように。

ようやく潤が振り返ってくれた。  
そして、結界が消える。

「中沢くん！大丈夫かね！？それと、先ほどの結界はなんだね！？」

「潤ッ！！大丈夫！？」

私と先輩は潤のもとへ走った。

「細かいことは後で！まずはこの女の子を！」

女の子……。  
そこには女の子が倒れていた。  
地面には血がたまっている。

「はぁ！これはいけない！」

「わぁ！大丈夫！？」

先輩と共に女の子の手当てを行った。

潤……。無事で本当に良かった……。

9月3日/侑eyes

新しい日常を(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

19月3日ー

この日もやっぱり異世界で迎えた。  
こんな世界からは出たっていうのに……。

俺達は森の中で一晩を過ごした。  
16年間生きてて初めての体験だ。

だが、何もせずにこの世界から、  
出れるなんてことはないだろう。

……。。……。。

俺ははつきりいって寝れなかった。  
動物もないから、静かではあった。

その中で俺達は何故か夜が明けるまで語り合っていた。  
まるで修学旅行のように、くだらない話だった。

よくあんなに話せたなって思うぐらいだ。

寝不足は俺だけじゃなくて全員だろう。

「……………」

なんだか体中が重い……。  
俺は寝返りを打つ。

……。

眠れないなら起きよう。

これしかない……。

「よいしょ……」

威勢のない声で身体を起こす。

だが、身体を起こしただけ。

その後は膠着じょうちやくしていた。

……。

俺って今、酷い顔してるんだろっな……。

相当疲れてる顔をしているんだろっな……。

自分の顔がだんだん心配になってきた。

周りを見してみる。

全員倒れている。

いや、寝ているか……。

つまり、起きているのは俺だけ。

うっっん……。

何しようかな……。

暇だな……。



俺は周りを見ながら、そう考える。

ああ、パソコンやりたいな……。

電気のない生活は本当に不便だ。  
改めてそう感じた。

俺はポケットから、携帯電話を取り出す。

「……………」

俺は黙して開いていない携帯を見つめる。

……。……。……。

見るのに飽きた俺は、携帯を開いてみる。

「やっぱり映らないか……………」

画面は真っ黒のまま。

その黒い画面に俺の顔が薄っすらと見える。

「俺を映してどうするんだよ……………肝心な画面を映せよな……………」  
携帯に向かって文句を垂らす。

俺は携帯を閉じ、ポケットに入れる。

「はあ……………」

大きく吐息を漏らす。  
電気を使わない遊びか……。  
この暇を乗り越えないとな……。

……。

「一人ジャンケンでもするか……」

俺は右手と左手を向かい合わせる。  
もちろん、最初はグーの形だ。  
それが、基本だからな。

そういえば、ジャンケンって絶対に、『最初はグー』っていうよな  
……。  
あれって意味あんのかな……。

だって、最初っから、『ジャンケン、ポツ!』で、いいような気がする。

後、絶対に『最初はグー』っていうところで、  
パー出す奴いるんだよな。

そして、『イーイー!勝ったー!』ってほざいてるんだよな。  
聖夜とか聖夜とか聖夜とか……。

そういえば、ジャンケンって各地方でかけ声が違うんだっけ?  
確か違ったような気がする。

「さあ、一人ジャンケンの始まりだ!」



「おっと！あいこだ！これが伝統の一戦だ！」

無意識に出した両手の形はお互いに、  
パー。

試合は第2ラウンドへ……。

「第2ラウンド！Are you ready!？」

「Yeeeeee ……！！！！！！！」

俺一人テンションMAX。

さあ、始めようか！

「最初はグー！ジャンケンッポ！！！」

俺は再び無意識に両手を動かす。

さあ、どっちの勝ちだ！？

が、そこにはありえない光景が広がっていた。

「な！手が三つだと！」

信じ難い光景を眼にした。

俺の手が三つに！？

人体の進化か！？

いや…手が三つあってもいらないうな……。

そしたら、進化じゃなくて退化か……？

くそ！なんで俺が退化しないといけないんだよ！

が、その手は俺の前から出されていた。  
明らかに違う手。

「勝った」

「ッ!？」

俺は顔を上げ、前方を見上げた。

そこにいたのは緋咲だった。

「嘉上 緋咲!!」

俺は再び視線を下に落とし、ジャンケンの結果を見る。  
そして、忘れていた実況を入れる。

「おお!なんとということだ!伝統の一戦に挑戦者か  
!!」

が、結果は俺が負けていた。

俺は両方とも、グー。

緋咲はパー。

俺は両手なのに片手の緋咲に負けた。

「何やってんの?」

改まって俺に問いかける。

結構恥ずかしいところを見られたかもしれない。

「見て分からないのか?一人ジャンケンだ」

だが、俺は平然を保つ。  
一人ジャンケンしてなにが悪い？  
以外に燃えるんだぞ？

「そんなことやって楽しい？」

……。。。。。。

楽しいのか？

これって……？

俺は我に返る。

「いや、全然」

俺は何が楽しくてこんなことを  
始めたのだろうか？

「アンタってバカ？」

「ああ」

それは、否定しない。

俺はバカだ。

いや、バカが一番いい。

いや、バカってそんな生ぬるいもんじゃない！  
バカって素晴らしいじゃないか！

「お前だって十分過ぎるバカじゃないか」

緋咲の後ろから男の声が聞こえた。

この声は蒼生だ。

「うるさいうるさ　　いっ！！お前はあっち行け！」

緋咲の声が響き渡る。

「朝っぱらから叫んで……お前は元気だな」

蒼生先輩のいう通りだ。

確かに元気だ。

元気なのは良いことだ。うん。

「これからの件だが……」

リーダー梁先輩が声を上げる。

全員、面子が揃ったところで、全員で円を描くように座る。

「俺は貴方方に協力しますよ」

おお！なんとというありがたい蒼生先輩のお言葉！

昨日の夜の語りで俺達の結束は固まったからな。

「本当か！？」

梁先輩は蒼生に視線を送る。

「ええ。」こんな世界”だ。協力し合いましょう」

こんな世界……。

そうだった。

此処は殺し合いが日常化している世界。

「それは心強いな！」

梁先輩は笑みを浮かべる。

俺は周りを見渡す。

いつの間にか7人になっていた。

最初は3人から始まった。

菜月、聖夜、梁先輩、奏笑、蒼生先輩、緋咲、  
そして、俺。

「ふん！あまり気が進まないけど仲間になってあげてもいいわよ！」

緋咲は腕を組み、そっぽを向きながらそういった。  
しかも姿勢は胡座をかいている。

「俺だってお前が仲間になるなんて気が進まないぞ」

「うるさいうるさいうるさ  
ね  
い！！いいからお前は早く死  
ね  
！！」

再び緋咲の高い声がこの森に響き渡る。



「緋咲もそんなに暴れるな」

梁先輩は笑顔でそういった。  
楽しそうに微笑んでいた。

「暴れてなんてない！」

随分と雰囲気良くなった。

昨日より更にだ。

この世界の恐怖すら忘れてしまうほどだ。

この世界での生活も悪くはない。

この世界にきたときは、そんなことはまったく思わなかった。  
いや、思う筈もないことだった。

俺はこの世界でも新しい日常を掴みかけていた。

9月3日/侑eyes

ファーゼストクンパニアン(前書き)

「君の魂に抱かれてー(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「ゴホン！」

梁先輩は咳払いをする。

俺達は円を描くように座っている。

「これからの行動も大切だが……」

梁先輩が再び話を再開した。

「まずは、チーム名を決めたいと思う」

チーム名？

ああ、なるほど……。

俺達のチーム名か……。

確かに、あったほうが何だか燃えるよな。

「チーム名？」

聖夜がオウム返しに繰り返す。

「ああ、そうだ。チーム名を決めて、より団結力を強くしようじゃないか！」

梁先輩は皆の合意を求めるように全員に呼びかけた。  
そうだな。

確かにチーム名は付けた方がいい。

「そうですね。俺も賛成です」

断る理由もないし、俺は賛成にした。

「可愛い名前にしようねえ」

……。

可愛い名前？

ハムスターとか？

なんか弱そうな名前だな……。

「そうね。名前は付けた方がいいかも」

菜月はコクリと一回頷く。

「どうせ付けるならカッコいい名前じゃないとな」

まったく聖夜のいう通りだよな。

可愛い名前は嫌だよな。

こうして次々と賛成票が増えていく。

「俺は構わないが」

蒼生先輩は状況に合わせたようだ。

「あだ名付け名人って呼ばれた実力！魅せてあげる！」

緋咲は両腕を組みながら、誇らしくそういった。

あだ名付け名人……？

そんなあだ名で呼ばれて嬉しいのか？

「嘘はいけないぞ。緋咲」

やっぱり嘘だったか……。

ともかくで、全員が賛成だ。

「では、早速命名をしよう。思い付いた奴は拳手！」

さあつて……。

俺も考えるか……。

「はあ〜い〜！」

誰よりも早く奏笑が手を上げる。

その手を何度も上下左右に揺らす。

「じゃあ、奏笑！」

揺らしていた手を、

元の位置に戻した。

「ハムスタ〜！」

……。

俺の予感が物の見事に的中した。

「ボツツ！」

凩先輩に即答された。

「う、うわゝゝゝんゝ」

奏笑が声を出して泣き始めた。

フォローしたいが、フォローのしようがない。

「流石にハムスターはないな……」

さらに聖夜がダメ押しをする。

「う、うわあゝゝゝんゝ」

俺も聖夜に賛成だな。

流石にハムスターはない。

「元気だしてよ奏笑ちゃん！この良さは女の子しか分からないんだよ」

奏笑を慰める菜月。

美しい友情だ。

俺も聖夜が不適切な発言をしたらフォローしないとな。

「じゃゝ、なんで凩先輩はボツって言ったのゝ」

「そ、それは……」

痛い所をつかれたのか、少しの間考え込む菜月。

「う、うわ~~~~ん」

.....。

「次ッ！」

そんな奏笑を無視して話を進める。

う~~~~ん.....。

何がいいかな.....。

「はあ~~~~い~~~~！」

再び奏笑が手を上げる。

その手を何度も上下左右に揺らす。

もう立ち直ったのか.....。

何処までもマイペースだな.....。

「じゃあ、奏笑！」

揺らしていた手を、

元の位置に戻した。

「カピパラ~~~~！」

.....。

それ可愛いのか？

「……………」

「う、うわぁ〜ん〜」

先輩の反応でボツと理解できたようだ。  
それはそうだ。

「俺達！カピパラが相手になろう！」  
とか、最高に格好悪いからな。

「次ッ！」

英語風とかカツコいいかもな。  
でも、それが思い付かない。

「はい」

蒼生先輩がゆっくりと手を上げた。  
なんなんだろう？

今までになかったこの期待感は……………。  
あ、そうか……………。

今までの二つは両方とも奏笑だったからか……………。

「じゃあ、蒼生！」

名前を呼ばれた後、ゆっくりと手を下ろした。

「ファーザー  
Fartherなんてどうだ」



おお！すつごくまともな意見だ！  
ようやく話合いつぽくなってきた

「お、お父さん……？」

「それは、ファーザーFatherだ。読み方は同じだけどな」

ファーザーFarther。

俺もどつという意味かは知らない。

「ファーザーFartherは【さらに先へ】ていう意味だ」

さらに先へ……。なるほど、いい意味だな。

「さらに先か……候補入りだ。他には！」

俺もそろそろ案を出さないと……。そういえば、聖夜つて以外に英語が得意だったよな。なんでだろう？前世が外人だったのかな？

「はい」

緋咲が自信ありげに手を上げる。  
さあ、あだ名付け名人って呼ばれた実力。  
魅せてもらおうか。

「じゃあ、緋咲！」

緋咲は上げていた手を下ろした。

「チーム緋咲!!」

「ボツツ!!!!!!」

この時、初めて全員の声が揃った。

しばらく静寂が続いた。

原因を作ったのは緋咲だろうな。

「はいつ!」

威勢よく聖夜が手を上げる。

この静寂を破ったのは聖夜だった。

「じゃあ、聖夜!」

聖夜はゆっくりと手を下ろした。

「We <sup>ウイ</sup> have <sup>ハブ</sup> the <sup>ザ</sup> brilliant <sup>ブリアント</sup> future <sup>フューチャー</sup>」

英単語ではなく英文だった。  
随分と長いチーム名だな。

「意味は?」

「俺達には輝かしい未来がある」

おお……。

意味的にはいい意味だし、聖夜にしては良い意見だ……。  
だけど長いな……。

「チーム名には長すぎるな……。よし！これを合言葉に使おう！」

「合言葉？」

合言葉っていわれてもピンとこない。

だから俺はその言葉を繰り返す。

「ああ、もしも戦闘になった場合この言葉を全員で言い、士気を高める。合言葉にはこんな意味もある」

なるほど……。

『We have the brilliant future』

俺達には輝かしい未来があるっか……。

「皆は『We have the brilliant future』が合言葉でいいか？」

梁先輩は皆の合意を求めるように全員に呼びかけた。

「そつだな。良いアイデアだ。採用しないとな」

蒼生先輩も頷く。

周りを見るが、全員頷いている。  
決定だな。

なんだか、随分と本格的になってきた。

「はい！」

威勢よく菜月が手を上げる。

「じゃあ、菜月！」

菜月はゆっくりと手を下ろした。

「カンパニオン Companion！」

菜月が上げたのは英単語だった。

「意味は？」

「仲間！」

仲間……。

素晴らしい意味だな。

そんなことを思っていたら  
再び蒼生先輩の声がした。

「はい」

菜月に負けじと、蒼生先輩がゆっくりと手を上げた。

「じゃあ、蒼生！」

名前を呼ばれた後、  
ゆっくりと手を下ろした。

「ファーゼスト Farthestなんてどうかな」

またもや、素晴らしい意見。  
どっかの奏笑たれかさんとは大違いだ。

「意味は？」

「【遙か】という意味だ」

遙か……。

……。

おお！これなんかどうだ！？  
俺の脳内に良案が浮かぶ。

俺は手を上げるのを忘れ、発言に出た。

「菜月の出した【カンパニオン Companion】と【ファーゼスト Farthest】を  
合わせてみればどうですか！？」

「合わせる？」

梁先輩が俺に聞き返した。

「【ファーゼストクンパニアン】意味は【仲間の遙か先】  
ファーゼストクンパニアン。  
その意味は、『仲間という関係すら遙かに超えた関係』  
という意味。」

「……………」

先輩は黙り込んだ。  
あれ？駄目だったかな？

「素晴らしいんじゃないか!？」

梁先輩には好印象だった。

「そうだな。カッコいいしな」

聖夜も格好良いと言ってくれた。

「俺にしては、いい案だったんじゃない?」

「菜月ちゃんがいいならいいよ」

「そうだな。俺も賛成だな」

蒼生先輩も賛成。  
次々と賛成票が集まってくる。  
なんだか嬉しい。

「まあ、いいんじゃない？【チーム緋咲】には劣るけど」  
全員、哀れむような眼で緋咲を見つめる。

「そ、そんな眼でみるな  
！！！！！！」

今、全員の意見が合意した。  
俺達は……。

「私達は、『ファーストクンパニアン』だっ！！」

9月3日/侑eyes

ファーズストクンパニアン(後書き)

ー用語集ー

ファーズストクンパニアン(Farthest Companion  
n)

染 璃桜をリーダーとするチームの名称。

チームメイトは、染 璃桜、天神 侑、蝶野 菜月、  
衛藤 聖夜、新稲 奏笑、柊 蒼生、嘉上 緋咲、の7人。

名前の由来は、菜月が出した案【Companion(仲間)】と、  
蒼生が出した案

【Farthest(遙か)】を侑が合わせたもの。  
ファーズストクンパニアンの意味は、『仲間という関係すら遙かに  
超えた関係』

合言葉は、『We have the brilliant future  
iチャイ (私達には輝かしい未来がある)』  
t u r e



9月3日/侑eyes

交差する真実(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月3日/侑eyes

交差する真実

俺達『ファーズストックンパニアン』は、更に話を進める。

「ゴホン！」

梁先輩は咳払いをする。

この話合いの司会者は梁先輩だ。

俺達は円を描くように座っている。

「さあ、そろそろ本題に入ろう」

『本題』

それは、これからの行動について。

俺達『自転車狩り』を実行していた。

その途中で、蒼生先輩と緋咲にあった。

その二人は今は仲間だ。

だから、皆で話合う必要がある。

「これからどうするかだ」

ファーズストックンパニアンの

これからの行動について。

その話合いが始まった。

「まず、蒼生はどこまで知っている？」

それはここ、異世界のこと。

蒼生先輩なら俺達より知っているんじゃないか？  
期待も膨らむ。

「ああ、そうだな……」

蒼生先輩は頭の中で整理しているようだ。  
俺達は黙って見守る。

「何も知らない」

ツ！？

何も知らない！？

俺が思っていた回答とは正反対だった。

「そうか……」

凧先輩は残念そうに肩を落とす。  
先輩も期待していたようだ。

「なんであたしには聞かない？」

意味ありげに緋咲が発言をする。  
緋咲は何か知っているのか！？

「何か知ってるのか？」

梁先輩は落としていた視線を上げる。

「何も知らない」

……。……。

しばらく、静寂に包まれる。

違う意味で、期待を裏切らなかつたな……。

「お前、そろそろ死んだ方がいいぞ」

この静寂の中、蒼生先輩の言葉が鋭く響く。

「なんでよ！アンタと同じことをいったのよ！」

確かに同じことだけどさ……。

明らかに緋咲は悪意を持つてるていうかさ……。

「ゴホン！」

梁先輩が一つ咳払いをする。

「私達が行っていた行動はこの桜凜市から出ることだ」

その為の『自転車狩り』だった。

歩きだけでは、流石に無理がある。

どっちにしろ、俺達の目的はこの桜凜市から出ることだった。

「桜凜市から出る？」

初耳の蒼生先輩は少し驚いていた。

「ああ、この異世界は戦闘が勃発している。だから安全な桜凜市の外に行く」

「な！異世界だと!？」

蒼生先輩は驚愕する。

そうか……。

蒼生先輩は何も知らないんだっけ……。

「ああ、そうだ。此処は異世界だ。電気も使えない。桜凜高校、武装高校以外の人間はいない。簡単に言えばこんな世界だ」

俺も此処が異世界と知ったとき、

訳が分からなかった。

だが、普通の世界ではないってというのは理解していた。  
蒼生先輩もそうだろう。

「確証はあるのか？」

確証　　!？

確証とは『確かな証拠』という意味。

俺は『此処が異世界』であるという証拠を探す。  
だが……。　　見つからない。

「　　ッ!？」

凩先輩は目を大きくする。  
先輩もそれに気付いたようだ。

そうだ……。

『此処が異世界であるって証拠はない』

「ええ〜?それってどういう意味〜?」

状況が理解出来ない奏笑は困惑している。

「つまり、此処が異世界であるって証拠はどこにあるって意味だ」

聖夜のいう通りだ。

俺達は、凩先輩が言っていた『異世界』という言葉に縛られていたんだ。

『異世界である』と聞いて俺はすぐ納得した。

普通の世界ではないって気付いてたからだ。

だが、『普通の世界ではない』と『異世界』は『= (イコール)』じゃない。

「凩先輩はどうして此処が異世界だって知ったんですか?」

菜月は疑問を凩先輩へ投げ込む。

問題はそこだ。

そこが分かれば、大きな核心へと進むことが出来る。

「此処が異世界だって知ったのは、全校集会のときだ」

全校集会？

先輩は桜凜武装高校。

ということは、桜凜武装高校の全校集会。

「全校集会！？」

蒼生先輩は桜凜武装高校の一人だよな……。  
いかにも、初耳のリアクションだ。

「全校集会で話をしていた戦術科の言っていた言葉。それが、『此  
処は異世界』だった」

なるほどな……。

つまり、全校集会で話をしていた戦術科の人が、  
『此处が異世界』て明言したんだな……。

「全校集会なんてあった？」

緋咲も初耳のリアクションだった。

……。

話が組み合わない……。

余計、話が混雑してきた……。

どっちが正しいんだ？

それとも、どっちも正しいのか？

それとも、どっちとも間違いなのか？

「全校集会なんてあったの〜？」

奏笑まで！？

一体、どれが真実なんだ！？

「ああ、間違いなくあった」

だが、凧先輩ははっきりと言い切った。

俺も頭をフル回転して考えてみる。

全校集会だぞ！？

全校参加の集会だぞ！？

どうして、こんなに意見が食い違うんだ！？

「全校集会に参加してなかったのか！？」

全校集会が本当にあったなら、

知らない、奏笑、蒼生先輩、緋咲、は、

参加していないことになる。

「全校集会の時間帯と場所は？」

蒼生先輩は更に追及する。

より正確に真実を知るためだろう。

流星は戦術科のAランクだ。

「学校が終わったすぐに体育館でだ。時間は……5時半過ぎ辺りだった気がする」



学校が終わったすぐの体育館で……。その頃俺達はなにをしていたんだろう？放課後だから、俺達は帰宅中か……。

「それは、9月1日か？」

9月1日。

その日はここに来た日。

一生忘れない日だろう。

そして、運命の日。

「そつだ。9月1日だ」

やはりそのようだ。

だが、その集会を知っているのは染先輩だけ。

「9月1日の放課後か……」

蒼生先輩は記憶を手繰り寄せている。

「その時は緋咲に絡まれていたな……」

絡まれる……。

緋咲に絡まれてたつてことは、

緋咲のこの頃の行動がわかる。

「ハア！？それはアンタのせいでしょ！？」

緋咲が猛烈に反発する。

なにかあったのだろうか？

「なにいつてんだ！お前のせいだろう！」

二人は言い争いを始める。

緋咲は蒼生先輩を睨み付けている。

「くら

っ！！！！喧嘩するな

っ！！！！」

梁先輩の一言で、周りは静かになる。

木々が揺れる音だけが耳に届く。

「まず、話をまとめよう」

あまりにも、意見が食い違っている。

このままでは話は進まない。

「9月1日の放課後に桜凛武装高校で全校集会があった」

梁先輩は、話を確かめるように進める。

「その集会の事は、奏笑、蒼生、緋咲、は知らない」

先輩は目で3人に問いかける。

「ああ、そんなの一切知らなかった」

「あたしも」

その集会が行われていたとき、

この二人は共にいた。

「でもひどいよねえ」

奏笑が文句をいう子供のように言い始める。

「放送ぐらいかければいいのにねえ」そうしたらみんなわかるのに」

放送もされていないのか……？  
なら、全員が揃う筈がない。

ああっ！

「そうか！電気が使えないからだ！」

梁先輩の言うと通りだ。

電気が使えなければ、人になにかを伝える手段は”人から人”しかない。

しかも、それには時間が必要だ。

放課後のすぐなら、時間は足りない。

だから、全員が揃わない。

「そういうことが……」

蒼生先輩は納得している様子。

「ところで、その集会の内容はなんだったんだ？」

そこが一番気になる点。

全ての始まりはこの集会かもしれない。

「私が参加したのは、途中から」

え……？

途中参加！？

「途中参加だとっ！？」

蒼生先輩もその言葉に反応する。

「途中参加の私が知っている内容は、『此処が異世界』であること、桜凜高校、全生徒の殺害命令』だけ。私が体育館に入ってから、それだけ言っつてすぐ集会は終わった」

……。

俺も初耳だった。

凜先輩が遅刻してきたのも。

奏笑、蒼生、緋咲 「桜凜高校、全生徒の殺害命令！？」

3人、奏笑、蒼生、緋咲、は同時に声をだす。

そうか……。

奏笑にはまだ、このことは話していないだった。

「それは、戦術科の命令か！？」

「そうだ」

戦術科の命令……。  
どうしてこんな命令をするのか、  
俺には分からない。

「朝倉か……」

蒼生先輩は小さくなにかを呟いた。

「つまり、染は遅刻して集会に参加した。しかも集会の終わり直前に」

確かめるように話をまとめる。

「その時話していた言葉、それが、『此処は異世界』 『桜凜高校、全生徒の殺害命令』 だな？」

「そういうことだ」

染先輩は話合いの最後しか知らない。

つまり、『過程は知らない』

「な、なんでそんなひどい命令だすの〜」

奏笑は悲しい顔をしていた。

「所詮アイツの命令だ！またいつもの悪ふざけだ！」

蒼生先輩の口調には怒りも含まれていた。

悪ふざけ……？

その命令をだした人間の『ゲーム』なのか……これは……？

いや、ゲームなんかで済ませられない。

人が死んでるんだぞ……。

一人や二人じゃなくて、沢山……。

つと、そこで凩先輩が口を開いた。

「だが、戦術科の出した命令は至上命令だから、絶対に従わないといけない」

絶対に従う……。

『桜凩高校、全生徒の殺害』も戦術科の出した命令。

つまり、絶対に従わないといけない。

だが、なぜそんな命令に従った……。

俺には”それ”が分からなかった。

9月3日/侑eyes

交差する真実(後書き)

参照：『9月1日/璃桜eyes Instruction』

9月3日/侑eyes

これからの行動(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



俺達はこの世界のことについて激論していた。  
此処が何処なのか、なぜ殺し合うのか、

「今はこれからの『ファーズトクンパニアン』の行動について考えよう」

梁先輩は話を切り替える。  
皆の視線が先輩へと行く。

「そうだな……まずはこの後の行動だな」

蒼生先輩は気持ちを入れ替えている。

俺達は何処に向かって進めばいいのか？  
どうあるべきなのか？

「これからの『ファーズトクンパニアン』行動……」

俺はそれを口にする。

この世界は殺し合いが起きている。  
俺の案は決まっている。

安全な所へ行く。  
それが、善悪かはわからない。

「桜凜市から出ましょう」

そう俺がいった瞬間、俺の脳に潤と美唯の顔が浮かぶ。胸が痛み出す。

この桜凜市を出ることになるのか……。

「私もそれがいいと思う」

凜先輩も俺の意見に賛同してくれた。

思い出深い桜凜市。

そこが、今では戦場だ。

「俺も、かな？」

聖夜は惜しみながらもそういった。

「そうね……それが一番……。」

「うう〜なんだか寂しいねえ〜」

聖夜、菜月、奏笑は抵抗があるようだ。

きつぱりとなんて捨てられない。

それが、思い出の場所だ。

「安全な所に行くのがベストかもな」

「桜凜市の外が安全ともいえないけどね……」

蒼生先輩と緋咲のいう通りだ。

桜凜市の外が安全とは言えない。

だが、桜凜市よりは遥かに安全だ。

「桜凜市からの脱出……」

凜先輩はファーストクンパニアのメンバーに視線で問いかける。

皆はゆっくりと頷く。

皆の心が一つになった。

全員同時にその場に立つ。

俺達7人で作っている円の中心に全員右手を突き出す。

そして、同時に

「We have the brilliant future!  
!!!!!!」

9月3日/侑eyes

自転車狩り実行 (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

遂に、自転車狩りが実行へと移された。

自転車狩りのリミットは、早く桜凜市から出れること。

デメリットは目立って攻撃的になること。

だが、どんな状況だって良い点と悪い点は付き物だ。

どんなことだってメリットもあれば、デメリットもある。メリットだけってのはありえない。

てな訳で、ようやく忌々しい森から脱出できた。  
蒼生先輩のお陰で。

「太陽が眩しいぜ！」

聖夜は右手をおでこに当て、  
光を遮る。

「うわぁ〜と、溶けるう〜」

いくらなんでも、溶けはしない。

奏笑は両手で太陽の光を遮断している。

「さあ！光合成でも始めるか！」

聖夜が人外なことを言い始める。

「こ、光合成！？」

あまりのバカっぷりに菜月は驚愕する。

「おおよ！」

聖夜は逞しく意思を表し、深呼吸を始める。

見た目はただの呼吸だ。

いや、実は二酸化炭素を吸って酸素を出しているのか？

「まあ、光合成に必要な条件は揃っている。あとは聖夜に葉緑体があればな……」

蒼生先輩は恐ろしいことをいう。

まあ、確かに葉緑体があれば聖夜の身体は緑色のはず。

……。。……。。

想像するだけで気持ち悪い。

緑色だったら、全身の血が抜かれたみたいじゃん……。

「遊んでないで行くぞ！」

凩先輩を先頭に歩き始める。

これが、一番の不安材料だ。  
蒼生先輩の方がいいんじゃないか……？

……。

此処は郊外のようなようだ。

あまり家がない。

いってみれば、田舎のような感じだ。

俺達はいつのまにかこんなに歩いたのだろうか……。

「随分田舎じゃない？」

緋咲と同感だ……。俺も思った……。

こんな所に自転車があつたら逆に不自然だ。

「いいじゃないか、趣があつて」

梁先輩は完璧に風景を楽しんでいる。

俺達が来たのは風景を楽しむじゃない。

「梁先輩、俺達は自転車を狩りに来たんですよ」

目的はあくまで自転車。

だが、たしかにここは趣がある。

戦闘なんて起こらなそうな所だ。

唐突に、先輩は歩みを止めた。

それに伴い、俺達も歩みを止める

「……………」

そして、染先輩は黙して一点を見つめている。  
不安が脳内に過ぎった。

ま、まさか敵っ!?

「どうしたんですか？」

不思議に思った俺は染先輩に問いかける。

「あれ、自転車じゃないか？」

『えっ!?!』

全員驚愕の声を上げる。

俺達は染先輩が見つめていた一点を見つめる。

100mぐらいあったが、確かに自転車ぽかった。

「おいおい…………マジかよ…………何なんだよこの世界は…………。銃で撃たれるは、自転車は不自然に置いてあるは…………」

聖夜は両腕を組みながら、文句を垂らす。

俺にも分からない…………。

こんな田舎に自転車はミスマッチだ。

「善は急げ

……………」



凩先輩が誰よりも速く駆け出す！

これって善なのか……？

凩先輩は疾走し、自転車の方へ……。

「My going!!!! Yeeeeee

」

!!!!!!

妙なことを言い残し、聖夜も走り出す。

「駆けっこなら負けないよ！」

何故か、闘心に火がついた菜月。

菜月も走り出す。

「菜月ちゃん〜！まって〜〜〜〜！」

奏笑も菜月を追い、駆け出す

……。

「はぁ！ガキみたい……」

緋咲は嘲笑うように、腕を組み短く鼻で笑った。  
結局ここに残っているのは、俺も入れて3人。

「自分が勝てないからって、自己満足な言い訳をするんじゃない」  
蒼生先輩が緋咲を挑発する。

「な、なんだって……!!」

即座に緋咲も対抗する。

「ああ、いいんだぞ。無理に走らないで。どうせお前には勝てない」

『ブチッ!』

音は聞こえないが、完璧に緋咲の心に火がついた。

「……やってやるんじゃない……!! 見てろよ  
!!!!!!」

緋咲も猛スピードで走り出す。  
見事に緋咲を乗せた蒼生先輩。  
お見事。

「俺達はゆっくりと大地を踏もう!」

「そうですね……」

俺と蒼生先輩はゆっくり歩きながら、  
その場へ向かった。

当然だが、俺達が最後に付いた。

俺は置いてある自転車を凝視する。

「ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつつ、むつつ、ななつ……  
？」

自転車は綺麗に七台綺麗に並べてあった。  
しかも、見る限り全て新品。

「あまりにも不気味すぎないか？」

蒼生先輩は警戒を始める。

此処までくると、なにか『仕掛け』があるとしたか思えない。  
しかも、自転車の近くに看板が立ってある。

「看板……？」

蒼生先輩は看板へと近づく。

この看板は決して、大きいものではなく、  
地面に刺さっている看板だ。

「えつと……」

蒼生先輩は看板の文字を読み始める。

『諸君！今までご苦労だった！』

そんな君達にご褒美を送ろう。

せいぜいこれで頑張るといい！

さらばだ！ by朝倉』

……。。……。。

はあ？

「おのれ！朝倉の差し金か！？」

蒼生先輩は声を張り上げる。

朝倉？

朝倉という人物がこれを……？

「朝倉ってあの戦術科のか？」

朝倉という言葉に、凩先輩も反応する。

戦術科！？

つてことは、桜凩武装高校の生徒なのか？

「ああ、あの朝倉だ……」

何故か蒼生先輩の拳はブルブルと震えていた。

あの朝倉っていつてわれても、どの朝倉が分からない。

「アイツのことだ！またるくでもない事でも考えているんだろう！」

『チャリンチャリン』

蒼生先輩の言葉を横目に、独特なあの自転車の音が響き渡った。

「よし！行くぞ！」

既に染先輩は自転車に跨またがっていた。

「おい！これは罾かもしれないんだぞ！」

そんな蒼生先輩の言葉も聞かず、先輩は走り始める。

「Good bye!!」

妙な事を言い残し、聖夜も自転車で去っていく。

よっし、俺も行くか。

俺は自転車の方へ行く。

「残念だな……君だけはまともな人間かと信じていたのに……」

「俺って結構まともじゃないですよ」

見事に自転車狩りは成功した……？

後は、桜凜市から出るだけだ。

俺達『ファーストクンパニアン』は自転車を手に入れ、桜凜市からの脱出を目指した。

9月3日/侑eyes

朝倉の正体(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月3日/侑eyes

朝倉の正体

ファーズストクンパニアンは、見事に自転車狩りに成功した……？

田舎風情な所に不自然に7台自転車が並べてある、神秘的な光景を眼にした。

その自転車は、畏や仕掛けなどは一切仕掛けてなかった。しかも、新品の自転車だ。

蒼生先輩がいうに、『朝倉の差し金』といていた。

その朝倉さんがどんな人物かも知らない。

だけど、なんだか会ってみたい。

「俺は今！風を裂いてるぜー！」

俺達全員は暢気のんき（特に聖夜）に自転車に乗っている。

この世界で、こんなこんな事をしているのは俺達だけだと思う。

「風って気持ちいいねえ〜菜月ちゃん〜」

「そうだね〜」

この通り、超暢気だ。

そういられるのも、敵がいらないからだ。

此処まで敵は廻ってなかった。

だが、気になるのはあの自転車を置いてくれた朝倉さん。まったく何がしたいのか分からない。しかも、人数分ジャストだ。偶然とは思わなかった。朝倉さんってどんな人なんだろう？ ちょっと聞いてみよう。

「朝倉さんって何者ですか？」

先輩方は名前も知っていた。ということは、結構有名な人なんだろうか？

「朝倉……」

蒼生先輩は反応を示す。

そういえば、『戦術科の朝倉』って染先輩が言ってたな……。蒼生先輩も戦術科だよな……。

「朝倉……」

「朝倉……」

「朝倉……」

桜凜武装高校の生徒達は、朝倉という言葉に反応する。

「その朝倉です」

どの朝倉か分からないけど、多分先輩達が思っている朝倉で間違いないだろう。



「朝倉 佳紀……称号は『狡猾こかつの破格ノエル知力』だ……」

蒼生先輩は朝倉さんの説明を始める。だが、その表情は明るくはなかつた。

『朝倉 佳紀』さんっていうんだ。

称号は『狡猾こかつの破格ノエル知力』

「桜凜武装高校戦術科3年S+ランクで桜凜八重奏おっりんオクテットの一人だ」

蒼生先輩の言葉に付き加える梁先輩。

S+ランク？桜凜八重奏おっりんオクテット？

知らない言葉が飛び交った。

「S+ランクってなんですか？」

なんだか相当高そうな気がする……。

Sの他にも、+（プラス）が付いてるしな……。

「桜凜武装高校には『桜凜八重奏』という学園組織のようなものがある」

桜凜八重奏？

そういえばさつきもそんなことを言ってたな……。

「この桜凜八重奏のメンバーは、それぞれの科から一人ずつ代表が選ばれる」

野球でいうとオールスターゲームってことか……。  
つと、口を閉じていた蒼生先輩が口を開く。

「つまり、剣術科、現代剣術科、魔法科、現代魔法科、射撃科、戦術科、異能科、総合科、の代表が揃う学園組織。それが桜凜八重奏だ」

八つの科の代表が集う学園組織……。  
それが、桜凜八重奏……。

「戦術科の代表が『朝倉 佳紀』だ」

戦術科の代表！？  
ってことは……。

「朝倉さんは桜凜八重奏の一人なんですか!？」

さつき凜先輩が”一人ずつ代表が選ばれる”って言っていた。  
ということは、朝倉さんも桜凜八重奏の一人ってことになる。

「そう。その代表のみが与えられるランク。それがS+ランク」

凜先輩から最後のまとめが発せられる。

……。

話が繋がった。

とにかく、朝倉さんって凄い人ってことは鮮明に分かった。

「朝倉くんって桜凜武装高校では知らない人っていないからねえ」

桜凜武装高校で知らない人はいない……。

やっぱり凄い人なんだ！

でも、なんでそんな凄い人が自転車を……。

「桜凛武装高校一の秀才にしてスポーツ万能だが、性格は完全に破綻している」

蒼生先輩は朝倉さんのことについて淡々と語り始める。

「朝倉が起こす行動その他全ての要素が理解不能、その上広大な情報力を持つ」

起こす行動が理解不能？

ああ！なるほど！確かにあの自転車は理解不能だ！  
今、ガッチリつと歯車が合った。

「そのことから付いた称号。それが『狡猾こかつの破格知力ノエル』だ」

……。。……。

大体どういう人柄かは把握できた。  
とにかく、普通の人格じゃないってことだな。

「しかも朝倉は桜凛八重奏にも宣戦布告している」

戦線布告！？

まさか、内部勃発か！？

つまり、朝倉さんは反逆者……？

「もちろん、その行動全てが意味不明だ」

なんだか難しいな……。  
とにかく、朝倉さんは桜凜八重奏にも意味不明な行動をしているってことだな。

「桜凜八重奏のメンバーでありながら、桜凜八重奏のブラックリストに入っている」

……。

つまり、桜凜八重奏が朝倉さんに対して、目を光らせているってことなんだな……。  
朝倉さんもメンバーの一人なのに……。  
なんだか、朝倉さんの立場って不思議だな……。

「桜凜高校全生徒の殺害を命令したのも、”朝倉”」

「……え？」

いま…… 染先輩はなんていった？

『桜凜高校全生徒の殺害を命令したのも、”朝倉”』

この狂ってる命令を出したのは朝倉さん……？

「分からない？そんなに頭の回転は悪くは見えないけど？」

意味は理解できる……。  
ただ、あまりにも信じ難い。

なぜそんな命令を出さなければいけない？

この自転車を用意してくれた人が、本当にこんな命令を出したのか？

「あの朝倉だ。こんな命令を出したっておかしくはない」

どうやら蒼生先輩にとっては、そんなに良い印象ではないようだ。

あの朝倉？こんな命令を出してもおかしくない？

俺の中の『朝倉』のイメージが一変した。

「たとえ戦術科の出した至上命令だとしても、なぜこんな命令に従うのか。俺にはわからん」

戦術科の出した命令は絶対。つまりは至上命令。

”朝倉”は『立場』を利用して、こんな狂った命令を出しているのか？

まるで、『ゲーム』のような感覚で……。

「朝倉つてのは”そんな奴”だ」

蒼生先輩の表情は不愉快そうだった。

これが本当なら……。いや、本当だろう。

”朝倉”は戦術科の代表。

戦術科の命令は至上命令。

つまり、朝倉の出した命令は絶対。

「まあ、朝倉は私達が殺し合っているのを面白がって視てるだけじゃないの？”ゲーム”感覚で」

緋咲の言葉が重く聞こえる。

面白がって視ている……。

ならこの世界も、全ては『朝倉のゲームの舞台』のために作られたのか？

「ゲーム感覚？」

「……………」

聖夜と菜月は口を閉じたままだった。

所詮この世界は『生死を賭けたゲーム』に過ぎないかもしれない。

そう視点を変えただけで、この世界が汚らわしく、穢れ切っているように視えた。

この世界に、『意味』なんてない……。

この世界で起こることなんて、『意味』がない……。

「朝倉……もう止める……こんなことは……」

9月3日/侑eyes

朝倉の正体(後書き)

ー用語集ー

桜凜八重奏(おうりんオクテット)

桜凜武装高校の全ての科、剣術科、現代剣術科、魔法科、現代魔法科、射撃科、戦術科、異能科、総合科、の代表各一人ずつで構成されている学園組織。

桜凜八重奏のメンバーに与えられるランクはS+。

桜凜武装高校で最も権力がある。

ー登場人物更新ー

朝倉 佳紀(あさくら よしき) : (男)

桜凜武装高校戦術科の代表S+ランク。桜凜八重奏の一人。  
称号「狡猾の破格知力」(こうかつのノエル)

桜凜武装高校一の秀才にしてスポーツ万能だが、性格は完全に破綻している。

彼が起こす行動その他全ての要素が理解不能、その上広大な情報力を持つ。

そのため、桜凜武装高校のブラックリストにも登録されている。





9月3日/侑eyes

染名言(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月3日 / 侑eyes

染名言

朝倉の正体を知った。

いや、知ったのはほんの一部。

今乗っている自転車は、

”桜凛高校全生徒の殺害”を命令した人物、朝倉が用意した。

こんな自転車に乗ってもいいのだろうか？

「朝倉が用意した自転車に乗ってもいいんですか？」

朝倉は何を考えているか分からない。

この自転車のこと、桜凛高校全生徒の殺害も。

「だから俺は止めるって……」

確かに蒼生先輩だけ乗るのを拒んでいた。

そういうことだったのか……。

「まあ、いいじゃないか。渡りに船だ」

だが染先輩はこの自転車を拒まなかった。

……。。。。。。。。。

確かに『渡りに船』だ。

俺達は桜凜市から出なければいけない。

そのために、自転車を狩りに行った。

その自転車がどんな形であろうと、手に入った。

まさに、『渡りに船』だ。

「出ました！ 染名言！」

「まあ、いいじゃないか。渡りに船だ」

「奥深い名言だな」

染先輩の名言は聖夜を始め、次々と反響を呼んだ。

「か、勝手に染名言なんて作るな ツ！……！！！」

染先輩は声を高らかにして叫ぶ。

「おお！それも頂きだな！」

聖夜は高らかにそういった。

「か、勝手に染名言なんて作るな ツ」

次々と染名言が生まれていく。

だがその後、染先輩は一言も喋らなくなった。

「結構走つたな……」

やっぱり自転車は速い。

此処は相当な郊外だ。

此処までは桜凜武装高校の生徒の手は廻っていない。

桜凜市の外なら、もう99%安全って言うていいかもしれない。

「そうだな。結構走つたな……」

蒼生先輩の表情だけで疲れていることが伺える。

今の所は自転車に異変はない。

本当に朝倉のすることは、意味不明なんだな……。

「このまま一気に駆け抜けるぜ！」

聖夜が高く拳を揚げ、音頭をとる。

『おお

ッ！！！！！！！』

ファーゼストクンパニアンはそのまま、桜凜市の脱出を目指した。

9月3日 / 沙耶eyes

私に出来ること(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9話 この世界の真意

「幸運あれ！」

私は道路を右に曲がり、  
戦場へ駆け抜けて行った。

仲間の無事を心から祈った。

中沢くんは『異能』を持っている。

その能力は結界を生じさせることができる。  
私も聞いたことがない能力だ。

中沢くんにはその能力がある  
その結界を生じれば、仲間の安全は確保できる。

これで私も、心置きなく戦える。

爆発音がした。

ということは、状況は悪い。

急がなければ！

私はその場まで駆け抜ける。

「こ、これは……」

その場に着いたが、状況は最悪だった。  
建物は崩壊し、この場は炎に包まれていた。

異常なまでに燃えている。

炎で先が見えない。

爆弾を使ってもこうまではならない。

「自動車を爆発させたのか……」

なんらかの方法で自動車を爆発させた。

自動車にはガソリンが入っている。

その自動車が爆発すれば、凄まじい威力を持つ。

その爆発により、次々と引火し周りは火の海になったのだ。

「間に合わなかったか……」

先ほどまでは戦闘が行われていたのだろうか？

それすらも分からない状況。

この先に進むことすら出来ない。

確かめることすら出来ない。

私はゆっくりと炎へ近づく。

眼が焼ける程、激しく音を立てて燃えていた。  
火の粉が顔を掠める。

『ドカ                    ンッ！！！！！！』

この炎の中で、再びなにかに引火し爆発を起こす。  
爆風で私の髪がなびいた。そして、さらに火の粉の勢いは増す。

私には視ることしか出来ない。

中にまだ人がいるかもしれない。

なのに、私は立ち荒むだけ。

私は腰に差してある一振、

『三日月宗近』を視る。

この刀なら、この炎を打破できるかもしれない。

私は空を見上げる。

まだ、明るい景色。

この刀に必要な、月明かり、はない。

「……………」

私はいつも刀に頼っている……。

現に今がそうだ。”月明かり”がない以上、三日月宗近の力は発揮  
できない。

私は刀がなければなにも出来ない。



それが、『桜夜 沙耶』という人物だ。  
この三振の刀のお陰で、今を生きている。

「考えるんだ……」桜夜 沙耶”にできることを……」

何故だ……何故なにも思いつかない……。

周りは炎。

この炎を消す術は”私”にはないのか……？

「雷切……力を貸してくれ」

千鳥の柄を握り、鞘から抜く。

私はまた、刀に頼る。

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び、生ずことを請う」

呪を唱えた瞬間、千鳥の刃に電気が走った。

「今、此処に雷魂を開放する」

『ゴロロロロロロッ！……！』

激しく音を立てて帯電し、表面は剥離する。

「我が剣よ請え。全ての雷魂を飲み込み、正法を生じよ」

その呪に雷切が反応し、更に帯電を増す。

「雷神正法。雷光！」

ブンツと全力で雷切を左から右へ振る。

『ゴロロロロロロッ！！！！！！！』

雷切を振った瞬間、雷切の刃から電撃が溢れる。

閃光のような電撃が障壁と化して、私の眼の前全てに広がる。

『ゴロロロロロロッ！！！！！！』

炎と雷魂がぶつかり合い、周囲の空間ごと震えるような大爆響音。残響が消えるのと同時に、巻き上がった土埃が落ちていく……。

「……………」

雷切によって生み出した雷障壁が、炎を消滅させた。

また、刀の力に頼った。いつもそうだ……。 ”桜夜 沙耶”は何もしていない。

”桜夜 沙耶”はただ立ち頻くだけだった。

9月4日 / 沙耶eyes

前哨戦 (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

12話 対応を失った瞳

戦場が見えてきた。

が、既に男生徒が前方に佇んでいる。

男生徒は銃口をこちらに向けて構えていた。

「伏せろっ!!」

「!？」

中沢くんは素早く二人を伏せさせる。

『ズド                    ンッ!!!!!!』

そついい終わった瞬間、男生徒が発砲した。

私は銃を走りながら避け、男生徒の方へ、矢が射出されるかのよう  
な勢いで男生徒へ駆け込む。

男生徒の距離が近くなると、腰に差してある千鳥の柄を握り、鞘か  
ら千鳥を抜く    !

『ズド                    ンッ!!!!!!』

銃口は私の方を向いていた。

私を狙いにしてくれたようだ。

この周りには敵はこの男生徒しかいない。

つまり、この男生徒を遠くに行かせば、中沢くん達は安全。

『パキッ

ンッ！！！！！！』

銃弾を千鳥の刃で弾き、更に距離を縮める。

「な、なに……！！？」

相手は銃。

遠距離戦は私の不利。

だが、近距離では私の有利だ　　！

『ズド

ンッ！！！！ズド

ンッ！！！！ズド

ンッ！！！！

！！』

連続で発砲。

だが、既に近距離。

全ての銃弾を避け、ゼロ距離まで接近する　　！

「はあっ！！！！」

千鳥を下から上え掬い上げるように、

銃を目掛けて切る　　！

『バキンッ！！』

短い金属音と共に、男生徒の銃は空中へ舞っている。

「馬鹿なっ!?!」

男生徒は宙に舞っている銃を視る。

眼を私から背けた瞬間、千鳥の刃先を男生徒の頭に突きつけた。

「まだ、戦うか？」

少しでも前に力を入れれば、千鳥の刃先は男生徒の頭を貫く。  
それぐらいのゼロ距離。

「くそぉ……」

男生徒は背中に手を回している。

「これでも喰らえ

ッ!?!?!?!?!」

その手には手榴弾のような物が握られていた。  
既に線は抜いてある。

その手榴弾を地面に向かって叩き落とす !

「ッ!?!」

『バ　　ンッ!?!!』

その音と共に、周りが光で見えなくなる。  
私は反射的に眼を閉じる。

これは、閃光弾というやつか!?!

『カチャッ……』

銃を構える金属音が微かに響く。  
これはマズイ……。

私はその場を右に駆け抜けた。

眼を開けていたら眼が焼ける。

私は眼を閉じ、感覚で走る。

『ズドドドドドドドドドツ！！！！！！！』

私が先ほどまでいた場所で銃声が響く。

あの場所に留まっていれば、今頃は蜂の巣だった。

私は疾走する。

……。。……。。……。。

眼に受ける光の刺激が少なくなってきた。

閃光弾の範囲からは抜かれたようだ。

私はゆっくりと眼を開ける。

「中沢くん達と相当離れてしまったな……」

だが、中沢くんには能力がある。

その能力さえあれば、安全だろう。

周りは建物に囲まれ、空は夕焼け模様だった。

早く中沢くんの所へ戻らなくては……。

それを行動へ移そうとした瞬間……。

『ズド                      ンッ！！！！！！』

「                      はああっ！？」

あまりにも唐突過ぎて反応仕切れなく、顔を右に少ししか傾かせられなかった。

「くっ……………」

銃弾が髪を掠れた感覚が伝わってくる。反応が遅ければ、頭が吹き飛ばされていた。

何処からだ……………。

私は周りを凝視する。

だが、誰もいない。

『ズド                      ンッ！！！！！！』

再び銃声がした。銃声の音は右上。

そこかっ！

銃声の音と共に、右へ駆け出す                      ！

そこにあつたのは大きなビル。

このビルの中に隠れて私を狙撃していた。

私はそのビルの中へ進入した。



ビルの中は薄暗く、物などは散乱していた。  
ガラスなども割れている。

『タタタタタッ……』

誰かがこちらに向かって走っている。  
私は歩みを止めた。

「た、助けてください！変な人に狙われているんです！」

逃げまとう少女がこちらへ向かってくる。  
この少女は私服を身に着けていた。

『狙われている』

恐らくは私を狙った人間だろう。  
その人がこの少女も狙っている。

即行に何とかしなくては……。

「下がっている」

私は少女の前に出て、少女を後ろへ回す。

何処だ……。この少女を狙う人間は……。

私は前方を凝視する。

だからその一撃に私が気付いたのは奇跡と言って良かった。

「あっ!?!」

私が身体をひねると同時に、背後から来たナイフが私の右腕をかすめる。

「くうっ!?!」

辛うじて直撃を避けたものの、ナイフは右腕の表面を切り、そこから少し出血していた。

「あらあら、避けられましたか?」

あの逃げ回っていた少女の右手にはナイフが握られていた。そのナイフには血がついている。

その少女の態度は世間話でもしているかのように気安かった。

「右腕ぐらいは貰えるかと思ったのになあ」

もうあの逃げまどっていた少女ではなかった。

あれは、演技だったのか……。

そして、少女は手の中でナイフをくるくると回して私に笑いかける。

「……………」

私は千鳥の柄を握り、睨みつける。  
まだ千鳥は鞘に納まれたまま。

少女は回していたナイフを止め、突き刺す構えへかえる。

不意打ちを仕掛けてきた上に、ナイフも器用に扱っている少女。  
明らかに手馴れている。

だが、それも私服を身に着けているため分からない。

「じゃあ今度はどうかしらねえっ!？」

少女は右側に転がるように移動し、  
そこに隠していた狙撃銃で私を狙う。

「狙撃銃だっ!？」

ようやく合点がいった。

外で私を狙っていたのもこの少女。

『ズド                      ンッ!!!!!』

私の意識が僅かに外れた瞬間を見逃さず、  
少女は狙撃銃で発砲する     !

「はあっ                      !!!」

『カキンッ!』

千鳥の刃を鞘から少し抜き、その僅かな刃で銃弾を弾いた。  
あのタイミングで発砲されてしまえば、避けようがない。

あの少女は相当腕が立つ。

戦略、狙撃、ナイフ、  
その証拠として、私の右腕の表面を切った。

もはや手加減無用……。

「行くぞッ！少女！」

9月4日 / 沙耶eyes

桜剣(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「行くぞ！少女！」

右手で千鳥の柄を掴み鞘から出し、  
片手で構えながら走り出す　！

『ズド　　ンッ！！！！！！』

銃声に素早く反応し、身体を右へ流すように回避する。  
そして、また疾走する　！

『ズド　　ンッ！！！！！！』

体勢を低くし、銃を避ける。  
まだまだ……。もっと近くに　！

「なかなかやるじゃないのッ！」

少女は冷静さを保っている。  
相当戦闘慣れしている。

そう感じさせる程の腕と態度。

少女が引き金を引く　！

だが、銃弾は発射されなかった。

「うそっ！？弾切れ！？」

少女は焦り始めている。

勝敗は決した。

私はゆっくりと少女に近づく。

距離が縮まった瞬間、少女は薄笑いを顔に浮かべた。

「チエツクメイトツ！！」

少女は懐ふしから新しんたに銃じゆうを2丁出す  
！

「はあっ！？」

その銃は大きな物ではなく、  
小さなものだった。

左右にしっかりと握られた銃。

その銃口は私を向いていた。

「バイバイ」

少女が私に妖しく笑いかける。

『ズドドドドドドドドドドドッ！！！！！！』

「ッ！！」

左右両方から連続発砲。

乱発された銃弾は私の握っていた千鳥を吹き飛ばした。

私は瞬時に弾道を見切り、紙一重で横飛びに避ける

その時に起きた回転の勢いを殺さず、床を蹴って私は少女と距離をとる。

千鳥は吹き飛ばされ私の手の中にはない。

「アンタしぶと過ぎっ！。でもこれでお仕舞い　　！！」

『カチャッ！』

左右の銃の銃口を私に向ける。

これで勝負が決まる

少女との距離は遠距離。

だが……。私が歴然と不利という訳ではないッ！

「帰りきたれ！千鳥！」

呪を唱えた瞬間、私の右手には千鳥の柄が握られている。

「舞い落ちる桜の花に夢幻の優美を奉ずる」

私は呪を唱え始める。

この呪は桜夜家に代々伝わる剣術、桜剣おうげんを成すための呪。

空いている左手の人差し指で、前方に呪印を組む。

人差し指で描いた呪印が、指で組んだ通りに桜色に光る。

「な、なに……？この光……？」





「くぁあッ!？」

少女の左右に構えていた銃は、上下に綺麗に切断され、切断された上の部分は、宙を舞っていた。

このとき、武器を無くした少女は初めて恐慌の色をみせた。

私は距離は縮めず、遠距離から対峙している。

「コイツ……!化け物　ッ!？」

少女はその場を立ち上がり、私に背を向けながら、走り去っていく。

私は潰走する少女を見送った。

「化け物、呼ばわりか……」

私は千鳥を鞘に戻し、ビルを後にした。

ビルを出て、私は一番に空を見上げた。  
もう、夜は近い。

「中沢くん達と合流しなくては……」

だが、中沢くん達がどこにいるのか分からない。  
最悪の場合、離別だって考えられる。  
それはどうしても避けたい。

だから、私は千鳥を鞘から抜き、天へ刃先を向けた。

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び、生ずことを請う」

この呪は千鳥の雷魂を開放するための呪。

「今、此処に雷魂を開放する」

呪を唱え終わると、雷切の刃は大きく帯電し始めた。

「我が剣よ請え。全ての雷魂を飲み込み、正法を生じよ」

これは、雷神正法を成すための呪。

この呪を唱えた瞬間、雷切の刃は大きく剥離する。

「雷神正法。龍来」

『ゴロロロロロロ』

ツ!!!!!!!!!!!!!!

雷切の刃が閃光と成し、その電撃は轟音と共に空へ走っていった。

9月4日 / 沙耶eyes

桜剣(後書き)

―用語集―

―桜剣(おうけん)―

桜夜家に伝わる桜夜流の剣技。

全て習得するには困難な技で、技数も豊富。

桜剣の一つ一つの剣技が、かなりの難易度。

9月4日/侑eyes

空からの天敵(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「暗ッ!？」

俺の視野には暗闇しか映らない。  
ファーゼストクンパニアンは、自転車で桜凛市の外を目指している。  
だが、いつのまに夜になってしまった。

「な、なにもおゝ見えないいゝ」

その通り。

なんにも見えない。

見えるのは、果てしなく続く深い闇。

その闇の中を自転車で走っている。

かなりの危険運転だ。

「くそッ!いつのまに、夜になったのかッ!？」

聖夜のいう通り、夜になったなんて実感が無い。

いつのまに、夜になったっていう感じだ。

ゆっくりと過ぎる変化ってのは気付きにくい。

「はあ!暗いぐらいでギャーギャーいうなんて情けない」

この声は緋咲か？

暗いから、表情、動きすら分からない。

その位に暗い。

眼の意味がなくなっている。

「雨が降ってもか？」

雨が降る？

この声は蒼生先輩だな。

なんだか、予言者のようだった。

「本当だ……」

本当？

この声は菜月だな……。

その瞬間、俺の髪に水滴が落ちた。

「雨だとツ！？」

周りは闇。天運までもが俺達の敵なのか……。  
だが、軽い小雨程度だ。

「はぁ！雨ぐらいでギャーギャーいうなんて情けない」

緋咲の声が響き渡る。

そうだな。

確かに、騒ぐほどの雨じゃない。

「本降りになってもか？」

本降り……。

もしも本降りになったらとんでもない。

かなり滑るし、冷たい。

さらに、此処は田舎の中の田舎。  
雨宿りできるところなんて、何処にもない。

その瞬間……。

『ザザザザザザザ』

ッ！！！！！！！！！』

『……………』

閃光の如く、雨が降ってくる。

俺達は、回避する術もなく、全てを身体を持って受ける。  
例えるのなら、シャワーだ。

「……………なんて仕打ちだ……………」

この声は染先輩だな……………。

「制服着てる女の子に、雨はひどいよぉ〜」

この声は言うまでもなく、奏笑だな。

「すごい雨……………」

この声は俺の良く知る声、菜月だ。

「制服透ける……………」

この声は緋咲か？

随分とテンションが落ちている。



ファージェストクンパニアンの女共は、杞憂を漏らす。  
一方、男共は……。

「天気雨だろう。すぐに止む」

蒼生先輩は冷静だった。

「うわッ！地面滑る！」

危ねえ……転倒する所だった。

「やばあッ！？服透けるッ！」

聖夜の下着なんて誰も見たくもないだろう。  
それにしても酷い雨だ。  
既に、体中は水分で重い。

……。。……。

俺達はこれから、どうすればいいのだろうか？

9月4日/侑eyes

雨のち雷(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

これが雨の脅威か……。  
俺達には傘、合羽かっぱすらない。  
俺達はただ、ひたすらに濡れるだけだった。

「なんで制服が防水じゃないのよ……」

この声は緋咲か？  
暗いから誰が喋ったのかすら分からない。  
だが、緋咲にしては、声のトーンが低い。  
これも、雨の脅威か……。

「その代わりに、防弾だぞ？」

この声は蒼生先輩か……。  
桜凛武装高校の制服は防弾。  
それは、随分と前から知っていた。

「防弾なんていらんないッ！なんで防水じゃないのッ！」

緋咲は文句を垂らす。

誰に向かってかは分からないが、多分制服に向かってだろう。

「制服がもし防水になっても、その制服で被弾したら、なんで防弾じゃないのっていうだろう？」

俺は防弾を選ぶな。



「は、はあ……ッ！か、かみなり……ぐらいで……ギ、ギヤーギヤ  
ー……いうなんて……な、情けない……」

緋咲の声は口重で、歯切りも悪くガチガチだった。  
聞いてて、説得力も微塵になく、哀れとすら思えた。

「お前が一番びびってたぞ」

確かに、緋咲の高音の悲鳴は、誰よりも響いていた。  
そういえば、梁先輩の声は聞こえなかった。

「び、びびびびびびびびってなんてないッ！」

明らかに、その声は怯えている。

雷なんて受け止めそうなイメージの緋咲は、以外にも雷が苦手なの  
か……。

「ほら、雷光ったぞ」

蒼生が悪戯っぽく、緋咲に忠告する。

前方で雷が光った。

雷は、光の方が速いから、光が速く伝わり、後に音が響く。ない  
常識的なことだ。

つまり、前方で光ったから、近いうちに雷の音が響く。

「キヤッ！！！」

短い悲鳴が聞こえた。やはり雷が怖いみたいだ

こんな弱々しい声を上げた緋咲は初めてかもしれない。



緋咲は恐慌の声を上げる。  
その問いに即、蒼生先輩が答える。

「嘘じゃないぞ。自転車に適切な素材は、スチール、アルミニウム合金、チタン、マグネシウムなどの金属系素材だからな」

適切な答えを、緋咲に返す蒼生先輩。  
そして、更に緋咲は恐慌する。

「い、いやあああああ  
ッ!!!!!!!!!!」

緋咲の高音が、この世界に響き渡る。  
俺は唯一驚きもしていなかった、梁先輩に問いかけてみる。

「なんで、先輩は驚かないんですか？」

先輩も純粹な女の子のはず。  
それとも、こんなことでは動じない強い精神を持っているからなのか？

「とつくの昔に雷の音には慣れてた」

「慣れた？」

慣れた……？

先輩は昔、何処で暮らしていたのだろうか？  
雷が堪えない所なのだろうか？  
先輩はすごい壮絶な人生を歩んできたんだな……。

「私の友達が、よく雷を起こしていたから」

???????

梁先輩の友達の人は、人間ではないのだろうか……。

だとしたら、雷神。

雷神なら、雷を起こすことなんて容易い。

「すごい生物と友達ですね……」

「生物？」

俺にはその一言しかいえなかった。

まさか梁先輩が人外のお方と知り合いとは……。

一体、どんな人なんだろう？

モンスター系統かな？

「どんなお方で？」

人ではないのだから、『どんな人で？』と言えば失礼に値するだろう。

俺は頭中で、妄想を膨らませる。

「どんな方って言われてもな……」

梁先輩は、明らかに言うのを拒んでいる。

そりゃそうだ。

人外だもんな。

空とか飛べんのかな……。



「髪は紅くて長く……」

紅くて長い……。

俺の妄想が更に引き立てられ、とんでもない容姿になった。

全身が紅色の毛に覆われている高貴なお方なのだろうか……？

「翼とか生えてないんですか？」

「っ、つばさッ!？」

梁先輩は予想もしていなかったのか、声を裏返す。

だが、表情は真っ暗のため見えない。

だけど、声で大体の表情は把握できる。

「お前は私の友達を、どんな風に想像しているんだッ!？」

先輩は慌てているのか、少し早口で喋った。

どんな風に想像……。

「モンスター系統です」

人間が雷を起こせるとは思えない。

だとしたら、自然的に人外になる。

「モ、モンスター……」

俺の言ったことを、先輩はオウム返しに繰り返す。

「わ、私はモンスターなんて友達にしないッ！」

先輩は早口な口調でそういった。  
その瞬間……。

『ゴロロロロロロロロロロ　　ッ！！！！！！！』

『ギギギヤヤアアアアアアアアアア　　ッ！！！！！！！』

忘れかけていた雷の大響音が響き渡った。  
それ以上に、女性陣の大響音が響き渡った。

「たくよ〜その元気を違うところで生かさせてえの〜」

聖夜はこの悲鳴に文句を垂らす。

「まったくその通りだな」

これだけ元気があれば、俺達は大丈夫のはず。  
いや、大丈夫だろう。

その後も鳴り響く豪雷の中、ファーゼストクンパニアンは自転車で走っていった。

9月4日/侑eyes

止まない雨はない(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



だが、今の精神状態は極限状態だろう。

「大丈夫だ奏笑、雷が直撃しても死なない可能性もある！」

梁先輩のフォローはまったくフォローになってない。

この言葉の響きだと、死ぬ可能性の方が高く聞こえる。

「そ、そうなのぉ〜」

そりゃ、確かに直撃すれば絶対に死ぬってわけでもないだろう。

「そうだぞ。雷に打たれながらも、下半身不随で生きていた人物もいるんだぞ？」

それって運がいい方なのか？

それとも悪い方なのだろうか？

「か、下半身不随は嫌だよぉ〜」

そりゃ、そうだ。

下半身ということは、歩けなくなる。

ということは、車椅子生活だ。

「安心しろ奏笑。もしもの時は俺の下半身をあげよう」

聖夜が下半身提供の話始める。

……。。。。。。

想像しただけでも、背筋がゾツとする。

「ほ、ほんとう？」

何故か奏笑も受理した……。

マジかよ……。

本当にそれでいいのかよ……。

「男に二言はないぜ？」

聖夜は遅い声でそういつてみせた。

その瞬間……。

「あ、雨止んだ……」

あれほどシヨワの如く降り注いでいた雨が、何事もなかつたようにピタッと止んだ。

「や、止んだ……」

雨が止んだことを、一番驚喜したのは緋咲だった。

雨が止んだというより、雷がおさまったということに驚喜しているんだろつ。

「お前、泣いてるのか？」

「な、泣いてなんてないッ！」

此処は緋咲は、強く言ってみせた。

雨は止んだ。

だが、問題はこれだけではない。

周りは真っ暗だ。

灯りの一つもない。

よく、俺達は此処まで行ったなと感心する。

「染先輩。今日はこれで休みませんか？」

今日はかなり走った……。。

体力的にも、気力的にも限界だった。

「そうだな。休むか」

ああ、ようやく休息ができる……。。

俺は心の底から嬉しく思った。

「な、菜月ちゃん！わ、わたしどこも打たれてないよねえ〜？」「  
げてないよねえ〜？」

「暗いから視えない……」

こうして俺達は、9月4日を終えた。

9月5日 / 璃桜eyes      Recollection (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



もう、日付は変わってしまったかな？

私達は林の中で、明日に備えて眠っている。

だけど、雨のせいで地面に生い茂っている草はビチョビチョ。

その上で寝るのは抵抗はあったけど、仕方ないと割り切った。

「ん……」

眠れない……。

私は寝返りも出来ず、そのまま重い瞼を閉じた。

背中が濡れて気持ち悪い。

背中だけじゃない。身体全身も。

私の制服は……すごく汚れているんだろうな……。

前身は眼で見えるけど、背中は見えない。

しかも、前身さえもが暗さで見えない。

制服を洗いたい……。

全身が雨に濡れてすごく気持ち悪い。

だけど、洗えない。洗う為の物が無い。

酷いジレンマ……。

せめて、お風呂に入りたい……。

はあくっと私は溜息をついた。

寝よう……。寝れば体温で制服もある程度は乾く。

だから、寝よう……。お休みなさい……。

私は何も考えずに、眠ろうとする。

……。。……。。

「なんで寝れない……」

身体は疲れているはずなのに、何故だが眠れない。

私の周りでは、侑達が眠っている。

耳を澄まさなくても、規則正しい寝息も聞こえてくる。

私はゆっくりと瞳を開いた。

「星か……」

無意識に見上げた夜空の星。

その星は、一つ一つ光を佩びている。

そんな星を見つめているうちに、私の心には取りとめもない思考が浮いて沈んだ。

言葉になるうとしないそれらの思考は、力なく消えていった。

この星達は自らの力で輝いているんじゃない。  
太陽のお陰で輝いている。

私は、そのまま曖昧な心地で、じっと星を見つめ続けた。

「自分だけじゃ、輝けない……」

どこかこの星達は、私に似ている。

自分の力じゃ輝けない。

誰かが絶対に必要。

だけど……なんでだろう？

私には、この星がすごく綺麗に見える。

美しくて、強くて……。

そう思うのは、何故だろう？

自分でも分からなかった。

私は星に手を伸ばしてみる。

届きそうなのに、届かない。

いくら、指を動かしても、触れることすら出来ない。

「沙耶……」

無意識にその言葉が出た。

本当に無意識に。

沙耶……。

沙耶は今頃、何をしてる？  
分かりそうで、分からない。  
届きそうで、届かない。

沙耶は9月1日に、一人だけで桜凜高校へ向かった。  
それからは、一回も会ってない。

ふと考えると、私は沙耶と出会ったことで、相当人生が変わった。

出会った当時から、沙耶はあんな感じてだった。  
今だってそうだ。

だからこそ、私達は親友でいれた。

その沙耶が、桜凜武装高校へ入学すると、本人の口から聞いた。  
だから、私も迷わず桜凜武装高校へ入学した。

なんの理由もない。ただ、親友と一緒にいたいから。

だけど、沙耶と同じの剣術科は入れなかった。  
剣術科はレベルが高過ぎた。

だから、私は素人でも入れる現代剣術科へ入学した。

自分でも失笑してしまうぐらいの気軽さで、入学したんだっとな……  
…私は……。

あの時、私は桜凜武装高校へ入学しなかったら？  
あの時、沙耶と出会わなかったら？

今の私は、どうなっていたのだろうか？

考えても答えはでない。

あたりまえだ。

それに答えはない。

だけど、今此処にいる私は、今が好きだ。  
これで良かったと心の奥から思う。

おっと……なにを黄昏ているんだ私は……。

私は、空に向かって小さく微笑んだ。

そして、ゆっくりと眼を閉じた。

9月5日 / 奏笑 eyes

お家に帰りたい (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日 / 奏笑eyes

お家に帰りたい

「くしゅんっ！」

寒くてくしゃみが出てちゃったよ……。  
皆さっきので、起きなかつたかなあ〜？

私は周りをキョロキョロと見渡す。  
けど、な〜にも見えない。

9月の夜は結構冷えるよ……。  
制服は雨でグシヨグシヨなのに……。

気が付けば、身体はブルブルと震えていた。

うわあ〜！ど、どうしよう……。身体がビクビクしてるう〜！

私は両腕で自分を抱きしめるようにする。  
ビクビク治まれえ〜 ビクビク治まれえ〜

は、早くお家に帰りたいよあ〜。  
お家が恋しいよあ〜。

あ〜！だけどお部屋にイチゴ大福、置きっ放しだあ〜。

あわあわ……。イチゴ大福はもう駄目かな……。  
楽しみにとって置いたのに〜。

私はプウ〜つと頬を膨らませる。

あ〜！生ゴミも出してない……。

あわあわ……お家に戻りたいような戻りたくないような……。

私はどうすれば……。

そうだあ〜！寝よう！寝て全部忘れよう〜！

お休みなさあ〜い。ふにゆふにゆ……。



9月5日 / 緋咲eyes

月光想夜(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日 / 緋咲eyes 月光想夜

空に浮かぶ黄金色の満月を見つけた。  
燦爛と輝く月。

その月を立ちながら仰いでいる。

あたしは、あんな雨で超濡れてる所で寝たくない。  
だけど、雨のせいであんな所しかない。

だったら、寝なければいい。  
簡単なこと。眠いけど……。

あんな所で寝るよりは、起きてる方がマシ。

此処は、寝ている集団から少し離れた所。  
ここならアイツ等にも迷惑もかからない。  
だけど、此処も足場が濡れている。  
しょうがないか……。あんな雨が降ったんだから……。

「はあ〜」

この得体の知れない世界に来て、随分と溜息が増えた気がする。  
今日で何日目だっけ……？

え〜とお〜

あたしは右手の指を折り曲げながら数を数える。

5日目？ はあ〜〜。

また溜息が出る。

5日って長いのやら短いのやらあ…………。

はあ〜〜。

何であたしがこんなことに巻き込まれたんだろ…………。  
巻き込んだ奴、絶対に赦さない…………。

強く握った右拳がブルブル震える。

本当に誰よっ！こんな事したのっ！

心が激情する。

だれよ…………だれよ…………だれよ…………。

あ、朝倉だった…………。

朝倉……………。

覚えてなさいよお！朝倉ツ！でっかい穴開けてやるんだからあ！

あ、でも朝倉は命令をしただけか…………。

じゃあ、直接この世界に関係している人はだれ？

これは、自然現象だともいうの？

でも、なんで朝倉はそんな馬鹿げた命令を？

本当に意味はないことなの？朝倉の娯楽のため？

朝倉ってというのがそんな奴だから？

そんな事を考えていると……。

「なにをしてるんだ？」

「ひゃうツ！？」

不意に後ろからアイツの声がした。

あたしは驚きのあまり振り返れず、肩をビクッとさせた。

恐怖が抜けたところで高速で振り返った。

「お、お前か……」

それにしても、変な声を出したと後悔した……。  
一生の恥だ……。

「お前って以外にもビビリ屋なんだな」

ビビリ屋？

このあたしが？

はあっ！今は事故よ！ええ。立派な事故だわ……。

「このぐらいで、あたしがビビると思っっ？」

両腕を組みながら、見下すように視る。

そうよ……。あたしはビビッてなんていないッ！

「緋咲ッ！！下ッ！下ッ！」

蒼生がいきなり叫び出し、勢い良く人差し指を地面に向ける。

「へビだぞッ！へビッ！」

「へ、へビッ！？」

慌てて足元を上げる。

うそッ！？へビッ！？

へ、へビなんて御免よッ！

「お前やつぱびびりだな」

え……？

その言葉で身体の動きが止まった。

「だ、騙したなあ……」

なんでこうも簡単に騙されるの……。

生き物もない世界だっていうのに……。

へビがいるはずないじゃない……。

「いや、今宵も月が綺麗だな」

「は、話を逸らすなッ！」

あたしってもしかして、いつもコイツのペースに乗せられてる？

「お前は寝なくていいのか？」

月を見上げながら、あたしの心配をする蒼生。

「お、お前だつて起きてるじゃないのッ！」

あたしは、あんな所で寝るなんて御免。  
だから起きてる。ただそれだけ。

「まあ、そつだな……」

何故か蒼生は、懐かしむような表情で月を見つめる。  
こんな表情をする蒼生は初めてかも。

「どうかしたの？」

ちよつと興味があつたから聞いてみた。  
思い出に浸つてるとか？  
なんだか笑えてきた。

「いや、どうして俺達はこんな所に来たんだろうなつて」

こんな所に来た……。

蒼生とあたしは同じことを考えていたんだ。

なんだか、思考が読まれているみたいで複雑な気持ち……。

「あたしも、同じことを考えてた」

あたしも月を見つめる。

改めて視れば、すごく綺麗に輝いていた。

「お前と同じことを考えていたなんて……」

不満そうな口調でそういった。  
だけど、その言葉には嫌味はなかった。

「なによ、悪い？」

「いや、何も」

あたし達は再び月を見つめた。

いつかは、戻れるの？

あたし達は、あたし達が知る世界に戻れるの？  
いいや、絶対に戻れる。

その瞬間、優しい風が吹き抜けた。

9月5日/侑eyes

イマージュ(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



9月5日/脩eyes

イマーヅ

19月5日

「全員、集まったか？」

梁先輩の声で話し合いは始まった。  
俺達は寝ていた場所で円を描くように座っている。  
ファーゼストクンパニアンでは、お馴染みの形態だ。

「ええ、集まってますよ……」

起きたばかりだから眠い……。  
俺だけじゃなくて、皆眠そうだ。

「これからの行動……」

脛が重い……。

閉じれば一瞬で眠れそうだ……。  
そう思いながらも、脛を閉じてしまった。

「も、大事だが！まずこの制服を洗おう！」

……。

「わあ~~~~い！賛成~~~~！」

おっと、少し眠ってしまった……。駄目だな。しっかりしないと、今はなんの話だ？

「緋咲もそれでいいか？」

「まあ、いいんじゃない？」

はて？何の話をしているんだ？隣の聖夜に聞いてみよう。

「おい……聖夜……」

俺は小声で聖夜に話しかける。

「なんだよ？」

聖夜は俺の声に耳を傾ける。

「今……何の話？」

聖夜に聞くのは屈辱的だったが、俺だけ話合いに着いてこれないのは情けない。致し方ないことだ。

「子供の作り方」

「え……！？マジ……！？」

おいおい……マジかよ……。  
なにを面前の前で語り合ってるんだ？

「そうと決まれば行くぞ！」

凩先輩はその場に立ち上がる。

そうと決まれば……？

つて！何が決まったんだツ！？

まさか、子作りッ！？

「わあ~~~~い」

「行こう！奏笑ちゃん」

何故か皆ノリノリだ……。

行こうって何処へ……？

聖夜の言うことが本当なら、行くのはとんでもない所……。

嫌な予感と共に、先輩達に着いていった。

『ザザザザザアアアア……』

ん？水の流れる音？

こんな林に囲まれているのに水の音……？

獣道を抜けた先には

「川だ……」

そこは結構幅もある川だった。

しかも水も綺麗だ。

此処で何をするつもりなんだ？

「此処ならやれるだろう！」

梁先輩がまさかの爆弾発言！？

マジかよ……。

本当に子供を作るつもりなんだ……。

「此処ならできますね！」

菜月までもが爆弾発言！？

なんで此処ならやれるんだ……？

周りには石が多く転がっている。

川の近くってのは大体こんな感じなんだよな……。

だけど、川の近くには虫が一匹もない。

それもそうだ。

この世界には俺達以外の生命体はいない。

「でもどうやってするの？」

……。……。……。緋咲まで……。

何だか今日の女性陣は積極的だな……。  
なんだか、胸の鼓動が速くなる。

「大丈夫だ！必要なものは私が持つてる！」

ひ、必要なもの……！？  
な、何を持つてるんだ凜先輩は！？

その一言で、先輩の人格を疑う俺。

「俺達も後でやらせてもらうか」

な！？蒼生先輩まで爆弾発言！？  
この一晩で皆の身に何があったんだ！？

「そうだな。俺も我慢出来ないし」

全員が爆弾発言！？

どうなってるんだこの世界は！？  
俺が知らない間に何があった！？

「みんな、本気なのか！？」

あまりの急展開で戸惑いを隠せない。

な、なんでいきなり子作りなんか……。

「俺はこのままでもいいんだな？」

梁先輩の顔は本気だった。

ヤバイ……。全員本気だ……。！！

「あああ〜もう我慢出来ない〜！」

そう言いながら制服を脱ぎ出す奏笑　！

ま、マジかよッ！？これは本格的だあ！

俺は思わず眼を逸らしてしまった。

「か、奏笑！まだ準備はできてない！ちょっと待っている！」

梁先輩は驚きのあまり、口調を速くする。

「ええええ〜〜〜」

先輩がいう準備ってなんの準備だ？

ああ！そうか！

心の準備かッ！？

これは本当に子作りをする気だッ！！

「お、男達はこっちを視るなッ！」

梁先輩は鋭い口調でそういった。

あれ？男って結構重要なんじゃないのか？  
いや、結構どころじゃないよな……。  
相当重要だよな……。

ああ、そっか……。

心の準備か……。

なら仕方ないか……。

「はいはい……」

蒼生先輩は身体を180度回転させ、その場に座る。  
もちろん蒼生先輩の背中が女性陣の方向を向いている。

「なんだよ……ツレないな……」

聖夜は残念そうに口を尖らせ、  
背中を女性陣へ向けて座る。

俺も慌てて身体を回転させた。  
そして、座る。

い、一体、これから何が始まるんだ……！？

9月5日 / 璃桜eyes

少女たちの服洗い(前書き)

「君の魂に抱かれてー(きみのところにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



ああ……。ようやく制服を洗える……。  
この時を待ち焦がれた……。

男の子に制服を脱いだ姿を視られるのは、流石に嫌だし恥かしい。  
私は男達がいる後ろを振り返った。

「お、男達はこっちを視るなッ！」

恥かしさのあまり、少し早口になってしまった。

「はいはい……」

蒼生は身体を180度回転させ、その場に座る。

「なんだよ……残念だな……」

聖夜は残念そうに口を尖らせ、背中を私たちに向ける。

聖夜に続いて、侑も背中を向ける。

な、何だか気恥ずかしい気はするけど仕方ない。  
制服を洗う為だ。

私はもう一度男3人組を視る。

きちんと背中を向けているのに、何だか視られている気がする……。

「染先輩……！洗わないんですかあ」

うう……。奏笑は全然気にしてない……。

「あ、ああ……準備が終わってからだ……」

「わかりましたあ」

ふう……。どうにかこの場は切り抜けられた。

準備とはいっても、洗剤を出すだけ。

やるうと思えばすぐ終わる。

だけど……。

私は手を震わせながら、ポケットへと手を近づける。

「染先輩どうしました？手が震えてますよ？」

私の震えている手を、菜月は心配そうに見つめる。

「ふ、震えてなんて……」

ポケットの距離が縮まるにつれて、手の震えも増してくる。

私は周りを見渡す。

どうやら、皆私の準備を待っているようだった。

特に奏笑は表情にも滲み出ている。

よっしっ！

私は覚悟を決め、ポケットに手を入れる。どうせ視られるのは下着ぐらいだ。

そんなの恥かしくもない……しかも相手は女の子……。

ポケットの中には洗剤がある。

ビニールのような袋に詰め込めるだけ詰め込んだ。いた。

その袋に、指先が触れた。

これを出してしまえば、洗濯は始まってしまっ。

ということは、制服を脱がないといけない。

それを想像した瞬間、頬がカアッと紅くなる感覚がした。

「染先輩……どうしたんですかあ……？」

ポケットに手を入れたまま静止している私を、奏笑は不思議に思ったのだらう。

此処は上手く避けなければ……。

「て、手が抜けないんだ！」

私は手が抜けない様子を演技する。

もっと上手くやればよかったと後悔した。

「ええ……！？」

奏笑は驚愕の表情を浮かべている。

こんな方法で騙せるのは、恐らく奏笑ぐらいだ。

気付かれるのも時間の問題か……。

私は空を仰ぎ見ながら、大きく深呼吸をする。

もう一度、深く覚悟を決めた。

「はあっ!!!!」

勢い良くポケットからビニールを取り出す。

ああ、遂に取り出してしまった……。

「やったあゝ抜けたあゝ」

奏笑が大袈裟に喜んでいる。

抜けた？

ああ、そうか……。

ポケットから手が抜けない設定だったんだ。

「か、奏笑……さ、先に洗っていいぞ……」

私は奏笑に先に洗うように勧める。

私は最後でいい。

というか、最後がいい。

「なにいつてるんですかあゝ先輩が最初にするのは決まりですよおゝ？」

「な、なにっ!?!」

確かに部活などではそうかもしれない。  
だけど、場合が場合。  
先輩優先という方針は変更したい。

「え？いやなんですかあ〜？」

「そ、そんなんじゃない！」

強がってみせる。

マズイ……。奏笑のペースに乗せられてる……。  
どうにかしないと……。

「さ、先に洗いたい人がいるんじゃないか？そっちを優先した方が  
良いと思う」

「ああ〜！なるほどあ〜！流石は染先輩ですねえ〜！」

ふう……。

最悪の事態は免れたようだ。

「先にやりたい人はいるか!？」

私は全員に届くように声を張り上げる。

すると、男二人が手を挙げる。

その手の主は蒼井と聖夜だ。

侑は手を挙げなかった。

侑は洗いたくないのだろうか？

何やら手をあげた蒼井と聖夜を説得しているようにも見える。

そうか……。侑も私と同じなんだ……。

蒼井と聖夜はその場を立ち、私達の所へ歩み寄る。  
侑は視線を背中に向けたままだ。

「璃桜先輩は先に洗わなくていいんですか？」

聖夜は痛い所を突いてくる。

「ああ、先に洗いたい人が優先だろう？」

「いや、染氏が一番やりたがっていただろう？」

「ば、バカ蒼井！声がでかい！」

蒼井の一言で視線が集まる。

「な、何を馬鹿な！やりたい人を優先にしたいというピュアで純粋な心が何故わからないっ！？」

「ふう……バカだな染氏」

蒼井にバカ扱いされた……。

しかも鼻でも笑われた。

少しカチつとくる。

「な、なに……！？」

「全員、同時にやればいいだろう？そっちの方が都合も良い」

「やつほお……！！賛成っ！！」

聖夜は軽くガッツポーズをする。

「う、うそだ……最も恐れていた展開じゃないか……」

心で思っていたことが無意識に口にでた。

「何か言ったか？ 梁氏」

「な、何でもない！」

恥ずかしくなんてない！ 恥ずかしくなんてない！  
恥ずかしくなんて……。。

呪文のように繰り返し唱えた。

「蒼井も変態なんだ」

緋咲が話に加わってくれた。

これが最後のチャンスか……。

私はその成り行きを見守る事にした。

「俺は効率を考えているんだ。そ……う……下心は一切ない」

蒼井がいうと正論に聞こえる……。

「そうそう。男はみんな狼さあ！」

聖夜は親指を立て、下心な発言をする。

すると、菜月が侑の所へ歩いていった。

私はそれを横目で見送った。

「衛藤氏。そういうことは思っても言わないものだろう?。」

「ってことは蒼井にも下心があるって意味?。」

此処で緋咲が割り込んできた。

後の頼みは緋咲だけだ。

「はっはっは!。」

笑って誤魔化した!

これはどういう意味だ!?

「こんな事をしていても時間の無駄だ。さあ始めようか!。」

蒼井が言うことややはり正論に聞こえる。

私は



9月5日/侑eyes

十色狂気(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日 / 脩eyes

十色狂気

男3人。肩を並べてただ座っている。

「背中の方には、夢のような楽園が広がってるんだよな……」

聖夜がボソリと呟いた。

夢の楽園か……。それが真後ろに展開しているのか……。

「なんだか、俺達が女共の尻に敷かれているみたいで嫌だな」

今度は蒼生先輩が呟いた。

「確かにそうですね」

確かに女の尻に敷かれていている感じがする。

言い方を変えると、男に権力がない気がする。

「よし！何か目立つパフォーマンスをしよう」

聖夜が意味の分からないことをいう。

目立つパフォーマンス？俺達も女共に対抗するってことか？

「おお、いいぜ」

何だか楽しそうだから俺は受け入れた。

そして俺と聖夜は咳払いをし、声を整える。

「おお、お前等のパフォーマンスを是非魅せてくれ」

何も打ち合わせはないが、適当にするか……。

「ただいま」

俺は仕事帰りのサラリーマンのような口調でそういつ。

「あ、おかえりなさい」

聖夜は自分の出来る限りの高音を出す。

聖夜が俺の妻つてことか……。

設定は最悪だな……。

「今日私、病院に行ってきたの。そしたら……」

頑張つて声を女に似させる為、聖夜は精一杯の高音で頑張ってる。

「そしたら……?」

……。。……。。

短い沈黙が訪れた。

「……できてたのよ……」

聖夜は頬を紅く染め、照れ隠しに視線を逸らす。

「ええ！？本当かい！？」

俺と聖夜は抱き合って、クルクルと回る。

「でかしたぞ聖夜！」

とその時、俺と聖夜の間先輩が割り込んできた。

「止める！気色悪いわ！」

確かに気色悪いな……。

蒼生先輩が止めてくれなかったら、今頃はどっいう展開になっていただろう？

恐ろしい展開になっていただろうな……。

少しはマシなものに変えるか……。

「聖夜ちゃん。用ってなんだい？」

俺達はまた、新たな物語を始める。

「ゴメンなさい係長！突然こんな大草原に呼び出したりして……」



ああ、本当にどうなるかと思った……。先輩が止めてくれなかったら、俺達は……。今頃……。

少しはマシなものにするか……。

「よし聖夜！回想シーンで数巻にも及ぶ漫画でもするか！」

「おお、いいぜ！」

俺と聖夜は咳払いをし、声を整える。

「おお、是非魅せてくれ」

蒼生先輩も俺達のパフォーマンスに期待を寄せている様子だ。

すると、いきなり聖夜が始めだす。

「よお！侑！学食行こうぜ！」

笑顔が眩しい男生徒を思わせる口調で聖夜はそういう。

「ごめん聖夜。今、金ないんだあ」

俺も弾ける笑顔を侑に返す。

まさしく友情青春ドラマって感じた。

「コイツは侑。二人は親友だ。あの日から……」

聖夜が自分の心中を語り始める。

そして、場面変更へ。

ここから、回想シーンでも数巻に及ぶ漫画がスタートだ。

「俺が通う高校。桜凜高校。そこは弱肉強食の世界そのものだった」

聖夜がナレーターを始める。

「どうやら、舞台は桜凜高校だそうだ。」

「弱き者は強き者に従うしかなかった。転校してきたばかりの俺にも、例外なく火の粉は降り注いだ」

聖夜は設定上転校してきたことになってるんだ。  
この流れからするに、俺の役は不良生徒だな。

「ちょっと待ちな兄ちゃん！見ねえツラだなあ……！」

俺は不良生徒になりきる。

そして、更に俺は言葉を繋げる。

「誰の許可持ってこの廊下歩いてるんだあ！？ああん！？」

「すみません。今すぐ消えます」

聖夜チキンだな……。

男なら立ち向かえよな……。

「そうはいかないぜえ？ここまで歩いて来た交通料を払わねえとな？」

俺は聖夜に更なる追い討ちを掛ける。

「そつだなあ……500文でいいぜ？」

自分で言っという意味が分からなかった。

ここは何時代だろう。江戸なのかな？

「お前に払う金などないわっ！」

遂に聖夜も対抗の面差しをみせた。

「なんだとお！？この俺とやろうなんていい度胸してるじゃねえか  
!?!」

俺は、今でも殴り掛かってきそうな勢いと口調だ。

「バンツ！ドスツ！ガスツ！ドカーーーーーンツ！！」

聖夜は口と妙な身体の動きで喧嘩シーンを再現している。

だが、最後の『ドカーーーーーンツ！！』はもう喧嘩のレベルじゃない。

この音は絶対にロケランだ。

「う、嘘だろう！？これだけの数を……一瞬でツ！」

そりゃ、ロケラン使えば一瞬だろうな。

ここで聖夜が負けたら回想シーンどころじゃなくなるから勝たせることにした。

回想シーンで死ぬってのありえないからな。

「これが、俺と侑の最初の出会いだった」



おい待て！あの不良生徒俺かよッ！？  
聞いてないぞッ！俺とは別人なんじゃないのか！？

聖夜はそこで場面を終わらせた。  
そして、また場面変更へ。

「侑ワールドエンタープライズ社にてー

何だか、関連性も微塵に感じられないような……。  
かなりの無茶振りだな。

「社長、お車の準備が出来ました」

今度の聖夜の声は、大人の女性って感じな声だった。

「ん？君は？」

侑ワールドエンタープライズ社ということは、どうやら俺が社長の  
ようだ。

さっきの弱肉強食の世界はどこへ行ってしまったんだろう？

「今日から配属となりました秘書です。ハニーって呼んでください」

ウインクを綺麗に決める聖夜<sup>ハニー</sup>。

なんで聖夜が俺の秘書なんだ……。

「ハニー。今日のスケジュールは？」

「桜凜公園でCQCの特訓。午後から私のストレス発散。それからコンビニで……」

「仕事と関係ないじゃないかっ！」

「なんで聖夜のストレス発散の手助けを俺がしなくてはいきないんだろっか？」

「よっぽど俺の方が溜まっている。」

「社長お！息抜きも必要ですよっ！」

「い、いい加減にしなさいっ！私は真面目だ！」

そして、聖夜はまっすぐ俺の瞳をみつめる。

「あたしのこと……嫌い……？」

「そ、そんなことはないさ」

俺は慌てて視線を逸らす。

「じゃあ、スキって言って」

「き、君がスキだ……」

近くに便器があるなら吐きたい。

なんで俺が聖夜にスキなんて言わないといけないんだよ……。

「あ~~~~ん！うれしいー！！」

聖夜は両手を組みながら、身体をクネクネさせてる。

あの〜誰かビニールでもいいので貸してくれませんか？  
猛烈に気持ち悪いです。

「そんなにあたしのことがスキなの？色々教えてあ・げ・る！」

「止める！！どうしてお前等はそういう展開にしなければならないんだ！  
？」

蒼生先輩が俺と聖夜との間に割り込み、二人を突き飛ばす。

蒼生先輩。今、貴方が救世主に視えました。

もう……目立つパフォーマンスは止めよう……。

俺の気がもたない……。

俺は身を持ってそれを体験した。

俺達はいつまで肩を並べているんだろう？

いや、その前に本当に”子作り”なんてするのかっ！？

そう物思いに更けていた。そこへ……。

「先にやりたい人はいるか！？」

梁先輩の爆弾発言が響き渡る。

よくそんな事を大声で叫べるもんだ……。

これは、いよいよと言った所か……。

この状況を奪回するには、俺しかないな……。

すると、サツと聖夜と蒼井先輩が迷わず手を挙げる。

「お、おいつ！二人共正気なのかっ！？」

馬鹿げてる……。

俺達にはまだ速すぎるだろう！？

「先にやらせてくれるんだぞ天神氏。ご奉仕は受け取るべきだぞ」

蒼井先輩は迷わず立ち上がり、それに続いて聖夜も立ち上がる。

「聖夜！お前なら分かるはずだ！俺達には早過ぎるっ！！」

「お前は考え過ぎなんだよ。見本を視せてほしいんだろうさ」

み、見本……。

見本ってなんだ……？

「では天神氏。さらばだ」

蒼井先輩は手を軽く挙げ、俺に背を向ける。

もちろん聖夜も。

二人の姿が、徐々に小さくなっていく。

(俺は自分の意思を貫く！誘惑なんかには負けない！)

俺は心中でそう誓い、女共に背を向けてずっしりと逞しく座った。

「いや、染氏が一番やりたがっていただろう？」

……………。

何も考えるな……………。邪気を捨てる……………。

例え染先輩が変態だったて、俺は同様しない……………。

「全員、同時にやればいいだろう？そっちの方が都合も良い」

「やつほお　　ッ！賛成っ！！」

ぜ、全員同時っ！？

その蒼井先輩の発言に、思わず肩をビクッとさせる。

こ、これは止めなければっ！

と、俺の肩に手が置かれる感触がした。

「侑どうしたの？やらないの？」

その手の主は菜月だった。

菜月まで洗脳されてしまったか……………。

もう、どうしようもないかもしれない。

いや、菜月だけは止めよう……。  
菜月はそんなことをしては駄目だ……。

「お前、いつからそんな趣味が沸いた？」

「そんなに驚くことでもないでしょう？」

菜月は微笑みを浮かべている。

「どうやら、”子作り”は菜月にとっては当然のようだ。」

「俺は放って置いてくれ……俺は責任は取れない……」

「はあ？馬鹿じゃないのっ！？」

菜月に冷笑されてしまった。

「責任とかそんな大袈裟なことでもないでしょ？」

その瞬間、強引に俺の腕を掴む菜月。

そして、菜月の怪力を活かして俺を引き摺る……。

「や、止める菜月っ！俺達にはまだ早いっ！」

「だぐめー！」

菜月が悪戯子のような表情を浮かべる。

そして、怪力と共に引き摺られる。

「こんな事をしていても時間の無駄だ。さあ始めようかー！」

と、そこへ蒼井先輩の音が響く。  
もう、避けられないのか……。  
いよいよ、この狂った”子作り”が始まるつとじていた。

9月5日/侑eyes

追い込まれる妄信(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



9月5日/侑eyes

追い込まれる妄信

「こんな事をしていても時間の無駄だ。さあ始めようか!」

蒼井先輩のその声は、狂気の始まりを意味していた。

『子作り』

なにがどうなっただか分からないが、それを実行へと移そうというのだ。

「わーい!さんせい!」

奏笑が手をビシッと上げ、左右に揺らしている。

もう、俺には止められないのか……。

「菜月、お前なら分かるだろう?これがどういうことだが……」

「はあ?なに言ってるの?」

失笑されてしまった……。

こっちは本気だっていうのに……。

「もう分かったよ……好きにしる。だが……」

俺は最後に付け加えるように「だが」を付けた。

「だが……なんなの？」

「俺はやらないからな」

俺はそう捨て台詞を吐き、この場から去ろうとする。

「ああ、ちよつと俺！」

菜月の声は俺の背中から聞こえる。

俺を追おうとする菜月に、梁先輩がポンツと肩を叩いて止めさせた。

「私が説得しよう。君達は先にやっていてくれ」

「あ、はい……。分かりました」

その会話を背中で聞き流し、俺はそのまま森林に入った。

「はあ~~~~」

俺は森林にあつたどでかい大木に背中を当て、姿勢を下げた。すると間もなく、ガサガサッと草葉を踏む足音が段々と俺に近づいてくる。

「ゆづ　　！どどこだ　　？」

梁先輩の声だ。

だが俺は特別、逃げるようなことはしなかった。

「おお、侑！見つけたぞ！」

俺を見つけた叡先輩は俺の所へ近づいてくる。

だけど俺は叡先輩に視線は合わせなかった。

「ゆづ……」

叡先輩らしくもない切なくて儚い声が　ドキッと俺の胸を締め付けた。

「侑も私と同じなんだな……」

叡先輩が俺にゆっくりと歩みよってくる。

「え……？同じ？」

「侑も恥ずかしいんだろ？私もだ」

「は、恥ずかしい？」

俺は恥ずかしいだけなのか？

つまり叡先輩も……まだ心を持っていてくれてたんだな……。

「まあ……確かに恥ずかしいというのものもあるかもしれませんが……」

その言葉を聞いた叡先輩は微笑み、俺の傍らに腰を落とした。

「私が言い出した本人だというのに……情けないな……」

凩先輩はバツが悪そうな顔をし、少し視線を落とした。  
そうか……。凩先輩が言い出しっぺだったんだ。  
すると凩先輩が俺に視線を合わせてきた。

「侑と一緒になら出来るかもしれない……」

「え……？」

今、凩先輩はなんて言った……？  
俺となら出来る……？だと……？

「凩先輩……それってどういう……？」

「侑になら見せてもいいかなっと思っとな……」

！！！！！！！！

まずい……。今のストライクだったよ……。  
そしてしばらく、意味深い沈黙が続いた。  
これは嫌な沈黙だ……。

「だから侑、一緒にやらないか？」

うっ……。

凩先輩って以外に積極的だったんだな……。  
一瞬、身体がクラツつときたぞ……。

「凩先輩は……本当にいいんですか……？」

徐々に俺の心も動き始めた。

絶対にしないと決めてたのに……。  
染先輩の色気というものは恐ろしいものだ……。

「ああ、もちろんとも。一緒に洗濯をしようじゃないか！」

……。。……。

俺の思考が完全にストップした。

センタクツテナニ？

センタク？せんたく？洗濯！？

「センタク……？？？」

「な、何をそんなに驚愕しているんだ！？」

「……………あ、あははははは！」

なんだよ……………そういうことかよ……………。

子作りなんて聖夜の……………聖夜の……………。

ただの嘘だったっていうのかよ……………！！！！

「侑！？どうしたんだ！？何かあったのか！？」

俺は勢い良く立ち上がり、聖夜達がいる河川まで行こうと振り返る。  
すると、染先輩が俺の腕を掴み、進行を止めた。

「ゆう！？私を置いてどこへいく！？」

俺は逆に、染先輩の腕を掴んだ。

「みんなで洗いましょう。そっちの方が楽しいですよ」

「な……！なんだと　　！！！！」

あとで聖夜を殴ってやる……。

よくも騙したな……。

さっきまでの変な感情が憎悪に変わった。

「ゆう　　！お前は私と同じなんじゃないのか　　！」

「あはははは！今は違いますよ。誤解が解けましたので」

そついい、俺は空いている右手の拳を握り直す。

「な、なにがあつたんだ　　！！！！」

俺の手を振り放そうと、上下に強く動かす。

だが、今の俺の力は

分かる。力が滾っているのが

「わ、私はみんなの前で着替えるのはごめんだ　　！！！！」

凧先輩がその言葉を発したのは

既に河川に戻ったときだった。

凧先輩の大きな声で、洗濯中の皆は同時に振り返る。

「ああ……」

失態に気付いた凧先輩は口を両手で覆う。

そして、気付かれないようにゆっくりとそのまま後ろに下がって  
く。

『穴があつたら入りたい』

それが染先輩の気持ちだろう。

再び林に戻ろうとしている。

だが、バレバレだ。

「璃桜先輩〜！バレバレですよ！やっぱりただ恥ずかしだけ……」

そう染先輩に言った聖夜に

俺は疾走する

「うおおおおおおおおおおおおおっ！……」

まるで外野からホームまで遠投するかのよう

俺は全力で聖夜の顔面を殴った。

9月5日/侑eyes

支える温もり(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



9月5日/脩eyes

支える温もり

誤解も解けた事で、俺たち「ファーズストクンパニアン」全員で洗濯をすることにした。

凧先輩は最後まで意味の分からない抵抗をしていたが、いつのまにか眼は死んでしまつて立ち竦んでいる。

「さあ、ファーズストクンパニアン！第一回服洗いを始めようか！」

蒼生先輩が先陣を切つて話を始める。

そして、おおっ！という威勢の良い声が聞こえる。

「さあ！汚れきつた制服をあの青空に投げよ！」

蒼生先輩は高く青空に人差し指を指す。

その声が続いて制服を高々と空に投げたのは、奏笑だけだった。

「ええ〜！なんでわたしだけえ〜？」

奏笑は両腕で胸元を隠しながら、周りをキョロキョロと見る。

だが、奏笑以外にも脱いでいる人がいた。

「おっと、俺も脱いでるぜ〜？」

聖夜だった。

遅しい上半身は既に露出しており、制服は宙を舞っている。

俺が決死の1打だったあのパンチ。しかも顔面にだ。

まるで、それがなかったかのような顔だ。

もう一回、殴ってやろうか……？

「先に脱いだ者よ！特権として先に洗ってくるがいい！」

豪く蒼生先輩のテンションが高いのは気のせいだろうか？

先に脱いだ者というのは奏笑と聖夜か……。

「よっしゃー！」

聖夜はキメ顔で落ちてきた制服をキャッチし、河川に向かって走り出す。

その光景を、俺は眼を細めて見送った。

「ああ〜！待ってよあ〜！」

奏笑も聖夜の後をパタパタと着いて行く。

さあ、確かに制服は洗った方がいいな。

俺も洗うことにしよう。

と、視線に入ってきたのは虚ろな眼を浮かべている染先輩だった。

「染先輩？どうしたんですか？」

「……………」

染先輩は無言のまま。

これは重症だな。一体、どこを見ているのだろう。人差し指で額を突っつけば倒れるんじゃないか？

俺は早速、右人差し指で染先輩の額を軽く突つつく。

すると

無言のまま、ひゅうつと背中から倒れる　！  
まずい！地面は石だらけだ！

「染先輩！！」

俺はすぐさま左手を染先輩の腰に回す。  
どうやら背中から倒れるという最悪な事態は回避できたようだ。  
さあ、これからどうしたものか……。

「とりあえず、元の体勢に直しておくか……」

左腕に力を入れ、再び染先輩を立たようとする。

だが、勢いが強すぎたのだろうか？

今度は染先輩と重なり合うようにして、その勢いそのまま俺が背中から倒れる　！

力が入っていない身体は、女の子でも重い。

ああ、俺はこんな鋭利な石の地面に背中から倒れるんだ。

俺は、一瞬最期を悟った。

だが、その瞬間は来なかった。

何かが俺の背中を支えている。

「こんな所で……死ぬんじゃないわよ！うりゃああああああっ  
！」

俺の背中を支えていたのは、緋咲だった  
その小さな両手で俺と凧先輩先輩を支えているのだ

「止めろ！緋咲！お前の力じゃ無理だ！お前が下敷きになるぞ！」  
俺も力を入れようとすが、この体勢では力が入らない。

「くう……、もう……限界かも……」

徐々に緋咲の力が弱くなって行く。  
何度も苦痛の声を漏らしながらも、ギリギリ耐えている。

「緋咲　っ！！」

この意味の分からない状況に気づいた蒼生先輩は、猛スピードで緋  
咲の背中へ駆け出す　！

「緋咲！俺が行くまで耐えろよ！」

「うう………。言われなくたって……！！」

すると俺の背中を押す緋咲の力が増す！  
最後の力というものだろうか。  
だが、その力も長くは続かなかった。

「あ、あおいいいいい　っ！！」

苦痛な表情を噛み締めながら、緋咲は駆けてくる蒼生先輩の名を叫ぶ！  
もうとつくに限界は過ぎているはずだ。

「良く耐えたな緋咲！お前にしては上出来だ！」

蒼生先輩が目標ポイントまで到着した！

賺さず蒼生先輩は倒れ掛けている緋咲の背中を押す！

「うおおおおおおおおおおおつ！！！」

獅子奮迅の気迫と共に、蒼生先輩が俺たち3人を吹き飛ばすようにして押す！

だが……。

「ちょ……！！力入れすぎよおおおおおおおつ！！！」

まずい……！今度は意識の薄い染先輩が下敷きになる！  
しかも顔面からだ。

これは、万事休すか……。

一瞬の出来事だが、俺の脳ではスローで流れ始めた。  
すると、染先輩先輩の前に人影が見えた

「染先輩！しっかり！」

菜月が俺たち3人を受け止めた  
だが、受け止めたのは一瞬だった。

「うわあああああああつ!?!」

すぐにバランスを崩し、今度は菜月が下敷きになる

「蝶野氏　!?!」

機敏に蒼生先輩が動き、大きく両手を広げて受け止める。

「あつははは……!さすがに4人は辛いな……!」

受け止めながら失笑を浮かべる蒼生先輩。  
薄っすらと額には汗を掻いていた。

「衛藤氏っ!?!」

蒼生先輩が聖夜の苗字を呼ぶと、聖夜は意味の分からない英語を発音しながらこっちに向かってくる　!

「It is my turn!! (私の出番です!!)」

聖夜は蒼生先輩と共同し、俺たち4人を抑える。

「新稲氏!この状況を打破出来るのはお前しかいないっ!?!」

蒼生先輩が声を張り上げ、奏笑に協力を求める。  
奏笑が最後の切り札だと

「ええ〜!?!なんですかこの状況〜!?!」

俺たちの希代な状況に驚きを見せる奏笑。

「状況はいい！それより、この状況を打破してくれ！」

「えええ〜！ど、どうやってですかあ〜！？」

「緋咲のすぐ後ろに川がある！その川に全員を飛ばしてくれ！」

確かに緋咲のすぐ後ろ、1メートルもない位置に川が存在する。河川に全員が落ちれば、確かに水がクッションになり助かる。だが、

「ちよつと！あたし……お、およ、泳げないのよおおおお……ッ……！」

緋咲が猛烈に反対する。

緋咲って泳げなかったんだ……。

意外だな……。って！そんなのは今はいい！

「俺がカバーする！手段は問わない！早く人想いにやってくれえ！」

蒼生先輩は後ろ眼で奏笑と悶絶を交わす。

「わ、わかりました〜！」

奏笑は野球ボールより一回り小さい円球のものを持っていた。あれは、手榴弾だ！  
すでに安全ピンは抜いてあるのが確認出来た！

「とつりゃあああああああああ〜！」

奏笑が河川とは逆の林に、手榴弾を投げ込んだ

一体、この人は何を考えているんだ!?

そう思った瞬間……。

「ドカアアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!」

天地を揺らすほどの大爆音が聞こえた。

それと同時に、俺は立っている感覚を失くしていた。

もの凄い風が吹いてきたのだ。

「そうか!爆風か!?!」

なんて手洗い方法なんだ……!

俺は必死に周りを見渡す。

すると、アニメのように全員宙を舞っていた。

「……………うわあああああああああああああああああ  
ああッ!!!!!!!!!!」

そして、7人分の、天地を揺らすような悲鳴がこの世界に響き渡った



9月5日/侑eyes

静か過ぎた景色(前書き)

「君の魂に抱かれてー(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日/侑eyes

静か過ぎた景色

かなりドタバタしていたが、どうにか洗濯は終了した。完全に乾いてはいないが、ある程度乾いた。だから、俺たちは再び自転車で桜凜市の外を目指す。

空は夕焼けで、時刻もそれなりに予想は出来た。何れも家もない田舎道を通っている。

「この田舎道いつまで続くんだよ！」

聖夜が誰にでもない田舎道に文句を垂らす。それに答えたのは染先輩だった。

「まあ、いいじゃないか。こんな田舎道に敵がいるとは思えない」

そついい染先輩は左右を交互に見る。

その視線は何れも山々。

確かに、敵がいるとは思えない。

俺も山を見る。

と、山からギラツと光る怪しいものが見えた。

嫌な予感がした。

「みんなっ！！全力で走れ

！！！！！！」

染先輩が俺たちを見渡しながら叫ぶ

！

本能的にあの光る怪しいものは危ないと認識出来た。

梁先輩の忠告通り、全員が全力で駆け抜ける　！

ブッチン！っという音を出し、何かが道路に減り込んだ。

これは……。銃弾だ　！！！！

「はっ　！とおお！」

梁先輩がサドルの上に右脚を乗せて、左脚をハンドルに置きコントロールをとる　！  
す、凄過ぎる……まさに神業だ。だが、これでは速度が減速する。  
そこで梁先輩は

「緋咲！私の自転車を引っ張ってくれ！」

「りょーかい！」

緋咲は自転車を加速させ、梁先輩の3メートル程前に出た。  
更にポケットから拘束用ロープを取り出し、そのロープをカウボイのように空中でブンブンッと回す。

「はあああああッ！！！」

緋咲がロープを梁先輩の自転車向かって投げる　！  
そのロープは上下にうねるようにして、自転車のバンドルシステムに巻き付いた　！

「流石は緋咲だ！」



「……………」

梁先輩はスカートを上げ、ホルスターに収納されてある「MP7・OBK/SR」を見せる。

銃は出さずに、梁先輩は敵がいる山をずっと睨んでいる。未だに二発目は発砲されてない。

あの一発で終わりとは少し考えにくいが……。

俺はもう一度山を凝視する。

すると、ピカッと再び同じ方面から光った　！

「な……………!!!」

梁先輩ですら反応し切れない刹那。

はあっとした表情で光った方を見る。

太もものホルスターから「MP7・OBK/SR」を取り出そうとするが、向かってくる銃弾の方が速い　！

『パツキユウウウン!!!』

何かに当たって、銃弾が弾ける　！

そんな風な高音がした

「ぐはああ!？」

梁先輩が虐げるような悲鳴を上げる

ま、まさか、梁先輩が被弾したのか　!?

俺はこの最悪な状況に見事に思考が止まり、凍りついた。だから、無意識に叫び声を上げた。

「染先輩 ……！！！！！！」

サドルとハンドルのの上に乗っている染先輩は、一瞬グラツとバランスを崩した。  
だが、転倒はしなかった。

「くう……あああああ！！！！」

苦痛に満ちた声を上げると、染先輩は勢い良く一気にバランスを取り戻す ……！！

「防弾制服とは言っても当たると死ぬほど痛いんだぞ……！！」

染先輩目掛けて発砲された銃弾は、防弾制服によって守られた ……！！  
こんなに防弾制服ってすごいのか！

いや、今回は距離もあつたかも知れない。  
だが、防弾制服がなければ確実に致命傷だっただろう。

「遠距離武器を所有してない私たちが断然で不利だ！ここは退くぞ ……！！」

染先輩の武器は65cm前後の日本刀とサブマシンガン（MP7・OBK / SR）。

日本刀はいうまでもなく近距離だが、サブマシンガンも中距離だ。  
相手は明らかにスナイパーで、それに対応出来る武器がない。

「それなら、私に任せてください！！」

こんな時でも自分の口調を崩さない奏笑。

即座にポケットに手を入れ、手榴弾を取り出す ……！！

「おりゃあああああ~~~~!!!!」

可愛らしい声を上げながら、途轍もなく危険なものを敵のいる山に向かって遠投する。

だが、いくら強肩だって届く距離ではない。いくら強肩でも半分も行かないだろう。

だから奏笑の投げた手榴弾は、4分の一の所で落下した。

そして、手榴弾の中身が破裂する　！

爆発音が聞こえた瞬間、白煙が向かってくる。

奏笑が投げ込んだのは、スモークグレネード。

相手はスナイパーで、狙いを定める必要がある。

だが、この煙なら狙いを定めることは不可能。

多少、俺たちの行動にも妨げがあるが、リスクはかなり減る。

「全力で走るぞ　　!!!」

梁先輩は自転車を一般の座り方で座り、日本刀で緋咲の自転車と繋がっているロープを斬った。

そして、ファーゼストクンパニアンは全力でこの直進を駆け抜けた

9月5日/侑eyes

桜凜市脱出(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



「どうにか逃げ切ったようだな……」

凜先輩は首を右に回し、後ろを一瞥する。

「どうやら、そのようですね……」

さあ、後どのぐらいで桜凜市から出られるのだろうか……。  
もう随分と走った気がする。

「さあ、後どれぐらいで着くんだ？」

先頭を走るリーダーである凜先輩がリーダーらしからぬ質問をする。

「凜先輩？分かってるんじゃないんですか……？」

「何を愚かな事を。私はいつ理解出来ていたと言った？」

凜先輩に鼻で笑われてしまった。

果たして愚かなのはどっちだろうか。

まあ、俺も良く知らないから人のことはいえない。  
と、ここで救世主、蒼生先輩登場。

「そうだな。恐らく日が沈む前には出れるだろう」

おおっ！なんとという嬉しい達見！

今日中には出れるということか！

「だが」

語尾に、いやな二文字を追加する蒼生先輩。  
なんだか嫌な予感しかしない。

「もうじき本当の険しい山道になるぞ」

……………。

昂っていた気持ちが一気に褪めた。

だが、梁先輩は豪く前向きだった。

「そうか。最後の山を越えれば出れるんだな！」

「まあ、そういうことだ」

俺も梁先輩を見習おう。

前向きじゃないと、この先生きて行けない気がする。

「……………ん？あれが山道の始まりなんじゃないのか？」

梁先輩が前方に指を指す。

俺もその指先の先を見ている。

薄っすらとそれっぽいのが見えた。

が、まだ断言できる距離ではない。

「ああ、場所的にあれが入り口だな。ここからは険しい山道になるぞ？」

なんと！梁先輩が当たっていた！  
良く見えたものだ。

「よっし！俺が一番乗りだ　　！！！！！！」

身の程知らずの聖夜が入り口目指して爆走する。

「ああ〜！わたしが一番乗り〜〜〜〜！！！！！！」

聖夜の後を追うように、奏笑ももの凄いスピードで走り出す。

「ま、待ってよ！奏笑ちゃん！」

奏笑の後を追うように、菜月ももの凄いスピードで走り出す。  
あれ？この光景には見覚えが……。

「善は急げっ！！！！」

走り出した理由は解らないが、梁先輩ももの凄いスピードで走り出す。

みんな、何でこれから険しい山道なのに無駄に体力を消耗するんだ……。

「さあ！俺らも行くぞっ！」

なぜか蒼生先輩はノリノリだった……。  
そして緋咲と並走し、緋咲のハンドルを掴む。

「マインドコントロールッ！！！」

「ええっ！？いや……ちょ……！！！」

そして、蒼生先輩はもの凄いスピードで走り出す……。それにつれて、緋咲ももの凄いスピードで走り出す……。

「きゃああああああああああッ！！！」

緋咲が連れ去られた。

気がついたら周りには誰もいなく、全員が前を走っていた。

「くそおおおっ！！！！こっとなったらヤケクソだ！」

良く解らない気持ちで、俺は只管にペダルをこいだ。やるなら一番の精神で俺は後を追うのであった。

これは奇跡なのだろうか。

ファーゼストクンパニアン全員が、一步も譲らず爆走しながら並走している。

誰の脚力も限界を超えているだろう。

なのに誰もが諦めようとしなない。

ファーゼストクンパニアンはそういう人等の集まりなのか？

誰が勝ってもおかしくない。  
そんな状況だ。

だから、そのレースの終焉は誰もが想像しても思いもしていなかった。

それは、あまりに衝撃的な終焉だったからだ

それは、全員が並走していたからこそ起こる惨劇

何故ならそこに、見えない壁があったからだ

「……………うわあああああああッッッ！！！！！！！！！！」  
「……………」

全員、自転車から転倒し、断末魔染みた悲鳴を上げる。  
まったく状況が掴めない……………。  
まるで、目の前に壁があったような感じだった。

そして、さらに惨劇は続いていた。

「おおっ！チャリが自動運転に切り替わってるぞっ！！！！」

俺たちを乗せていたチャリは、勢いを殺さずに無人で走行している……………。  
しかも起用に器用に6台並走してだ。

俺はチャリを追いに行こうと立ち上がろうとするが、転倒した衝撃で立てない……。

いや、脚力を使い過ぎて立てないのだろうか？

「ぐはぁ……これは痛いぞ……防弾制服が意味をなさない……」

梁先輩がうつ伏せで倒れながら罵られている。

「うう……骨折したかも……」

緋咲は空を仰ぎながら、顔を歪ませている。

「くう……。この俺に受身を取らせるとは……」

蒼生先輩は大きく脚を開脚させ、右手のひらを地面につけて受身を取っている。

男の俺が見ても、その姿は格好良かった。

「あれ……！」

奏笑はグルグルと転がり受身？を取っている。

「……………」

聖夜は……無言で倒れている……。

大丈夫だろうか？

誰よりも一番心配だ。

「な、なんなよ……」

菜月は今起こった状況に戸惑いを隠せない様子。

「そうだ……まずはこの状況を解明しないと……」。

「だけど……これは痛いぞ……」。

「全身強打したような感覚だ……」。

「だけど、強打するようなモノなんてないはずだ。」

「み、みんな……ぶ、ぶじかあ……？」

「梁先輩がとても大丈夫とは思えない声でみんなの心配をする。」

「俺は大丈夫ですよ……」

「誰よりも早く、俺は返事をする。」

「全身に激痛は走るが、どうにか大丈夫だ。」

「しばらく安静にしていれば痛みもひくだろう。」

「ああ、受身を取ったから大丈夫だ」

「蒼生先輩は制服についた土埃をポンポンと叩き落とす。」

「唯一、無事な蒼生先輩が何故だがとても格好良く思える。」

「あ、あたしは大丈夫だけど、左腕がヤバイかも……」

「緋咲は表情を痛さで歪ませてはいるが立ち上がり、右手で左腕を押さえる。」

「おいおい、大丈夫か緋咲？ちょっと診せてみる」

蒼生は緋咲の左手を両手で掴み、胸元まで上げる。

「い、いいわよ……そんなの……」

「全然良くないだろ？重症だったら一大事だろ？」

「うう……」

緋咲は蒼生から視線を外し、赤面しながら左腕を蒼生に預ける。

「左腕のどの部位が痛いんだ？」

「人を食肉みたいに言わないでよ！ まあ、痛いのはここら辺だけ  
ど……」

そう言っつて、緋咲は右指で痛む部分を指差す。

どうやら、痛い部分は左肘の少し下の辺りらしい。

「どれ、ちよつと失礼するよ」

「うぎゃあああああッ！？ な、なんで叩くのよ！？痛いじゃないの！」

「軽く叩いたぐらいでギヤーギヤーいうなよ。で、響くか？」

緋咲は再び、自分の左腕に視線を落とす。

「響いては……ない」

「じゃあ、打撲だな。お前なら放って置けば治るだろう」



「ほ、放って置かないでよ……！」

少し緋咲は涙目で、語尾が震えていた。

その姿はまるで怖いものに怯える小動物のようなそれだ。

「治療はしてやりたい。だが、治療する道具がないんだ」

確かにそうだった……。

俺たちの性格上、全員が食用の調達を最優先にしていた。

治療道具なんて脳中にもなかった……。

なんとということだ……。

「そ、そんなぁ……」

「だが鎮痛剤はある。少しは役に立つだろう」

すると蒼生先輩はポケットから薬便のようなものを取り出した。

これはかなり効きそうなオーラを出している。

それを緋咲に渡す。

「え、液薬……？」

「そうだ。全部は多いから加減して飲んでくれ」

だが緋咲は黙り込んでしまった。

「に、苦い……？」

「そうだな。良薬口に苦しというだろ？」

「す、すごい苦い……の？」

「まあ、恐らく相当苦いと思うぞ」

緋咲は明らかに化け物を見たかのような表情だ。

だが、その視線の先は化け物でもモンスターでもなく鎮痛剤。その睨み合いが未だに続いている。

「どうした？飲めないのか？なら俺が飲ませてやろうか？」

蒼生先輩は茶化したつもりだったのだろう。

だが、緋咲は、ゆっくりと頷いた。

その弱々しい緋咲の姿を見て蒼生先輩はふうつと鼻で笑った。

「まったく、しょうがないな……」

蒼生先輩は緋咲から鎮痛剤を優しく奪い、蓋を開ける。

その飲み口を緋咲の口元へゆっくりと運ぶ。

「ほら、口を開けてごらん」

妙に優しい口調でキザな発言する蒼生先輩。

そんな口調に緋咲はいつも通りの反抗はせず、素直に言うことを聞いている。

そして、力強く瞼を閉じた。

その瞬間、蒼生先輩が持っていた鎮痛剤が銃声と共に爆発した。

「お、お前たち……！！！！ 面前の前で、なんともうらやま……い

「や！なんとも破廉恥な真似を！！！」

鎮痛剤に発砲したのは梁先輩だった。

サブマシンガンの銃口は消失した鎮痛剤に向いていて、カタカタとサブマシンガンが震えている。

あと、間違いなく「うらやましい」と言ったんだろう。

「し、梁氏！自分がやったことを解っているのか！？」

蒼生先輩は蒼白になり、梁先輩を見る。

「ああ、解っている！事前に不純異性交遊を防いだけだ！」

「なっ！不純異性交遊だと！？ふざけるのもいい加減にしろ！お前は鎮痛剤を地に返したのだぞ！？」

梁先輩と蒼生先輩の言い争いが始まった。

梁先輩は不純異性交遊と言い張っているが、さっき「うらやましい」と言わなかっただろうか？

「ならこれを使え！これの方が効果的だ！」

ブンツ！と梁先輩がオーバー스로ーで箱を投げる。

中身は……確認できない。

その箱を、蒼生先輩は片手でキャッチする。

「おお！消炎鎮痛剤じゃないか！」

「しよ、硝煙ちゃん通剤！？な、なんだそれは

！！！！！」

自分で投げた物を、自分で驚愕し恐慌している梁先輩。  
果たして梁先輩は何を投げたのだろうか。

「ち、違う！俗に言う湿布だ！そんな怪しい剤ではない！」

「なら最初から湿布といえ　　！！　　変な誤解をしま  
つただろ　　！！！」

ズドドドドドツ！！と梁先輩のサブマシンガンから銃声が  
響く　　！  
し、梁先輩が発砲した　　！  
発砲した銃弾は吸い込まれるように蒼生先輩の上半身に次々と吸い  
込まれていく……。

「ぐうはああああッ！？き、貴様！いくら防弾制服と言って発  
砲するな！」

被弾した蒼生先輩からは血の一滴も出ていない。  
これが防弾制服なのか！改めてすごいと確信した。  
どうやら、防弾制服は本当に近距離じゃないと貫通しないようだ。  
これが凶と出るか吉とでるか……。

「全て計算済みだ！淫狼男は神妙にしろ　　！！！」

梁先輩が再びトリガーに指を置く。

「ちょっと！止めなさいよ！銃弾が無駄じゃないの！」

緋咲が二人の間に割り込み、梁先輩を見る。

「お前は俺より染氏の弾数を心配するのか!？」

蒼生先輩が叫ぶ。

右手に持った湿布の箱が潰れてしまいそうな勢いだ。

あ、俺もつい湿布の心配をしてしまった。

「みんな〜！落ち着いてえ〜！」

どこからか現れた奏笑は最前線に割り込む。

その手には、手榴弾が握られていた　！

「か、奏笑ちゃん！そんな物騒なもの持って仲介しないでよ!！」

菜月は奏笑を背中から抱き止める。

もう、何がなんだか解らなくなって来た。

そっだ！聖夜は!？」

俺は聖夜を探す。

「まだ気絶してんのかよ

！！！！！！！」

俺たちファーズストクンパニアンはその後もまだ騒然な状態が続いた。

みんな元気だということは、身に沁みて解った。

9月5日/侑eyes

傳くも確かな意思(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日/侑eyes

傳くも確かな意思

色んな事が立て続きに起こったが今では落ち着き、お馴染みの円形の形で座っている。

まずは最初に起こった出来事。

「見えない壁があった」こと。

そして、その壁の向こうに自転車が消えていったこと。

その後は……そんなに重要じゃないか。

一番に解明しなければならぬのは見えない壁だ。

「さあ、この壁はどういうことなんだ」

梁先輩が立ち上がり、俺たちが衝突した見えない壁まで歩み寄る。

まるでドアをノックするかのようコンコンと叩く。

だが、返ってくる音はコンコンではなく、電撃に触れたかのような音だ。

その見えない壁を梁先輩は両手で押してみる。

「駄目だ。やはりびくともしない……」

はあっと位相結界はため息をつき、自分のポジションまで戻る。

「これは一体……どういうことなんだ……」

自転車はもう俺たちの周りにはない。

あの見えない壁の向こう側にある。

だが、その姿も見えない。

すると蒼生先輩が傍らにあった小石を見えない壁に向かって投げ

「やはり、あの先に行けないのは俺たちだけか……」

蒼生先輩が投げた小石は悠々と見えない壁を越えていく。

「破壊できるとも思ったが、破壊する術もないか……」

確かに武器はある。

だが、その武器もあの小石のように当たらずに通り過ぎていくだろう。

なら、何をやっても駄目なんじゃないか？

「解っていることは、私たちはあの見えない壁の向こうには行けないということだ」

梁先輩から改めて事実を突きつけられる。

予想もしてなかった。思いもしなかった。

だから、俺の心は大きく墮落した。

「なら俺たちは桜凜市から出られないということですか!？」

「侑のいう通りかもしれないな……」

梁先輩も酷く墮落しているようにみえた。

「だけど、これは良い収穫だと思うぜ？ そりゃ、出れなかったのは残念だがな……」

聖夜が俺に向かって苦笑いをする。



そうだな……確かにまったく無駄ということではない。

「そうだよ！もしあの正体がわかったらこの世界の事、少しは解るかもしれないよ！」

菜月は一度見えないけ壁を見てから、俺の方を見る。

「そうだな、ありがとう。聖夜、菜月」

俺は微笑を返した。

「では、この世界の解明の為に、見えない壁の解明を始めよう」

俺はさっぱり解らない。

見えない壁の正体が。

あんなもの見たこともないし、実在するとも思えない。だが、それが俺たちを遮らせている。

「あの壁は間違いなく魔術と考えていいと思う。詳細はまった解らないけど」

逸早く答えたのは緋咲だった。

「魔術は簡単に言うと、この世の法則に干渉し自然な状態を歪めて意のままに操る技術」

自然な状態を歪めて……！？

魔術というのはこんなもの造ることが可能なのか……。どこまでが可能でどこまでが不可なんだよ……。

「ほお、まさか緋咲がこんなまともな回答をするとは」

蒼生先輩が緋咲に苦笑いをする。

「忘れてた？ 仮にもあたしは総合科なんだから魔術にも触れてるのよ」

総合科は魔術にも触れているのか……。だからレベルが群を抜いて高い訳だ。

「恐らくこの異世界は魔術で創られた位相結界」

魔術で創られた位相結界？

どういう意味だ？

「緋咲。位相結界とはなんだ？」

梁先輩が緋咲に質問する。

「まあ、簡単に言えば現実を切り取ったような世界ってことよ」

「げ、現実を切り取ったような世界！？」

「そう、つまり異世界」

それが、この俺たちのいう世界なのか……。

「魔術の絶対的な発動方法は魔方陣。つまり円形の陣が必要」

「つまり……ここだけではなくて円状に見えない壁が存在している

つてことか……？」

「半径どのくらいかは解らないけど、広大な範囲を覆う結界の中に私たちはいるってこと」

「それが、私たちのいる異世界なのか……」

見えない壁のお陰で随分と真実へ近づいた。

俺たちは広大な円形の中に八方塞りで閉じ込められているんだ……。その空間を異世界とって……。

幾重にも謎になっていた線が頭の中で一本の線になった。

「もしそれが……緋咲の言っていることが本当なら……」

凩先輩がゆらゆらと立ち上がり、俺たちを見渡す。

「逃げる術はない」

「ッ！！！」

全員、息を呑んだ。

全身を駆け巡るように悪寒が走る。

ようやく自分が置かれた立場が理解出来た……。  
なら、俺たちはどうすればいいんだ……。

「逃げる術がないのなら、やることは一つだ……」

凩先輩が拳をブルブルと震わせる。

「この異世界を壊そう……」

梁先輩の小さく震えているその声が、何よりも俺の心を激動させた。儂なくも確かな梁先輩の意思。俺たちに逃げる術はない。立ち向かうしかないんだ。唇を噛み締め俺は立ち上がった。

「全員、一人も欠けずにこの異世界から脱出しよう！」

「侑……」

自分の意思が非難されると思った梁先輩は、滲んだ眼で俺を見つめた。

そうか……梁先輩も怖いんだ……。

怖くて仕方がないのに、梁先輩はこの絶望に満ちた異世界に立ち向かうとしていた。

その『魂』に俺は惹かれたんだ。

「お前はいつだってそうだよな」

聖夜が微笑を漏らしながら立ち上がる。

「何も考えもない癖に希望を創ってさ……」

聖夜が本気の表情で、俺の眼を見る。

俺は一時も視線を逸らさずに聖夜の眼を見た。

「だから俺はお前が好きなんだよ」

聖夜は表情を崩し、無邪気に笑う。

その表情を見て俺もつい子供のように笑ってしまった。

「そうだね。数少ない俺の良い所だもんね」

「おいおい菜月、数少ないは余計だろ？」

「えええ〜？ 俺くんの数少ない良い所ってな〜にい〜？」

「おいおい奏笑、俺にだって星の数ほど良い所があるぞ？」

俺たちはあの頃のように、いつもの日常のように無邪気に笑つ。心の底から想いが溢れ出てくる。何より大切な、この世界に欠けている想いが。

「楽しそうだな……」

凩先輩は笑顔で俺たちを見守る。

「こんな世界なのに、どうしてそんなに楽しくいられるんだ……」

ポンツと蒼生先輩が凩先輩の肩を叩く。

「これが『仲間』だよ。凩氏」

「なかま……」

『仲間』という意味と言葉を照らし合わせるように俺たちを見る凩先輩。

「私は大切なものを見落としていたかもな……」

「ほお〜？大切なものとはなんだ？」

「なっ！なんだっていいだろ！？独り言だ！」

「蒼生っ！ お腹すいた！ 何か買ってきて！」

「緋咲……お前はバカか？ こんな山奥に店がある訳ないだろ？」

『ファーズストックンパニアン』に、確かな絆が生まれた。

その絆は、この異世界を壊す為の、それぞれの日常に帰る為の、何より大切なもの。

9月5日/侑eyes

仲間と明日へ(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日 / 侑eyes

仲間と明日へ

空は夕焼け。

黄昏た空から届く黄金色の光彩が、いつもより優しく、そして温かく感じる自分がいた。

「夕焼けってこんなに綺麗だったか？」

いつも通りといえばいつも通りの夕焼けだ。

だけど、この夕焼けにはもっと特別な意味を感じる。

「この光彩の中を自転車で駆け抜けたかったな」

染先輩が俺に向かって苦笑いをする。

だが、自転車はあの見えない壁の向こうに行ってしまった。取り戻せる術はない。

「まさか自転車で来た道を徒歩で引き返すとはな……」

染先輩が頭を軽くボリボリと搔く。

その染先輩の金髪が、空から降り注ぐ光彩でキラキラと眩い光を煌かせていた。

「俺も思いませんでしたよ。でもどうにかこの田舎道まで引き返せましたね」

軽い口調で俺はそう言った。



俺の返事の直後、先頭を歩く梁先輩が立ち止まりゆっくりと振り返った。

長い金髪がその動きを追い優美な曲線を描く。

「みんな……これからは激しい戦闘も予想される。だから……」

そこまで言うと梁先輩は、握った右手を自分の胸に当て視線を下げた。

「絶対に生きて帰ろう！私たちの日常へ！」

梁先輩は拳を強く突きつける。

その梁先輩の一つの陰りもない言葉に、俺の身体は芯から熱く滾る。

「絶対に全員、生きて帰りましょう！」

梁先輩の拳に、俺も拳を合わせる。

そして、ファーズストクンパニアン全員が拳を突き合わせる。

みんなの意志は一つで、この力が何よりも凌駕する。

そう確信した。

その時

俺の対向に、全身を夕陽に染めた人影が見えた

「まさかこんな所で人と遭遇するとは……」

声のトーンが低く、落ち着いた女性の声。

この声は、俺たちの前方から……。  
あの人影から聞こえてくる　　！

「誰だっ！」

凧先輩が機敏に振り返り、向かい合わせに対峙する。

そして先輩は、軽くスカートを翻し太ももに着けているレッグホルスターに手を触れる。

空いている左手を広げて、俺たちに後退しろっとジェスチャーする。それに従い俺たちは3歩程後退する。

「凧高校の生徒を連れているようだな」

場の空気に合わせるように夕陽が鎮まり、お互いの輪郭から表情まで判るようになった。

相手は深く赤い長髪で、息を呑むような美しい容姿をしていた。

「願わくは無駄な戦闘は避けたいのだが」

凧先輩はレッグホルスターを覗かせたまま、直向に対峙している。

「無駄だと？ ……笑止」

ふふんつと少女は鼻で笑ってみせた。

凧先輩はまったく動揺もせず、ただ少女の眼を視る。

「凧高校の生徒を殺さなくては世界は終わる……もう、その時は近い」

「世界が終わるっ！？ どういう意味だ！」

凩先輩が少女の言葉に取り乱れる。

更に追い討ちを掛けるように、少女が二つの鞘から両手をクロスにしてゆっくり刀を抜く。

コイツ……二刀流だ。

そして、右手に握られた刀の刃先を凩先輩へ真っ直ぐ向けた。

「そこをどけ！」

初めて少女の言語に感情が入った。

その強い言葉は今までの少女からは想像できない……強い戦闘心を感じた。

「私が退けたら、お前は桜凩高校の生徒である侑たちを殺す。だから退けない！」

その言葉が終わった直後、凩先輩と少女はまったく同時に初動し、駆け出す！

凩先輩は疾走に駆けながら、その称号通り「両撃の右剣左銃」という独自の戦闘スタイルを披瀝する！  
相手は二刀流、両撃同士の相殺。

『カキ　　ンッ！！！！』

初めて聞く刀同士が激しく交差する金属音。  
戦闘が……始まってしまった。

「はあっ！」

刀同士が交差し合った強い衝撃を利用して凩先輩は、背中から引つ

張られているかのように後ろへ跳ぶ！  
相手は二刀流、つまりは近距離。

凧先輩は右手に65cm前後の日本刀、左手にはMP7をベースに特別に製作された「MP7・OBK/SR（サブマシンガン）」という戦闘スタイル。

近距離では圧倒的に相手が有利だが、中距離ではサブマシンガンを持つている凧先輩が有利だ！

だから凧先輩は距離を中距離にする為後ろへ跳んだんだ。

『ズドドドドドドドドドドッ！！！！』

着地もせず凧先輩は空中で、相手の防弾制服を舐め回すように発砲する！

「はあ　ッ!？」

少女は横に跳び転がり、全ての弾を避ける。

それと同時に凧先輩も地面を滑り、地面に着地する。

「みんなっ！もつと下がれ！」

凧先輩が俺たちに振り返り忠告をする。

確かに凧先輩が中距離を取った今、俺たちと凧先輩の距離が近くなっている。

「ここは凧氏の言う事を聞け！　下がるぞ！」

蒼生先輩が俺たちに下がれのジャスチャーをする。

俺たちは黙って蒼生先輩と凧先輩の指示に従う。

「緋咲！奏笑氏！ お前らは桜凜高校の生徒達を護衛してくれ！」

「言われなくたって解ってるわよ！」

緋咲は蒼生先輩に従い、俺の目の前に立つ。

「わ、わかりましたあ〜！」

奏笑は×字に差してある忍者刀を背中からグルグルと回しながら抜き、柄を上に向けて握る。

奏笑はいつもあんなだが、この動作を見せられるとはっとするものがある。

「聖夜！俺たちだって武装してるんだ！万が一の時は戦うぞ！」

そついい俺は懐からハンドガンを取り出す。

「ああつ、そうだったな！」

聖夜も俺と同じ動作をする。

装弾は5発か……。

弾倉もないから無駄には出来ない。

だけど、絶対に人は殺さない。

俺は誰も殺さずにこの世界から脱出する！

「菜月は武装がない。だから俺が守る！」

俺は後ろの菜月と背中で話す。

「菜月なら武装してなくても強いだろ？」

聖夜が冗談交じりで微笑する。

ああ、それは俺も同意だ。

だが、そんな冗談が通用する世界じゃないんだよな……。

「こんな状況で良くそんなことが言えるわね……」

背中に眼がないから見えないが、今の菜月の表情はかなり恐ろしいだろう。

声のトーンで解る。

「あんた等は素人なんだから戦わないように」

横目で緋咲に鼻で笑われてしまった。

明らかに差別された気分だ。

でも、こればかりはしょうがない。

「ああ、解ってる。だが自分と大切な仲間を守る最低限の戦いはさせてもらおう」

俺は銃を両手で構える。

サバゲーにはかなりの自信があるが、これはサバゲーなんかじゃない。

解っている。生死が懸かっているんだ。

だけどいつまでも傍観者ではいたくない。

俺だって守るんだ　！　大切なものを　！

「あいつ等のターゲットはお前たちなんだから」

緋咲は俺と聖夜、菜月を見てそういった。

だが、その言語には引つ掛かるものがあつた。

「あ、あいつ等？」

「そう。敵はあの赤髪の人だけじゃないわよ」

緋咲は周りの田畑を見る。

まさか……あの中にも敵が隠れているのか!?

「少なくとも左右の田畑に一人ずつはいたわよ」

緋咲は腕組をし、歴然とした態度を取っていた。

「お前、武装もしてないのに良くそんな偉ぶつた態度を取れるな」

と蒼生先輩が言うと、緋咲は何度も眉毛を上げながら渋々ポケットに手を入れた。

確かに緋咲は武装していないし、緋咲の武装した姿を一度も見たことがない。

武器がないのだろうか？

「あんたはいちいちうるさいわね……ほらッ！これでいいでしょ！」

緋咲がポケットから取り出したのは薄い赤色の折りたたみ式携帯だつた。

「よっし、それでいい」

だが、蒼生先輩は何も言わなかった。

まるでそれが武器かのように……。

「緋咲、何で携帯なんて取り出してんだ？」

俺は緋咲に問いかける。

そして緋咲は俺の問いに少し赤面した。

「これがあたしの武器なのよ！」

「け、携帯が武器っ!？」

緋咲は少し恥ずかしそうだった。

恥ずかしかったから武器を今まで出さなかったのだろうか？  
それより、携帯が武器って……どうということなんだ？

「説明は後よ！聞きたかったら生き残りなさい！」

緋咲はそういつて、染先輩を見る。

聞きたかつら生き残りなさいっか……。

緋咲らしく遠回りに言ったのが少し笑えてきた。

『カキ      ンッ!?!!』

再び、金属が激しくぶつかり合う高音がこの田舎道に木霊した。  
中距離を取った染先輩だが、相手に間合いを詰められたようだ。  
だが今度は状況が悪くなったのか、敵から間合いを取った。

「貴方が『両撃の右剣左銃』か……」

「……………」



だが梁先輩はその問いに答えなかった。  
そして、左手の銃を少女へ向ける。

「至高の桜月導の次はそのパートナーに会うとは、何とも滑稽な話だ！」

少女が両手を大きく翼のように広げ、一気に滑るように間合いを詰める。

だが、梁先輩の反応は極端に遅かった。

「至高の桜月導　ッ！？　沙耶かつ！？」

「隙だらけだぞッ！」

「ああああ　ッ！？」

眼と鼻の先まで接近している敵にようやく気が付いた梁先輩は正気を取り戻し、その突きを鏢で受け止めた　！

『カキ　　ンッ！！！！』

「ぐはああああッ！？」

まともに衝撃を受けた梁先輩は大きく後方へ跳ばされる　！  
梁先輩はその勢いで、地面に何度も身体を強打する。

「ぐあ……がああ……！！？」

梁先輩は悶絶を上げ、仰向けのまま地面に平伏せてしまった。  
好機が訪れた少女は、先見せたように大きく翼のように広げ、一気に

に滑るように間合いを詰める　！  
それに梁先輩は気付いているが、立ち上がる余力もなく顔を歪ましている。

梁先輩は少女の姿を視ることしか出来なかった。

剣が峰。俺でも理解出来た。

このままだと、梁先輩は無抵抗なまま殺される。

俺たちと梁先輩の距離は30メートルぐらいある。  
誰が走っても、その瞬間に間に合う距離ではなかった。

「梁先輩　　ッ！！！！！！」

喉が張り裂けるぐらいに叫んだ。

だが、俺が叫んでも運命は変わらなかった。

俺は何も出来なかった。

「バカッ！何やってんのよ　　！！！！」

俺の傍らにいた緋咲が、右手に握り締めていた携帯を開き、まるで携帯から何かが出るように大きく振りかざした　　！

『ビシユウウウウウウウウ　　ッ！！！！！！』

携帯を耳に付ける部位から、肉眼でも見える程の紐が、梁先輩目指して疾駆する　　！

その紐は、まるで意思があるように正確に少女へ突き進んでいく！

「な、なんだっ!？」

少女は疾駆してくる紐の存在に気付き、梁先輩の一步手前で立ち止まる。

「はああっ!！」

少女は二刀流の刀をクロスにして緋咲の紐を受け止め、左側に軌道を変える。

くそっ! 一時的な時間稼ぎにしかならなかったかのか!?

「みゃッ!！」

緋咲が声を上げた瞬間、軌道が変わり少女を通り過ぎた紐が、少女の周りを取り巻くように疾駆する！

「ば、馬鹿な……!！」

「触れると斬れるわよ!この紐!！」

緋咲は少女に届くような声で警鐘を鳴らす。

あの紐は斬れるのか!?

なら、完全なる武器だ!

『カキ                      ンッ!!!!!!!!！」

左右から巻き付くように迫る紐を、少女は左右の両刃で受け止める。

「染 璃桜っ！！！」

緋咲がチャンスと言わんばかりに染先輩に唆す。

「ああ、起死回生だっ！！！」

染先輩が膝を地面につけながらも上体を起こし、サブマシンを構える！  
そして

『ズドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！』

一番最初に染先輩がした攻撃のように、再び防弾制服一面を舐め回すように発砲する！  
刀は紐を受け止めているから使えない。今の少女は八方塞だ。だが、回避ポイントは一つだけ存在していた。

「はあああああッ！！！」

少女が上空へ飛翔した！

染先輩の銃弾はターゲットを失い、更に先へ消えてしまう。

「な、なかなかやるわね！」

緋咲は盛大に長い紐を、携帯に吸い込まれるように収納させた。本当に瞬く間の出来事だ。

「上かつ！？」

凩先輩が上に視線を上げると同時に銃口も上へ向ける。

『ズドドドドドドッ……!』

発砲するが、全て刃身で受け止められてしまう。

凩先輩が再びトリガーを引こうとした時

『ズドオ

ンッ!……!』

まるで花火が上がったような……そんな爆音が響いた。

爆音がした方向には眼が眩む程の光が満ちていた。

あれは信号弾か!?

しかし、どこから……?

その音に少女は少しだけ振り返り、何かを呟いた。

すると少女は銃弾を受け止めた勢いを利用して身体を上下に一回転させ、落下地点を田畑へと転換した。

その姿を見て凩先輩は少女へ向けていた銃を下ろした。

ガサツ!という音を立て、少女は麦畑へ消えていった。

高く聳えている麦の中から少女を探すのは一苦労だ。

「上手く逃げられたな……。あれは武装高の信号弾だ」

凩先輩は銃をホルスターへ収納し、それに続いて刀も鞘に収めた。あれは武装高の信号弾だったのか。

だからあの少女は信号弾の指示に従って、武装高に戻ったのか?

そして、凩先輩は視線を落としながら俺たちの方へ歩み寄る。

「緋咲……あ、ありがとう」

凩先輩が真つ先にお礼を言ったのは緋咲だった。

「えっ？ べ、別に大した事じゃないわよ！」

緋咲がぎこちない返事を凩先輩にした。

面と向かって言われたから気恥ずかしかったのだろう。

それよりも、今は凩先輩の生還を喜ぶべきだ。

「凩先輩！ 大丈夫ですか！？」

俺は凩先輩に駆け寄る。

遠くからでは見えなかったが、額には少し切り傷があり血も滲んでいた。

「ああ、みんなのお陰で大丈夫だ」

凩先輩は満面の笑顔を見せた。

その笑顔に、俺は心から安心した。

「みんな……すまない。戦いに巻き込んでしまっ……」

凩先輩は深く頭を下げる。

そんな凩先輩を見て蒼生先輩が俺の前に割り込んだ。

「そう頭を下げるな凩氏。今回の戦闘でかなりの情報が手に入った」

確かにいくつかの情報が手に入った気がする。

「……そう言って貰えると助かる」

染先輩がゆっくりと顔を上げた。  
そのタイミングで俺は

「勇敢に戦った染先輩に拍手っ！」

俺はおどけるように染先輩へ拍手を送る。  
だけど、この拍手は遊びでもなんでもない。  
俺の気持ちだ。

最初は俺だけだったが、徐々に拍手の音は増していく。

「みんな……」

染先輩は潤んだ目で俺たち「ファーズストクンパニアン」を見る。  
そして、もう一度最高の笑みを見せた。  
その笑顔に答えるように、拍手はさらに大きくなる。

すると、染先輩が両手を大きく上げ、指揮者のように二回両手をリズム良く振り下げ、最後に両手を大きく広げた。  
その合図に合わせ、俺たちの拍手は同時に終わる。

何がおかしいのか解らないが、俺たちはそのままずっと無邪気に笑った。

9月5日/侑eyes

陽が沈む前の一時（前書き）

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



9月5日/侑eyes

陽が沈む前の一時

田舎道でバツタリ遭遇してしまった少女と、激しい戦いになってしまったが、俺たちは全員生きている。だが、この戦いでかなりの情報が手に入った。

「ああ、もう日が沈んでしまう……」

梁先輩は名残惜しそうに空を見つめる。

夕焼けの姿は消え、確実に夜へ近づいている空模様。

「とにかく、行けるとこまで行こう。話し合いは夜だ」

夜は真っ暗だから行動出来ない。

だからその時に話し合いをする。

梁先輩が言いたいのはそのうちのことだろう。

「歩いているだけじゃ詰まらない。何か話そうじゃないか」

明るいトーンでそう話を切り出す。

「……何かって何ですか？」

俺は冷静に梁先輩へ返す。

「何というか、全員を巻き込むような話をしたい」

全員を巻き込む……。  
ならみんなに共通な話題がいいかな……。  
……共通な話題ね……。  
何があるだろう？

「プッシュアップ・プランジ・ブラの話しようぜ！」

聖夜が繰り出したのは……。なんと理解不能な話だ。

「ぶっしゅあつぷ……。ぶらんぶらん？」

梁先輩が首を傾げて片言を語りだす。  
「つてか、ぶらんぶらんって……。」

「俗に言う寄せて上げるブラですよ！」

聖夜がグウ！と親指を立てる。

なぜそんなに胸を張って言えるのだろう……。  
彼の性癖には驚くばかりである。  
こんな話で盛り上がる訳ないだろう……。。

「ああ！あのカップを偽装するヤツか！」

梁先輩が食い付いた……。！

「えええ〜！偽装出来るの〜！？」

続いて奏笑も食い付いた……。！

「ああ、どつやら出来るようだぞ？」

梁先輩が満面の笑みを梁先輩に返す。

「梁先輩は別に偽装しなくても大きいのに……」

つい素で恐ろしいことを口走ってしまった！

俺は何を考えているんだ！

「な、なにっ！？ それは本当か侑！？」

「あ、はい……」

何故か嬉しい反応をしてくれた梁先輩に感謝！

ああ、これが顔から火が出るか……。

本当に火が出そうだった。

梁先輩を見ると、かなり機嫌が良さそうだった。

この人のスイッチは本当に解らない……。

「でもさあゝ、なんか寄せて上げるブラ着けると負けた感じがするよねえゝ」

「ッ！？」

奏笑の言葉に、魂の叫びで反応してしまった緋咲。

「緋咲、お前まさか着けてるのか？」

緋咲の心を透視するような蒼生先輩の心眼。

その蒼生先輩の言葉に一齐に視線が集まる緋咲。

そして、見事な赤面壁を發揮した。

「っ、つつつ着けてにゃんてにゃいわよ!」

緋咲は言いながら睨み眼になり、更に真っ赤になる。

「今の短文で3、4回噛んだのにか？」

「ッ!!!」

緋咲の頭は恥ずかしさのあまり噴火しただろう。

赤面していた顔は、だんだんと血が引けてしまっている……。

すると蒼生先輩は半分だけ振り返って、混乱しまくりの緋咲にウインクすると

「別に恥じることはないさ。堂々と胸を張りなさい」

「何よっ！ その妙にいい顔っ!!!」

聖夜の持ち出したプッシュアップ・プランジ・ブラの話は、緋咲が着けていると判明した所で幕を下ろした。

「しかし、皆でこんな田舎道を歩いているなんて遠足みたいだな」

いきなり遠足の話をし出す染先輩。

「確かに遠足みたいですな」

そっつい、俺も景色を見つめる。

北の大地じゃないのか？と思うぐらいにのどかな景色だ。

「遠足か懐かしーなあ。遠足帰りに公園とか橋の下で友達とエロ本拾ってたっけな」

自分の壮絶な過去を笑顔で語りだす聖夜。  
と、染先輩は

「その友達って侑か？」

「違いますよ！」

勘違いされると厄介になる。  
だから俺は全力で否定した。

「なあ、侑」

ポンツと俺の肩を叩き、身を寄せる聖夜。  
なんだよつと軽く相槌を打っておいた。

「これから橋の下、見に行かないか？」

「何で俺を誘うんだよ……」

「男同士、積もる話もあるだろ？」

このままだと俺まで同類とみんなに勘違いされる！  
俺はそんなんじゃない！

だがここは冷静に対処しよう……。

「いや、止めて置くよ」

「なんだよ、つまんねーな」

聖夜が俺の肩から離れてくれた。  
なんだろう。この開放感は……。

「タラバガニはカニではないのかっ!？」

突如、何かに気付いたようにハアツ!とした表情を浮かべ、いきなり突拍子もないことを言い放つ染先輩。

一体、この人は何を考えているのだろうか？

「はあ？」

俺は啞然となりこの言葉しか出なかった。

「良く考えてみる!アイツの脚は何本あるっ!？」

興奮した口調で俺に問い詰める染先輩。

「タラバガニの脚の数なんて、いちいち覚えていない。」

「3足ずつしかないんだぞっ!？」

「3足つて……。」

靴下じゃあるまいし。

「カニは4足ずつなのにアイツだけ3本だぞっ!？」

自分の気付いたことがそんなに凄いのか、染先輩は熱く語り俺に教えつける。

「そうでしたっけ？」

俺は頭の中でタラバガニを想像する。

だが、全体的にモザイクが掛かっている。

「これは即ち、タラバガニはカニではないことを意味していないかっ!？」

結論出るのちよつと早くないか？

アイツの容姿は完璧にカニだろ。

「その通りだ染氏!」

蒼生先輩が高らかにそう言い放った。

「タラバガニはカニではなく、ヤドカリの仲間だ」

やっぱり蒼生先輩は物知りだ……。  
それに豪く説得力がある。

「や、ヤドカリだとっ!？」

衝撃の事実を突き付けられた梁先輩は、驚愕の色を見せる。

「それが事実だ。受け止めるしかない梁氏」

「そ、そうなのか……」

梁先輩はガクツと肩を下ろした。

タラバガニってヤドカリの仲間なんだ……。  
知らなかった。

そんなバカみたいな話をしていたら、いつの間にか日は沈んでしま  
った。

結構歩いた……。

このペースで行くと、明日には市街地に辿り着けるだろう。

「さあ、今日はもう休もう！」

辛うじて薄っすらと容姿が見えるぐらいに夜が来てしまった。  
梁先輩のいう通りこれ以上の行動は止めた方がいいと思う。



「さて、休むとは言ったがどこで休む？」

梁先輩の一言で、全員が周りを見渡す。

俺も眼を凝らして見るが、右側には山があると思う。

「山の中が一番だと思います」

これは俺の意見だ。

山の中だと見つかるリスクも減るだろう。

それに、少しは寝れそうな気がする。

「そうだな、私もそれがいいと思う」

その後に、皆はどう思う？と付け加える梁先輩。

皆の反応からするに反対意見はないようだ。

「なら、森に潜もう！」

梁先輩を先頭に俺たちは森の中へ入っていった。

9月5日/侑eyes

緋咲の武器(前書き)

「君の魂に抱かれてー(きみのところにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

暫く俺たちは森の中を歩き、ようやく拓けた場所まで辿り着けた。視野が非常に悪い影響で、ここまで辿り着くのに何人が転んだことか……。

特に奏笑が一番転んでた。俺だって危なかったけど……。

「ファーゼストクンパニアン、第何回かは忘れたが会議を始める」  
円状に座る俺たちの中心には焚き火があり、そこから放たれる赤黄色の光が俺たちの唯一の灯りだ。  
一つ灯りがあるこんなにも明るいな……。

「桜凜高校の生徒を殺さなくては世界は終わる……もう、その時は近い」

凜先輩はあの少女が発していた言葉を代弁するかのように入った。

『桜凜高校の生徒を殺さなくては世界は終わる』

これはどういう意味だ？

俺たちを殺さなくては世界が終わる？

すると、疑問を払拭するかのようにな蒼生先輩が口を開いた。

「ヤツの言っていたことが事実とは限らない。が、今は事実と仮定しよう」

俺も頭をフル回転する。

が、不吉な予感が頭の中をグルグル廻るだけだった。

と、凩先輩は

「なら、ヤツが言っていた『世界の終わり』とは何なんだ？」

「恐らく、この異世界の終わりと考えていいだろう」

蒼生先輩の言葉が正しければ、

俺たち、桜凩高校の生徒を滅ぼさなければ、この異世界は終わる。  
俺は考えも纏まらない内に口を開いた。

「なんていうか……桜凩武装高校の生徒は時間に追われてる気がするんですよ」

何気なく、そして誰にもなく言った俺の一言に、蒼生先輩はハアツとする。

「侑氏の達見と俺の考えを重ね合わせると……」

「もしかすると、この異世界はある時点まで達すると終わるかもしれない」

蒼生先輩がこの異世界の真実へと迫って行く。  
すると聖夜が威勢よく言葉を上げた。

「なら俺たちはその世界の終わりまで生き残れば……!!」

そうか！そこまで生き残れば俺たちは元の日常に帰れるのか！

「それは理に適っていないんじゃないか？」

「ある時点まで達すれば異世界が終わるのなら、私たちが戦う意味はない」

確かに染先輩の言う通りだ……。

まだ考えが纏まっていないのか、蒼生先輩は困った顔で口を開く。

「俺もそこが気掛かりなんだ。ヤツは明らかにこの世界の終わりを望んでいなかった」

桜凜高校の生徒を殺さなくては世界は終わる……もう、その時は近い

武装高にとって異世界が終わるのは都合が悪い。

だから限られた時間までに俺たちを倒さなくてはならない。纏めてみたが、明らかにおかしい。

俺はそのまま発言に出た。

「武装高にとって異世界が終わるのは都合が悪くて、だから限られた時間までに俺たちを倒さなくてはならないって、あまりにもおかしくないですか？」

俺の言葉に全員が唖り、黙ってしまふ。

聞こえる音は、火が燃えている音だけだ。

どれが妄信でどれが事実なのかさっぱり解らない。暫く続いた静寂を破ったのは緋咲だった。

「根本的に何かズレてない？」

……何かが根本的にズれている。  
あらゆる考えを纏めてみるが、どうしてもそこには矛盾が生じてしまふ。

確かに根本的にズれている気がする。

「ならあゝ、あの娘が言ったのはウソってことあゝ?」

奏笑の言葉に蒼生先輩は、

「根本的に違うのなら、今の情報ではそれしか考えられないな……」

あの蒼生先輩でも頭を悩ませている。

そう簡単にはこの異世界の真実には辿り着けないということか……。

「だが、あの状況……何より、あの表情で偽りを言っているとは思えない……」

俺も一度も、少女の言葉を疑う時はなかった。

あの真つ直ぐな眼……使命の為に命を賭けて戦う姿。

そんな少女が偽りを言っているとは思えなかった。

「今ある情報で解明できるのはこれぐらいだな」

ため息混じりにそういった蒼生先輩。

確かに、これ以上の解明は溝を深めるだけだ。

「そうだな。それ以上の追求は止そう」

梁先輩もそこで話を打ち切った。

「しかし、あの少女は強かったな」

凩先輩はあの戦闘を思い出したのだろうか？  
確かに素人の俺から見るともかなり強かった。  
もしかしたら凩先輩のより上の領域をいつているかもしれない。

「赤瀬川 麗那あかせがわ れいな。称号は『英傑えいけつの畢生超越アーカプラス』 剣術科 A ランク」

蒼生先輩が淡々と語りだした。

「赤瀬川 麗那」

それがあの少女の名前か……。

「やはり私より格上だったか……」

B ランクで現代剣術科の凩先輩。

凩先輩曰く、剣術科は素人には入れない。

現代剣術科に比べれば、遥かにレベルが高いのだ。

ただでさえレベルの高い剣術科の A ランクということは、一騎当千の猛者。

ランクでは一つの違いだが、本当の实力はランク以上にかけて離れているという……。

「赤瀬川 麗那。身長 166 体重 48。上から 85、53、はちじゆう……」

「ちょっとアンタ知りすぎよっ！！！！」

呪文のように彼女の全てを曝け出す蒼生先輩に、緋咲はツッコミを入れる。

緋咲の言うとおり、気持ち悪いぐらいに知ってしまったている。

「何を馬鹿なことを。戦術科は情報をとれただけ会得しているかでものを言うんだぞ？」

そうだったのか……。

すっかり蒼生先輩の人格を疑ってしまった。

なら、戦術科の人達は全員こんな感じなのだろうか。

恐ろしい集団だな……。

「嘉上 緋咲。身長157体重44。上からはちじゅう……」

「い、言うな ツ!!!!!!」

緋咲の大声音でスリーサイズは聞こえなかった。

だが「はちじゅう……」は聞こえた。

へえ、はちじゅうはあるんだ……。

着痩せするタイプなのだろうか？

「染 璃桜。身長161体重47。上からはちじゅう……」

俺は蒼生先輩の言葉に無意識に聞き耳を立ててしまった。

「これ以上口走ると首が飛ぶぞ？」

蒼生先輩の首の前に、染先輩が流星の如く抜いた刃先が向けてあった！

さすがの蒼生先輩も脂汗が滲み出ているが、清ました顔をしている。そして、染先輩のスリーサイズを聞けなくて少しガツカリしている最低な俺がいた……。



「蝶野 菜月。身長158体重45。上からジャストはちじゅう…」

「何で知ってるのよっ!? あたしは武装高じゃないのにつ!」

この時、俺は蒼生先輩の人格を疑った。  
夜な夜な調べてるんじゃないのか?

「ねえ〜ねえ〜、わたしのは知ってるのお〜」

「新稲 奏笑。身長156体重44。上から81、48、83」

そ、即答っ!?

なんて広大な情報網だ!  
すると何故か奏笑がいきなり泣き出した。

「うわあ〜ん! 緋咲ちゃんと体重同じなのに1cmチビだあ〜!」

体重が同じ緋咲より1cmチビという事実には、喚く奏笑。  
自分で自分の身長を知らなかったのか……。  
本人が知らないような事を良く蒼生先輩は知っているな。

「でも、バストなら緋咲ちゃんに勝ってるよお〜! きつと……」

そう言い終ると、奏笑は緋咲の胸を見つめる。  
見た目では奏笑の方がありそうだ。  
つて、なに俺も見てるんだよ……。

「2cm緋咲が勝っている」

「地味にあたしのを暴露するな

ッ！！！！！！！」

「う、うわあ〜ん！ バストでも負けたあ〜ん！」

「残念だがスタイルは全て緋咲が凌駕している」

「う、うわああ〜ん！ そんなあ〜ん！ お、お嫁に行けないい〜ん！」

……緋咲にスタイルで負けるとお嫁に行けないのか？

「そうだよねえ……、緋咲ちゃんに全て負けてるわたしなんてゴミの日にポポいのポイツだよねえ……」

奏笑がアニメのように泣き目になる。

別にスタイルが負けててもお嫁に行けなかったり、ゴミの日にポポいのポイツはないだろう。

それとも、武装高の暗黒のルールなのだろうか。

「ゴミの日にポポいのポイツするときは、せめて燃えないゴミの日に……」

「ちなみに一番スタイルが良いのは染氏だ」

華麗に奏笑がスルーされた。

すかさず菜月が奏笑を慰めている。

「ほ、本当かつ！？」

染先輩が歓喜を上げる。

やっぱり染先輩か。  
俺の眼に狂いはなかったようだ。

……俺はいつのまにそんな事を考えていたのか？

「染先輩〜！わたしを嫁がしてください〜！」

「だ、誰が同姓と交接するか！」

「安心しろ奏笑！俺が嫁いでやるぜ！」

聖夜が親指グウ！っと突きつけ、ウィンクをする。

普通逆だろう。何で聖夜が嫁ぐんだ。

聖夜の性癖には驚くばかりである。

「ありがとう聖夜くん〜！これでお嫁に行けます〜！」

……。

もう話が解らなくなってきた。

聖夜が嫁ぐのにどうして奏笑がお嫁に行けるんだ？

お互い嫁いでどうするんだ……。

細かい所を言ったら限がない気がした。

……それより緋咲に詳しいことを聞いてみよう。

生き残れば詳しく教えてくれると緋咲と約束したことだし。

俺は緋咲の所まで歩み寄り、傍らに腰を下ろす。

「な、なによ？」

「なによっじゃないだろ。生き残れば教えてくれるんじゃないのか？」

緋咲の武器は携帯。

しかも、その携帯から紐が出るという摩訶不思議なものだ。

「ああ、携帯の話ね」

緋咲は気が進まなそうなる態度を取るが、ポケットから携帯を取り出した。

「アンタも見ただしょ？」

そっぴいなながら緋咲は携帯の表面に手を置く。

すると、その携帯から黒いモヤモヤとした光が溢れ出したとてもこの世の光景とは思えない……魔術といった感じだ。

緋咲は携帯から手を離し

「で、この黒いところから紐刃ちぢばが出るのよ」

黒いモヤモヤとした妖しい光りを漏らしている携帯の表面をツンツンと指差す。

「えっ？どっぴいこと？」

すると緋咲が

「みゃッ！」

猫のように短く声を上げる緋咲。

その声は、力を入れているようにも聞こえた。

『ビシユウウウウウウウウウウ』

ツ!!!!!!!!!!!!!!』

何も動かしていない携帯の表面から、空へ向かって紐刃が飛翔する！

紐刃に意思があるかのように

「っつてこと。解った？」

俺に視線を合わせる緋咲。

そうしている最中も紐刃は未だに空へ飛翔している。

「どれだけその紐刃つてのは長いんだ？」

「さあ？ 測ったこともない」

再び力を入れた刹那、もの凄い勢いで紐刃が携帯へ吸い込まれるように収納されていく……。

「緋咲の携帯つてすごいな……」

こんな携帯が世の中にあっただんだな。

さっきから驚くばかりだ。

「ああ、別に携帯は関係ないわよ。ただ使い勝手がいいから携帯を固有結界の入り口にしているだけよ」

「……………こゆうけっかい？」

ああ、頭が真っ白になっていく……。  
緋咲は何をいつているんだ……。

「どうしたのよ？ そんな冴えない顔して見つともないわよ」

「固有結界ってなんですか？」

固有結界の入り口になっているから携帯から紐刃が出る……？  
俺には理解し難いことだ。

いや、誰にだって同じことが言えるだろう。

「固有結界は自分の身体自身に固有の結界を造ることよ」

説明されてもさっぱり解らない。

ただ自分が惨めに思えてくるだけだ……。

「どつという意味ですか？」

言語もついつい敬語になってしまつ……。

「まあ、つまり自分自身の中に結界を造るのよ。魔術で」

自分自身に結界を造る？

「固有結界は自分の好きなように造れて、私はモノを無限に収納できる固有結界を造つたの」

「まあ、どつという固有結界を造れるかは魔術の強さに関係してるんだけど」

ああ、薄っすらと理解出来てきた。  
つまり緋咲は自分自身にモノを無限に収納出来る固有結界を造ったんだ。

「つまり緋咲の身体は何でも収納出来るってことか？」

「出来るには出来るけど、二度と固有結界から取り出せれないけどね」

「え？それじゃ意味ないんじゃない？」

「一度収納したものは、定められた長さまでしか結界外から出せないように造ってあるの」

「だから紐刃も固有結界に収納してるんだけど、あれの長さは無限じゃないのよ」

ああ、なるほど。

定められた長さしか出せないのか……。  
つまり、緋咲の武器である紐刃は出すことは出来ても取り出すことは出来ないんだ。

「で、あとは魔術で固有結界の入り口を一時的に造れば、そこから固有結界に収納されたモノを出せるってわけ」

「ああ！さっき見せてくれた黒いモヤモヤか！」

「黒いモヤモヤって……まあ、確かにそうだけど」

なるほど！

あの黒いモヤモヤが緋咲の固有結界の入り口なんだ！  
だからあの入り口から紐刃が出るのか。

「固有結界は自分自身の中にあるから、自分の意思と連動してるのよ」

「い、意思と連動？」

「だから固有結界の中にあるモノも自分の意思と連動していて、自分の意思通り動かせるってわけ」

全てを語り終わり、満足気に微笑む緋咲。

ただ、紐が携帯から出てるんじゃないかと、裏にはこんな事実があるなんてな……。

そう思った俺にあの時の光景が蘇った。

「そうか！ 紐刃に緋咲の意思があるからあの時、紐刃だけでは不可能な動きも出来たんだ！」

俺が言ったあの時とは、緋咲が梁先輩を助けた時だ。

紐刃が赤瀬川 麗那という少女に軌道を変えられ通り過ぎ、緋咲は何も動かしてもいないのに軌道が変わるはずがない。

軌道を変えたのも全て緋咲の意思ってことか。

「まあ、あたしは持久力と集中力がもたないから、あんまり紐刃は操らないんだけどね」

そうか……。

自分の意思で動くということは、相当な集中力と持久力が必要なんだ。



「いつもはどうしてるんだ？」

「いつもはただ紐刃を伸ばして、自分の腕で操作してる。本当に追い込まれた時しか操らない」

なるほど……。

緋咲はすごい武器で戦っていることは解った。

「いやあ、なんか良くは解ないけど、とにかく凄いつてのは理解出来た」

「まあ、所詮私はGランクだから」

「いや、ランクなんて関係ない。俺は凄いと思うよ」

「あたしだってランクなんかどうでもいいわよ」

俺は軽く緋咲の肩をポンツと叩き、立ち上がった。さあ、向こうは随分と盛り上がってるな……。

「染先輩っ！ 何なにやってんですか？」

俺はこの場から染先輩に呼び掛けをしてみる。

「おお、侑か！ 焚き火が生きてる間に夕食の準備をしようと思っ  
てな」

なるほど、だからこんなに盛り上がってるわけか。

「侷つ！ 今夜はパーティーだ！！！」

聖夜の威勢良い声が聞こえてくる。

「投入〜！」

「ま、待て！ 奏笑氏！ それは違う！」

「奏笑ちゃん！ それは……」

何かを投入しようとした奏笑に蒼生先輩と菜月は忠告するが……。  
だが、とき既に遅し。

奏笑が何かを投入した瞬間、火は火柱の如く空へ舞い上がる！

「……うわあああああああッ！！！！！」  
「……」

調理場？ いや焚き火……いや、火柱と化した焚き火から多数の悲鳴が聞こえてくる。

俺は呆けた面をしてその光景を見る。

アイツ等は何をしてるんだ？

何がやりたかったんだ？

「一旦、離れるぞっ！！！」

舞い上がる炎の中から染先輩が出てくる。

それにつれ、中に全員が出てきた。

そして、染先輩は名残惜しそうに火柱を見つめる。

「これではキャンプファイヤーじゃないか……」

キャンプファイヤーより凄まじいかも知れないが……。

「緋咲！ お前の固有結界の中に消火器はないかつ！？」

蒼生先輩は珍しく緋咲に助けを求める。

ああ、蒼生先輩も緋咲のことはやっぱり知ってるんだ。

「そんなもんあるかつ！」

「なぜだっ！？ お前の固有結界は何でも入るだろ！？」

「あたしは青い猫型ロボットかつ！！！」

ああ、あの国民的アニメか。

俺も毎週、欠かさず見て、欠かさず毎週涙を流してるぜ。

でも、緋咲の言う通りなら固有結界には何でも収納できるらしい。  
出せるが取り出せれないらしいが……。

「まあ、良いじゃないか蒼生」

凩先輩がポンツと蒼生先輩の肩を叩く。

「雨が降れば水浴びを楽しめ」

凩先輩が妙な口調で語りだす。

「焚き火が火柱と化せばキャンプファイヤーを楽しめ」

それは誰が後世に残した格言だろうか？  
恐らく、染先輩しかいないだろう。  
いや、今思いついたんだろう。

「待て待て染氏、火柱をどうやって楽しめばいいんだ？」

「行くぞっ！！！」

染先輩が火柱に向かって駆け出す！

「M Y g o i n g      ツ！！！」

テンションが高すぎて思わず横文字が飛び出した聖夜。  
そして、聖夜も染先輩の後に続く……。

「ああ、わたしもたのしむう〜！」

元凶者の奏笑も駆けて行った……。

「あ、危ないって奏笑ちゃん！」

奏笑を追っていく菜月は事実上、火柱へ駆けて行った。

「あははははははっ！俺も行くぜ！」

蒼生先輩っ！？ あなた最近洗脳されてますよっ！？  
最初、あなたは俺と同じ志だったのに！

取り残されたのは、俺と緋咲の二人。

「緋咲、一応俺たちも楽しむか？」

「楽しむってどうやって？」

俺たちは無言で梁先輩達を見る。

楽しんでいるというか、必死に消火活動をしているだけに見える。

「ああ、梁先輩は消火までも楽しくこなす凄い人だな」

「まあ、ねえ……色んな意味で凄い人よ」

梁先輩はポン刀を火に振りかざしているが、あれも消火活動なのだろうか？

「消火なら手伝いに行こうか」

「はあっ、しょうがないわね」

緋咲と俺も火柱へ近づいていった。

9月5日/さあらeyes 最期の記憶(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日/さあらeyes 最期の記憶

25話・(1) 約束

「こ、このお姉ちゃんもやるう〜！」

剣を使うあの紅い髪のお姉ちゃんと言い、銃を使うこの白い髪のお姉ちゃんといい強過ぎだよ！

これはさあら一人じゃ分が悪すぎるなあ……。

そんな事を思いながらリロードを終えた直後、白い髪のお姉ちゃんは舞うように螺旋しながら左右の銃で交互に二発、着地時に身を引  
きながら一発、発砲した！

あんな撃ち方で狙いが定まるはずなのに……。なんでお姉ちゃん  
の撃った銃弾は吸い込まれるようにさあらの胴体に向かって行く  
の？

さあらはその三発の銃弾を空中で縦に一回転して避けて、着地前に  
三点バーストで発砲する！

その攻撃もお姉ちゃんは予想していたかのように最小限の動きで避  
ける。

この時、さあらは確信した。

「銃じゃこのお姉ちゃんには勝てないか」

まるで役立たずの銃弾を全部フルオートで発砲して、銃を威嚇程度  
にお姉ちゃんに投げた。

銃である程度お姉ちゃんの視界を奪った最中、背中に両手を突っ込み、接近戦用の刀を二刀流で抜いた。  
さあらは接近戦はあんま得意じゃないんだよあ……。でも、お姉ちゃんの刀は

「お姉ちゃんは銃のフレーム付近に大型ナイフが装備されてるみたんだけど、それじゃあー刀には敵わないでしょ？」

第一に先制攻撃！

今度は自信がある瞬発力でお姉ちゃんの距離を一気に縮める！

「……ッ！」

お姉ちゃんは何度かさあらに発砲する。

だけど、銃弾は銃口の向いている方にしか飛ばない。

さあらは疾駆しながら全て銃弾を回避する。

流星のお姉ちゃんも少し唇を噛み締めているのが解かった。

よっし！ このまま接近戦で行けば！

ゼロ距離まで近づいたさあらはお姉ちゃんの肩目掛けて両刀で突き出す！

だけど、刀が押し返される感覚がする。

さあらの刃先をお姉ちゃんはフレーム付近の大型ナイフの腹でカキーンッ！と打った……。！？

その光景に驚きながら後ろにザザッ！と下がるさあらに、お姉ちゃんは左右一発ずつ同時に水平面撃ちをする！

これは左にも右にもかかせない。  
なら……。！

「さっきのお返しだよお！」



さっきのお姉ちゃんみたいに、さあらは二発の銃弾を両刀の腹で打った！  
打った銃弾の一つは、運良くお姉ちゃんの頬を掠め林へ消えていった。

出来るかどうか五分五分だったけど……上手くいったあ……。緊張感を解く為に、さあらの顔には無意識に冷笑がこぼれた。

その軌跡を後追いするように、お姉ちゃんの頬からはゆっくりと真紅の血が流れ始めた。

そして、さあらにとって嫌な長い間合いが生まれる。

一方的に攻めて攻めて攻めたかったのに、やっぱり思い通りに行かないなあ……。

お姉ちゃんの鋭い眼光に思わず眼を逸らしそうになる。

すごい圧迫感……近づいただけで押し潰されそう。

これはお姉ちゃんが動き出したのと同時に動かないと駄目だな……。

お姉ちゃんの流した頬の血が地面に堕ちると同時に、お姉ちゃんは駆け出した！

その初動を見切ったさあらもほぼ同時に駆け出した。

接近戦なら絶対に勝てる！

このお姉ちゃんは射撃科、剣術の特訓なんて疎かにしてるに決まってる！

さあらはこれでも記憶上は総合科のAランクなの！

さあらの必殺の剣戟もお姉ちゃんの息にも届かないで、刃身で受け止められる。

でも、お姉ちゃんのは銃のフレームに刃身が付いているだけ！ 高

速では対応出来ないはず！

それでも勝負に決着は訪れない。

「もお〜！ このお姉ちゃん剣術も上手い！」

さあらは近い間合いを一足で跳ぶように後退する。

後退するつもりはなかったんだけど……息が続かない……。

一方のお姉ちゃんは、好機とばかりに床を蹴ると、弾丸のような速さで二丁拳銃を同時に発砲してくる！

酸素の足りなり重い身体を無理やり背転しながら避け、更に距離を取る。

だけど、さあらの真後ろから

「ひいつ　ッ!？」

思わず悲鳴を上げてしまった雷音がさあらの耳に響く。

その大音響にさあらは首を縮ませる。

こ、鼓膜があ……。

耳を押さえつけていると、銃を使うお姉ちゃんが前方で剣を使うお姉ちゃんが後方……つまり前後で囲まれてしまった。

「あちゃ〜、前後で囲まれちゃったよ……。」

これはまずい……本当にまずい……。

さあらはこの二人との私闘に勝てなかった。

その二人に囲まれたらもう袋の鼠ちゃんだよお……。

こんな場面でも、さあらの笑うクセはどうしても治らなかった。だけど、笑うと冷静になれる。

さあらは二人に前後で囲まれているだけ。  
右にも左にも動ける。

ふと横目で右側を見ると、もう一人のお姉ちゃんが遠くだけどいた。  
敵は倒せる時に倒せつてね！

これで流れも変わるかも知れないし！  
それにこの場を乗り越えられるし一石二鳥だよお！

「まあ、あのお姉ちゃんなら勝てるかな」

さあらは視線を茶髪のお姉ちゃんに向ける。

だけど、問題はあのお兄ちゃんだ。

あのお兄ちゃんは異能、結界を使える。

だけど、当然発動させるのに時間が掛かるはず！

ええい！ 考えるより先に行動お！

さあらは自信のある瞬発力を使って、両刃を構えて疾走する。

さあらの狙いは 茶髪のお姉ちゃんと結界のお兄ちゃん。

剣のお姉ちゃんと銃のお姉ちゃんも、さあらには追いつけないみたいだ。

既に間合いに入っていた。

一番恐れていたお兄ちゃんの結果も発動していない。

推理が苦手なさあらの読みが当たった！

さあらは左右の両刃を突きのと刀筋にする。

その刃先は、結界のお兄ちゃんと茶髪のお姉ちゃん。

悪く思わないでね。良く解かない世界だけど、ここは戦場だから。

すると、結界のお兄ちゃんも茶髪のお姉ちゃんをもの凄く勢いで吹き飛ばした。

「じゅ、じゅん                      ツ！！！！！！！」

その光景を直視したさあらの頭は真っ白になった。

このお兄ちゃんはお姉ちゃんを守る為に自分が犠牲になって……。

そして、徐々にその光景がさあらの記憶と重なっていく。

なに……この感覚……。

時が巻き戻ってあの頃に戻るみたいなあ……この感覚。

さあらはこの光景を知ってる。

誰かを守る為に犠牲になるこの光景を。

深く思い出そうとすると、激しく頭が痛みだした。

なんでえ……あと少しで思い出しそうなのに……なんで大事な所がすっぱり抜けてるんだあ……。

思い出すのに必死になっていて、今やっている誰よりもさあらが許せない最低な事を忘れていた。

「じゅん                      ツ！！！！！！！                      いやだよお……！！！！                      独りに  
しないでよお！！！！！！                      じゅん                      ツ！！！！！！！」

その言葉に、さあらの胸を貫くような電撃が流れた。

そして、記憶がゆっくりと流れ始める。

お姉ちゃん                    ツ！！！！！！！ いやだよお……………！！！！ 独りにしないでよお！！！！！！！！ お姉ちゃん                    ツ！！！！！！！！

この言葉が、確かにさあらの魂に刻まれていた。  
これは誰の言葉……………？

なんでさあらの記憶があのお兄ちゃんの状態と重なっているの？

なんでさあらの手は……………無意識に止まったの？

それはきつと、今やろうとしてる事が許せないから。  
誰よりもさあらが            許せないから。

「なんでえ……………なんでそんな事できるの……………なんでえ……………」

無意識に、記憶を手繰り寄せたような言葉を囁く。

「そんなことされたらあ……………殺せるわけないよお……………さあらはアイツ等とは違う……………！！ 絶対に違うっ！！！！！！」

無意識に叫び出したさあらの記憶。

そして眼からも幾多の涙が零れ出した。

何が何で何なのお……………。

さあらの記憶なのに何一つ解からない……………。  
もう嫌だあ……………気持ち悪くてもどかしくて、深く思い出そうとするだけで頭が痛み出してえ……………。

この魂に眠る本当の記憶と、後付けされたみたいない記憶……………さあらはどっちを信じればいいの？

誰か教えてよお……誰かあ……さあらを助けてよお……誰かあ……。

9月5日/侑eyes

時代錯誤野獣少女(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

俺たちはその後、必死に消火活動をし、火を消した。

火柱と化した炎を良く消したものだ。

その後は染先輩がもう一度焚き火を焚き、それが今の主な灯りになっている。

主というのは、これだけではないからだ。

月明かり

月明かりが寝静まった俺たちを照らしている。

その月は本当に幻想的で俺の眼を離さずに楽しませてくれる。

「……………」

寝れん……………」。

俺はどうも場所が変わると寝れないタイプらしい。

そういえば俺が幼稚園の頃、玄関で寝たことがあったとか。

帰宅して来た母さんがその光景を見て心臓が止まるかと思ったって  
言ってたな……………」。

なら俺は……………」どこでも寝れるんじゃないか？

……………」そういう問題じゃないか。

俺は寝返りもせず、時が止まっているかのように月を見つめる。  
そして、ゆっくりと瞳を閉じた。

耳を澄ましてみる。



虫たちの鳴く声はまったくしない。

更に耳を澄ますと、木々が風でざわめく音が聞こえる。

更に耳を澄ますと、ぴちぴちと燃える焚き火の音が聞こえる。

更に耳を澄ますと

『ガサツ！』

耳を澄まさなくとも聞こえる、草を掻き分ける音

俺は閉じていた眼を見開き上体を起こし、音のした方を見る。

そこには全身を月明かりに染め、ゆっくりと近づいてくる人の姿が見えた。

「誰だっ！」

夜中なのにも関わらず、俺は声を上げる。

そして流れるように銃を取り出し、両手で構え銃口を人影へ向ける。

寝なくて正解だったな。

寝てたらあの音は間違いなく聞こえないだろう。

誰だっ！と問い掛けたが、返答はない。

まあ、当然だよな……。

俺は銃を握り直し、相手の上半身に狙いを定める。

この時、俺は初めて恐怖という二文字では形容し難い感情に駆られる。

それを主張するように、カタカタと銃が戦慄により音を立て始める。

梁先輩も緋咲も蒼生先輩も……俺の近くにはいないんだ。

俺は今まで、本当に守られていたんだな……。

戦うって……こんなにも怖いことだったんだ……。

凩先輩は何も恐れなんてなくて、本当に勇敢に戦っていた。いや、恐れなんてないはずが無い……凩先輩も人間なんだ。恐れを感じられないの方が正しいだろう。

だから

今度は俺がみんなを守るんだ　！

俺は強い意志で相手と対峙し、野生的な鋭い眼光で相手を凝視する。ゆっくりと……ゆっくりとその人影が光を帯びていく。

「女の子……？」

つやつやした青黒髪のロングで、月から届く月明かりでその青黒髪は更に豊かに輝いている。

その少女がゆっくりと、その青黒髪を夜風で左右に揺らしながら近づいてくる。

少女が距離を縮めるにつれて、徐々に恐怖の感情が蠢き出す……。逃げ出したい、声を大にして叫びたい。

それは感情だけではなくて、逃げる！叫べ！と本能も命令してくる。俺はその気持ちに『仲間を守る』という強い意志で押し殺し、俺は生まれて初めて相殺しようとしている。

本当に……これが初めてになるかも……。

少女の表情が解るぐらいにその少女は接近していた。

その少女の顔は　無表情。

怒りもなく、悲しみもなく、喜怒哀楽のない表情。

無表情だが、確かに感じ取れる感情があった。  
それは殺意。

無表情だからこそかも知れないが、その感情だけは伝わった。

胸が激しく心悸する。

恐ろしくて……怖くて……その二文字を合わせ持つ『恐怖』という  
言葉すら生温い。

何度も視線を反らそうになる。

だけど視線を反らしたら負けだ……想いで負けたら絶対に勝てない！

俺は睨みつけるような眼で少女を見つめる。

もう　俺と少女の距離は、俺の腕三本分ぐらいだろう。

その少女が見ているものは間違いなく俺

「焼き火じゃあ

ッ！！！！！！」

俺の後ろの焼き火だった　！

少女はいきなり満面の笑みを浮かべ、もの凄い勢いで俺を通り越し、  
焼き火へ向かう……。

「ああ……」

俺は生涯で一番間拔けな声を漏らしてしまった。  
完全に頭が凍てついた。

「おお……！ 温かいのお〜」

焚き火の前で身体を縮ませる少女を見て、俺の心魂に脱帽感が一気に襲う。

な、なんだったんだ……。

あの少女は最初から焚き火がお目当てだったのか……？  
だったら……。

さっきの俺の緊張感は何だったんだよ……。

俺は恥と様々な感情が錯綜した妙な感情で一杯になり、頭をボリボリと掻く。

戦いにならなかった安心感はずごい。

だが、俺はずっと勘違いをしていた恥ずかしさもずごい。

その前に俺はどうすればいいのだろうか？

さっきまで銃口を向けていた少女に、手の平を返して話しかけるべきなのか？

いや、銃口を向けていた人とは少女も話したくないだろう……。俺はどうすれば……。

……とりあえず、呼んでみよう。

「おいっ！」

俺の必死の呼び掛けに少女は

「温まるのお〜」

眼を細めて和んでいた !

両手の平を火に近づけちゃったりしている。  
その光景は、まさに冬の季節の俺状態だ。

反応がなかったたので、俺は少女に近づいてみることにした。

「おいっ！」

「……………」

焚き火の温かさに、この少女は完全に我を見失っている。

「おいっ！」

バンツ！と俺は少女の肩を叩いた。

「にゃあゝ　　ッ！！！！　　な、なんじゃっ！！！！」

「うおおおおおおッ！？」

新種の猫科のような絶句を上げ、ようやく気付いてくれた。  
俺も思わず絶句を上げてしまった…………。

ああ、なんて強烈な絶句だ…………。  
完全に心臓が止まったぞ…………。  
その少女と俺の絶句で、続々と眠っていたメンバーの上半身が起きはじめ。

「い、いや、何回呼んでも気付いてくれなかったから」

「いやあゝ、温まるのおゝ」

「つて！ 無視かよつ！」

再び視線を焚き火に落としてしまった。

喋ってみて解つたが、随分と時代錯誤な人だ。

語尾に「〜じゃ！」を付ける人なんて見たことがない。

はあ〜つと俺はため息を漏らした。

不意に 誰かが俺の肩を叩く !

「にゃあッ！！！」

「うおおおつ！？」

つい赤面したくなる絶句を上げてしまった……。

あの少女の口語がうつつてしまったのだろうか。

俺の肩を叩いた染先輩が驚きのあまり腰を抜かす。

「ああ、染先輩……」

「あ、あまり驚かせないでくれるか……？」

「滅相ありません……」

ああ、穴があつたら入りたい。

「で、この娘は誰だ？」

染先輩は時代錯誤少女に視線を送る。

この娘つて……誰なんだろう？

「まったく解りません」

「そうなのか？」

凩先輩は少女に歩み寄り、軽く肩を叩く。

「じゃあ、ッ！ー！」

「ぐああああっ!？」

本家本元の度迫力に凩先輩は尻餅をついてしまった。

「はあ……はあ……はあ……」

凩先輩は胸に手を当てながら眼を見開き、呼吸を優先させる。恐らく、相当驚いたんだろ。

一方、少女は何事もないように焚き火で温まってる。

「凩先輩！ 大丈夫ですか!？」

俺は尻餅をついている凩先輩に駆け寄った。

「な、なんなんだあの少女は！ 野獣の類かつ!？」

「いえ、恐らくは人間の類だと思います」

俺は凩先輩に手を差し伸べる。

俺の手に凩先輩は一瞥をした。

「ああ、悪いな」

迷わず俺の手を握り、凩先輩が立ち上がる。  
そして軽くお尻をぽんぽんと掃く。

「誰よアイツ」

腕組をして現れたのは緋咲だった。

「緋咲！ お前しかいない！ あの少女とコンタクトを取ってくれ  
！」

凩先輩は勢い良く少女を指差す。

なんか……凩先輩はあの少女を人間とは見ていないような……。

「なに？腰でも抜かしたの」

ぷつと緋咲が凩先輩に冷笑をする。

その緋咲の態度に凩先輩は齒を食いしばって我慢している。

「いいわよ。やってやるうじやないの」

誇らしく笑い、緋咲は少女へ歩み寄る。

まあ、緋咲なら大丈夫だな。

あの度迫力の声でも大丈夫……。

「にゃあ、　　ッ！……！！！」

「みゃあ、　　ッ！……！！！！？？？」

まさかの野獣絶句返しっ！？

思わず耳を塞ぎたくなるぐらいの金切り声の絶句だ……。



すると緋咲は眼を閉じ、誇らしい顔で帰還してきた。だが、その表情には明らかに無理がある。

「は、はあ！ こ、コンタクトしてきたわよ！ ど、どつよ染ー！」

「野獣同士でしか解らないコンタクトか？」

「だ、誰が野獣だあ ツー！！！」

緋咲と染先輩のやり取りをやり過ごしていたら、俺の裾にぐいぐいと引つ張られている感触がした。

「こんな夜中に何の騒ぎよ？」

菜月まで起きてしまったようだ。

まあ、それはそつだ。

起きない方が尋常じゃない。

「野獣の騒ぎや」

「……野獣？」

菜月が俺と同じく視線を合わせる。

「あの女の子のこと？」

「ああ、そつだ。『お手に触れないで下さい』という注意書きはこついつ時に使つんだな。本当は」

「なんだか良く解らないけど……」

「俺が一番良く解らないよ」

考えてみれば、一度も会話が成立していない。いや、唯一成立したのは緋咲ぐらいか。野獣同士しか解らない会話だけどな。

「わあ〜！ お仲間増えたの〜!?!」

俺と菜月の間に、奏笑が割り込んできた。その奏笑にすかさず凩先輩が補足をする。

「お仲間というか世にも珍しい緋咲のお仲間が増えただけだ」

「誰があたしの仲間だあ ツ!!! あたしはあんな野獣じゃないッ!!!!」

「わあ〜い！ 緋咲ちゃんのお仲間〜！」

いつものペースで奏笑はあの時代錯誤野獣少女へ近づく……。ああ、奏笑はあの少女の正体を知らないんだっただな……。奏笑もまた俺たちの二の舞になってしまっ……。。

「ねえ〜ねえ〜！ なにやってるのお〜！」

奏笑は肩を叩かずに、時代錯誤野獣少女の傍らに座った。これはヤバイぞ ! 眠れる野獣が目覚めるときだ !

「焚き火で温んでいるのじゃ」

「へえ〜そうなんだあ〜、焚き火ってほかほかしてて気持ちいいよねえ〜」

「まったくじゃ」

会話が成立してるっ!?

そんなバカな!?

「お主も焚き火が好きか?」

「ええ〜もちろんですよお〜! 焚き火ってかわいいよねえ〜」

「まったくじゃな」

二人して目を細めて和んでるっ!?

一方、梁先輩はあの二人とは違うニュアンスで眼を細めている。

「まったく……奏笑には敵わないな……」

梁先輩はその光景に苦笑いを浮かべる。

「はあ! あたしだってアイツとコンタクトしたじゃないの!」

「だから緋咲のは野獣同士の……」

「うっさいっ! 黙れっ!」

梁先輩と緋咲のやりとりに思わず微笑しながら、俺は周りを見渡した。

あれ?そういえば蒼生先輩と聖夜は?

これだけうるさいのに起きていないのか？  
お近くの緋咲に聞いてみよう。

「緋咲、蒼生先輩たち知らないか？」

「何であたしが知ってるのよ」

「それもそつだよな……」

「そつだぞ侑。緋咲が知っているのは淫獣か野獣の類だけだ」

「あんたは黙ってるっ！！！！」

と言いつつも、緋咲は蒼生先輩と聖夜が寝ている所まで歩み寄って  
行った。

やっぱり緋咲も何だかんだ言って心配なんだな。

あれ？蒼生先輩たちが寝てたのって緋咲が行った方向じゃないよな  
……。

そんなことを思っていたら

「みやあ　　ッ！！！！？？？？」

緋咲の叫び声が聞こえた。

「「うおおおおおッ！？」」

緋咲の声が続いて、蒼生先輩と聖夜の悲鳴も聞こえてくる。  
一体、何があったんだ？

「はあ……はあ……はあ……」

緋咲が息を荒くしてももの凄い勢いで帰ってきた。  
そんな息を荒げる事でもあったのか？

「ち、違う緋咲！」

蒼生先輩が緋咲の後を追って、声を荒げて力説する。

「な、何が違うのよ！ このド変態がああああああ  
！！！！！！」

ッ

バシィ！と野山に響く高音を緋咲は奏で、蒼生先輩の頬に立派な紅葉が出来る。

「ぐおおおつ！？」

蒼生先輩があまりの強さに尻餅をついてしまった。  
はて、一体緋咲は何を見たのだろうか。

「緋咲、お前なにを勘違いしているか知らんが……」

聖夜が大儀そうな態度を緋咲にとる。

「な、何が勘違いなのよ！ あんな痴態を見せられて！」  
痴態を見せられた？

こんな夜中に聖夜と蒼生先輩は何をしていたのだろうか？

「あれは男同士の美しい行為。立ちションだ！」

そんな胸を張って言えることでもないだろ聖夜。

ああ、なるほど。

ようやく合点が行った。

その男同士の立ちションを緋咲はタイミング良く見てしまったのか。正面からか背後からは知らんが……。

「あ、あんなの強制猥褻の現行犯よ！」

「まあ、落ち着け」

聖夜は両手でストップをかけ、妙に腹の立つ口調をする。

「黙れっ！ この猥褻男がああああああ      ツ！！！！！！！」

バシィ！と野山に響く高音を緋咲は奏で、聖夜の頬に立派な紅葉が出来る。

「ちよわあああああっ！？」

ああ、なんなんだこの状況は……。

だが、あの謎の少女がトリガーである事だけは解った。

その時代錯誤野獣少女は…… 未だに奏笑と焚き火の前で和んでいた。

9月5日/侑eyes

異世界に吹く風の少女(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日 / 脩eyes

異世界に吹く風の少女

「こんな夜中に面目ないがファーズストクンパニアン、記憶では第二回の会議を始める」

焚き火の周りを取り囲むように座り、梁先輩の一声でファーズストクンパニアンの会議が始まった。

恐らく絶対に第二回ではないと思う。

「まったくじゃ。私は一切関係ないのに巻き込むんじゃない」

「元はあんたのせいでもあるんだぞ？」

「何を戯言を……」

「あんたが来なかったらこんな会議は開かなかったんだぞ!？」

梁先輩が少女の発言の度に眉を寄せる。

「まずは名前を聞かせてくれ。名前が分からないと不便だ」

「……………」

「あんだだよ!」

黙っていた少女に梁先輩は口語を荒げる。

「なに用じゃ?」



「だ・か・ら……！」

梁先輩もご立腹のようだ。

すると、蒼生先輩が右手でストップをかける。

「どうした蒼生？」

「いや……」

蒼生先輩は手を下ろし、少女を見る。

見られている少女は胡座をかきながら眼を閉じ、黙している。まるで神経統一でもしているかのようだ。

「お前は本当に桜凛武装高校の生徒か？」

「何を呆けて事を言っているのじゃ」

聞いてないかとも思ったが、蒼生先輩の言葉に反応して少女が眼を開いた。

「確かにお前は剣術科の制服を着ている。だが……」

蒼生先輩がもう一度少女を見る。

「俺はお前を知らない」

「……………」

確かにそうだ！

蒼生先輩は桜凜武装高校の全生徒、しかもスリーサイズまでも知り尽くしている。

そんな蒼生先輩がまったく知らないなんて事があるのだろうか。

「『風の陰陽師』 汐見あすか。剣術科のSランクじゃ」

少女が淡々と自ら淡々と語り出した。

『汐見あすか』か……。

ちゃんとこの少女にも名前があるんだな……。

「あすか、か……。ってSランクだとおおおっ!?!」

え、Sランク!?!

俺も名前に気が行っていたから気付かなかった……。

「なんじゃ?」

「な、なんでもない!」

凜先輩は毎回ランクで驚愕するよな……。

あ、緋咲の時は科で驚愕してたな。

凜先輩も忙しい人だ。

「風の陰陽師…… 汐見あすか……」

蒼生先輩は記憶を手繰り寄せるようにあすかを見つめる。しかし、すぐに首を傾げた。

「記憶がないな……」

蒼生先輩は称号も名前も覚えがないようだ。

「貴方も人間じゃ。身に覚えのない事があっても当然じゃろ？」

「まあ、そつかもな」

蒼生先輩は暫く考え込んだ。

あすかは実際に桜凜武装高校剣術科の制服を着てここにいる。百聞は一見にしかずとすべきなのか。

疑う所は何もない。

あの蒼生先輩でも見逃していたデータがあつたのか。

「それで、あすかは今まで何をやっていたんだ？」

凜先輩が話を戻した。

この異世界は何日目だろうか？  
もう一週間経った気がする。

「私は風じゃ。風は吹かれるままに流れる」

「風……？」

凜先輩が言葉を返した瞬間、目覚めを誘うような風が吹き抜けた。

その風にあすかの青黒い髪が風に乗せてなびく。

その光景は…… 比喻ではなく本当に『風』のように感じた。

「あすかは……この世界の事は知っているのか？」

凜先輩は直向にあすかを見る。

この世界……つまりは異世界のことだ。

「この世界は私が死守する。絶対にじゃ」

こ、この世界を死守する？

あすかは思いも寄らないことを言ってみせた。  
真意の宿した眼で

とても虚実を言っているとは思えなかった。

「この世界を守るだと？」

「そうじゃ、私を邪魔するモノは斬る」

その言葉に、俺の鼓動は一気に飛躍する。

あの時……あすかと初めて出会ったとき、俺は本当は死んでいたんだ。

いや、ファーゼストクンパニアン全員だったかもしれない。

あの時あすかは焚き火だけを直視していたから、恐らく俺に気が付かなかったのだろう。

剣術科のSランクに……ファーゼストクンパニアンが勝てる筈がない。

いや、人数的には圧倒している。もしかしたら……。

いいや、そんな事考えてもしようがない。

本当に戦いにならなくて良かったな……本当に……本当に……。

「なら、私とお前は相反するな」

「そのようじゃな」

梁先輩の発言にはドキッとしたが、あすかは何も手は出さなかった。

「だが、お主等には恩がある」

「……恩？」

「恵まれない私に焚き火を恵んでくれたのじゃ」

「それはお前が勝手に……」

「その上、恵まれない私に寢所まで……」

「寢所を提供した覚えもないが……」

噛み合ってそうで噛み合っていない染先輩とあすかの会話。

あすか曰く、焚き火と寢所を恵んでくれたという恩義で俺たちには手を出さないでくれるようだ。

とにもかくにも、あすかとの戦闘は避けれそうだと最初会った時はどうなることかと思っただが……。

「祝着に存ずる。実にかたじけない」

そう古文風にいうとあすかは、三つ指をつけて土下座のような姿勢をとる。

「あ、いや……！ ああ……そ、その……」

染先輩も初めての境遇なのか、焦りまくっている。

まあ、確かに土下座なんてされたこともないししたこともない。いや、あすかのは土下座とは言わないのか？

「長旅の上に今日は疲れた。今日は休ませてもらう」

そう言いながら、あすかは腕で枕をつくり横になってしまった。

「そうだな……もう日付も変わってしまっただろう。今日は休もう」

梁先輩も会議を打ち切った。

また、俺たちは異世界で夜を越えて、また異世界で朝を迎えるのか……。

「そうですね。明日に備えて休みましょう」

俺はそう梁先輩に返し、背中から倒れる。

ああ、もう一度……この月を見て良かったな……。

明日には俺たちの日常へ戻れるといいな。

俺は微かな希望を胸に抱き、目を閉じた。

9月5日/侑eyes

月の光と風(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

俺は焚き火を囲む皆の輪から少し外れ、再び夜空へ浮かぶ月を仰ぎ見ていた。

皆が嫌とか一人が良いとかそんな理由じゃない。

ここから見る月が一番綺麗だからだ。

再び寝静まった静寂の中、俺はそのまま曖昧な心地でじつと月を見つめ続ける。

ふと浮かぶ思考は声にならずに沈んでいく。

本当に今日は色々あった。

服洗いに始まって……自転車で桜凜市の外を目指して……見えない壁に行く手を遮断されて……。

戦闘に巻き込まれて……梁先輩が命を張って戦ってくれて……緋咲の武器の事が解って……。

……初めて体験する本当の恐怖を知って、汐見あすかと出会って……。

それらを越えて今、俺はいるのか……。

「……侑？ ……起きてるか？」

小さく呟くような声。

その声は俺の名を呼んでいた。

「ええ、起きてますよ梁先輩」

梁先輩が自ら俺の所に来るなんて珍しい。

梁先輩も眠れなかったのだろうか？



「侑……となり……いいか？」

少し恥ずかしげに言った凩先輩。

その言葉に俺の胸はドキツと大きく鼓動した。

「……い、いいですよ」

俺もちよつと恥ずかしくなってきた。

その気持ちを紛らす為に、俺は夜空に浮かぶ月を見る。

「……悪いな」

凩先輩の足音が徐々に近づいてくる。

ああ、何でこんなに鼓動が早いんだろう……。

今まではこんな事なかったのに……。

凩先輩は俺のすぐ隣に腰を下ろし、そのまま背中から倒れた。

俺と同じ姿勢で、凩先輩も月を見る。

「綺麗だな……」

「綺麗……ですね」

俺たちはただ、月を見つめる。

そんな俺たちを歓迎するように、月が更に光を帯び始める。

燦爛と輝く月に突き動かされ、俺は口を開いた。

「凩先輩……初めて本当の恐怖を体験しました」

「……本当の恐怖？」

「……はい」

俺はあすかとの出会いを追憶する。

何の助けもなく、殺意に満ちた二人だけの空間。

身体は恐怖に駆られて、戦慄が治まることもなかった。

本当に……男だと言うのに情けないぐらいに怖かった。

思い出しただけで悪寒が身体中を蝕む。

「あすかと初めて出会ったとき……俺はあすかに銃を向けたんですよ」

「もう……本当に怖くて……身体は戦慄して……」

「みんな同じだ」

「私もあの少女……赤瀬川 麗那と戦ったとき……ものすごく怖かった」

梁先輩の声が 微かに震えていた。

「会ったときから解ってた。相手が明らかに格上で……私なんかじゃ歯が立たないって……」

それでも……それでも梁先輩は勇敢に戦ったのか……？

俺が見ていた梁先輩の背中……何も恐れなんてなくて……。

なのに本当は……本当は梁先輩は恐怖で一杯だったのか……？

「桜凜高校の生徒を殺すって聞いて……本当は胸の中が張り裂けそうに痛くて……」

凩先輩の音が確かに震えている。

その声は本当に儂くて……あまりにも普通の女の子で……。

「だけど……私には大切な……本当に大切な仲間がいるって……その仲間を守らなきゃって……」

月を仰ぎ見ても解る。

凩先輩の瞳が滲んでいる。

「そう想う度に……魂ソウルから恐怖が消えて、魂ソウルから今までにない力が込み上げて来て……」

仲間を守る

あの時の俺を支えていたのも、仲間を守る強い意志だった。

凩先輩も……俺と同じなのか……。

「だから私は戦えるんだ。大切な仲間を……守るために」

俺は月から眼を離し、凩先輩の横顔を見る。

月明かりで輝く黄支子色の髪。

そして、燦爛する月を懐かしむように見る無防備な横顔。

俺はその横顔に手を伸ばし、頭を優しく撫でた。

「凩先輩も……普通の女の子なんですな」

「あ、あたりまえだ！」

指先に伝わるさらさらとした感触。

ああ、なんか癖になりそうな感触だな……。

「く、くすぐりたい！」

あまりにも撫でるのに夢中になり過ぎて、凩先輩はきゅっと首を縮ませる。

その女の子らしい仕草に笑いが込み上げて来た。

俺は微笑をしながら凩先輩の頭から手を離す。

そして、再び俺は月に眼を遣る。

「私たちは……この異世界から出れるのだろうか……」

「出れますよ。絶対に」

「……そうだといいな」

俺たちは 本当に真実へ向かっているのだろうか。

いや、今は信じよう。

凩先輩を……ファーズストックンパニアンを。

「私たちは……これからどうすべきだと思っ？」

「力の限り生きていきましよう」

「ふう、侑らしいな」

凩先輩は鼻で優しく笑った。

そして、再び月を見上げる。

「あの月にこの世界の真実が浮き出ているように見えるな」

凩先輩が言葉を漏らした。

俺は更に月を凝視する。

絶えずに玲瓏する月。

その月には凩先輩の言う通りに、全てを知っているかのような、そんな輝きがあった。

「この世界の真実が、あの月のように明るいものだといいですね…」

「……そう願いたいな」

俺たちの意識が月に吸い込まれる静寂の中、ガサツ！という草を掻き分ける音が真後ろから聞こえた。

その不意に聞こえた音に俺と凩先輩は肩を震わせる。

「なんじゃ、お前たちか」

そこに現れたのは、時代錯誤の口調をする汐見あすかだった。

「き、聞いてたのか……？」

凩先輩は少し恥ずかしそうにあすかに問うとあすかは、

「聞いておらぬ。先来た所じゃ」

その言葉に軽く凩先輩は胸を撫で下ろす。

すると、あすかはあの月に向かって歩き始めた。

「あ、あすか？ どこに行く？」

その凩先輩の言葉は、俺たちを通り過ぎたあすかに届いた。するとあすかは月を背景にして優美に振り返った。

「お主等には心から感謝している。この恩は必ず返す」

綺麗に一礼をして、あすかは再び月へ向かって歩き出した。

「ま、待てあすかっ！ 一緒に行動しないかっ！？ お前となら…」

その凩先輩の言葉に、あすかは立ち止まり横顔だけ見せて

「私はこの世界に吹く独り風じゃ。風は吹かれるままに流れる」

その瞬間、あすかの青黒髪を舞い上がらせる風が吹いた。

その光景は創作の一部みたいに神秘的で美しくて……。

「汐見あすかは風」と認識するような……そんな瞬間だった。

「……………」

凩先輩は、背中を見せてゆっくりと歩くあすかを無言で見送った。

この世界に吹く独り風。

あすかは自分の事をそう言っていた。

その言葉の意味が、少しだけ解かった気がした。

『この世界に吹く独り風』汐見あすかの姿は月に同化したかのように見えなくなっていた。



9月5日/侑eyes

翼を広げて、運命を変えて(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのところにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。



9月5日/侑eyes

翼を広げて、運命を変えて

「みんな起きてるな？」

迎えた新しい朝も染先輩の一声から始まった。いつも通りの円形に座り、第何回かすら記憶にない会議が始まるうとしていく。

が、全員かなり眠そうだ。

聖夜なんて完全に眠りに入っているだろう。

菜月からは眠りを示唆するあくび。

奏笑なんかは左右にゆらゆらと緩やかに揺れている。

……これは寝ているのだろうか？

「ファーズストックパン第……何回だ緋咲？」

寝起きで気分の悪そうな緋咲に話を振る染先輩。

恐らく染先輩も眠いのだろう。

声のトーンとテンションが低い。

「……なんであたしが知ってるのよ」

染先輩の質問で更に気分を悪くした緋咲は腕組をし、険悪した顔で眼を瞑る。

「そうだったな。緋咲に聞いた私が愚かだった」

「……あんた後で覚えときなさい」

お互い寝起きであるという事で、争いは勃発しなかった。  
俺も眼を瞑ってしまえばもう次元を超えそうだ。

「今日は何日か解るか緋咲？」

「……なんであたしが一々あなたの質問に受け答えしないといけないのよ」

「いいじゃないか。緋咲の一问一答コーナーだ」

その言葉で抵抗をなくした緋咲は、はあ、と深く不快そうな溜息をつく。

「……一週間ぐらい？」

「残念、今日は6日だ」

「……だから何であたしに聞いたのよ！」

梁先輩のお陰で緋咲だけが眼を覚ましつつある。  
いや、お陰ではないな。

緋咲にとっては良い迷惑だろう。

「どうやら緋咲のIQは猿以下の561のようだ」

「……あんた後で覚えときなさい」

ちなみに人間の平均IQは100だ。

梁先輩の話が本当なら、緋咲は人間を大きく超越した事になる。  
その事に寝起きの二人は気付いていないようだ。

いや、その前に猿のIQはどれだけ高いのだろうか？

「緋咲に構っている暇はない。ファーズストックンパニン、会議を始める」

……緋咲を構っているのは染先輩だろ。

「残念だが視て通り、汐見あすはもういない」

染先輩の言葉に、俺は夜の出来事を思い出す。

俺たちに感謝を告げた汐見あすかは、月と同化するように姿が見えなくなつた。

本当に風のように現れ、風のように消えて行つた。

「染氏、何かあつたのか？」

唯一、眼が冴えている蒼生先輩が染先輩に問う。

つてことは、皆の意識は上の空つてことなのか……。

「私はこの世界に吹く独り風。風は吹かれるままに流れる。っと最後に言い残し、昨日の夜ぐらいに去ってしまった」

「……そうか。少し残念だな」

「ああ、私も、一緒に行動しないか、と勧誘したんだが、先の通りだ」

「何かやらかしてなければいいがな。アイツはこの世界を壊そうとする者と酷く敵対していた」

「……そうだったな。結局これも解らず仕舞いか」

とにかく謎の多い少女であったというのは確かだった。しかし、あの少女の事ならまた風のようにやってきそうな気がしてきた。

「それでは、眼も覚めた事だし本題に入ろう」

確かに焔先輩は眼が覚めているだろう。

だが、眼が覚めていそうな人は蒼生先輩しかいない。

……本題に入るんだから俺もしつかりしないと。

「私は戦いを回避したい。これは皆も同じ事だと思う」

俺は起きている証拠に強く頷く。

この世界は戦いが起こっているから狂気なんだ。

戦いが皆無になれば異世界だが少しは俺たちの日常へ近づくだらう。

「だから私は人知れず考えた。争いを避ける方法を」

「あ、戦いを避ける方法……!!?」

眠っていた身体が一気に目覚めた。

戦いを避ける方法が存在するのか!?

もし在るとするなら、それは至高の光になるかもしれない。

「戦いをする理由、……それは桜凜武装高校が桜凜高校全生徒の殺害命令を実行する為だ」

凜先輩は辛そうに語る。

改めて事実を突きつけられると、狂気もい所だ。

いや、狂気なんかでは形容し難い事がこの世界では起こっているのだ。

「その理由は解らない。恐らくこの世界の真実と深く密接しているだろう」

この世界の真実。

なぜ俺たちは戦わなければならないのか。

桜凜武装高校が狂気な命令を実行する訳。

どうすればこの世界を脱出、壊せるのか。

電気が使えない理由、あの視えない壁の存在。

考えてみれば、俺たちは何も解っちゃいない。

「私は戦いを避け、この世界の真実へ辿りつきたいと思っている。

……みんなはどう思う？」

凜先輩は少し弱い口調で同意を求める。

「俺は凜先輩に賛成です。戦いはゼロにしましょう」

俺が同意すると、ファーズトクンパニアン全員力強く頷く。

いつの間にか全員、眼が覚めたようだ。

「……ありがとうみんな」

凩先輩は安心したような声を上げ、ファーストクンパニアン一人ひとりを一瞥する。

その瞳には強い想いと決意に溢れていた。

「ところで凩氏、争いを避ける方法とは何だ？」

「あ、ああ、そうだな」

蒼生先輩の問いに少し齒切れが悪い凩先輩は、ゴホンツと咳払いをし、

「侑たちの制服を凩武装高校の制服にする！」

ええ……ッ!? 俺たちの制服を凩武装高校の制服にするッ!? 菜月、聖夜、そして俺は眼を思わず合わせた。

「凩武装高校の連中はファーストクンパニンの中に凩高校の人間がいるから攻撃を仕掛けてくる！」

「ならば武装高の制服を身に纏ってカモフラージュすれば奴等は気付かない！」

凩先輩が拳を握って力説する。

確かにそうだ。

凩高校の生徒だと判断しているのは制服だろう。

ならその判断基準をなくせば、凩高校の生徒だと気付かれない。だが……、

「ちょっと待ってくださいよ! どうやって制服を手に入れるんで

すかッ！？」

「それはだなあ……」

凩先輩が下を向き、口重そうな態度を取る。

何だか、嫌な予感が立ち昇る。

「凩武装高校に侵入し、強奪するッ！！！」

「「「お、凩武装高校に侵入するッ！？」「」」

凩凩高校在中の3人、菜月、聖夜、そして俺は思わず声を上げてしまった。

「凩凩の制服を手に入ればカモフラージュにもなり、万が一の時は防弾制服の真価も発揮される！まさしく諸刃の剣……いや、諸刃の盾だ！」

凩凩の制服が手に入ればかなりの優勢になる。

それは凩先輩の話聞けば良く解った。

だが、それを手に入れるには相当のリスクを背負う事になる。

……それだけの物を手に入るといふ事は同等のリスクが必要といふ事か。

「ま、待て凩氏！相手の本拠地に突っ込むといふ事だぞッ！？それがどういふ事か解って……」

「ああ、解っている蒼生。だがそれでも私は戦いを避けると誓う！だから蒼生！」

凩先輩が希望を託すような声で、蒼生先輩の名を叫ぶ。

「戦術科Aランクのお前の力を借りたい！」

ほ、本当に武装高に進入して、更に戦いを避ける事なんて出来るのか……ッ!?

だけど、蒼生先輩なら……それも可能かもしれない。  
戦術科Aランクの蒼生先輩なら……。

「確かに防弾制服が手に入れる、武器の補充、真実の真相、武装高に進入する理由は多数ある」

蒼生先輩も頭を悩ます。

だが、瞳をゆつくりと開け直ぐに、

「解った。戦いを絶対に避ける戦術を考える。だが、それにはフアーゼストクンパニア全員の力が必要だ」

そう言い、蒼生先輩は皆を見渡す。

「もちろん私も頑張るよぉ〜！ 菜月ちゃんに同じ制服着て欲しいもん！」

「おいおい奏笑、俺には同じ制服着て欲しくないのかい？」

なぜか聖夜が決め顔と魅惑の低音で返答する。

「聖夜がスカートなんて穿いたら吐き気がするわ！」

聖夜の返答を菜月が返すという懐かしいコンビネーションが復活す



る。

まあ、確かに聖夜がスカートなんて穿いたら吐き気しか押し寄せない。

「Gランクのあたしにも何かすることあるの？」

「もちろんだ緋咲。一人ひとり重要な役割を担う作戦だ」

一体、蒼生先輩の考えている作戦とはどのようなもののだろうか。しかし、なぜだか悪い予感はない。

「俺、聖夜、菜月、お前たちの意見を何より重要視したい」

凩先輩が優しい口調で俺たちを見る。

俺は、ファーズトクンパニアンを信じている。だから

「敢行しましょう！ ファーズトクンパニアンなら遂行できます  
！」

「ああ、桜凩高健児の底力を見せてやろうぜ！」

「やろう！ やるしかないわ！」

聖夜、菜月、そして俺の心は一つだ。

桜凩高の底力を本当に見せる時かも知れない。

俺たちはどんな世界でも抗う。

例えばどんな強大な差があっても、何も抵抗なしに消えるわけにはいかない。

俺たちにはファーズトクンパニアンがいる。

きっとそれが、悲しみのない世界へ誘う為の鍵になる。

24話・(1) この世界の鍵 - StarSeeHamlet - (前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

「ここまで来れば追っ手も追いつけないだろう」

汗一滴も流さない涼しげな表情で、桜夜先輩は俺たちの軌跡を見つめた。

一方の俺は脚が震えている。

こんな距離を一息もつかないで走ったのは初めて……いや、異世界に堕ちたあの初日以来か。

呼吸を最優先する中、ろくに場所も把握出来なかったが、ようやく此処は林の中だと解かった。拓けている場所だから、休憩は出来るだろう。

「大丈夫？ 眼が怖いけど……」

流石の美唯もさっきまでは息を荒げていたのに、もう回復している。

「だ、大丈夫だ」

軽く手を上げ、美唯に笑みを返す。

その俺の表情に美唯も苦笑いを返した。

しばらく苦笑いし合う妙な空間が生まれた。

「中沢くん。成沢くん。色々と無理をさせてすまなかつたな」

桜夜先輩が俺と美唯に歩み寄り、悲哀とも反省ともいえる表情でそう言った。

恐らく、武装高で起こった事を自分の責任にしているのだろう。

「桜夜先輩は何も悪くありませんよ。それより少しは真実に近づきました」

武装高進入で得た情報、そして紐解けない様々な奇態。それを手繰りよせば、真実へと導ける。

俺はそう確信している。

「真実か……」

桜夜先輩は左手を口元にあて、視線を右に流す。未だ不明な点と点を繋ぎ合わせているようだ。

「全員で話し合って真実を解明しよう」

そう言っつて桜夜先輩はその場にゆっくりと腰を下ろした。

俺は……言つまでもなく疲労で立てないので最初から座っていた。桜夜先輩に続き、美唯、月守さん、ガイ、清王さんが腰を下ろす。こんな形で話し合いって初めてかもな。

「順に解明して行こう。まずは虹陵橋に警備人がいなかった事だ」

桜夜先輩を地軸に話は始まった。

最初の出来事は虹陵橋に警備人がいなかった事だ。

桜夜先輩曰く、警備人は週番制になっていてサボれば手痛い処分が待っているらしい。

その時の事を思い出したのか月守さんは、

「本当にあれは怪しかったって！ ああ、思い出しただけで頭がぁ……」

月守さんは声を荒げた。

その態度と口語は再び現場にいるような感じた。

「後追いだが、朝倉は『視ての通り、この校内には桜凛武装高校の生徒はいない』と言っていた。警備人がいないと言う事も、校内に誰もいないという事も憶測だが朝倉の意図だろう」

月守さんを落ち着かすように桜夜先輩は流暢に話した。

「でも、何でそんな事をする必要があるんですか？」

俺の問いに、桜夜先輩は間を入れずに答えた。

「虚構を仕立て上げたただけだろう。武装高全生徒は既に桜凛高校全生徒の殺害命令を受けて門出させた。朝倉はその言い回しを変えただけだろう」

桜夜先輩は最後に『朝倉というのはそういう奴だ』と付け加えた。確かに朝倉という人物の性格もあると思う。

俺だって朝倉と会ったんだ。

「次は武装高の正面入り口に咲き誇っていた桜だ」

この言葉の語気は今までとは違い、戸惑いがあった。

「これは私には解からない。通常の世界でもあんな所に桜はなかった」

異世界に突如現れた桜ということか。  
俺は武装高に行ったのが今回が初めてだ。  
これは俺が解明できる謎ではないな。

「そういえば美唯は花で一番、桜が好きだったよな？」

「えっ？ 確かにそうだけど……いきなりどうしたの？」

「いや、特にこれと言った意味は……」

俺はこれぐらいしか桜の事は知らない。

その流れで俺は視線を桜夜先輩へ向けた。

桜夜先輩の表情は晴れてはいなかった。

「これは憶測も出来ないな」

桜夜先輩は溜息雑じりでそう言った。

と、その言葉を聞いてガイは、

「そこまで重要視する所ではないだろう」

「……そうかもな」

桜夜先輩は苦笑いを浮かべ、思考を転回させた。

「その後は朝倉の挑発だ。だが、最も追求すべき点は朝倉ではなく  
スピーカーだ」

桜夜先輩の言葉で俺はその時を追憶する。

スピーカーを使えるという事は電気が使えるということ。  
異世界の常識が覆された衝撃的な瞬間だった。

「この世界では人によって創られた電力は一切使えないはずだ」

この異世界に散りばめられている謎という点と点。

その点は中々一つの線上にはならない。

すると今まで口を閉ざしていた清王さんが口を開いた。

「なら人によって創られていない電力だった。これしか考えられない」

「……極言だが、私もそれしか思い当たらないな」

俺は桜夜先輩の雷切を思い浮かべる。

雷切に宿っているのは自然魂の一種である雷魂は人が創り出したものではない。

つまり朝倉が使っていた電力も人が創り出した電力ではないということだ。

桜夜先輩もその極言に納得し、話を次に移行した。

「次は朝倉の是非だ。私たちは不覚ながら悉く朝倉の罠に嵌ってしまった。だが、そのいづれの罠も殺傷が無いものだった」

「それは性格上の事かも知れないが朝倉は最後、信号弾を放った。あの信号弾の意図は武装高生徒を戻す為だろう。つまり私たちを殺そうとしていた」

確かに桜夜先輩の言う通り、最初と最後の朝倉は手の平を返したように違った。



「もとより殺す気なら、何度でもその好機はあったはずだ。……  
私が囚われたとき拷問は愚か手厚い保護を受けていた」

桜夜先輩は自分が囚われた事を情けなさそうに言った。

視ても解かるぐらい相当桜夜先輩のプライドが傷ついているようだ。

「朝倉は途中で殺意に芽生えたとしか思えない」

途中で殺意に芽生えた……。

俺はあの屋上での出来事を思い出す。

朝倉と対峙した時、俺は異能である結界を発動させた。

その時の朝倉の表情は、不適な笑みを浮かべ、まるで核心に至ったようなそれだった。

考えてみれば、朝倉はそれから信号弾を放ち俺たちに殺意を向けた。

「もしかしたら……俺の左眼が原因かもしれません」

「中沢くんの左眼が原因だと……!？」

「まだ俺も解かりませんが、桜夜先輩のいた部屋に墮ちる前に俺は朝倉と屋上で対峙していたんですよ」

「なっ！　なんだとっ!？」

桜夜先輩は眼を丸くして驚愕する。

ああ、そうか。

まだ桜夜先輩には伝えていなかったのか。

それ以前に伝えるタイミングもなかったしな。

「そこで朝倉に銃口を向けられて結界を発動させたら、朝倉は不適な笑みを浮かべて……そして落し床に嵌って……」

俺の言葉を聞いて桜夜先輩も何かに気付いたような表情を見せた。

「……そうだとしたら中沢くんの左眼が殺意の原因かもしれないな」

「なんで俺の左眼に殺意を……？」

「もしかしたら、中沢くんの左眼はこの異世界に関係しているかもしれない」

俺の左眼がこの異世界と関係している……。

どんな関係かは解からないが、悪寒が全身を駆け巡る。

「でも俺の能力は防衛用の結界を創りだすみたいなものですよ？」

そんな結界がこの異世界と何か関係があるんですか？」

「そう言われるとそうかも……。異能というのは希代だが実在しない訳ではない。中沢くんがそうであるように武装高には異能科というものもあるぐらいだ」

「だが、中沢くんの左眼の異能はまだ未知数で謎が多い。異世界との関係がまったくないとは今は言い切れない」

そうか……。

俺はこの眼の事を何も知らないんだ。

名前愚か本当の真価も。

「逆に、中沢くんの異能がこの異世界から脱する為の鍵になるかも

しれない。だから今はあまり思い詰めないでくれ」

俺の左眼がこの異世界から脱する為の鍵……。それが本当なら俺は皆を救えるかもしれない。

「……解かりました」

微かな不安と確かな希望を抱いて、再び話は移行した。

「あと巨大熊、私を拉致した意味、術が使えない部屋、と色々あるがまずは……」

突如、桜夜先輩の言葉が途切れた。

何が起こったのか俺には理解出来ないまま、桜夜先輩は立ち上がりざまに千鳥を鞘から抜き、刃先を俺に向けた。

桜夜先輩の眼は、戦闘時に見せる圧倒される眼光。

一瞬、俺に向けられたのかと思っただが千鳥の刃先は俺の後ろ先を視ていた。

「隠れても無駄だ。出てきたまえ」

場の空気が凍っているかのような冷たい声で桜夜先輩は林に隠れている相手を直視する。

桜夜先輩の視線により敵の居場所が解かった俺たちは相手と距離を置く。

清王さんは常に握られている両銃の右の銃口を桜夜先輩の視線に合わせた。

一方のガイは既にこの場から消えていた。

「あゝあゝ、強襲失敗かあゝ」

ゲームでも楽しんでいるかのように明るいアニメ声のような口調が、桜夜先輩の視線の先から聞こえる。そして、ゆっくりと少女が林から姿を現した。

小柄な体型でオレンジのショートヘアーにツインテール。顔は体型と同じく童顔で、湖のような深いサファイヤのような澄んだ碧眼。

だが、その体型や顔に似合わないマシンガンを握っていた。そして、桜夜先輩を視て子供のように明るく笑った。

「えええ〜!? お姉ちゃん今時刀使ってるの!? 非合理的過ぎだよお!」

無邪気な子供のように笑いながら桜夜先輩を貶す。そんな口調と言語に桜夜先輩はふっ、と鼻で笑った。

「非合理的だと? そんな重い黒光りする鉄の塊を使うのが合理的だとも言うつのかね?」

「なに言ってるのお姉ちゃん! 最近のマシンガンは軽量化されてただの鉄じゃ……」

「そんな事は知らん!」

2人の会話は学校で友達同士で会話しているかのような口調だった。まるで知り合いのようだ。

「お姉ちゃんこそそんな重い真剣使って合理的なの?」

「この剣の重さは人の命の重さだ。君の黒光りの重さとは意味が違  
う」

「ははは……全然良く解からないけど」

「君が理解する日など一生来ないさ」

「ああ〜！ ひどい〜！」

普通の会話にはないこの張り詰めた空気。

それはお互いの銃口、刃先が相手に向けられているからだ。

「ねえ知ってる？ 刀はマシンガンに敵わないんだよ？」

「そんな虚実は知らないな。如何なる銃でも剣には勝てない」

その言葉に少女はにやっと不適な笑みを浮かべた。

「試してみる？」

「君が試したければ試すがいい。だが君も刀の切れ味を試す事にな  
るぞ？」

「へえ〜！ す〜い自信！」

「言っておくが、私は剣を握って戦いに敗れた事は一度もない」

「へえ〜じゃあ、これが記念すべき最初の負けになるんだね。お姉  
ちゃんの」

「ほお、私が誰に敗れるというのかね？ まさか君にか？」

「それはすぐに解かるよ」

「そうだな。結果はもう視えているな」

瞬間、少女の眼が獲物を狙うような眼に変わった。

「最高に面白いよお姉ちゃん。さあらに見せて。お姉ちゃんの力を」

24話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

24話・(2)

「最高に面白いよお姉ちゃん。さあらに見せて。お姉ちゃんの力を」

少女はトリガーを引いた　！

それと同時に硝煙と連続してくる発砲音が聞こえた。

反動は少ないと言えど、あの少女の体型には無理があると思っ  
たが、少女は軽々しくマシンガンを往なしている。

その幾多の銃弾は桜夜先輩の残像に向かっていった。

「へえ〜！　やっぱ口だけじゃないんだ」

少女は桜夜先輩の姿を見失ったかと思うと、突如銃口を真上に向け  
る。

その真上には人間離れた飛躍で刀を振りかざしている

「はあ　　ッ！！！！」

桜夜先輩の千鳥が少女の頭上に眼にも留まらぬ速さで振り下ろされ  
る　！

だが、少女は悲鳴も上げる事無く口元を歪ませた。

空間を揺らすほど　　いや、比喻ではなく実際に地を揺らがせた桜

夜先輩の一撃。

爆音と粉塵が周囲に飛び散って、風圧がまともに俺たちに襲い掛か  
ってくる。

桜夜先輩の剣戟でその場には穴が穿たれた。



「いただきますいッ！！！」

桜夜先輩が地に着いた真上、そこに桜夜先輩と同等の飛躍を見せる少女の姿があった。

マシンガンを持っているのにこの飛躍

尋常の人間の力ではない この少女も。

『ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！』

桜夜先輩に降り注ぐ銃弾と薬莖の雨。

畏怖するぐらいの銃弾が桜夜先輩の頭上に連射される！

一発でも命中すれば致命傷は避けられないだろう いや、それ以前に回避ポイントがない！

だが、桜夜先輩からは恐慌すら感じられなかった。

桜夜先輩は降り注ぐ銃弾に千鳥の刃身を素早く受け流すように当て、銃弾を地面に流す！

まともに銃弾を受ければ、千鳥とて刃身が折れるだろう。

だが桜夜先輩は受け流す事によって刃が毀れる事もなく、銃弾を流したのだ。

これぞ神業と言っても過言ではないだろう。

「どうかね？ これで君の虚実を証明出来たぞ」

少女の言った言葉、刀はマシンガンには敵わないという虚実を証明する為に桜夜先輩は回避しなかったんだ！

あの時冷静な顔をしていたが、本当は熱情していたんだ。

「なるほどね、そういうやり方もあるのか」

上空に飛躍している少女は、硝煙を上がらせながら狙いを修正する。

「だけどさあくお姉ちゃん、そんな薬莢まみれの地面で大丈夫なの？ 転んじゃうよ」「

その少女の言葉に俺の視線は勝手に桜夜先輩の足元へ行く。銃弾の雨の影響か……桜夜先輩の足元には薬莢が無数に転がっていた。

「相手の心配より自分の心配をしたらどうなんだ？」

桜夜先輩は刃先を地面に向け、その場から動かずに頭上にいる少女を見る。

「ええ………？」

その桜夜先輩の動作と言語に、少女は微かながら動揺を見せる。刹那、何かが頭上に迫ってくる不快な気を感じた少女は己の頭上を仰ぐ。

少女の視線の先には既に目前まで迫って月光に照らされる宝刀頭上を貫こうと重力で墮ちてくる三日月宗近があった！

「うわあっ！？ い、いつのまにっ！？」

「私が飛躍した時、三日月宗近を天を突くかのように投げ放った」

「ッ！？」

誰もが桜夜先輩の姿をロストしているほんの刹那、桜夜先輩はそん

な事をしていたのか……。  
まるで全てを読んでいるかのよう……。いや、先を知っているかのようないタイミングだ。

少女は左右上下にも避けようがなく、マシンガンを頭上に上げ、それを盾にしようとする。

その時を待っていたと言わんばかりに、桜夜先輩は初動する。弓を引く姿を想像させる程に、手に握る千鳥を深く引く桜夜先輩。それが槍のように、刃身全域に力が蓄積されていく

「はあ ツ！！！！」

全身の発条によって加速した千鳥。

それが矢のように、少女へ投げ放たれる !

「ひ、ひっど〜いッ！！！！」

自分の命が生死の天秤にかかっているとは思えないような陽気な声。その声はまるで悪戯に合った子供のような……。

だが、千鳥の刃先は的確に少女の真下に吸い込まれて行く。空中故に少女は八方塞り。

もうマシンガンは頭上の三日月宗近を盾にしている為、下から迫ってくる千鳥は回避しようがない。

桜夜先輩は決着を三日月宗近と千鳥に委ね、地上からその光景を見届けた。

甲高い金属音を響かせ、少女は頭上の三日月宗近を防いだ。だが、それと同時に真下から千鳥が接近してくる !

「もおお〜ッ！！！」

真下に迫る千鳥に向けて吹っ切れたような声を上げる。

そして、両脚を開脚させ、太ももで千鳥を真剣白刃取りした！

その光景に誰もが啞然とした。

偶然ではない 明らかに狙ってやっている。

全員が啞然とする中、桜夜先輩は戦闘中だと言う事を忘れていなかった。

「まさか太ももで真剣白刃取りとはッ！」

桜夜先輩は驚きを力に変え、再び地面を蹴って上空の少女へ向かう！

落ちてくる三日月宗近の柄を右手に掴み、桜夜先輩は月夜を背景に大きく振りかざす！

眼にも止まらぬ太刀筋の速さに、少女は対応仕切れなかった。

「舞い落ちる桜の花に夢幻の優美を奉ずる。巡り来る花信へと集い百花繚乱の如く成せ！」

呪を唱えた瞬間、三日月宗近の刃身全域に月光の如く金色の光を帯び始める

三日月宗近は光を帯びた瞬間、月の月光も一段と強さを増して見えた。

「桜剣っ！ 斬月ッ！！！」

三日月を形取るような三日月宗近の剣戟。

その太刀筋には、本当に三日月のような金色の光が制止していた。

「　　ッ!?　　う、うそ………」

息を呑むような少女の悲鳴

桜夜先輩の剣戟をまともに受けたマシンガンは冗談のように美しく  
一刀両断された。

だが、少女は半分だけになったマシンガンをすぐに桜夜先輩の視野  
を覆うように投げた。

それを桜夜先輩は簡単に三日月宗近で流す。

「これで!」

一瞬、桜夜先輩の視界を奪われた刹那　　その影から少女の太もも  
真剣白刃取りした千鳥の突きが現れる　　!

「なあ　　ッ!?」

桜夜先輩でも予測していなかった上空での突き。

その突きをどうにか鰐で受け止め、上に太刀筋を変える。

少女の太刀筋を変えた事によって、桜夜先輩の胴体には隙が生じた。

「隙ありい　　!!!」

突きの太刀筋を上に変えられた反動を利用して、桜夜先輩の胴体に  
少女がドロップキックをお見舞いする　　!

「ぐあぁッ!?!」

少女のドロップキックが桜夜先輩の心窩に炸裂する。  
そして重力に従って、少女は桜夜先輩を下敷きにして墮ちていく。

「さ、桜夜先輩ッ!?」

俺は思わずその光景に声を上げてしまった。  
だが、そんな声を虚しく、桜夜先輩は背中から地面に墮ち鈍い音が響いた。

桜夜先輩を下敷きにしていた少女は無傷。  
背中から打った桜夜先輩は動作が完全に静止した。

「チャックメイトって奴だね」

少女は自分が手にしていた千鳥を真後ろに投げ、左手で桜夜先輩の右腕を掴み、右脚で踏みつけるようにして左腕も静止させた。  
桜夜先輩も抵抗しようと思揺くが、微動だにも出来ない。  
そして少女はにやつと笑いながら懐から拳銃ピストルを取り出し、その拳銃を突きつけるように桜夜先輩の口の中に突っ込んだ。

「んぐっ……んぐうんっ!」

藻掻き声を上げる桜夜先輩は、もう少女に手も足も出ない……。  
口腔内に突っ込まれてある拳銃のせいで呪すら唱えられない。  
まさしく 剣が峰だ。

「……桜夜先輩ッ!?」「……」

俺と美唯、月守さんの声が重なった。

どうすれば桜夜先輩を助けられる……? どうすれば……。

一番守るべき場面で、俺の結界も意味を成さない……。発動させても桜夜先輩を守る事は不可能だ。

「あゝあゝお姉ちゃんもうお終いかあ。あんなでかい口叩いてた癖に結構早かったね」

そう冷笑して少女は拳銃をスライドさせた。

この動作で初弾がチャンバーに送り込まれ、あとはトリガーを引けば 発砲出来る。

「最期ぐらい私の名前を教えてあげる。私は星見郷さあ。覚えてとは言わないよ。もう覚えられないしね」

拳銃をスライドした時、桜夜先輩は初めて死に直面して畏怖を見せた。

言葉にもならない声で藻掻く桜夜先輩……。

だから、俺にはその光景が幻想に見えた。

いつだって負けた事のない桜夜先輩が、こんな小さな女の子に負ける訳がない。

負けるはずがない。きっと桜夜先輩には考えがあるはずだ。

なのに……どうして桜夜先輩の表情は恐怖で畏怖しているのだろうか。

それは……死が怖いからだ。

自分が死ぬと解かっているからだ。

けれども、まだその瞳は絶望していない。

剣士としての最期の志、誇り高く生きるために。

そんな瞳が……そんな瞳が世界を失って俺たちまで映さなくなるなんて……。

そんなこと……そんなことさせるかぁッ！……！



25話・(1) 約束(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
a  
spect  
s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

25話・(1) 約束

そんなこと……そんなことさせるかぁッ！……！

俺は本能のままに駆け出した。

このままでは確実に桜夜先輩は殺される。

それが俺の魂を激動させた。

だが 遠い。

全身の筋肉が千切れるほど全力で走るが、まだ遠い。

桜夜先輩の口腔内に突き込まれている銃で、確実に撃たれる。

その未来を変える術はないとでもいうのか？

いや、絶対にある！

そう信じて、一心不乱に前へ走る ！

脚が使い物にならなくなっても構わない ！

桜夜先輩を守る為なら！

俺の背中から美唯と月守さんの声が聞こえる。

だが、もう俺の耳には聞こえていなかった。

俺には遠距離武器は愚か武器すらない。  
だから、少女に攻撃は出来ない。  
だが、騙す事は出来る。

俺には 左眼の異能がある。

「ううおおおおおおおおおッ！！！！」

走り絶叫しながら俺は左眼に手を置き、能力を発動させる。

この能力の事を少女は知らない。  
だからこそ成せる業。

「ッ！？」

全力で走る俺に気付き、自分の身に危険を感じた少女は素早く拳銃を口腔内から引き抜き、銃口を俺に向ける。

それだけの時間で十分だ。

少女の拳銃から銃弾が発砲される。

それを俺の能力 結界で弾き飛ばす。

「け、結界ッ！？ まさか異能者なのッ！？」

俺の能力に気を取られている少女は、桜夜先輩の事まで手が回らなかった。

「還りきたれ！ 千鳥！」

桜夜先輩が呪を唱えた刹那、瞬間移動のように千鳥の柄が左手に握

られていた。

だが桜夜先輩は口が開放されただけでまだ動けない。少女の押さえ込みが的確な証拠だ。

その事に気付いた少女は、再び銃口を口腔内に突っ込もうとするが

「はあッ!?」

突如、少女の握っていた銃が手から弾き飛んだ。

これは、この好機をずつと林に潜んで待っていたガイのスナイパーライフルによる銃弾でだ。

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び生ずことを請う」

桜夜先輩が呪を唱え始める

その呪に反応して、一波、二波と電撃が流れる。

「今、此処に雷魂を開放する！」

大轟音を轟かせ、視界全体を覆う程の閃光が漏れる。

「もぉ〜！ なんなのよっ！」

少女は桜夜先輩から一跳びで後退する。

だが、少女が後退した真後ろには

「誅伐！」

そこには今までとは違い、確かな感情が入っている清王さんがいた。少女は声に慌てて振り返り、銃口を清王さんに向ける。

その時には既に清王さんの銃からは硝煙が上がっていた。

「ぎゃあああッ!?!」

頭ではなく防弾制服で守られている胴体を清王さんは発砲した。

激痛に表情を歪ませる少女だが、直ぐに銃口を清王さんに向けた。

「こ、こんのおッ!?!」

少女は俊敏にトリガーを引く

その銃声に重なるように、清王さんも発砲した。

「ぎゃあああッ!?!」

これは少女の悲鳴だ。

一発しか撃っていない清王さんの銃弾が、少女には二発被弾している。

ど、どついう事だ……?」

清王さんは一発しか発砲していないのに……。

防弾制服のお陰で出血はしていないが、死ぬほど痛い激痛に悶絶する少女。

一方の清王さんはどこも被弾がなく、悠然と銃を構えている。

「……………そうかあ」

少女は痛さで歪む口元を無理やり笑わせ、清王さんを見る。

「お姉ちゃんはさあらの銃弾を銃弾で誘導させて……………その二つの銃弾をさあらに当てたんだあ……………」

不意に　　少女は素早く銃口を向ける。

「だけど、さあらを殺さなかったのがお姉ちゃんたちの敗因だよ！」

少女は弾が尽きるまでフルオートのM1911を連射させる。

狙いは全て清王さんの頭部だ　　！

だが、清王さんはスウと閉じていた眼を開き、避けたと解からないぐらいの最小限の動きで頭を傾げる。

「じ、このお姉ちゃんもやるう〜！」

少女のM1911は弾切れを告げるホルドオープン状態になり、すぐに弾倉をリロードさせる。

そのリロード間に清王さんは動いた　　！

清王さんは舞うように螺旋しながら左右の銃で交互に二発、着地時に身を引きながら一発、発砲した　　！

既にリロードを終えていた少女は、清王さんの銃弾をバネが付いているかのように空中で縦に一回転して避ける。

そして着地前に銃口を清王さんに向け、今度は三点バーストで発砲する　　！

その攻撃も清王さんは当然かのように最小限の動きで避ける。

「銃じゃこのお姉ちゃんには勝てないか」

そう言い切って少女は残りの弾を全てフルオートで発砲し、銃を投げた。

そして背中に両手を突っ込み、ジャキジャキ！と流星みたいな速さで隠していた刀を二刀流で抜いた。

「お姉ちゃんは銃のフレーム付近に大型ナイフが装備されてるみたいだけど、それじゃあー刀には敵わないでしょ？」

そう言い放って少女は人間離れしている瞬発力で飛び掛る！  
この少女……銃も刀も使えるのかっ！？

「……………」

清王さんは流星のように飛び掛る少女に発砲するが、全て回避されてしまう。

流星の清王さんも少し唇を噛み締めているのが解かった。  
明らかに少女のペースに嵌ってしまっている。

少女は清王さんの肩目掛けて両刀で突き出してくる！  
その刃先を清王さんはフレーム付近の大型ナイフの腹でカキンツ！と打った！

後ろにザザッ！と下がる少女に、清王さんは左右一発ずつ同時に水平面撃ちをする！

「さっきのお返しだよぉ！」

少女は清王さんの放った二発を両刀で打った！  
打った銃弾の一つは、清王さんの頬を掠め林へ消えていった。  
その軌跡を後追いするように、清王さんの頬からはゆっくりと真紅の血が流れ始めた。

そして、少女と清王さんの間に長い間合いが生まれる。  
近づぐだけで圧迫されそうな、そんな2人だけの空間。

清王さんの流した頬の血が地面に墮ちる途次、2人は同時に駆け出した！

夜空に木霊する音。

何度も何度も 互いの刃を交錯し合う両者。

眼にも及ばぬ速さで必殺を重ね合う両者。

それでも勝負に決着は訪れない。

「もぉ〜！ このお姉ちゃん剣術も上手い！」

少女が近い間合いを一足で跳ぶように後退する。

少女、清王さんは両刀だが、互いに桜夜先輩の桜剣のような類はないようだ。

だからこそ、己の力が物を言う。

清王さんは床を蹴ると、獅子のような速さで二丁拳銃を同時に発砲する！

それを少女は背転しながら避け、距離を取る。

だが、少女の真後ろから

「ひいつ ツ！？」

威嚇するかのように雷切の雷音が響く。

その大音響に少女は首を縮ませる。

遠くからの俺たちでも度迫力だ。

「あちゃ〜、前後で囲まれちゃったよ……」



だが少女は笑っていた。

それは暗礁の場面を楽しむかのような余裕の表情。

「まあ、あのお姉ちゃんなら勝てるかな」

少女の視線の先には、美唯が映っていた。

そう俺が認識したよりも早く、少女は小さな獅子のような速さで、両刃を構えて疾走する。

その先には、俺と美唯、月守さんがいる。

少女の狙いは　俺と美唯。

桜夜先輩も清王さんも、もう追いつけないほどの速さ。

瞬きをする間に、少女は既に間合いに入っていた。

あまりの速さに結界は愚か、何も間に合わなかった。

両刃の刃先が、突きの太刀筋で現れる。

その刃先は、俺と美唯の胴体。

俺は反射的な本能のように、ありったけの力で美唯を吹き飛ばした。

「じゅ、じゅん　　ッ！！！！！」

美唯は俺に吹き飛ばされながらも、俺に手を差し伸べてくれていた。

その手と美唯の滲む瞳に、俺は最期の笑みを浮かべた。

そして、その手の距離は次第に遠のいて行く。

これで美唯は少女の間合いから外れ、俺だけが残る。

後悔はしてない。

美唯を守れるなら

あの時の美唯が俺を守ってくれたみたいに、今度は俺が美唯を守れるなら

俺は眼を閉じる。そして不意に思い出がよみがえった。

俺の思い出にはどんな思い出にも美唯がいた。

悲しい顔をしている美唯もいる。怒っている美唯もいる。

でも、必ず最後には笑顔の美唯がいた。

そのかけがえのない想いを俺は魂で抱きしめた。

美唯の笑顔を離さないように、もう二度と離さないように、思い出を空にばら撒いた。

美唯。俺がいなくても強く生きて行くんだぞ。いや、お前なら強く生きれる。

それは、ずっとお前の傍にいた俺が一番よく知っている。

美唯となら、どんなに離れ離れになっても何度でも巡り合える気がする。

それは美唯も感じているよな？

「じゅん ツ！……！ いやだよ……！……！……！ 独りに

しないですよ……！……！……！ じゅん ツ！……！……！」

25話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

25話・(2)

しかし、いつになってもその時は訪れない。

其れは、この世界が止まっているかのような永遠の静寂で俺は二度と開くはずのなかった眼をゆっくりと開ける。

「なんでえ……なんでそんな事できるの……なんでえ……」

少女は視線を落しながら、怒りにも良く似た震える声を振り絞る。更に視線を落とすと、刀の刃先は俺の胸のほんの僅か手前で制止しているのが解かった。

そして、少女の両手から力なく刀が落ち、糸の切れた人形のように少女はその場にへたり込んだ。

「なんでえ……なんでよお……」

震える声で同じ言葉を繰り返す少女。

自分の過去に対して悲哀し、その悲哀に慄然して、更に激昂まで感じられる少女の声。

「そんなことされたらあ……殺せるわけないよあ……さあらはアイツ等とは違う……！ 絶対に違うっ！！！」

記憶に苦しみながらも少女は強く唱えた。

その瞳からは幾多もの雫が零れ落ちていく  
アイツ等とは違つと。

この言葉は少女の記憶の深奥から出た言葉だろう。  
動揺を隠せない俺だが、小動物のよう震える少女に屈んで視線を合  
わせた。

「……………」

俺の視線に気付いた少女は、落としていた視線を合わせた。  
湖のように澄んだサファイヤのような瞳は、涙いっぱい濡れてい  
た。

何度もしゃくり上げる仕草に、ひたすらに泣く子供を連想させた。

「大切な人を守りたいから命を賭けられるんだよ」

自分でも恥ずかしくなる口調と言葉を少女に囁く。

俺の言葉に少女の動きが止まる。

「大切な人……………？ ならさあらは…………… ツ！？」

突如、頭を押さえつける少女。

「お、おい！？ どうした！？」

「ご、ごめんお兄ちゃん……………無理に昔のことを思い出そうとすると  
頭が痛くなって……………」

思い出そうとすると頭が痛くなる……………？  
まさかこの子は過去を覚えていないのか？

「まさか……過去の記憶がないのか？」

「そんな事もないよ。大切だった思いでは薄っすらだけでも覚えてる。けど……」

少女は口重そうに言葉を詰まらせた。

そして、俺の眼を直視した。

その眼の深奥は、自分じゃ解からない記憶に酷く恐慌し助けを求め  
る。

そんな心眼だ。

「記憶がごちゃ混ぜなの……無理やり付け加えたような記憶で……  
とにかくすつごく気持ち悪い」

少女は記憶に対し、不愉快そうな表情を創る。

本当に……過去の記憶がないんだな。

もどかしそうな表情を続ける少女に俺は頭を少し強めに撫でた。

「あつ……いたっ！」

少女の顔に少し笑顔が戻った。

その笑顔にもう何も不愉快なものを感じず、戦意も感じなかった。

この少女に何があつたのかは解からない。

だが、人を命がけで守るといふ事に何か特別な何かがあるのだけは  
解かった。

それが、少なからず『記憶』に関係していると。

「えへへ……」

俺の撫でに気持ち良さそうに笑顔を溢す少女。

本当に子供みたいだなつと俺も微笑を漏らした。

「…………お姉ちゃんみたい」

「お姉ちゃん？」

「うん。覚えてないけどさあらにはお姉ちゃんがいたと思うの」

俺の胸に棘が刺さったような鈍い痛みが走る。

それも覚えていないなんて…………。

俺はあまりにも悲哀過ぎる少女に、掛ける言葉が見つからなかった。

俺に家族はいない。

それが解かるのは記憶があるからだ。

だがこの少女には記憶がない。

自分の事も、家族の事すら記憶から消えてしまっている。

それがどんなに残酷で悲哀なことか…………。

「大丈夫だ。俺も手伝ってやる」

「え…………？」

「取り戻してやるとは言えないけど、手伝っよ。お前の記憶探し」

俺の言葉に息を呑む少女。

そして、そのまま視線を地面に落した。

「なんでお兄ちゃんはそんなに優しいのぉ…………さあらはお兄ちゃんを殺そうとしたんだよ…………？」

「人を殺すというのは許せない。けどお前は殺さなかった。それに……」

その言葉に少女は視線を瞳に合わせる。

俺は少し恥ずかしくなり、視線を斜めに落とした。

「なんだが……お前は昔いた妹に似てるんだよ」

「……そうなんだ」

少女は少し唇を噛み締めた。

それは自分の過去に対してか、俺の過去に対してかは解からない。だから俺は、ふうと鼻で笑ってやった。

「だから、何だか放ってけないんだよ」

「えへへへ……ありがとう、お兄ちゃん」

そう言って再び少女は笑顔になった。

その笑顔は俺の妹　沙希にどこか似ていた。

不意に　少女に近づく荒々しい足音が聞こえる。

その足音の主は　美唯だった。

「……もう絶対に　あんな事はしちや駄目だからねっ！……！」

「ふええええッ！？」

バシューッ！と少女の頬に紅葉が出来る。

美唯の一撃に少女の小柄な身体は軽く飛ばされた……。



……なんて威力だ。

「う、ごめんなさあ〜い……。もう二度々あんな事はしませえ〜ん……」

マンガのような滝の涙を流しながら、少女は倒れたまま美唯に謝罪する。

その言葉を聞いた美唯は、ギロツと戦慄しそうな眼を俺に向ける。戦慄はしなかったが、心臓が飛び出るかと思った。

今にも狩られそうな勢いだったが、美唯は全身の緊張を抜くように深く溜息をついた。

「潤も死のうなんてしないでよお……。お願い……」

これまでに見た事もない美唯の表情。

こんな悲しそうな表情でお願い事をする美唯なんて……。

俺は何て自分勝手なことをしてしまったんだろう。

「ごめん……。ちょっと自分勝手過ぎたな……」

「全然ちよつとじゃないよっ!!!!」

全ての感情を吐き出した美唯の一言。

その言葉が鋭く俺の胸に突き刺さる。

「潤なら解かるでしょ……。!? 私がどんな気持ちなのか……」

「今まで潤がいたから私は生きれたのに……。どんな事でも乗り越えられたのに……」

その瞬間、美唯の瞳から一滴の涙が零れた。  
落ちる雫は、震える拳を過ぎて地面に落ちて行った。

「潤がいるから私がいるのに　潤がいなかったら……潤がいなかったら私はいれないよおッ！！！」

「……………」

魂の中で様々な想いが錯綜して、俺は何も言葉に出来なかった。  
何故だか解からないが、視線を合わせられなくなった。

俺は命に換えて美唯を守ろうとしていた。

美唯を死なせたくない気持ちで一杯になっていて、俺は美唯に気付けなかったのか

俺だってそうだろう？

美唯がいなかったら俺はここにいない。

美唯がいなかったら、家族を亡くしたと同時に俺の心も無くしていた。

俺は美唯がいたから生きれたんだ。

「俺だってそうだ……美唯がいなかったら俺はここにいない」

そうか　そういう事なのか。

なんでこんな事に気付けなかったんだろう。

だから美唯は命と引き換えにしようとした俺をこんなに叱っているんだ。

「ごめん美唯。ようやく気がついたよ。今までの俺はどうかしてた」

俺の言葉を聞いて、美唯は表情を明るくした。  
そして、俺に手を差し伸べた。

「潤、今を必死に生きよう。そして誰も欠けないで私たちの日常へ  
戻ろう」

希望に満ちた瞳をいつまでも近くで見たい。  
その為に俺は美唯の手を握った。

「約束だぞ。美唯」

「うん。約束」

俺と美唯で始まった手の抱擁が

「私も約束しよう。その時は私も君たちの日常に混ぜてくれないか  
？」

桜夜先輩が俺たちの手を握った。

その手は温かくて確かな力を感じる。

「もちろんですよ！」

俺と美唯は無邪気に笑った。

そして、もう一つ小さな手が現れた。

「さあらも約束するよ！ さっきまで敵同士だったさあらが言っの  
は駄目……かな？」

「何を言っている星見郷くん。昨日の敵は今日の味方と言っじやないか」

控えめに言った少女に桜夜先輩はすかさず返答する。

「桜夜先輩、この子と会ったのは今日ですよ」

「中沢君。君はそこまで神経質だったのかね？」

そんな談話をしていたら、新しい手が現れた。

「あたしも改めて約束する。……あたしは何も出来ないけど、精一杯努力するよ！」

月守さんに続いて、再び新しい手が現れた。

「まだ信頼されていないかもしれないが、俺も約束する。スナイパーとしてお前等を護衛するよ」

「何を言っている『精鋭の狙撃手』河坂ガイくん。私が全てを覚えたとこの事は信頼の証だ」

桜夜先輩の意味の解からない信頼の証を聞いていると、最後である手が現れた。

「約束……する」

「翠華くん。こんな時ぐらい銃をしまつたらどうなんだ？ 君の銃は刃も付属していてゆゆしいんだ」

「ふ、付属……」

付属という言葉に憤りを感じた清王さんは、己の銃を見る。  
その光景に和むような笑いが俺たちを包んだ。

26話・(1) 暗闇が導き出す天命(前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls、  
specta  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

26話・(1) 暗闇が導き出す天命

俺たちの志は一つだ。

それが、改めて魂に沁みて解かった。

「もうすっかり夜だな」

もう姿では誰だが認識出来ない暗闇。

暗闇の中で唯一不自由なく聞こえる声で認識できる。

この声は桜夜先輩だ。

「桜夜先輩、今日もまさか……あれをするんですか？」

俺がいうあれ。

そう、瞳が意味をなさないこの夜の異世界に必需となる灯火。

そして、調理にも利用できる灯火。

そう 人類の生み出した画期的な文明とも言える火だ。

「中沢くん。今日も期待しているぞ。存分に力を奮ってくれたまえ」

桜夜先輩は全ての希望を託すような大袈裟な口調で言う。

確かに、俺は数々の木に灯火をつけてきた。

その勇士を桜夜先輩は評価してくれたのか。

嬉しいような虚しいような……。

「夜が来る度いつも思うんですが、ライターとか点火棒とかは持ってないんですか？」

「ふう、そんなモノはいらぬ」

鼻で笑われてしまった。

私的な意見だが、俺は必要だと思っている。いや、これからも思い続けるだろう。

「えええッ！？ お姉ちゃんたちそんな物も持ってないの！？ 非合理的すぎだよぉ〜！」

相変わらずのアニメ声と子供ののような口調が聞こえる。

「なら君は持っているとしても言うのかね？」

「うっん、持ってないよ」

「なら少し黙っていてくれないか？」

「はぁ〜い」

桜夜先輩の鋭い言語も少女は軽く流した。

この少女のスルーテクニクは中々すごいぞ……。

「どうやら中沢君。そんなモノは誰も持ち合わせていないそうだ」

「……これまでずっと俺が自力で焚いてきたのに、今さらそんな重



宝な道具を出されたら往復ビンタですよ」

「その対象に私は入っているのかね？」

「むしろ桜夜先輩が主軸……」

「座興はこれまで。始めようか」

俺の魂の叫びは座興と題され打ち切りになってしまった。

「何を始めるのっ！？ お姉ちゃん！」

何が始まるのか解からない少女は、威勢よく桜夜先輩に問いかける。だが、これから始まる事は俺にとって苦痛でしかない。だけど……これがないと始まらない。

やるしかない……か。

「ああ、中沢くんの名誉ある晴れ舞台だ」

「そんなお膳立てしないでくださいよ！ やる事は火起こしなんですから！」

その瞬間、シュツ！と刀を抜く音が聞こえた。

まずい……なぜだか解からないが俺は桜夜先輩の逆鱗に触れてしまったようだ……。

俺はどうすれば……。

「暗いと何も視えない。雷切の電流を灯りに使おう」

そういうことか……。

俺は全身の力を抜くように溜息をつく。

「ん……？ どうしたのかね中沢くん。 今から最後の晚餐に挑む  
虜囚のような溜息について」

「……そんな溜息はついていません」

灯り一つないこの場に、一波、二波と閃光のような雷が流れ始めた。

「今、此処に雷魂を開放する」

桜夜先輩が呪を唱えた瞬間、激しい雷音を轟かせながら千鳥は雷切と変わり、刃身には雷神の如く帯電し始めた  
！

「立花道雪、雷切っ！」

桜夜先輩の雷切が十分な程の灯火となり、この場全体を照らす。  
雷切があれば……俺の火起こしはいらんじやないか？  
だが、これも桜夜先輩に門前払いのように否とされた。

「潤、頑張つてね！」

灯りがついた事で位置が把握できた美唯は、俺の背中をポンツ優しく叩く。

「ああ、頑張るしかないんだな」

「お兄ちゃん？ 何を頑張るの？」

何も知らない少女が頭を覗かせる。

「火起こしだよ。それが俺の役回りさ」

自分で言ってるて更に虚しくなる。

でも、少しでもみんなの役に立つんなら……。

「えええッ！？ まさか手動でえ！？ それこそ非合理的だよお！」

いつもの通り大袈裟な口調で言う少女。

「俺だってこんな非合理的な方法はやりたくないさ。だがあらゆる電力が使えない以上、これしかないんだよ」

「電気が使えないの？ だとしてももつと合理的な方法はあるですよ！」

この子……電気が使えない事を知らないのか？  
ならこの世界の事も……。  
いや、その事はまた後だ。

「例えば何があるんだ？」

もし方法があるのなら願ってもない事だ。

「こつちには銃とか刀があるんだよ！ それを使えば簡単に火は点くよー！」

少女の意見に桜夜先輩が俊敏に口を開いた。

「簡単に言ってくれるじゃないか。私たちが試してないとも思っ

ているのかね？」

雷切を手に行っている桜夜先輩が事を言っていると、少し畏怖してしまう。それぐらいの迫力だ。

だが、桜夜先輩の言う通りだ。

俺たちは今まであらゆる方法を試して来たが玉砕している。

「お姉ちゃん、何か燃えそうな物はないの？」

少女の言葉を聞き、桜夜先輩はスカートのポケットに手を入れた。そして、そこから白いふわふわとした物を取り出した。

「これなら問題なく燃えるだろう」

桜夜先輩の取り出したのは綿だった。

今までの火起こしで、何故出してくれなかったのだろう。

最初から持っていたのなら、もっと早くから出して欲しかったものだ。

「オツケー！ それなら行けるよ！」

そう言っつて少女は桜夜先輩に近づく。

何か策でもあるのだろうか？

「何か考えがあるのかね？」

明らかに期待感の少ない眼差しで少女を視る桜夜先輩。

まあ、俺も期待はしていないが……。

「もちろん！」

両手を腰に当て、寄りも上がらない胸を張る少女。

まさに勝ち誇ったような満足気表情だ。

さっきまで一欠けらの期待もしていなかった桜夜先輩だが、その堂々とした態度に少しは意を示す。

「さあらの刀にこの綿を巻く。お姉ちゃんはさあらの刀に刀をぶつけて！ そうすれば火花が散って……」

その瞬間、桜夜先輩は眼を大きくした。

「そうか！ そうすれば火花が綿に引火し、やがては……！」

「そういうこと！ お姉ちゃん！ 早速やるよ！」

「面白い星見郷くん！ 受けて立つ！」

……本当にそんなので火を起こせるのか？

出来るという確信で満々としているのは解からないが、二人は颯爽と準備を始める。

「中沢くん。君に雷切を託す」

桜夜先輩が眩しいぐらいに帯電している雷切を手渡される。

あまりにも唐突過ぎて、俺は動揺を隠せなかった。

「え……？」

「私はこれから星見郷くんと火起こしを目的とした鍛錬を行う。中沢君、その鍛錬が終わるまで雷切を持っていてくれないか？」

思わずその閃光の如く光る雷切を見つめてしまった。

そして、どうしていいか解からず桜夜先輩を一瞥してしまう。

俺がこの雷切を……？ この俺が桜夜先輩の愛刀を握っていいのか？  
その前に、本当にする気なのか？

「俺が持つてもいいんですか……？」

「君だからこそだ。これは戦いの為の剣ではない。皆の灯火を護る  
為の剣だ」

桜夜先輩に説き伏せられ、俺は雷切を手取る事にした。

桜夜先輩が柄から手を離れた瞬間、雷切全ての重みが俺の腕全体に  
押し掛かる。

「おおお……！」

落さないように両手でしっかりと持ち直し、手旗信号のように雷切  
を構える。

こんな重い真剣を桜夜先輩はあんな軽々しく往なしているのか……。  
その凄さが身に沁みてわかった。  
というより眩しい……！

「準備オツケー！ お姉ちゃん、いつでもかかって来なよ」

少女は一振の刀を中段で構えている。

その刃身の中心部に、白い綿が巻きつけてあった。  
綿の影響で、この場の雰囲気随分と変わるものだな。

「星見郷くん。覚悟は出来ているのかな？」

一方の桜夜先輩はまだ刀は構えていない。

雷切は俺が持っているから、恐らく三日月宗近を駆使するのだろう。

「お姉ちゃんこそどうなの？ 腕の一本ぐらいは覚悟してる？」

「ふう、何を言って……」

「ちょっと待て！ これは火起こしだ！ 死闘でも何でもない！」

相殺しそうな空気の中、俺は原点に戻らせるため大声を上げる。

「おっと、そうだったな」

「あ、そっか。これは火起こしだったね。ありがとうお兄ちゃん！」

俺が言わなかったら、この場はどうなっていたのだろうか？

「君には特別に、桜夜家の神刀しんとうで相手してやるう」

桜夜先輩が珍しく誇らしそうな表情をつくる。

そして柄を右手で握り、その宝刀の姿を魅せつけるようにゆっくりと刀を抜いた。

「桜夜飛龍はな、神刀かみきりッ！ 神切かみきりッ！！！！」

なッ……！　なんで火起こしで真打が登場するんだ！？

俺が驚愕している間に、その刃先を睨みつけるように少女へ向ける。

「そこなくっちゃ！」

少女はグウ！と柄に力を込める。

凍てつくように張り詰めた空気。

この押し潰されそうな空気の中、両者は火起こしを遂行しようとしているのだ。

とても火起こしの場とは考え難い……。

「行くぞっ！！！」

桜夜先輩の発奮した声で、前代未聞の火起こしは始まった



26話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

26話・(2)

「行くぞっ!!!」

桜夜先輩は獅子が突進する以上の速さで少女に駆ける。  
一気に間合いを詰めた桜夜先輩は

「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」  
「!!!!!!!」

乾坤一擲の気迫の気迫と共に、桜夜先輩は少女の刀目指して刀を振る！  
心なしか、戦闘時以上の気迫に思える。

「うおおおりゃああ　　ッ!!!」

少女の頭上で、二つの刃身は交差する。  
その交差した少女の刃身を見てみると　そこには綿があった！  
少女はあの桜夜先輩の太刀筋を見切つて、刃身に巻きつけてある綿に当てたんだ！  
そして、ギリギリッと鏢迫り合いが続く。

「えいッ!!!」

少女は刀を前に押し出し、桜夜先輩を飛ばす。  
飛ばされた桜夜先輩は、ズズッと後ずさる。

「ぐツ!!!」

桜夜先輩は声を漏らしたかと思うと、俊敏に駆け間合いを詰める。

「ツ!?!」

間合いを詰められるのは予想外だったのか、少女は表情を強張らせた。

高い金属音を響かせ、桜夜先輩の左薙ぎの一撃を受け流す少女。

「はあ ツ!?!」

その左薙ぎの一撃を眼に視えない速度で太刀筋を右にする！  
俺にとって決死の一撃に見えたが、その右薙ぎの剣戟は当然かのように受け流される。

「まだまだ ツ!?!」

再び太刀筋を反転させる桜夜先輩。

その速度は衰えを知らず眼に視えない。  
なるほど……この繰り返しで火花を起こして火を点けようという事か……。

読みどおり、それが幾多にも繰り返された。

絶え間なく響く金属音。

その音が二人の息遣いのように錯覚する。

火花は散っている。だが、火は点かない。

……それもそのはずだ。

なぜなら

「ストップ！ 二人とももう止めてください！」

傍観者である俺の声に、二人は険悪な眼差しで振り返る。蛇に睨まれた蛙の気分だ……。

「なぜだ中沢くん！ あと少しなのだぞ！？」

「そうだよお兄ちゃん！ 邪魔しないでよ！」

二人に反発の声を浴びたが、俺は発言に出た。

「もう綿がない！ これ以上遣り合っても無意味だ！」

俺の言葉に二人共に少女の刃身を慌てて視る。

「なあ ツ！」

驚愕する桜夜先輩。

「そ、そんな ツ！」

その光景に眼を大きくする少女。

二人の視線の先には 綿が消えてなくなり、刃身だけの刀があった。

「な、なぜだ……！」

桜夜先輩は驚愕の色を隠せない様子で、誰に向けてでもなく声を上

げる。

「さあらの考えは完璧だったはずなのに……！」

二人共、恐慌状態に陥る。

その前に、この二人は本当にこの作戦で火を起こせると、一瞬でも思ったのだろうか？

いや、二人の様子だと今も思い続けているのだろうか……。

「当たり前だ！ 最初に刀が交差した段階で綿が斬れて落ちたッ！  
！！」

俺の言葉に、二人共に言葉を失う。

と、傍らの美唯は、

「まあ、当然だよね……」

美唯の言葉に、更に胸を抉られた様子の二人。  
それに続いて月守さんは、

「今は二人の無事を祝おうよ！ ねえ？」

確かにそうだな。

素人眼の俺から視れば二人が無傷だという事が奇跡だ。  
あんな火起こしの中で……。

「滑稽……」

「期待はしてなかったが……」

更に清王さん、ガイがダメ押しをする。  
全員に否定された二人は、更に心痛した様子だ。

「ま、まだまだよ！お姉ちゃん！」

力強い声で少女は桜夜先輩を呼び覚ました。

だが、なぜか桜夜先輩は弱々しい。

よほど火が点かなかつたのがショックだったのだろうか？

「……もう駄目だ。私は何も出来ない……」

「そんな深く考えないでくださいよ！ その前にあの方法で火を起  
こせる人はいません！」

俺は酷く傷付いている桜夜先輩に告げた。

「まだ方法はあるよ！ 聞いてよお姉ちゃん！」

少女は立ち尽くしている桜夜先輩の身体全体を揺らす。  
身体が揺れてようやく少しは眼が覚めたようだ。

「刀が駄目なら銃だよ！ 銃なら絶対に出来るよ！」

桜夜先輩は慰めようとした少女だが、

「……銃だと？ ならば私は用済みではないか……」

逆に墓穴を掘ってしまった。

その事に気付いた少女は慌てて自分の口を塞ぎ、次に繋がる言葉を  
探す。

そして、慌てふためく少女を、桜夜先輩はジトーとした眼で見つめる。

……こんな桜夜先輩を視るのは初めてだ。

何が原因だったのだろう？

今になってはその事も解からない。

そして、遂に少女は吹っ切れたような笑顔を作った。

更に右手はさよならのポーズを作り……。

「そうだね！　じゃあね、お姉ちゃん！」

最高の笑顔で桜夜先輩を戦力外通告した。

音は聞こえないが、桜夜先輩の心が折れる音が聞こえた気がする。

その証拠に、冷たい沈黙が訪れた。

この沈黙を破ったのは以外にも桜夜先輩だった。

「ふう、そうだな。銃なら私の出番ではない。清王くん、任せたぞ」

軽く微笑してから、見失っていた己を取り戻した様子の桜夜先輩。

そして、しっかりとした足取りで俺たちのいる所まで帰還してきた。

「お疲れ様です。桜夜先輩」

「ああ、ありがとう。中沢くん」

受け答えも出来ているので正常のようだ。

だが、その深奥は計り知れない。

「桜夜先輩、少し休んでいてください。雷切は俺が持ってますから」

「本当か？ 面目ない」

俺は桜夜先輩を休ませる事にした。

疲れも己を乱す原因かもしれない。

だけど、桜夜先輩が乱したのは火起こしが原因ではない気がする。

「さあ、翠華ちゃんの出番だね！」

美唯が送り出すように清王さんの背中を押す。

いや、押すと言うより叩くの方が正しいかも知れない。

バシン！という鈍い音が聞こえてきた。

「……………」

清王さんも痛かったのか、表情を強張らせる。

さすがの清王さんにも堪える一撃なのか…………。

それを俺は…………毎日喰らっていたんだよな。

急に自分の身体が心配になってきた。

「頑張れ翠華ちゃん！」

月守さんも清王さんを後押しする。

「期待してるぞ」

ガイも期待の眼差しを向ける。

なんだが、桜夜先輩の時とは違ってみんな期待している気がする。



一方、その当人は、

「頑張ってくれ清王くん！ 私の無念を晴らしてくれ！」

全員に強く想いを託された清王さんは、心ならずも少女の所へ向かって行った。

「良く来たねえお姉ちゃん。さあらは嬉しいよ」

満面の笑みを浮かべて清王さんを迎え入れる少女。だがその反面、清王さんは不快そうな表情をする。

「座興はいい……何をすればいいの？」

「お姉ちゃん、ノリ悪いい〜！」

「……………」

少女の子供のような態度を見ると、清王さんは更に露骨に不快そうな顔を作った。

その表情を見た少女も露骨に不思議そうな表情をする。

「あれ？もしかしてお姉ちゃん……さあらのこと嫌い？」

「愚問………空気で解からない？」

呆れた清王さんの顔を見て、少女は大袈裟に笑った。

「きゃははははは！　じゃあ〜親交を深める為に火起こしやっちゃおうか！」

「…………別に前と親交を深める気はない。それより早く…………」

清王さんの額には多少、汗が滲んでいた。  
なんでだろう？

気温も暑くないし、逆に寒いぐらいだ。

清王さんが動揺するような事でもあったのだろうか？

「そんな事言うからお姉ちゃんも友達少ないんだよ？」

一瞬、肩を強張らせた清王さん。

「べ、別にお前に関係なんかない…………それより…………」

随分と声がか細くなってしまった。

その証拠に最後の言葉は俺の耳には届かなかった。

「きゃははははは！　だいじょ〜ぶだよお姉ちゃん！　お姉ちゃんはずっごく可愛いから、さあらの言う通りにすればホイホイ…………」

その時、少女の声を掻き消すような清王さんの声が聞こえた。

「早く火起こを！　このままだと餓死するッ…………」

誰もがその声に耳を疑った。

清王さんの言語に感嘆符が付いた…………！

つてかその前に……が、餓死する……？

全員、何も物も言えない沈黙が訪れた。

その沈黙が続くにつれて、清王さんの頬は次第に高潮して行く……。

まずい……あまりにも可哀想だ。

清王さんは自分の危機を赤裸々に叫んだだけなのに……。

その瞬間、妙な指令感が頭の中をグルグル廻った。

俺がどうにかしないと……！

何も考えもなく、俺は行動に出る　！

「うおおおおおおおッ！！！！！！　お腹空いて来たぞおッ！

！！　早く火起こししてご飯にしようッ！！！！」

終始、最高に恥ずかしかった。

次は俺に対する沈黙が続く……。

なるほど……これは心身に堪える沈黙だ。

清王さんの気持ちが良い理解出来た。

「じゅ、じゅん……？　いきなりどうしたの……？」

美唯が不可解なモノを視るように、俺に正当なツツコミを入れる。

お前なら解かるはずだ……！　俺がこんな羞恥を犯してまで何故し

たのか！

そう……！　清王さんを救う為だ。

次は美唯、お前がやるんだ。

そうしなくては清王さんを救えない！

全員が二の舞になるんだ！

……という熱情を込めたアイコンタクトを美唯へ送る。  
俺のコンタクトを理解して受け取ってくれた美唯は、コクリと頷いた。

「すみませんッ！ 何方か食べられる食べ物を持っている方はいませんか！ 潤がおかしくなっただんです！ 助けてくだ……」

「ちげえ よお！！！！！！」

「えええ……？」

呆けた顔で俺を見る美唯。

くそお……美唯じゃ駄目だったのか……。

桜夜先輩ならこの場を的確に把握しているはずだ！

俺は腰を下ろして休憩している桜夜先輩にアイコンタクトを送る。

「そんな卑しい眼で視ないでくれ。即席な物は何も……」

「だから違いますよおッ！！！！」

俺は思わず頭を抱えた。

いや、的は清王さんから外れた。

これはある意味……助けられたのか？

そう悟った俺は、地面にゆっくりと正面から倒れた。

現実逃避の為に……恥隠しの為に……そして、無意識に、本能的に

「じゃ、潤が倒れたあ ツ！！！！！！ しっかりしてよ潤

ッ！！！！ 私の大切にしてたお菓子あげるからあッ！！！！」

だ・か・ら・ちげえ

よおッ!!!

27話・(1) 想いの果てにあるものは (前書き)

「君の魂に抱かれて」(きみのこころにだかれて)

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls  
a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

27話・(1) 想いの果てにあるものは

それから俺たちは何度にも渡り無謀な火起こしを続けた。

その一つは俺が綿を持ち、俺を中心とした両者が同時に綿に向け発砲する。

二つの銃弾が綿の中で交差して、火花が散って引火。

……という少女の考えだった。

結果、綿を持っていた俺が死ぬ思いをしただけだった。

それから少女の案で火起こしは続いた。

だが、結局は全て玉砕した。

その結果、また俺による板と棒を使った原始的な火起こしが始まったのだ。

だが、俺も手馴れたものだ。

過去最高タイムで火が点き、身体の負担を最小限に抑える事が出来た。

最初からこれをすれば良かったと酷く悔恨した。

そして、かなり時間は経過したが、ようやく清王さん念願の食事が始まった。

「桜夜先輩……」

俺は手に持っている皿を見つめる。

「ん？どうしたのかね？ 遠慮せず食べたまえ」

「何でおめでたい訳でもないのに赤飯なんですか？」

皿の上に盛り付けてあるのは、薄いピンク色をしている赤飯。もちろん小豆入りだ。

「君は赤飯が嫌いなのか？」

「いや……嫌いじゃないですけど」

「ならいいじゃないか」

俺が言いたいのは好きか嫌いじゃない。

赤飯というのは、おめでたい時に食べるものじゃないのか？  
そんな事を思っていると、「いただきます」という声が聞こえ始める。

その中でも餓死宣言をした清王さんは無心で食べている。

いつもクールな清王さんが、無心で食べているのを視て俺は気付いた。

この世界でこうやって食べ物を食べれる事態がおめでたい事かもな

……。

俺は小さく微笑してから、赤飯を頂いた。

「星見郷くん。君はこれからどうするつもりだ？」



俺たちは焚き火を囲むように座り、桜夜先輩の一声で話し合いが始まった。

それは少女の是非。

そして、その少女は自ら率先して俺の隣に座っていた。

「どうするって決まってるよお！ お兄ちゃんと一緒にいる！」

そう言っただけ少女は俺の腕に巻き付くように抱きつく。

どう対処していいか迷ったが、とりあえず全力で脳天にチョップをお見舞いした。

「いたあ~~~~いッ!!!」

頭を抱え込む少女。

まあ、全力だからしょうがないか。

「今ので本格的に記憶が全部飛んだあ！」

そういえばこの少女、記憶喪失ではないが記憶がごちゃ混ぜだったんだよな……。

まあ、何でも叩けば直る世の中なんだから少女の記憶も叩けば直るんじゃないか？

……それは昔の話か。

今はIC制御の精密機械だもんな。

そういえば、昔のテレビはブラウン管だったから叩く所があったが、今は液晶の時代だ。

一体、どこを叩けば直るのだろうか？

……その前にメーカー保障があるのか。

「安心しろ。叩けば直る！」

「それは昔の話だよお！ それに、さあらは機械じゃなくいいッ！」

「そうなのか？ 俺は良くみゆ……どっかの誰か様に殴られた痛みを痛みで緩和されてたぞ？」

その瞬間、傍らから背筋が凍る程の鋭い視線を感じた。美唯の事を語っているのが摩られたようだ。

まあ、明らかに美唯って口走ったからしょうがないか。

「別に美唯、お前の事じゃないから安心していいぞ」

「へえ〜じゃ、どっかの誰か様って誰のこと？」

まさに一触即発の笑顔だ。

これは全力で回避しないと。

「ああ、俺だよ。俺は自分自身を痛みつけるのが止められないのさ」

「絶対に違うでしょッ！ その前にそれ病んでるよッ！」

「大丈夫だよお兄ちゃん！ さあらが付きっきりで看護してあげるよ！」

「いや、お前が付きっきりで看護したら理性が劣等化しそうだから遠慮するよ」

「えええ〜！ お兄ちゃんのさあらのイメージってどんななのッ！？」

「その前に自分自身を痛みつけるのが止められない時点で理性は劣等化してるでしょ？」

「……………」

美唯の正当な言葉に、言葉を失った。

俺たちの意味のない談笑を見ていた桜夜先輩はクスツと微笑した。そして、口を開いた。

「では改めて自己紹介をして貰おうか。星見郷くん」

「えええ？」

突然の事で聞き返す少女。

「君の記憶がどこまで有るか、その確かめにもなるからな」

桜夜先輩は笑顔を返す。

ああ、この笑顔は頼まれたら断れない類の笑顔だ。邪気など何もなく、真摯がこもっている。

「うーん」

少女は首を傾げ、考え込む。

想っている事を言葉に出来なさそうなもどかしい表情だ。

「記憶は薄っすらと覚えてるんだけど、この記憶が本物じゃない気がするの。もちろん本物だと思う記憶もあるけど」

少女の口語から陽気さが消え、深奥な境地になる。  
その言葉に桜夜先輩も考え込む。

「記憶喪失ではなく、記憶を書き換えられた……いや、後付された記憶かもしれない」

「どっちかというした後付けが正しいかな。小学校低学年ぐらいの記憶は本物だと思うんだけど……うう、何て言えばいいんだろう。それからは本物じゃないというか……」

少女は額を押さえつける。  
すると、直ぐに表情を歪ませた。

「いたあツ!？」

「星見郷くんツ!？ 大丈夫か？」

「ご、ごめんお姉ちゃん……えへへ、無理に思い出そうとするとこらうやって頭が痛むんだよねえ……」

無理に笑顔を作る少女。

余程の激痛だったのか、額からは冷や汗が流れていた。

「無理な事を言っすまなかつた」

「お姉ちゃんが謝る必要なんてないよお、ありがとう」

少女は、小学校低学年の記憶は薄っすらだが覚えている。

だが、ある時点から記憶が後付けされている。

という事だろう。

それがどうしてなのか？ なぜなのか？  
解かる術はないというのか……。

だが、一つだけ解かる事がある。

この少女は普通じゃない。

俺はあの時を回想する。

少女は美唯を護ろうとした俺を殺さなかった。

それは少女の記憶に何か関係している。

『さあらはアイツ等とは違う……！ 絶対に違うっ！！！！』

この少女の言葉は本能から出た言葉だろう。

「ああ、そうだった忘れてた」

少女は照れ笑いをして立ち上がり、俺たちの正面に立った。

ああ、ちよつと考え過ぎてたな……。

俺は一区切りをつける為に、ブルブルと首を振った。

「桜凜武装高校1年総合科Aランク『星見郷さあら』称号『加護の  
アグライア』お兄ちゃん！ よろしくね」

「星見郷くん、中沢くんだけに自己紹介をするんじゃない」

「えええッ!？」

「……なぜそこで絶叫するのかね？」

「一年生のくせに小生意気な!」

「月守くん。君も一年じゃなかったのか？」

俺はその光景を眺めていたら、傍らの美唯が優しく囁いた。

「また賑やかになったね」

「そうだな。この明るさは絶対に見失っちゃ駄目だ。これがこの世界を壊す為の何より大切なものかもしれない」

俺はそのまま、流れるように清王さんを見る。

「……何か用？」

「いや、なんでもない」

少し膨れっ面になる清王さん。

清王さんはクールだから清王さんなのか。

明るい清王さんなんて想像も出来ない。

いや、案外面白いかもしれない。

あとで矯正してみよう。

その後も俺たちは寝るまでの時間、賑やかに騒ぎ合っていた。

9月5日/さあらeyes 最期の記憶(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

9月5日 / さあらeyes 最期の記憶

25話 - (1) 約束

「こ、このお姉ちゃんもやるう〜！」

剣を使うあの紅い髪のお姉ちゃんと言い、銃を使うこの白い髪のお姉ちゃんといい強過ぎだよ！

これはさあら一人じゃ分が悪すぎるなあ……。

そんな事を思いながらリロードを終えた直後、白い髪のお姉ちゃんは舞うように螺旋しながら左右の銃で交互に二発、着地時に身を引  
きながら一発、発砲した！

あんな撃ち方で狙いが定まるはずなのに……。なんでお姉ちゃん  
の撃った銃弾は吸い込まれるようにさあらの胴体に向かって行く  
の？

さあらはその三発の銃弾を空中で縦に一回転して避けて、着地前に  
三点バーストで発砲する！

その攻撃もお姉ちゃんは予想していたかのように最小限の動きで避  
ける。

この時、さあらは確信した。

「銃じゃこのお姉ちゃんには勝てないか」

まるで役立たずの銃弾を全部フルオートで発砲して、銃を威嚇程度  
にお姉ちゃんに投げた。



銃である程度お姉ちゃんの視界を奪った最中、背中に両手を突っ込み、接近戦用の刀を二刀流で抜いた。  
さあらは接近戦はあんま得意じゃないんだよお……。でも、お姉ちゃんの刀は

「お姉ちゃんは銃のフレーム付近に大型ナイフが装備されてるみたんだけど、それじゃあー刀には敵わないでしょ？」

第一に先制攻撃！

今度は自信がある瞬発力でお姉ちゃんの距離を一気に縮める！

「……ッ！」

お姉ちゃんは何度かさあらに発砲する。

だけど、銃弾は銃口の向いている方にしか飛ばない。

さあらは疾駆しながら全て銃弾を回避する。

流星のお姉ちゃんも少し唇を噛み締めているのが解かった。

よっし！ このまま接近戦で行けば！

ゼロ距離まで近づいたさあらはお姉ちゃんの肩目掛けて両刀で突き出す！

だけど、刀が押し返される感覚がする。

さあらの刃先をお姉ちゃんはフレーム付近の大型ナイフの腹でカキーンッ！と打った……。！？

その光景に驚きながら後ろにザザッ！と下がるさあらに、お姉ちゃんは左右一発ずつ同時に水平面撃ちをする！

これは左にも右にもかかせない。  
なら……。！

「さっきのお返しだよお！」

さっきのお姉ちゃんみたいに、さあらは二発の銃弾を両刀の腹で打った！  
打った銃弾の一つは、運良くお姉ちゃんの頬を掠め林へ消えていった。

出来るかどうか五分五分だったけど……上手くいったあ……。緊張感を解く為に、さあらの顔には無意識に冷笑がこぼれた。

その軌跡を後追いするように、お姉ちゃんの頬からはゆっくりと真紅の血が流れ始めた。

そして、さあらにとって嫌な長い間合いが生まれる。

一方的に攻めて攻めて攻めたかったのに、やっぱり思い通りに行かないなあ……。

お姉ちゃんの鋭い眼光に思わず眼を逸らしそうになる。

すごい圧迫感……近づいただけで押し潰されそう。

これはお姉ちゃんが動き出したのと同時に動かないと駄目だな……。

お姉ちゃんの流した頬の血が地面に堕ちると同時に、お姉ちゃんは駆け出した！

その初動を見切ったさあらもほぼ同時に駆け出した。

接近戦なら絶対に勝てる！

このお姉ちゃんは射撃科、剣術の特訓なんて疎かにしてるに決まってる！

さあらはこれでも記憶上は総合科のAランクなの！

さあらの必殺の剣戟もお姉ちゃんの息にも届かないで、刃身で受け止められる。

でも、お姉ちゃんのは銃のフレームに刃身が付いているだけ！ 高

速では対応出来ないはず！

それでも勝負に決着は訪れない。

「もお〜！ このお姉ちゃん剣術も上手い！」

さあらは近い間合いを一足で跳ぶように後退する。

後退するつもりはなかったんだけど……息が続かない……。

一方のお姉ちゃんは、好機とばかりに床を蹴ると、弾丸のような速さで二丁拳銃を同時に発砲してくる！

酸素の足りなり重い身体を無理やり背転しながら避け、更に距離を取る。

だけど、さあらの真後ろから

「ひいつ　ッ!？」

思わず悲鳴を上げてしまった雷音がさあらの耳に響く。

その大音響にさあらは首を縮ませる。

こ、鼓膜があ……。

耳を押さえつけていると、銃を使うお姉ちゃんが前方で剣を使うお姉ちゃんが後方……つまり前後で囲まれてしまった。

「あちゃ〜、前後で囲まれちゃったよ……。」

これはまずい……本当にまずい……。

さあらはこの二人との私闘に勝てなかった。

その二人に囲まれたらもう袋の鼠ちゃんだよお……。

こんな場面でも、さあらの笑うクセはどうしても治らなかった。だけど、笑うと冷静になれる。

さあらは二人に前後で囲まれているだけ。  
右にも左にも動ける。

ふと横目で右側を見ると、もう一人のお姉ちゃんが遠くだけどいた。  
敵は倒せる時に倒せつてね！

これで流れも変わるかも知れないし！  
それにこの場を乗り越えられるし一石二鳥だよお！

「まあ、あのお姉ちゃんなら勝てるかな」

さあらは視線を茶髪のお姉ちゃんに向ける。

だけど、問題はあのお兄ちゃんだ。

あのお兄ちゃんは異能、結界を使える。

だけど、当然発動させるのに時間が掛かるはず！

ええい！ 考えるより先に行動お！

さあらは自信のある瞬発力を使って、両刃を構えて疾走する。

さあらの狙いは 茶髪のお姉ちゃんと結界のお兄ちゃん。

剣のお姉ちゃんと銃のお姉ちゃんも、さあらには追いつけないみたいだ。

既に間合いに入っていた。

一番恐れていたお兄ちゃんの結果も発動していない。

推理が苦手なさあらの読みが当たった！

さあらは左右の両刃を突きのと刀筋にする。

その刃先は、結界のお兄ちゃんと茶髪のお姉ちゃん。

悪く思わないでね。良く解かない世界だけど、ここは戦場だから。



お姉ちゃん                    ツ！！！！！ いやだよお……………！！！！ 独りにしないでよお！！！！！！ お姉ちゃん                    ツ！！！！！！！！

この言葉が、確かにさあらの魂に刻まれていた。  
これは誰の言葉……………？

なんでさあらの記憶があのお兄ちゃんの状態と重なっているの？

なんでさあらの手は……………無意識に止まったの？

それはきつと、今やろうとしてる事が許せないから。  
誰よりもさあらが            許せないから。

「なんでえ……………なんでそんな事できるの……………なんでえ……………」

無意識に、記憶を手繰り寄せたような言葉を囁く。

「そんなことされたらあ……………殺せるわけないよお……………さあらはアイツ等とは違う……………！ 絶対に違うっ！！！！」

無意識に叫び出したさあらの記憶。

そして眼からも幾多の涙が零れ出した。

何が何で何なのお……………。

さあらの記憶なのに何一つ解からない……………。  
もう嫌だあ……………気持ち悪くてもどかしくて、深く思い出そうとするだけで頭が痛み出してえ……………。

この魂に眠る本当の記憶と、後付けされたみたいないな記憶……………さあらはどっちを信じればいいの？

誰か教えてよお……誰かあ……さあらを助けてよお……誰かあ……。

27話・(2) (前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

「君の魂に抱かれて」は本編とboy and girls a  
spect s  
で構成されています。

初めて読む方は、本編からご覧ください。



27話・(2)

9月6日

「お兄ちゃん！ 朝だよお！」

永久とこしえの旅路に出ている俺の意識を、無理やり呼び戻そうとする声が聞こえる。

だが、その声も過ぎ去る旅路の景色のように上塗りされ消えていった。

「ちょっと！ 潤を起こすのは幼馴染である私の仕事なんだから邪魔しないですよ！」

「そんなの関係ないよお！ 今日からさあらがお兄ちゃんのお目覚め係い！」

身体が左右に揺れている。

もちろん俺が自ら動いている訳ではない。外部からだ。

「ああ〜！ なるほどお！ お兄ちゃんはさあらのお目覚めのチュウが欲しいんだねえ！」

「ええ？ ちょッ！ そんなの私でもしたことないのに！」

俺の上半身に自然のものとは思えない重力を感じる。

いや、物体か？

温もりがあつて柔らかい……まるで人間のようだ。  
ん……？ 人間？

「チューが欲しいなら直接言えばいいのに！ お兄ちゃんったら  
恥ずかしがり屋だなあ〜！」

「や、やめっ！……！」

何かが頬に接近してくる、妙な圧迫感に襲われる。

だから俺は本能的に左眼が見開き、結界でそれを弾き飛ばした。

「うぎゃあああッ！？」

眼を覚まして一番に眼に入った光景は  
星見郷さあらが俺の結界によって弾き飛ばされ、宙を舞っている光  
景だった。

「潤、おはよう！」

爽やかな美唯の挨拶が聞こえる。

いつになつても一日の始まりは美唯の声からだな。

「ああ、おはよう」

挨拶を返した瞬間、約10メートル先からドスツと何かが落ちてき  
たような鈍い音が聞こえた。

そんな音に振り向きもせず、俺は大きな欠伸をする。

盛大な欠伸をしている中、何かが落ちてきた方から声が聞こえてき  
た。

「……誅伐！」

「ええッ!? 違うんだって翠華お姉ちゃん! お姉ちゃんの真上に空から好意的に堕ちれる訳ないよ! 確かにお姉ちゃんがクツシヨンになったお陰でさあらは無傷だったけど、あれはお兄ちゃんがあ……」

「そんな詭弁どうでもいい。 誅伐ッ！」

「うぎゃああッ!? 朝から発砲しないでよう! 当たっちゃうよあ!?!」

「愚問。 当てないと誅伐にならない」

「痛い痛い痛い! うぎゃああああ ツ!?!」

なんか清王さんと星見郷は朝から元気いいな。  
いや、なんかすごい事になってないか?  
銃声も聞こえるんだが……まあ、俺には関係ないか。

「あはははは、潤すごい寝癖だよ?」

美唯が俺の頭を指差し、優しく微笑む。

「お前だつて全部の髪が逆立ってるぞ?」

「そ、そんな訳ないでしょッ!」

言葉で否定をするが、美唯は頭を直接触って己の形状を確かめる。

何だかんだ言って美唯は俺の言う事を確かめるよな。  
逆立ってるなんてすごい感覚が生じるはずだから解るだろ？

ふと視線を奪われたその先では、桜夜先輩が今日も元気に鍛錬をしていた。

……あの人は寝ているのだろうか？

しかし、鍛錬と言うものはいつ見ても昆虫の求愛行動にしか見えな  
い。

それか、民族の儀式……。

桜夜先輩の周りを見渡すと、狙撃銃のメンテナンスをしているガイ。  
星見郷を誅伐している清王さん。

そして、……寝ている月守さん。

俺と美唯から始まった仲間の輪も、いつの間にか大きくなったもの  
だ。

寝ている月守さんを起こそうと思った瞬時、桜夜先輩がゆっくりと  
千鳥の刃先を天に向けた。

「刻限だ」

柄に力を込めた刹那、一閃の電光が生じる。

これはまさか恒例と化しているあの起こし方だろうか？

「千鳥に宿われし雷魂よ、再び、生ずことを請う」

そして、一波二波と電流が流れ始めた。

それと同時に、俺を含む全員が両耳を塞ぐ。

「今、此处に雷魂を開放する」

呪を唱え終わると、天地を揺るがすような雷音が響く。耳を塞いでいても圧迫されそうだ……。

「立花道雪、雷切」

既に桜夜先輩の声は雷音で掻き消されている。そんな中、確かに聞こえる声があった。

「ぎゃあああああああッ！！！！！！」

月守さんはオリピック選手並みの速さで上体を起こし、反射的に両耳を押さえる。

お年寄りなら比喩なしで心臓止まっていただろう。いや、月守さんも一瞬止まっていたかも知れない。

「おはよう月守くん。今日も良い目覚めで何よりだ」

「沙耶先輩……！！いつも目覚ましが強烈過ぎますよ！もうちょっと優しく起こして下さい！」

「これでも今日は雷音を下げた方なのだが……」

「そついつ問題じゃないですッ！！！！」

いつも通り多事の朝がこうして過ぎようとしていた。

「今日こそこの異世界から脱するぞ」

朝ご飯を食べ終わったと同時にそう強く唱える桜夜先輩。

そういえば、異世界に堕ちて今日は何日目だろう？

異世界に堕ちた日は9月1日。確か今日は9月の……6日だった  
だろうか。

火起こしの数を数えれば、自ずと何日か解る。

随分と長い間いたような体感はあるが、一週間も経ってないんだな  
……。

つまり、桜夜先輩たちと出会ってから一週間も経ってないという事  
か。

まったくそんな感じはしないな……。

「そうですね。一刻も早くこの異世界を終わらせましょう」

俺がそう言うと、いつも肌に触れるぐらい近くにいる星見郷は、

「ちよつと待ってよお！ さあらはこの世界の事なんも知らないん  
だよお!？」

いつも通りのアニメ声は変わらず、常にハイテンションの星見郷。

……星見郷もこの世界の事を知らないのか。

すると、桜夜先輩が警告にも似た声で、

「知る覚悟は在るか？」

桜夜先輩の気迫に喉を鳴らす星見郷。

それから少し俯き、自分自身と対話をする。

この世界を知るべきなのか知らないべきか。

「……教えて」

星見郷は真剣な眼差しを桜夜先輩へ送る。

その青く澄んだ瞳に命じて、桜夜先輩は語りだした。

そういえば、サファイアのように青く澄んだ星見郷の眼……。どこかで見覚えがあった。

「解った。仲間として私たちの知っている全てを話そう」

この世界は異世界であること、そしてこの世界で起こっている狂気を、俺たちの知っている全てを桜夜先輩は話した。

「ここは……そんな酷い世界だったんだあ……」

星見郷から陽気さは消え、真摯さだけが残る。

まだ見ぬ一面に、俺は少しばかり驚いた。

「だから……この世界が故郷みたいに居心地良く感じるさあらは最低かも知れないねえ」

星見郷の言葉を誰もが理解出来なかった。

それが言葉通りの意味だとするなら、星見郷さあらは一体何者なんだ？

こんな世界を故郷みたいに居心地良く感じるはずがない。

だが、桜夜先輩は寒い眼も冷たい眼もしてなかった。

「星見郷くんの記憶は曖昧だ。この世界と記憶がどこか関係しているかも知れない」

世界と記憶。

この言葉で俺はある少女を思い出した。

それは、桜凜武装高校で出会った「架瀬セナ」

彼女の場合、数日間……約一週間の記憶が消えていた。

異世界に堕ちたのも約一週間前。

理由は一片も解らないが、架瀬セナの記憶が消えた原因はこの異世界と関係しているだろう。

なら星見郷もこの世界と何か関係が……？

思い返せば、架瀬さんの瞳と星見郷の瞳……二人ともサファイアのように青く澄んだ、似た眼をしている。

「さ、さあらの記憶とこの世界が関係してる……？」

「確証はない。だが、その可能性もあるという事だ。その場合は……」

……

桜夜先輩の深奥な眼で、希望を託すように星見郷を視る。

「君がこの世界の鍵になるかもしれない」

「さあらがこの世界の鍵……！？」

眼を見開き、桜夜先輩の言葉に驚愕する星見郷。

「もしそうなら、この異世界を脱する事も壊す事も星見郷くんなら……」



「そうはさせないぞっ！！！！」

桜夜先輩の言葉を掻き消すように、天空から声が聞こえた　　！？  
反射的に俺たちは天空を見上げる。

その先には　　少女の人影。

宝石みたく輝く長い青黒髪は、全ての風が彼女を包み込むように華麗に舞い上がらせていた。

空から来た少女が地面に着いた時、殺気とも取れる強い風が吹き乱れた。

スウッと視線を上げ、俺たちを睨みつける。  
反射的に結界を造ろうと左眼を見開こうとするが、何かに縛られているように俺たちは微動だに出来なかった。

圧倒的な存在感。

自分自身、生きているという事も解らなくなる。

その証拠を掴む為に、俺はただその少女を見つめる。  
いや、誰もが見る事しか出来なかった。

彼女が一步踏み出す。

聞こえる筈の足音は、操られたような風の渦に霧散して行った。

また一步踏み出す。　　そしてまた一步。

「だ、誰だ貴様はッ！！！」

これは何かの術か！？

俺の身体はまったく動かず、出そうとする言葉は沈んで消えていく。その中でも、桜夜先輩だけが言葉を発せられた。

「ほお、<sup>それがし</sup>某の術を破るとは」

桜夜先輩の言葉に立ち止まった少女。

だが、感心は示唆していても、その表情は無表情のまま。

この少女……今まで戦って来た人たちとは何もかも違う……！  
桜夜先輩が圧されているなんて……！

「だが無駄じゃ、お主等に某は倒せない。破ったのは所詮言霊だけじゃ」

その言葉で魂に火が点いた桜夜先輩は、

「な、なめるなあ　　ッ！！！」

微動だにしない身体を桜夜先輩は無理やり動かす。

表情は痛さで歪み、剣を握る為に動かした右腕は細かく痙攣している。

それでも、動かされた程度だ。

「この世に滅せぬものなどない。この世界が永遠ではないように、滅せぬものなど存在しないッ！！！」

そう強く唱えた桜夜先輩から何かが解き放たれた　　！

その瞬間、俺たちの動きを封じていた呪縛も解け、動きを取り戻す。

桜夜先輩は機敏に千鳥を鞘から抜き、両手でしっかりと構える。武器は腰に差してある刀だろうが、少女は一方に構えようとしない。

俺も出来る限りの事はする……！  
身体の動きを確かめる為に、何度も指を開いては閉じるを繰り返した。

大丈夫だ……いつも通り動く。これなら結界も……！

「某の術を全て破ったか。少しは骨のあるようじゃな」

「私は剣を握って戦いに敗れたことは一度もない」

桜夜先輩は刃先を少女へ向ける。

その桜夜先輩の眼光は寒心するほどのもの。

なのに少女は己を保っている。いや、それどころか睨み返している。一触即発とはこの事だろう。

「退け、私たちに戦う理由はない」

その桜夜先輩の言葉に、少しだけ少女に感情が入った。

「戦う理由ならある。某はこの世界を護衛する者。某を邪魔するものは斬る」

「この世界を護衛だと……？ 痴れ事もいい加減にしたまえッ！！」

今にも飛び掛りそうな桜夜先輩。

この少女は……この世界を護衛する者だと？

一体、何の為に？俺には狂気としか思えない。

「この世界は某が死守する。絶対にじゃ」

その瞬間、不意に美唯が夢遊病患者のように少女に向かってゆっくりと歩き出す　！？

「み、美唯ッ！？」

俺の叫びにも一切反応しない……。

何考えてんだよ美唯ッ！

あの少女に向かってく何て狂気過ぎるだろ

ッ！？

美唯を止める為に俺は駆け出した　！

「美唯、止まれえ！！！」

俺は美唯の肩を掴み、強引に止める。

幸い少女と美唯の距離が離れていた為、ゆっくりと歩く美唯に間に合った。

まさかあの少女に……操られているのか？

美唯がこんな失態をするはずがない。

「美唯、大丈夫か？」

俺の言葉にも一切反応せず、美唯はずっと視線を落としたまま立ち尽くし、身体は小刻みに震えている。

そして、美唯は一気に視線を上げ、あの少女を視て叫んだ。

「あすかあああああッ！！！！！！！」



9月6日/侑eyes

翼を広げて、運命を変えて(前書き)

「君の魂に抱かれて」（きみのこころにだかれて）

この作品はフィクションです。

登場する人物・団体・地名・事件・世界設定などは全て架空の物であり、

実際の物とは一切関係ありません。

初めて読む方は、本編からご覧ください。

boy and girls' aspectsとは？

このモードは主人公の視点ではなく、

君の魂に抱かれての主人公以外の登場人物の視点です。

これにより、より世界観がわかりやすくなります。

目次の場合、下に行くほど時間が最新です。

「みんな起きてるな？」

迎えた新しい朝も染先輩の一声から始まった。いつも通りの円形に座り、第何回かすら記憶にない会議が始まるうとしてる。

が、全員かなり眠そうだ。

聖夜なんて完全に眠りに入っているだろう。

菜月からは眠りを示唆するあくび。

奏笑なんかは左右にゆらゆらと緩やかに揺れている。

……これは寝ているのだろうか？

「フアーゼストクンパニン第……何回だ緋咲？」

寝起きで気分の悪そうな緋咲に話を振る染先輩。

恐らく染先輩も眠いのだろう。

声のトーンとテンションが低い。

「……なんであたしが知ってるのよ」

染先輩の質問で更に気分を悪くした緋咲は腕組をし、険悪した顔で眼を瞑る。

「そうだったな。緋咲に聞いた私が愚かだった」

「……あんた後で覚えときなさい」

お互い寝起きであるという事で、争いは勃発しなかった。  
俺も眼を瞑ってしまえばもう次元を超えそうだ。

「今日は何日か解るか緋咲？」

「……なんであたしが一々あなたの質問に受け答えしないといけないのよ」

「いいじゃないか。緋咲の一問一答コーナーだ」

その言葉で抵抗をなくした緋咲は、はあ、と深く不快そうな溜息をつく。

「……一週間ぐらい？」

「残念、今日は6日だ」

「……だから何であたしに聞いたのよ！」

梁先輩のお陰で緋咲だけが眼を覚ましつつある。  
いや、お陰ではないな。

緋咲にとっては良い迷惑だろう。

「どうやら緋咲のIQは猿以下の561のようだ」

「……あんた後で覚えときなさい」

ちなみに人間の平均IQは100だ。

梁先輩の話が本当なら、緋咲は人間を大きく超越した事になる。



その事に寝起きの二人は気付いていないようだ。  
いや、その前に猿のIQはどれだけ高いのだろうか？

「緋咲に構っている暇はない。ファーズトクンパニン、会議を始める」

……緋咲を構っているのは染先輩だろ。

「残念だが視て通り、汐見あすはもういない」

染先輩の言葉に、俺は夜の出来事を思い出す。

俺たちに感謝を告げた汐見あすかは、月と同化するように姿が見えなくなった。

本当に風のように現れ、風のように消えて行った。

「染氏、何かあったのか？」

唯一、眼が冴えている蒼生先輩が染先輩に問う。  
つてことは、皆の意識は上の空ってことなのか……。

「私はこの世界に吹く独り風。風は吹かれるままに流れる。っと最後に言い残し、昨日の夜ぐらいに去ってしまった」

「……そうか。少し残念だな」

「ああ、私も、一緒に行動しないか、と勧誘したんだが、先の通りだ」

「何かやらかしてなければいいがな。アイツはこの世界を壊そうとする者と酷く敵対していた」

「……そうだったな。結局これも解らず仕舞いか」

とにかく謎の多い少女であったというのは確かだった。しかし、あの少女の事ならまた風のようにやってきそつな気がしてきた。

「それでは、眼も覚めた事だし本題に入ろう」

確かに窈先輩は眼が覚めているだろう。

だが、眼が覚めていそつな人は蒼生先輩しかいない。

……本題に入るんだから俺もしつかりしないと。

「私は戦いを回避したい。これは皆も同じ事だと思つ」

俺は起きている証拠に強く頷く。

この世界は戦いが起こっているから狂気なんだ。

戦いが皆無になれば異世界だが少しは俺たちの日常へ近づくだらう。

「だから私は人知れず考えた。争いを避ける方法を」

「あ、戦いを避ける方法……!?!」

眠っていた身体が一気に目覚めた。

戦いを避ける方法が存在するのか!?

もし在るとするなら、それは至高の光になるかもしれない。

「戦いをする理由、……それは桜凜武装高校が桜凜高校全生徒の殺害命令を実行する為だ」

凜先輩は辛そうに語る。

改めて事実を突きつけられると、狂気もい所だ。

いや、狂気なんかでは形容し難い事がこの世界では起こっているのだ。

「その理由は解らない。恐らくこの世界の真実と深く密接しているだろう」

この世界の真実。

なぜ俺たちは戦わなければならないのか。

桜凜武装高校が狂気な命令を実行する訳。

どうすればこの世界を脱出、壊せるのか。

電気が使えない理由、あの視えない壁の存在。

考えてみれば、俺たちは何も解っちゃいない。

「私は戦いを避け、この世界の真実へ辿りつきたいと思っている。

……みんなはどう思う？」

凜先輩は少し弱い口調で同意を求める。

「俺は凜先輩に賛成です。戦いはゼロにしましょう」

俺が同意すると、ファーゼストクンパニアン全員力強く頷く。

いつの間にか全員、眼が覚めたようだ。

「……ありがとうみんな」

梁先輩は安心したような声を上げ、ファーストクンパニアン一人ひとりを一瞥する。

その瞳には強い想いと決意に溢れていた。

「ところで梁氏、争いを避ける方法とは何だ？」

「あ、ああ、そうだな」

蒼生先輩の問いに少し歯切れが悪い梁先輩は、ゴホンツと咳払いをし、

「俺たちの制服を桜凜武装高校の制服にする！」

ええ……ッ!? 俺たちの制服を桜凜武装高校の制服にするッ!? 菜月、聖夜、そして俺は眼を思わず合わせた。

「桜凜武装高校の連中はファーストクンパニンの中に桜凜高校の人間がいるから攻撃を仕掛けてくる！」

「ならば武装高の制服を身に纏ってカモフラージュすれば奴等は気付かない！」

梁先輩が拳を握って力説する。

確かにそうだ。

桜凜高校の生徒だと判断しているのは制服だろう。

ならその判断基準をなくせば、桜凜高校の生徒だと気付かれない。だが……、

「ちょっと待ってくださいよ！ どうやって制服を手に入れるんですかッ!？」

「それはだなあ……」

凩先輩が下を向き、口重そうな態度を取る。

何だか、嫌な予感が立ち昇る。

「凩武装高校に侵入し、強奪するッ!?!?!」

「「「お、凩武装高校に侵入するッ!?!?!」」」

凩凩高校在中の3人、菜月、聖夜、そして俺は思わず声を上げてしまった。

「武装高の制服を手に入ればカモフラージュにもなり、万が一の時は防弾制服の真価も発揮される！ まさしく諸刃の剣……いや、諸刃の盾だ！」

武装高の制服が手に入ればかなりの優勢になる。

それは凩先輩の話聞けば良く解った。

だが、それを手に入れる為には相当のリスクを背負う事になる。

……それだけの物を手に入るといふ事は同等のリスクが必要という事か。

「ま、待て凩氏！ 相手の本拠地に突っ込むという事だぞッ!?!? それかどういふ事が解って……」

「ああ、解っている蒼生。だがそれでも私は戦いを避けると誓う！ だから蒼生！」

凩先輩が希望を託すような声で、蒼生先輩の名を叫ぶ。

「戦術科Aランクのお前の力を借りたい！」

ほ、本当に武装高に進入して、更に戦いを避ける事なんて出来るのか……ッ!?

だけど、蒼生先輩なら……それも可能かもしれない。  
戦術科Aランクの蒼生先輩なら……。

「確かに防弾制服が手に入れる、武器の補充、真実の真相、武装高に進入する理由は多数ある」

蒼生先輩も頭を悩ます。

だが、瞳をゆつくりと開け直ぐに、

「解った。戦いを絶対に避ける戦術を考える。だが、それにはフアーゼストクンパニア全員の力が必要だ」

そう言い、蒼生先輩は皆を見渡す。

「もちろん私も頑張るよぉ〜！ 菜月ちゃんに同じ制服着て欲しいもん！」

「おいおい奏笑、俺には同じ制服着て欲しくないのかい？」

なぜか聖夜が決め顔と魅惑の低音で返答する。

「聖夜がスカートなんて穿いたら吐き気がするわ！」

聖夜の返答を菜月が返すという懐かしいコンビネーションが復活する。

まあ、確かに聖夜がスカートなんて穿いたら吐き気しか押し寄せない。

「Gランクのあたしにも何かすることあるの？」

「もちろんだ緋咲。一人ひとり重要な役割を担う作戦だ」

一体、蒼生先輩の考えている作戦とはどのようなものなのだろうか。しかし、なぜだか悪い予感はいししない。

「侑、聖夜、菜月、お前たちの意見を何より重要視したい」

凩先輩が優しい口調で俺たちを見る。

俺は、ファーズストックンパニアンを信じている。だから

「敢行しましょう！ ファーズストックンパニアンなら遂行できます  
！」

「ああ、桜凩高健児の底力を見せてやろうぜ！」

「やろう！ やるしかないわ！」

聖夜、菜月、そして俺の心は一つだ。

桜凩高の底力を本当に見せる時かも知れない。

俺たちはどんな世界でも抗う。

例えばどんな強大な差があっても、何も抵抗なしに消えるわけにはいかない。

俺たちにはファーゼストクンパニアンがいる。  
きっとそれが、悲しみのない世界へ誘う為の鍵になる。



イラストコーナー (更新情報 12/24) (前書き)

夜城 咲宵によるイラストコーナーです。

ネタバレはないようにしますのでご安心を！

しかし、物語のヒントが散りばめられて……！

イラストコーナー (更新情報 12/24)

> i 3 5 4 1 3 — 2 3 2 1 <

成沢 美唯 - N a r i s a w a M i y u -

潤の幼馴染であり、同じく桜凜高校2年A組。潤に対し、甘える、寄り添うような性格ではなく、逆に潤を修正させる程の勢い。

どちらも上記のような事はしないため、ミスマッチに思えるがお互いを良い方向へ引つ張り合っている。

体力や運動神経が高く、潤曰く『暴力女』

パンチ、蹴りなどの威力は、潤曰く『世界チャンピオンですら、膝を屈するほどの威力』

また、防御力も劣っていないく、潤に毎朝ドアの猛攻撃を受けているため『鋼のような防御力』を得ている。

以外にも勉強や料理を得意とする。潤曰く『人は見かけによらない』

身長：165cm

体重：46?

血液型：O

B・W・H：84・54・80

髪色：枯葉色(茶系)、ロング

誕生日：8月3日

年齢：17

> i 3 6 9 2 4 — 2 3 2 1 <

>i37670—2321<

【Xmas2011 記念イラスト】

染 璃桜 - Shitogi Rio -

桜凜武装高校3年現代剣術科のBランク。称号「両撃の右剣左銃」  
(りょうげきのクローヴァル)

侑たち率いるファーズストックンパニアンのリーダー。

常に最前線で戦い、仲間からの信頼も厚い。

使用している銃はMP7・OBK/SR。

沙耶の中学生の頃からの親友。

彼女と出会う前は普通の女の子だったが、日々鍛錬を強制されたため、沙耶のような口調が多少移ってしまった。沙耶曰く、中学時点からも「筋がいい」「らしい」。

昔から寂しがり屋の恥ずかしがり屋の性格で、親友が桜凜武装高校に行くを知って同じ高校を受験したほど。

『仲間』とそれを『守る』ということに憧れている。

ちなみに、現在もルームメイトは沙耶で、手前が沙耶の部屋、奥が璃桜の部屋。

潤曰く「見えない国境がある」らしい。

髪飾りには名前の通り、瑠璃色の桜が左右についている。

身長：161cm

体重：47?

B・W・H：86・52・87

血液型：O

髪色：金髪

誕生日：1月16日  
年齢：17

>i34502—2321<

嘉上 緋咲 - Kagami Hisaki -

桜凜武装高校総合科2年生のGランク 称号「違背のシャイヤ」(いはいのシャイヤ)

桜凜武装高校は総合科のレベルが何処の科よりも、ズバ抜けて高いため最も入学が困難だが、緋咲は入学試験でBランクという結果を残した。

だが、一年で数回行われるランクが変動するテストを一回も受けていない。

その結果、入学当時のBランクからGランクまで下がってしまった。1年生のとき(その当時はFランク)は留年の危機だったが、入学試験のランクがBだったため、留年は免れた。2年生になった彼女だが、今のままでは3年生へ上がれない。

身長：157

体重：47

B・W・H：83・47・85

血液型：B

誕生日：9月17日

年齢：16

>i34036—2321<

星見郷さら - Hoshimisato Sara -

桜凜武装高校1年総合科Aランク称号「加護のアグライア」

初登場は24話「この世界の鍵 - StarSeeHamlet -」

体格は小柄で子供っぽい性格。

なぜ子供っぽい性格か、それは物語りの重点にも繋がって……？

本人曰く「記憶は後付されたような感じ」

命を引き換えに人を守るという事が、本当の記憶と何か関係しているらしい。

命を賭けて美唯を守ろうとした潤を「お兄ちゃん」と慕い、信頼している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6915o/>

---

君の魂に抱かれて

2011年12月25日00時58分発行